

お稲荷様ののんびりVRMMO日和

蒼い兎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

VR技術が発達し、ゲームの世界を全身で感じることが出来ることになった未来。

数多くのタイトルが発売される中で、某社が送る最新作がついにサービス開始の時を迎える。

【The Another World】

これまでのフルダイブ型VRゲームとは一線を描くグラフィック、そして丹念に作りこまれた世界に、βテストの段階から話題を呼んだフルダイブ型VRMMORPGである。

廃プレイヤーからMMO初心者まで、数多くのユーザーが待ち望んだサービス開始当日、始まりの街《アイン》に一人のプレイヤーが降り立った。

柔らかな三角の耳を跳ねさせ、黒くて丸い尻尾をゆらりゆらりと揺らしながら、彼？彼女？はのんびんだらりと歩き出す。

「まあ、ボクはのんびりとやらせてもらおうかな」

これは後にお稲荷様と呼ばれることになるプレイヤーが、だらだらとVRMMOを満喫する物語である。

本作品は、小説家になろう様でも投稿しております。

目次

お稲荷様と初ログイン	1
お稲荷様と初めてのおつかい	8
お稲荷様と道具屋さん	15
お稲荷様と冒険者ギルド	21
お稲荷様と初戦闘	27
お稲荷様と三人組	33
お稲荷様と初パーティ	41
お稲荷様と苦い思い出	49
お稲荷様と三人組②	56
お稲荷様と新天地	63
掲示板①	70
お稲荷様と香辛料	76
お稲荷様とお祭り騒ぎ	82
お稲荷様と二つの罪	89
お稲荷様と一休み	95
お稲荷様と船の旅	101
お稲荷様とボスバトル	108
お稲荷様と呉服屋さん	116
お稲荷様と陰陽師	123
お稲荷様と鬼退治	129
お稲荷様と鬼退治②	135
お稲荷様とお婆さん	142
お稲荷様と一張羅	149
掲示板②	157

お稲荷様と公式イベント①	166
お稲荷様と公式イベント②	174
お稲荷様と白兔	181
お稲荷様と白兔②	187
お稲荷様とお茶会	193
お稲荷様と聖なる都	199
お稲荷様と地下迷宮	204
お稲荷様と怠惰、ときどき嫉妬	210
お稲荷様と地下迷宮②	216
お稲荷様と魚釣り	221
お稲荷様と隠れ里①	227
お稲荷様と隠れ里②	233
お稲荷様と九尾の秘湯①	239
お稲荷様と九尾の秘湯②	244
お稲荷様と九尾の秘湯③	251
お稲荷様とお買い物①	257
お稲荷様とお買い物②	263
お稲荷様と大型アップデート	269
お稲荷様と二人の鬼	275
お稲荷様と鬼の酒	280
お稲荷様と丁半博打	285
お稲荷様とお殿様	291
お稲荷様とお殿様②	297
お稲荷様とお姫様	303
お稲荷様と案内人	309

お稲荷様と第一の門	315
お稲荷様と赤い砂漠	322
お稲荷様と三日月猫	328
お稲荷様と女王様	334
お稲荷様と翼の少女	339
お稲荷様と墓荒らし	346
お稲荷様と大立ち回り	353
お稲荷様とお姫様②	360
お稲荷様と翼の少女②	366
お稲荷様とホットケーキ	371
お稲荷様とお稲荷さん	376
お稲荷様とお稲荷さん②	383
お稲荷様と夏祭り①	389
お稲荷様と夏祭り②	394
お稲荷様と拡張ディスク	401
お稲荷様と喫茶店①	407
お稲荷様と喫茶店②	413
お稲荷様とニンジャⅡサン	419
お稲荷様とメイドさん	426
お稲荷様と聖女様	431
お稲荷様と課金アイテム	436
お稲荷様と大サソリ	441
お稲荷様と雪景色	447
お稲荷様と亡国の王	452
お稲荷様とログイン祭り	457

お稲荷様と九尾の狐	467
お稲荷様と竜宮城①	472
お稲荷様と竜宮城②	477
お稲荷様と竜宮城③	483
お稲荷様と父なる……①	489
お稲荷様と父なる……②	495
お稲荷様と父なる……③	500
お稲荷様と父なる……④	509
お稲荷様とハロウィーン	517
お稲荷様とハロウィーン②	525
設定集	532
お稲荷様と子狐様	537
お稲荷様と子狐様②	544
お稲荷様と子狐様	550
もがき続ける少女の独白	558
お稲荷様と深淵からの呼び声	565
お稲荷様と赤い海	572
お稲荷様と最終決戦	579
お稲荷様と這い寄る混沌	586
真実の扉	594
お稲荷様と暴かれる真実	603
たとえ世界を敵に回しても	610
悲しんでいるあなたを愛する	616
美しい変化、大切な思い出	623
それでもせめて、人間として、ボクとして	630

人間の可能性

引き継がれる力、引き継がれる想い

お稲荷様と真実の愛

638

648

655

お稲荷様と初ログイン

——The Another World

本日サービスが開始された、最新のフルダイブ型VRMMORPGである。

『異世界へようこそ』というキャッチコピーと共に発売され、これまでのどの作品よりも美麗なグラフィックと、無限のカスタマイズが可能とまで言われたキャラクターイト、スキルシステムが話題を呼び、そのベータテストに参加していたプロゲーマーに『今までのフルダイブ型MMOとはケタが違う』とまで言わしめた話題作である。

そして、子どもの頃から幾つものフルダイブ型VRゲームに手を出していたボクが、それに興味を示すのは火を見るよりも明らかであった。

幸いなことに、運よく予約する事に成功したボクはサービス開始と共に早速インストールし、事前に登録しておいたキャラクターデータを使い、ゲームを開始する。

意識が電腦空間へと沈んでいく感覚。一瞬の暗転の後、目の前には異世界が広がっていた。

——始まりの街《アイン》

目の前に広がる石造りの街並みに、ボクは思わず息を呑んだ。フルダイブ型のVRゲームは幾つも経験してきたが、やはりこの初ログインの感動だけは何度味わつても格別である。

見渡せば、どうやらここは広場のようで、中心では円形の噴水が涼し気な水音を響かせていた。

さらにサービス開始直後だからか、広場のそこかしこで光と共にプレイヤー達が現れ、まるでお祭りのような賑やかさを見せていた。「まあ、ボクはのんびりやらせてもらおうかな」

右手の中指でとんとん、と虚空を叩きメインメニューを表示させると、基本的なステータスや装備品、所持品を確認する。

プレイヤー名：タマモ

種族：妖狐族 Lv1

職業：無し

所持金：3000G

【装備】

武器：初心者用の呪符

頭：無し

胴：質素な狩衣

脚：質素な袴

足：質素な草履

装飾品：無し

【スキル】

初級妖術【狐火】

【所持品】

傷薬×3

妖狐族とはその名の通り狐の耳と尻尾を持つ獣人で、魔法関係の適性が高い反面、剣などを扱った物理攻撃が少し苦手な後衛向きの種族である。

このゲームには他にも猫の特徴を持つワーキャットや、ファンタジー作品ではお馴染みのエルフやドワーフなど、様々な種族が登場する。

職業に関してはまだスタート直後なので登録されていない。

これに関しては各職業に対応したギルドにて取得することが出来る。

「まずは冒険者ギルドを探そうか。もしかしたらおいしいクエストとかあるかもしれないし」

メインメニューを閉じ、広場から出る。

そういえば、この街の地図も買わないといけないな。一番始めの街とはいえ、場合によっては長くお世話になるかもしれないのだし、買っておいて損はない。

最優先事項を冒険者ギルドから道具屋に変更しつつ、町中をゆく。スタートダッシュを決めようと急いでいるのか、やたら慌ただしく走っていくプレイヤーたちを横目に眺めながら、ぶつかってはたまた

ないとボクは一人、道の隅っこをのんびりと歩いていた。

「随分と危なっかしいな。まあ、急ぐ気持ちもわかるけど」

待ちに待ったサービス開始日だし、気が急いてしまうのは仕方がないのかもしれない。

さらにはこんなにも美しい世界なのだ。もつと見たい、もつと味わいたいと思ってしまうのはもはや本能と言ってもいい。とはいえ、本能のまま動いてしまえば、それは獣とさして変わらないのであるが。ため息を吐きつつ、また一人血相を変えながら走っていくプレイヤーを見送ったとき、ボクはその進路上に小さな女の子が立っている事に気が付いた。

女の子は何やら手元のメモ書きのようなものと睨めっこをしている最中らしく、走ってきているプレイヤーに気が付いていない。

ああ、あれはぶつかるな。

ボクがそう思った矢先、女の子とプレイヤーが接触した。女の子が小さく悲鳴をあげ、弾かれるように地面に転がる。

走っていたプレイヤーの腕が接触した程度であつたので、頭や身体を強く打つような倒れ方にならなかったのは、不幸中の幸いと言えるだろう。

「危ないだろ、気を付けろ！」

テンプレートな捨て台詞を吐きながら、ぶつかったプレイヤーはまるで何かに追いかけられているかのように、顔を真っ赤にして走り去っていく。

倒れた後、未だに蹲って起き上がる様子がない女の子を一瞥すらしないその態度に、思わず舌打ちを一つ、もやもやとした気持ちを振り払うように頭を振り、女の子の元へと歩み寄った。

「災難だったね、大丈夫？」

その場に膝をつき、女の子のさりとした栗色の髪を撫でる。そしてその服装を見やり、やはりな、と確信した。

もしかしてと思ってはいたが、この子の装備はプレイヤーがゲーム開始時点で装備しているものとは大きく異なる。まだサービス開始から二十分も経過しておらず、どれだけ急いだとしても、現時点で初

期装備以外のものを入手する事は至難の業だ。

つまり、この子はプレイヤーのアバターではなく、この世界の住人、NPCという事になる。

恐らくは先ほどのプレイヤーも、この子がNPCだとあたりを付けていた為にあんな態度だったのだろう。

だからといって、小さな女の子にぶつかっておいてあの態度をとれるのは、なかなか出来る事ではないが。

「ぐ、ぐす、い、いたいよお……」

大きな瞳に涙を浮かべ、女の子はその小さな手で自身の膝を押さえていた。

確認すると先ほど倒れた際に膝を擦り剥いていたようで、膝小僧から赤いエフェクトが発せられている。簡略化されている為わかり辛いが、このゲームにおける出血、ダメージエフェクトだ。

それを見てほんの数秒思考を巡らせた後、ボクは再びメインメニューを操作する。

所持品欄から取り出したのは、初期装備として配布されていた【傷薬】というアイテムで、コルクで栓をされた、理科で見るような円形のフラスコ中に青色の液体が波打っている。

ふむ、これは飲むのか、それとも患部にかけるのだろうか。

インターフェースを操作し、詳細覧を確認する。

【傷薬】

服用することで体力を少量回復する。

再使用可能時間5分。

良薬は口に苦し。

服用とあるので、どうやら飲み薬らしい。最後の一文を合わせて考えると、まず間違いないだろう。

栓を開け、女の子に差し出してみれば、先程の出来事が尾を引いているのだろう、女の子は肩をびくりと震わせて、涙をためた瞳で恐る恐るこちらを見上げてきた。

「これを飲んで。ちよつと苦いかもしれないけど、我慢できるよね？」
なるべく怖がらせないように意識すると、自分でも驚くほど柔らか
い声が出た。

うちは一人っ子なので、こういった小さい子の相手をするのは初め
てかもしれない。妹がいると、こんな感じなのだろうか。

女の子は少しの間ボクと【傷薬】を見比べた後、おっかなびつくり
といった感じでビンを手に取り、ぐいとそれを呷った。

「あつ、そんなに勢いよく飲んだら——」

「っー！っー！」

慌てて制止しようとするも、時すでに遅し。案の定、顔を青くして
悶絶し始める女の子。

どうやら、「良薬は口に苦し」というテキストに偽りはなかったよ
うだ。

しかしその効果はてき面だったようで、赤くなっていた膝小僧は、
見る見るうちに元の健康的な肌色を取り戻していった。

少女の手を取って起き上がらせると、汚れていたスカートを軽く払
う。他に怪我もなさそうなので、これでもう大丈夫だろう。

ほつと一息つくと、少女の髪をもう一度撫でた。

「もう痛いところはないかな？数日はああいっぱい手合いが多いだろう
から、しばらくは道の端を歩くことをお勧めするよ」

特に明日は日曜日だ。ログイン祭りのピークは過ぎるだろうが、そ
れでも相当な人数のプレイヤーが駆け込んでくるだろう。

皆が皆あいった配慮の足りないプレイヤーではないだろうが、あ
の類の人災は、残念ながら周りの人間が気を付けるしか防止する方法
はない。連中に、自身の行いを悔い改める神経など通っていない。

まあ、なにせよ、注意しておいて損はないだろう。

「じゃあ、ボクはこれで……う」

少女の怪我也も治ったし、さて道具屋探しを再開しようと思き出そう
とした途端、僅かに袖を引かれる感覚にボクは思わず足を止める。

いったい何だと振り返れば、先ほどの女の子が狩衣の袖を指先で
ちよんと抓んでいた。

「えっと、何かな？」

「あの、お狐、さん、えと、あの……ありがとうございます。」

そう礼を言つて上目遣いで見上げてくる女の子。

涙で潤んだ大きな瞳はまるで可愛い小型犬を連想させ、こちらの庇護欲をがつんがつんと刺激してくる。思わずくらりとする頭を振って正気を引き戻すと咳払いをし、改めて少女の前で膝をついた。

「お礼はいいよ、ボクが勝手にやった事だからね」

「えと、その」

大きな瞳を右へ左へ忙しく動かしながら、女の子は恐る恐ると言つた風にそれを差し出す。

二つに折られた小さなそれは、女の子がプレイヤーとぶつかる直前まで睨めつことを続けていた物であつた。

「これは……？」

何のつもりかと目を細めた途端、頭の中に音叉に似た音が響くのと同時に、目の前にシステムメッセージが開いた。

―クエスト【はじめてのおつかい】を受理できます。受理しますか？ YES／NO

これはまた、突発的な。

恐らくは、女の子を助けた事でフラグが立ったのだろう。

特に断る理由もなし、差し出されたメモと女の子に数度視線を向けた後、YESを選択する。

―クエスト【はじめてのおつかい】を受理しました。破棄するには対象NPCへの申告が必要です。

差し出されたメモを受け取り開くと、そこには幾つかの品名と数字が並んでいた。

「ふむ、ニンジンに玉ねぎ、じゃがいも……トサカドリののも肉というのは聞いたことがないな」

まあ名前から考えるに、ニワトリに近いものだろう。

いかにも「初めてのおつかい」といったメモ書きに、思わず笑みが漏れる。

と、メモの向こうから感じる視線に目をやると、先ほどの女の子が少し心配そうな瞳でこちらを見つめていた。

「あの、お母さんをお願いされて、でも、お店がわからなくて……」
成程、それで道の真ん中でメモと睨めっこをしていたわけだ。

放っておくとまた泣き出しそうだったので優しく頭を撫でてあげると、女の子はくすぐったそうに目を細めた。

「ボクもこの街に来るのは初めてだから、果たして役に立てるかかわからないけど、まあ、一緒に探してみようか」

「うん！」

ボクが手を差し出すと、女の子はぱつと笑顔を咲かせて、その手をぎゅつと握る。

この短時間で随分と懐かれたものだが、しかしまあ、悪くない。

「じゃあ宜しくね。えーつと……」

そういえばまだ名前を訊いていなかったな、と苦笑し、女の子を見る。

「シア！シアっていうの！」

「シアちゃんか、ボクの名前はタマモ。改めて宜しくね」

きっかけはあまり良いものではなかったけれど、ボクはきつとこのゲームを好きになれるだろう。

そんな小さな確信を胸に、ボク達は市場を目指し歩き出すのだった。

お稲荷様と初めてのおつかい

子ども特有の高めの体温が手のひらから伝わり、なんとも心地良い気分になりながら、こつりこつりと石畳の道を行く。

幸いな事に、市場はあれからすぐに見つける事が出来た。と、いうのも、シアがプレイヤーとぶつかったあの道から真つすぐ進んだところだ。彼女が探していた市場だったのだ。

そんな訳でボク達は今、様々な露店が立ち並ぶ市場の中で、お目当ての物を探している最中である。

「しかし、随分と賑やかだね。いつもこんな感じなのかい？」

ボクの右手をぎゅっと握るシアにそう尋ねる。しかし、しばらく経つても返答がない。怪訝に思つて目を向けると、彼女はぼうつとした表情でとある一点を見つめている。

何を見ているのか気になりその視線の先へと目を向けると、そこにはキャラメイクの際拘りに拘った、ふさふさの尻尾が柔らかく揺れていた。ボクの尻尾は、毛色自体は髪と同じ黒なのだが、その先端部分だけインクに浸したように白くなっている。どうも犬や猫と同じように感情と連動しているのか、意識していなくても右にふらり、左にふらりと動いている事が多いようなのだが、どうやらそれがシアの好奇心を随分と刺激してしまったようだ。

——— 那样的いえば、まだ意識して動かせるか試していなかったな。

ふとそう思い付き、さつそく試してみると、思いのほか簡単に動かせるようになった。右に振るように意識すると右へゆらりと揺れ、動きを止めるように意識すれば、身体を中心に沿うようにしてぴたりと止まる。

これは後に知る事になったのだが、どうやらフルダイブ対応VR機器——ボクが使っているのは大手日本メーカーが開発したVR対応ヘッドギア「サルタヒコ」である——がプレイヤーのこういった思考を感知し、反映させているらしい。脳波が云々カンヌンと、詳しく話すとかかなり長くなるのでここでは省略する。

右にふらふら、左にゆらゆら。艶めかしく揺れる尻尾の誘惑に、シ

アの瞳も右に左に動き回る。

その光景があまりにも可笑しくて、思わずくすりと笑みが漏れてしまった。はっとなり、シアが顔を真っ赤にしながらこちらを見上げてくる。

「ご、ごめんなさい」

「いや、いや、構わないさ。気に入ってもらえたようで、なにより」

あたふたするシアの髪をそつと撫でる。触ってみるかいと、尻尾を顔の前まで近づけてみれば、彼女はうつと息を呑み、やがて恐る恐るといった風に小さな手を伸ばしてきた。ふわりと、その指先が豊かな毛並みに沈む。ふむ、なんとも不思議な感覚だ。流石に本来持ちえない部分なので痛み等の感覚はないのだが、その代わりだろうか、どうも尾てい骨の辺りに得も言われぬむず痒さがある。

「ふわあ、ふかふか」

ふにやりと、シアの表情が綻ぶ。

そつと触れるだけだった両手はいつの間にか尻尾をがっしりと抱きしめており、しまいにはとても嬉しそうに顔まで埋めてしまった。放っておいたら、このまま寝てしまうのではないだろうか。

本来ならば注意すべきなのだろうが、幸せそうな彼女の邪魔をするのはいささか気が引ける。顎をさりと撫で、どうしたものかと考えた結果、とりあえずは本来に戻ることとする。

そう、シアが頼まれたというおつかいである。

ぐるりと辺りを見回せば、野菜を中心に揃えた露店が目に入った。

日本ではあまり見かけない趣ではあるが、恐らくは八百屋さんのようなお店だろう。

「シア、お店を見つけたよ。お母さんに頼まれたものがあるかどうか、見に行こう」

そう言つてシアの肩を叩けば、まるで猫のようびびくりと身体を跳ね上がらせて、彼女はようやく尻尾から手を放した。

どこか名残惜しそうな目をするシアの手を握り、見つけた露店へと向かう。そこには色鮮やかな野菜達が並べられており、店の奥には店主であろう男性の姿が見える。丸坊主の頭に捻り鉢巻、ねずみ色の

チョッキを着た人懐っこそうな主人が、木箱を椅子代わりに声を張り上げていた。

「こんにちは、ご主人。ちよつと見させてもらうよ」

「おう、妖狐族たあ珍しいな。アンタも来訪者つてやつかい？」

来訪者。そういうえば、このゲームの説明書にそんな単語があったような気がする。確か、プレイヤーを差す言葉だったはずだ。

アンタも、という事は、やはり、この市場にも既に相当数のプレイヤーが流れ込んできているのだろう。

「わかるのかい？」

「おうともさ。この辺りじゃ妖狐族なんてまあ見ねえし、アンタみたいに異国の服まで着てるやつはそれに輪をかけて珍しいしな。それに今日から来訪者がどつと多くなるつてえ、お偉いさんからのお達しもあつたしなあ」

につかりと白い歯を光らせて、店主が笑う。

「そんなにボクは珍しいのかい？」

まあ、道行く人がやたらとこちらに視線を向けてくるので、もしかとは思っていたのだが。

しかし、道中獣人などの亜人種の姿もちろほら見かけていたので、少し意外ではある。そんな事をご主人に話すと、彼は膝をぽんと叩き、そりやあなあ、とまた笑う。

「妖狐族つてえのはずうつと東に国を構えてて、滅多にこつちにや出てこないって、昔詩人に聞いた事がある。それに、アンタみたいな色男が歩いてちやあ、そりやあおれらみたいな田舎者はイチコロつてもんだ」

「はは、おだてても買う品は増えないよ、ご主人」

「おいおい、おれあ根っからの正直者で通つてんだぜ？　そのおれが色男つて褒めてやってんだから、ありがとうございますと素直に喜んできやあいんだよ」

「それは失礼した。ボクもこの顔はそれなりに気に入っているのですね、素直に称賛されておこう」

「おつ、言うねえ、これだから顔が良い男はいけ好かねえんだ」

「ははは、そう言わないでくれよ。 まだまだ若輩の身でね、まだこれと尻尾を振ることぐらいしか、取り柄がないのさ」

そう言って大きな尻尾をこれ見よがしに振って見せると、ご主人はどっと堰を切ったように、腹を抱えて笑った。 あまりに大笑いするので、椅子代わりの木箱から転がり落ちてしまわないかとこちらが気が気ではないほどである。

しかし、まあ、このまま雑談を楽しむのも一興ではあるのだが、今はシアのおつかいが最優先だ。

並べられた品物に目を向ければ、意外にも日本でも馴染みのあるものが多かった。 メモに書かれている野菜の他にも、きゅうりやトマト、大根まである。

「さてさて、ではご主人、これだけ貰おうか」

「ひー、ああ、笑った笑った。 あいよ、全部で500Gだ！」

ちやりん、と小銭の音が響き、ボクの所持金から500Gが引かれる。

母親から代金を預かっているであろうシアでは無く、プレイヤーの所持金から引かれるところが変にゲームっぽい。 まあ、この辺の支払いはクエストの報酬として返ってくるのだろう。

購入した野菜を所持品欄に入れ、ふと店主の方を見る。

「そうだがご主人、トサカドリののも肉も欲しいんだが、お勧めのお店はないかな？」

「トサカドリののも肉だ？ なら、向かいの並びの一番奥、フジつつう親父がやってる店だな。 クレイジーベアみてえなナリしてっから、すぐにわかるだろう」

「すまないね、ボクはタマモ、また鼻屑にさせてもらおうよ」

「グロスだ。 またいつでも来な」

クレイジー何某というのは聞いた事がないが、言わんとしている事はなんとなく理解できる。

店主に礼を言っ店を後にすると、今まで静かだったシアがぎゅつとボクの手を握りしめた。 何事かとそちらへ目をやると、そこには不機嫌そうに頬を膨らませたシアの姿が。 どうやら、主人との世間話は

随分と退屈だったようだ。

「いや、すまないね。気持ちの良い人だったから、つい話し込んでしまった」

「タマモ、一緒にお買い物してる時のお母さんと同じぐらいお話してた」

「ははっ、シアのような可愛い子が娘なら大歓迎なんだけどね」

ボクとしてはそれほど長い時間話していたつもりはないのだが、これぐらいの子にとって退屈な時間というのは本来の何倍にも感じるものだ。しかし、自分で言っておいてなんだが、娘、娘かあ。ううむ、子を抱えている自分の姿が全く想像できない。

そんなことを考えながらシアの髪を軽く撫で、先ほど紹介された店へと向かう。幸いそれほど遠くはなかったようで、しばらくするとすぐにそれらしき店を見つける事が出来た。それと同時に、なるほど先程ご主人が言っていた事は間違っていないかったな、と尻尾を一振りする。

「いらっしやい。初めて見る顔だが、来訪者かの？」

「ええ、ボクはタマモ。突然で申し訳ないのですが、貴方がフジさんで間違いないでしょうか？」

精肉の並ぶその先で、先ほど紹介された“フジ”とみられる老人が立ち上がる。齢は五十から六十といったところだろうか。しかし、皺の目立つその顔とは裏腹に、その体は随分と大きい。

身長は二メートルはあるだろうか。鍛え抜かれた筋肉に押し上げられて、白いシャツが破れんばかりに伸びきっている。

肉屋というよりはベテランのプロレスラーといった風である。

「如何にも、フジというのはワシじゃが」

「実は、すぐそこで店を開いているグロスという店主からここを紹介されました。トサカドリののもも肉を探しているんですが」

グロス、という名前にフジさんはふむ、と顎を一撫でし、目を細める。

そうして、不意にボクの尻尾の方へ視線を向けたかと思うと、柔らかな笑みを浮かべた。

「おお、誰かと思えば、ルビアさんとこのシアちゃんか。ちよつと見ないうちに大きくなったなあ」

見れば、尻尾の後ろからおずおずといった様子のシアが顔を覗かせていた。どうやら顔見知りのようである。いや、シアの様子を見るに、顔を覚えていたのはフジさんだけのようだが。

「今日はおつかいかな？ 偉いなあ」

頭を撫でようとしたのだろう、ずいっと伸びてきたフジさんの大きな手のひらを見て、シアはびくりと身体を跳ね上げると、まるで猫のようにボクの尻尾の陰へと隠れてしまった。行き場をなくし、ごつごつとした右手が寂しそうに宙を泳ぐ。

フジさんの気持ちはわかる。しかし申し訳ないが、正直小さな女の子だとこの御老人は怖いと思う。

本人は頭を撫でてやるつもりであっても、シアちゃんにとっては押しつぶされそうな重圧を感じた事だろう。

「いやはや、どうもこのナリだと子どもに怯えられてかなわん。そういえば、前に会った時も大泣きされたのう」

彼自身もそれは理解しているのか、少し困ったように笑い、奥から小さな包みを一つ手に取った。

「ほれ、トサカドリののもも肉じゃ。200Gでええぞ」

ちやりん、と小銭の音。所持金が2300Gに。

これでメモに書かれた品は一通り揃える事が出来た。あとはシアを自宅まで送り届けるだけである。しかし、まあ、少しぐらいお節介を焼いてもいいだろう。ちらりと後ろへ視線をやると、尻尾をぎゅつと握るシアと目が合った。その縮こまった背にそつと手を添え、囁くように言う。

「ほら、シア、ちゃんとお礼を言わないと」

そうして掴まれたままの尻尾を揺らすのと同時に、彼女の背を押す。

たしかに見た目はクマみたいだが、少し話ただけで分かる通り、なんとも暖かで穏やかな御仁なのだ。彼女の母親とも顔見知りのようだし、ここで一つ双方の仲を解しておいても良いだろう。

ボクとフジさんとを交互に見ながら、やがてシアは意を決したように尻尾の陰から顔を出した。

「あ、あの、ありがとう、ごさいましゅ……」

そして噛んだ。

思わず笑いそうになるのを、袖で口元を隠して何とかやり過ごす。言わずもがな、顔を真っ赤にしたシアは、またボクの背後へと引っ込んでしまった。

だが、それだけでも彼には十分だったのか、フジさんはうむと言領くと、また店の奥へと戻り、商品の準備を始めた。その背中が随分と嬉しそうに見えたのは、きっと見間違いではないだろう。

「よくできたね、シア」

ぎゅつと尻尾にしがみつくシアの髪をそつと撫でる。

「さて、それじゃあ帰ろうか。シアのお母さんにも、ご挨拶しないかね」

返事は無い。代わりに、尻尾を抱く力がまた一段と強くなった。抱き着きすぎて、跡が残らなければいいのだけれど。

そんな可笑しな心配をしながら、ボク達は市場を後にする。

日は、少しずつ傾き始めていた。

お稲荷様と道具屋さん

シアの自宅はレンガ造りに赤い屋根の、小さな一軒家だった。

小さな庭に三角形の屋根。そして、扉の上には小さな看板が下がっている。宝箱の上に【傷薬】と同じ丸いフラスコを重ねたデザイン。マニュアルに記載されていた、道具屋のマークである。

「驚いたな、シアのお母さんは道具屋さんなのかい？」

「うん！お母さんお仕事で忙しいから、代わりにシアが買ってきてって！」

なるほど、シアがおつかいを頼まれた事には、そういった訳があったわけだ。

確かに今日はサービス開始日の為、プレイヤー達が集中して来店する可能性が高い。

それを予想してか、はたまたボクがログインした時点で既にプレイヤー達が訪れていたのか、その対応に追われ手が離せない母親が、シアにおつかいを頼んだのだろう。

「お母さん、ただいまー！」

ちりん、とドアチャイムの音。

それに耳を傾けながらシアに続いて店に入ると、まず目を引いたのは所狭しと棚に並べられた数々のアイテム達。【傷薬】と同じ物や、中身が緑色の物、試験管に似た細長いタイプに、何やら結晶のような、不思議な光を放つものまである。

シアの声にカウンターの奥で戸棚を整理していた女性が振り向き、少女の姿を認めるとふわりと微笑みを浮かべた。駆け寄ったシアが女性の足に抱き着き、満面の笑みを浮かべる。

「シア、おかりなさい。ちゃんとお買い物はできた？」

「うん！狐さんと一緒に行ってきたの！」

「狐さん？」

シアの言葉に首を傾げ、女性がこちらへと視線を向ける。

編み込まれ、胸元へと流された長い髪はシアと同じ栗色で、顔立ちもどこか面影がある。

しかしその見た目は予想よりも随分と若く、お世辞などではなく、歳の離れた姉妹と言われても信じてしまいそうだ。

「はじめまして、ボクはタマモ。訳あってシアと一緒に街を回らせてもらっていた、しがない来訪者です」

「あらあら、娘がお世話になったみたいで、ごめんなさいね。私はルビア、この道具屋の店主をさせて頂いてます」

印象としては、おっとりとした柔らかい雰囲気的女性。

若くは見えてもそこは一児の母ということなのだろう。落ち着いた物腰で頭を下げると、こちらの頭、そして尻尾へと視線を送り、右手で口元を隠した。

「あらあら、まあまあ。私、妖狐族の人とお会いするのは初めてだわ」
「はは、実はボクも、この街には今日来たばかりでして」

「あら、そういえば来訪者とおっしゃってましたっけ。今日はうちにもお昼過ぎから多くいらっしやって、色々と買って頂けるのは嬉しいのですが、恥ずかしながら私一人では手が回らないような状態で」

そう言つて、少し照れくさそうに笑う。

しかし今は随分と落ち着いたようで、店の中にはボク達以外の姿は見えない。今頃は皆、街の外に出てレベリングにでも精を出しているのだろう。

その時、彼女の足に抱き着いていたシアが、エプロンの裾をぐいと引きながら言った。

「あのね、あのね、知らないお兄さんとぶつかって、とっても痛かったんだけど、狐さんがお薬で治してくれたのー！」

シアのその言葉に、ルビアさんは目を丸くする。

「本当に？ それはそれは、タマモさんにはなんとお礼を言えば良いか……」

「ああ、いえ、ボク一人ではどうせ持て余してしまう物でしたので、お気になさらず」

またレベリングにも向かわなければならぬが、まあ、あの「傷薬」はキャラ作成時から持っていた物であるし、別に損失というものでもない。

ルビアさんは頬に手を当てて何か考える仕草をした後、ぽんと胸の前で手を叩いた。

「そうだ、宜しかったらお茶でも飲んでいきませんか？　ずっと立ち話というのもなんですし」

「でしたら、お言葉に甘えて」

ルビアさんに促され、シアに腕を引かれつつ向かった先は店の裏庭。

そこは小さなウッドデッキになっており、シンプルな白いテーブルとイスが並べられている。

椅子に腰かけ少し待っていると、ルビアさんが木製のトレイに陶器のピッチャーやカップを乗せてやってきて、どこか嬉しそうな表情で準備を始めた。

鼻先をくすぐる、どこか安心する香り。これは紅茶だろうか。

鮮やかな琥珀色のそれをそっと口に含むと、程よい甘みと酸味が舌を刺激し、優しい香りが口内を吹き抜けていく。

「美味しい」

自然と口から漏れたその一言に、シアとルビアさんは嬉しそうに笑った。

「お口に合ったようで何よりです」

「お母さんのお茶はとってもおいしいの！」

聞けば、ルビアさんの道具屋でも取り扱っている茶葉を使っているという。

ボク好みの味であつたし、リアルの方でも紅茶よりはコーヒーを飲むことが多かったので、これを機に紅茶を嗜んでみるのもいいかもしれない。

紅茶に舌鼓を打ちつつ、とりとめのない世間話に花を咲かせる。

表情豊かに話をする二人といえば、彼女達がNPCであるという事を忘れさせてしまう程だった。

まさしく、自分が異世界にでも迷い込んだような感覚である。

「そう、でしたらタマモさんは魔法を扱う事が出来るんですね」

「魔法、というよりは妖術や呪術の類ですが」

話しているうちに、いつの間にかボク自身の話題へと話が切り替わっていた。

まあ、職業の選択次第では火の玉を飛ばしたり、風の刃を操ったりといった事も出来るようにはなるのだが、ボクはどちらかというと妖狐族らしい方面に能力を伸ばそうと思っている。

尤も、現在所持しているスキルである「狐火」も、魔法使いが使う「ファイアボール」と似通った見た目、効果ではあるのだが。

「ルビアさんは、そういった術を扱う人物などに心当たりはありませんか？」

紅茶を一口飲み下した後、ふと思い立ってそう尋ねてみる。

すると彼女はううん、と顎に手を当てて考えた後、申し訳なさそうに目じりを下げた。

「ごめんなさい。随分と前に旅の商人さんからそういった話を聞いた事があるけれど、それ以上の事は何も……」

「いえ、あまり広まっていない技術のようですし、お気になさらず」

「王都《ファイア》なら、知っている人もいるかもしれませんね」

ふむ、王都ファイア、か。

この街が始まりの街《アイン》¹なので、単純に考えればアイン、ツヴァイ²、ドライ³の次がファイア⁴であるから、3つ先の街か。随分と先は長そうである。

ふとカップへと目をやると、いつの間にかすっかり飲んでしまったようで、カップの底を彩る花柄がはつきりと見えるようになっていた。

どうも、すっかり長居してしまったようである。

「さて、随分とご馳走になってしまつて、申し訳ありません。そろそろお暇^{いしま}させて頂きますね」

「いえいえ、こちらこそ引き留めてしまったようで、ごめんなさい」

「狐さん、また遊ぼうねー!」

席を立ち、シアへ手を振りながら店を後にする。

短い間だったが、本当の妹が出来たようでとても楽しい時間を過ごすことが出来た。

また時間があれば、顔を出してみよう。

と、店の扉をくぐろうとしたところで、ふと思い出す。

「そうだ、ルビアさん、このお店で街の地図は取り扱っていますか？」
そういえば、元々は道具屋を探して街中を歩いていたのである。

そこからシアのおつかいの件があつて、すっかり忘れてしまつていた。

「地図、ですか？ はい、こんな物で宜しければ」

そう言つてルビアさんが取り出したのは、A4用紙ほどの小さな地図。円形に広がった街に、蜘蛛の巣状に道が走っている。要所要所に注釈が引かれ、地図というよりはガイドブックといった方がいいだろう。

冒険者ギルドや教会、騎士の駐留所などの場所も明記されている。

「ありがとうございます。お幾らでしょう？」

「いえいえ、お代は結構ですよ。シアがお世話になったお礼という事で、受け取ってください」

代金を支払おうとするボクを手で制し、ルビアさんはカウンターの奥からまた何かを取り出して、こちらへと差し出してきた。

小さな包みを開くと、頭の中にシステムメッセージが響く。

―クエスト【はじめてのおつかい】をクリアしました。

クリア報酬：【傷薬】×1、【アインの地図】、1,000G

どうやらこのタイミングで、クエストを完了したと判断されたようだ。

シアの治療に使用した【傷薬】が補充され、所持金は3,300Gに。元々の所持金が3,000Gだったので、300Gの黒字である。地図に関しては無償で手に入れてしまった。

「そんな、野菜やお肉の代金の分だけで結構ですが……」

「気にしないで下さいな。私からの感謝の印という事で」

どうにも困った。クエストの報酬というのは理解できるのだが、なんとも難儀なことに、下手に親しくなったせいで人情が先に立ってしまう。

結局、いやいや、いえいえというやり取りを数度した後、今回はあ

りがたく頂戴するという事になった。

頂いた地図を片手に、今度こそ店の扉をくぐる。

「今回は色々とお世話になりました」

「いえいえ、こちらこそシアの面倒を見て頂いてありがとうございます。」

宜しければ、また遊んであげて下さいね」

「ええ、またお邪魔させて頂きます」

手を振るルビアさんへ一礼し、歩き出す。次の目標は、冒険者ギルドである。

スタートダッシュ組はもう狩場へ出ているだろうし、本格的に混み合う前に、こちらも適当な狩場を見つけておかなくては。

そうして数歩歩いた後、ちらりと道具屋の方を振り向くと、ルビアさんは扉のノブに下げていた看板を“CLOSED”から“OPEN”にひっくり返して、店内へと戻っていった。

それに苦笑いを一つ、今度こそその場を後にする。

自慢の尻尾をゆらり、ゆらりと揺らしながら、空を仰ぐ。

紅茶のように赤くなった空に、小鳥たちが飛び立っていった。

お稲荷様と冒険者ギルド

地図を片手に歩き始めて十分足らず、何とか日が落ちる前に冒険者ギルドに到着する事が出来た。

何というか、冒険者ギルドという名前からして、かなり立派な建物だと思っていたのだが、実際に見てみれば、印象としてはRPGによく登場する酒場に近い。

教室二つ分程のスペースにテーブルが二つ、一番奥にはカウンターが設置され、その横には掲示板らしきものが備え付けられている。

どうやらピークは過ぎたらしく、プレイヤーの姿はもうまばらになっっていた。

「ようこそ、冒険者ギルドへ。来訪者の方ですか？」

「ええ、ようやく一息ついたところで申し訳ないですが」

カウンターには、桃色の髪 of 可愛い女性 が座っていた。歳は二十半ば程だろうか。

桃色の髪を顎のラインで切りそろえ、薄い桜色の口紅に、アンダーフレームの眼鏡が大人っぽさを演出している。

女性はにつこりと笑うと、手元の引き出しから一枚の石板を取り出してみせた。

「いえいえ、気にしないで下さい。ギルドへのご登録でしたら、この石板の上に手を乗せて下さいね」

そう言われ、差し出された石板を見る。

中心に何やら魔法陣のようなものが描かれた、研磨されたかのようななだらかな石板である。

そつと手を乗せると、ひんやりとした感触の後、石板全体が淡い光を放ち始めた。

それと同時に目の前に見覚えの無い文字列が浮かび上がり、女性はその文字を見ながら手元の書類へ何やら手早く書き込んでいく。

「えーつと、お名前はタマモ様、ですね」

「……ああ、成程。この石板に手を置くと、その人物の情報が表示される仕組みなんですネ」

「ええ、《真実の石板》といって、この石板の前では、如何なる嘘偽りも意味を成しません。えーっと、レベルは1で、種族は妖狐族つと、あとは……えっ!？」

すらすらと手続きを進めていたその時、女性とはある部分で目を丸くして、素っ頓狂な声を上げた。

目線は何故か、浮かび上がった文字とこちらとを行ったり来たりしている。

「何か不備でもありましたか？」

「い、いえ、何でもありません! 大変失礼しました……」

もしや、何か問題でもあったのではと心配になり声をかけてみれば、女性は頬を僅かに朱に染めて、ずれた眼鏡を整えながら頭を下げた。

いや、手続きに問題が無ければいいのだが……。

「も、申し訳ありませんでした、もう手を離して頂いて結構ですよ」

先ほどの出来事に一抹の不安を感じつつ、まあ大丈夫だろうと手を離す。

すると、石板が放っていた光が手の中に集まり、やがて一つの指輪へと変わった。中心に赤い宝石がはめ込まれた、銀製のシンプルな指輪である。

「それは【冒険者の指輪】というアイテムでして、ギルドに登録された正規の冒険者としての証明書代わりとなりますので、紛失等には十分にお気を付け下さい」

「わかりました。ちなみに、もし紛失した場合の再発行は可能ですか？」

「はい、可能です。しかし再発行された際は一定期間再発行が出来なくなりますので、ご了承下さい」

——【冒険者の指輪】を再発行するには、前回の再発行から現実時間で60日以上経過している必要があります。

女性の説明に、システムメッセージで補足が入る。

ちなみに数多くのフルダイブ型MMOゲームに採用されている時間圧縮技術であるが、この“The Another World”

でもその技術は採用されており、現実世界での60日は、ゲーム内時間では三倍の180日、約六カ月に相当する。この時間圧縮技術というのも、娯楽分野に採用された当初は随分と物議を呼んだらしいが、まあ、今はそんな話はどうでもいいだろう。

【冒険者の指輪】は、まあ、左手の親指にはめておこう。サイズ的にきちんとはまるのか不安だったが、そこはファンタジー、にゆつと大きさが変わったかと思えば、ボクの指にぴったりフィットする大きさに調整された。これならば、かなり激しく動き回っても外れる事はないだろう。

「では、これで登録は無事に完了となります。他にご質問などはありませんか？」

「ええと、それでは一つだけ。実はとある職業のギルドを探しているのですが、こちらでどこにあるか確認をお願いできますか」

ルビアさんは心当たりが無いと言っていたが、冒険者ギルドの職員さんなら何か知っているかもしれない。まあ職業自体、必ずどこかに所属しなくてはならないという訳ではないのだが、その場合はスキルの取得率や成長率にかなりの差が出てしまう。反面、スキルの取得に必要なスキルポイント^sがその分だけ余ってはくるのだが。なので、ボクとしては早く目当てのギルドを見つけてしまいたいところなのだが、上手くいくだろうか。

「はい、宜しければ確認いたしますよ。登録名などはご存知ですか？」

「ええ、『陰陽師』という職業のギルドなのですが」

陰陽師。

本来は星を読んで吉凶を占ったり、暦を作ったりする人達らしいが、現代、特にファンタジー世界においては呪術や方術、式神と呼ばれる鬼神を操り戦う、和製魔法使いのような扱いを受けている。ちなみにこのゲームにおける陰陽師は、言うまでもなく後者である、と思う。

というのも、βテスト時点でその存在は示唆されていたらしいのだが、ついで誰もそのギルドを発見する事が出来なかったのである。

てつきり正規版で実装してくるかと思っていたのだが、公式からの

アナウンスはなく、今に至る。

「陰陽師、ですか。少々お待ちください」

うーん、と少し唸った後、女性は一言断りを入れた後、席を立ち、カウンターの奥へと消えていく。　どうやら、同僚か上司に知恵を借りに行ったようだ。

あの様子だと望み薄かもしれないが、しばらく待つことにしよう。その間にカウンターの横へ設置されている掲示板へと目をやると、どうやらそれは冒険者ギルドが発行するクエストを張り出しておくためのものだったようだ。

どれどれ、と確認してみれば、予想通りというか何というか、残っているのは複数パーティ向けの難易度が高いと思われるクエストのみで、初心者向けの内容は殆どがスタートダッシュ組に持っていかれたようだった。

「まあ、仕方がない。数日も経てば落ち着いてくるだろう」

まあそれも、次回販売分でこのゲームを手に入れた第二陣がログインしてくるまでの間だけだろうけれども。

などと考えていると、カウンターの奥から先ほどの女性が小走りに戻ってきた。その表情を伺う限り、やはりダメだったようだ。

「お、お待たせしましたー!」

「いえ、その様子だと、やはり」

「も、申し訳ありません、他の職員にも確認してみたのですが、どうもギルドとして申請されていない可能性があるのでして、こちらでは確認が取れませんでした」

申し訳なさそうに、女性が頭を下げる。

「いえ、申請されていないものは仕方ありませんよ」

「そう言って頂けると……。ただ、王都に行った事のある職員が『陰陽師』という名を聞いた事がある、と言っておりましたので、もしかすると王都で何か手がかりが見つかるかもしれません」

やはり王都、か。

これは攻略ガチ勢の面々にも、頑張ってもらわなくてはなあ。

「それだけでも十分ですよ。では、またお世話になります」

「はい、この度はお時間を頂きまして、ありがとうございます。今回は私、ライムが担当させて頂きました。またのご利用、お待ちしております」

小さく手を振ると、にこりと笑って手を振り返してくるライムさん。お仕事中でなければもつと色々とお話をしたいのだが、まあ、それは次の機会にしよう。

さて、クエストは受けられなかったが、まずはレベリングだ。冒険者ギルドの扉をくぐり空を見上げれば、空には早くも星が輝きだしていた。

「うーん、しまった。この分だと、レベリングしている間に夜になってしまうなあ」

ゆらり、ふらりと尻尾をくねらせ、南にある門へと向かう。

夜になると一部のモンスターが凶暴化し、接近したプレイヤーに襲い掛かる「アクティブ」という状態へ変わるのだ。その為、昼間にレベリングを行うよりも戦闘不能にまで追い込まれるリスクが増加する。

複数人でパーティを組んでいる場合は一匹二匹に絡まれた場合でも対処は可能かもしれないが、ソロプレイでは致命的である。なので、可能であれば昼間のうちにレベリングをしておきたかったのだ。

「まあ、何とかなるだろう。」

ようはアクティブな敵に近づかなければいいのである。簡単な話だ。

と、言っているうちに門に到着してしまった。

「む、来訪者か。もう日も暮れる、門も日が昇るまでは閉めてしまうのだな、もし街へ入る場合は備え付けられた扉から門番の者に声をかけろ、鍵を開けてやる」

「お気遣い感謝する」

門番は鉄兜を被った、がっちりとした体格の男性であった。腰には剣を提げ、背中には盾を背負っている。鎧には大小様々な傷が刻まれており、かなり使いこまれているようだ。

そんな男性に軽く礼を言うと、未だ多くのプレイヤーが残っているであろう草原へと歩を進めた。やや冷たくなってきた風に混ざる、土と草の匂い。妖狐族という種族の特性か、遠くで僅かに響く剣戟の音がはつきりと耳に届き、柄にもなく胸を熱くさせる。懐から様々な模様が描かれた呪符を取り出しながら、足は剣戟が響く先へ。

「さて、RPGの醍醐味を堪能しにいかうか」

黄昏色に染まり始めた空を見上げながら、ボクはまだ見ぬ強敵に思いを馳せるのだった。

お稲荷様と初戦闘

さて、音のする方へ向かってみれば、そこでは男女三人のパーティが何やらゲル状のモンスターと戦闘を行っていた。

じっと目を凝らすと、モンスターの頭の上にその名前が表示される。

「レッサースライムか。成程、まさに序盤の雑魚モンスターらしいモンスターだ」

レッサー^{小さい}スライムという名前のわりに、大型犬程はあるだろうその身体は半透明の緑色をしており、その中央には拳大の丸い赤石が浮かび、時折気泡を吐き出している。

対する三人組のメンツはワーウルフ族の男性が一名、他二名は共に人間族で男女一名ずつ。

ワーウルフの男性はキャラ作成の際に随分と手を加えたのか、その姿はまさしく狼、獣人というよりは狼男といった方がしっくりくる。

武器を持つていないところを見ると、格闘戦を主とするアタッ^Dカー^Pタイプ^Sだろうか。

人間族の男性は盾と剣を装備しており、スライムの正面に陣取ってどつしりと構えている。

こちらは実にわかりやすく、剣士などのタンクタイプの職業だろう。

短い黒髪に黒目。鼻筋が通った顔立ちではあるが、変に整い過ぎてはいない。

キャラ作成で顔立ちを変えすぎるとかえって不気味な違和感を感じてしまうのだが、まさか容姿を変更せずにキャラ作成を済ませたのだろうか。

一番後ろに控えた少女は薄く笑みを浮かべ、背丈ほどある杖を構えている。

こちらは多少容姿を変更しているようで、小麦色の肌に赤い瞳、短く切られた黒髪から活発な印象を受けた。

「ハヤト、タゲぶれてんぞ、しっかりしろ！」

「うつさい、お前がヘイト無視して殴りまくるからだろ！」

狼男が盾を構えた少年に野次を飛ばす。それを受けて少年は声を荒げ、剣の柄頭で盾を激しく打ち鳴らした。

敵の標的ターゲットを自分へ向ける、【挑発】というスキルのモーションである。

【挑発】が発動し、狼男の方へじわりじわりと動き始めていたレッサースライムの動きがぴたりと止まり、少年へと狙いを変更する。

スライムはその体をぐつと凹ませた後、見た目からは想像できない素早さで少年へと体当たりを敢行し、少年の盾がそれを受け止めて鈍い音を鳴らした。

「ぐつ、流石に連戦だと体力がキツイな。モミジー！」

「はいはいー、【ライトヒール】いくよ！」

見れば、少年のHPバーは六割程度のところまで減少していた。危険域ではないが、要注意といったところである。

少年が背後の少女に声をかけ、少女が杖を振り上げると杖の先端が淡い光を放ち少年を照らした。HPバーがオレンジ色から緑色、ひとまずの安全域である八割ほどまで回復する。

どうやら少女は治癒術士ヒールだったようだ。

「これで終わりだー！」

少年がスライムの攻撃を受け持っている間に、その背後へと回り込んだ狼男が拳を振り上げる。

淡い光を放ちながら放たれた拳打はスライムの赤い丸石を正確に打ち抜き、スライムはその体を光の粒子へと変えた。

拳を突き上げる狼男、安堵した顔で額の汗を拭う少年、疲れたように伸びをする少女。

成程、戦闘の流れ自体は他のMMORPGと変わらない。改めて周囲を見回せば、似たような集団を幾つか見つける事が出来た。

ちなみにこのゲームではパーティでの戦闘に経験値ボーナスが入る為、レベリングの際は複数人でパーティを組む事が推奨されている。ソロでも通常戦闘に関しては支障はないが、どうしても戦闘不能になるリスクは上がる。そのうえダンジョン等のボスに関しては

パーティ戦闘を想定して調整されている為、ソロで挑むには相当なレベリングと装備が必要になるのだとか。

とはいえ、大きな差が出始めるのはもう少しレベルが上がってからの話であろうし、序盤はソロでのんびりと遊んでいても問題はないだろう。それでも縁があれば、他のプレイヤーとパーティを組む事もあるかもしれないが。

レベリングを継続するか相談しているのだろう、集まって何やら話し込む三人組。

そのうち少女と目が合ったので会釈だけ送り、さて自分も始めるかと袖から呪符を取り出し、辺りを見渡す。すると、丁度すぐ近くにレッサースライムを見つける事が出来たので、そちらへと歩を進めた。

ちらりと背後を見やれば、先程の三人組が何やら話をしながら、こちらへ視線を送っているのが見える。何だろう、妖狐族が珍しいのだろうか。

「ふむ、まあいいか。さて、とりあえずは色々試してみよう」

どうにも背中がむず痒いが、仕方がない。

精々、恥ずかしいところは見せないようにしようと気を引き締めて、レッサースライムへと呪符を放つ。

枚数は一。物自体は紙で出来ているようなので、投げた途端に力なく落ちていってしまうかと思いきや、放たれた呪符は敵へと真つすぐに向かい、その緑の体表にぺたりと張り付いた。

直後、平手で打ったものに似た乾いた炸裂音が響き、レッサースライムは体をぶるりと震わせる。

「成程、こういう感じか」

遠距離攻撃ではあるが、レッサースライムの様子を見る限り、左程ダメージは与えられていないように見える。あくまで他のスキルの補助程度に考えた方がいいだろう。まあ、元々後衛寄りのステータスにしてあるし、これは仕方ない。

では次である。

「【狐火】！」

初期スキルとして使用できる初級妖術【狐火】を発動すると、黒い尻尾が震え、その白い先端をレッサースライムへと向ける。

そして少量のMPを消費すると尻尾の先端から青い炎が飛び出し、レッサースライムへと襲い掛かった。

着弾。緑色の体を青い炎が焼き、レッサースライムのHPバーを四割ほど削る。呪符が与えたダメージを含め、敵のHPは残り五割。

先程のパーティは三人がかりでこのモンスターを相手にしていたのでもう少しタフかと思っていたのだが、個体によって強さにばらつきがあるのだろうか。

「つと」

飛びかかってくるレッサースライムの突進を^{かわ}躲し、お返しとばかりに呪符を放つ。

【狐火】を数回当てればさっさと倒すことも可能ではあるが、スキルにはリキャストタイムが設定されていて連発はできないし、MPも戦闘中は専用の回復薬がなければ回復できず、戦闘が終わった後の自然回復も時間がかかる。迂闊に枯渇させていては、もしもの場合に対応出来なくなってしまう。

昼間ならともかく、今は夕闇迫る時間帯。 周りに突然アクティブ状態のモンスターが沸き出してもおかしくはないのだ。

攻撃を躲し、呪符を投げる。

そんな単調な攻防を数回繰り返した後、記念すべき初戦は幕を閉じた。

軽い電子音と共に、手に入った経験値やドロップ品の一覧が表示されていく。

めでたい初ドロップ品は、レッサースライムの一部だった。

【スライムゼリー（緑）】

レッサースライムから採取出来るゼリー状の物体。

錬金術の材料。

誤って口に入れないように注意。

今は生産系のクラスに手を出す予定はないし、これは売却用だな。途中一発だけ攻撃を避け損ねてしまったが、HPバーはまだ六割

残っている。まあ、想定内である。

と、不意に全身を水晶のような多角形の膜が覆い、淡い光が降り注いだ。直後、視界にシステムメッセージが浮かび上がる。

——【ホーリーヴェール】が付与されました。

効果：一定時間、対象の物理防御力上昇

これは、治療士^{ヒーラー}が扱う支援魔法^{バフ}だったか。

小首を傾げ周囲を確認すると、少し離れた場所に先ほどのパーティの姿を見つけた。どうやら先の支援魔法^{バフ}は、あの少女がかけてくれたようだ。

こちらに手を振る少女に頭を下げると、脇に控えた二人も小さく手を振って、三人仲良く街の方へと戻っていた。

うん、見るからに同じ年ぐらいだろうか。中々良い人たちである。

「さて、それじゃあもう少し頑張ろうかな。」

所持品欄から傷薬を取り出して服用すると、その酷い味に思わず咽返ってしまった。成程これは苦い。生のゴーヤから絞り出した汁でも飲んでいような苦味である。

苦笑いを浮かべつつ、八割ほどまで回復したHPバーを確認し、索敵へと移る。

周囲にはレッサースライムが数体徘徊しており、じつくりと観察してみるとどれも体の大きさに違いがある。どうやらレベルが高い個体程、体も大きく成長しているらしい。

無理をするのもらしくないので、ここは手堅く小さい個体を狙って行く事とする。

狙いを定め、呪符を放つ。そこから先は、随分と地味な作業であった。

攻撃を避け、呪符を投げ、時折【狐火】を混ぜる。

先ほど頂戴した支援魔法^{バフ}の効果も相まって、初戦程時間もかからず、負ったダメージも最小限で済ませる事が出来た。

気が付けば、五体目を片づけたところでレベルは2に上がっていた。

プレイヤー名：タマモ

種族：妖狐族 Lv2

職業：無し

【スキル】

初級妖術【狐火】

流石にスキルの追加はないようである。

だが先ほどの治療術士の少女はHPを回復する「ライトヒール」と、
【ホーリーヴェール】で二つ、スキルを使用していた。レベルもそう差
があるとは思えないし、恐らくはレベル3から5の間で、スキルの追
加があると見た。

尤も、追加があるのは職業スキルのみで、種族スキルはありません、
とかであるなら、どうしようもないが。

兎も角、今はレベリングである。

満月が輝く草原を、のんびんだらりと歩いていく。

遠くで、狼の遠吠えが聞こえた気がした。

お稲荷様と三人組

さて、時は経ち、サービス開始日の翌日。

ゲーム内時間で言えば、日が高く昇り始めた頃である。

結果だけ言えば、ボクは死に戻りした。

いや、途中までは順調にレベリングも進んでいたのである。おかげでレベルも12まで上がったし、目当てであった新しいスキルも手に入れる事が出来た。

いやはや、やはり徹夜なんてするものではないと痛感した。

最大の敵は、眠気だったのである。

眠気と戦い、ぼんやりとした意識でレベリングを行っていたところを複数の狼型のモンスターにがぶりとやられ、気が付けば始まりの街の、噴水広場に戻ってきていた。

ペナルティとして、一定時間最大HP、MP、取得経験値が大幅に減少する【衰弱】という状態デバフ異常が付与されている。

それにしても、狼の群れに集たかられ、首や腹に食いつかれるあの感覚は、いくら痛覚遮断の設定をいじくっているといても精神的にまいるものがあつた。出来ることなら、しばらくは遠慮したいものである。

しかし、得た物も大きかった。

メインメニューを開き、ステータスを確認する。

プレイヤー名：タマモ

種族：妖狐族 Lv12

職業：無し

【スキル】

初級妖術【狐火】

初級妖術【鎌鼬】かまいたち

妖術威力上昇（微）

スキル覧に追加された、二つのスキル。

【鎌鼬】はその名の通り、風の刃を相手に放ち、攻撃するスキルである。

威力的には【狐火】よりも少し高い程度であるが、費用対効果としてはこちらの方が優秀である。

何より弾速が早く、命中精度が高い。

妖術威力上昇は常時発動型、パッシブスキルと呼ばれるものである。こちらも効果はその名のまま、使用する妖術の威力を僅かに上昇させる。

どちらかというと防御系のスキルが欲しかったのだが、そこは魔法攻撃特化の妖狐族である。攻撃スキルが増えていくのは仕方がないのかもしれない。

さて、本音を言えばもう少しレベルを上げておきたいのだが、【衰弱】の効果が残っている間は、経験値を稼ごうとしても得られるのは雀の涙程度。なら、状態異常が解除されるまで、昨日のようにのんびりと歩き回るのも悪くない。

可能であれば、装備も更新したいところである。

「と、なると、どこに行こうかな」

そういえば、若干かさ張ってきた【スライムゼリー（緑）】も整理しなくてはいけないなあ、と思いながら、足は自然と市場の方へ。

そこには相も変わらず、人、人、人。まるで祭りだ。

サービス開始からまだ二日目ではあるものの、まだ現実時間は昼前だというのにこの賑わいぶりである。

とはいえ、二日目にして店を構えるようなプレイヤーがいるわけもなく、今回は昨日見て回れなかった「鍛冶屋通り」なる、武器防具を主に取り扱う店が立ち並び通りまで足を延ばす事とする。

市場通りから少し脇へそれた、裏路地を抜ける。左右には煉瓦造りの壁。

昼寝の邪魔をしてしまったのか、白と黒のぶち模様をした猫が頭上でいやあ、と鳴いた。

そうして、剣や盾、鎧の焼き印を提げた扉が連なる中、そのうちの一つに、何の気なしに手をかける。

ちりん、と小さく鈴の音。

クラシカルな雰囲気を漂わせる、カフェのような店内に足を踏み入れる。

天井から下がったライトが優しく照らし、壁際には数々の衣服が綺麗に陳列されていた。

「あら、いらつしやい」

カウンターからそう声をかけてきたのは、妙齡の女性であった。

綺麗な銀髪を横へ流し、後ろ髪を編み込んで丸く纏めている。

気の強そうな切れ長の瞳に、赤いベージュ。シンプルな黒いシャツは胸元が大胆に開かれており、なんとも煽情的だ。

思わずその胸元に視線が行きそうになるのを寸でのところで堪え、頭を下げる。

「どうも、何気なく立ち寄ってみたのだけど、なかなか良いお店ですね」

そう返すと、女店主はこちらの爪先から頭の天辺まで、まるで品定めするように視線を這わすと、ふうん、と小さく漏らした。

「元気に剣や槍を振り回すような柄じゃないね。なら、運が良いよお客さん。名前は？」

「タマモ」

「私はカトレア。見ての通り、ここの店主。で、レベルは？」

「12」

「駆け出しから片足抜け出たところね。予算は？」

「3,300と、後これは買い取れるかな？」

言って、所持品欄から昨日までの戦闘で手に入れた戦利品をアイテム化する。

「スライムゼリー（緑）」に、レアドロップであろう「スライムの赤玉（小）」が幾つか。

「スライムの赤玉（小）」

スライムの核を成す赤玉。

大きさに応じて価値が変動する。

とても割れやすい。

「うーん、うちはアイテム屋じゃないんだけどね。ま、全部纏めて1, 200で買い取ってあげるわ」

「それで問題ありません。宜しく願います」

という事で、予算は4, 500Gとなった。

「任せて。と、いうことで失礼するわよ」

言うが早いのか、カトレアはこちらのすぐ傍まで歩み寄り、身体中の採寸を始めた。

こそばゆい感覚。ふわりと、甘い香りが鼻先をくすぐる。

「ふーん、思ったより痩せてるのね。じゃあこれとこれと、あとこれ、着てみて」

流石プロ、というべきか。採寸が終わってからの彼女の動きは早かった。

陳列してある商品に迷いなく手を伸ばし、チュニツクやらパンツやらを並べていく。

どれもワンポイントに刺繍が入っている程度のシンプルなものだ。メインメニューを起動し、装備品覧を表示させる。と、そこで、店主から待ったがかかった。

「アンタ達がぱつと着替えられるのは知ってるけど、それじゃあ風情が無いでしょう。ほら、試着室はそっち」

そう言いながら背を押され、試着室へと放り込まれてしまった。

なんとも解せない事ではあるが、まあ、言わんとしている事はわかる。

で、あれば、折角なのでこちらもマニュアルで着替えようかと思う。ともあれ、狩衣や袴を適当に脱いでした日には目も当てられないほど散らかってしまいそうだったので、こちらは装備品覧から操作して外してしまったが。

何はともあれ着替えが終わり、装備品覧を開いて確認する。

【装備】

武器：初心者用の呪符

頭：無し

胴：若草のチュニツク

脚：若草のパンツ

足：若草のサンダル

装飾品：無し

詳細を確認すると、いずれも製作者の部分にカトレアの名前が刻まれ、防御力も以前までの装備と比べると段違いである。

不満があるとするならば、好みだった和風テイストが薄れてしまった事ぐらいだろうか。

まあ、そこは最悪、普段使いと分けて着ていけばいいだろう。

とはいえボクもずぼらなところがあるから、どうせそのうち面倒になってしまうのだろうけれど。

試着室から出てきたボクの姿を見ると、カトレアは満足げに一度頷いてみせた。

「似合ってるじゃない。まあ、わかってたけどね。はい、全部で4,200Gね」

予算ギリギリまでぶち込んでくる辺り、なんとも強かである。まあ、構わないが。

ちやりん、と音がして、所持金が一気に300Gまで減少する。心なしか、袖も軽くなった気がする。

まあ、今着ている服に物を入れられるような袖など着てはいないのだが。

二、三度生地を触ってみて、漏らす。

「これは、とても良いですね」

「当然よ、誰が仕立てたと思ってるの。値段以上の価値はあるわよ」自信たっぷりに腕を組むその姿に、ふっと笑みが漏れる。

想定していたより大きな買い物にはなったが、結果的には満足である。

この店とも長い付き合いになりそうな、そんな予感があった。

「それじゃあ、そろそろお暇させて頂きます」

「はいはい、またのご利用をお待ちしてるわ」

カウンターからひらひらと手を振る彼女に礼をして、また路地裏へ。

今朝まで着ていた物が物だっただけに、随分と身体が軽くなった気がする。

これならば、今まで以上に戦闘も楽になるだろう。

さて、とメインメニューを起動する。【衰弱】の効果時間は残り七分になっていた。

これならば、適当に冒険者ギルドでクエストボードでも覗いていれば程よく時間も潰せるだろう。

そう思い立てば、いざ冒険者ギルドである。

大賑わいの大通りを歩みながら、目的地へと向かう。耳に届くのは、プレイヤーやNPC達の声。

あのクエストは美味しかった、不味かった。あの敵はこうで、この攻撃には気を付けろ。こないだ見かけたプレイヤーなんだが、これがまた。寄ってらっしゃい見てらっしゃい。

そんな喧騒をBGMにして歩いていれば、冒険者ギルドにはすぐ着いた。

スイングドアを押して中に入れば、丁度ピークなのか、中は昨日とは比べ物にならないほど賑わっていた。余りの熱気に、そのまま退散しようかと思ったほどである。

しかしこうして見ると、本当に多種多様である。

人間族、小人族、エルフ、ドワーフ、ワーキャット、ワーウルフ、翼のような腕を持つハーピー族、一見モンスターののような外見をしている彼は、リザードマンだろうか。

それらが一か所に集まり、ひしめき合っている光景は、なかなか混沌としていた。

「あ、昨日の妖狐族の人ー」

と、そんな闇鍋の中から、自分呼ぶ声がする。

よいしょよいしょと、大柄なりザードマンを押しつけて出てきたの

は、昨日草原で見たあの少女だった。その背後にはワーウルフと人
族の少年の姿もあり、こちらが会釈すると、少し困った様子で頭を下
げた。

「おい、モミジ、いきなり失礼だろ。すみません、コイツちよつとアレ
なんで……」

「むー、アレとはなんだアレとは！」

人間族の少年が申し訳なさそうにそう言うと、モミジと呼ばれた少
女は頬をぷつくりと膨らませて少年を睨み付けた。

溜息が一つ。

「お前は黙ってろ、話がややこしくなる」

びしり、と少女の頭に手刀を落としたのは、ワーウルフの男性で
あった。

声色から察するに、年齢は少女と同じぐらいだろうか。

きやん、と声を上げ、頭頂部を押さえながら蹲った少女を見て、や
れやれと彼は頭を振った。

近くで見れば、ますます狼そのものである。ぎらりと鋭い眼光に、
逞しい体軀。鋭い爪。

装備も軽装であるし、昨夜の戦闘を見る限り、職業は拳闘士グラップラーだろう。

「俺はコタロウ。スンマセン、ツレが迷惑かけて。コイツ、いつつもこ
んな感じなんスよ」

「いや、構わないよ。こちらこそ、昨日はありがとう」

あの時かけてもらった支援魔法バフのおかげで、あ後のレベリングは
かなりスムーズに行う事が出来た。

涙目になりうずくまる彼女に軽く頭を下げると、よく日に焼けた少
女はまるで弾かれた様に立ち上がると、僅かに頬を朱に染めながら、
顔の前で勢いよく両手を振った。

「そ、そんな、お礼を言われるような事じゃないですよー！」

「そうそう、どうせ何も考えずにやってるんスから、コイツに頭を下
げるだけ損ツスよ」

溜息交じりにそう続けるワーウルフの少年の向う脛を、眉間に皺を
寄せた少女が蹴り上げる。しかし少年は毛ほども痛がる様子を見せ

ず、地団太を踏む少女の頭をぐりぐりと撫でまわしていた。

まるで猫のような声で威嚇する少女を剣士風の少年が嗜め、ワーウルフの少年がふんと鼻を鳴らす。

見たところ随分と気心が知れた間柄の様だが、リアルの方でも友人同士だったりするのだろうか。

「ところで、ボクに何か用かな？」

どこか微笑ましいそんな光景を眺めながらボクが言っていると、剣士風の少年がはつとして、少女に声をかけた。

「すみません、騒がしくしてしまつて。ほらモミジ、この人に話があるんだらう？」

少年に背を押され、少女がたたらを踏みながらボクの前に出る。そうして大きな瞳を左右へ行ったり来たりさせると、意を決したようにこちらを見上げ、言った。

「あの、今からパーティどうですか!？」

大勢のプレイヤーたちがひしめく冒険者ギルドの中に、少女の声が響く。

余りに大きな声に、何事かとこちらを見やる数人のプレイヤーたちの視線を感じながら、ボクはなんとも初々しい少女の姿に、ふっと笑みを漏らすのだった。

お稲荷様と初パーティ

「えっ、あの後そんな時間までログインしてたの？ あ、ログインしてたんですか？」

「そのおかげで狼のモンスターにやられてしまったのだけだね。折角かけてもらった補助魔法バフ魔法を無駄にしまって、申し訳ない」

「狼って事は、ブラックウルフか。あれリンクするし、ソロだとなかなかしんどいッスよ」

リンク、とは一体が敵対状態になれば、周辺にいる同種のモンスターも同じく敵対状態に変わる特性を差す。まあ、近くにいる仲間が増援に駆けつけるようなものだ。

狼は群れで行動する動物であるし、その特性が備わっているのは至極当然といえた。

「はは、まったく耳が痛い。それと、ボクには敬語は不要だよ。堅苦しいのはどうも苦手で」

冒険者ギルドで少女の誘いを受けたボクは、願っても無いその申し出を快諾。軽く準備を済ませた後、昨日ボクがレベリングを行っていた、始まりの草原へとやってきていた。

ワーウルフの少年はコタロウ、職業は拳闘士グラップラー。

人間族の少年はハヤト、職業は剣士。

そして冒険者ギルドでボクをパーティに誘った少女はモミジ、治癒術士ヒーラーである。

ちなみに、三人ともレベルは十七。ボクより五つも上である。

パーティでの戦闘で得られる経験値は人数に応じて頭割りで分配されるのだが、割合としてはレベルが高い者ほど大きく、低い者は得られる経験値も少なくなる。対して大本の数値は一番レベルが高いプレイヤーを基準に算出されるので、レベル差によっては9:1なんて比率になったりもするらしい。

まあ、高レベルプレイヤーが低レベルプレイヤーのレベル上げを補助して効率を高める、所謂パワーレベリングと呼ばれるものに対する処置であろうと考えられる。

しかし、その件に関しては事前に話し合い、皆が納得済みだ。元々このレベル帯では左程取得できる経験値に変わりはないだろうし。この差がもつと大きければ、目に見えて経験値も不味くなったのだろうけれど。

「そういう事なら。でもでも、職業を取得してないって、色々きつくない？」

「うーん、これに関してはボクのわがままと言わざるを得ないね。転職が出来るのも知ってるし、何でもいいから職業ギルドに所属した方が、情報的にもスキルのにも有利に働くのは間違いないのだろうけれど」

パーティを組んだ際、ボクがまだこの職業ギルドにも所属していない事を話したところ、三人の反応は皆一様であった。当然である。

このゲームにおいて職業は固定ではない。初めにこれだと決めた職業から変更出来ない、なんて事はなく、いつでも変更は可能だ。

そして職業ギルドに所属するとその職業に対応したスキルがレベルに応じて取得出来たり、専用のクエストが受領出来たりする。デメリットは皆無だ。

職業無し、なんていうのは一種の縛りプレイだ。そして縛りプレイなんてものは基本ソロで行うべきもので、パーティプレイでもその縛りを持ち込むのは無論ナンセンスである。

なので、パーティを組むとなった際は、この点が非常に心苦しかった。

職業無し、種族スキルのみで構成された、言ってしまうえば迷惑プレイヤーに近いボクを組み込むぐらいなら、他の魔法使いソーサラーやら、弓術士アーチャーを誘った方が戦力はぐんと上がり、レベリングの効率も多少は変わってくるだろう。

だが、この三人は嫌な顔一つせず、むしろ無職でいる理由を説明すると、そういったこだわりは大事だと歓迎してくれた。いやはや、なんと心地の良い若者達である。いや、ボクも若者なのだが。

「最悪、目当ての職業ギルドが見つかるまでこの辺りでのんびりしていても構わないしね」

「でも陰陽師か。　　そういやあ、オープンβの時点で色々言われてたな。忍者だの、侍だの」

「インタビュで運営側が、　　そういうのも探せばあるかもしれないね」　　って答えてたらしいよ」

　　レッサースライムを蹴っ飛ばし、片手剣でスライスしながら二人が答える。流石に四人がかりでやれば一瞬、多勢に無勢である。南無南無。

　　ちなみに今回の獲物はこのレッサースライムではなく、草原の先に広がっている森、その手前に生息しているマッドワームというモンスターだ。

　　攻撃力も防御力もさほど高くないモンスターらしく、こいつを連続で狩り続けるのが美味しいのだとか。

「お、いたいた」

　　先頭を歩いていたモミジが声を上げる。

　　その視線を辿ると、地面から土色の棒が一本、何やらうねうねと揺れていた。

　　ワームというよりは、昔水族館で見たチンアナゴによく似ている。

　　先端には触角のような管が数本生えており、目はなく、小さな口が一つだけついている。

「思ったよりも愛嬌があるね」

「え、タマモさんマジ？」

　　そうぼろつと零したところ、モミジに若干引かれてしまった。ボクは好きだけどなあ。

　　ともあれ、いつまでも眺めている訳にもいけないので、そろそろ始めようである。

「モミジ、バフ宜しく」

「ほいほい、【ホーリーヴェール】！」

　　モミジが杖を高く掲げ、先日ボクもお世話になった支援魔法^パが発動する。

　　それを受け、ハヤトが剣を抜いてマッドワームへ向かって駆けだす。その背中をコタロウが追い、我々後衛組はここで待機だ。とりあ

えずは、タンク役のハヤトが敵視^{ヘイト}を稼ぐまでは、高威力の魔法攻撃は使えない。

「挑発」！」

まずは横への切り払い。そのまま後ろへ抜けて、盾を打ち鳴らす。ぐりん、とマッドワームの体がうねり、その向きをハヤトの方へと向けた。それと同時に体を鞭のようにしならせて、ハヤトを薙ぎ払わんと迫る。さて、そろそろいいだろう。

マッドワームの一撃をハヤトが盾で受け止めるのを見届けて、呪符を投げる。

同時にマッドワームの背を、コタロウの拳が強かに打った。その脇を抜けるように呪符が襲い掛かり、炸裂音が響く。

このゲームにフレンジードリーフアियाは存在しないが、攻撃判定はプレイヤーの身体に接触した瞬間消失してしまうので、こちらの妖術がコタロウに当たってしまったかわないよう、微妙に立ち位置を調整している。うん、この辺りなら問題ないだろう。

「鎌鼬」

宣言し、腕を振り上げる。

手刀が大気を裂き、不可視の刃——あくまでゲームの設定上であり、実際はうつすらと色がついている——がマッドワームへ向かい放たれた。

しかしまあ、威力はレベル相応であるので、風の刃は相手の薄皮と肉を少々切り裂いた程度で霧散する。威力が上がれば輪切りに出来たりするのだろうか。いや、ミミズの輪切りはあまり見たくはないので出来なくていいか。

だがしつかりダメージは通っているようで、マッドワームは苦しむように身を振る。

時折モミジが回復魔法をかけつつ、危なげもなく初戦は終了した。マッドワームがぐったりと地へ倒れこみ、その体が淡い光となって解けていくのを見届けると、軽快な電子音と共にメッセージが表示された。どうやら、何かしらのアイテムがドロップしたらしい。

【マッドワームの肉】

始まりの草原に生息するマッドワームの肉。
主に魔物用の餌として利用される。
意外とジューシー。

これは、なんとも。

最後の一文に、思わずドン引きである。

いや、現実世界での食用ミミズの存在は知っているが、まさかこの巨大ミミズを食べてみせた豪傑が存在するのだろうか。

三人の方を見やると、三人とも困ったような顔を浮かべていた。

「気持ちはスゲーわかる。ここの運営、絶対面白半分でテキスト作ってるだろ」

「あはは……。まあ、魔物^{テイマー}使いとかが使うんじゃないかな、うん」

「私もこれは無いと思うわー」

何はともあれ、レベリングである。

経験値の減少は想定範囲内であるし、数でカバーすれば補える程度だ。

「まあ、これはあとで売却かな。流石に使わないだろうしね」

「私もいらないー」

「じゃあ、次行くか」

この『始まりの草原』にはかなりの数のプレイヤーがいるはずなのだが、フィールドが広大な為か、周囲に見える姿はまばらで、幸い獲物の奪い合いにはならなさそうだ。

所々にぽこぽこ頭を出すマッドワームを追い、次々と撃破していく。

小休憩をはさみながら一時間程狩り続けると、またレベルアップを知らせるファンファーレが鳴り響く。これで十四である。

「おめー」

「おめでとう」

「やっぱ魔法職が一人多いと違うな。殲滅速度がダンチだわ」
そう言ってもらえると、こちらとしても気が楽だ。

やはり、種族スキルのみで迷惑にならないか少々不安が残っていたのだが、多少なりともプラスには働いているようで一安心である。

「三人は種族、職業レベル共に十八だったかな？やっぱり徐々にきつくなつてくるみたいだね」

「十五を過ぎた辺りから、必要な経験値が目に見えて増えてね」

「このレベル帯でこの増加量なら、キャップ^上付近は地獄だろうな」

「レベリングダンジョンはよー」

ちなみに現在のレベルキャップ、上限は六十である。

バージョンアップでこの上限はどんどん上がっていくだろうが、それに伴いレベルアップに必要な経験値も増えて行く事を考えると、確かに頭も痛くなる。

まあ、その辺りも含めて修正が入るような予感もするが。

「まあ二十になればまたギルドクエストも受けられるだろうし、頑張ろう」

「ほう、やはり決められた間隔でクエストが発生するんだね」

「今は五の倍数だな。レベル五、十、十五で発生してるから、まあ二十でも来るだろ」

ちなみにクエストの報酬は装備品や専用のスキルらしい。

ううむ、装備品も手に入るとなると、そこで浮いたお金を別の事に回せるな。そこは素直に羨ましい。

「ボクも早く陰陽師になりたいんだけどねえ」

「とりあえず魔法使い^{ソーサラー}にでもなつとけばいいんじゃない？ 経験値勿体ないぞ」

「うーん、いや、いや、初めてセットする職業は陰陽師って決めてるから」

「物好きだねえー」

と、そんなやり取りをしながらさらに狩りを進め、丁度昼食の時間という事で、今回は一旦お開きとなった。結局、レベルは十五まで上げる事が出来た。他の三人は十九である。

流石に初期装備の武器ではダメージが通らなくなってきたために、後半はほぼ妖術のみで攻撃を行っていた。MP管理はしっかりと

行っていたが、それでもレベリング効率が僅かばかり下がってしまい、三人には本当に迷惑をかけてしまったと内心反省する。

朝食を済ませたら、そろそろ武器も新調しないといけないなあ。呪符、売ってるだろうか。

「それじゃあタマモさん、またねー！」

「パーティ、ありがとうございました」

「また宜しくツス」

三人とは、街の入り口で別れた。

手を振り去っていく三人を見送って、さて自分も一旦ログアウトするか、とメインメニューを開いたところで、前方からどたばたと足音が。

何事か、と顔を上げると、先ほど別れたばかりの少女の姿があった。

「どうしたんだい、そんなに慌てて」

「ごめんなさいい、肝心な事忘れてたー！」

肩で息をしながら、モミジがメインメニューを操作する。

すると、ぽこん、という音と共にメッセージが表示された。

ープレイヤー『モミジ』からフレンド申請が届いています。

受理しますか？ YES／NO

その表示に、思わず目を丸くする。

「あれ？もしかして迷惑だった？」

よほど凝視していたのだろうか。モミジが心配そうにこちらを見上げてくる。

ふっと笑い、とん、とYESのボタンをタッチした。

「まさか、こちらこそ宜しくお願いします」

フレンドリストの欄に、モミジの名前が刻まれる。

記念すべき初フレンドだ。

「えーっと、それで、なんだけど」

と、そこでモミジがまだ何か言いたそうにもじもじしていたので首をかしげていると、彼女は手で小さく蓋をしながら、こちらの耳元で

何事か呟いた。

その内容に、思わず吹き出してしまった。

「ははっ、やっぱりそうか」

「えっ、じゃあやっぱり……」

「うん、それに気付いたのは、君でたぶん四人目かな」

勿論、このゲームを開始してから、である。

「はえー……」

きよとんと、赤い瞳を丸くするモミジの様子がおかしくて、また笑う。

「ボクに会った人は、みんなそんな顔をするよ」

「でしようねえ……」

ボクとしては、自然体でいるだけなんだけれども。不思議だ。

まあ、間違えられたところで迷惑もしていないし、自分が偏屈な人間である事は理解している。

と、惚けていたモミジの肩が、突然びくりと跳ねた。

「やつば、お母さんに呼ばれちゃった。ごめん、私もう落ちるね!」

「はいはい、あの二人にも宜しく伝えておいて」

ぼーっとしたりわたたり、忙しない子だなあ。

光に包まれ消えていく姿を見ながら、ボクは小さく手を振った。

なんとも、面白い縁に恵まれたものである。

「さて、ボクもご飯作らないと」

まあ、長い付き合いになりそうである。

なあー、と鳴き声を上げる猫に手を振って、ボクはログアウトのボタンをタップした。

お稲荷様と苦い思い出

さて、昼食も終えて昼下がりに、再びのログインである。
まずは武器の更新であるが、これは意外と早く解決した。
市場通りに並んだ露店の一つに、丁度いいものを見つけたのである。

【あやかし扇】

“妖”の文字が描かれた扇。

魔法攻撃の威力を僅かに上昇させる効果がある。
打撃には適さない。

大きさとしては一般的な扇と左程変わらず、黒地に白い花びらが舞い、中央に赤い文字で“妖”の一字。

デザイン的にも性能的にもボクの好みで、半ば衝動買いに近かったのだが、とても満足している。

代償として、所持金の殆どを使いきってしまったが。
またクエストなどをこなして、金策しなければならぬだろう。
と、そこで唐突にシステムメッセージが流れた。

―風と水の街《ツヴァイ》が解放されました。

詳細は公式ホームページにてご確認下さい。

<http://www.s>

ふむ、二日目ですでに次なる街が見つかったのか。

流石、攻略ガチ勢の熱量は素晴らしいものがある。

この調子で、話に聞く王都《フィーア》までの道を開拓して頂きたいものである。

ともあれ、終始他力本願という訳にもいかないし、機会があれば、少しは攻略に貢献してみてもいいかもしれない。

「ともあれ、まずはレベルだな」

現在のレベルは十五。

新しい街が解放されて、人は次第にそちらへと流れていくだろうし、そろそろ冒険者ギルドのクエストにも空きが出てきた頃であろうか。

そう思いギルドへと顔を出してみると、案の定人はまばらであった。

「あ、タマモ様、先日は失礼しました」

と、どうやら今日の受付は先日お世話になったライムさんのようだ。

カウンターから覗く見知った顔に、軽く頭を下げた。

「どうも。ようやく落ち着いてきましたかね、お疲れ様です」

扇で風を送ってあげると、ライムさんは気恥ずかしそうに笑う。

「ありがとうございます。それが、先ほどまではもつと来訪者の方々に混み合っていたのですが、皆様突然目の色を変えて出ていかれてしまいました」

ああ、成程。

大方、新しく解放された街に向かったのだろう。なんとも現金である。

さもありなん。ボクだってレベルさえ充分に上がっていれば、同じ行動をとっていただろう。

「《ツヴァイ》までの街道が解放されたそうなので、みなそっちへ興味が移ったんでしょう。お恥ずかしながら、冒険者としての性なもので」

「ああ、そうだったんですね。街道で巨大なモンスターが暴れているそうなので、その討伐を依頼していたのですが、そういう事でしたら、討伐は無事に完了したようですね」

詳しく話を聞くと、どうやらそれはこの辺り一帯のヌシ、ともいえる大物だったそうなの。

名前は『デスナイトウルフ』。

なんとも大仰な名前ではあるが、その正体はナイトウルフの群れを率いる巨大な狼らしい。

まあ、討伐されてしまった以上、ボクにはもう関係の無い事である。
「ところで、本日はどういったご用件ですか？」

佇まいを直し、茜色の瞳がこちらを見上げてくる。

「ああ、実は手頃なクエストを探していて、そろそろ受けられる依頼も増えてきたかな、と思ひまして」

「あー、昨日までは、張り出した傍から無くなってましたからねえ」
そう言つてライムさんは苦笑いを浮かべ、手前の引き出しを開く。

出てきたのは、昨日も目にした《真実の石板》だった。

「お手数ですが、現在のタマモ様のステータスを確認させて頂いても宜しいですか？」

「構いませんよ」

促され、昨日と同じように手を石板の上に置く。

表示されたステータスに目を通しながら、ライムさんは引き出しから幾つか紙の束を取り出し、一枚一枚確認していく。

「もうレベル十五ですか、やはり来訪者の方々は素晴らしい才能をお持ちですね。さて、この依頼などは如何でしょうか」

差し出された依頼書を受け取り、確認する。

―クエスト【増えすぎたスライムの駆除】

始まりの草原に生息するレッサースライムが大増殖の兆しをみせている。

脅威となる前にレッサースライムを一定数駆除せよ。

達成条件：レッサースライムを二十匹撃破。

報酬：【傷薬】、1,000G

ふむ、レベリングを兼ねて進められそうだし、報酬もまあ悪くはない。

ボクのレベルを鑑みて無理のない難易度であるし、妥当だろう。

「ありがとうございます。この依頼、受けさせて頂きますね」

「はい、依頼を達成された際は、またこの窓口にご報告をお願いします」

依頼書を所持品欄にしまうと、クエスト受領の旨がメッセージで表示される。

さて、そうなる目指すは始まりの草原である。

相手はレッサースライムであるし、さくつと終わらせてしまおう。

「ああ、タマモ様」

いざ行かんと踵を返したところで、背後から声がかかる。

何事かと振り向けば、ライムさんはふわりとほほ笑んで、言った。

「新しいお召し物、とてもお似合いですよ」

「……はは、ありがとうございます」

何というか、ずるいなあ、と思った。美人は何をやっても様になる。気恥ずかしくなりながら冒険者ギルドを後にし、始まりの草原へ。フィールドを駆け回るプレイヤーの数も、心なしか少なくなっているように見えた。

さて、まずは新武器の使い勝手を確認しなくては。

丁度近くにレッサースライムがいるのを見つけ、扇を開く。

そのまま下から上へと大きく振り上げて、スキルを発動させた。

【鎌鼬】

鳶とんひの声に似た甲高い音と共に、風の刃がレッサースライムを切り裂く。

その威力はHPバーをぐぐつと減少させ、減少させ――

「あー……」

全損させた。

光となつて散っていくレッサースライムを遠目に、それもそうかと一人納得する。

レッサースライムはレベルがまだ一桁の頃にお世話になっていたモンスターである。

レベルも上がり、装備も一新した今では、経験値もなおさらしょっぱい。

ともあれ、受けてしまったものは仕方がない。

当初の思惑とは違ってしまつたが、これはこれで楽しむ事としよう。

しかし、大体が一撃で沈んでしまうので、MPを回復させる時間を考慮してもどうしても暇を持て余してしまう。

仕方がないので、暇つぶしがてら片手でウェブブラウザを開き、公式ホームページをチェックしながらの作業である。

片手間で片づけられる、レッサースライムの心中や如何に。

「なるほど、新しい街は森の先にあるのか」

ホームページには発見された街の外観や特色などが、やや大雑把ながらも掲載されていた。

街のすぐ傍を大きな川が流れ、街中に幾つも風車が並んでいる。

実際に行ったことはないが、その佇まいはオランダに似通った部分が多い。

「お酒と魚料理が美味しい、か。まるでガイドブックだね」

《アイン》ものんびりとしていて暮らしやすい街だが、こっちはこっちで魅力的だ。

なんてやっている間に、気が付けばクエスト達成まで後一匹まで迫っていた。

「という事は、これで最後か」

二十四目となるレッサースライムを【狐火】で焼き払い、扇を閉じる。

直後、クエストの達成条件をクリアしました、の文字が浮かび上がった。

これで冒険者ギルドに報告すれば、いつでもクエストはクリアできる状態になったのだが、一旦街へ戻るのも手間であるので、レベリングはこのまま継続することにしよう。

ならば、狙うのは午前中に狩り続けたマッドワームが適任のような気もするが、ひたすら狩り続けた敵をまた相手にするのも、どこか味気ない。

「そうだ、ちよつと森まで行ってみようかな」

午前中、モミジさん達に話を聞いてみたが、あの森——《始まりの森》というらしい——の適正レベルは二十前後らしいのだが、まあ、何事も挑戦である。やれるだけやってみよう。

黒い尻尾を抱え、その感触を楽しみながらいざ始まりの森へ。

近くで見てもみれば、ぐっと身体を押されるような存在感を感じる。

日に明るく照らされた草原とは打って変わり、まるで別世界のような暗闇が広がっていた。

ききき、と聞いた事も無いようなおどろおどろしい鳥の鳴き声が響き、思わず肩を震わせる。

しかし、顔に浮かぶは微笑み。これこそ、異世界らしくて素晴らしいではないか。

「さてと、鬼が出るか蛇が出るか」

抱えた尻尾を一揉みすると、ボクは意を決して森の中へと踏み入っていく。

森の中は思っていたより湿度は低く、薄暗くはあるが、辺りが見えないほどではない。

その薄暗がりの中を、一步一步踏みしめるかのように進んでいく。妖狐族を選んだ為か、大きな耳は周辺の小さな音まで拾い、異常が

無いかを知らせてくる。

暗闇が怖い訳ではないが、何が飛び出してくるかわからない以上、警戒を怠るわけにはいかないだろう。

と、その時である。自慢の三角耳が、ひと際目立つ羽音を感じ取った。

扇を手にも、音のする方へ構える。

鳥、ではない。高速で断続的に続く低音。

聞き覚えのあるその音に、思わず足が一步後ろへと下がる。

やがて暗闇の中から、その音の主が現れる。

半透明の、見る人が見れば芸術的な羽。逆三角形の頭。ぎよろぎよろとした巨大な目は、小さな目が集まって形を成した複眼で、巨大な顎がぎちぎちと嫌な音を立てている。額には二本の触角。その体は黄色と黒の縞模様で、お尻の半分ほどの大きさの胴体部分には、鋭い爪を持った多関節の足が計六本。

その姿は見間違うはずがない。ゆっくりと現れたのは、誰もが一度は見た事があるであろう昆虫、蜂であった。ただしミツバチなどの可

愛らしいものではなく、いかにも攻撃的なフォルムをした、オオスズメバチそのもの。

頭の上には、《ジャイアントビー》の文字。見たまんまである。

これには流石に背筋が凍る。悲鳴を上げなかっただけ、我ながらたいしたものだと思う。

言っておくが、ボクは蜂が大嫌いである。

小さい頃、家の軒下に蜂が大きな巣を作った事があったのだが、幼いボクはその生物がどれだけ危険か理解できず、不用意に近づいて数匹の蜂に追い回された事があるのだ。

大泣きして母親に助けを求めたその記憶は、今もなおボクの心に深々と傷を残している。

じり、とまた一步後退。

威嚇するように、蜂がかちかちと顎を打ち鳴らした。顎の間で火花が散ったのは、見間違いだと思いたい。

すり足で後退しつつ、盾にするように尻尾を前に。

【狐火】

直後、扇の効果で強化され、やや巨大になった火の玉が蜂の顔面に直撃する。

耳をつんざく、ガラスを引つかくような音は、蜂の絶叫であろうか。

しかし、それを確認している暇はない。

敵が怯んでいる隙に反転し、全力で森の外へ。

柄に合わない事このうえないが、あれ以上睨み合っていれば、自分の中で何かが崩れてしまうような予感があった。否、間違いなく色々と崩れていた。

気が付けば、ボクは始まりの草原でくずおれていた。

命からがらとは、まさしくこの事なのだろう。

「もう、森には絶対入らない」

肩で大きく息をしながら、ボクは心の中で固く誓うのであった。

お稲荷様と三人組②

さて、思い出したくもないあの事件が起きた日の翌日。そう、翌日である。

あれからボクは何とか冒険者ギルドまで辿り着き、手早く報告だけ済ませてさっさとログアウト。

その後は数時間不貞寝を決め込み、気分転換で散歩に出かけたりして一日を過ごした。

現在は始まりの草原の奥で、マッドワームを相手に憂さ晴らし中である。

「【鎌鼬】、【狐火】——チツ」

切り裂き、焼き払わん勢いで放った妖術を土に潜ることで躲され、思わず舌打ちする。

直後、足元から僅かに地響き。

それを受けてその場から飛び退くと、間髪入れずに先程のマッドワームが勢いよく地面から顔を出した。

そう、厄介な事にこのモンスター、敵が自身の射程範囲外にいると見るや否や、こうして地中を進んで距離を詰めてくるのである。

出合い頭にマッドワームはその長い体を鞭のようにしならせて、こちらの脇腹に一撃を加えてくる。

僅かな衝撃が走り、HPバーが減少する。

だがこちらもただではやられはしない。半分を切ったMPを消費し、置き土産とばかりにその頭に【鎌鼬】をお見舞いする。

それがクリティカル判定となったのか、風の刃は残ったHPバーを削り切り、マッドワームはその身を光の粒子に変えた。

そして鳴り響く、レベルアップを知らせるファンファーレ。

「これで十九か。随分と狩ったなあ」

所持品欄を確認すると、出るわ出るわマッドワームからの戦利品の数々。

一番多いのは【マッドワームの肉】だが、中には銅や亜鉛などの鉱石が幾つか。

これは土を食べて成長するミミズの生態になぞらえて、体内にこういった鉱石を蓄えている、といったような設定があるのだろうか。ともあれ、このままでは所持品欄を全て埋め尽くしそうな勢いなので、そろそろ街へ戻って整理してしまおう。

ウィンドウを閉じ、帰路へ着く。

その時、フレンドからのメッセージの受信を知らせる電子音が響いた。

先日フレンド登録したばかりのモミジからだ。

―送信者：モミジ

件名：今日よかったら

こんにちわ、一昨日ぶりだね！

突然だけど、今日のお昼からなんだけど予定空いてるかな？

実は私達三人で《ツヴァイ》に向かう事になったんだけど、タマモさんも良かったら一緒にどうかなって。

お返事待ってます！

ううむ。

思わず唸ってしまう内容である。

風と水の街《ツヴァイ》には、正直興味がある。

レベルも十九になり、始まりの森に生息するモンスター相手とも互角に戦えるだろうし、ボクよりもレベルが高いであろう三人とパーティを組んで臨めば、比較的安全に《ツヴァイ》まで向かう事が出来るだろう。

だが、脳裏に過ぎるのはあの光景。

独特な羽音、攻撃的なフォルム、打ち鳴らされる顎の音。

苦い経験と共に浮かび上がった姿にぶるりと身を震わせて、モミジへの返信を打ち込んでいく。

―送信者：タマモ

件名：RE：今日よかったら

予定なら問題ない。

是非ともご一緒したいのだが、《ツヴァイ》に向かうにあたって幾つか相談したい事があるのだけれど、一度会えないだろうか？

さしあたり、都合の良い場所と時間を教えて欲しい。

送信、と。

さて、返信を待っている間にアイテムの売却を済ませてしまおうか。

所持品欄を圧迫しているアイテムを処分するために、幾つかのお店に顔を出していると、またメッセージの着信音が。モミジからだ。

返信内容は、今自分達も街で買い物をしているところなので、噴水広場で合流しよう、という内容のものであった。

こちらも程よくアイテムの処分が終わったところであつたので了承の旨を返信し、噴水広場へと向かう。

ちなみに、鉱石系のアイテムが割と良い値段で売れたのだが、どうやらプレイヤーの間で徐々に需要が増えていくらしい。生産職のプレイヤー達も、めきめきとレベルを上げてきているのだろう。

これは、ボク好みの装備品が店頭に並びだすのも、そう遠くないことなのかもしれない。

そんな僅かな期待を胸に噴水広場に到着すると、先に到着していたらしい三人組の姿が目に入った。

皆、前に会った時とは服装が変わっている。どうやらレベルは順調に上がっているようである。

待たせてしまったかなと、少し申し訳無くなりながら三人の元に向かうと、モミジが大きく手を振って迎えてくれた。

「やつほ、タマモさんこんにちはー！」

「こんにちは。こちらの都合で呼びつけてしまい、申し訳ない」「気にしないで。丁度僕たちも暇してたし」

そう言って爽やかな笑顔を浮かべるハヤトの後ろで、薄く笑みを浮かべてコタロウが腕を組んだまま、ひらりと手をかざした。

「よう、相変わらず無職なんだな」

「はは、やはりどうも気が乗らなくてね」

と、三人組の姿に僅かな違和感を覚え、首をかしげる。服装以外には特に目立った変化などはないと思うのだが。

ハヤト、モミジの順で確認していき、コタロウのところでああ、と納得し手を打った。

記憶にあるコタロウの姿とは細部が異なり、体格はよりがっしりと、銀色の毛並みの中に黒い模様が浮かび、手足は僅かに大きくなっているように見える。

しばし思考し、やがて一つの結論へと行きついた。

「成長期？」

「どうしてそうなる。レベル二十になったら勝手にこうなったんだよ」

「どうやら、種族によって色々とイベントが起こるみたいなんだ」

コタロウの種族、ワーウルフ族の場合は筋力値にボーナスが入ったそうだが、人間族の二人はハヤトが生命力と筋力、モミジは知力と精神力にボーナスが入ったそうなので、プレイヤーの種族や職業、戦闘時の行動などによって変化するのではないか、というのが三人の見解であった。

ううむ、ではボクの場合は魔法攻撃などに補正がかかる知力値にボーナスが入るのだろうか。

しかし、外見の変化に関しては人間族以外の種族に限るらしく、公式ホームページからアクセス出来る掲示板の方でも、様々な報告が相次いでいるそうだ。

ちなみに妖狐族の変化に関しては、あえて訊かないようにした。大体の予想も出来るしね。

「しかし、人間族だけ外見が変化しないというのは、賛否分かれそうだね。」

「その分、二つのステータスにボーナスが入るようにはなってるみたいだけだね。まあ、合計値は他種族より少し多いぐらいだけど」

顎に手をやりそう漏らすと、ハヤトがそう答えた。

まあ、一定のレベルに上がった途端ムキムキになるハヤトやモミジ

も見たくないしなあ。

ドワーフ族とかであれば、突然髭が伸びたりするのだろうか。それはそれで面白い。

と、話が逸れた。

「ところで、相談の件なのだが――」

ボクは昨日の出来事を、包み隠さず三人に話した。

勿論若干の恥ずかしさはあったが、どのみちあの森はいつか通過しなくてはいけないフィールドである。特に攻略の進みが著しい今、一時の恥などで二の足を踏んでいる場合ではない。

すると、返答は意外と呆気の無いものであった。

「それなら心配ないよ。今回はこの街から伸びる、比較的安全な道を進む予定だからね」

どういう事かと尋ねてみれば、《始まりの森》には大きな街道が一本走っており、そこは比較的モンスターの沸きも少なく、レベルも低いそう。先日討伐されたボスモンスターが封鎖していた街道が、丁度この道である。

逆にその道から逸れた場合はややレベルの高い相手、件のジャイアントビーやら、ブラックウルフが沸くようになり、難易度が少し上がる。まあ、レベル二十前後のパーティであれば、それほど脅威ではないらしいのだが。

「勿論全く遭遇しない訳ではないけど、そもそも今はプレイヤーの往来が激しいからね。定期的に有志のプレイヤーが駆除してるみたいだし、大丈夫だと思う」

なんともありがたい話である。

「でも意外。タマモさんってなんでも平気な人だと思ってた」

「恥ずかしい限りだけれど、蜂^{あれ}だけはどうしても、ねえ」

「仕方ないよー、私だって虫系はダメだもん。特に足がたくさんあるやつとか、こう、ぞわーっとする!」

「掲示板でも沸いてたぜ、森のモンスターに関しては。運営の力の入れ具合がおかしいってな」

べえ、と舌を出しながらモミジが苦い顔をして、笑みを押し殺しな

がらコタロウが続いた。

まあスライムから始まり、まだ愛嬌の感じられたミミズを出した後
のアレであるので、話題になるのはある意味当然ではある。

涙誘う恋愛映画だと思っていいたら、実はゾンビが闊歩するB級ホ
ラー映画だったような、理不尽ともいえる急展開ぶりである。

「これから先が思いやられるなあ」

ぽつりと漏らし、思わず苦笑いが浮かぶ。

蜂だけであれであるから、これから先登場するであろう虫系のモン
スターの事を考えると頭が痛くなる思いである。

ともあれ、これで《ツヴァイ》へ向かうにあたっての心配事はなく
なった。

「そういう事なら、喜んで同行させてもらうよ」

「やった！」

ぐつと拳を握るモミジ。

「ただ、ジャイアントビ^っーが出てきたらボクは逃げるからね」

「どんだけだよ……」

嫌いなものは嫌いなものだから仕方がない。

四人がかかりなのだから、減多な事では負ける事はないというのは
理解できるのだが、それとこれとは別物である。

「それじゃあ、そうだな、十三時にまたここに集合、という事で」

メインメニューで時刻を確認しながらハヤトが言う。見れば、時刻
は十一時を少し回ったところだった。

これなら昼食の済ませた後でも、幾つか消耗品の準備をする時間ぐ
らいは残るだろう。

「そういう事なら、ボクは先に昼食を済ませてこようかな」

「私もご飯ー」

「あ、ログアウトの前に、フレンド登録だけいいかな？」

さて昼食は何にしようかと思っていたところで、ハヤトから声がか
かった。

ぽこん、とメッセージが表示される。そこにはフレンド申請の通知
が二人分。

言わずもがな、ハヤトとコタロウである。

無論、ノータイムでYESのボタンをタッチし、フレンドリストにめでたく三名の名前が並ぶ。

と、メインメニューを操作していたコタロウがぽつりと漏らす。

「そういやあ、身内以外でフレンド登録したのタマモが初めてか」

「そういえばそうだね。まあ、ネットゲするのもこれが初めてだしね」
でもこんなに早くフレンド登録するなんて思わなかったよ、とモミジが言う。

どうやら、当初はしばらく三人だけで遊ぶ予定だったらしい。

「タマモさんの場合、意外と話しやすいところもあるし、不思議と親しみやすいところがあるのも大きいかな」

「ああ、まあ同年代だろうしね、恐らく」

顔立ちから判断するに、三人とも恐らく高校生ぐらいの年齢だろう。

コタロウだけは見た目がまるきり狼なせいで、いまいち判断し辛いところがあるが。

と、どこかおかしなところがあつたのか、三人はこちらに視線を向けたまま、ぴくりとも動かなくなってしまった。

一、二、きっかり三拍の後――

「えっ？」

まるで信じられないものを見るような目で、なんとも間拔けな声が三人の口から漏れた。

ふむ、そういえばそっちはまだモミジにも言っ
てなかったか。

なんとも気まずい心地になりながら、ボクは頬をかくのだった。

お稲荷様と新天地

「いや、まさかタマモが年下だったなんて」

「てつきり年上だと思ってたぜ」

ボク達は今、始まりの森へと続く街道を歩いていた。

出発前に明らかになった事実には三人は戸惑いを隠しきれないようで、しげしげとこちらの顔を眺めては、ははあ、と声を漏らしている。

そんなに驚くような事なのだろうか。

「まあ、キャラメイクの際に身長は少しいじったが……。そこまで老けて見えるのかい？」

「いやー、見た目というか、雰囲気とか……。ほらほら、話し方も落ち着いてるし！」

少し前を歩いていたモミジがこちらに振り向き、笑みを浮かべる。

まあこういった事には慣れているし、ボク自身そういった事は気にしない性質たちなので別に構わないのだが。

他のフルダイブ型MMOでも、同じような反応をされた事があるしね。

「あの、ごめんなさい。もしかして怒ってる……？」

突然の謝罪に首を傾げる。はて、謝るような事を言ってしまったのだろうか。

丸く見開かれた瞳は、ボクの後ろへと向けられている。

怪訝に思ってから後ろを確認すると、そこにはまるで地面を掃くように左右に暴れる尻尾が一本。

それはまるで、何かを抗議しているようにも見えた。

ふむ、と顎に手を添え、一呼吸。

「いや、これは別に怒っているという訳ではないから、どうか安心してほしい」

放っておくとじたばた暴れ出す尻尾を右手で胸に抱き、押さえつける。

やがて大人しくなったので一安心だが、小さな感情の波に対してこ
うも過剰に反応されてしまうと、なんともやり辛い。

そうこうしているうちに、ボク達は始まりの森の入口へと辿り着いた。

鬱蒼とした森林を切り分けるかのように、踏み固められた土の道がずっと伸びている。

「この道をまっすぐ進めば、ツヴァイの街だ。準備はいいかな？」

「そんな心配しなくても、ボクはいつでも大丈夫だよ」

足が竦んで動けない、とても思われているのだろうか。

振り返って声をかけてくるハヤトに軽く手を振って答えると、彼は一つ頷いて森へと踏み込んでいく。その背中を追って、ボク達も森の中へ。

先日森へ入った際は薄暗く、不気味な雰囲気があったのだが、この街道上は木漏れ日が辺りを照らし、風通りも良いのでそういった印象は全く受けない。

道の途中で何人ものプレイヤー達とすれ違い、中には芋虫のようなモンスターと戦闘している姿も見えた。

「あれはキラキヤタピラーだ。体力が多いけど、単調な攻撃しかしてこないから経験値稼ぎにはうってつけの相手さ」

「成程。街道の安全確保と、経験値稼ぎを兼ねている訳か」

なんとも上手くできているものだ。

そうして森の中を十分程歩けば、呆気なく森の出口が見えてきた。

先日あの苦労は一体何だったのかと、少し拍子抜けである。

「さて、このまま森を出ればすぐにツヴァイの街なんだけど、折角だし少し経験値でも稼いでいこうか」

「お、いいね。私ももうすぐレベルアップだし」

「それはこちらも助かるのだけれど、蜂は止してくれよう？」

「出入り口付近には沸かねえから、大丈夫だろ」

各々が武器を構える様を見ながら、少し億劫になりながら扇を取り出す。

そこで、モミジが目を輝かせながら飛びついてきた。

「おお、武器変えたんだねー。というか、それって扇？ おしやれー！」

「市場通りの露店で偶然見つけてね。性能もそこそこで気に入っているんだ」

「へえー、いいなあ。よかつたら、後でそのお店教えて貰っていい?」

「掘り出し物のようだったし、もう並んでないかもしれないよ?」

ボクがそう言うのと、モミジはがつくりと肩を落としてしまう。

その様子を見た他の面々が、呆れたように笑った。

「そもそもオマエ治療士^{ヒール}だろ。装備してもあんま効果ねえだろ。」

「分かってないなあ、装備は性能だけじゃないんだよー」

ちちち、と指を振りながらモミジが胸を張ると、コタロウはそんな彼女に呆れたような視線を向けながら、あつそ、と手を振る。まあ、モミジも年頃の女の子だし、華やかな装備に目が行くのは仕方がないだろう。

丁度その時、敵を発見したハヤトがこちらに声をかけ、背にした盾を構えた。その視線の先には、一匹のキラークヤタピラーが。

「四人だとそんなに時間もかからないだろうし、さくつとやつちやおー!」

「はいはい、それじゃあいくよ!」

モミジが杖を振り上げ、前回と同じように補助魔法^{バフ}を全員にかけていく。

きらきらと光が降り注ぐエフェクトを合図にハヤトが駆け出し、前に構えた盾をぶつけるように体当たりを放つ。後で訊いたところ、
「シールドラッシュ」というスキルらしい。

突進を横つ腹に受けて、キラークヤタピラーはガラスを引つかいたような悲鳴を上げてハヤトを睨み付けると、胴体に並んだ吸盤状の足を忙しなく動かしながら、お返しとばかりにその巨大な体をぶつけ始める。

「オラア!」

ハヤトが注意を引き付けている間にコタロウが側面へと回り込み、拳を挟み込む。

その拳には鋭利な刃が付いた武器が握られていた。あの形状は確か、ジャマダハル、だったか。

また珍しい武器を使っているなあ、と感心しつつ、後方から【鎌鼬】を放ち体力を削っていく。

一匹目を倒すまでにかかった時間は五、六分程度。

それに対して、手に入った経験値に関しては中々のものであった。

「やっぱり美味しいな、ここは」

「油断してヘイト稼ぎすぎるなよ」

互いに笑い合い、ハヤトが次なるモンスターの注意を引き、コタロウがその隙を突く。

攻撃を受け、減少した体力は定期的にモミジが回復し、余裕があれば自身も攻撃に参加していた。尤も、主な攻撃手段はその大きな杖を使つての殴打であるが。

それでいいのか治療術士。いや、そうするしかないのだろうけれど。

ともあれその連携はやはり見事なもので、あつという間にレベルアップである。

「お、上がったな」

「おめー!」

「おめでとう。これで二十だね」

ハヤトの言う通り、これでようやくボクもレベル二十、一区切りである。

そして予想通り、スキル取得のメッセージが表示された。

―初級妖術【塗壁^{ぬりかべ}】を取得しました。

初級妖術【塗壁^{ぬりかべ}】

自身の前方に土の壁を出現させる。

一定時間経過、あるいは一定量以上のダメージを受けると消滅する。

どうやら新しいスキルは攻撃用ではなく、防御や妨害に使えるものようだ。

これは意外と使い勝手がよさそうである。

そして、話題になっていた外見の変化であるが、それはすぐに訪れた。

「タ、タマモ、後ろ後ろー!」

始めに気が付いたのはモミジ。

そう言われて何事かと後ろを見やれば、そこには淡い光を放つ尻尾が。

内心ああやつぱり、という感想を抱きながら、その様子を見守る事数秒。

光が収まった後にあつたのは、あいも変わらずふわふわもふもふの我が尻尾。

それが、二本。

「おお、おおー!」

きらきらと目を輝かせるモミジが面白くて思わず笑みが漏れる。

予想通りの変化ではあったが、いよいよ妖狐らしくなってきたなあ。

能力値のボーナスに関しても予想通り、知力に入っていた。これで戦闘時の火力も少し上がり、経験値稼ぎもより効率的に出来るだろう。

だが、当のパーティメンバー達はそんな事はどうでもいいようで。

「ふわー、すっごいふわっふわだねー。あの、迷惑じゃなかったら、少し触ってもいい?」

「まあ、あまり強く握ったりしなければ構わないよ」

そう言つて二本に増えた尻尾を差し出すと、モミジは恐る恐るといった手つきでそつとそれに触れた。

初めのうちは強張っていた彼女の表情が、尻尾を撫で続けるうちにあつという間に解き解され、次第に蕩けるような笑みさえを浮かべ始める。どうやら、相当癖になる手触りらしい。ボクも後で堪能してみよう。

そして一応、尻尾もボクの身体の一部ではあるのだけれど、この子はそれを承知の上でこうしているのだろうか。それを指摘してみるのも一興ではあるが、気持ちはわからなくもないので、今はそつとし

ておく事にする。

「さて、それじゃあ次いこうか。コタロウ、モミジ宜しく」

「あいよ。おい、いい加減離れろやコラ」

「はっ、ぐ、ごめんなさい!」

コタロウに声をかけられ、ようやく正気に戻ったモミジが顔を赤くして尻尾から手を離す。

放っておくともげてしまうのでは、と心配になるほど激しく頭を下げる彼女をなだめつつ、ボクは笑った。

結局、ボクがレベル二十一、他三名がレベル二十五に上がったところで経験値稼ぎはお開きとなった。何だかんだと、結構な数を狩っていたように思える。

そして、改めて始まりの森突破を果たしたボク達を出迎えたのは、一面に広がる草原。

ここは丁度丘のような地形になっているようで、森を出ると同時に新たな風景を一望できる仕組みになっていた。

街道は森を出てしばらくすると石畳で舗装されたものになり、その道の先には石造りの防壁にぐるりと囲まれ、風車が立ち並んだ街が見える。

風と水の街《ツヴァイ》だ。

街の傍には大きな川が流れ、石で組まれた巨大な橋がかかっているのが見えた。

頬を撫でていく微風の感触に、はっと我に返る。

「やはり凄いな、このゲームは」

ぽつりと漏れた一言に、三人が頷く。

「こんな光景、僕も生まれて初めてだよ」

「誰も経験ないだろうよ、こんなファンタジーな景色を見たのなんか」

「絵本の中にいるみたい……」

瞳を輝かせ、そう零したモミジの気持ちが良くわかる。それほどまでに、目の前に広がる光景は幻想的で、美しいものであった。

どれぐらいそうしていただろうか。

誰ともなく踏み出した一步を合図に、ボク達は街へと向かい歩き出

す。

新たな出会いと冒険を求め、いざ、風と水の街へ。

ゆらりゆらりと揺れる二本の尻尾は、いつにもなく上機嫌であった。

掲示板①

【異世界へようこそ】TAW総合スレPart1【新情報求ム】

・ここはVRMMORPG【The Another World】の総合掲示板です。

・ガイドラインに抵触する内容の書き込みは禁止。

・マナーを守って利用して下さい。

・次スレは＞＞980を踏んだ人が責任をもって立てる事。

―中略―

199 名前 名無しの剣士

サービス開始からぼちぼち一週間だけど、お前らどうよ？

200 名前 名無しの魔法使い

とりあえずレベル二十までは始まりの草原

そっからはPT組んで森が安定。

201 名前 名無しの無職

ちなみにツヴァイの街周辺はだいたい二十五ぐらいから三十前後

までは行けそう。

ソロだともうちよい上か？

202 名前 名無しの拳闘士

ソロは地道に森で経験値稼ぐしかないな。

美味しいのは街道から逸れたとこにいる蝶々なんだけど、あそこ蜂も沸くんだよな……。

203 名前 名無しの弓術士

蜂なあ。

あいつ攻撃クソ痛いからなあ。しかも毒付き。

204 名前 名無しの剣士

ホント、なんで虫系のビジュアルあんなに拘ってるんだろうな。

まんまデカい蜂だからなアレ。

205 名前 名無しの盗賊

あんなまだマシだぞ。

森の奥に洞窟があるんだが、その蜘蛛なんてトラウマもんだぞ？

206 名前 名無しの魔法使い

k w s k

207 名前 名無しの盗賊

場所は街道の中間辺りから森に入って、南へ十分程進んだところ。中はかなり入り組んだ構造になってるんだが、詳しくは確認してない。

何故なら所々にヤツらがいたから。

208 名前 名無しの魔法使い

蜘蛛か？

209 名前 名無しの拳闘士

>>207

情報サックス。

というか、よくそんなとこまで進んだな。

207 名前 名無しの盗賊

>>208

あれはやばい。

まんまデカイ蜘蛛だった。しかもタランチュラ系な。

>>209

盗賊のスキルに【気配遮断】ってのがあってな。

発動中はアクティブの敵にも見つからなくなる効果があるんだ。

まあ物音たてたらばれるけど。

208 名前 名無しの魔法使い

うわあ（ドン引き）

209 名前 名無しの拳闘士

なる。そういうスキルもあるのか。

で、結果は？

210 名前 名無しの盗賊

蜘蛛見てびっくりしてばれた。後はわかるな？

211 名前 名無しの無職

あっ（察し）

212 名前 名無しの盗賊

無数の蜘蛛に集られるあの光景は悪夢だわ。
もう二度とあの洞窟には行かないと心に誓った。

213 名前 名無しの弓術士

皆あの森にトラウマ植えつけられ杉。

こないだも妖狐族の人が凄い勢いで逃げてきてたし。
ちよつと見てて可哀想だった。

214 名前 名無しの剣士

始まりの森に関しては初心者スレの方でも注意喚起が必要だな。
後で書きこんどくわ。

―以下略

【亜人種】種族掲示板その1【多すぎイ!】

・TAWの種族について語るスレ。

・ガイドラインに抵触する内容の書き込みは削除されます。

・マナー厳守!

・次スレは>>980を踏んだ人が責任をもって立てるべし。

―中略

416 名前 名無しの人間族

というか、ホント種族大杉ないかこのゲーム。

417 名前 名無しのワーキヤット族

現状判明してる分で

人間族↓普通の人間

小人族↓いわゆるハーFRING

エルフ↓ファンタジーではお馴染み

ドワーフ↓同上。男性限定種。

ワーキヤット↓猫耳

ワーウルフ↓犬耳

ワーラビット↓兎耳

妖狐族↓狐耳

鬼族↓額に角。力が強い。

魔族↓頭に角。背中にコウモリや鳥の羽。

ハーピー族↓手が翼になっている。現時点では飛べない。

リザードマン↓二足歩行のトカゲ

オーク↓二足歩行の豚

ゴブリン↓ブサイクなホビット

ざっとこれぐらい？追加修正よろ。

418 名無しの妖狐族

リザードマン以下の説明の雑さよ。

419 名無しの人間族

>>417

とりあえずお前さんが嫌いな種族はわかった。

てか、レベル二十で人間族だけ変化無しってどうよ？

420 名無しのエルフ族

私達もこれといって変化無しよー。

まあ耳が長くなったり筋肉モリモリになったりしなくて安心した。

421 名無しの小人族

小人族も同じだな。

まあその分ボーナスが他より大きいみたいだけど。

ちなみに器用値に入ってたわ。

422 名無しのオーク族

オークのワイ、体がさらにデカくなる。

なお道具屋に行ったら看板娘の女の子に泣かれた模様。

423 名無しのリザードマン族

奇遇だな、俺もだ。

424 名無しのゴブリン族

>>422

>>423

(・▽・)人(・▽・) ナカーマ

425 名無しの人間族

お前ら最低だな……。

426 名無しのオーク族

いやまさかNPCに泣かれるとは思わないだろw

ホントスンマセンでした……。

427 名無しのエルフ族

>>421

まあその数値も、最終的には何だかんだあつて誤差の範疇になりそうだけどね。

>>422

>>423

>>424

こないだシアちゃんが随分とベソかいてると思ったたら犯人アンタ達か。覚悟しときなさいよ。

428 名無しのゴブリン族

いやわざとじゃないんだけどね……。

種族差別じゃね？

429 名無しの小人族

いやいや、自分の種族からして子どもウケ悪いってわかるだろ。

まあその辺も、地道にコミュニケーション重ねていけば改善されるんじゃない？

430 名無しのワーキャット族

そういえばこの間、道具屋に行ったら妖狐族の人がいたんだけどさ、その人随分とシアちゃんと仲良く遊んでたなー。

431 名無しの人間族

ああ、たぶん俺も見かけたわその人。

初日に市場で一緒に買い物してたぞ。

432 名無しのエルフ族

クエストか何かかしら。

でも各NPCに好感度が設定されてるのは確実みたいね。

433 名無しのワーキャット族

つかあの人、女の人なのかなー、男の人なのかなー。

434 名無しの魔族

男の娘と聞いて

435 名無しの人間族

誰も言っていないので帰って、どうぞ。

436 名無しのハーピー族

いつになったら空は飛べるんですか……。

437 名無しのドワーフ族

運営を信じろ。

きつと道はあるはずだ。

―以下略

お稲荷様と香辛料

風と水の街《ツヴァイ》

幾つもの風車が建ち並び、傍を流れるフュマール大川の水音に心癒される美しい街。

そんな街をぐるりと囲む防壁の傍で、ボクは立ち尽くしていた。目の前には、美しい金色の絨毯が、爽やかな風を受けて波打っている。

その光景はとても幻想的で、まるで一枚の絵画のようだ。

思わず息を呑むその光景の正体は、街の周囲に広がる小麦畑。

たわわに実った麦穂が揺れ、その向こうで商人を乗せた荷馬車ががたことと通り過ぎていく。

「なんて美しいんだろう」

ごくりと生唾を飲み込んで、ようやく言葉を絞り出す。日本ではまずお目にかかれない光景に、柄にもなく気分が高揚しているようだ。ともあれ、いつまでもこうしている訳にもいかない。

後ろ髪を引かれる思いでその場を後にすると、街へと向かう。

ちなみにハヤト達とは街の入り口で別れたので、今は一人だ。モミジは随分と渋っていたが、やはりボクは一人でのんびりと行動する方が性に合っている。

街に入りまず目を引いたのは、所々に立ち並ぶ風車達の姿。悠然と佇むその姿を横目に、石畳の道に行く。

さて、まずは情報収集である。

冒険者ギルドに顔を出してもいいが、どうせ手軽にこなせるクエストは他のプレイヤーに持っていかれただろうし、急ぐ必要もない。

他に情報が集まるような場所となれば、まあ酒場が定番であろう。幸いな事に、お目当ての店はすぐに見つける事が出来た。

泡立つジョッキのマークが描かれた看板をくぐると、まだ日も高いにもかかわらず、数人の男達がジョッキ片手にテーブルを囲んでいる。

NPCのようだが、どうやら冒険者らしい。それぞれ指に【冒険者の指輪】を装備しているのが遠目に確認出来た。

「いらつしやい。悪いな、ボンクラ連中のせいで昼間っから酒臭くてよ」

比較的静かなカウンター席に腰を下ろすと、その向こうから頭を剃り上げた強面のマスターが、苦い顔をしながら声をかけてきた。

「おいマスター、ボンクラってのはどういうこつた!」

「そうだそうだ、こちとらなあ、やつとこさ一仕事終えたところなんだよべらんめえ!」

「やかましい! 昼間っから酔っぱらってる連中なんてなあ、ボンクラで十分なんだよ!」

背後から響く男達の声に、額に青筋を浮かべながらマスターが返す。

「すまねえなお客さん。注文は?」

「いや、繁盛しているようで何よりだ。とりあえず、この焼き魚とスープのセットを」

「あいよ、ちよいとお待ちを。お前ら、迷惑かけんじゃねえぞ!」

メニューから適当なものを頼むと、マスターは白い歯を見せて笑い、男達を一睨みした後厨房へと入っていった。

そして案の定、マスターの姿が見えなくなった途端に騒ぎ出す男達。

傷だらけになった革の鎧を着こんだ髭面の男がどかりと隣へ座り込み、酒気たつぷりの息を吐いた。正直あまり近付かないで欲しいのだが……。

「ようようあんちゃん、いや、姉ちゃんか? まあいいや、見ない顔だが、この街は初めてかい?」

「丁度今街に着いたばかりだね。《アイン》から森を抜けてきた」

どうやらかなり出来上がっているようだ。

男はリングのように真つ赤になった顔で木製のジョッキを呷ると、勢いよくカウンターに叩きつけた。

この匂いは、ビールだろうか。

「おお、てことはまさか、噂の来訪者様か！　どうだ、良い街だろうここは！」

「ああ、とても美しくて、素晴らしい街だと思うよ」

「そうだろうそうだろう！　にいちちゃん話がわかるなあ！」

上機嫌にばしと肩を叩いてくる男に内心少し辟易しつつも、見たところそれなりにベテランの冒険者のようであるし、情報入手するにはうってつけかと調子を合わせる。

相手に悟られないよう、尻尾は先ほどから膝の上である。

ところで、と男の前に手をかざす。

「ボクは陰陽師、という職業の事を調べているんだが、聞いた事はないかな？」

静かに半歩分ほど椅子をずらして尋ねてみれば、男は顎に手を当ててしばらく考え込むと、もう一度ジョッキを呷り、白い泡が付いた口をゆっくりと開いた。

「ううむ、陰陽師なあ。随分と前に王都から来た商人がそんな事を言ったような気がするが」

「狐のあんちゃん、アンタ陰陽師になりたいのかい」

首を捻る男の後ろから顔を出したのは、先ほどまでテーブルに座っていた仲間の一人。

その表情と声色に、ボクは鼻につくアルコールの香りにも構わず男の方へと身を乗り出す。

「その様子だと知っているみたいだが、詳しく聞いても？」

「おうよ。ワシは貿易都市《ドライ》の生まれなんだが、若い頃に《ジパング》、ああ、東の海にある島国なんだが、そっから来たサムライっちゅう剣士に聞いてなあ」

ドライ、ジパング、サムライ。

サムライとは、まず間違いなくあの“侍”の事であろう。

一度に飛び出してきた重大な単語の数々に思わず面食らってしまった。

どうやらこの酒場に立ち寄ったのは大正解だったようだ。

「それで、侍はなんと？」

「まあ、そのサムライには仲間が何人かおったんだが、そのうちの一人にこれまた変わった呪い師でなあ」

いつの間にか酒場の中はしんと静まり返り、誰もが男の昔話に耳を傾けていた。

その呪い師は何者なのかと男が問うとサムライは、あれは陰陽師とあって、呪いをかけたり吉凶を占ったりする者である、と答えたらしい。

更にサムライは、陰陽師の力は侮りがたく、我が国の帝も重宝しているのだと語ったという。

「成程、成程」

話を聞く限り、おおよそ日本に伝わる陰陽師と立場は変わらないようだ。

男の話が何年前の事かはわからないが、こうしてNPCがヒントを示しているのだ。

《ジパング》という国に渡る事が出来れば、陰陽師への道は開かれるに違いない。

「はいよ、焼き魚とスープのセットだ。なんだ、随分と気が合ったみたいじゃねえか」

「はは、おかげ様でね。マスター、この酒臭い賢者達にビールを。お代はボクが出すよ」

「おお、にいちやん太っ腹だねえ！」

「なに、素晴らしい話を聞かせてもらったお礼だよ」

そうしてまた店の奥で酒盛りを始めた男達を見て頬を緩めつつ、焼き魚に舌鼓を打つ。

程好く塩味が効いた、柔らかな白身魚である。

マスターに尋ねてみれば、フユマール大川で獲れた魚だという。

時間があれば、川で釣りに興じてみるのもいいかもしれないな、と思いつつ、空になった器に手を合わせて席を立つ。

「マスター、ご馳走になった。またお邪魔するよ」

「おう。今度は日が沈んでから来な、上等な酒を飲ませてやる」

「はは、楽しみにしてるよ」

「あんちゃん、また一緒に飲もうな！」

まあ、まだお酒が飲める年じゃないんだけどね。

内心でそう付け足しつつ、手を振って店を出る。

少し歩き、風車の見える公園で一息つきつつ、モミジ達へメッセー
ジを送信していく。

内容は勿論、先ほどの酒場の件だ。

誰か他のプレイヤーが情報を掲示板などに書き込んでいれば無駄
になってしまいが、もしもまだこの話がどこにも出ていなかった場合
は、多くのプレイヤーにとって青天の霹靂となる事は確実である。

やがて先程送ったメッセージの返信が届く。

そこには、この情報はもう掲示板に書き込んだのか、もし手間であ
るなら、こちらで書き込んでしまってもよいか、といったことが書い
てあった。

こちらとしてもその方が助かるので、そのようにメッセージを送
り、ベンチから立ち上がる。

「さて、これで目的は定まったな」

《ジパング》という国に渡るにはまず、貿易都市《ドライ》への道
を解放する必要がある。

しかしこの《ツヴァイ》の例から考えると、その道には強力なボス
モンスターが配置されている可能性が極めて高い。

ソロでの撃破は無理だろうが、こういった行動パターンなのかを調
べ、報告するぐらいはできるだろう。それで少しでも早く攻略される
のなら、やらない手はない。

ともあれ、折角新しい街を訪れたのだ、まずはこの街を堪能しなけ
れば失礼というものだろう。

そうやって街を歩いていると、所々にカボチャやカブ、麦の束が積
まれているのが目に入った。

どうやら売り物でもないようだし、中にはハンカチなどで飾りつけ
をされている物もある。

「少しいいかな。何故カボチャや麦が道に積まれてるのか、教えて欲
しいのだけど」

「ああ、そりやあ収穫祭が近いからな。その準備だよ」

大きなカボチャを担いだ男性に声をかけると、彼は額の汗を拭いながらそう教えてくれた。

詳しく聞いてみると、どうやらこのカボチャ達は豊穡の神様への捧げ物であるという。

祭りとなるとNPC、プレイヤー問わず大勢の人が集まるだろうし、かなり賑やかになるだろう。

そして、人が集まれば様々な物品も集まる。

普段とは比べ物にならない数の露店が並ぶだろうし、そこにボク好みの品が無いか見て回るのも、また一興である。

祭りが行われるのはゲーム内時間で明日の夜。

もし欲しい物があつた時にお金が足りない、などと情けない事態に陥らないよう、少しでも稼いでおくか。

所持金をちらりと確認し、一路冒険者ギルドへと歩を進めた。

なお、突然掲示板に書き込まれた侍や《ジパング》の情報が、一部のプレイヤー達を歓喜の渦に巻き込み、こちらはこちらでお祭りのような騒ぎとなるのだが、それはまた少し後のお話。

祭りの夜が、やってくる。

お稲荷様とお祭り騒ぎ

美しい星々の元で、賑やかな楽器達の音色が響き渡る。

アコーディオンにカスタネット、軽やかな音楽に合わせながら、民族衣装に身を包んだ若い女性が華麗なステップを刻む。

爆竹が弾ける音に、酒を酌み交わす男達の笑い声。

闇夜をかがり火で払いのけ、祭りの夜がやってきた。

「おおー、盛り上がってるねー!」

「モミジ、はしやぎ過ぎてはぐれないようにね」

辺りを忙しく見回すモミジに、困り顔のハヤト。

コタロウも誘ってみたのだが、バイトの時間と被っているとの事で今回は不参加となった。

立ち並ぶ屋台の数々を眺めながら歩くボク達の傍を、子ども達が駆け抜けていく。

「もー、そんな子どもじゃないってばー!」

頬を膨らませながらそう言うものの、その両手にはリング飴とわたあめがしっかりと握られており、下手をすれば子どもよりもはしゃいでいるのではないかと思ってしまう。

ともあれ、ボク自身もモミジの事を馬鹿には出来ないのだが。

キャラメルでコーティングされたナッツを口に放り込みながら、騒がしい二人の後を追う。

「二人とも、そんなに急がなくても屋台は逃げないよ」

「でもでも、こんなにいっぱいお店があるんだよ? 急がないとお祭りが終わっちゃうよ!」

そんな馬鹿な、と一概には言えないのが困ったところだ。

何せ、見渡す限りの人、人、人。

割合としてはNPCの方が多いいえ、予想よりも賑やかな祭りの様子には随分と驚かされたものである。

「そういえば、例のジパング絡みの件だけど、掲示板でも随分と盛り上がってたよ」

「だろうね。ボクも話を聞いた時は気分が高揚したよ」

ハヤトの話によると、早速幾つかのクランが攻略に動き出しているらしい。

そこからの情報によると、やはりこのツヴァイと次の街ドライを繋ぐ街道上にボスモンスターが配置されていたようだ。

厄介なのはその場所。

それは道中に広がる大溪谷、そこにかかる巨大な橋の上にそのモンスターは陣取っており、撃破しなければ先には進めなくなっているのだとか。

「RPGではよくあるタイプのボスだね」

「今は攻撃パターンとかの検証が進んでるらしいけど、このレベル帯は蘇生手段も無いし、なかなか大変みたいだ」

まあ低レベル帯から蘇生魔法やら蘇生アイテムやらを出してしまうと、最悪戦闘不能になつてから即蘇生してのぐり押し、通称ゾンビアタックが通つてしまうからなあ。

最後のナッツを咀嚼しながら、空になった器を手近なゴミ箱へと放り込んだ。

「しかし、攻略クランが複数動いているとなると、ボク程度が動いても助力にはならないかもしれないね」

「え、タマモもボスモンスターに興味あるの？」

「いや、興味があるのはその先のジパングなのだけけど。でも、ボスモンスターがどういったものなのか見ておくのもいいかな、と思つてね」

攻略クランや野良のパーティに参加できるならそうしたいが、レベルリングもまともにできていない、しかも職業未選択のプレイヤーなど、どこも入れたがらないだろう。

ソロでもそこそこ戦えるのは魔物使いや召喚士デイマールあたりだが、流石にボスモンスターも単騎で倒せるほど壊れた性能ではないなあ。

「ご主人、これを一つ」

「あいよ、まいどありいー」

「まだ食べるんだね」

目についた焼き魚を一つ頼んでいると、背後から呆れたような声が

届く。

ゲーム内でどれだけ食べたところで現実世界の身体には影響はないのだから、別に構わないと思うのだけれど。

そうして鮎に似た魚の腹に噛り付けば、ぱりっとした皮と、その奥の柔らかな白身の食感に思わず頬が緩んでしまう。味はやはり鮎に似ていた。

「うん、美味しい。ご主人、これもフユマール大川で獲れたものかい？」

「おう、祭りの前に獲れたばかりのやつだ。どうだ、美味しいだろ？」

ゆっくりと味わって一口目を飲み込んで店主に訊くと、鉢巻を巻いた親父さんは白い歯を見せながら、親指を立ててそう言った。

「うん、これはいいよ、釣竿を手に入れて釣りをしてみたくなってきたなあ。」

しかし折角美味しい魚を釣り上げるのだから、どうせならそれを自分の手で美味しく調理してみたいものである。こう見えてリアルの方では中々の料理上手なのだ。

そうなると調理スキルも上げなければならず、ボスモンスターの攻略にも首を突っ込むとなると、これはいいよ時間が足りなくなってきた。

幾らなんでも四六時中ログインしている訳にもいかないし、どうしたものか。

贅沢な悩みに頭を抱えつつ、また焼き魚を一口。うん、美味しい。

「あ、タマモ、あれ見てあれ！」

そう舌鼓を打っていると、ぐいとモミジに袖を引かれる。

なんだなんだと連れて行かれた先には一見の屋台があり、その軒先にはこの街では珍しい和服が並べられ、鈴やかんざしなどの小物まで置いてあった。

「これ可愛いなー、ほら、どうかな？」

その中からモミジは小ぶりの花や蝶の柄が入った、桜色の浴衣を手にとって自分の身体に重ねて見せる。

それを見て、ほう、と一言。

いつも明るい彼女のイメージにも合っているし、とても似合っていると思う。

そうして顎に手を当てて一考すると、ボクの脳内に閃きが走った。浴衣を手にあれやこれやと品定めを始めるモミジに悟られないよう、すす、と静かに後ろで困り顔をしているハヤトの横まで下がる。「ほらハヤト、甲斐性の見せどころだよ。」

不思議そうに眉をひそめるハヤトの脇腹を小突いてやると、あろうことかこの男は未だに何を言っているのかわからないといった風に首を傾げた。

溜息を一つ。

「可愛い女の子がああしてどの浴衣が良いか選んでいるんだ。ここは横からすつと行って、一着買つてやるぐらいの男気を見せるところだろう」

「タマモつて、案外親父っぽいよね」

「失礼な。ボクは空気が読める狐なのさ」

人がお節介を焼いてあげているのだ、男であれば四の五の言わずに黙って行動すべきである。

どうせモミジの浴衣姿を見て、眼福に与^{あず}かるのは主に君達二人なんだから。

目の前の朴念仁を二本の尻尾を押しやって、屋台の方へ向かう。

ハヤトは相変わらずまごまごしていたが、やがてモミジの無邪気さに負けてあれやこれやと一緒に買って買い物を始めた。

それを横目にボクも物色を始める。

決して、自分がゆつくりと買い物を楽しみたいからハヤトをけしかけた訳ではないので、そこは誤解しないように。

「しかし、随分と色々あるね。これはどこからの品だい？」

「そりゃアンタ、ジパングからだよ。妖狐族のアンタなら、そんなぐらいわかるだろ」

「はは、これは失礼した」

そういえば、妖狐族は遙か東に国を構えている、といった設定だったか。

であれば、ジパングの文化についても詳しいと捉えられても不思議ではない。

頬をかきつつ色とりどりの商品へと目を通し、気に入ったものを手に取って勘定を済ませていく。

「あ、タマモってばまたソレ系の服買ってる。ホントに好きなんだね」「はは、なんせ妖狐族を選んだ理由も、半分は初期装備が好みだったからだしね」

店から少し離れ、メインメニューから装備品を変更していると、可愛らしい桜色の浴衣に身を包んだモミジが駆け寄ってくる。

にこにこと上機嫌な笑みを浮かべており、その後ろではハヤトがやや疲れた表情を浮かべているのが見えた。甲斐性を見せるというのも、時には大変な事なのだろう。

そうして装備の変更が終わり、ボクの服装も一変する。

全体的なシルエットとしては、初期装備の狩衣とほぼ同じ。

ただこちらは袴も含めて黒で統一され、袖には三日月の模様が入っている。

うむ、髪色や尻尾の毛色も合わせると本当に黒一色である。

装備品欄を確認し、満足げに頷いた。

【装備】

武器：あやかし扇

頭：小さな烏帽子えぼし

胴：黒染めの狩衣

脚：黒染めの袴

足：革の浅沓あさぐつ

装飾品：無し

ちなみにどの装備品も防御力の向上以外、さして恩恵はない。

先程までのチュニツクのような洋服も嫌いではないのだが、やはりこういった和服の方がボクの好みには合っている。種族的にも似合やすいものだしね。

数回袖を振り、地を踏みしめて着心地などを確認すると、うむと頷き扇を開いて一仰ぎした。

「服装は凄い陰陽師っぽいよね。服装は」

「はは、それを言われると痛いな」

何はともあれ、買い物も終わったところで祭りの続きである。

鼻歌交じりのモミジを先頭に街の中心部まで進めば、そこには藁わらで作られた巨大な人形が鎮座していた。

全体的なフォルムを見る限り、どうやら女性のようなのである。

周りには幾つもの貢物が並び、大勢の人がひしめき合う騒ぎの中でそこだけが神聖な空間であるかのような、不思議な雰囲気があった。

「おお、旅のお方よ、これは豊穰の女神であるウカノ様の像でしてな。これからも豊作でありますようにと願いを込めてあるのです」

その人形の傍で一息ついていた御老人が、ほほ、と笑いながらそう言った。

ウカノ、といえば連想するのはお稲荷さんで有名な宇迦うかの之御魂神みたまのかみであるが、恐らくはそれを元ネタとしているのだろう。

しかし、彼の神様の前に狐のボクが立っていると思うと、なんとも恐縮してしまう。

「ほえー。やっぱりこの世界にも神様っているんだね」

「始まりの街にも教会はあったしね。どんな神様を信仰しているのかは聞いた事がないけど」

その時である。

三人で肩を並べしばらく女神像を見上げていると、突然その全身が淡い光を放ち始めたのだ。

何事か、と咄嗟にハヤトがボク達の前に飛び出して身構えた途端、巨大な女神像から立ち昇った光はしだいに集まり、形を成し始める。それは人影だった。

長い髪を波立たせた、ワンピースのような衣装を纏った女性。

それが豊穰の女神である事を理解するのに、そう時間はかからなかった。

だが、かの女神が降臨しているというのに、周りのNPC達はまる

でそれが見えていないかのように無関心で、先程の御老人もその足元で茶なんかを飲んでゐる。

どうやら、プレイヤーだけが認知出来るイベントらしい。

『愛しい、愛しい我が子よ、汝らの旅路に祝福を』

一言。

澄み渡るような、身震いするような声であつた。

その言葉を最後に、女神の姿を形作っていた光は霧散し、その雫が街全体へと舞い降りてゆく。

それと同時に、システムメッセージが表示された。

―イベント「ウカノの祝福」が発生しました。期間中、風と水の街《ツヴァイ》及び、その周辺での戦闘、生産行為で得られる経験値が上昇します。詳細は公式ホームページでもご確認頂けます。 h t

t p : / / w w w .

なんとも、太っ腹な女神様である。

いや、そのプロポーションはモデル顔負けのものであつたのだが。

偶然目の前で発生した一連の出来事に、ボク達はしばらく女神の消えていった星空をぼうつと眺めているのであつた。

そうして、お祭りの夜は更けていく。

後日ツヴァイの街には、自分だけでは不公平だと小言を食らいながら、訳も分からず二人分の食事を奢るワーウルフの姿があつたとか、なかつたとか。

お稲荷様と二つの罪

祭りの夜が過ぎ、翌日は始まりの森の街道やツヴァイ周辺でのレベル上げに費やした。

先のイベントで発生した経験値上昇の恩恵は大きく、レベルは二十八まで上がり、戦利品を売却することで懐もそれなりに温かくなった。

祭りの前日に金策がてら行なった狩りで、ある程度はレベルも上がっていたのだが、それでも五つはレベルが上がっている。

更にはレベル二十五の段階で種族スキルも一つ取得し、中々得るものの大きい一日であったように思う。

手に入れた種族スキルは攻撃用の妖術だった。

その名も、初級妖術【水虎^{すいこ}】。

水の牙が相手に襲い掛かる魔法攻撃であるが、威力としては【鎌鼬】とさして変わらない。

恐らくは相手の苦手な属性に合わせて、各スキルを使い分ける事を想定しているのだろう。

さて、では今は何をしているのかというと、件のボスモンスターの姿を一目見ようと、ツヴァイの先にある大溪谷までやってきていた。

道端の岩の上に腰を下ろし、二本の尻尾をゆらりゆらりとさせて、溪谷にかかる巨大な石造りの橋、その上で繰り広げられている激闘を見やる。

そこにいるのは、一体の巨大なスライムであった。

ぶるぶると震えるその体の中には、ぐったりとした様子のワーキャットの少女が一人。

装備からして職業は盗賊^{シーフ}、火力職である。

意識はあるようだが、その瞳は虚ろで、白黒の猫耳と尻尾は力なく項垂れている。

その巨大なスライムの前にはパーティメンバーだろうプレイヤーが五人。それぞれが剣や斧などを手に、目の前の仲間を助けようと果

敢に攻撃を加えていた。

「パーティメンバーを一人拘束し、制限時間内に一定のダメージを与えないと即死。まあそんなところかな」

そんな激闘を前に、干し肉をかじりつつ一人ごちる。

まあこの手のゲームではよくあるタイプのギミックである。

攻略掲示板に書き込まれていた推定適正レベルから考えると、ある程度は余裕をもって突破できるだろう。

そうしているうちに、例のパーティは設定されていたダメージ量をクリアしたらしく、苦しそうに体を縮めたスライムから、閉じ込められていた少女が吐き出されているのが見えた。

どうやら閉じ込められている間は継続ダメージが発生していたようで、治癒術士らしい男性が慌てて回復呪文を唱えている。

そして巨大なスライムはその体色を緑から赤へと変化させ、体中から無数の触手を伸ばしてプレイヤー達に襲い掛かった。

どうやら、この激闘も終盤戦へと入ったようである。

「この調子なら、明日にはジパングへ渡る方法も見つかってそうだな」
「あらー、ギガントスライムちゃんやられそうじゃんかー。来訪者も案外やるじゃん」

不意に響く、聞きなれぬ声。

ぎゅっと尻尾を掴まれる感覚に、ぎゅっとして振り返ると、そこには見知らぬ少女がいた。

燃えるような赤い髪に、生気を感じられぬ青い肌、顔立ちは幼く、姿だけ見れば十代半ばの少女のように見える。

だが、側頭部から前方に伸びる二本の角、背中に生えたコウモリのような翼が、少女がただの人間ではないことを雄弁に語っていた。

魔族のプレイヤーだろうか。否、先程の少女の言葉を鑑みるにNPCの可能性が高い。

少女は満月のように大きな金色の瞳をこちらに向け、ひらひらと手を振った。

「やー、キミの尻尾ふわふわで気持ちいいねー、一本ちようだい？」

「それは勘弁してほしいな」

「だよーねー。うーん残念！」

随分とまた、変わった少女である。

長く大きなため息を吐きながら肩を落とす様を眺めながら、苦笑を漏らす。

まるで見た目相応の可愛らしい仕草に、思わず毒気を抜かれてしまう。

「失礼だが、君は何者なのかな？」

「あ、ワタシ？　ワタシはアワリティア、ティアって呼んでいーよー」
告げられたその名に、ふっと、声にならぬ声が漏れた。

アワリティア。ラテン語で「強欲」を意味する言葉だ。

そして、その「強欲」から連想され、映画やゲーム、漫画等に度々登場するものが一つ。

「ボクはタマモ、まあ、しがな狐さ。しかしアワリティア、強欲となると、七つの大罪、か」

「ありや、物知りだねー。如何にも、実はワタシは魔王様が誇る七將軍、《七つの大罪》の一人でもあつたりするのだー！」

アワリティアはそう言つて、えっへんと見た目相応の胸を張つた。

魔王、七將軍。

字面だけ見れば随分と物騒だが、これまで立ち寄つた街でそんな名前には聞いた事がない。

公式ホームページにもそういった情報は見受けられなかったし、どうということだ。

ふむ、と考えを巡らせていると、ふんす、とふんぞり返っていたアワリティアの顔色が、見る見るうちに青くなつていく。いや、元々真つ青な肌ではあるのだが。

「どうしたんだい？」

「いやー、そういえば、七將軍って事は他の人には言うなつてスperlビアが言つてたなー、と」

右へ左へ瞳を泳がせながら、滝のような冷や汗をかきながらアワリティアが言う。

スperlビア、ということは「傲慢」か。十中八九、彼女と同じ七將

軍の一人なのだろう。

そして彼女達を統べる魔王。

RPGにおける魔王とは、主人公達の前に立ちあがるラスボスと相場が決まっているが、目の前で頭を抱えて唸る少女を見る限り、然程邪悪な存在ではないのかもしれない、と考えてしまう。

ぱん、と目の前で手を合わせて、アワリティアが頭を下げた。

「お願い、ここで聞いた事は忘れて！」

「いや、忘れて、と言われてもね」

魔王だのなんだの、忘れるにはなかなか衝撃的な内容である。

そこを何とか、とアワリティアに言い寄られ、う、と言葉を詰まらせたその時、ボクの背後で喝采が上がった。

何事か、と二人で揃ってそちらを見やれば、そこには体を光の粒子に変えて消えていくギガントスライムと、その前で手を打ち合わせるプレイヤー達の姿があった。

あちゃー、とアワリティアが天を仰ぐ。

「結局やられちゃったかー。ま、いいや、今回は『せんりよくちよーさ』だからね！」

「戦力調査？ アワリティア、君達の狙いは何だ」

「残念だけど、貴方がそれを知る必要はないわよん」

背後から声。

何者か、とボクが振り返るより早く、腹部に鈍い衝撃が走る。

目を下ろせば、そこには『腕』が生えていた。

しなやかな細い指に、紫色のネイルが塗られた鋭い爪。一見すれば女性のような腕である。

それが、ダメージエフェクトで真っ赤になった腹から生えている。ずしりと、身体が重くなる感覚。

咄嗟にHPを確認すると、たったの一撃で体力は既に一割を切っていた。

明らかにHPが全損してもおかしくない攻撃であるのに、首の皮一枚で繋がっているところを見ると、そういった演出の類だろうか。

ゲームのシステム上、ダメージを受けた際に痛みは発生しないので

実際には背中が押されている程度の感覚なのだが、やはり自分の腹から腕が飛び出したこの光景は気持ちが悪い。

アワリティアが声を上げた。

「あー、ルクスリア！ アンタ、ワタシのお気に入りになしてくれちやってんのー！」

「アワリティア、貴方ちよつと喋りすぎよん。しかもこのコ、来訪者じゃないのん」

ルクスリアと呼ばれた人物は、ボクの腹部から腕を引き抜くと呆れたようにアワリティアに歩み寄った。それにより、その全貌が明らかになる。

それは、スーツのような黒い服を纏った長身の男だった。

右半分は波打った紫色の髪が目隠すほど伸び、左側は大胆に刈り上げた独特な髪型をしている。

男はハイヒールの固い音を鳴らしてこちらに振り向くと、ぎよつと目を丸くした。

「あらやだ、すつごい綺麗なコじゃないのん。やだー、勿体ない事したわん」

これはまた、随分と濃いのが来たなあ、というのが、ボクの第一印象であった。

オネエである。どこからどう見てもオネエである。

腹に風穴を開けられて、目の前には得体のしれない、しかし間違いない今の自分では敵いもしない強者が二人。

どう見ても絶体絶命、緊迫した場面であるはずなのに、その動きと声がすべてを台無しにしていた。

ルクスリア、という事は“色欲”か。

確かに、イロモノではあるだろうが……。

「ちよつと、タマモはワタシが先に目を付けたんだかねー。横取りしたら、アンタでも容赦しないわよ？」

「あらやだ、こんなカワイコちゃんを独り占めなんて、流石は“強欲”ねん」

それはそれとして、と続けて、ルクスリアは再びこちらへと目を向

ける。

そこにはもう、一切の感情は含まれていなかった。

「まあ、来訪者だから復活するでしょうし、今更忘れろなんていつても無駄でしょうけど、これは忠告よん。」

刃のように揃えられた右手を、禍々しい靄のようなものが包む。

「あたしたちの事は、余り詮索しない事ねん。少なくとも、今のところは」

そうして、一振りの剣と化した右手が振り下ろされる。

その一撃は僅かに残っていたボクのHPを無慈悲に削り切り、身体が碎け散る音と共に、ボクの視界は暗転した。

「タマモー、また会おうねー!」

「アンタはちよつと我慢つてもんを覚えなさいよん!」

「うるさいなあ、オッサン!」

「オネエサンだって言ってるんだろゴルア!」

ほんと、締まらない連中である。

お稲荷様と一休み

—ログアウト処理を行っています。しばらくお待ちください。

—ログアウト処理が正常に終了致しました。

—またのご利用をお待ちしております。

顔の上半分を覆っているデバイスを外すと、目の前には見慣れた天井が広がっていた。

身体を起こし、ぐつと伸びをして首を回せば、ぽきぽきと気持ちの良い音が響く。長時間ログインしていたせいか、仰向けに寝ていたにも関わらず随分と肩が重い感じがする。

「ああ、やられたなあ」

ばかりとまた仰向けに倒れながら、思い出すのはあの二人組。『強欲』のアワリティアと、『色欲』のルクスリア。彼女ら七將軍、そして魔王と呼ばれる存在が、ボク達プレイヤーにとってどういった脅威となるのか。

運営の公式ホームページにも公開されていない、誰も知り得なかった存在。

柄にもなく、胸が高鳴る。

運営も、随分と素晴らしいサプライズを用意していたものだ。

思わず緩んだ頬を撫で、指先に張り付いた髪を見てむっとする。空調はしっかりと管理されていた筈だが、どうやら寝汗でもかいてしまったようだ。

「ミズハー、ミズハー」

『はい、お呼びでしょうか？』

もはやボクの生活とは切っても切れなくなつた名を呼べば、すぐさま枕元に設置してあった小型のデバイスから凜とした女性の声が返ってきた。

ベッドから降り、肌張り付いた髪を振り払う。

「汗を流したいから、入浴の準備を」

『畏まりました。ご昼食は如何いたしますか？』

「それは自分で作るから、いい」

『畏まりました。では着替えをご用意致します』

ぷつん、と通話の切れる音。

まるで人間のようなやり取りであるが、彼女の正体は機械、人工知能と呼ばれるものだ。

生活補助プログラムと呼ばれる彼女が登場したのは、今から数十年程前の事。科学技術の発展により、掃除や洗濯、果てには料理まで、家事の殆どをネットワークで管理し、ロボットが人間の代わりにそれらを行うようになっていった。

そんな中で、暮らしをさらに快適にしようと誕生したのが、彼女たち生活補助プログラムだ。

彼女たちの登場で、ボクたち人間はどうとうロボットの電源ボタンを押す事さえしなくなった。

ぬるめのお湯につかりながら、ボクは思考を巡らせる。

身体を一切動かさないまま、意識だけを別世界へと送るフルダイブVR技術。

医療、軍事、そして娯楽へと進出してきたこの技術がさらに発展すれば、ついに人間は、身体を一切動かさないまま、意識だけで生活するようになるのではないか。

「なんてね。SF映画じゃあるまいし、馬鹿馬鹿しい」

尤も、昔の人から見れば、今の世の中も十分SF映画じみているのだろうけれど。

「ミズハ、『The Another World』の公式ホームページを開いて」

『畏まりました』

水が滴る髪を指先で弄りながら声をかけると、寝室にあった物と同様のデバイスから立体映像が投影される。

表示されたホームページを指先でスクロールすると、新しい街が解放された旨がサイトの下の方に記載されていた。沿岸部に半円形に

広がった大きな街、貿易都市《ドライ》である。

どうやらボスモンスターを撃破したあのパーティは、無事に次の街まで辿り着いたようだ。

「ふむ、やはり主な貿易先はジパングか」

βテストの時にはドライまで進む事が出来なかったし、NPCの人数も今よりずっと少なかった。

ここに来て新職業や他国の情報が続出し出したのは、その辺りが原因だろう。

ユーザーID、パスワードを入力し、ユーザー限定ページへとアクセスする。ここでは公式掲示板の利用や、フレンドとのメッセージのやり取りなどを行う事が出来る。

そこからフレンドメッセージを編集、送信。宛先はいつもの三人組だ。

内容は七將軍の二人から聞き取った情報全て。あの三人は全員がレベル三十以上で、ボクなんかとは違いあっさりとやられる事はないだろうが、恐らく七將軍のレベルは六十を超えていると思われるので、油断は禁物である。

ちなみに六十とは現在のプレイヤーが到達できるレベルの上限であり、現段階で、これ以上プレイヤーのレベルが上がる事は無い。すなわち現時点では、プレイヤー達に勝ち目はないという事だ。

まあ、もし勝てるとしても大規模イベントを交えた、一時的なものになるだろう。

つまり、今は運良く遭遇しても負けイベント確定。ある程度は情報を引き出せるだろうが、最終的には例外なく全滅、死に戻りが濃厚。故に、その忠告も交えたメッセージを送信する。

「遭遇した場合は可能な限り、情報収集に努めたし。相手が『強欲』ならば難易度低し、と」

メッセージを送り終え、濡れた髪をタオルで拭い、くるりとまとめて頭の上へ。用意されていたシャツ、パンツに着替え、キッチンへと足を進める。

ぺたぺた、ぺたぺた。スリッパが床を叩く音が響く。

冷蔵庫を開け、中身を確認。ああ、卵の期限が近いな。お昼はオムレツにしよう。

『レシピを検索、表示します』

「ありがとう。あと、今日のニュースを一覧で出して」

『畏まりました』

ボウルに卵を落とし、手早くかき混ぜながら目の前に開いた画面に目を通す。

政治、経済、スポーツ。綺麗なものから汚いものまで、数多く並んだそれらの中から一つを選び、指先で弾いて拡大した。

——話題作『The Another World』特集！ その魅力に迫る！

開いた記事の中には現在発見されている街や職業、モンスターの情報が詳しく記載されており、そこには運営陣のインタビューから得た新情報までが載せられていた。

「へえ、第二陣のスタートは来月か。また賑やかになるな」

パンをトースターに放り込み、焼き上がったオムレツを皿に盛りつける。

初回予約抽選にも引けを取らない、とんでもない数の応募の中から選ばれたプレイヤー達。来月の半ば、先陣とそう変わらない人数の彼らが、始まりの街へと流れ込んでくる。

サービス開始初期とは違い、今は経験値稼ぎに最適なモンスターもレベル毎にまとめられ、おススメ装備と共に有志の攻略ページでいつでも確認することが出来る為、試行錯誤する手間が無い分、ボク達よりもスムーズにレベルを上げて、追いついてくるだろう。

「まあ、その試行錯誤の楽しみが味わえないのは、少し気の毒に思っけれど」

尤も、それを苦痛と感じる人にとっては、さくさく進める第二陣の方が向いているのかもしれないが。ちなみに、ボクはそういった試行錯誤、手間暇が大好きな人間だ。

香ばしいトーストに噛り付き、ふわふわのオムレツに舌鼓を打つ。量は少ないが、小食なボクはこれぐらいでお腹がいっぱいになってし

まう。

「ごちそうさま、と手を合わせ、温かいコーヒーを飲んで一息吐くと、ボクはぼんやりと真つ白な天井を見上げた。

「さて、後はドライからジパング行きの船に乗り込むだけだけど、まあすんなりとはいかないだろうな」

頭の上に乗せていたタオルを取ると、僅かに水分を含んだ長い黒髪が背中を軽く叩いた。まだ乾ききつてはいないが、まあこのぐらいならすぐに乾くだろう。

それよりも心配なのは、十中八九ボスモンスターが待ち受けているであろう、ジパングまでの旅路である。これまでのように、他のパーティが撃破するまで待つ、という方法もあるが、ジパングには待ちに待った陰陽師の拠点がある。

一日でも早く攻略して、かの国へ渡りたいというのが、正直なところだった。

「これは、久しぶりに頑張ってみようかな」

とりあえずは、経験値増加イベント中に出来る限り経験値を集め、レベルを上げる。

そして装備の強化。これはドライで買い揃えれば十分だろう。

後は、最も重要な情報収集。

これらを行ない、尚且つ攻略組との差を少しでも縮めるとなると、二徹か、三徹か。

「出来れば早めに済ませたいけど、やれやれ、今から頭が痛い」

自室に戻り、ベッドに腰を掛けてため息を吐く。

まあ、精々体調を崩さない程度に頑張ろうか。

「ミズハ、夕飯もボクが作るから、洗濯物とかは宜しくね」

『畏まりました』

そうしてぐつと伸びを一つ、ヘッドギアを被り、ベッドに横になる。頭に響く、ヘッドギアの駆動音。意識を吸い込まれるようなこの感覚は、やはり慣れない。

さて、それでは、再び異世界へと旅立つとしよう。

「ソフト選択、The Another World、起動」

そしてボクの意識は、電子の海へと沈んでいった。

お稲荷様と船の旅

「ああ、疲れた」

あれから三日、風と水の街ツヴァイの傍に広がる草原にて、ボクは指先で眉間をもみほぐし、ぐつと背筋を伸ばす。そうすると、ボクの背後で妖狐族特有の大きな尻尾が四本、真似をするようにぴーんと伸びた。

三日三晩、寝る間を惜しんで経験値稼ぎに没頭した結果、ボクのレベルは四十一、追加スキルも三つ手に入れ、あと少しで攻略組とも肩を並べられるレベルに到達する。

ちなみに尻尾はレベル三十で三本になり、四十を超えた時にまた増えた。

気のせいかな一本ごとのサイズも大きくなって、今ではボクの背中に収まりきらないほどである。

「まあ、これだけ上げれば大丈夫だろう」

欲を言えばもう少しレベルを上げておきたいが、流石にそこまでやっている時間は無い。

貿易都市ドライが解放されてからもう三日。そろそろジパングへ到達するプレイヤーが出てもおかしくはない程度の時間が経っている。

顔を覆い隠す程の大きな扇を広げ、胸元に風を送りながら貿易都市ドライへと向かう。そこで、モミジ達三人と合流する約束をしているのだ。

ああ、例の七將軍だが、やはり他のプレイヤーの前にも現れたらしい。

どうもプレイヤー毎に遭遇するキャラクターが異なるようで、現在は「傲慢」以外の全ての七將軍が目撃されている。

ちなみに掲示板の書き込み曰く、ヤバいのは「嫉妬」と「色欲」だそう。色々な意味で。

あまり出会いたくはないが、そのうち嫌でも顔を合わせる事になる

んだろうなあ。

そうして歩いていくと、かつてボスモンスターが陣取っていた石橋に到着した。

すっかり見晴らしの良くなったその脇には、菱形の青い水晶が浮かんでいる。

これはボスモンスターが討伐された後出現するもので、手をかざせば何度でもボスモンスターに挑戦できる仕組みになっている。

まあ、一度きりのボスモンスターなんて出現させてしまうと、それを撃破して手に入る素材や装備のレアリティがとんでもない事になってしまうし、当然の措置といえるだろう。

美しく輝く水晶の脇を抜け、橋を渡る。

やや緑が少なくなつた平原を道なりに行けば、そう時間もかけず貿易都市ドライに到着した。

正面を頑強な防壁で覆い、背後には美しい海原が広がる大都市である。

港には幾つもの船舶が並び、筋骨隆々の海の男達が巨大な木箱や樽を運び出し、積み込んでいくさまは圧巻の一言に尽きる。

ボクも装備を一新する為に初めて訪れた際は、呆氣にとられたものだ。

「あ、いたいた。おーい、タマモー！」

そんな海の男達に混ざって、見知った顔が飛び跳ねながら手を振っていた。

手を振り返しそちらへ向かうと、そこにはいつもの三人組の姿が。モミジとハヤトは装備が変わっている程度だが、コタロウは少しシャープな姿になっている。

何というか、冬毛から夏毛に生え変わったような感じだ。

「なんか変な事考えなかったか、おい」

「とんでもない。しかし、久しぶりだね」

見た目相応の獣じみた直観をかわし、すぐさま話題を変える。

「はは、まあ、あのお祭り以来になるのかな？」

騎士然とした甲冑姿のハヤトが、苦笑いを浮かべながら言う。

その横では純白のローブにホットパンツ姿のモミジが、何やら瞳を輝かせてこちらを見つめていた。

「凄い、やっぱり妖狐族ってレベルが上がると尻尾が増えるんだね！」
「モミジも、随分と治癒術師らしくなってきたじゃないか。カトレアさんのお店で買ったのかい？」

「うん、この間紹介してもらってから、すぐ行ってみたの！」

満面の笑みを浮かべ、モミジがくるりとその場で一回転する。ふわりとローブの裾が浮かび上がり、どこか甘い香りが鼻先をくすぐった。

さてさて、こうしてこの街に三人集まった理由は他でもない、ジパング解放の条件であるイベントをクリアする為だ。

攻略組の調査でわかったのだが、今回は今までのようなボスモンスター一体との戦闘ではなく、断続的に出現するモンスターとの連戦になるらしい。

一体一体はさほど強くはないそうなのだが、問題なのはその数で、かの攻略組でさえ三つのパーティで挑み、抑えきれなかったというのだから相当である。

しかし、このイベント戦で重要なのは、戦場となる場が大きな船の上で、参加人数に制限が無い事。故に、攻略組はこのクランにも属さない、所謂野良のプレイヤーも交えての大規模な攻略作戦を提案。ソロ、パーティ問わず参加者を募り、数の力で押し切るつもりなのだ。尤も、参加するにあたって、最低限の条件は付けられたが。

それが、レベル四十以上である事。レベル四十一のボクはぎりぎりセーフ、他の三人もレベルは四十三と、十分に条件をクリアしている。「皆、本日はよく集まってくれた！」

港の方から男性の声が響く。

見れば、そこには大勢のプレイヤー達が集まっており、その視線の先には一人の男が立っていた。

ハヤトが装備している物よりもずっと重厚な鎧を身に纏い、背には身の丈程ある巨大な剣を背負っている。顔立ちは二十代半ば程で、右頬には大きな傷跡が走っていた。

「攻略克蘭【暁の騎士団】の副団長、グラムだ」

「グラム？ それはまた、仰々しい名前にしたものだ」

確か北欧神話に登場する剣の名前だったか。

それはともかく、グラムは集まったプレイヤーをぐるりと見回すと、うむ、と一度領いた。

「これより、イベント参加者の受付を始める。すまないが、各々我が克蘭のメンバーにステータスの開示をお願いしたい。参加条件は事前に告知した通り、レベル四十以上である事、この一点だけだ」

「どもどもー、暁の騎士団のチャーハンといえます。受付はこちらで行いますので、参加希望の方は順番に並んでくださいねー」

グラムの横に控えていたプレイヤー数人が手をあげ、参加者達の誘導を開始する。

思っていたよりも人数はそう多くなく、ぱつと見た感じだと三十人前後といったところだろうか。

まあ、王都《フィーア》方面を攻略しているプレイヤーも多いだろうし、レベル四十以上という縛りも含めて考えると、まあこんなものだろう。

ハヤト達と共に受付を済ませると、ジパングへと向かう船へと乗り込む。

随分と大きな船で、形はガレー船に近い。

「わあ、私こんなに大きな船に乗ったの初めてだよ！」

「おいモミジ、邪魔になるから走り回るんじゃねえよ」

甲板をはしやぎ回るモミジを、がしがしと頭をかきながらコタロウが追う。

船には受付を済ませたプレイヤー達が次々と乗り込んできており、なにごとか、とNPCの船員達が目を丸くしている。

ボクはといえば、手早く船の後部に移動し、手すりにもたれ掛かりながら美しく揺れる波間をぼうっと眺めていた。

「いよいよジパングか。何だかあつという間だな」

「ホントだよにゃー。あー、早く新職業見つけたいにゃー」

その時、ぽつりと漏らした声に返す者があった。

びくりとしてそちらに目を向けると、ボクと同じように水面を見つめる、ワーキャット族の女性が。

ショートカットの亜麻色の髪の上に三角の大きな耳を乗せて、くりくりとした金色の瞳がこちらを見つめている。

服装は動きやすそうな半袖短パンで、腰には短剣を二振り提げており、恐らく職業は盗賊^{シーフ}。

そして、ふと感じた既視感にボクは目を細めた。

どこだろうか、最近見かけたような気がするが……。

そうして数秒記憶を探った後、ああ、と手を叩いた。

「このあいだ、ギガントスライムに食われてた人か」

そう、ボクが七將軍の二人と遭遇したあの日に、橋の上でボスモンスターと戦っていたパーティの一人である。

ボクがそう言っていると、彼女はしなやかな尻尾をぴんと立たせながら、顔を青くした。

「うっ、まさか見られてたのかにや」

「まあね。結構近くで見てただけで、気付かなかった？」

「や、あの時はボス戦に必死で、それどころじゃなかったのよね……あ、にやー」

言い直した。ロールプレイも色々大変そうである。

「そういうえば、君達がボスを倒した時、あそこに七將軍が二人出たんだけど大丈夫だったかい？」

「それって、七つの大罪ってNPCの事だっけ？　んー、私達がボスを倒した後は何もなかったけどにやー」

ふむ、ということは、アワリティア達はボクをキルした後、他のプレイヤーには手を出さずに帰ったのか。

戦力調査、なんて事を言っていたし、直接接触する事は極力避けているのだろう。

その割には多数のプレイヤーに目撃されているのだが、まあそこはゲームなのだから仕方がない。

「まあ、無事だったのなら何よりだ」

「うむ！　まあ、昨日エンカウントしてキルされたけどにや！」

ああ、遭遇はしていたらしい。

話を聞いた感じだと、ボクの時と左程変わらないイベントだったようだ。

ただ違う部分としては、後からやってきた七將軍が「色欲」ではなく、「暴食」だった点だ。

名前はグラ、獣の皮や骨で作った服を着た、大柄のオーク族らしい。彼女はパーティメンバー達とレベリングをしているところで遭遇し、何とか抵抗を試みたが五分と持たなかったそうだ。

「あんなのムリムリムリムリ、かたつむりにや。うちのタンクが一発で蒸発するとか、絶対レベルキャップ以上の強さはあるにや」

攻略組のタンク職でも一撃とは、恐れ入った。

やはり双方のレベルに、倍近い差が開いていると思った方がいいだろう。

「それはそうと、狐の人、一つ聞きたいことがあるんだけど、いいかにや？」

「ふむ、質問の内容によるね」

あー、うー、と随分畏まった様子に、首を傾げる。

第一印象から彼女もモミジと同じように、思ったことは素直に口に出すタイプだと思ったが、なにごとだろうか。

いや、待て。

確か、サービス開始から数日後に、モミジもこんな感じで何かを訪ねてきたことがあった。

そう、確か始まりの街アインで、彼女達と初めてパーティを組んだ時の頃だったような。

そこまで思い至り、成程、と納得すると、ボクは苦笑を一つ、彼女の大きな猫耳にそつと耳打ちする。

そうすると、彼女はくりくりとした目をいっぱいに見開き、はー、と息を吐いた。

「やっぱりそうなんだにやー」

「できれば他言無用で頼むよ。オンラインゲームだと、そっちの方が色々と都合がいいんだ」

「まあそれはいいんだけど、たぶんばれるのも時間の問題だと思うにやー」

「はは、まあ、それはそうだろうさ。さてと、ボクはもうパーティーメンバーのところへ戻るよ」

よっこらせ、と手すりから身体を離すと、ひと際賑やかになった船の前方部に目をやる。

どうやら全員の受付が終わったようで、先程のグラムとかいうプレイヤーを中心に、他のプレイヤー達が集まっていた。

まあ、これからの段取りなどを説明するのだろう。

「うーん、じゃあ私も戻ろうかにやー。あ、最後になっちゃったけど、私はムギ、見ての通りのワーキャットで、職業は盗賊^{シール}にや。宜しくにや！」

「宜しく、ムギ。ボクは妖狐族のタマモ、職業は陰陽師、の予定」

今は無職だけどね。

そう言うと、案の定ワーキャットの少女は不思議そうに首を傾げた。

いいじゃないか、どうせジパングにいたら陰陽師になれるのだから。

「出港するぞお、野郎共、錨をあげろー！」

丁度その時、船員の良く通る声が船内に響き渡った。

がりがり、がりがりと錨が引き上げられ、巨大な帆がマストの上から広がり、風を受け大きく膨らむ。

プレイヤー数人がその様子におお、と声を漏らす中、船はゆっくり、ゆっくりと新天地へと進み始める。

「さて、待ちに待った国への旅路だ。さくつとボス戦をクリアして、ゆっくりと楽しむでしょう」

ゆらゆら、ゆらゆら。

四つの尻尾を振りつつ、元気に手を振る仲間の元へと歩を進める。

プレイヤー達の旅路を見送るように、頭上を美しい海鳥達が飛び去っていった。

お稲荷様とボスバトル

果てしなく広がる大海原。

現実世界でもそうお目にかかれない美しい光景に、思わず目を奪われそうになる。

しかし、船に乗る約三十名のプレイヤー達に、その光景を楽しむ余裕などなかった。

貿易都市ドライを出て三十分程経った頃、ついにモンスター達との戦闘が始まったのだ。

それは、黒い霧のようなものを纏って現れた。

ぼろぼろの帆に、へし折れたマスト。船体には巨大な傷が走り、埃だらけのデッキに人の気配はない。薄暗くなった波間に、薄気味の悪いうめき声が響く。

「幽霊船だ！ 面舵いっぱあい、振り切るぞお！」

事態に気づいた、NPCの船長らしき男性が叫ぶ。

だが、指示を受けた船夫が必死に舵を切ろうとするが、舵はぴくりとも動く気配が無い。

船内に、男達の叫びが響く。船長が険しい顔をし、机をだんと叩いた。

「くそつたれの亡霊共があ！ すまん、来訪者さん達、少しばかり時間を稼いでくれ！」

「任せろ！ 皆、打ち合わせ通りに動いてくれ、行くぞ！」

グラムの号令に、プレイヤー達がとうとう動き出す。

それと同時に、甲板の至る所にぼろ布を纏った骸骨のモンスターが多数出現した。

剣と盾を手をしているもの、杖を構えているもの、弓を背負ったものの、種類も様々だ。

その中でも一番敵が密集している場所に、グラムをはじめとした攻略組のプレイヤー達が突進する。

戦闘が始まった事を確認し、ボク達は船尾の方に沸いた敵の処理へ

と向かった。

「さあ、いっくよー！」

「いつもの調子でいけば問題ない、気楽にいこう！」

モミジが杖を掲げ、補助魔法^{バフ}が発動すると同時に、ハヤトが盾を構えて敵の只中へと飛び込んでいく。

敵は三体。剣を持ったスケルトンウォーリア、杖のメイジ、短剣のシーフだ。

ハヤトが注意が引き付けている間に、魔法攻撃が厄介なスケルトンメイジを先に片づけてしまおう。

「さて、まずは一当て」

扇を開き、スキルを発動する。

レベル四十になって手に入れた、中級妖術【雷獣】。

四本の尻尾が左右から前方へと伸び、十字に交わったその先端が閃き、そこから飛び出た稲妻が、スケルトンメイジへ向かって疾走する。結果、その一撃はスケルトンメイジのHPを四割ほど削り取っている。

ふむ、今使用できるスキルで一番威力のあるものだったのだが、相手がスケルトンメイジだった為か、思っていた程のダメージは与えられなかった。

やはりここは、グラムのアドバイスに従う事でしょう。

「モミジ、聖属性の攻撃魔法を」

「はいはいー！　ただMP消費が激しいから、そんなに連発できないよー！」

「なら、スケルトンシーフに一発だけ頼むよ。後は回復と補助に専念してくれ」

コタロウの打撃攻撃も有効だったようで、スケルトンメイジのHPはもう残り四割弱といったところまで削れていた。

この分なら、そう時間もかけずに撃破できるだろうし、モミジには次に処理するスケルトンシーフのHPを削ってもらった方が効率が良い。

モミジが杖を胸の前に構え、天へと高々と掲げると、スケルトン

シーフの周辺に光の球体が集まり、ゆつくりと回転を始めた。

「ホーリーバニッシュ！」

光が収束し、弾ける。

治療術士がレベル四十で習得するその聖魔法は、驚く事にスケルトンシーフのHPを半分以上消し飛ばした。流石弱点属性、といったところか。

これが連発出来れば楽なのだが、モミジ曰く今のMPでは四発が限界らしい。

この先も戦闘が続くことを考えると、使いどころは慎重に選ばなくてはならないだろう。

「こっちは終わったぞ」

がらがらと崩れていくスケルトンメイジを蹴飛ばして、コタロウがスケルトンシーフへ駆ける。

ハヤトが適度に敵視を稼いでくれているおかげで、今のところ他のメンバーにダメージは無い。

程なくスケルトンシーフも撃破すると、残ったスケルトンウォーリアのHPは、ハヤトの手で既に四割程にまで削られていた。

それを初級妖術【狐火】と、コタロウの攻撃によって削り切る。

戦利品は多少の経験値と、スケルトンの骨片だけだった。

これだけで終われば良いのだが、あいにくとこれは攻略組も手を焼いたイベントバトル。

甲板の至る所に、次から次へと先程と同種のモンスター達が沸いてくる。

「これは、ゆつくり休憩なんて出来そうにないね」

困ったように笑いながら、ハヤトが漏らす。

「傷薬の類ならあらかじめ纏め買っておいたから、必要になったら言ってくれ」

「さっすがタマモ、頼りになる！」

MP回復薬を飲み干して、モミジが補助魔法を上書きすると、間髪おかずに次の敵集団へ向かう。

どうやら、幾らかのバリエーションはあれど、敵はスケルトンだけ

のようだ。

この数は厄介だが、これだけのプレイヤーが集まれば、それほど苦戦もしないだろう。

だがそれも、敵集団を十近く潰したところで、甘い考えであつたことを思い知らされる事となる。

「これは、まずいな」

倒しても倒しても、新たなモンスターが次々と沸いてくる。

今もなおプレイヤー側に戦闘不能となつた者はいないが、こちらのMPや回復アイテムも無限ではない。脱落者が出るのも、時間の問題だろう。

「やばい、九時のパーティが崩れたぞー」

どこからか響いた声に、内心悪態を吐いた。

船尾から九時方向を確認すると、そこにはパーティの要である盾職を失い、敵の集中砲火を受けるプレイヤーの姿が。

あつという間に治療術士のHPが削られ、ローブ姿の男が力なく倒れる。

ああなつてしまえば、戦線の維持は絶望的だ。

ハヤトに目配せすると、彼も同じ考えに至つていたようで、スケルトンランサーが繰り出した槍の一撃を盾で弾くと、残つたプレイヤーに群がつていた敵集団へと駆けだした。

「ここは引き受ける、一旦下がってー」

プレイヤーに襲い掛かる敵を盾で殴り付け、ハヤトが範囲攻撃スキル【回転切り】を発動して敵集団の敵視を稼ぐ。

「コタロウ、そつちは任せても大丈夫か!？」

「おう、一体だけなら何とかなるだろ。沈むなよ」

丁度、先程のスケルトンランサーの標的を自分へと移したコタロウが応える。

敵の残りHPは六割強。ボクとコタロウの二人掛かりなら、こちらが削り切る方が早い。

長引けばその分、敵を一身に引き受けているハヤトへの負担が増えていく。ここは出し惜しみをしている場合ではない。

「モミジ、【ホーリーバニッシュ】はいけるかい？」

「いけなくはないけど、回復分が無くなっちゃう！」

「了解した。火力はこちらで何とかしよう。コタロウ！」

「応よー」

尻尾を前に、再び【雷獣】を放つ。

それに合わせ、コタロウもスケルトンランサーを蹴飛ばして距離を

グラップラー

とると、腰を落として拳闘士のスキルである【五連鉄拳】を発動した。

稲妻がスケルトンランサーを貫き、体勢を崩したところに高速の五連撃が命中する。

共にMPの消費やクールタイムが大きく、連発が効かないスキルだが、それ相応の成果はあった。

HPバーを全損して崩れ去るスケルトンランサーを確認すると、すぐさまハヤトの元へ急ぐ。

そうして何とか戦線を維持していると、船首の方で戦っていた攻略組のパーティがこちらのフォロワーへと回ってくれた。

「よかった、間に合った。スイッチするぞ！」

「助かる！」

分厚い鎧に身を包み、巨大なタワーシールドを装備したプレイヤーがハヤトに並び、敵を奥へと押しやるようにタワーシールドを打ち付けた。その動きに合わせ、ハヤトが素早く後方へ下がる。

駆けつけたメンバーの中には、つい先ほど知り合ったワーキャットの姿もあった。

「ムギのパーティか。ありがとう、助かるよ」

「いえいえー。困った時はお互いさまにやー」

一言交わし、ムギも二振りの短剣を手に敵へと飛びかかっていく。

これで全体の崩壊は防げたが、気を抜いているような暇は無い。

ボク達はボク達で、新たに敵が沸き出した船尾、元のポジションへと急いで戻り、戦闘を再開する。

そうして時間が過ぎ、一人、また一人とプレイヤーが倒れていく中で、異変は起こった。

沸き続けていた敵が、ぴたりとその勢いを止めたのだ。

「終わった、のか？」

敵を切り伏せたハヤトが、やや疲れた声色で漏らす。

だが、辺りはまだ薄暗いまま、幽霊船も離れていない。

まるで嵐の前の静けさ。ごくりと、誰もが固唾を飲んで事の様子を見守る。

直後、船を大きな揺れが襲った。

プレイヤー達が悲鳴をあげ、あまりの揺れの大きさに膝をつく。

やがて揺れが収まった頃、ボク達は目の前に現れたソレに、思わず苦笑いを浮かべた。

それは、これまで沸き続けていたスケルトンの倍はあろう巨体の、ドクロマークが付いた三角帽をかぶったモンスター。

表示名は「スケルトンキャプテン」

その右手には曲刀を、左手にはフリントロック式の短銃が握られている。

ここにきてのボスモンスターの出現に、プレイヤー達は信じられないといった面持であった。

だが、まあ、現れてしまった以上、倒さなければ仕方がない。

いち早く立ち直ったのは、やはり誰よりも場数を踏んだグラムだった。

「各自、態勢を立て直せ！ チャーハンのパーティは俺達と組め、念のためタンク二枚で行く！」

「了解！」

チャーハン、港でプレイヤー達を誘導していた受付係の男が、円形の盾を手に駆けつける。

その他のプレイヤー達もそれぞれが回復アイテムを使用し、船首に現れたスケルトンキャプテンを半円形に包囲する形で陣形を組んだ。

こちらの人数は二十四人。なんともまあ、随分減ったものである。

「行くぞ！」

陣形が整ったのを確認すると、グラムは腰から手斧を取り出してスケルトンキャプテンへと投げつけた。かかか、と顎を打ち鳴らしながら、スケルトンキャプテンが銃口をグラムへと向ける。

襲い掛かる鉛球を大剣の腹で防ぎながら、グラムは脇を抜けて背後へ。

標的を追いかけ、スケルトンキャプテンは自然とボク達に背を向ける形になった。

一時的に安全地帯となったそこへ、コタロウ達近接職が肉薄する。ボク達魔法職はその後ろだ。

適度にMPを管理しながら、スケルトンキャプテンの背へと魔法攻撃を叩き込んでいく。

スケルトンキャプテンの曲刀が怪しく光る。スキル発動の予兆だ。グラムが腰を落とし、防御スキル【鉄壁】を発動。柔らかな光が彼を包み込み、防御力上昇のバフが付与される。

そこに、スケルトンキャプテンのスキル【トリプルスラッシュ】が発動。

曲刀がぶれ、高威力の三連撃がグラムに襲い掛かった。

HPバーが四割程削られ、グラムの表情が険しくなる。

「スイッチだ!」

「あいよ!」

受け止めた曲刀を弾き飛ばし、ボスモンスターがたたらを踏んでいる隙に、脇に控えていたチャーハンがグラムと入れ替わるように前に出る。

流星はトッププレイヤーと言うべきか、その動作に淀みは無い。

すかさずチャーハンが手にした盾を打ち鳴らし、スケルトンキャプテンのタゲを自分に向ける。

この時点でスケルトンキャプテンのHPは八割と少し。十人以上の火力職で削ってこれとは、どれだけ固いのか。

やがてそのHPを半分にまで減らした頃、スケルトンキャプテンは手にした短銃を怪しく光らせ、その銃口を天へと向けた。

敵の周囲に、不気味な黒い霧が這うように広がる。

「くそ、範囲攻撃来るぞ! 全員霧の外に出ろ!」

それを見たグラムの指示が飛ぶ。咄嗟に反応出来たのは、敵に肉薄していたプレイヤーの約六割。かかか、と顎を打ち鳴らしながら、ス

ケルトンキャプテンが引き金を引く。

その直後、霧が広がっていた部分に、上空から鉛球が雨あられと降り注いだ。

範囲攻撃は本来、単体攻撃スキルより威力が劣るものだが、流石はボスモンスターというべきか、その威力は凄まじく、逃げ遅れたプレイヤーのHPバーを容赦なく全損させていった。

「やっべえな、あれ。反応が遅れてたらアウトだった」

転がるように攻撃範囲から逃れたコタロウが、冷や汗を流しながら言う。

これでプレイヤーの人数は二十人を切った。

スケルトンキャプテンのHPは残り四割。前半の連戦に次ぐ連戦で、こちらのHP、MPにも余裕はない。

最後のMP回復薬を呷り、亡霊の船長を睨み付ける。

「ここからが正念場だ、気張れえ！」

グラムが声を張り上げ、スケルトンキャプテンの曲刀を大剣で弾く。

大槌が敵を打つ音、魔法の炸裂音、弓矢が風を切る音、そして発砲音が絶え間なく響き渡る。

やがてこちらの回復アイテム、MPも底を尽き、苦し紛れで各々が手にした武器で殴り始めた頃――

「お、終わったあ」

腰を抜かしてへたり込むモミジが見つめる先で、ボク達を散々苦しめたスケルトンキャプテンは、その巨躯を崩壊させ、光の粒子となつて消えていった。

撃破時のプレイヤー数、十八名。

霧が晴れ、青く晴れ渡った空の下にプレイヤー達の歓喜の声が響き渡った。

お稲荷様と呉服屋さん

このゲームを始め、その世界の美しさに目を奪われたのはこれ何度目だろう。

左右に立ち並ぶ瓦屋根に、美しい純白の漆喰壁。

町中を流れる川には赤いアーチ状の橋が架かり、河川敷に並んで咲く満開の桜の木から、はらはらと花弁が舞い落ちる。

そして遠くに望む、白塗りの天守閣。

現代の日本には存在しない美しい街並みが、そこにはあった。

夢にまで見た、というのは大袈裟だが、それほどまでに待ち焦がれた光景にボクは立ち尽くす。

船の上では船夫達が積み荷を降ろしながら、いやはや助かった、生きた心地がしなかったよ、などと互いの無事を祝っている。

ああ、そういえば、スケルトンキャプテンを撃破した際の戦利品は、奴が装備していた曲刀だった。

アイテム名は「パイレーツカトラス」、筋力にプラス補正がかかるようだ、正直ボクには無用の長物だ。

モミジ達も同じ物だったか確認を取ったところ、モミジは「呪いのしやれこうべ」という素材アイテム、コタロウはボクと同じ「パイレーツカトラス」だった。

ちなみにハヤトは「スケルトンの骨片」のみ、ハズレアイテムである。

ボクが手に入れた分をハヤトに譲ろうか、という話をしたのだが、コタロウの分を使うのでそちらは売却して軍資金にしてくれ、と押し切られてしまった。

「ターマーモ―！」

一足先に船を降りたモミジが呼ぶ声に、惚けていた意識が引き戻される。

慌てて船を降りると、そこには呆れたように笑う三人と、何やら話し合いを行っているグラム達の姿があった。

どうやら他のプレイヤー達は、すでに街の探索に向かってしまったようだ。

「タマモ、遅いー！」

「はは、申し訳ない。少し感慨深かったから、つい」

頬を膨らませるモミジに軽く頭を下げると、着物姿の町人たちが肩に荷物を担いで走り回ったり、荷車を引いて歩く姿を眺めながら街へと向かう。

実際に歩いてみて、現代では殆ど現存しなくなった古き良き街並みに、改めて声が漏れる。

まるで時代劇の中に迷い込んだような、不思議な感覚。

そうして歩いていると、大通りにずらりと並ぶ暖簾のれんの列がふと目に入った。

暖簾の中心には家紋のような印があり、その脇には店名であろう「葛葉屋」の文字が。

ちらりと中の様子を伺ってみると、どうやら呉服屋らしい。

引き寄せられるように暖簾をくぐると、店内には色鮮やかな着物の数々がずらりと並んでいた。

はあ、と思わず声が漏れる。

「へえー、タマモって着物とか好きなんだ」

ボクに続き入店したモミジが、店内の着物を眺めながらそう零した。

少し気恥ずかしいが、こればかりは仕方がない。祖母の影響で、子どもの頃からこういった物には目が無いのだ。

「あ、わかる気がする。うちのおばあちゃんも着物好きで、お祭りの時とかよく着付けして貰ってたんだー」

そんな風な事をモミジに伝えれば、彼女はどこか懐かしむような笑みを浮かべながらそう言った。

「おや、同族の来訪者とは、これはまた珍しいでありんすねえ」

そうしてモミジと店内を眺めていると、背後から艶っぽい声が響く。

何者か、と振り向けば、その姿にボク達二人は息を呑んだ。

そこにいたのは、赤い着物を胸元まではだけさせ、唇に紅を塗った美しい妖狐族の女性だった。その金の髪は幾つものかんざしで彩られ、肌は透けるように白い。

そして何より驚かされたのは、その尾の数である。

ボクのもものよりもふさふさで、大きな尾が九本、女性の後ろでゆりゆらりと揺れていた。

思わず言葉を失うボク達を見て、女性が口元を袖で隠しながら、頬を種に染める。

「そんなに見つめられると、わっちも照れてしまいんす」

「あ、ご、ごめんなさい！」

顔を真っ赤にして、凄いい勢いでモミジが頭を下げる。

そしてボクはというと、無意識のうちに四本の尻尾を狩衣の袖で隠すように抱え、モミジに続いて小さく頭を下げていた。

おやおや、と女性は目を丸くすると、ボクの手をすつと握り、ふわりと微笑んだ。

「何を隠すことがありんしょうか。その若さで四尾に至ったのなら、たいしたもんでありんす。もつと胸を張りなんし」

NPCとはわかっていても、見惚れる程の美貌を前に上手く言葉が出ない。

女性は最後にボクの頭を一撫ですると、相も変わらず目を白黒させるモミジの方へと歩み寄り、未だ真っ赤なままの彼女の顔を見て、またころころと笑った。鈴の音に似た、心地よい笑い声が響く。

「これはまた、初心な女子^{おなご}達でありんすねえ。見たところ来訪者のようじゃが、この国は初めてかえ？」

「は、はい。私達、今来たばかりで……。あ、私はモミジっていいます」

「ボクはタマモ。先程は、大変失礼しました……」

「いやいや、気にせんでくんなまし。わっちはクズノハ、ただの年寄り狐でありんすが、この国で知りんせん事はたった一つもありんせん。何か尋ねたい事があるなら、遠慮なく言いなんし？」

クズノハ、と名乗った女性の言葉に、耳がぴくりと反応する。

顔を覗き込まれたモミジはうつと言葉を詰まらせて一步下がると、やがて意を決したようにクズノハさんの瞳を見つめた。

「あ、あの――」

そして、恐る恐るといった風に口を開く。

「尻尾、触らせてもらってもいいですか!？」

一つ、二つ、きっかり三つ。

時が止まったような静寂を打ち払い、腹を抱えたクズノハさんが弾けるように笑う。

そして、モミジは事態が飲み込めないのか、また視線を右往左往させはじめる。

そんな二人の様子を見て、ため息を一つ。

どうにも、ボクの尻尾を触ってからというものの、どうやら癖になっってしまったようで、たまにボクの方にも撫でさせてくれないか頼み込んでくるようになってしまった。

自分で触ってみて、確かにこれは犯罪的な手触りだと思いはしたが、純粋な少女の性癖を歪めてしまったのではと、時折不安になる。そうして一通り笑った後、目尻に浮かんだ涙を拭いながら、クズノハさんは快くモミジの願いを叶えてくれた。現在モミジは波打つ九尾に囲まれながら、正しく幸せの絶頂といった顔をしている。

「ふふ、ほんまに来訪者の人は変わっていんすねえ」

「なんというか、ご迷惑をおかけして申し訳ない」

「いやいや、こんな尻尾でよかったらいくらでも。それで、聞きたい事とはなんでありんしょう」

また溜息を一つ、ハヤトやコタロウが見たら確実に雷が落ちるであろう光景から目を背けると、座敷に座る彼女に促されるまま、その隣に腰を下ろす。

そうすると自然とボクの尻尾も彼女の隣に並ぶわけで、九尾と四尾で合計十三本。

それを目にしたモミジが耳を疑うほど気の抜けた声を出した気がするが、きつと気のせいだと思いたい。

「実は、ボクは陰陽師になるためにこの国にやってきたのですが、その

為にまずどこへ向かえばよいのか、もしご存じなら教えて頂きたいのです」

ボクがそう尋ねると、彼女は嬉しそうに手を叩いた。

「なんと、タマモは陰陽道を学びに来んしたか。それならば、わっちに任せてくんまし」

そう言うときズノハさんは懐から矢立という、携帯用の筆と紙を取り出し、すらすらと文をしたためて、ふっと息を吹きかける。

すると不思議な事に、ただの紙だった筈のそれがひとりでに動きだし、小さな折り鶴の姿になってふわりと浮かび上がった。

——クエスト「クズノハの手紙」を受理しました。

破棄するには、対象NPCへの申告が必要です。

「この鶴が、ある者の元まで案内しんす。きっと、タマモにとっても良き縁となるでありんしょう」

「凄い、これは妖術ですか？」

「ふふ、まあそんなものでありんす。さて、ぬし達はそろそろ帰りなんし」

金色の尻尾が波立ち、いまだその手触りを堪能していたモミジの両手からするりと抜け出す。

ああ、とモミジが残念そうな声をあげるのを見て、クズノハさんが困ったように笑った。

「わっちは日にいちどはこの店に顔を出していんすので、気が向けばまた遊びに来てくんまし」

「はい、是非また寄らせて頂きます」

ひらひらと手を振るクズノハさんに頭を下げ、店を後にする。

外に出てみれば、先程の折り鶴がくるくるとボクの周りを回って、ある方をそのくちばしで指し示した。

それを見て、表で待っていた二人がぎよつとする

「ようやく出てきたと思ったら、早速クエストでも受けたのか」

「うん、陰陽師絡みで、ちよつとね。詳細は歩きながら話すよ」

「へえ、それは幸先が良いね。で、モミジはなんでこんなに嬉しそうなのか？」

「えへへー、聞いて聞いて、実はねー……」

クズノハという名前のNPCと出会った事、その人が九尾の妖狐族である事、そして、この店に度々顔を出すと言っていた事。

ハヤト達二人は半ば呆れがちに、モミジの身振り手振りを交えた話に耳を傾けていた。

そうして一通り聞き終えると、ハヤトが顎に手をやり、興味深そうに考え込んだ。

「ううん、話を聞いた感じだと、タマモが受けたクエストの他にも色々イベントがありそうだね。とりあえず、この話はまた掲示板に書き込んでおいても構わないかな？」

「勿論。念のため、後で内容を纏めたものをメッセージで送るよ」

ジパングが解放された直後で、店内にボク達以外のプレイヤーが見当たらなかった以上、このクエストを受けたのはボクが初めてになる可能性が高い。

他のプレイヤーの助けになるよう、なるべく正確に、細かく書き出しておいた方がいいだろう。

さて、それはそれとして、まずはこのクエストを進めなければ。

念願の陰陽師まで、あと一步。これが済めば、晴れて無職の汚名返上である。

ああ、早く、早くクエストを進めてしまいたい。

「あはは、居ても立っても居られないって感じだね」

そんな考えが顔に出ていたのか、ハヤトにそう言われてはつと我に返り、かあつと顔が赤くなる。

いやはや、ボクとしたことが、がらにもなくはしゃいでしまった。

「す、すまない。何せ、発売前から楽しみにしていた職業なだけに、興奮してしまって……。その、本当に申し訳ないのだが、ボクはここでパーティを抜けさせてもらってもいいだろうか？」

「勿論オツケーだよ。早く陰陽師になって、一緒にパーティ組もうね！」

「これで無職卒業だな。早く職業レベル上げろよ？」

身勝手な申し出ではあったが、三人は笑顔でそれを許してくれた。

またこの埋め合わせはしないとなあ、と改めて申し訳なく思いながら礼を言い、折り鶴が示す方へと歩き出す。

暖かな風に吹かれて、桜の花びらが晴天へと舞い上がっていった。

お稲荷様と陰陽師

ふわりふわりと目の前に浮かぶ折り鶴に案内しながら、都をマス目状に区切るように走る、幾つもの道の一本を北へ北へと進んでいく。変わりゆく風景を眺めながら歩いていくと、やがて小川にかかる小さな橋が見えてきた。

心地よいせせらぎに耳をぴくりと動かすと、ぎしりと音を立てながらその橋へ足を乗せる。

そして橋の半ばまで来た途端、筆先で肌を撫でられるような感覚に襲われ、反射的にボクは身体に纏わりつく何かを払うように袖を振っていた。

だが、周囲には誰の姿も無く、川辺に草花が揺れるばかり。

毛を逆立て、ハリネズミのようになっていた尻尾を撫でて落ち着かせると、小首を傾げながら改めて橋を渡る。

ふとその柱に目を落とし、そこに刻まれた『戻り橋』という文字を見て、ボクは静かに納得するとまた視線を前へと戻した。

そうしてまた歩いていくと、やがて白漆喰の塀に囲まれた、立派な屋敷が見えてきた。どうやら、ここが目的地のようである。

ボクが屋敷の傍まで来ると、折り鶴はひと際高く飛び上がり、その塀の向こうへとふわりふわりと飛び込んでしまった。

「やれやれ、どうせなら最後まで案内してくれればいいのに」

気まぐれな案内人を見送って、塀を辿り門へと向かう。

するとどういう訳か、ボクが門の前に立った途端に、まるでこちらを迎え入れるかのように門がひとりでに開き、ほんのりと花の香りを含んだそよ風が頬を撫でていく。

その先には桜のかんざしを差した、着物姿の女性が一人。

「タマモ様でございますね。お待ちしておりました」

女性はボクと目が合うと、そう言っせずと頭を下げた。

「貴方がこの屋敷の主かな？」

「いえ、私は貴方様を迎えるよう申し付かった者です。どうぞ、我が主

が奥でお待ちです」

ゆつくりと視線をあげて微笑むと、彼女はそっとボクに背を向けて歩き出す。

その背中を追いつながら、ふと前方から流れてきた甘い香りに首を傾げた。

この香りは、先程門が開いた際に感じたものと同じものだ。あの時はてつきり庭に咲いた花の香りだと思っていたが、それが何故彼女の方から香ってくるのだろうか。

そんな事を考えながら案内された先には、一人の男がいた。

傍に数人の美女を侍らかせ、その一人の膝に頭を乗せてのんびりと寝息を立てている。

「くつろいでいるところ失礼する。ボクはタマモ、呉服屋のクズノハという女性から話を――」

「いや、申さずともけっこう。やれやれ、あのお人の気まぐれも困ったものだ」

頭を下げる女性達へ目礼を返しながら男へ歩み寄ると、目の前で寝ていた男が、やれやれと肩をすくめながらボクの脇を抜けていった。ボクの後ろから。

目の前にいる男に後ろから声をかけられるという、人生初めての経験に呆氣に取られていると、眠っていた男の姿がふっと消え去り、その場には一枚の紙きれだけが残されていた。

人の形に切り取られた紙に、何やら呪文のような文字が書かれている。

「おお、式神か」

「いかにも。なかなか便利だね、身の回りの世話などをさせている」

式神とは、陰陽師が使役する鬼神、あるいは精霊とも言われている。西洋でいえば使い魔に近い存在だ。

尋ねてみれば、先程ボクを案内した女性も式神で、花の精なのだから。どうりで、彼女から花の香りがしたわけである。

「クズノハ様の文を読んだが、陰陽道を学び、陰陽師になる為に海の方からやってきたのだとか。来訪者とは、随分と奇^{かわ}なる者達なのだ

な」

「なかなか手厳しいですね。己の知らぬ事を知りたい、成りたいというのは、それほど道理に反していますか？」

どかりと床板に座り込み、まるで値踏みでもするような視線を向けてくる男の態度に少しむっとして、あえて棘のある言葉を返してみると、男は僅かに眉をあげ、ふっと笑った。

「おっと、これは失礼。見目麗しい姫君を前にして、口が軽くなったようだ」

「口説いているつもりなら、ボクはすぐに屋敷を出て、事の顛末をクズノハさんに伝えるべきだと思うのだが？」

「それはご勘弁を」

ぽん、と男が軽く手を叩くと、屋敷の奥からまた別の女性がやってくる。

男はその女性から巻物をひとつ受け取ると、すつとこちらに差し出してきた。

その顔に、先程までの軽薄さは微塵もない。

狐のような細い瞳が、白刃のような鋭さを湛えてこちらを見据えていた。

「まずは、この書に記されたものを学ばれると宜しい。これを習熟された後、また来られよ」

水を打ったような静けさの中、ゆっくりと巻物を受け取る。

ずしりと重いその巻物を開くと同時に、目の前にシステムメッセージが流れていく。

——クエスト【クズノハの手紙】をクリアしました。

職業【陰陽師】への変更が可能になりました。

職業はメインメニューから変更できます。

——職業クエスト【陰陽五行の理】を受理しました。

どうやら、クズノハさんから受けたクエストはこの時点でクリア扱いとなるらしい。

そして、何より驚かされたのは、その報酬であった。

職業【陰陽師】への変更が可能になりました。

その一文を再確認した瞬間、ボクはメインメニューから職業を選択し、今まで空欄だったそこに、すぐさま陰陽師をセットした。すると、使用可能なスキルの一覧に、陰陽師の初期スキルらしい「九字」というスキルが追加されていた。

その効果は、対象の物理、魔法防御力の上昇。よくある補助魔法で、上昇する数値に関しては、使用者の知力値に依存するらしい。そして、その効果は他の魔法と重複しない。

モミジの補助魔法にお世話になる事が多い身としては、なかなか微妙な魔法である。

続いて発生した職業クエストの内容は、属性が異なるモンスターを五体倒せ、というもの。

どういう事かと巻物を開けば、そこには相関図のものが記されており、こちらの属性はあちらの属性のものに弱い、といったような事が書いてあった。

陰陽道でも割とメジャーな、木火土金水の五行思想である。

「えっと、ありがたく、頂戴します」

「うむ。他でもない我が母からの願いだ、無碍にする訳にもいくまいよ」

いつの間に用意したのか、小さな盃を手に、庭先に咲き誇る桜の花を眺めながら、男が言った。

母である。クズノハさんが母というその言葉に偽りが無く、ボクがああ橋を渡った時から抱いていた予想が確かならば、やはりこの人は――

「そういえば、まだ貴方の名前を訊いていませんでしたね」

ボクがわざとらしくそう言っていると、男は薄く笑みを浮かべ、くつと酒を飲み干した。

「私の名は、セイメイという。まあ、その様子だと知っていたようだが」

それからボク達は縁側に腰かけながら、陰陽師達が操る術や、この都の事など、様々な話に花を咲かせた。

曰く、都にそびえ立つお城の傍に陰陽寮というところがあり、国に

雇われた陰陽師達は、毎日そこで星を読んだり、吉凶を占ったりしているそうだ。

いわば、陰陽寮とは他国で言うギルドのような扱いであり、ボクも近いうちにそこへ赴き、きちんとした手続きを行わなければならないらしい。

そう言った話の中でわかったのだが、セイメイさんは妖狐族と人間族のハーフで、特に人間族の血を濃く引き継いだのだとか。狐の耳や尻尾が無いのは、それが理由だ。

しかし、何せ母親があゝの九尾、クズノハさんである。血が薄いとはいえ、普通の人間とは比べものにならない程の妖力を受け継ぎ、それが陰陽師となった今大いに役に立っているらしい。

この話は、恐らくはセイメイさんの元ネタである、安倍晴明の出生にちなんでのものだろう。

「ふむう、しかしわからんな。なぜ男おのこのふりをしておる」

だが、どうにもあの奔放な部分も受け継いってしまったらしく、話している際も時折こうして絡んでくる事が多々あった。

「ふりはしていない。周りが勝手に男だと思い込んでいるだけです」

「ふふ、よく申したものだ。まあ、見たところ一人旅であろうし、事情はお察しするが」

ちなみに、なぜセイメイさんが一目見ただけで、ボクが女である事を見抜けたのかと訊いてみれば、魂の形を見たから、らしい。

まあ、ボクも元々こうだった訳ではないのだが、余り話したくない内容であるので、ここでは黙秘させて頂く。

そうして夕日が辺りを赤く照らし始めた頃、そろそろお暇しますと告げると、来た時と同じく、花の香りを漂わせる女性が現れて、しずしずと頭を下げた。

「ああ、そうであった」

女性の背を追って、屋敷を後にしようとしたところで、背後から声がかかる。

「陰陽師としての道をゆくならば、『ドウマン』という者には用心することだ。鬼に喰われたくなければ、な」

その言葉を最後に、セイメイさんは庭の桜へ目を向けて、黙り込んでしまった。

ゲーム的に考えれば、確実にフラグである。

セイメイときて、ドウマンとくれば、だいたいこういった立ち位置になる人物なのかは予想が付くというものだ。

確実に、その人物と厄介な因縁でも出来るのだろうか、と辟易しつつ、屋敷をあとにする。

やがて件の『戻り橋』まで来ると、ちよいとその橋の下を覗き込んでみる。

夕方で薄暗くなっていたそこにじっと目を凝らすと、やがて何者かの影が見えてきた。

そこには、腰布を巻いた小鬼が二匹、ぎいぎいと唸っていた。

赤と青の、ボクの腰ほどの背丈の小さな鬼である。

はじめに渡った時の正体は、この小鬼だったのだ。大方、セイメイさんが使役している式神だろう。

誰かが橋を渡ると、この小鬼がセイメイさんに知らせるような仕組みになっているのだ。

ボクが手を振ると、二匹の小鬼はびくりと肩を震わせて、橋の柱の陰にさっと隠れてしまった。案外恥ずかしがり屋らしく、見かけによらず可愛らしい連中である。

そんな式神の様子にくすりと笑みを漏らすと、改めて橋を渡る。

すれ違ったプレイヤーが、橋の中ほどのところで不思議そうに首を捻っていた。

お稲荷様と鬼退治

「鬼退治？」

正式サービス開始から間もなく一カ月、第二陣のログイン開始日を間近に控えた中、ジパングの甘味処で団子をつまんでいたボクは首を傾げる。

すると隣で餡蜜を頬張っていたモミジが、スプーンを口にくわえたまま何度も頷き、餡蜜を飲み下した後で、目を輝かせながらこちらへと身を乗り出した。

「そう、鬼退治。冒険者ギルドで見つけたクエストなんだけど、面白そうじゃない？」

クエストの内容を確認すると、場所は都南部の羅城門。そこに人をさらったり、金品を奪ったりしている鬼族がいるらしく、その鬼族を懲らしめてくれ、といったものであった。

羅城門の鬼と聞けば、連想されるのはあの鬼の首魁であるが、四人だけで大丈夫なのだろうか。

「大丈夫大丈夫、推奨レベルは満たしてるし、タマモが来てくれたら事故らない限りは安心だし」

「ボクをあてにされても困るのだけど……」

確かに、陰陽師は支援職であり、様々な支援スキルが揃っているの
で戦力の底上げはお手の物なのだが。

ちなみに現在確認されている支援職は陰陽師と、先日解放された王
都《フィーア》で発見された吟遊詩人の二つのみであり、その支援能力もさるものながら、このゲームでも数少ないMP回復スキルを有している
ので、今では人気職業の筆頭とまで言われている。その割に人口は少ないが。

溜息を吐くボクの心情を察してか、五本の尻尾もだらりと力なくしな垂れている。

ともあれ、面白そうという点に関して同意できるのも確かであり、かの大江山の鬼を一目見たいという欲求も、確かにあった。

ぱちん、と扇子を閉じ、立ち上がる。

「まあ、折角のお誘いだし、ボクも一枚噛ませてもらおう。色々ときも試したいしね」

「やった！それじゃあ二人も待つてるし、早く行こう！」

無邪気な笑みを浮かべ、モミジがボクの手を引いて走り出す。

しばらくしてボクたちが到着したのは、純和風の街並みに混ざる、赤煉瓦屋根の建物。冒険者ギルド、ジパング支店である。

「お、来た来た」

「久しぶりだな」

冒険者ギルドの中に入ると、丸テーブルを囲んで座っていたハヤトとコタロウが手を振って出迎えてくれた。同時に申し込まれたパーティ勧誘を受諾し、ハヤト達のパーティへと加入する。

モミジに案内され件のクエストを受理すると、待ちくたびれたとばかりに立ち上がった二人と合流し、冒険者ギルドを出た。向かうは都の南、鬼の住む羅城門。

「そういえばタマモ、克蘭に勧誘されたんだって？」

その道すがら、ハヤトが不意にそう言った。

へえ、と感心した様子のモミジとコタロウを見て、苦笑いを返す。

確かに克蘭には勧誘された。それも攻略組である、グラムさんのところに。

だが、その話にはすでに決着が着いている。ボクは自分がやりたいときに、やりたいことをするスタイルなので、攻略の最前線に出張るつもりは無い、と丁重にお断りさせて頂いたのだ。

人口が少ない陰陽師であるボクを囲んでおきたい、という下心が透けて見えていたし。

そうハヤト達に話すと、三人は揃って神妙な顔をした。

「まあ、高レベルの陰陽師、というか支援職バフアーが欲しいのはわかるけど」「もうすぐ第二陣の参戦が始まって、大型アップデートが来るって噂もあるしねー」

まあ、気持ちはわからなくはないのだが。

ちらほらと現在のレベルキヤップである六十に到達するプレイ

ヤーが出始めた中、第二陣のスタートに合わせた大型アップデートが実施されるという、公式からの発表があったばかりである。

そこで実装されるという高レベルプレイヤー向けのコンテンツに備えて、戦力を増強しようという動きは攻略組としては何も間違っていない。

ただ、トッププレイヤー、廃人と呼ばれる層はなかなか意識が高すぎる。

流石のボクも、毎日十時間以上このゲームにかけられる程、時間を持て余している訳ではないのだ。

そんな話をしていると、やがて朱色の立派な建物が見えてきた。羅城門だ。

門の前には小さな堀があり、橋が三つ、等間隔にかかっている。

その内の一つ、門の正面にかかる幅の広い橋を渡ったところで、ハヤトが待ったをかけた。

「今、システムメッセージで確認が来た。どうやらここで戦闘になるみたいだから、準備を済ませておこう」

——クエスト【羅生門の鬼】のクエストバトルを開始しますか？

YES／NO

直後に表示されたシステムメッセージを一度保留し、各自装備の状態で持ち物を確認していく。

それが終わり、モミジが【ホーリーヴェール】を発動したのを見て、こちらもバフの詠唱を始める。

——朱雀、玄武、白虎、勾陳……
こうちん

目の前に表示された格子状の線を、指定された順番に指先でなぞっていく。

呪術【九字護身法】という陰陽師のスキルで、範囲内のパーティメンバーに魔法防御力上昇の効果を与える。なお、詠唱はボクの音声データを使った自動再生であるので、実際にボクが行っているのは指でなぞる動作だけだ。

範囲内の地面が光り、効果が発動したのを確認して、次のスキルを発動させる。

——天蓬^{てんぼう}、天内、天衝……

呪術【禹歩^{うほ}】。こちらは範囲内のパーティメンバーに、状態異常を一定確率で無効化する効果を付与する。

詠唱は同じく自動再生だが、地面に表示された光点を順番に踏んでいく必要があるため、「九字護身法」に比べると少し面倒くさい。さて、次だ。

胸元が光り、そこから【式盤】と呼ばれる正方形の道具が現れた。ボクの周辺を輝く星々が囲み、式盤の中央にある円形の部分がくるくると回転を始める。

これは占術【六壬神課】という、まあ星占いのようなものだ。

効果はランダムだが、デバフ系は現在確認されていないので安全、安心である。

やがて回転していた部分がぴたりと止まると、一瞬ボク達の身体を淡い光が覆った。

効果を確認すると、どうやら今回は魔法攻撃力上昇を引いたようだ。ううん、構成的には可もなく不可もなく、といったところか。

「何度見ても、陰陽師のスキルは独特だねえ」

モミジがしみじみとそう言った。

たしかに、他の魔法職は杖を構えるだけで済むところが、こっちは色々と専用の道具があったり、決められた所作に従わないといけなかったりと、何かと手間ではある。

禹歩とかは、戦闘中に上書きする時はどうすればいいのだろうかとか今から不安で仕方がないぐらいだ。まあ、効果時間が長いので、しっかりと準備をしていれば戦闘中に効果が切れる事は無いだろうが。

それに、手間をかけた分の効果は見込めるのだし、これぐらいが丁度いいのではないだろうか。

最後にモミジの【シールドオブイージス】が発動し、準備完了となる。

ちなみにこれは、一定量のダメージをカットする補助魔法だ。

頷き合うボク達。満を持してハヤトがイベントを進めると、辺りに不気味な笑い声が響いた。

「かかつ。来訪者共よ、妾の首でも獲りに来たか？」

羅城門の屋根から、影が躍り出る。

それは土煙をあげながらボク達の前に降り立つと、赤い瞳をぎらぎらとさせながらこちらを睨み付けた。

反応は様々。ほう、と感心するボクに、呆氣にとられるモミジ。

ハヤトはやや頬を赤らめ、コタロウは実にめんどくさそうに溜息を吐いた。

ボク達の前に現れたのは、鬼族の女性であった。

クズノハさんのように着物を肩まで肌蹴させ、大胆に開いた裾からはすうりとした白い脚が覗いている。

二十歳前後に見えるが、鬼族はある時期から外見が変わらないという設定なので、見た目通りの年齢ではないだろう。

ジパングでは珍しい金の髪をかき分けて、額からは二本の立派な角が伸びている。

女性がまた呵々と笑うと、弾かれた様に各々が武器を構えた。

「ほほう、これはまた威勢が良いな。しかし、ふむ、見ればなかなか美しい者達ではないか……獣は要らぬが」

その言葉に、思わず吹き出してしまう。

咄嗟に口元を袖で隠したのだが、どうやらワールフ族の耳は欺けなかったようで、コタロウはたいそう不機嫌そうにこちらを睨み付けていた。

いや、まあ、見た目は完全に二足歩行の狼なのだから、仕方がない。顎を撫でて何やら思考していたらしいイバラキがうむ、と手を打った。

「よし、女子は妾のそばめにしてやろう。光栄に思うがよい」

ふんぞり返って言うイバラキ。

そばめとは何か、とモミジが尋ねてきたのでその意味を教えるやると、モミジは困ったように笑った。

そばめとは側の女と書き、正妻以外に囲う女性の事であり、つまりはお妾さん、愛人である。

しかし、クズノハさんから始まり、この国に来てからは何かと女と

して扱われているので、なにやらむず痒い感じがする。いつもように、もっとさっぱりとした扱いで構わないのだから。

というかクズノハさんもそうなのだが、このゲーム一応十五才以上対象にはなっているが、その格好はセーフなのだろうか。

「さて、それでは力づくで連れて行くが、構わんな？　なに、痛いのは最初だけだ」

そしてその発言もセーフなのだろうか。

どこから取り出したのか、身の丈程ある金棒を担ぎ、イバラキが駆けだした。

「こつちだー！」

我先に前に出たハヤトが、手にしたタワーシールドを打ち鳴らす。裂けるような笑みを張り付け、イバラキが首元に食らいつかん勢いでハヤトへと迫る。

振り上げられた金棒が光を放ち、スキルの発動を知らせた。

「耐えてみよー！　【阿形の一撃】！」

雄叫びと共に、巨大な鬼の金棒が振り下ろされる。

衝突。耳をつんざく轟音が響き、地を震わせる程の衝撃が辺りへと走った。

大技の直後である。必ず隙が出来ると思ったコタロウが素早く背後へと回り、ボクも扇を取り出して真横へと移動を開始する。

そして鬼の一撃を受けきったハヤトのHPバーは大きく削れ、削れ

削れきって、ハヤトの身体は光になった。

「「……はあ？」」

残された三人の気持ちが一つになった瞬間であった。

激戦が、始まる。

お稲荷様と鬼退治②

さて、反省会である。

まさかタンクを失ったパーティがクリアできるはずもなく、揃って死に戻りしたボク達は再び羅城門に訪れていた。

イバラキの台詞どおり、敗北したら連れて行かれる訳ではないようだ。

どうやら防御スキルを使用していなかった事が、一撃で倒されてしまった一番の原因ではないかと、ハヤトはとても申し訳なさそうに言った。

いや、ボク達もまさか、あのスキルがカンスト間近のタンクを一撃で蒸発させるほどの威力だとは思ってもいなかったし、これに関しては仕方がない。

まだ詳しい情報が出ていないクエストだったのも、全滅した原因の一つと言えるだろう。

しかし、スキル以外の通常攻撃に関しては後衛職のボクでも一発は耐えられたので、あのスキルさえ凌いでしまえば、あとは何とかかなりそうな感じではある。

ハヤトには、イバラキがスキルを使用するそぶりを見せたらすぐに防御スキルを発動させ、とにかく即死を避ける。モミジはなるべくハヤトの回復に回る様に打ち合わせを済ませ、いざりベンジである。

前回と同じ支援魔法を全員にかけて羅城門の橋を渡ると、再び頭上から影が躍り出た。

「懲りずにまた現れたか、来訪者よ。先程は取り逃がしてしまったが、此度はそう上手く逃げおおせると思うなよ」

金髪の鬼、イバラキが金棒を振り上げて雄叫びをあげる。

「今度こそ、守って見せる！」

ハヤトが腰から剣を抜き放ち、盾を構えて突進する。

先程の件で責任を感じているのか、後々コタロウやモミジにからかわれそうな台詞と共にイバラキに切りかかった。

こちら手早く陣形を整え、側面に回り込んだボクは扇を唇に添えて、イバラキに向けてふつと息を吹いた。すると、吐いた息は次第に白煙へと変わり、ボク達の姿を覆い隠すように周囲に広がっていく。

妖狐族の種族スキルであり、敵の攻撃命中率を低下させる中級妖術【煙々羅】である。

「ええい、妖狐族の幻術か！」

苛立たしげに振り上げられた金棒が、淡い光を纏う。

それを見たハヤトが再び盾を構え、深く腰を落とした。全身を光が包み、防御スキルが発動する。

「【阿形の一撃】！」

先程ハヤトを一撃で屠った必殺の一撃が、裂帛の気合と共に振り下ろされる。

衝突。地面が揺れ、鈍い衝撃音が響く。舞い上がった土煙に、思わず目を細めた。

「おおお！」

ハヤトが叫ぶ。

盾を振り上げると、鬼の金棒は振り下ろされた時の軌道をなぞる様にして打ち払われた。

耐えきった。ハヤトのHPバーは、まだ二割を残している。

間髪入れずモミジが回復魔法を発動させ、減った体力を即座に七割にまで戻す。

そして、大技を放った後のイバラキは、まさか耐えられるとは思っていなかったのか、金色の目を見開いたまま、身動きが取れずにいる。やはり、あのスキルは威力が高い分、使用後の硬直時間が非常に長いのだろう。

その隙を逃さず懐へともぐりこんだコタロウの拳が、光りを放ちながらイバラキの脇腹へと深く突き刺さった。

「オラァー！」

怒涛の五連撃。いつぞやか見たスキル、【五連鉄拳】である。

こちら負けじと【狐火】を放つと、イバラキの表情が目に見えて歪んだ。どうやら火が弱点属性らしい。金色の瞳がぎらりとこちら

を睨み付けた。

だが、まだタゲはハヤトから動いていない。あまりヘイトを稼がないように意識しつつ、妖術で攻撃を行いながらモミジの傍まで後退する。

状況はかなり安定しているが、まさかあのスキルだけ警戒していれば勝てる程、このゲームのボスは甘くないだろう。

大きな変化があったのはそれから数分後、イバラキの体力を残り三割ほどにまで削った時だった。

舌打ちを一つ、イバラキはハヤトの攻撃を受け流しつつ跳躍、後ろへと大きく距離を取る。

乱れた金髪をかきあげて、彼女はどこか蠱惑的な笑みを浮かべた。紅色の唇から、熱っぽい吐息が漏れる。

「見事、誠に見事である。よくぞ妾をここまで楽しませた」

するりと彼女の手から金棒が滑り落ち、鈍い音と共に石畳に突き刺さった。

かんらんかんらと鈴を振るような笑い声を響かせながら、イバラキはすつと空になった左手を掲げ、掌をこちらへと向ける。その仕草に、ボク達は半ば反射的に各々の武器を構えていた。

「しかし、これ以上長引いて厄介な連中に来られても困るのでな、早々に目当ての獲物を頂くとしよう」

そう言って彼女が掲げた掌を力強く握りしめると、ボクの足元に六芒星に似た文様が浮かび上がり、そこから荒縄が幾つも、まるで蛇の如く飛び出して、呆気にとられるボクの身体に瞬く間に巻き付いた。

——イバラキの【かごめかこめ】が発動

↓タマモに【移動不可】、【スキル使用不可】、【アイテム使用不可】の効果

「タマモー！」

慌てた三人が叫ぶ。

随分ときつく縛られているように見えるが、このゲームでは痛覚の再現は行われておらず、精々が軽い圧迫感を覚える程度なので、見た目ほど苦しくはない。

しかし、荒縄で全身を拘束されるというのはなかなか、少々、これでも一応女子ではあるので、なけなしの羞恥心が刺激されなくもないのである。

で、あるので、早々にこの状況は改善して頂きたい。

「さてさて、これでお主は籠の中の鳥となった。ふふ、良き声で鳴いてくれそうじゃ」

ぐい、とイバラキが左手を引けば、じりじりとボクの身体が彼女の方へと動き出す。

これは不味いと思ったのか、それを見たハヤトとコタロウがイバラキに向かって駆けだした。

「タマモ、大丈夫!？」

ボクの傍まで駆け寄ったモミジが、巻き付いた荒縄をどうにかしようとして両手で引っ張り、杖を差し込んで少しでも緩めようとするが、当然ながら荒縄はびくともしない。

恐らくは何か条件を満たさなければ解除されないギミックになっているのだろう。

可能性が高いのは、一定時間内にイバラキの体力を削り切る事なのだが――

「攻撃が、通らない!」

ハヤトが振り下ろした剣が、まるでそこに見えない壁でもあるかのように、イバラキの肌に触れる直前ではじき返される。コタロウの拳もまた同様で、二人はイバラキに一切のダメージを与える事が出来ないうでいた。

と、なんと、このスキルを解除する方法は何だ。

そうしている間にも、ボクの身体が徐々にイバラキの方へと引き寄せられている。

「何、恐れる事は無い。我等が城に連れ帰り、蕩ける程に愛でてやろう」

甘ったるい声をどこか遠くに聞きながら、ボクは思考を巡らせる。時間内にボスの体力を削り切る事が条件ではないとすれば、正しい解除条件は何か。

先程から、モミジが何とか解除しようと荒縄と悪戦苦闘しているのを見ると、接触によって味方に受け渡せるタイプの状態異常ではない。

荒縄自体を破壊するタイプかとも思ったが、体力表示がされていないのでその線もないだろう。

いや、待て。

ほんの僅かな違和感を感じ、今までのログを確認する。

そうして一文字一文字、決してその違和感の正体を見落さないようにと目を通し、とうとうボクは“それ”に辿り着く。

かちり、とボクの中で何かがしつかりとはまる音がした。

「ハヤト、コタロウ、こっちに来てくれ！」

羅生門の真下、未だイバラキとにらみ合い、武器を振るっていた二人へ向けて声をあげる。

何事か、と振り向く二人の後ろで、イバラキが静かに目を細めた。

「スキル名がそのまま答えだったんだ、【かごめかごめ】ではなく、【かごめかごめ】だ！」

そう、僅かな違いから、てつきり童謡にもある【かごめかごめ】がそのままスキル名になっているものだと思い込んでいたが、あのスキルの名称は【かごめかごめ】、つまり【か^籠め^女か^罠め】なのだ。

つまりは、籠の女を囲め。

そして対象のプレイヤーを他のプレイヤーがぐるりと囲めば、その光景はスキルの元ネタであろう【かごめかごめ】の遊びそのものとなる。

「なるほど、そういう事か！」

以外にも、一番早くボクの言葉の意味を理解したのはコタロウであった。

いまだに何のことかと首を傾げるハヤトの背を叩き、持ち前の俊敏さでさっとボクの傍まで駆け寄ってくる。

どうやらこのスキルを使用している間はイバラキ自身も動きを封じられるようで、こちらへと後退する二人への追撃はなかった。

そうして三人が集まると、丁度三角形を描くような形で、ぐるりと

ボクの周りを囲う。

足元の魔法陣が一層激しく輝き、甲高い、ガラスが割れるような音と共に、ボクの身体を縛っていた荒縄が砕け散った。　　どうやら、ボクの推測は当たっていたらしい。

状態異常が解除された事を確認すると、三人に礼を言つてイバラキから距離を取った。

「妾の術を破るとはなんと小賢しい、ならば、これならばどうするー」
美しい顔を僅かに歪めながら、イバラキが再び左手を振りかざすと、そこからゆらりゆらりと金色の光が立ち昇った。明らかに、何かしらのスキルが発動する前兆である。

咄嗟にハヤトが盾を構え、前に出る。

さあ今度は何が来る、と身構えたところで、事態は思いもかけぬ展開をみせた。

閃光。

澄み切った鞘走りの音が響く。

「ぬ、ぬう……っ!？」

苦悶の表情を浮かべるイバラキ。

金色の光を纏った左腕が、ぼとりと羅城門の石畳を転がった。

小さくモミジが悲鳴をあげる。

「やれやれ、ようやく見つけたぞ、イバラキよ」

白い狩衣を纏い、腰に刀を差した、二十代半ば程であろう男。

己の左腕を切り落としたその男へ、イバラキは射殺さんばかりの鋭い視線を向けた。

「おのれヨリミツう！　またしても邪魔だてするか！」

「無論だ。　貴様らこそ、そろそろ観念してはくれんか」

まさしく鬼の如き形相をみせるイバラキに対し、涼しい顔のまま男が答える。

そうして男が刀を構え、じりじりと彼女との距離を詰めはじめると、イバラキは舌打ちをひとつ、僅かながら穏やかになった顔をこちらへと向けた。

「無粋な邪魔が入った故、此度はここまでとしよう。　そんな左腕は、褒

美としてそなたらしくれてやる。次はとくと可愛がつてやる故、楽しみにしているといい」

魔性の笑みを浮かべ、イバラキは大きく飛び上がり羅生門の向こうへと姿を消した。

「ええい、逃がさんぞイバラキ！」

未だに立ち呆けたままのボク達には目もくれず、男はその後を追ってさっさと走り去っていく。

はあ、と誰ともなく息を吐いた時、戦闘の勝利を知らせるファンファーレが鳴り響いた。

経験値と共に得られたのは、【鬼の左腕】というクエストアイテム。【羅生門の鬼】クエスト自体の報酬は、冒険者ギルドに戻ってから受取となるようだ。

「え、あれで終わり？」

どこか間の抜けた、モミジの声が木霊した。

お稲荷様とお婆さん

クエスト【羅城門の鬼】のクリア報酬は、【茨木童子の反物】という素材アイテムだった。

防具の作成等に使用される物らしいが、あいにくとボクの知り合いに生産職のプレイヤーはいない。

しかし反物といえば呉服、呉服といえば、呉服店で出会ったあの人。そう、九尾の妖狐族、クズノハさんである。

と、いう訳で、ボクは今ジパングの街にある、件の呉服店まで足を延ばしていた。

「おや、これはまた、久しぶりでありんすなあ」

目的の人物は、丁度呉服店の軒先で煙管を手に、紫煙をくゆらせていた。

こちらを確認するなり、ふわりと柔らかな笑みを浮かべるクズノハさんの傍まで歩いていくと、軽く頭を下げる。

「長らく顔も見せず、申し訳ありません」

「いや、いや、また顔を見てようござんした。まあ、どうぞお座りなんし」

促されるまま、緋毛氈^{ひもうせん}——ひな壇等に敷かれる、緋色のフェルト布——が敷かれた長椅子へと腰を下ろすと、クズノハさんはほほう、とその笑みを深めた。

その視線の先には黒い五本の尻尾が。言わずもがな、ボクの尻尾だ。

「あらあ、ちよいと見ん間に五尾になって、流石は来訪者でありんすねえ」

「いえ、クズノハさんにとっては子狐も同然でしょう」

野点傘^{のだて}の下、十四本の尻尾がゆらりゆらりと揺れる光景は圧巻の一言である。

道行くプレイヤーが、何事かと目を丸くするのも仕方がない。

細く煙を吐いた後、かつんと煙管を叩いてクズノハさんが笑う。

「実は折り入ってお願いがあるんですが」

そうしてボクは、クズノハさんにこれまでの経緯を説明した。

冒険者ギルドからの依頼を受け、羅城門でイバラキという鬼族と戦い、勝利したこと。

そしてその報酬として、『茨木童子の反物』というアイテムを手に入れたこと。

実際にインベントリから取り出して見せると、クズノハさんは興味深そうにその反物を手に取り、やがてふむ、と細い指先で顎を一撫でした。

「鬼の反物とは、これはまた珍しい品でありんすなあ」

「実はこの反物で着物を一着、仕立てて頂こうかと思っているのですが、恥ずかしながら職人のあてが無く、クズノハさんの力をお借りできないかと伺った次第で」

「成程。まあこの品を扱える職人ともなれば、この国でも限られてきんすからなあ」

ふむう、とクズノハさんが顎に手を添えて考え込む様子を、固唾を飲みじつと見つめる。

そうしていると、ゆっくりと開かれた金色の瞳がつい、とこちらへ向けられたかと思えば、クズノハさんは優しく微笑んでボクの頭を撫でた。

それはまるで母が子をあやすように温かなもので、ボクは僅かに顔が赤くなるのを感じつつ、しかし余りにも心地良いその感触をしばし目を閉じて甘受する。

やがてほんのりとした体温を残して撫でていた手を引っ込めると、クズノハさんは再び煙管を咥えて立ち上がった。

「ようざんしょう、他でもないタマモの頼みじゃ。まあ、ちつと待っててくんまし」

尻尾をゆらゆら、クズノハさんが呉服屋の暖簾をくぐり、しばらくした後に一通の手紙を手にして戻ってきた。

前回とは違い、この手紙は鳥になったりはしないようだ。

クズノハさんはその手紙をボクの襟元にすつと差し込むと、ぽんと

肩を叩き、ある方を指さした。

「わっちの紹介状でありんす。これを持ってあそこに見える山の麓に住む、シズノという者を訪ねなんし。わっちが知り限り、一番の職人でありんす」

にこりと微笑みながらそう言うと、クズノハさんはまたボクの頭を一撫でし、また会いましょうと一言残して立ち去っていく。

まだじんわりと温かいそこへそつと手をやって、ボクは九本の尾と紫煙を揺らすその背に深々と頭を下げるのだった。

そうして頭をあげると、早速クズノハさんが指さした山へと向かう。

さて、突然だがここでジパングの都の構造を説明しよう。

大まかな構図としては、かつての平安京をイメージしてもらうのが一番わかりやすい。

四角形の堀でぐるりと囲まれた中を大小様々な道がマス目状に走り、中央には白塗りの黄龍城、その傍には度々足を運んでいる陰陽寮が据えられている。

そうして都の外へ出るための門は全部で十二門存在し、それぞれに名前があるが、頻繁に利用するのはその中でもひと際立派な四方の門。

即ち青龍、白虎、朱雀、玄武門であり、それぞれ東西南北に存在している。

そして今回クズノハさんに教えてもらった場所は、北にある玄武門を抜けたその先だ。

ちなみに初めに訪れた港は、南の朱雀門を抜けてすぐのところにある。

「さてと、この辺りの敵相手なら苦戦はしないだろうけど、念のために、と」

玄武門を抜けて少ししたところで、ボクは懐から一枚の呪符を取り出し、あるスキルを発動する。

すると呪符が独りでに浮き上がったかと思えば小さな音と共に白煙を吐き出した。

もくもくと立ち昇る白煙が風で流されると、そこには鉄の斧を手にし、背に小さな箱のような物を背負った小柄なモンスターが。

陰陽師のスキル、式神召喚【前鬼】で呼び出した赤い小鬼、前鬼である。

前鬼は辺りをきよろきよろと確認した後、ボクの方へ向き直っておう、と唸って手をあげた。

武器を見れば察する事が出来るが、彼は前衛向き、タンク型能力を持った式神だ。

そして対となるスキル、式神召喚【後鬼】を使用して呼び出す水瓶を抱えた青鬼、後鬼が後衛、主に回復魔法を得意とする式神となっている。

性能としてはどちらも魔物使いや召喚士デイマリーサモナーが使役する同タイプのモンスターよりやや劣るものではあるが、種族的にステータスが火力特化となっているボクにとって、防御や支援を担当してくれる彼らはかなりありがたい存在だ。

ちなみにスキルの制約上、前鬼後鬼を同時に召喚する事は出来ない。

まあそんな事が出来れば他のペット職のお株を奪ってしまうし、仕方ないだろう。

「大丈夫だと思うけど、もし敵に襲われたら宜しく頼むよ」

そう言って、ボクの腰ほどの高さしかない前鬼の頭を一撫ですると、彼はうごうごと唸りながら軽い足取りでボクの前を歩いていく。

そうして頼もしい護衛と共にしばらく歩いていくと、ボク達は山の麓に広がる大きな森の入り口へと到着した。

クズノハさんに教えてもらった山はここで合っている筈だが、困ったな、これは森を探索しないと例の職人さんに会えないのではないだろうか。

ふむ、と顎に手を添える。

ここまでの道中に出現するモンスターのレベルから推測するに、森の中に入っても今のボクのレベルで苦戦する強さの敵は生息していないだろうし、入ってみるか。

「もしもの時は頼むよ、相棒」

うごご、と前鬼が斧を振り上げる。

周囲を警戒しつつ森へと立ち入っていくと中は意外と明るく、鮮やかな新緑の葉がゆらりゆらりと揺れるその穏やかな光景を見て、ボクは手にしていた扇をすつと帯に差し込んだ。

どうも始まりの森の苦い思い出から、こういった森林系のフィールドには苦手意識があったのだが、この分だと大丈夫そうである。

少なくとも、凶暴な獣や虫系のモンスターは生息していないだろう。

小鳥達のさえずりや小川のせせらぎに癒されつつ道なりに進んでいくと、やがて一件の古民家が見えてきた。傍を流れる小川には、水車小屋も建てられている。

「どうやらここみたいだね。前鬼もお疲れ様、帰りもまた頼むよ」
スキルを解除して前鬼を呪符へと戻すと、ボクは改めて古民家へと目をやった。

大きさからして、職人さんが一人で暮らしているのだろうか。

茅葺の屋根は所々が苔むしており、建てられてから随分と経っていることが伺える。

「風情があつていいな、こういうの」

今は咲いていないが、庭に植えられているのは梅の花だろうか。

もうしばらくすれば、綺麗な花を咲かせてくれるだろう。

「おや、はじめてみる顔だねえ」

そうやって辺りの光景に見入っていると、不意に背後から声がかかった。

振り向けば、そこには渋黄緑の着物姿をした、ご年配の女性が一人。少し腰が曲がっているが背には山菜が詰まった籠を背負っており、まだまだご健脚そうである。

「失礼、素敵なお庭だったものでつい。シズノ様でお間違いないでしょうか？ ボクはタマモ、妖狐族ですが、来訪者ですのでこの地の生まれではありません。都のクズノハさんの紹介で伺いました」

「たしかに、シズノはあたしだよ。クズノハ様の紹介、ということは着

物の仕立てかい？」

「はい、こちらの生地で一枚、お願いできませんか？」

「ほうほう、鬼族が織った反物だねえ、見るのは随分久しぶりだ。まあ立ち話もなんだ、お入んなさいな」

そう促されて民家の中へとお邪魔させて頂くと、ボクはほう、と息を吐いた。

土間にかまど、天井には大きな梁が走り、板張りの部屋の中央にある囲炉裏の中で、ぱちぱちと炭が弾けている。

「まあ、適当なところで寛ぐといい。さて、あたしあ茶でも沸かそうかねえ」

現代ではもう殆ど現存していない古き良き光景に感動していると、どさりと籠を下ろしたシズノさんが肩を揉みつつ部屋の奥へと消える。

寛げと言われたが、どうしたものかと右往左往した後、ボクは結局囲炉裏の前でちよこんと正座して彼女を待つことにした。

今でも囲炉裏を置いている家はあるらしいが、うちのおばあちゃんのところはがつつり洋風のお屋敷で、実家はマンションだし、本物は初めて見たな。

つて、ゲームの中だから本物と言えば語弊があるが。

そうこうしているうちに、シズノさんが茶碗を二つ持って戻ってきた。

よっころしよ、とボクの向かいに腰を下ろすと、傍に置いてあった茶釜を天井から下がったフックのような部分にひっかける。ああ、そういう風にして使うのか……。

「さてと、それじゃあ、一息入れたらちよいと寸法だけ図らせてもらうよ」

火箸で炭を転がしながら、シズノさんが何の気なしに零した言葉に、ボクは思わず目を丸くした。

その様子を見て、シズノさんが目を細める。

「なんだい、そんな鳩が豆鉄砲食らったような顔して」

「いえ、いくらクズノハさんの口利きがあつたとはいえ、まさか二つ返

事で受けて頂けるとは思っていなかったもので……」

「そらあんた、あの御方を安く見すぎってもんだよ。あの御方には、それからもう世話になってるからね。それに、何もタダでやるって訳じゃない」

差し出された茶碗を受け取り、お礼を言ってそつと口を付ける。

柔らかに優しい香りが口内に広がり思わず頬が緩むも、すぐにそれを引き締め、シズノさんへと向き直った。

「お代でしたら勿論お支払いします。お幾らですか？」

「ふうむ、そうだねえ、生憎錢には苦労してないからねえ」

お茶をすすりつつしばらく視線を泳がせた後、なにやら思いついたのか、彼女はその皺だらけの顔ににんまりと笑みを浮かべ、こう言った。

「それじゃあまあ、その身体で支払って貰おうかねえ」

あの、このゲーム成人指定ついてないんだけど……？

お稲荷様と一張羅

さて、シズノさんから要求された対価だが、なんてことはない、彼女の代わりに薪を割り、森で山菜を集めてくるといった内容のものであった。

現在の筋力値で大丈夫かどうか僅かに不安であったが、実際にやってみると問題なく薪割り用の斧を扱うことができた。

考えてみれば、いつもはシズノさんがやっている作業であるのだし、いくら魔法職とはいえプレイヤーの自分が行えないはずがないのである。

そうして順調に薪割りを終えたボクは現在、森の中に入り山菜集めを行っていた。

背に籠を背負い、食べられそうな山菜を見つけては、【鑑定】スキルを使用して一つ一つ確認を行っていく。

——余談ではあるが、ボクはこれまでこういった余分なスキルを取得していなかったので、この【鑑定】スキルを取得する為に貯め込んでいたスキルポイントを消費する羽目になった。

キノコや木の実、薬草など様々な山菜を籠に詰めて小屋へと戻れば、ちょうどシズノさんが庭で洗濯物を干しているところだった。

「おや、もう戻ったのかい。採ってきたものは戸の傍にでも置いといておくれ」

そう言われ土間へ入ったところに籠を置くと、次は採寸である。

庭で一仕事終えたばかりのシズノさんが、巻き尺を手にてきぱきと手際よく寸法を測っていく。

「おやおや、これは驚いたねえ。ものを拵える前にわかってよかったよ」

採寸の際、ボクの腰に手を回していたシズノさんが呆れを含んだ声でそう言った。

どうやら仕立てる着物のデザインを一から考え直すらしい。

いらぬ手間を増やしてしまい、なんとも申し訳ない気持ちになりつ

つも、どこかやる気に満ちた笑みを浮かべる彼女を見てみると、えもしれぬ不安感に襲われるのは何故だろうか。

いや、あまり気にしないようにしよう。

出会ってまだそう時間は経っていないが、彼女はまだ良識のある人物のはずだ。

「それじゃあ、あたしはすぐ仕事に取り掛かるとしようかね。それに時間がかかるだろうから、えーっと、そうそう、タマモって言うたかい？　タマモには庭の洗濯物を取り込んでもらおうかねえ」

「わかりました。シズノさんの着物、楽しみにお待ちしてます」

^{かぶり}頭を振って気持ちを切り替えると、シズノさんに頼まれた仕事を片付けに庭へと向かう。

しかし、着物を一枚仕立ててもらうのだから、丸一日は出来上がるのを待つことになるだろうとたかを括っていたのだが、流石ゲームといふかなんというか、まさかその日のうちに受け取れるとは思ってはいなかった。

そんな事を考えながら、物干し竿に下がった洗濯物を取り込んでみると、不意に電子音が鳴り響いた。最近よく耳にするようになった、メッセージの受信音である。

開いて確認してみると、送り主はモミジ。

例の反物を加工できる生産職のプレイヤーが見つかったのでは非紹介したい、という内容のものであった。

申し出自体は凄くありがたいのだが、残念ながら少し遅かった。

クズノハさんからシズノさんを紹介される前であれば、一も二もなくその申し出を受けていたのだが。

少し心を痛めつつ、モミジにこれまでの経緯を纏めた内容のメッセージを返す。

息を吐き、さて仕事の続きだと残った洗濯物に手を伸ばした直後、再び響いた受信音に小さく肩がはねた。どうやら、早くもモミジからの返信があったようだ。

「流石というか、モミジらしいというか……」

その文面からは随分と興奮している様子がありありと読み取れる

が、要約すると、新しい装備に興味があるので今から向かう、との事であった。

ちなみに彼女達は現在王都《フィーア》に拠点を移しており、件の生産職のプレイヤーともそちらで知り合っただけらしい。

通常であればかなりの時間がかかる距離ではあるが、ジパングが解放されてからは「来訪者の石碑」を利用する事で、町同士の移動がかなり簡単になっている。

尤も、移動できるのは一度訪れた事のある場所だけなので、ボクが王都に向かうとなった場合は通常通り陸路を進む事になるのだが。

ともあれ、モミジもこの「来訪者の石碑」を利用して来るだろうから、まあだいたい三十分もあればここまでやって来れるだろう。

ああ、そういえばハヤトやコタロウも一緒に来るのだろうか。そこは確認していなかったな。

「まあ、流石にまだ出来上がってはいらないか」

洗濯物を手に戻ってくると、居間の奥、部屋を隔てる障子の向こうから僅かに衣擦れのような音が聞こえてきた。どうやらシズノさんはあれからずつと着物を仕立てているらしい。

この分だと、もうしばらく待たなければならぬようだ。

ただ待っているのも勿体ないので、取り込んだ洗濯物をきちんと畳んでおき、ついでに部屋の掃除でもして時間を潰すでしょう。

とはいえ、和室の掃除なんてあまり経験がないので簡単な掃き掃除程度しか出来ないけど。

「ごめんくださいーい！」

そうやって時間を潰していると、外からばたばたと足音が聞こえたかと思えば、聞き覚えのある澆刺とした声が玄関から響いてきた。どうやらモミジが到着したらしい。

予想していたよりもかなり早い到着だが、装備を新調するぐらいでそんなに急がなくてもいいのではないかと思ってしまう。

やれやれと腰を上げて玄関へと向かうと、いつもの様に満面の笑みを浮かべたモミジが立っていた。どうやら彼女一人のようだ。急いで来た割には、あまり息を切らせた様子はない。治療士^{ヒーラー}とは思え

ないバイタリテイの高さである。

それはともかく、とりあえずモミジに歩み寄りその小さな額に手刀を落としておく。

ぎゃ、とモミジが声をあげてうずくまった。

「痛いです……」

「ダメージは通ってないだろうに。今、家の奥で着物を仕立ててもらってるんだから、あまり騒がないように」

「ご、ごめんなさい……」

まったく、元気なのは良いことなのだが、モミジは元気すぎるくらいがあるから困りものだ。

「そういえば、先程のメッセージの件は申し訳なかったね。せっかく気を遣ってくれたのに」

「ううん、気にしないで！ ああでも、その生産職の人、今回の件抜きでもタマモとは会ってみたいって言ってたから、もし王都に来ることがあったら紹介するよ！」

「ありがとう、ボクも生産職の人達には興味があるし、その時は是非お願いするよ」

機会があれば、是非戦闘職以外にも手を出してみたいものだ。

やるとすれば調理師、裁縫師あたりだろうか。

そういえば、以前ツヴァイの町で釣りをやってみたいと思い至ってから今まで、結局やらず仕舞いだったなあ。

ジパングは海に面した国であるし、そろそろそういったバトルコンテツ以外にも興じてみようか。

「待たせたねえ。おっと、そっちはタマモの知り合いかい？」

そんなこんなで話し込んでいると、部屋の奥からシズノさんが着物を手に戻ってきた。

「何、あんたモミジって名前かい。そりやあなかな、面白いね」

ボクが簡単にモミジの紹介をすると、シズノさんはそう言って何やら意味深な笑みを浮かべ、手にした着物を広げた。

あらわになったそれを見て、ボクとモミジは同時に息を飲んだ。

それは赤、橙、青。色鮮やかな紅葉柄で彩られた、なんとも華や

かで美しい一枚であった。

——【鬼姫の着物・紅葉】

鬼の反物を用いて仕立てられた着物

装備者の魔力を高めるまじないが施してある。

「凄い、綺麗……」

「えっと、これ、ボクがお願いした着物でよかったですよね？」

「当たり前だろう、他に誰がいるんだい。ほら、せっかく拵えたんだ、さっさと着て見せておくれ」

呆氣に取られているうちに、ぐいぐいと背を押されて奥の部屋へと放り込まれてしまった。

いや、凄く嬉しい。感動する程素晴らしい品ではあるのだが、それゆえにボクなんか袖を通してもいいのかと躊躇してしまう。

数分、いや、数十分は経っただろうか。

固唾を飲み、大きく息を吸い込んでから、ボクはようやく意を決して目の前の着物に袖を通した。

まあ袖を通したと言っても、実際は装備品を変更するだけなので、一人で着付けをする訳ではないのだが。

というか、これだけ立派な品物となると、一人で着付けをするには少し無理がある。

纏っていた狩衣がぱつと光り、テクスチャが鬼姫の着物のものへと切り替わる。

「えーっと、これは……」

無事、着替えは終わった。

終わったのだが、なるほど、こうきたかあ……。

着心地は素晴らしく、鮮やかな紅葉柄もボクの好みだ。振り、と呼ばれる袖の下部分が少し長めだが、身体の動きが阻害される訳でもないのでまあ問題はない。

では何が問題かと問われると、それは全体的なデザインであった。ううむ、これはシズノさんは勿論の事、クズノハさんの好みが入っているのか、それとも元々のデザインがこういったものなのか……。もしも後者であれば、運営に一言物申す必要があるかもしれない。

「タマモー、どうしたのー？」

「いや、待たせてしまつて申し訳ないのだけど、ちよつとね」

とはいえ、いつまでもぐずぐずしてもしようがない。

ため息交じりに応えると、気のせいかな先程よりも重くなった手で障子を開いた。

おお、とはどちらの声か。

突き刺さる視線に、思わず身じろぎした。

「可愛い、可愛いよタマモー！」

「クズノハ様もそうだが、やはり妖狐族の女子は着物がよく似合うねえ」

「いや、しかしこれはボクには不釣り合いなのは……。モミジも、あんまり見ないでくれると助かる……。その、少し恥ずかしい」

「何言ってるのすつごく似合ってるよ！　これ、前帯っていうやつでしょ？　うわ、前短つ、気を付けないと屈んだ時に見えちゃうよ！」

モミジ、確かに珍しいデザインだけど、ちよつとテンション上がりすぎじゃないかな。

そう、絢爛なこの着物で唯一ボクの頭を悩ませる部分、それは前の部分だけがミニスカートのように短くなっている所だった。形としてはロングテールスカートに似ているだろうか。

前帯と呼ばれる結び目を前にする帯の締め方をしているのだが、リボンの様な結び目から垂れる前掛けのような部分が、ちよつと太ももから膝辺りまでを覆うような形になっている。

これはなかなか面白いデザインだとは思ふ。

だが、その丈の短さのせいで、少し動くとき揺れる帯の合間から普通に脚が見えてしまうのはいただけない。

あくまでアバター、ゲーム内の分身としての身体とはいえ、正直かなり恥ずかしい。

普段着物や浴衣を着ることはあったが、ここまで攻めた感じのものは初めてだった。

「普段はゆつたりとした服ばかり着てるからわからなかったけど、タマモつて足長いねー。モデル体型っていうの？　羨ましいなあ」

「いや、その辺はキャラメイクでいくらでも変更できるからね？　リアルボクも同じ体型だとは限らないのだけれど……」

実際はほとんど変わらないのだけど、間違いなく食いついてくるだろうから黙っておこう。

「うむ、丈は問題なさそうだね……何やら言いたそうだが、顔を真っ赤にしたままじゃちつとも怖くないよ。せっかくの別嬪なんだから、これを機にちよつとは女子らしくすることだねえ」

「いえ、シズノさんにはとても感謝しているのですが、しかしこれは……」

「大丈夫だって、治療^{ヒーラー}士用の装備にも同じぐらい短いのあるし、がつつりゴスロリみたいなやつだってあるんだから」

「運営はほんとに何をしているんだ……。いや、お洒落装備はこの手のゲームのお約束ではあるのだけれど」

なまじ性能が高いのと、紹介してくれたクズノハさん、こちらをお願いを快諾してくれたシズノさんへの恩があり無下にはできない事が、余計に悩ましい。

「いいなあ、私も作ってもらおうかなあ」

「おっと、タマモはクズノハ様からの紹介で特別に仕立ててやったが、あんたは別だよ」

「えー！」

着心地もいいし、まあ慣れるしかないのかな……。

とりあえず、ちゃんとインナーが見えないように設定がされているかどうかだけ後で確認しておこう。

もし見えてしまうようなら、短パンでも履いてごまかそうかなあ。そう一人で悩んでいると、かしやりとシャッター音が響く。

びくりと肩を跳ね上げて音のほうを見やると、指で作ったフレーム越しにこちらを覗くモミジとぼつちり目が合った。

どうやら、スクリーンショットを撮影していたようだ。

成程、スクリーンショットをね……。

「ちよつと、どうして背を向けるのかな。ねえ、まさかメッセージ打つてたりしないよね、たしかあれってスクショが添付出来た気がするの

「だけど、まさかやってないよね？」

「大丈夫大丈夫！」

「いや、今ちらつと見えたからね？ 誰に送るかはだいたい見当がつくけど、本当に恥ずかしいから。あの、とりあえずこっち向こうか……」

「あつ、意外とタマモって力強い……ってなんだか目からハイライトが消えてる気がするんだけど、気のせいかなー！」

説得の結果、問題のスクショが拡散される危機は回避することができた。

まあほぼ普段着になるだろうから、いつかはあの二人にもこの姿を見られることになるのだけれど。

まったく、頭が痛い話である。

掲示板②

【異世界へようこそ】TAW総合スレPart12 【Wave2開始】

・ここはVRMMORPG【The Another World】の総合掲示板です。

・ガイドラインに抵触する内容の書き込みは禁止。

・マナーを守って利用して下さい。

・次スレは＜＞980を踏んだ人が責任をもって立てる事。

―中略―

671 名前 名無しの召喚士

いよいよWave2だなあおい！

672 名前 名無しの召喚士

のりこめーへ

673 名前 名無しの魔法使い

そういえば第二陣のスタート明後日からか

これはアインの方が賑やかになるな

674 名前 名無しの魔法使い

公式イベントもあるらしいからな、お前ら遅れんなよ

675 名前 名無しの吟遊詩人

は？ 開催地アインかよめんどくせえ

676 名前 名無しの剣士

＜＜ 675

むしろなぜアイン以外だと思っていたのか。

そら新規ユーザー向けのイベントなんだから初期の町に決まってるだろ。

677 名前 名無しの治療術士

詳細が気になるところだが、公開は当日だったっけ？
待ち遠しいぜ

678 名前 名無しの無職

わいWave2参加者、先にユーザー登録だけ済ます

先輩共、ログインしたらとりあえず何をしたらいいか教えてください
い

679 名前 名無しの魔物使い

まずは服を脱ぎます

680 名無しの錬金術師

脱いだ服を畳みます

681 名無しの魔法使い

脱いだ服を憲兵さんにフオオオオオイ!!!

682 名無しの陰陽師

>>678

町の人と仲良くなってクエスト進めるなり、早速モンスターと戦つてみるなり自由よ(・ω・)

もしレベル上げをするなら、事前に冒険者ギルドで登録手続きと雑魚狩りのクエストを受けておくと色々捗るのよ(・ω・)

683 名無しの剣士

>>679―682

通報した

683 名無しの魔物使い

なんでやまだ脱いでへんやろ!

684 名無しの魔法使い

>>682

絶滅してなかったのか・・・お前何歳だよ

685 名無しの陰陽師

>>684

らんらんは不滅なんだよ(・ω・)

686 名無しの拳闘士

まあはじめは各ギルドからクエスト受けて金策+レベリングが安定だな

先の町に行くにもレベル上げんどだし

687 名無しの弓術士

クランに入って色々教えてもらうのも手かな

どうせ数日は新規ユーザー目当てのクラン勧誘とか増えるだろうし

688 名無しの無職

>>682

>>686―687

あざす！ とりあえず色々やってみるわ！

689 名無しの弓術士

まあまだレベルキャップも60のままだし、のんびりやってもすぐ追いつくさ

690 名無しの剣士

g g r k sで終わる話なのに、あつたけえなお前ら・・・

691 名無しの拳闘士

とりあえず、NPCへの対応は丁寧にな

各NPCに好感度が設定されてるから、いきなりオラついたりしたら初対面の時点で好感度マイナスに入ってプラスに回復させるまでクエ受けられなくなるぞ

692 名無しの陰陽師

あと大事なのは種族選びだね

近接、遠隔、魔法とか、メインで育てる職業が決まってるなら、それに合った種族で始めた方がステータス的には優位に立てる

まあ、見た目の好みで決めちゃっても問題ないといえただけれど

詳細はスレチになるから、そっちで確認して

693 名無しの魔法使い

種族値なあ

確かにオーク族のタンクとかは体力がダンチだからな

見た目があれだけど・・・

694 名無しの裁縫師

一点特化な分、やれることとやれないことの差がねえ・・・

個人的には人間族が無難な気がするけど

695 名無しの侍

キラクリをやりなおすアイテムなどがあればいいのでござるが

696 名無しの治癒術士

あっても課金っしょ

というかこのゲーム、もつと課金要素増やしてもいいと思うんだけど

697 名無しの盗賊

あってもいいけど、やりすぎると問題だからな

697 名無しの吟遊詩人

課金要素増やすと、どうせお前ら課金しないと○○できないとかふざけるな修正しろっていうじゃん・・・

698 名無しの彫金師

新規新規と盛り上がってるところ悪いけど、新規用の鯖が新設されるからそもそもそんなに既存鯖に流れてこない可能性も・・・

699 名無しの戦士

まあ新鮮味を求めるならそっち行くわな

700 名無しの盗賊

既存鯖ならある程度アイテムの供給も安定してるから、サクサク進めたい人には向いてるけどね

701 名無しの弓術士

新規鯖だとエリアボスとかを倒して次のエリアを開放するところからだし、ぶっちゃけそんなにメリットあるか？

702 名無しの剣士

エリアボス初撃破SUGEEEができる

703 名無しの拳闘士

このゲーム、初撃破ボーマスとかないんですがそれは

704 名無しの治癒術士

攻略情報も次々と上がってるし、ボス戦とかなら動画もあるしねその辺はまあ、後発組はしゃあない

705 名無しの魔法使い

パッチ1・20で高レベル向けのコンテンツ来るっぽいし、メア

リー・スーになりたい連中はそっちで頑張ればいいんじゃないかな。
——以下略

【異世界へようこそ】TAW陰陽師スレPart3【ドーマンセーマ
ン】

・ここはVRMMORPG【The Another World】の
職業《陰陽師》に関する掲示板です。

・ガイドラインに抵触する内容の書き込みは禁止。

・マナー厳守。

・次スレは＞＞980を踏んだ人が責任をもって立てて下さい。

——中略

10 名無しの陰陽師

とりあえず陰陽師になってみたんだけど、これソロの時なにすんの

？

11 名無しの陰陽師

前鬼を出して盾にしつつちくちく

もしくは攻撃を受けつつ、後鬼に敵の体力を削ってもらう

式神召喚を覚えてない場合は気合で殴れ

12 名無しの陰陽師

錫杖とかで殴ったほうが火力出る魔法職って、もうこれわかんねえ

な

13 名無しの陰陽師

まあ基本的にバッファーだからね

一応呪符とかで遠隔攻撃出来たりはするけど

14 名無しの陰陽師

あれ知力依存だけだな

15 名無しの陰陽師

できるっちゃできるけど、火力いまいちじゃない？

16 名無しの陰陽師

種族によるとしか・・・

お前まさかりザードマンとかワーウルフとか選んでないよな？

脳筋種族だとマジで棒で殴ったほうがましだぞ

17 名無しの陰陽師

ふっ、甘いな

ゴブリンだゴブー

18 名無しの陰陽師

その種族でなんで陰陽師選んだ・・・

というかセイメイよく屋敷に入れたな

19 名無しの陰陽師

式神と間違えたんじゃない？

20 名無しの陰陽師

あれ？ 俺使役される側だった可能性が微レ存・・・？

21 名無しの陰陽師

攻撃面を考慮すると、ベストなのはエルフ、妖狐、魔族あたりか

22 名無しの陰陽師

エルフ、魔族はわりと補助系の種族スキルも多いから、妖狐族がベストオブベスト

23 名無しの陰陽師

妖狐族はなあ、現状職業によってはマジで火力お化けだからな・・・

24 名無しの陰陽師

前鬼置いて、後ろで妖術パなすだけでほんとに固定砲台と化すからな

これはナーフ来ますわ

25 名無しの陰陽師

そういえば、最近ジパングですげえエロイ装備の妖狐族見たぞ
武器が扇だったし、呪符も持ってたから陰陽師だと思うけど

26 名無しの陰陽師

ああそれたぶん鬼姫装備だな

ジパングのクエストでもらえる素材で作るやつ

いくつかバリエーションがあるんだけど、たしか露出度高いのもあつたはず

27 名無しの陰陽師

まじか

ちよつとキャラクリやり直してくる

28 名無しの陰陽師

>>25、26

k w s k

29 名無しの陰陽師

>>27

何をする気だ

いや、妖狐族にして育てなおすなら割と正解だとは思うが・・・

30 名無しの陰陽師

>>28

ぱつと見よくあるタイプの着物なんだけど、前がミニスカみたいに
なつててやばい

一応帯っぽい前掛けで見えないようにはなつてるんだけど、歩く度
に生足がチラリズムでさらにやばい

とにかくやばい

31 名無しの陰陽師

>>29

実際キャラデリしてやり直してる人達多いらしいよ

タンク用にオーク族にしたり、魔法職用に魔族にしたり

32 名無しの陰陽師

まあそうなりますよねー

俺も作り直そうかなー、どうせレベル上げなおしてもそんなに時間
かからんべ？

33 名無しの陰陽師

>>30

お前の語彙力がやばい

34 名無しの陰陽師

>>30

落ち着け

35 名無しの陰陽師

おk、落ち着いた

でも着てるキャラもやばくてさー、もうガン見しまくってたわ
尻尾六本もあったし、カンスト組だと思われる

36 名無しの陰陽師

ハラスメントで通報されなくてよかったな

37 名無しの陰陽師

>>26

あの素材から作る装備って、どれもかなり優秀だからな
まだクエストクリアしてないやつはやつとけー

>>35

あんまり特定できるような情報書き込むなよマナー違反だぞ

38 名無しの陰陽師

>>35

安心しろ、どうせ中身はおっさんだ

39 名無しの陰陽師

ヤメロオ！（建前）

ヤメロオ！（本音）

40 名無しの陰陽師

陰陽師でカンストしてる妖狐族のプレイヤーって数人しかいない
ね？

41 名無しの陰陽師

>>17

ゴブリンでも頑張ればやれない事はないぞ
相手の動きを妨害する種族スキル多いからサポート役には向いて
るし

火力は、うん、忘れろ

42 名無しの陰陽師

>>35

このゲームのプレイヤーの男女比率は4:6。あとわかるな？

43 名無しの陰陽師

そんなことよりスキル回しと立ち回りの話しようぜ！
——以下略

お稲荷様と公式イベント①

シズノさんのところで着物を受け取ったあの日から早一週間。

あれからレベル上げに勤しみ、無事現在のレベル上限である六十に到達したボクは、もう随分と久しぶりとなる始まりの町《アイン》へと戻ってきていた。

その理由の一つ、本日から開始される新規ユーザー歓迎イベントに参加するためである。

そう、本日は二回目の抽選でソフトの購入権を獲得した第二陣のプレイヤー達がログインを開始する記念すべき日であり、アインの町中はサービス開始日にも引けを取らないほどの活気に満ち満ちていた。「あ、狐さんだー!」

こちらの姿を見るなり、太陽のような笑顔を浮かべて飛び込んできた少女を抱きとめる。

久々にアインへと戻ってきたボクが顔を出したのは、サービス開始当時にお世話になったあの道具屋だった。

しかし第二陣のプレイヤー達が続々とログインを始めている影響で、店内は平時とは比べ物にならないほど賑わっている。

そんな中でシアが抱き着いてきたものだから、それに驚いたプレイヤー達の視線が集中するのはまあ当然といえた。

下手に絡まれるのも厄介だし、あまり長居はしない方がよさそうだ。

「久しぶりだね、シア。元気にしてたかな?」

「うん! 狐さんの服、すっごくキレイだね!」

「あらあら、ちよつと見ない間に凄く美人さんになっちゃって、私驚いちゃった」

頬に手を当て、カウンターの向こうでルビアさんが微笑む。

レベルが六十を迎えた後、ボクの装備も随分と様変わりした。

【鬼姫の着物・紅葉】はそのままに、自称ファッションリーダーであるモミジ監修の元、全体のコーディネートもその和風ながらも独特な

デザインに合うような物になっている。

金のかんざし、膝上まである白足袋と赤い高下駄はモミジに紹介してもらった生産職のプレイヤーが作成した物で、それぞれMP上昇、状態異常防止などの効果が付与されており、なかなか使い勝手が良い。

この装備のおかげで随分と戦闘も楽にはなったのだが、以前と比べて他のプレイヤーから声かけられる事が増えたのは少し面倒ではある。

まあ自由度が高いキャラメイクのおかげでプレイヤーには美男美女が多いので、思っていたほど目立っていないのは嬉しい誤算であったが。

「しばらく顔も出さずに申し訳ありません」

「仕方ないわ、来訪者さんなんだもの。でもそのようだと、無事に探し物は見つかったみたいねえ」

「ええ、お陰様で無事、陰陽師となる事が出来ました。今回はまたアインの町が賑やかになると耳にしまして、先にご挨拶をと」

「そうなのよお、先日またご神託があったみたいで、前回と同じぐらい来訪者さん達がやってきているそうなの」

「ええ、お店も相当お忙しいみたいで、大変ですね」

そう話しているうちに売り場からルビアさんと呼ぶ声が届き、彼女はごめんなさいね、と小さく手を振ってその対応へと向かっていった。

さて、挨拶も済ませた事だし、ボクも邪魔にならないうちに失礼するでしょう。

「えー、狐さんもう行っちゃうの？」

「ふふ、しばらくはこの町にいるから、またすぐ会えるよ。次は三人でお茶でもしよう」

名残惜しそうに着物の裾を摘まむシアの髪を一撫でし、手振って店を後にする。

その際に何人かのプレイヤーに声をかけられ、先程のシア達とのやり取りについて詳しく尋ねられたので、このゲームにおけるNPC達

の好感度などについて説明すると何故だか大げさに礼を言われてしまった。

少し高圧的な物言いにもなってしまったのだろうかと反省しつつ、道具屋を後にしたボクは噴水広場へと向かう。

メインメニューで時刻を確認すると、ちょうどモミジ達と約束した集合時間の十五分前であった。

広場の中では断続的に光の柱が現れ、その中から次々と初期装備に身を包んだ様々な種族のプレイヤー達が現れている。

サービス開始初日を思い出させるその光景を眺めつつ、混雑に巻き込まれないよう広場の端へと向かい、適当なベンチに腰を下ろす。

そういえば、当時もこうやって隅によって人波を避けていたっけ。

「あ、いたいた！」

そうしてぼんやりと行き交う人々の様子を眺めていると、やがてその中から見知った三人組がやってきた。

三人ともレベル上限に達して装備を更新したのだろう、モミジは小麦色の肌がよく映える純白のローブ、ハヤトは白銀のフルプレートメイル、コタロウは紺色の胴着に身を包んでいる。

初めて会ったあの頃と比べると、三人も随分とまあ、なんとも冒険者らしくなったものである。

「いよいよ初イベントだね！」

「ほとんど新規鯖に流れると思うってたんだけど、うちの鯖にもかなり新規の人が来てるみたいだね」

「こうして見ると俺らの時と同じぐらいいるんじゃないか？ まあ、面倒がなけりやあどんだけ増えようがいんだけどよ」

「はは、ボクも何人かに声をかけられたけど、あんまり変なプレイヤーはいなかったから大丈夫じゃないかな」

「間違ってもほいほいについて行ったりするなよ」

「失礼な。さすがにそこまでお人よしではないさ」

まあ実際、数人にはパーティのお誘いも受けたのだが、きっぱりとお断りさせてもらった。

レベル差が大きすぎてレベリングをしようにもこちらへのメリッ

トが全くないし、ガイド役を買って出るほど親しいわけでもないしね。

それに正直、態度や話し方が現実世界で見かけるナンパする人のそれにそっくりだったプレイヤーもいたし。

「それよりも、そろそろイベントが開始される時間だね」

「今回って、町へのモンスター襲撃イベントだったわけ？　なんか思ってたより殺伐とした内容だよー」

「盛大に歓迎しますって事なんじゃねえの？」

「それはそれで運営の性根が相当悪いように思えるのだけれど。まあサービス開始時に始まりの草原にいるモンスターが割と枯れ気味だったし、イベント中にしっかり経験値を稼いで下さい、という事だと考えるようにしているよ」

それに、レベルがカンストした先行組のプレイヤーも相当数集まっているのでモンスター達が町に侵入してくる事はまあないだろうし、実際はそう危険なイベントでないだろう。

「生産職の人はどうするんだろうねー」

それは知らない。

まあ、戦闘が増えれば自然とポーションなどの消耗品の需要も増えるし、稼ぎ時とはいえるだろうけれども。

あと、さりげなくボクの尻尾を抱き込むその癖、まだ治ってなかったんだね。

いや、レベル六十になってさらに増えたので、一本ぐらいどうってことはないのだが。

その時、町中に金属音に似た甲高い音が鳴り響いた。

広場にいたプレイヤー達が咄嗟に耳を塞ぎ、何事か、と一様に困惑の表情を浮かべる。

ボク達四人も似たようなもので、モミジに至っては目尻に涙まで浮かべていた。

それにしても驚いた。ハウリングの音に似ていたが、今のは何だったのだろうか。

『レッティイイイス、エエエエンドジェエエエントルメエエエ

エエン!!!』

続いて響いてきたのは、先程のハウリングにも劣らないほどの大音量の叫び声。

町中に轟いた男の声に、いよいよもってプレイヤー達は混乱しはじめた。

おそらくはイベント開始の告知なのだろうが、まさかこんな形で行ってくるとは誰が予想できようか。

「外だ！ 始まりの草原に何か居るぞ！」

その時、門の方からプレイヤーの一人が叫んだ。

その声を皮切りに、広場にいたプレイヤー達が異変の原因を確認しようとは始まりの草原へと飛び出していく。

「行くしかない、かな？」

「あまり良い予感がしないけれど、まあイベントの内容は把握しないといけないしね」

早くもげんなりとするハヤトの肩をぽんと叩くと、それに連動するように彼は大きなため息を吐き出した。

気持ちには凄くわかる。ボクも運営の神経を疑い始めたところである。

そんなハヤトとは打って変わって、目をキラキラと輝かせているのはモミジだった。

「なんだろう、なんだろうねー！ うわー、私ワクワクしてきた！」

「お前、どんだけポジティブだよ」

身振り手振りで興奮を表現する彼女の後を、やれやれと頭を抱えながらコタロウが続く。

やがてボク達が始まりの草原へと出ると、そこにあったのはボクの予想を大きく上回るものであった。

そこにいたのは、見上げる程巨大な一匹の蛇。

いや、背に一对の翼があるので、もしかすると竜の類だろうか。足はなく、全身を赤黒い鱗が覆い、側頭部から捻じれ曲がった角が後ろへと伸びている。

異様なのは、明らかに人の手が加えられた鉄の装甲や、所々から延

びるコード類。

まるでサイボーグのようなその姿に、プレイヤー達は圧倒されていた。

「嘘だろ……」

漏れ出でたのは誰の声か。

まさかあれと戦えと言うのだろうか。もしそうだとすると、運営はこれから数日クレーム対応に追われること請け合いなのだ。

その時、その巨竜の背から何者かが躍り出て、竜の頭に着地した。白衣を纏い、モノクルをかけた背の高い男である。顔の右半分を入れ墨が覆っており、顔立ちからして年齢的には三十前後。その手には何故かスタンドマイクが握られている。

ああ、なんだか嫌な予感がするなあ。

男はすつと息を吸い込み、マイクを構えた。

『よくぞやって来た来訪者の諸ツクーン！ ミーこそは偉大なる魔王様に仕える七將軍が一人ツ、嫉妬のインウイディアであるツ！』

芝居がかった大げさな仕草と共に、男は恭しく頭を下げた。

正直に言つて、ログアウトしたい。

「帰っていいかな？」

「待って、気持ちい凄くわかるけどお願いだから待って」

思わずメインメニューを開いたボクの手を、ハヤトがはしつと掴んだ。

凄く帰りたい。

だってあれ、どう見たって面倒な類の人種じゃないか。

そんなボクの気持ちを知るはずもなく、早くもボクの中で変態としてカテゴライズされつつある男は、スタンドマイクを振り回しつつ続けた。

『この度ミーはッ、ン魔王様直々の命を受けこの地へと参上した！ 来訪者諸ツクーン、今こそ試練の時である！ しかあし！ ミーはこのメカムート君三号を喉けるような、そんな空気の読めない男ではないのであるからして、諸君のお相手はこやつらがするのである！』

どうやら、あの巨大なサイボーグ竜はメカムート君三号というらしい。

何だろう、すごくバツタもの臭い。

インウイディアがぱちんと指を鳴らすと、メカムート君三号——恥ずかしいからメカムートでいいか——の背からわらわらと何かが這い出てくる。

それはせいぜい大型犬程度の大きさしかない、デフォルメ化されたメカムート達だった。

くりくりとした目がなんとも可愛らしい。

『そのプチメカムートは、本体のメカムート君三号のエネルギーが尽きぬ限り無尽蔵に生み出すことができる、おツそろしい殺戮マツスインである！ 嗚呼ッ、斯様な傑作を生んでしまうミの類稀なる才能に、全世界が嫉妬……ッ！ さあ来訪者諸君、存分にその力を振るうといいのである！』

きいきいと鳴き声を上げながら、プチメカムート達が侵攻を開始した。

それを受け、あまりにもあまりな事態にぽかんと呆けていたプレイヤー達も流石に我に返り、各々で応戦を開始する。

くけー、と可愛らし容姿とは裏腹に残念な声を上げて飛びかかってきたプチメカムートの一体を扇でぺしりと叩き落すと、あまりにも呆気なくその個体は光となって消え去っていった。

「やはり強さは新規プレイヤーでも勝てる程度か。どこかに強い個体も配置されている可能性もあるけど……」

「まあ、俺達の相手はアレだろうな」

「なんか、私が思ってたイベントと違う……。もっとう、なんだろう」

「モミジ、たぶん皆同じ気持ちだと思うよ。よりにもよって嫉妬が来るかあ……」

強欲や怠惰ならまた士気の上がり方も違っただろうに、とハヤトが肩を落とした。

帰りたい。

一部の攻略組らしきプレイヤー達は待ちに待ったレイド戦だといきり立っているが、ボクはそれ以上にあの男に近寄りたくない。

面識を持たれる前にさっさと退散したいのだが、七將軍という重要な立場にあるキャラクターなのだし、顔を覚えられるのも時間の問題なのだろうなあ。

「仕方がない、とりあえずやってみようか。念の為、一通りバフをかけるから範囲内から出ないようにね」

恐らくあの巨竜を倒さなくとも、イベント期間が過ぎれば七將軍の軍勢も撤退していくのだろうけど、撃破することで何か報酬が出るかもしれない。

それに、あの巨竜が町に直接攻め込んでこないという保証がない以上、あれの足止めはボク達先行組が行うべきだろう。

気乗りはしないけどね……。

扇を開き、発動するスキルを選択しながら、ボクは大きくため息を吐くのだった。

お稲荷様と公式イベント②

蒼天の元、戦士達の雄叫びが轟いた。

剣戟の音が響き、矢が、槍が飛び交い、火球が炸裂し、氷柱が降り注ぎ、稲妻が疾走する。

ほんの数十分前までは初心者プレイヤーたちにとって最適な狩場であつたのどかな草原は、今や百を超える強者たちが集う戦場と化していた。

そこかしこが煌めき、数多の魔法が飛び交うその中で、ボクたちは強大な敵——メカムートの後方へと回り込み、出方を伺う。

『ハッハー！ そんな攻撃では、このメカムート君三号を倒すことなど不可能なのであーる！ さあメカムート君三号よ、焼き払え！ であーる！』

巨竜の頭上で上機嫌に笑うインウイディアが腕を振るうと、巨竜はその強大な顎を、地を振るわせる程の唸り声と共に大きく開け放つた。その口内に光が集中する。

「まずい、全員散開し——」

咄嗟に前線にいた誰かが叫んだ瞬間、巨竜の放った熱線が扇状に前方を薙ぎ払った。

熱線が通り過ぎたあと、地面が真っ赤に融解し、爆発する。

うわあ、と背後でモミジが引きつった笑みを浮かべてそう漏らした。

無理もない。ざっと見て三十を下らないだろうプレイヤーたちが一瞬でその身を光に変え、消滅したのだから。

せめて後衛さえ無事ならば治癒術士の蘇生魔法で立て直せる可能性もあるのだが、あの攻撃範囲を見ると、諸共消し飛ばされてしまったようだ。

勿論、全員がレベル六十で、攻略組というわけではない。だが、少なくともあの敵に挑むことができるレベルのプレイヤーたちだったのだ。

さらに言えば、あの吹き飛ばされたプレイヤーたちの中には、国内でも数少ないプログラマーチームの姿もあった。

種族、職業、装備。全てにおいて最適化を行った彼らが一瞬で全滅するほどの攻撃を放つ、巨大なボスモンスター。いや、いくらレイド級とはいえやりすぎである。

幸いなのは、ここが町を出てすぐの場所であり、デスペナさえ考慮しなければ死に戻りからの再攻撃が可能な点と、登場時の台詞通り、あの変態が巨竜で町に進撃する様子がなさそうな点だろうか。

あれに本気で町に攻め込まれでもしたら、一時間も待たずに始まりの町は更地に変えられてしまう。

「とりあえず、どうする？」

祭りだー！ と死に戻って早々巨竜に突撃し、巨大な尾の一撃で再度吹き飛ばされるプレイヤーの群れを眺めながらそう言うのと、我がパーティ唯一のタンクはびくりと肩を震わせた。

その顔が言っている。まさか、あいつのタゲを奪えとか言わないよね？ と。

まさか。ボクは肩をすくめた。

いくら何でも、そこまで無茶苦茶をいうつもりは毛頭ない。

「おそらく今回のこのイベント、運営はあくまでお祭りの一環としてあのボスを配置した可能性が高い。まあ何かしら特殊な勝利条件は設定されているかもしれないけどね。そもそも新規ユーザーを歓迎する為のイベントなのに、既存ユーザーがボスを倒したら終わりだなんて事はあり得ないだろう」

それこそ、新規プレイヤーの不満が爆発する事間違いなしである。できる限り新規プレイヤーを確保したい運営側からすれば、そんな事態は一番避けたいはずだ。

そう説明しつつ、ふと見れば今度は巨竜の上で高笑いしていた変態が、どこから取り出したのか巨大な筒状の武器を構えて足元のプレイヤーたちに向かって何かを発射した。

爆発、轟音。

ふざけんな、なんじゃそりや、と悪態を吐きながら、また数人のプ

レイヤーが光になった。

今のはロケットランチャーだろうか。なかなか世界観を無視した攻撃だ。

だがそんな混沌とした場にあつて、プレイヤーたちはどこか楽しそうだった。

デスペナにデスペナが重なり、もはやその辺の雑魚モンスターにさえやられてしまいそうなステータスになりながらも、武器を担いで突貫する者や、何をとち狂ったのか、上半身裸のパンツ装備で殴りかかる者まで出る始末である。本当に楽しそうで羨ましい限りだ。

と、話の途中だった。

誤魔化すように咳ばらいを一つ、また視線を三人に戻す。

「だとすると、まあ考えられるのは後々登場するボスの顔見せ、ギミツクの紹介、予習、あとはまあ、貢献度に応じた報酬がイベント終了後にあるかも、といったところかな。見たところ別に町自体を攻撃して滅ぼしたりって事はなさそうだし、気楽に突っ込んで吹っ飛んでもいいと思うよ」

もしくは、興味があつた他の職業に変更して、この機会に育ててみる、という事も可能だろう。

かく言うボクも、イベント後半はサブ職業に変更してプチメカムート狩りに勤しむつもりであるし。

そうして話し合った結果、せっかくだからみんなで一度やれるところまでやってみよう、という結論に至った。

「本当に申し訳ないんだけど、今回はタンクとしては期待しないでね？」

「ガチガチの攻略組でも無理なんだ、元々期待してねえよ」

「うへー、近接職って大変だなあ。私は後方支援でー！」

「とりあえず保険はかけておいたけど、一回だけしか効果はないからね」

選択したのは陰陽師がレベル六十で習得できる【泰山府君祭】というスキル。

その効果は対象のプレイヤーが戦闘不能になった際、一度だけその

場で復活する事ができる、というものである。

蘇生魔法と違いあくまで先にかけておかねばならず、既に戦闘不能となっているプレイヤーには効果がない。

まあこの辺りは、治癒術士との差別化と、本来の泰山府君祭を意識してのものなのだろう。

この祭祀は小説や映画では死者を蘇らせる術として描かれることが多いが、実際は長寿を願うものであり、泰山府君というのも、人間の寿命を管理する地獄の王の一人なのだ。

それはさておき
閑話休題。

帯から扇を抜き放つと、こちらの有効射程範囲に収まるぎりぎりの距離まで接近する。

しかし、もつと見渡しのいい場所で戦いたいものだが、こうもプレイヤーが多いと贅沢も言っていられないな。ボスの足元など、まるで満員電車のようなのである。

六本の黒い尻尾を前方に突き出す。僅かに白くなった先端が発光し、甲高い音を響かせた。

「さて、まずは一当て」

スキル「雷獣」を使用。それぞれの尻尾から放たれた稲妻が、せめぎあうプレイヤーたちをすり抜けながらボスへと迫る。ちなみに、このゲームにフレンドリーファイアは実装されていないので、同士討ちの恐れはない。

部分的に改造されているところから、ロボット系のボスだと判断して相性のよさそうな「雷獣」を選んだのだが、放った稲妻はボスの体表に命中した瞬間、小さな音とともに霧散してしまった。

やはり、それなりの対策はされているようだ。

続けざまに「鎌鼬」、「水虎」を放つも、結果は同じ。ダメージを与えられたようすはない。

さてどうするか、といったん距離をとったところで、ボスの頭上、変態が立っている場所よりさらに高くへと、何者かが飛び上がった。

「ひっさーっ、ハイパーイナズマキック！」

現れたのは、ハーピー族のプレイヤー。

両手代わりの翼で羽ばたきながら、流星の如き飛び蹴りを巨竜の横っ面にお見舞いした。

これには流石に面食らったのか、巨竜が呻き声をあげながらほんの僅かに後退する。

おお！ にわかにプレイヤー達が沸き立つ。

ついにハーピー族が飛行に成功した事に対しての興奮と、たとえ数ミリであろうとも、あの巨竜を後退させた功績に対する称賛が半々といったところだろうか。

真つ赤な髪を風になびかせながら、大空の英雄はふん、と鼻を鳴らし、胸を張った。

「どうよ！　これが私の全力全開——ギャー！」

そしてその直後、地上から放たれた巨竜の熱線に飲み込まれて一瞬で蒸発する。

まあ、ボスの体力自体はミリも動いてなかったし、当然そうなるだろう。

ちなみに、このゲームにハイパーイナズマキックなるスキルは存在しない。

先程彼女が放ったのは、拳闘士が覚える【流星脚】という格闘スキルである。

しかし、とうとうプレイヤーが飛行に成功したか。これは、今後の戦略に革命が起きるかもしれない。

あのプレイヤーは、これから——主にガチ攻略勢たちに追いかかれて——大変だろうなあ。

あ、足元まで行つてたハヤトが蛇腹ですり潰されている。これで残機一だ。

『ぐぬぬ、メカムート君三号を僅かながらも後退させるとは、侮りがたし来訪者たちよ。しっかーし！　ミーのメカムート君三号は水陸空、全てにおいてパーフェクトなのである！』

変態がぱちりと指を鳴らすと、巨竜が咆哮を上げると共にその翼を大きく広げ、辺りに嵐のような突風を巻き起こした。そして、その巨体が大空へと飛翔する。

その光景に目を丸くし、立ち尽くすプレイヤー一同。

そして察しの良い一部のプレイヤーたちは、次の瞬間にはもう動き出していた。

我先にと一斉に駆け出し、向かう先は飛び上がった巨竜の真下。彼らは巨竜が空中から、何かしらの範囲攻撃を打つてくると読んだのである。そして、往々にしてそういった攻撃の安全地帯は、ボスの足元にあることが多い。

そして、その予想は的中した。

巨竜の翼が雷光を纏い、周囲におびただしい数の雷を降らせたのである。

響き渡る雷鳴。地を割る程のその一撃は、地上にいるプレイヤーたちを余すことなく飲み込み、蹂躪した。無事であったのはあらかじめボスの真下に避難していた者たちと、ボスとの戦闘に参加せず、攻撃範囲外でプチメカムートの相手をしていた初心者プレイヤーたちのみであった。

そしてボクはどうなったのかといえば、勿論雷撃の直撃を受けて即死していた。

一応ボスの真下に移動しようとはしたのだが、妖術の射程距離ぎりぎりから攻撃を行っていたこともあり、さすがに見てからでは間に合わなかった。

だが、ボク自身にも先の「泰山府君祭」を使用していたので、すぐに蘇生し、立ち上がる。

できればもう一度かけておきたいが、さすがにMPの回復が追いつかないな。

あの範囲攻撃を連発されると非常に不味かったが、どうやらあの攻撃は一度きりのようで、しばらく滞空した後、巨竜はゆっくりと地上へと再び降り立った。その表情はどこか満足気である。

そしてその足元に、再び血気盛んなプレイヤーたちが群がった。

現状、ボスの体力には雀の涙程度の変化しか見られない。もし相手が回復系のスキルを持っていたら、ますますもって無理ゲーになってくるだろう。

一旦ボスの攻撃範囲外まで離れると、メインメニューを開いて現在の時刻を確認する。

時計の針は十二を少し回ったあたり。うーん、そろそろ昼休憩にしてもいいかもしれない。

ともあれ、このままログアウトしてしまうのもなんだか味気ないし、とりあえず死に戻りするまではやってみようか。

そうして扇を取り出すと、ボクはまた死地へと向かう。

ボクが死に戻りしたのは、それから五分ほど経過した頃であった。

お稲荷様と白兔

手早く昼食を済ませ、再びログインしたボクがまた始まりの草原へと向かうと、戦場は相変わらず凄まじい熱気に包まれていた。

どうやらあれからずっと戦っているようだが、悲しいことにボスの体力はまだ二割も削れていない。

トッププレイヤーたちが勇ましく戦い、散って行く様を見届けながら、ボクは腰に提げた細身の剣を引き抜き、ちょうど近くにうろついていたプチメカムートへとスキルを使用した。

「シールドキャスト」という、敵に盾を投げつけて攻撃する剣士専用スキルだ。

左手に装備していた小型の盾が、放物線を描きながら敵へ命中した。

与えられるダメージは微々たるものだが、突然攻撃されて怒り狂ったプチメカムートが唸り声をあげながらこちらへと飛びかかってくる。

その鋭い牙をいつの間にか左手へと戻ってきていた盾で防ぎ、続けざまに攻撃スキルである「三連突き」を発動。レイピアの先端が煌めき、高速の三連突きが敵の腹部に命中する。

悲鳴をあげ、プチメカムートが光の粒子となって消滅した。

「はあ、近接戦闘は初めてだけど、何とかなったね」

レイピアを鞘に納めつつ、安堵の息を吐く。

まあ、種族レベルがカンストしているおかげで職業レベルが一でもステータスにかなりのプラス補正がかかっているのです、この程度の敵に苦戦することはまずないのだが、やはり初めて前衛で戦ってみると緊張するのも仕方のない事だと思うのだ。

そう、今のボクはいつもの陰陽師ではなく、先程職業ギルドで登録して変更可能になった【剣士】へと転職していた。

予定が少し前倒しになってしまったが、その分レベリングに時間が回せるし、まあ良しとしよう。

何故今更前衛の、しかもタンク職に手を付けているのか不思議に思われるかもしれないが、こうして全く違う役割の職業に触れることで、後衛職をしていると見えてこない事が色々と見つかるのだ。

ここで回復してほしい。このスキルはリキャストが長いから、使用した後は補助魔法は厚めで。

そういったタンクの気持ちを理解するには、実際に触れて、その立場に立ってみるのが一番手っ取り早い。慣れてないからしんどいけどね。

まあボクの場合、パーティを組む相手はほとんどモミジたち三人だけであり、タンク専門のハヤトがいるのでそれほど重要度は高くなかったりするのだけど。

「さて、それじゃあどんどん行こうか」

先程と同じ手順で、範囲内に入っているプチメカムートへ「シールドキャスト」を発動。

きーきー叫びながら襲い掛かってきた敵の攻撃を盾で受け止める。さすがは剣士というべきか、正面から攻撃を受け止めても、それほど体力が減ることはない。

妖狐族という、魔法攻撃にステータスが偏っている種族であるので防御力は低いし、体力も多い方ではないのだが、これならタンク職として役に立たないという事はないだろう。

尤も、前衛向きである他の種族と比べるとその差は歴然ではあるのだが。

「でもやっぱり、こういった装備の方が動きやすいな」

剣士へと転職し、職業レベルが一になった事でボクの装備もまた一新された。

現在は黒のノースリーブに皮の胸当て、ハーフパンツというシンプルなもの、これは剣士ギルド内に併設されていた防具屋で購入した物だ。

ちなみに陰陽師への変更はメインメニューからいつでも可能であり、レベルや装備も保持されるので、転職したからといってまたレベル一から育てなおし、なんて羽目にはならないので安心である。

しかし、やはりイベントで用意されたモンスターである為か、通常よりも少し入手できる経験値が多く設定されているようだ。数匹倒すだけで、もうレベル三まで上がってしまった。

「さて、これで【挑発】も使えるようになったな、と」

さて、それじゃあ引き続きレベル上げに勤しむとしようかな。

そう思い新たな獲物を探していると、何やら必死にモンスターから逃げるプレイヤーを見つけた。

どうやら勝ち目がないと思い町へと逃げ込もうとしているようだが、あの場所でそれは悪手だなあ。

平時ならともかく、今はイベントの真っ最中。例の変態が巻き散らしたプチメカムートがそこいらを徘徊している。そしてそれは、町への門近くであつても例外ではない。

案の定、そのプレイヤーは周囲のモンスターにまで次々と襲われ、まるで電車ごっこのような行列になってしまっていた。トレイン、と呼ばれる状態である。

こうなってしまうと、最悪の場合は待ちの出入り口にモンスターの集団が陣取ってしまい、町から出てくるプレイヤーたちに問答無用で襲い掛かるようになってしまう。

ううむ、まあプチメカムートなら一撃で落とせるし、あれ以上増えて被害が拡大する前に処理しておこうか。

高レベルプレイヤーはほとんどがメカムートの方へ行っているし、周りの初心者たちにまでモンスターのヘイトが向くと厄介だしね。

件のプレイヤーを追いかけているプチメカムートは全部で四体、まあやれないことはない。

剣士の練習にも丁度いいとボクはレイピアを引き抜くと、遁走するプレイヤーの正面へと回り込み、戦闘の一体に【挑発】、後続の敵に【シールドキャスト】と立て続けにスキルを使用し、敵の標的をこちらへと切り替える。

「あ、ありがとうございますうー！」

「三体まではすぐタゲ奪えるけど、残り一体はそっちでなんとかしてね」

「は、はいー!」

種族スキルが使えるといいんだけど、残念ながらMPが足りない。まあ、本来は魔法を使わない職業であるし、この辺りは仕方ないだろう。

追われていたのはワーラビットの女性プレイヤーだった。目尻に涙を浮かべ、まさしく脱兎の如くこちらへと走ってくる。

標的をこちらへと変更した二体の間を縫い、それ違いざま三体目に【三連突き】を放つ。ぐぐつと敵の体力が減少し、断末魔の悲鳴と共に光へと変わった。

【挑発】のリキャストまではあと少し、先程のプレイヤーは無事に敵を倒せているだろうか。

しかし、やはり二体同時に相手をする、少なからず盾での防御が間に合わない場面が出てきてしまう。一体の噛みつきを盾で防いだとしても、横からもう一体の攻撃が通ってしまう。

種族レベルのステータス補正がなかったら危なかったかもしれない。

「これで、最後つと」

攻撃をかわし、無防備となった敵の横っ面へ一突き。僅かに残っていたHPバーが全損し、レベルアップを知らせるファンファーレが鳴り響いた。

さて、と先程のプレイヤーを探すと、少し離れたところで座り込んでいるのが見えた。肩で息をして随分と疲れているようだが、なんとか無事のような。というか、まだモンスターはいるのだから、そんなに気を抜いているとまた絡まれるよ。

「お疲れ様。何とかなつたみたいだね」

「あつ、先程はありがとうございました! 次から次へと敵に襲われて、もうダメかと思いました」

「次からはトレインしそうだと思うたら周囲に助けを求めるか、潔く死に戻ったほうが楽だよ」

「トレイン?」

ああ、もしかしてこの手のゲーム自体初めてのパターンなのかな。

「さつき、逃げながらどんどん敵を呼び寄せてたでしょ、ああいうのをトレインって言つて、君がもしあのまま町に逃げ込んだら、標的を失ったモンスターがその場で野放しになって近くのプレイヤーに襲い掛かる恐れがあったんだ」

本来は設定されている場所に戻るまで無害化したり、途中で敵の行動範囲外に出られるのであるそこまで追いかけてはこないのだけど、今回はイベントで町の近くに沸いている敵だったからか、危うく大名行列の様になるところだった。

「う、そうだったんですね……ごめんなさい」

「いや、叱っている訳ではないんだけど。その感じだと、ネトゲはそれほど？」

「実はこれが初めてなんです。興味本位で申し込んだ抽選で当たっちゃって……」

それは随分と運がいい。

話題作だけあって、倍率もそれなりに高かった気がするのだけだ。

「ふむ、袖振り合うも他生の縁というし、よかったらパーティを組んでやってみるかい？」

「え、いいんですか!? ぜ、是非宜しくお願いします!」

杖にローブと、見たところ魔法使いのようだし、相性は悪くないだろう。

メインメニューを操作し、目の前の女性にパーティ勧誘を送信する。そういえば、ボクから誰かをパーティに誘うって、これが初めてではないだろうか。いつもモミジの方から勧誘メッセージを飛ばしてくるからなあ。

やがて視界の隅に表示されたパーティメンバーの名前を見て、ボクは思わず首をひねった。

「イナバさんか。なんだか毛皮を剥がされそうな名前だね」

というか、よく登録できたねその名前。このゲーム、重複する名前は使用できないようになってるのだけど。

「あはは、ダメ元で打ち込んだら通っちゃいました」

「まあ、毛皮どころではすまなさそうな組み合わせだけどね」

なんていっても、狐と兎である。

家に乗っ取られるか、食べられてしまうか、この組み合わせが登場する物語にはろくなオチがつかない。

「ともあれ、とりあえずは手頃な敵を狩ってレベルを上げておこうか。」

ああ、パーティーメンバーの項目にも表示されていると思うけれど、ボクはタマモ、改めて宜しくね」

いまだに座り込んだままの彼女の前に膝をつく、イナバは何故か目をぱちくりとさせたあと、何故だか急に身体ごと百八十度反転してしまった。えっと、ボクが何かしただろうか？

「はえー、近くで見るとスッゴイイケメンかも……いや、ゲームのアバターなんだからイケメンなのは当たり前なんだろうけど。違和感ないなあ、凄いなあ……」

「えっと、大丈夫？」

何やらぶつぶつと呟いていたようだが、もしかして現実世界の方から何か呼び出しでもあったのだろうか。

「だ、大丈夫です！ ふ、不束者ですが、宜しく願います！」

嫁ぐのかな？ いや、そうじゃなくって。

何やら凄まじく緊張しているみたいだけど、ううむ、やはり先程トレインの説明をした際の言い方が悪かったのだろうか。

リアルの方でも何故か高圧的だと怖がられる事が多いし、なるべくそうならないように意識していたのだけれど……。まあ、気にしても仕方がないか。

「それじゃあ適当な敵を釣ってくるから、ここで待っててね」

「つ、釣り？ それ剣ですけど……」

「ああ、釣りっていうのは——」

いや、この分だと心配いらないかな。

こてんと首を傾げるイナバを見て苦笑しつつ、ボクはまた授業を再開するのであった。

お稲荷様と白兔②

始まりの草原。

いまだ巨竜がその猛威を振るい続けるその戦場において、町と草原を隔てる防壁の周辺は不思議とその被害を免れており、巨竜から生み出されたプチメカムートたちが防壁へ向かって侵攻してはいるものの、その全てが防壁を突破する前に大勢のプレイヤーたちや、NPCの冒険者たちによって撃退されていた。

個体によって強さに差はあるものの、その得られる経験値の多さから、中にはボクと同じようにレベル一の職業に変更して、レベリングを行っているプレイヤーもちらほらと見える。

「こちらで位置調整はするけど、なるべく敵の正面には立たないようにね」

「は、はい！」

「戦闘開始直後に威力の高いスキルはなるべく使わないように。まだタンクが敵のヘイトを稼ぎ切ってなくて、そちらに標的が切り替わってしまう恐れがあるからね」

「は、はい！」

そんな今や格好の狩場となった防壁周辺で、ボクは先程パーティを組んだばかりのイナバさんと経験値稼ぎに勤しんでいた。

時折こうやってアドバイスをしたり、MPを回復する為に小休憩を挟んではいるが、この短時間で稼ぎ出した経験値はなかなかのものです、ボクは勿論のことイナバさんのレベルも順調に上がり続け今や二人ともレベル八となっていた。

「さて、そろそろ装備も新調しないとダメだろうし、一度町へ戻ろうか」

「はい！ そういえば、タマモさんは結構こういったゲームは得意なんですか？」

「まあ、色んなタイトルには手を出してるけど……別に敬語を使わなくてもいいよ？」

「そんな、先輩なんですから、タメ口なんて出来ませんって！」

見た感じボクよりも年上であろう彼女にこうも敬われると、なんともむず痒くなってしまう。

それを彼女に伝えると、どうやらボクが先行組であることは随分と前から察していたらしく、リアルではともかく、このゲームにおいては先輩です、と鼻息も荒く語られてしまった。

「それにしても、初めて見た時はびっくりしました。種族レベルが上がるの色々と見た目も変わるといいうのは説明書を読んで知ってましたけど、実際に近くで見ると迫力がありますね！」

「割と邪魔になったりするよ？ 結構場所をとるし、人にぶつかったりするし」

ちなみに尻尾の話である。

まあ、それらデメリットを差し引いて余りあるほどの魅力が、このもふもふには詰まっているのだけれど。出会う度にモミジが抱き着いてくるのも、無理もない事なのかもしれない。たまに身の危険を感じる時もあるが。

町に戻り、休憩がてら立ち寄ったカフェでスクリーンを摘みながら、ボクは背後でわさわさと六本の尻尾を揺らした。

しかしボクとしては、ワーラビットの小さく丸い尻尾もなかなか可愛らしいと思うのだけど。

「そ、そんな、可愛いだなんて、えへへ」

尻尾のことなんだけね。案外この人、モミジと気が合うかもしれない。

そういえばモミジたち三人はあれから王都に戻ったらしいけど、向こうでダンジョンでも攻略しているのだろうか。

と、やはり噂をすれば影が差すようで――

「タツマモー！」

とん、と背中に軽い衝撃が走る。

やれやれとため息交じりに振り向けば、そこには無邪気な笑みを浮かべ、背中に張り付くモミジの姿があった。突然の出来事に、イナバさんがぱちくりと目を見開いている。

とりあえず、まるで背中に張り付いた子猫——種族は人間族なのだけれど——の首根っこを引つ掴むと、おもむろに隣の席へと着席させた。

「むー、なんだか扱いがだんだん雑になってる気がする」

「自業自得だよ。ごめんねイナバさん、こっちはモミジ、ボクの友人だよ」

「えっ、あ、はい！ は、初めましふえ！」

派手に噛んだなあ。

ボクの言葉でようやく気が付いたのか、頬を膨らませていたモミジが目を点にしてイナバさんの方へと顔を向け、一つ、二つ、きっかり三つ間を開けた後、顔を真っ赤にしてテーブルに突っ伏してしまった。

「恥ずかしいと思うならやらなければよかったのに」

「だって、タマモだけだと思ってたんだもん……」

まあイナバさんはボクと向き合うようにして座っていたし、確かにボクの背後からでは尻尾が邪魔をして見えなかったのも仕方ないのかもしれない。常習犯だから同情はしないけれど。

これを機に、少しは慎みというものを覚えるといい。

しばらくそうして突っ伏していると、やがてモミジはゆっくりと顔を上げ、改めてイナバさんに頭を下げた。

「お、お恥ずかしいところをお見せしました……」

「い、いえいえ、お気持ちちは凄くよくわかりますので……あ、初めまして、イナバと申します」

「モミジです！ いやあ、こんな可愛い子を侍らせるとは、タマモも隅に置けませんなあ」

「はいはい。ところでモミジ、ハヤトたちとは一緒じゃないのかい？」

おっさんかキミは。

にやにやと笑いながらわき腹を小突いてくるモミジを片手で払いのけ、じとりと視線を向ける。

ほら、イナバさんもりアクションに困ってるじゃないか。

「二人はまたレイドボスと戦いに行ったよー。ほんと、男子って負け

ず嫌いだよねえ」

ああ、またあの巨竜に吹き飛ばされに行ったのか。

今回は回復役のモミジも、補助役のボクもいないのにご苦勞なことである。

「というかタマモ、よく見たら剣士になってるー!」

「ん、せっかくイベントで経験値も稼ぎやすくなってるし、勉強がてらね」

「へー、私もこの機会に治療士ヒーラー以外もやってみようかなあ」

「そういえば、タマモさんってメインの職業は何をされてるんですか?」

「あれ、言ってなかったっけ。メインは陰陽師で、拠点もジパングなんだ。今回はイベントが開催されたから、こっちに帰ってきてるだけだよ」

イベントが終われば、またジパングに戻る事になるだろうなあ。

王都の方に行けば色々新しいクエストも受注できるし、【来訪者の石碑】も登録できてお得なのだけど、いまいち気が乗らず、いまだにジパングを中心に活動していたりする。

しかし、今回のイベントで七將軍が初めて大きな動きを見せたとし、もしかすると王都の方でもそれに対して何かあるかもしれないな。

それに備えて、最低でも【来訪者の石碑】で移動できるようにはしておいた方がいいかもしれない。

「陰陽師ですかー。タマモさんって着物も似合いそうですね」

「そうそう、すっごく綺麗なんです、タマモの着物姿! あまりに綺麗だから、一部では“お稲荷様”なんて呼ばれてたりして!」

「ちよつと待ってくれ。何だその“お稲荷様”って」

そんな通称で呼ばれているなんて、ボクは初耳なのだけど。

レベル六十の妖狐族で陰陽師のプレイヤーなんて、ほかにもごまんというだろうに、どうしてそうなった。

別にボスモンスターを倒したりとか、特別なアイテムを手に入れたりとか、そんな目立つことはしていない筈だが。

「だってタマモ、やたらクスノハさんと一緒にいるし、そりゃあ目立つ

よー」

ぐう、と言葉に詰まった。

確かに、歩く広告塔のような彼女の傍にいれば自然と人の目に触れることは多くなるが、まさかそれが原因で“お稲荷様”なんて呼び名を付けられるだなんて、誰が予想できるだろう。

詳しく話を聞いてみると、どうやらジパングを開放した際に、真っ先に陰陽師となる為のクエストを受注したのも理由の一つになっているらしい。なんでも、この鯖初の陰陽師がボクなのだとか。

よくそんなところまで調べたなど、つついっ感じんしてしまふ。

「でも、わかる気がします。タマモさんってこう、なんというか、雰囲気普通の人と少し違いますよね」

「何というか、周りの空気が澄んでるといふか、心が洗われるー、みたいな」

「人をパワースポットみたいと言わないでもらおうか」

「いいじゃないいじゃん、有名人だよー」

他人事だと思つて、本当に楽しそうだな。とりあえず尻尾ではたいておこう。

それに、俗世に染まり切つたボクにそんなご利益があるのなら、世の中は聖人君主だらけになってしまう。

しかしお稲荷様とはまた、仰々しい呼び名である。

まあどうせどこかのプレイヤーが面白半分に呼び始めたものであろうし、そのうち皆も飽きて忘れていくだろう。

空になつたカップの縁を指先でなぞり、一つため息を吐いた。

「でも、まあ、そうだね。いつまでもパーティーを組んでいられる訳でもないし、一度ソロでの戦闘にも慣れておこうか」

ちようど治療術士ヒーラーもいることであるし、とモミジを見やる。

回復は彼女に任せればいいし、もし戦闘中に他のモンスターに襲われた場合も、ボクが対応すれば問題ないだろう。

そう提案すると、モミジは二つ返事で承してくれた。

「どうせ暇だし、全然大丈夫だよー」

「なんだかすみません、何から何まで……」

「なに、こつちがお節介を焼いているだけだからね。もし迷惑だったら、気軽に言ってくれて構わないよ」

さて、それじゃあ会計を済ませて、装備を買い揃えに行くでしょう。彼女のレベルだと、いつぞやかお世話になったカトレアさんのお店が丁度いいだろう。

「と、その前に、先にこつちに変えておくよ」

忘れないうちにと、店を出た先でメインメニューを開き、職業を陰陽師へと変更する。

全身を光が包み込み、一瞬のうちに装備が剣士用の軽装から慣れ親しんだ着物へと切り替わった。うん、やはりこちらの恰好の方が納まりがいいな。この短い丈にはいまいち慣れないけれど……。

「わあ、やっぱり着物姿も素敵です、ね……?」

帯に差してあった扇をぱつと開き、胸元へと風を送り込んでみると、何故だかイナバさんが膝から崩れ落ちていた。傍目から見てもわかりやすく落ち込んでおり、心なしか辺りの空気がどんよりと淀んでいるようにすら見える。

首を傾げモミジに視線を向けると、彼女は彼女で何やら悟ったような表情を浮かべていた。

「あー、そうなるよねえ。前の服装ですらわかりにくかったのに、剣士用の装備なんてしてたら余計に勘違いしちゃうよねえ」

「違うんです、なんというか、知らなかったとはいえ、同性にキュンキュンしてた自分に自己嫌悪といいますか、シヨックというか、ノーマルのはずなんだけどなーおかしいなー……」

「まあ、ぱつと見は美少年だからねえ」

二人して何やら話しているようだが、なんだろう、この疎外感。

とりあえず、周囲の視線が痛いので早く移動したいのだけど。

それから数分後、ようやく立ち直ったイナバさんの装備を新調し、ボクたちは再び始まりの草原へと向かうのであった。

お稲荷様とお茶会

「へえ、それじゃあモミジちゃんとタマモさんは結構長い付き合いなんですね」

「長いと言っても、サービス開始からだから、まだ一年も経っていないけどね」

始まりの森の手前、町から随分と離れた場所でレベル上げを行う事数時間。

さすがにこの辺で一度休憩しようと、今は三人揃って切り株を椅子代わりにしてお茶会の最中である。これは何も例えの話ではなく、実際に紅茶とクッキーが用意されているのだ。

今も甘い香りを漂わせるそれらの品は、知らないうちに調理師のレベルを上げていたモミジが、こんなこともあるのかと、と見栄を切つてどこからともなく取り出した物である。

どうやら王都を拠点に活動しているうちに手を出していたらしく、他にも簡単な物であれば数種類は作成できるという。

現実とは違い、レシピさえあればさほど手間をかけずに料理ができるから楽でいいよね、とはモミジの言である。

「レベル六十までいくと、やることも少なくなるしねえ。ハヤトたちは毎日金策してるみたいだけど」

「まあ、色々と入用になってくるだろうからねえ」

近々マイホームが購入できるようになる、なんて噂もある。

家を買うとなると相当な出費になるだろうが、なかなか夢が膨らむ話ではある。

それにレベル上限が引き上げられれば、やがては装備を新調する必要が出てくるのだし、今から備えておくに越したことはないだろう。

「タマモさんは、何か生産職に手を付けるつもりはないんですか？」

「ううん、やるとなると裁縫師辺りだろうけど、今はまだそんな予定はないかな」

自分で着物を仕立てたり出来るのは凄く魅力的ではあるが、今はま

だ他に優先したい事があるしなあ。王都にだってまだ行っていないし、ジパングの方もまだまだ探索していないエリアがあったりするし。

それに、クズノハさんのお店にある着物も結構気に入ってるし。鬼姫装備はちよつと、あれだったけど。

「そういうイナバさんは生産職に興味はないのかい？」

「私ですか？ 私は細工師ですかねー。実は、リアルの方でもアクセ作ったりしてるんですよ」

イナバさんがメインメニューを開き、一枚の画像データを目の前に表示させると、それを見たモミジがおお、と身を乗り出した。

そこにはイナバさんが自作したらしいアクセサリーの数々が映し出されており、ビーズで作られた可愛らしいブレスレットから、手の込んだシルバーの指輪まである。器用なものだなあ。

「凄ーい！ これ全部作ったんですか!？」

「いやあ、趣味で作った物ですし、実物はそんなに大したことないですよ」

「いや、これは十分に商品としても通用するレベルだと思うけど」

この桜の花びらをモチーフにしたネックレスとか、実にボク好みである。

しかし、それほど物作りに興味があるのなら、なぜ生産職ではなく、魔法使いをチョイスしたのだろうか。

疑問に思い尋ねてみると、どうやらせっかくゲームの世界にやって来たのだから、ここでしかできない事をやってみたい、というのが理由らしい。

「小さい時から夢だったんですよー、こう、魔法とか、憧れるじゃないですか」

「そういうものなのかなあ」

「タマモは乙女心がわかってないなあ」

失礼な。

確かに少女向けのアニメや漫画はあまり見たことがないが、これでもれっきとした乙女なのである。

言ってて自分でも首をひねりたくなる話ではあるが。

「でもタマモの子どもの頃って、あんまり想像出来ないんだよねー」

「んー、まあ外に出て遊ぶタイプではなかったね。ほとんど自分の部屋で本とにらめっこをしていたよ」

幸いうちには沢山本が置いてあったから、飽きることはなかったし。

あまりに部屋から出なかったものだから、呆れた祖母によく連れ出されていたっけ。

「うわ、もしかしてタマモってお嬢様って呼ばれてたりする……?」

「いや、読書ぐらいなら誰だってやるだろうに」

「何ですかね、タマモさんが読書っていうと、こう、真っ白なレースのカーテンに安楽椅子のイメージが……」

イナバさんの中で、ボクはどれだけ美化されているのだろうか。

“お稲荷様”の件といい、どうも二人はボクを深窓の令嬢みたく考えているようだが、実際はもっと俗っぽい人間なのだが。

ジャンクフードも大好きだし、コンビニで漫画の立ち読みだつてする。

「普通に自分の部屋で、ベッドに寝転びながらだよ」

「え、じゃあもしかして引きこも——ふぎやつ!」

流石にそれはちよつと言いきすぎじゃないかな?

モミジの頭頂部に手刀を落としつつ、ため息を吐く。

頭を摩りながら涙目でうーつとこちらを睨みつけてくるが、完全に自業自得であるので無視する。

「まあ学校もVR制のところだし、家から殆ど出ないから否定はできないけど……」

ボクがそう漏らすと、隣で話を聞いていたイナバさんが盛大に紅茶を噴出した。

「げほっげほっ! えっ、タマモさん“VRS”に通ってるんですか!?!」

「え、まあ、そうだけど……?」

「いいなあ、私も興味あったんですけど、両親がどうしても許可してく

れなかったんですよー！」

VR S——Virtual Reality School

その名の通りVR技術を利用し、生徒は自宅から専用の端末を使用してログイン、ヴァーチャル空間で全ての授業を受ける、数年前から徐々にその数を増やしつつある新しい形態の学校である。

端末とインターネット環境さえあればどこからでも利用出来るため、身体に障害を持ち自由に登校できない人などでも何不自由なく勉学に専念できるというメリットがある反面、ヴァーチャルリアリティに依存してしまい、現実世界での生活に悪影響を及ぼすのではないかと、様々な方面から批判を受けていたりもする。

まあボクは単純に毎日通うのが面倒だからという理由で、VR制の学校を選択したのだが。

従来の学校に比べると学費も安いし、重たい学生カバンとも、すし詰め状態の満員電車とも無縁なのでとにかく楽なのだ。

「んー、私は部活もあるし、今までの学校の方が好きかなあ」

そういえばモミジは陸上部だったか。

日焼けした肌も部活動の影響らしく、こう見えてインターハイに出場した経験もあるのだとか。

その話を聞いて、やはりアバターの外見は殆ど変更していないのか、と僅かながら驚いた記憶がある。

「VR制だと、通信障害とかが起きると結構不便だしね。先生の声がラグって聞こえたりするし、天候に影響されないから、台風が来ても授業には出ないといけないしね」

「それはちよつと、嫌かもしれませんね……」

そうして、すっかり世間話に夢中になってしまったボクたちが当初の目的を思い出すのは、それから三十分以上経過したあとであった。そんなこんなで、時折ぐだぐだになりながらもレベル上げを行い、現実世界が夕方に差し掛かるころには、イナバさんのレベルは十二にまで上がっていた。

一通りアドバイスも済ませたし、あとは彼女一人でも大丈夫だろう。

なんだか世間話をしていた時間の方が長かった気がするのは、きつと気のせいだと思いたい。

「今日は本当に色々とありがとうございました！」

アインに戻ってきたところで、イナバさんは大きな兎耳を揺らしながら深々と頭を下げた。

ちなみに巨竜とプレイヤーとの争いはいまだ続いていた。本当にご苦勞なことである。

「どういたしましてー、私も色々お話しできて楽しかったです！」

「魔法使いだとこれからパーティを組むことも多いだろうけど、今日伝えた内容にさえ気を遣えばそう厄介な事にはならないと思う。まあ、もし困ったことがあれば、いつでも声をかけて」

フレンド登録を済ませ、夕飯の支度があるということでログアウトしていく彼女を見送ると、どちらともなくきびすを返し、噴水広場を後にする。

何というか、色々と密度の濃い一日だったな。

ゲームの中であれだけリアルの話をしたのも、思えば初めてかもしれない。

「あ、そうだ。タマモってこれから予定ある？」

ふと振り向きながら、モミジがこちらを見上げるようにしてそう尋ねてきた。

うーん、夕飯の支度は済ませてあるし、特に予定はないかな。

そう答えるとモミジはぱつと笑顔を咲かせて、ボクの両手をしかと握りしめた。なんだろう、何故だか面倒ごとの予感がする。

「よし、じゃあ今から王都に行こう！」

「何がじゃあ、なのかわからないのだけど、どうして急に王都へ？」

別に用事はないし、どうせならジパングへ戻って色々と買い物をしたいのだけど。

「だって、タマモって放っておいたらずっとジパングに籠ってるんだもん。私もログアウトの時間までまだ余裕あるし、せっかくだから一緒に遊ぼうよ！」

掴んだ両手をぶんぶんとして上下にシェイクしつつそう言う様子はまるで駄々を捏ねる子どものようで、思わずこみ上げてきた笑いを袖で隠していると、モミジはぷくつと頬を膨らませた。

やれやれ、どうやら機嫌を損ねてしまったようだ。

「むー、なに笑ってるのさー!」

「ふふつ、いや、ちよつとツボに入っただけでね。わかったよ、ボクも王都に興味がない訳ではないし、良い機会だから立ち寄っておこうかな」

イベントはまだ初日なので明日にはまたこちらへと戻ってくるだろうけど、向こうの【来訪者の石碑】さえ登録しておけばさほど移動に時間はかからなくなるし、いつかは訪れておかなければならない地ではあるのだ。どうせ後々、イベントにも絡んでくるだろうしね。

さて、とりあえずはこの町にある【来訪者の石碑】からツヴァイへ移動、その後は徒歩で王都へ向かうのが一番楽なルートだろうか。

公式ホームページによれば王都《フィーア》は、白亜の王城がそびえる美しい街らしいが、今度はどんな出会いが待っているのだろうか。

そんな僅かな期待を胸に、とりあえずは目の前で地団太を踏むこのお姫様のご機嫌をとるところから始めるとしようかと、ボクはまた苦笑いを浮かべるのだった。

お稲荷様と聖なる都

王都《ファイア》がどういった街なのかを尋ねれば、誰もがまずこう答えるだろう。天然の城塞、と。

美しい白亜の城《グロリオサ》の背後には険しい断崖絶壁がそびえ、扇状に広がる城下町の左右には巨大な滝が、まるで町を守る盾の様にその雄大な姿を見せつけている。

正面には竜の突進すら防ぎそうな高く分厚い城壁が立ちふさがり、唯一内と外とを行き来できる巨大な門をくぐれば、旅の吟遊詩人が奏でる豎琴の音色と、賑やかな街の人々の声がボクたちを出迎えてくれた。

綺麗に舗装された石畳の道が城までまっすぐに伸び、その左右に宿屋や道具屋といった様々なお店の看板が並んでいる。

「到着ー！」

「驚いたな。これはなかなか壮観だね」

なるほど、モミジがあれだけ勧めてくるわけである。

現実ではまずありえない、まさしくファンタジーと呼ぶに相応しい街並みに、思わず息を吐いた。

さらにこの街には王立図書館なる施設まであるらしく、そこにはモンスター図鑑から料理のレシピ本まで、様々な書物が収められているという。

これはまたやるが増えてしまったなと頭を抱えながら、モミジに連れられて冒険者ギルドの丸テーブルに腰を下ろした。

大陸全土に広がる巨大ギルドの本部ともあって、一階のスペースだけでも各支部の倍以上はある。さらにこの一階部分には喫茶店まで併設されているらしく、辺りからはなんとも香しい料理の匂いが立ちあがっていた。

「流石は総本山、豪勢なことだ」

「でもこのパンケーキ、凄く美味しいんだよ」

制服も可愛いし、とモミジはエプロン姿の女性スタッフに声をかけ

ると、随分と慣れた様子で注文をすませてしまう。ちやっかり二人分、同じものを。

しばらくすると、ボクたちのテーブルには色とりどりの果物が盛られたパンケーキと紅茶が並べられていた。

なんだか最近、こういったお店で食べてばかりな気がする。

いや、まあ、あくまでもゲームの中であるので、いくら食べても余分な肉がついたりはいしないのだが。

フルダイブ型のゲームが女性ゲーマーに好かれている理由の一つである。

「それで、タマモはこれから図書館でしょ？」

「はは、ぐ明察。どんな本があるか気になるし、少し覗いてみるつもり」

「きつと驚くと思うよ、辺り一面本だらけだもん」

「それはまた、楽しみだ」

パンケーキを切り分けて一口含むと、しつとりとした生地ของ甘さと果物の酸味がふつと口内に広がった。

なるほど、モミジがお勧めするのも納得の品である。

さて、休憩もそこそこに冒険者ギルドを後にしたボクは、目的の王立図書館へと足を延ばしていた。

大理石の柱が立ち並ぶ、古代ローマ建築を彷彿とさせる佇まいを一度見上げて中に入ると、しんと静まり返った空間に足音だけがこつこつと染み入るように響いていく。

「これはまた、素晴らしい」

廊下の奥にあった扉をくぐった先で、ボクは思わずそう呟いた。

天井に届かんばかりの本棚が壁いっぱい立ち並び、そればかりかそこに納まりきらない本たちがそこら中に積み重ねられている。

一見雑に扱っているように見えるが、その上に埃はまったく積もっておらず、傷も汚れもない。

どうやら定期的にしっかりと手入れはされているようだ。

そのうちの一冊を無造作に手に取ると、どこか懐かしいインクの香りが鼻先をくすぐった。

「ようこそ、王立図書館へ」

うずたかく積まれた本の山の向こうから、ずっと一人の老紳士が姿を見せた。

色褪せた銀髪を後ろで束ね、しわ一つない小綺麗なスーツを見事に着こなしている。

胸の前に手を添え、老紳士が一礼した。

「わたくし、この図書館の司書を務めております、モリヤックと申します。以後、お見知りおきを」

「ボクはタマモ、友人からこの話を聞いてご挨拶に伺いました。とても素晴らしいところですね、ここは」

「お褒め頂き、光栄でございます。もしお求めのものなどがございましたら、何なりと申しつけ下さいませ」

「でしたら、この国の歴史や文化が記されたものはありますか？」

ボクがそういうと、モリヤックさんはふむ、と数秒考える仕草を見せると、やがて本棚からいくつか本を手に取り、こちらへと差し出した。

「でしたら、これらがちょうど良いかと。宜しければ、奥の机をお使いください」

「いえ、お邪魔でないなら、ここで読ませてください。これほどの本たちに囲まれるなんて、そうある事ではありませんので」

「ほほ、タマモ様も随分と本の虫でいらつしやるようですね。こんな場所で宜しければ、どうぞご自由にお使い下さい」

そう言つて優しく微笑むと、モリヤックさんはまた一礼して図書館の奥へと去っていった。

その背中を見送ったあと、尻尾で本の山を崩さないように気を付けながら納まりの良い場所を見つけると腰を下ろし、渡された本へ目を通していく。

まあ、この国の歴史書などと言っても、結局は運営が用意した設定資料集でしかないのだろうが、各町のこれまでの歴史や、他国との関係、歴史を大きく動かした出来事など、普通にプレイしては知りえないだろうそれらは実によく作りこまれており、読む方としても全

く退屈しない。

そして意外だったのは、“魔王”という単語がどこにも見当たらなかったという点だ。

魔王といえば、アワリティアたち七将軍が仕える、このゲームのボスキャラとも噂されている人物であり、その実態はいまだ誰も解明できていない。

魔王というのだから、歴史上の節目節目でその存在を匂わせているのではないかと予想していたのだが、どうやらあてが外れてしまったようだ。

本当に今回初めて歴史の表舞台に現れたのか、それとも意図的に情報が隠蔽されているのか。

案外、運営が魔王関連の書物を実装していないだけだったりして。読み終わった書物を脇に積み上げながら、興味を引いた書物を片っ端から読み漁っていく。

どこに置いてあるのかわからない場合は、モリヤツクさんに頼めばすぐに用意してくれた。どうやら彼は、この巨大な図書館のどの棚にどの本が並べられているのか全て熟知しているようだった。

歴史書、学術書、中にはスキルの指南書まで置いてある。

「ふう、これは一生かかっても読み切れそうにないな」

“ぶらり釣り道楽”なる、とある旅人が記した釣りの指南書をぱたんと閉じて、ボクは深々と息を吐いた。

「それはもう、国中の英知が集っておりますので。わたくしでさえ、完全に内容を把握しているのは全体の八割程でございます」

「この八割といえば、それだけでも相当な量だと思えますけどね」

なにせ野球場ほどはありそうな巨大図書館である。むしろ八割も目を通してるのが驚きだ。

できれば時間が許す限りここで本を読み耽っていたいものだが、王都で見ておきたい場所は他に幾つもあるのであまり長居をする訳にもいかない。

確認してみると、どうも本の貸し出しはしていないようなので、また時間がある時に直出してくるとしよう。

「それでは、そろそろお暇しようと思います。色々と面倒を見て頂いて、ありがとうございます」

「いえいえ、またのお越しをお待ちしております」

モリヤツクさんに挨拶して図書館を後にすると、外はもうすっかり暗くなっていた。

軽く立ち寄る程度のつもりが、かなりの時間を過ごしてしまったようだ。

当初の予定ではこの後あの王城に行ってみようかと思っていたのだが、このような夜更けでは流石に入れてはもらえないだろうし、あそこは明日にでも向かうとしよう。

尻尾を揺らし、ぼんやりと街灯の光に照らされた道をあてもなく歩いてみると、聞きなれたメッセージの受信音が響いた。送り人はハヤトのようだが、いったいどうしたのだろうか。

わずかに訝しみながら本文へと目を通し、そこに記されていた内容にボクは自身の目を疑った。

「なんとも、予想が外れてしまったな……」

添付されたスクリーンショットには、手にした武器を天高く掲げ、何やら雄叫びをあげているプレイヤーたちの姿が映っていた。

——メカムート君三号および七將軍、撃退に成功す

何やら荒れそうなその一文を再び見やり、ボクは苦笑いを浮かべるのだった。

お稲荷様と地下迷宮

ハヤトから報せを受けたボクは、【来訪者の石碑】経由で急いでインへと戻ることにした。

まさかと思いつつ始まりの草原へ出ると、確かにあれほど暴れていた巨竜の姿がどこにもない。

しかし早くもイベントが終了したわけではないようで、何故だか巨竜の身体から湧き出ていたプチメカムートたちは以前と変わらずフィールドを徘徊しており、高レベルプレイヤーがいなくなった代わりに、新規組のプレイヤーたちで草原は溢れかえっていた。

だが、まさかあのボスモンスターを撃退するとは恐れ入った。まるで歯が立たないように見えたのだが、いったいどんな手を使ったのか。

それはともかく、今はハヤトたちと合流することを優先しよう。何やら人手が必要ということで呼び出されたのだが、何事なのだろうか。

「あ、いたいた、おーいー」

声がかかった方へと目をやれば、いつもの三人組が揃ってこちらへとやってきていた。モミジとは図書館に向かう前に別れたばかりだったのだが、どうやら先にアインへと戻ってきていたようだ。

「急に呼び出してごめん、ちよつとイベント絡みで人手が必要になって」

「構わないよ、どうせ暇だったし。とりあえず、事情を聞かせてもらおうかな？」

謝罪の言葉を口にするハヤトを手で制すと、三人はこれまでの経緯を簡単に説明し始めた。

ボクがここに呼ばれた理由は今回のイベント絡みらしく、長時間の戦闘の末に巨竜の撃退———どうやら勝利条件は巨竜の体力を一定値以下にまで削ることだったらしい———に成功したプレイヤーたちはすぐさま七將軍インウイディアの追撃を行ったのだが、どうも始まり

の森にあるダンジョンに逃げ込まれたとかで、現在は攻略クランも総出でそのダンジョンの攻略にあたっているらしい。

何もダンジョン一つにそこまで人手を割かなくても思ったが、どうやらダンジョンはまるで地下迷宮の如く入り組んだ構造になっているようで、数パーティ程度で攻略するには時間がかかりすぎて、攻略が完了する頃にはイベントが終わってしまうと危惧している、と。そこでハヤトたちのパーティも参加することになったのだが、せっかくなのだからボクも誘っておこう、ということでメッセージを送った、というのが今回の顛末だそう。

「ダンジョン自体の存在は随分前から確認されてたんだけど、配置されてるモンスターの経験値も美味しくないし、特にレアなアイテムがある訳でもないから今まで放置されてたんだ。でも、まさかイベントに絡んでくるとは」

「元々、頃合いを見てダンジョンの奥を開放する予定だったのかもね」
RPGではよくあるパターンだし。

ダンジョンの奥には敵の秘密基地があるのでは、という憶測も出ているらしく、巨竜の討伐にあたっていたプレイヤーたちはみんな躍起になって探索しているのだとか。

「それもまた、なんというかありがちな」

町の近くのダンジョンに秘密基地とか、なんだか戦隊モノみたいだな。

男性プレイヤーにはたまらないものがあるのかもしれない。

とにかく例のダンジョンに行ってみようと、町で軽く準備を済ませたあと、ボクたちは始まりの森へと向かった。

と、そこで思い出したのだが、この森には随分と嫌な目に合わされた記憶が――

「あ、ジャイアントビー」

「狐火い！」

「ちよ、おま、あつぶねえなあオイ！」

木陰から飛び出してきた目にしたくもないモンスターに、半ば反射的にスキルを使用する。

突然背後から飛来した火球にコタロウが毛を逆立たせながら叫ぶが、このゲームにフレンドリーファイアはないので彼の体力が減ることはない。まあ、いきなり背後から攻撃されたらボクだって驚くとは思うが。

レベル六十になるボクが放った狐火をまともにくらって、巨大な蜂は断末魔の叫びすら上げることができずに爆散した。

「タマモってホントに蜂が苦手なんだねえ」

「恥ずかしながら、ちよつとトラウマがね……」

苦笑いを浮かべるモミジに、尻尾を抱えながら答える。

でも、あの大ききの蜂が迫ってきて、怖くない人間なんていないと思うのだけど。

「まあ、その辺は慣れだな。今じゃ刺されてもダメージなんか入んねえし。まあ、元々虫とかは平気な方だけだよ」

そりやあ男の子なら虫ぐらい平気だろう。まあ例外はあるのだろうけど、少なくともハヤトやコタロウは苦手なようには見えない。

「ちよいちよい出てくるよね、タマモの女子っぽいところ」

「今の装備だと、かなり前面に出されてると思うけどね……」

その後もちらほらと顔を出すジャイアントビーを三人に処理してもらいつつ、しばらく森を進むとやがてぽっかりと口を開けた洞窟の入り口が見えてきた。その周辺には、休憩しているらしいプレイヤーたちの姿もある。

洞窟の中はどうかやら鍾乳洞のようになってるようで、ぼうつと松明で照らされた天井からはいくつもの石柱が垂れ下がっていた。少し湿り気のある風が、なんとも不気味な呻き声のような音と共に頬をなで去っていく。

「中は意外と明るいんだけど、敵が少し強くなるから気を付けて」

注意するハヤトを先頭に洞窟の内部へと足を踏み入れると、中はプレイヤーが設置したのかいくつもの松明で照らされており、これならばつまづいて転ぶこともない。

強くなるとは言ってもやはりレベル二十かそこらのモンスターであるので、レベル六十のプレイヤー四人の相手となると、不意を打た

れないかぎり手傷を負うことはないだろう。

しかし、しばらく進んでみるとたしかに内部は地下迷宮のようで、途中で大きさまざまな道へと分岐していた。分岐は一方向のみであるので、外へと戻る場合は一本道で済むが。

だが、これならそれほど人数を揃えなくとも、数パーティほどいれば攻略できるのではないだろうか。

そう疑問に思い尋ねてみると、暗闇から飛び出してきたコウモリ型のモンスターを切り払いながら、ハヤトが答えた。

「ここはまだましなだけだね、もう一階層降りるともっと複雑になるんだよ。モンスターもレベル六十でなんとか、ぐらいの強さになるし。それに、ぶっちゃけて言うともんな飽き始めてるみたいで、最初に比べると人数が減ってきてるんだよ」

まあ、延々と迷宮を進まされるのだから、気も減入ってくるというものである。

ボクは元々少し手狭なぐらいが落ち着けるタイプであるし、こうして延々と散策するのも苦ではないが。

そうして鍾乳洞の中を進んでいくと、やがて明らかに人の手が加えられた、石造りの階段が見えてきた。螺旋状に下へと続き、苔も生えておらず破損も少ないところから、比較的新しく作られたものであることがわかる。

注意深くその階段を下っていくと、石柱が並び立ち、岩肌も剥き出しであったその景色から、床から壁、天井までもが綺麗に石で整えられた、まるで洞窟の中とは思えないものへと一変させた。

まさしくRPGのダンジョンといったその光景に、ボクは目を丸くする。

「うわあ、私も初めて来たけど、如何にもって感じだねえ」

思わずそう漏らしたのはモミジである。

「ミノタウロスとか出そうだよねー」

「迷宮にありがちなね。そこのところはどうなんだい、ハヤト」

「残念ながらまだ発見はされてないね、見つかったのはゴーレムやスケルトン、スライム系のモンスターと、それっぽいところだとミ

ミックとかかな」

それはまた、ダンジョンにありがちなモンスターである。

やはり宝箱に擬態していて、開けようとすると思わぬ襲撃が掛かってくるのだろうか。

話をしつつ進んでいると、やがて正面から土色の人形のようなモンスターが現れた。確認してみると、クレイゴーレムという名前らしい。

巨大な上半身に反して下半身は小さく、あれでどうやってバランスを保っているのだろうと、知的好奇心を刺激されながら腰から扇を引き抜くと同時に先頭に行くハヤトが切りかかった。

しかし、やはり見た目通り相当な硬さをもっているらしく、鈍い音と共にハヤトの剣ははじき返されてしまった。となると、ボクの出番だろう。

「鎌鼬」

扇を構え上段から下段に勢いよく振り下ろすと、そこから風の刃が走り敵へと襲い掛かる。

その効果は十分で、刃はゴーレムがハヤトを叩き潰さんと振り上げていた右腕を半ばから切断し、体制を崩したゴーレムは派手な音と共に転倒した。

木は土から養分を吸い取り、痩せ細らせる。

このゲームにおいて風は木属性に属する。あのゴーレムはわかりやすく土気、土属性の敵だろうから、この場合は木剋土が成立する。

陰陽師が得意とする、五行思想の理だ。

まあややこしいのでシンプルに言い直すと、ようは敵の弱点属性を突いただけの話なのだが。

転倒したゴーレムに止めとばかりに前衛職の二人が攻撃を叩き込み、ボクがダメ押しの【鎌鼬】を打ち込むと、ようやくゴーレムは身体を土くれに変え、その動きを止めた。

「ありがとうタマモ、助かったよ」

「やっぱ魔法職がいると楽だな。ここの敵、物理攻撃に耐性持ってるやつ多いんだよ」

「はい、ここ、ここに魔法職いるんですけどー！」

ぴよんぴよん飛び跳ねながら、不服そうにモミジが手を上げた。

まあ聖属性の魔法はスケルトンなどのアンデット系モンスターに威力を発揮するし、回復や補助魔法だけでも十分貢献できていると思う。

なにより、攻撃魔法の火力で負けてしまったら、妖狐族の立つ瀬がなくなってしまう。

しかし、まあ、なんだか楽しめそうなダンジョンである。

「ちよつと湿気は多すぎるけど」

はじめとした空気を払うように胸元を扇で仰ぎながら、再び進み始めたハヤトの後を追う。

「あ、ダメだよタマモ、そんな風にしちや。ただでさえ狼が傍にいないから、気を付けないと！」

その仕草がはしたなかったのか、モミジが慌ててボクの手を抑え、眉間に皺を寄せた。

たしかに、今のは少し配慮が足りなかったかもしれない。今後は気を付ける事にしよう。

しかし、なんというか、こういった事をモミジに注意されると、なんとも言えない気持ちになるなあ。

珍しくお姉さんらしい雰囲気醸し出す彼女に苦笑いを浮かべながら、ボクはそんな事を思うのであった。

お稲荷様と怠惰、ときどき嫉妬

「狐火！」

六本の尻尾から放たれた火球が、巨大な鉈を装備した白骨死体のモンスターであるスケルトンマーダラーの頭部へ襲い掛かる。爆発音が響き、かかか、とスケルトンマーダラーが苦しむように身をよじりつつた。

血に塗れたぼろを纏う殺人鬼が苦悶の声をあげながら光の粒と なって消滅するのを視界の端に収めつつ、標的を次に移す。

そこではハヤトが盾を構え、クレイゴーレムが振り下ろした巨大な 腕の一撃を受け止めていた。

モミジの回復魔法がすぐさま減少した体力を引き戻し、ボクと同じ くフリーになったコタロウがゴーレムの背後に回り込み、鋭い拳撃を 放つ。

ボクも急いでゴーレムを射程距離内に納め、再びスキルを発動し た。

「雷獣！」

左右から三本ずつ伸ばした尻尾から紫電が走り、突き出した右手へ と収束、稲妻となってクレイゴーレムへと疾走する。

まるで巨大な槍が如き一撃は敵の胸部を貫き、大穴が開いたクレイ ゴーレムは瓦解しながらその動きを停止させた。

意外に思われるかもしれないが、雷も風と同じく木気に属し、土気 に対して強い効果を発揮する。

【鎌鼬】に比べ消費MPが多いが、威力は相応に高いのでここぞとい う場面ではお世話になっているスキルだ。

クレイゴーレムが光となって霧散するのを確認し、ふう、と息を吐 いた。

「やれやれ、段々敵の数も増えてきたね」

「そうだね。まあ、それだけダンジョンの奥に進んできてるって事 じゃないかな」

剣を鞘へと納め、ぐるりと周囲の安全を確認しながらハヤトが答える。

ボクたちがこの地下迷宮に潜ってから早一時間。敵の強さはそれほどではないがどうにも連続して遭遇することが多くなり、先程のスケルトンマーダラーで六連戦となる。

「しかし、ここまで多いと鬱陶しいな。まだゴールは見えねえのかよ」「うーん、流石にそろそろ最深部に着いてもいいと思うんだけど……おっと?」

先頭を歩くハヤトが不意に立ち止まり、間の抜けた声をあげた。どうやらモンスターと遭遇したわけではなさそうだが、何があったのだろうか。

気になったボクたちが彼の肩越しに通路の奥をのぞき込むと、そこには一枚の扉がじっと佇んでいた。

他とは明らかに違う、見るからに分厚そうな鉄の扉だ。

表面には両翼を左右に広げた、長い尾を持つ鳥の紋章が刻まれている。

「これは……」

「見るからに怪しいね。どうする?」

ボクがそう尋ねると、ハヤトは顎に手を当てて考え込む。

ここがボス部屋の類であれば、ボクたち四人で飛び込んで勝てる可能性は低い。

ただでさえレイドボスを退けて発生したイベントなのだ、ともすれば、この地下迷宮に撤退したというインウィディア自身が出てきても不思議ではない。

「引き返したとしても次も上手くここまで来られる保証はないし、行ってみようか」

「さんせー!」

大きく手を上げるモミジを見て、コタロウが頭を抱えたため息を吐いた。

「お前は戻るのがめんどくさいだけだろうが……」

「えー、どうせ帰るなら死に戻った方が楽じゃん!」

「まあ、効率的ではあるね」

まるで治癒術士の台詞とは思えないけれど、まあそれはそれとして。

いつもの補助魔法をかけ終わると、ボクたちは改めて目の前の扉と対峙する。

互いに目配せし、ハヤトが小さく頷いて扉へと手をかけた。ぎぎ、と鈍い音をあげながら、ゆっくりと扉が開かれていく。

「……あれ？」

その時、僅かに開いた隙間からちらりと中をのぞき込んだハヤトが素つ頓狂な声をあげたかと思えば、それまでの慎重さはどこへやら、まるで自宅の玄関を開くような気安さで扉を開け放ってしまった。

「おい、もうちよつと慎重に……？」

これに対しコタロウが抗議の声をあげようとするが、扉が開かれ露になった内部の様子にその声はしりすぼみになっていった。

信じられないといった風の表情だが、それはボクも同じで、モミジに関しては訳が分からないといった感じで首を傾げている。

重厚な鉄の扉で守られた部屋の内部にはカーペットが敷かれ、小さな机と本棚、そして大きなベッドが置かれた可愛らしい空間が広がっていた。ボスはおろか、スケルトンやゴーレムの気配すらない。

「えつと、マップの生成ミス、とか？」

「そんな、一世紀前のゲームじゃないんだから」

「いや、なんでダンジョンの中にこんな部屋があるんだよ」

混乱する三人のやり取りを見つとりあえず部屋に入ると、これはなんとも、扉を閉めてしまえばここがダンジョンだという事を忘れてしまうほどである。

インウイディア、の趣味ではないな。あのマッドサイエンティストならもつと、こう、おどろおどろしい薬品や、気味の悪い書物などを置いていそうである。

というか、この可愛らしい小部屋がああ男の私室であってたまるものか。

「んー、うるさいなあ……」

突如響いた聞き慣れぬ声に、ボクを含める全員が即座に戦闘態勢に入る。

いや、失礼、モミジは相変わらず混乱したままで、杖も構えず声の方へ視線を向けるだけであつた。

声がしたのは、部屋の奥に置かれたベッドの中。よく見ればそこは小さく盛り上がり、もそもそと動いているのがわかる。

「インウィディア、じゃない。 誰……？」

ベッドから顔を出したのは、まだ幼さの残る少女であつた。

長く伸びた赤い髪を編み込んで後ろに垂らし、側頭部からは山羊のような捻じれた角が生えている。 どこか見覚えのあるその顔立ちにボクは目を細め、そして思い出した。

「アワリティア……？」

それは、いつぞやか出会つた七將軍の一人、強欲を司る少女。

目の前の少女は、まさしく彼女と瓜二つの顔立ちをしていた。

少女はその名を聞いてこてん、と首を傾げたあと、眠たそうに目をこすりながら頭を振る。

「ボク、アケディアだよ……。 アワリティアはお姉ちゃん……」

アケディア——七つの大罪の一つである “怠惰” を示すその名を聞いて、ハヤトが咄嗟に腰の剣を掴み、抜き放たんとしたところでボクがその手を掴んだ。

「ハヤト、彼女に敵意はない。 ここで戦うのは下策だ」

そう耳打ちすると、ハヤトも納得したのかやがて剣から手を放し、ボクの隣へと身を引いてくれた。

もし彼女がその名の通り怠惰を司る七將軍の一人であるなら、ここで戦いを挑んだところで全滅

は必至。 であるならば、なるべく戦闘を避けつつ、有益な情報を引き出した方が賢明だ。

そうしたボクとハヤトのやり取りを見て、アケディアは何やら考え込む仕草をしたあと、ぽんと手を叩いた。

「ああ、お姉ちゃんが言つてた、妖狐族の来訪者……？」

「おや、アワリティアが何か言つてたのかい？」

あのイベントがここで影響してくるとは思っていなかったが、まさかこの部屋を見つける事が出来たのも、そのあたりが関係しているのだろうか。

ボクの問いかけに、アケディアはふるふると首を振る。

「お姉ちゃん、名前も教えてくれなかった。自慢、だけ。強欲、だから」
それだけ言うと、アケディアはふっと目を閉じると、そのままベッドへと倒れ込んでしまった。

やがて、すやすやと安らかな寝息が――

「つて寝たあ!？」

モミジ、良いツツコミだ。

姉の方もそうだったが、この子もなかなか独特な性格をしているようだ。

むず痒そうに身をよじると、アケディアがうつすらと目を開いた。
「起きてるの、しんどい。眠い、から、おやすみ……」

そう言って布団に潜り込んでしまったアケディアの姿に、苦笑いを浮かべる。

ううむ、実に怠惰らしいといえbraしいのだが、これでは情報を引き出すも何もなくなってしまうなあ。

せめて、彼女が何故ここにいるのか、それだけでも聞きだしたいのだが。

「ねね、ぐっすり寝たいんだったら、家に帰ってからの方がいいんじゃない?　なんでここで寝てるの?」

どうしたものかと頭を悩ませていると、モミジがベッドを覗き込みながらそう尋ねた。

もそもぞとアケディアが再び顔を出すと、もはや半開きになった目でモミジを一瞥し、再びベッドへと潜る。

機嫌を損ねてしまったかと危惧するが、どうやらそれは思い過ごしだったようで、やがて布団の中からのんびりとした彼女の声が響いた。

「インウイディアと一緒に行けって、言われて。でも、インウイディアが一人でやるから、待ってろって。手伝うのもしんどいし、寝てた」

なるほど、本来ならば彼女はインウイディアと共に登場し、来訪者の前に立ちはだかる、という設定になっているらしい。

しかし、ここで待っているように言われたという事は、インウイディアはただこの地下迷宮に撤退してきたのではなく、彼女と合流する事が目的だったのか。

と、なると、ここにあの変態の姿が見えないのが少し気になるな。

そう考えたのが悪かったのか、噂をすれば影が差すというか、扉が豪快に開け放たれる音を聞いて、ボクはがっくりと肩を落とした。

「アームバック！ お待たせしたであるなアケディアよ、さあ、ミーと一緒に帰るのである！」

現れたのは、先日始まりの町を騒がせた七將軍の一人。

何故か所々が破け、ぼろぼろになった白衣を着た男の姿に、ボクは特大のため息を吐くのだった。

お稲荷様と地下迷宮②

気が付けば、ボクたちは洞窟の入り口の前で立ち尽くしていた。

どうやらあの男、七將軍インウィディアが何かしらの仕掛けを作動させたらしい。恐らくはワープ装置のようなものだと思うれるが、突然現れたボクたちを見て、洞窟前で休憩していたらしいプレイヤーたちが何事かと目を丸くしている。

戦闘にならなかったのは幸運だったが、まさかともに会話すらできず追い出されてしまうとは思っていなかった。

随分と急いでいたようだが、他のプレイヤーと何かあったのだろうか。

「とりあえずどうしようか。まだダンジョン内にあの二人が残っている可能性は低いと思うけど、もう一度探してみるかい？」

「うーん、いや、ここは他のプレイヤーが戻ってくるのを待った方がいいと思う」

ハヤトが言うには、現在地下迷宮には攻略クラン【暁の騎士団】のパーティも潜っているらしい。

【暁の騎士団】といえば、かつてジパングを開放する為に挑んだボスバトルで共に戦った大型クランであり、プロ団体を除けば全鯖中에서도トップクラスの実力を誇る。

聞けばあのメカムート君三号を撤退させる事に成功した立役者も、彼ら【暁の騎士団】なのだという。

「もしかしたら、インウィディアがダメージを受けていたのも、騎士団のパーティと戦闘になったからかもしれない。今後のイベントに係してくる可能性が高いし、一度合流してこれまで得た情報を共有した方がいい」

確かに、こういった団体行動を行う際、報告・連絡・相談は何より大事だ。

ネット上の掲示板でも情報の交換は可能だが、そちらはどうしても書き込む手間がかかってしまう分時間がかかるし、何よりリアルタイ

ムでの話し合いには不向きだ。

他の方法もあるにはあるが、どうせ相手方もじき地上に戻ってくるのだから、そう急くこともないだろう。

「それじゃあ、ボクはこの辺で失礼するよ」
だが帰る。

イベントの内容も別に興味はないし、本格的なダンジョンの攻略に胸躍ったことは確かだが、逆に言えばダンジョンの攻略が終わった以上、この場にボクがいる必要性もなくなったと言えるだろう。

「あ、ちよつと待って！」

すつと片手をあげて踵を返し、とりあえずアインの町へと戻ろうかと一歩踏み出したところで、後ろからモミジの慌てた声が響いた。それと同時に、僅かに袖を引かれる感覚。

何事かと背後へ目をやると、そこには両手でひしと袖を掴んだモミジの姿が。

「ご、ごめんなさい。でもでも、せつかく一緒に来たんだし、もう少しお話しようよ」

「うーん、でも正直言って、ボクはこのイベント自体にさほど興味が無いのだけれど……」

「うー、じゃあ私も一緒に行くー！」

どうしてそうなるのか。

モミジがいなくなってしまうと、パーティに必要な不可欠な回復役がいなくなってしまうだろうに。

ボクがそう言うとな彼女は頬を膨らませ、袖を掴む手にさらに力を籠めた。気のせいか、目尻には涙さえ浮かんでいるように見える。

さてはて、困った。年齢はモミジの方が上の筈なのだが、まるで手のかかる妹でも相手にしているような感覚にボクが苦笑いを浮かべていると、背後からこちらへ向かってくる一団があった。

そのうちの一人、ハヤトと同じ鎧を着込んだ男がこちらに気が付き、小さく頭を下げる。

件のボス戦でも活躍した、【暁の騎士団】に所属しているチャーハンさんだ。いつだったか、ボクをクランに勧誘してきた張本人でもある

が、会うのはあれ以来だろうか。

彼に会釈を返し、あとでちゃんと相手をする事を頭を撫でながらモミジに伝えると、何とか納得してくれたようで、彼女は掴んでいた袖を離し、何度か振り返りながらハヤトたちの方へと戻っていった。

それと入れ替わるような形で、チャーハンさんが手を振りながら声をかけてくる。

「これはタマモさん、お久しぶりです」

「久しぶり。騎士団のメンバーが攻略に参加しているとは聞いていたけど、チャーハンさんのパーティだったんだね」

「ああ、交代で攻略にあたって、今はちょうど俺が担当の時間なんですよ」

いやあ、ラッキーでしたわ。

愛想のいい笑みを浮かべながら、チャーハンさんは頭をかいた。

訳を聞いてみれば、何とかダンジョンの最深部で七將軍の撃退に成功したという。とはいえ、味方側の消耗も激しく、薄氷の勝利であったそうだが。

「アイテムも湯水のように使って、何とか三割削ったところで撤退していきましたよ。倒したわけじゃないんで戦利品もないし、全員カンストしてるんで経験値も入らないもんだから、実質こっちは大損つすよ」

「まったくだ」

「せめてアイテムぐらい何か寄こせって話だよー」

背後で話を聞いていた他のパーティメンバーも口々にそう言い、苦い顔をした。

「ところで、タマモさんが来てるってことは、ハヤト君たちもいるんでしょう？　ダンジョンにはもう潜りました？」

「ああ、今しがた戻ったところでね。色々と共有しておきたい情報もあるんだけど、詳しくはハヤトから聞いてくれると助かるかな」

そう言っただけで三人の方に視線を送ると、ハヤトが頷き、ボクと入れ替わるようにチャーハンさんの前に出た。

「実はダンジョンの最深部にある部屋で、嫉妬以外の七將軍と遭遇し

まして」

「ほほう。詳しく聞かせてもらいましょうか」

パーティーメンバーを交え、今回の出来事について話し始めた二人を見つつ、ボクは少し離れた場所で待機していたコタロウとモミジの元へに戻る。

「悪いなタマモ。コイツが無理言ったみたいで」

「いや、問題ないよ。実際、たいした用事がある訳でもないからね」

それにそろそろ夕飯の時間である。街に戻ったところで何かする時間も無いし、ならばここでモミジたちと世間話に花を咲かせるのも悪くはないだろう。

「言われてみれば、もうそんな時間かあ」

「ハヤトの話が終わったら、俺らもぼちぼち落ちるか。早いとこ寝ないと、また寝坊して遅刻する羽目になりそうだな、お前が」

「寝坊なんてしないわよー」

ふしやーと威嚇するモミジをよそに、ボクは殆どが木々で覆われた空を仰ぎ見る。

さて、ボクの予想ではあるが、恐らくはこのイベントはここで終了となるだろう。

アインの町周辺に徘徊するイベントモンスターは期間いっぱいまで残るだろうが、少なくとも七將軍関係のイベントがこれ以上発展することは無い。

七將軍を撃退したことに対しての報酬がない事は気になるが、まあイベント中もしくはイベントが終わったあとにでも配布される手はずになっているのだろう。そのうち公式ホームページにでも詳細がアップされる可能性だってある。

つつい忘れがちではあるが、このイベント自体、本来は新規プレイヤーに向けたものであるので、さほど良い報酬は配られないと思うが。

「ごめん、待たせちゃったかな」

しばらくすると、チャーハンさんたちと話を終えたハヤトが、申し訳なさそうに片手を上げて戻ってきた。

どうやらチャーハンさんのパーティは少し休憩を入れたあと、例の七將軍、怠惰のアケディアを確認する為にもう一度地下迷宮へ潜るそうだ。ハヤトも一緒に来ないかと誘われたが、時間も時間であるし、流石に断ったのだとか。

「しかし、チャーハンさんに随分と買われているようだね。何をしたのさ？」

「いや、僕は何もしてない筈なんだけど……」

困り顔で頬をかくハヤト。もしかすれば、常に最前線に行くトッププレイヤーをして、何か光るものを

感じたのかもしれない。

そうしてしばらく四人で他愛のない話をし、この日はお開きとなった。

余談であるが、再度地下迷宮に潜ったチャーハンさんたちであったが、例の部屋は既にもぬけの殻で、そこにはもう誰もいなかったという。

後日、悔しそうにそう語るチャーハンさんを眺めながら、ボクは苦笑いを浮かべるのだった。

お稲荷様と魚釣り

一時間幸せになりたかったら酒を飲みなさい。

三日間幸せになりたかったら結婚しなさい。

八日間幸せになりたかったら豚を殺して食べなさい。

永遠に幸せになりたかったら、釣りを覚えなさい。

たしか、中国の古い諺だったか。

雲一つない晴天の下、涼やかな水音を響かせながら流れる川の表面が、日の光を反射してきらきらと輝いている。澄んだ水の中を小さな川魚の群れが泳ぎ、それを狙っているのか、川辺の苔むした岩の上に美しい青い翼を持った小鳥がとまり、小さく鳴いた。

水面を覗き込むその可愛らしい姿に思わず笑みを漏らしながら、ひゅんと風を切る音と共に竿を振ると、川に飛び込んだ丸形のウキが水面に小さな波紋を広げる。

柔らかな木漏れ日の中で、ゆらりゆらりと揺れるウキを眺めながらぐっと伸びをした。

サービス開始後初のイベントが無事終了して早三日、釣竿を片手にやってきたのは、ジパングのとある森の中。いつぞやか大変お世話になった、シズノさんの小屋があるあの森である。

川のせせらぎと水車の音を楽しみながら、じっと糸を垂らす。

先日までとは打って変わって、ゆったりとした穏やかな時間が流れていく。

「やっぱり、たまには羽を伸ばすのも大事だなあ……つと」

ぐい、と竿先がしなり、力強く引かれる感覚に負けじとこちらも竿を引き返せば、水中から美しい小魚が飛び出した。

黄緑色の身体に黒い背中、胸びれの傍に大きな楕円型の模様が一つ。

川魚の代表格、鮎である。

一時期はあわや絶滅の危機に瀕していたが、人々の懸命な努力が実り、現代では徐々にその数を増やしている。尤も、一世紀前に比べれ

ば、天然ものはかなりの高級品となっている。

ボクも口にしたのは数回のみで、普段口にする事があるのは割安の養殖物が殆どだ。

ちなみにその貴重な天然鮎は塩焼きで頂いたのだが、あれは本当に美味しかった。

「このゲームであの味がどれだけ再現されているか気になるけど、まずは坊主を回避できたことを喜ぼう」

釣りスキルが上がれば友釣りもできるようになるらしいが、ボクにとってはまだまだ先の話。

貴重な釣果を編み籠に入れ、釣り針に餌を付け直しいぎ二投目である。

そういえば、先日のイベントでの報酬なのだが、イベント終了の翌日に運営から全プレイヤーへと無事に配布されることとなった。

その内容は「アインの英雄」という称号と、フィールドからでも任意の街に転移できる「導きのつばさ」というアイテムが五つ。

称号の方はメカムート君三号と一度でも戦闘しているプレイヤー限定での配布になっているようで、それ自体にステータス上昇等の効果はないが、どうやらこの称号を所持しているプレイヤーは始まりの町アインの住民からの好感度が上がりやすくなる効果があるらしい。

なおこれに反発したのが、地下迷宮に潜ってまでイベントに貢献したと主張する一部のプレイヤーたちである。

どうも貢献度に関わらず平等に報酬が配られたことに不満があるらしく、やれ自分たちには他にもアイテムを寄こせだの、殆ど貢献していないプレイヤーには称号を渡すなだの、公式掲示板を主に随分と騒ぎ立てたようだ。

これに対し運営側は、イベント報酬に関しては対応することはないとホームページ上にて表明し、抗議するプレイヤーたちの声をバツサリと切って捨てた。

ここまでやると流石にキャラを削除してゲームを去るプレイヤーも出たようだが、第二陣のプレイヤーたちが参加したばかりであるので総数としてはプレイヤーの人口は倍近くに増加している。

ここまで完成度の高いフルダイブ型VRゲームもそうないだろうし、一時的に去っていったプレイヤーたちもなんだかねで後々戻ってくるだろう。

念の為に言っておくが、報酬の追加を声高に主張していたプレイヤーたちはあくまで一部であり、【暁の騎士団】を初めとしたトップ克蘭の面々は、この件に関しては何らアクションを起こさなかった。彼らからしてみれば、イベントボスを撃退したという、その実績だけで十分だったのかもしれない。

実際、例のイベントボスを撃退できたのは全サーバー中六つのみらしい。ちなみにサーバーは新設されたものも含め二十存在する。

“全サーバー初”の栄誉は惜しくも逃してしまったらしいが、それでも仲間たちと手にした胸を張って誇ることができる事なのだと、後日暁の騎士団の団長は語ったという。

「まあ、ボクにはあまり関係のない事だけだね」

くつと引かれた竿を強く握り、釣られてたまるかと右へ左へ暴れる魚に対し、逃がすものかと竿を操り格闘する。

レイドボスの討伐や、高難易度コンテンツの攻略に興味がない訳ではないが、やはりひたすら気を張り続けるそうだったことより、こうしてのんびりと遊んでいる方が性に合っているのだ。

やがて釣り上げたのは、一匹目より少し小ぶりな、それでいてしっかりと脂の乗った鮎であった。

うん、今日はなかなか調子が良い。

「おや、またあんたかい、よくもまあ飽きないもんだ」

「あはは、どうも、またお邪魔してます」

二匹目を籠に放り込んでいると、どうやら山菜採りの最中らしいシズノさんが呆れ交じりに声をかけてきた。背中の籠には、いつぞやの如く沢山の山の幸が収められている。

「来訪者はもっとこう、忙^{せわ}しない連中が多いもんだと思ってたが、アンタみたいな偏屈はどこにでもいるんだねえ」

「何も剣を振って金銀財宝を探し回るのがボクたちの仕事ではないですから。それに、こうして回り道をしてみることで見えてくるものも

ある。ボクはそう思います」

「まだ若いだろうに、年寄りみたいにわかった口利くもんじやあないよ」

これはなかなか手厳しい。

だが言葉とは裏腹にその表情は柔らかで、彼女は何やらじつところを見つめると、背中の籠から何やら取り出してこちらに投げてよこす。慌てて受け取ると、それはなんとも立派なたけのこだった。

「森の奥で採ってきたもんだが、ばばあ一人で食うには多すぎるんでね、適当に食っちまってもいいよ」

「いいんですか？ 随分と立派なものですけど」

「あたしがいいって言うてんだからいいんだよ……その着物、もし手入れが必要になったらいつでも持つといで」

ぶつきらばうにそう言い残して、シズノさんは小屋の方へと去っていった。

去り際にちらりと見えた口元がほんのわずかに微笑んでいるように見えたのは、ボクの見間違いだろうか。

その後も細かく場所を変えつつ釣りを続け、鮎が三匹、そしてアマゴを二匹釣り上げたところで竿をしまい、魚が新鮮なうちに調理する運びとなった。赤い斑点が特徴的な、こちらも代表的な川魚だ。

河原から離れたところで取り出したのは「焚火セット」というアイテムで、これを使えば指定した場所に石の焚火台が設置され、一定時間調理などに利用することができる。

まあ、本格的な調理となると調理師のレベルを上げなければならぬが、簡単な塩焼き程度ならボクでも作成可能だ。

メインメニューから対応したレシピを選択すると、内臓を取ったり串を打つたりといった面倒な下準備は全て省略され、あとは焼くだけの状態で手の中に出現する。

それも、焚火台に表示される目印に串を差し込むだけの作業なので、これを調理とっていいのかは怪しいところであるが。

今回の釣果は計五匹であるが、流石に一度にすべては食べきれないので、今回は鮎を二匹だけ焼いてみることにする。

しばらく待つと、こんがりと焼き色が付いた魚から、なんとも香ばしい匂いが漂い始めた。

脂が細かく跳ね、湯気が立ち上る焼き魚を手に取り、ふつくらとしたその腹に小さくかじりつくと、ぱりつとした皮の食感の後、白く柔らかな肉の旨味が口いっぱいに広がった。

程よい塩気が肉の甘味を引き立て、肉厚な身からは噛むたびに脂が溢れ出てくる。その香りも、養殖物とは比較にならない。

あつという間に一匹平らげた後、自然と二匹目に手が伸びていた。こちらは今日初めて釣り上げた一匹で、先程のものより身が一回り大きいものだったが、あまりの美味しさにこちらもすぐ骨だけになってしまった。

身体中を満たす幸福感に浸り息を吐く。心なしか、尻尾の毛並みもいつもより色つやが良くなった気がする。

「はあ、ご馳走様でした」

静かに手を合わせると、焚火セットを撤去する。

釣り上げた魚は残り三匹。そういえば、モミジが調理師のレベルを上げていたはずなので、彼女に調理をお願いするのもいいかもしれない。

ただの塩焼きでここまで美味しいのだから、調理師の手でさらに手間を加えれば、いったいどれほどのものになるのだろうか。シズノさんから譲ってもらったたけのこもあるし、これでも一品お願いしてみよう。

「そうだ、シズノさんにも一匹お裾分けしよう」

たけのこのお礼もあるし、これだけ美味しいものならば、きっとシズノさんにも喜んでもらえるはずだ。

モミジにメッセージを送ったあと、六本の尻尾をご機嫌に揺らしながらシズノさんの小屋へと向かうと、彼女はまたなんとも呆れた顔で、苦笑いを浮かべながら釣り上げた鮎を受け取ってくれた。

「ほんと、あんたも律儀だねえ。ほら、これも持っていきな」

そう言つて有無も言わず渡された大根を持って、ボクは小屋をあとにする。

お礼のお礼というのもなんだか変な話ではあるが、受け取らないなら尻尾に括りつけてやると脅されてしまつては否はない。これもモミジに頼んで調理してもらおうとしよう。

見送ってくれたシズノさんへ手を振りながら、ボクは森の出口へと向かつて歩き出す。

ちらりと釣りをしていた河原を見れば、岩にとまつた青い鳥がくちばしに小魚をくわえ、こちらを見て胸を張っている姿があった。

どんなもんだといわんばかりのその様子に、ボクは思わず吹き出すのだった。

お稻荷様と隠れ里①

持ち帰ったアマゴとたけのこは、料理人モミジの手によって湯気と香りが立ち上る、なんとも豪華な釜めしへとその姿を変えた。

場所はジパング、冒険者ギルドにて一定時間借りることができる、レンタルスペースの一室。

内装は質素だが、調理場やソファ、ベッドまで備え付けられており、一休みするにはうってつけの場所となっている。

ちなみにグレードによって料金が変わり、高ければ高いほど、部屋の設備も充実したものになっていく。最高グレードのものになると、室内に各生産職用の工房まで備わっているのだとか。

まあ生産職にはまだ触れてさえない自分には関係のないことだが。

「そういえば、あの噂聞いた？」

柔らかでいて肉厚な白身と、歯ごたえを残した香ばしいたけのこが見事に調和した一皿に舌鼓を打っていると、ふと思い出したようにモミジが呟いた。

なんでも、シズノさんの庵があるあの森の奥に、妖狐族たちが暮らす隠れ里がある、という噂がまことしやかに囁かれているのだという。

それが本当ならば妖狐族の一人として是非とも足を運んでみたいが、こういつたことはクスノハさんが詳しいであろうし、一度訪ねてみるのもいいかもしれない。

最後の一口を飲み込み釜めしを完食すると、手を合わせながらそう思案する。

「ところで、その噂は誰から？」

「えっと、王都にいた自称情報屋の人。ほら、ワーキャットのおじさんでさ、結構有名人じゃない？」

モミジの言葉に、ああ、と手を打った。

その人物ならボクも知っている。サービス開始当初から全サー

バーの情報屋を自称し、精力的に活動しているプレイヤーだ。彼が設立したホームページには大小さまざまな情報が掲載され、新米からベテランまで、多くのプレイヤーがお世話になっているという。

彼にかかればレアアイテムの入手場所から、王都におわす聖女様の朝食の献立まで、この世界で調べられないことは存在しないとも言われている。

ワーキャットとしては獣寄りにキャラメイクされたアバターを使用し、外見は二足歩行の猫そのもの。

しかし、直立する猫と聞けば可愛らしい姿を想像するだろうが、彼の場合はキャラメイクが凝りに凝っており、正直小動物系のキャラクターを期待してかかると悲鳴をあげることになる。

まず柄は三毛、尻尾は先の部分が折れ曲がったいわゆるかぎしつぽと呼ばれるもので、非常に縁起がいい。

だがその瞳は常に渦を巻いていて、口元には三日月形の笑みが張り付けられており、どうも設定で固定しているのか、会話するときもずっと口元はそのまま話す。

可愛らしいというよりは、おどろおどろしいといった方がしっくりくる風体である。

性格も少し癖があり、何というか、知識欲の塊というべきか、未知というものにとてつもなく敏感なのだ。　かくいうボクも、初対面の時に突然胸を鷲掴みにされた。勿論即座に運営に通報した。　慈悲はない。

例え平均以下で着物で押さえつけてしまえばあるかどうかすら曖昧になるようなサイズのもので、一応、とりあえずは自分の胸なのだ。

悲鳴をあげたり、咄嗟に突き飛ばさなかったただけ幾分かマシな対応と言えるだろう。

まあ実際には異性のプレイヤーが身体に触れることはできないので、あくまで装備品の表面に触れただけではあるのだが、それと不快感を覚えないのとは全く別の問題である。

男か女かはつきりさせる為にやった、後悔はしていない。　そう言い

残してGMに連行される図は、どこか哀愁を感じさせた。なお、その時は嚴重注意で済まされたらしいが、次に同様のハラスメント行為で通報された場合はアカBANもあり得るので当人は気が気ではない……と思いきや、特にその言動に変化はないようだ。

何というか、このゲームのプレイヤーらしい、ぶれないメンタルをお持ちのようである。

ちなみにプレイヤー名は“K i t t v - G u v”といい、プレイヤーたちにはガブさんの愛称で呼ばれている。決してフルネームが発音しづらかったりとか、チャットで打ち込むと伏字になってしまったたりとか、そんな事はない。ないっただけなのである。

だが、彼から得た情報であるなら、その噂の信ぴょう性もぐっと高くなる。

見てくれや性格はともかく、情報屋としては非常に優秀なプレイヤーなのだ。

性格はともかく。

「まだ詳しい場所とかはわかってないんだけど、行ってみたいよねー」
まあ、ふさふさの毛並みに目がないモミジである、妖狐族だけの里というのが本当であれば、何が何でも行ってみようと思うのは道理だろう。

向かうときは絶対に声をかけるように、と雄弁に語るその瞳に苦笑いを浮かべつつ、周りがすべて妖狐族というその光景に彼女のテンションが大気圏を突破せん勢いで急上昇して、里の方々に多大なる迷惑をかけないだろうかとボクは内心頭を抱えた。恐らく自制は利かないだろう。

「もしよかったら、これからクズノハさんのところに行くけど――」
「行くー」

それはもう、あっぱれと言うしかない即答ぶりであった。

満面の笑みで抱き着いてきたモミジに苦笑を浮かべつつ、二人揃って部屋をあとにした

そういえば、ハヤトとコタロウの二人は呼ばなくてもいいのだろうか。

呉服屋へ向かう道がてらそうモミジに確認してみると、どうやら二人には既に話を通っているようで、いざ隠れ里へ向かうとなった時点で合流する手はずになっているそうだ。

なかなかしつかりしているものだと感じしていると、いつもの軒先で紫煙をくゆらせるクズノハさんの姿が見えてくる。

彼女はこちらの姿に気が付くと、柔らかな笑みと共にひらひらと手を振って応えた。

「おやおや、これはまた仲睦まじいことでありんすなあ」

「お久しぶりですー!」

「突然すみません。実はまたクズノハさんにお尋ねしたい事がありまして――」

そうしてボクは、クズノハさんに妖狐族の隠れ里について何か知っていないかどうか尋ねた。

始めのうちはこてん、と小首を傾げながら話を聞いていたクズノハさんであったが、やがて合点がいったかのように手を打つと、朗らかに笑いながら口を開く。

「ああ、フシミの里の事でありんすね。それならほれ、あの山の裏つかわの尾根に一本杉がありんすが、とりあえずはそこへ向かえばようござんしよう。しかし、まあ、変な話もあるもんでござんすねえ」

というのも、クズノハさん曰く、そのフシミの里自体は隠れ里でもなんでもなく、ここジパングにも農作物などを卸している何の変哲もない妖狐族の集落であり、むしろ湯治場として有名ぐらいなのだとか。

湯治場！

この単語を聞いて、ボクは掴みかからんばかりの勢いでクズノハさんに迫った。

湯治場、それ即ち温泉があるということであり、何を隠そうボクがこの世で最も好きな事の一つである。というよりも、温泉に限らず入浴という行為が大好きだ。

ふと、隣できよとんと目を丸くするモミジの姿を視界の端に捉え、ごほん、と咳払いをしてクズノハさんから一步離れた。

「あれまあ、タマモは温泉に目がないようでありんすなあ。フシミの湯はそれはもう疲れをよくとり、肌にもよう利きんすから、タマモもきつと氣に入ると思ひんす」

いやはや、まったくお恥ずかしい。

包み込むような慈愛のまなざしでもってこちらを見つめるクズノハさんに、赤くなっているであろう顔を手で隠しながらもなんとか頷いて返すと、横からモミジに脇を小突かれた。

「ほんと、クズノハさんの前だとさしものタマモも形無しだねえ」

ここぞとばかりにこちらを弄り倒してくるが、今回ばかりは完全に自業自得であるのでぐうの音も出ない。

かくなる上はさっさとフシミの里へ向かい、噂の温泉に浸かって癒してもらうほかないだろう。

「ああ、フシミの里に向かうなら、これも一緒に持っていてくんまし」

そう言つてクズノハさんが店の奥から持ってきたのは、一枚の着物であった。

その場でしたためた手紙と共にそれを受け取ると、傷つかないようになすぐさまインベントリの中へと保管した。

丈からしてどうも子ども用の着物のようだが、知人のお子さんにでも送るのだろうか。

尋ねてみると、返ってきたのはこちらが予想だになかった言葉であった。

「ああ、それはわっちの妹にと拵えたものでありんす。妹はフシミの里の長を務めていんすので、まあすぐ見つかるでありんしょう」

妹さん、クズノハさんの妹かあ……。

どうやら名前は「カヨウ」というらしい。なんとも縁を感じる名前である。

いや、それにしたつて丈がおかしい気がするのだが。これでは妹というよりも、娘と言われた方がまだしっくりくる。

「ふふ、まあ会ってみればわかりんす」

なんとも意味深な笑みを浮かべ、それでは宜しくと彼女は店の奥へ

と引っ込んでしまった。

残されたのは首を傾げる娘二人。

どちらともなく目を合わせると、とりあえずハヤトとコタロウを呼ぼう、という話になった。

どうやら道中にボスモンスターもいないようであるし、まあ何も問題なく里へ入れるだろう。

二人にメッセージを送りつつ、旅先で待つ温泉へと思いを馳せる。

そういえば、このゲームでは完全に服を脱ぐ、という事が出来ない筈なのだが、そこはどうするのだろうか。

ふと抱いたそんな疑問に、ボクはまた小首を傾げるのだった。

お稲荷様と隠れ里②

さて、いつもの面子で向かったフシミの里への道であるが、これといつて特筆すべきこともなく、おおよそ三、四十分程で目的の場所へ着くことが出来た。

確かにここへ向かうまでの山道は険しいところも多かったが、そこはゲームの中の事であるのでレベル六十に達したプレイヤーの能力値で踏破できない訳もなく、せいぜい、道中現れた「おにかまいたち」という体長六十から八十センチはあろう、両手に鎌を持ったイタチのモンスターをコタロウが蹴り飛ばしたりだとか、「まがこなきじい」なる、みのを背負った小さな老人姿のモンスターに突然背中に飛び乗られ、モミジが悲鳴を上げたとか、そんな程度である。

なお、まがこなきじいはその後、暴れまわるモミジが放った「デイベインブロウ」という神聖属性の魔法で跡形もなく浄化された。

閑話休題

肝心のフシミの里だが、山の斜面に沿ってぽつぽつと民家が並ぶ小さな村だった。

湯治場として有名だという話だったのでもう少し発展しているかと思っていたのだが、まあ、ここまでの道中を考えると一般の人々はそう簡単に足を運べるような場所ではないのかもしれない。

特徴的なのは斜面に層の様に作られた田んぼ、いわゆる棚田が並ぶ光景だろう。

ツヴァイの街のように、そこには黄金の稲穂が風に揺れながら行儀よく並び、その上を赤色のトンボが飛び交っている。

そしてもう一つ目を引くのは、村の奥から山頂へと向かって伸びる真っ赤な鳥居の列だ。

いったいどれだけの数が並んでいるのか、それはまるで一本の赤いトンネルが伸びているようにも見える。この山の頂上には偉い神様でも祀られているのだろうか。

「凄い、すごいー！」

そんな光景を見やりながら里へと踏み入れれば、やはりというかなんというか、真っ先に声を上げたのはモミジだった。

その原因は勿論、里で暮らす人々の姿である。

狐、狐、狐。

赤や黒、琥珀色と、その毛色——失礼、髪色には様々あれど、住民たちはみな妖狐族であり、それぞれが大きな尻尾を揺らしながら歩いていた。

その尾の数は殆どが一本、多くて三本といったところで、尾の数に比例してご年配の方が多い印象を受ける。やはり、ぽんぽん尾の数を増やすプレイヤーの設定が異常なのだろう。

「モミジ、ステイ、ステイ」

今まさに駆け出さんとしていたモミジの首根っこを、寸でのところでハヤトが掴んだ。

ぐえ、と乙女らしからぬ声をあげるモミジを見て、男二人がため息を吐く。

「お前な、ちよつとは頭使えよ……。NPCだからってやりたい放題やってたら、あつという間に俺たち出禁だぞ？」

「タマモで癖になってるのかもしれないけど、流石に自重しようか」

なんとも随分な言いがかりである。

こちらはむしろ、出会う度にやたらめつたら尻尾に抱きつく彼女を諫めているぐらいなのだ。

だがしかし、当然ながら村人の中には小さな子どもたちもいる事であるし、万が一間違つてモミジが襲い掛かるような事があれば、下手をすればプレイヤー全体に悪影響を及ぼしかねない。

しかし、字面だけを見るとんだ危険人物である。

「むう、わかった、タマモで我慢する」

そしてモミジよ、その理屈はおかしいと思うのだけれど、どうだろうか。

例によって一本では飽き足らず、三本束にして確保するモミジの姿に若干呆れを含んだため息を吐く。どうせ言っても聞かないだろうし、放置しておこう。

そんなことより、まずはクズノハさんから頼まれた仕事を先に片付けなくては。

「着物をクズノハさんの妹さんに届けるんだっけ？」

ハヤトの言葉に頷いて返す。

「クズノハさんが言うには里の長をやってるみたいなんだけれど、少し村の人に聞いてみようか」

砂利道を歩きながら、ちようど目に入った畑仕事に精を出す妖狐族の男性にもし、と声をかける。

何事かと男性は赤毛の尻尾についた土埃を払いながら顔をあげる
と、こちらの姿を見るなりおお、と声を上げた。

「こちらまた、六尾の御方を目にするのは随分と久しぶりだ。見たところ来訪者さんのようだが、流石だなあ」

「いえ、ボクはそんな大層な者ではありませんよ。それよりも一つお伺いしても宜しいですか？ 実はこの里の長でいらつしやるカヨウ様にお目通りを願いたいのですが、なにぶん初めてこの里に来た者として、どちらを伺えば宜しいでしょう？」

その問いに男性は朗らかに笑い、首に巻いた手ぬぐいで額の汗をぬぐって答えた。

「カヨウ様でしたらほれ、あの鳥居の道をずうつと行けば大きなお社が見えてくるんだが、そこにいらつしやるよ。まあ気さくな方なんです、そんな肩肘張らんでもええと思うがね」

なんと、件のカヨウという人物はあの鳥居の先で暮らしているらしい。

まさかカヨウ自身が神様として崇められている訳でもないだろうし、巫女のようなものだろうか。

男性に礼を言って三人の元に戻りこの話をすると、彼女が何者であろうと、まずはそのお社に行ってみようという話になった。

悠然と立ち並ぶ鳥居の下までやってくると、改めてその異様に息を呑む。

頂上に向かいずっと伸びる参道には石畳が敷かれ、朱色の天井隙間からは十分な日の光が差し込んでるので不気味さはひとつもない。

むしろその神秘的な雰囲気と、山頂から吹き下ろす清らかで澄んだ風は、この先が神聖な場所であると雄弁に語っていた。

「こんなところに住んでるなんて、ほんとに偉い人なんだねえ」

「まあ、あのクズノハさんの妹だしな。色んな意味でただ者じゃねえ事は予想できてたが……」

一礼してから鳥居をくぐり、からころと石畳を鳴らしながら参道を進んで行くと、やがて男性の話通り、山頂には立派なお社の姿があった。

境内にはこれまでくぐった物より一回り大きな鳥居があり、手前には手水舎ちようすやや神楽殿があり、灯籠が立ち並ぶその奥には賽銭箱が置かれた拝殿、そして本殿が建てられている。

本殿の傍には大きなお屋敷があり、恐らくカヨウさんはあそこで暮らしているのだろう。

ほう、と誰かが息を吐いた。

「ほえー、こりや凄いな」

「里にあつた家との格差がひでえな。村の儲け、殆どこっちに行ってるんじゃない？」

「コタロウ、流石にそれは言い過ぎ……」

手水舎で手と口を清め、ひとまずは拝殿へと向かう。なお、この時参道の中心は避けて進むのが正しい作法であるのだが、果たしてこの世界でも現実世界と同じ作法で問題ないのだろうか。

そうして賽銭箱の前まで来ると小銭を投げ入れ、二礼二拍手の後、静かに手を合わせた。

「何をお祈りしたのー？」

すっかり最後に一礼すると、隣にいたモミジに脇をつつかれた。

「ううん、お願いとはちよつと違うかな。今年はちよつと目標があつて、その報告を」

そう言うモミジはいったい何をお祈りしたのかと尋ねてみれば、彼女はぱつと太陽な笑顔を咲かせながら言った。

「私はね、タマモともつと仲良くなれますようにって神様につて！」

えへへーとほんのり頬を朱に染める彼女は、思わず直視するのを躊

踏われるほど輝いて見えた。

しかし男二人は慣れたもので、ささつと参拝を済ませると、あまたか、といった顔でその光景を少し離れたところから眺めている。

自分の欲求に素直で度々こちらを困らせる事もある彼女ではあるが、それはただただ純粹なその性格故の事なのかもしれない。まあかといって、周りの目も気にせず尻尾にタツクルをかましてくるのは勘弁してほしいが。

「おんや、これはまた珍しい参拝客が来ておるのう」

ごほんと咳ばらいを一つ、いざ本殿へ向かおうとしたところで、背後から声がかかった。

鈴を転がしたような、よく通る少女の声。

はつとしてそちらの方へ振り向けば、そこにはまだ幼さの残る妖狐族の少女が一人。

先端で二つに纏められた、きらきらと輝く白銀の髪は地に着くほど長く、肌は雪の様に白い。しかし可愛らしい丸い眉の下には真紅に輝く大きな瞳が一对、まるでこちらを射抜くように見つめている。
年齢^{よわい}十にも届かないような、可愛らしい少女である。

そうして少女はボクを見るなりすつと目を細めると、身に纏う紅白の巫女装束の袖を振りながら軽い足取りでこちらへと歩み寄った。

「ほうほう、ほうほうほう！ 黒の六尾、そしてその装束、お主がタマモじやな？」

ゆらりと、少女の長い髪の後ろから白銀の尾が揺れる。その数九本。

ぶわりと広がったそれを見て、ボクは目を丸くした。

背後でモミジが歓喜の声をあげているが、それどころではないので無視する。

クズノハさんと同じ九尾、ということは、まさか目の前の少女がそうなのだろうか。

恐る恐る名前を尋ねてみると、少女はその身体相応の慎ましい胸を張って声高に宣言した。

「うむ、妾こそがこの里、そして妖狐族の長カヨウである！ 遠路はる

ばるよう来たな、まあゆつくりしていくといい」

妹というよりは、どう見ても娘の方がしつくりくるな。

そんな遺伝子の神秘を感じながら、ボクたちは少女——カヨウさんに連れられて、奥にあるお屋敷へと向かうのだった。

お稻荷様と九尾の秘湯①

「おお、姉上から預かりものとな？　それはまつこと、大儀である」
かんらんかんらと少女が笑う。

本殿の傍に建てられたお屋敷の一室、い草の香り漂う広い客間に通されたボクたちは、現在小間使いの——後で聞いた話では、カヨウさんが使役する式神であるらしい——女性が用意した日本茶と和菓子に舌鼓を打っているところである。

一段高いところで胡坐を組み、扇片手に九本の尻尾を振るカヨウさんへと着物を差し出せば、彼女はうんうんと頷きながらそれを受け取り、背後にあつた衣桁いこうと呼ばれる着物用のハンガーラックへと飾ると、満足そうに一度頷いた。

彼女の白い肌が一層際立つ黒地の着物で、袖には赤い花々が添えられ、そこから同じ色をした数匹の蝶が舞い上がっている。小柄な彼女に合わせて拵こしらえているためやや小さくはあるが、とても美しい一枚だ。

「ふふ、素晴らしい物であろう？　以前から姉上に頼んでおった品なのじゃが、ようやく出来上がったと聞いて楽しみにしておったのじゃ」

「なあ、今更だけどほんとに妹なんだよな？」

その時、たいそう上機嫌なカヨウさんへ怪訝な目を向けていたコタロウが小声でそんな事を言ってきた。

ボクの胸程の背丈に、全体的に丸みを帯びた肢体。

確かに妹というよりは娘と言われた方がしっくりくるような外見ではある。姉であるクズノハさんがあのだいなまいとばでいであるので、特に。

しかし妙に古めかしい話し方をしているし、どうも見た目相応の年齢ではないような気がする。

その時、ぴこんと頭の三角耳を跳ねさせて、カヨウさんの赤い瞳がきらりと光った。

「ほほう、小僧っこが言うではないか。確かに妾は姉上のような身体つきではないが……熟練の手練手管、味わってみるかや？」

「い、いや、遠慮しとく」

そうしてカヨウさんが科を作って迫ると、コタロウは顔を真っ赤にして部屋の隅っこへと引つ込んでしまった。もつとも、彼はワールフ族であるので、毛皮が邪魔をして実際に赤くなっているかどうかは判断できないのだが。まんま狼な見た目によらず、随分と初心な男の子らしい。

「というかカヨウさん、その外見で色気を出されても色々和不味いと思うのですが。」

「そ、そういえば、ここって温泉があるんですよね！ 楽しみだなあー！」

場の空気を切り替えるようにぱんと手を叩いたのは、頬を僅かに朱に染めたモミジである。

両手をわきわきさせ、コタロウを部屋の角へと追い込んでいたカヨウさんがそれにはっとして振り返ると、その後ろで尻尾を丸めていたワールフがほっと息を吐いていた。その姿に、我がパーティ一のダメージディーラーたる威厳は欠片もない。

ハヤトはその様子を見て苦笑いを浮かべ、相変わらずだなあ、などと呟いている。

「ほう、温泉ならばここの裏手に良いのがあるぞ。村の人間もそう訪れぬ、普段は妾が一人で使っておる隠れ湯なのじゃが、お主たちには着物を届けてくれた恩もある故、特別に案内してやろう」

なお効能は万病の治癒、健康増進、肌にも髪にも良いらしい。

ゲーム的に言ってしまうえば、デバフの解除、体力等々全回復、といったところか。

まあ実際に疲労回復などには効果がありそうだが、ゲームの中で入浴というのも変な話だ。そういえば、疑問に思っていた入浴時の倫理規定的な問題であるが、どうやら入浴時には専用の湯浴み着を着用するらしい。そりやそうだ。

しかし元々この社の巫女であるカヨウさん専用の秘湯であったの

で、当然ながら湯船は一つだけしかない。　なので、入浴は女子組が先、男子組はその後という具合で分けて行う事となった。

別に湯浴み着を着るのだから混浴でもいいのではないか、という声がありそうだが、それはそれ、これはこれだ。

そうしてカヨウさんの尻尾を眺めながら歩いていくと、本殿の後ろの崖沿いにずうつと下へ降りていく階段が見えてきた。　階段と言っても手すり代わりの荒縄が引かれているだけで、足元は全く舗装されておらず、ただただ踏み固められただけの状態である。山の裏はすぐ海だったようで、降りた先は三日月形の入り江になっていた。

ちよつと足を滑らせてしまえば、そのまま崖下まで転げ落ちてしまおうだろう。そんな階段を、カヨウさんはまるで跳ねるような足取りで下っていく。彼女が蹴飛ばした石ころが、岩肌へとぶつかり水しぶきを上げるうねりの中へと消えた。

「そういえば、ここはどんな神様を祀っているんですか？」

軽快なカヨウさんの足取りとは打って変わり、一步一步確かめながら階段降りていくハヤトが彼女の背へと問いかける。

「うむ、ここはのう、かの豊穰の女神ウカノ様を祀る社なのじや。というのも、我ら妖狐族はその昔、ウカノ様が地上へと蒔いた稲の種から生まれたという伝説があつてのう。我らの尾が稲穂に似ておるのも、その名残だと言われておる」

九本の大きな稲穂尻尾を揺らしながらそう語るカヨウさんはどこか誇らしげで、足取りもさらに軽くなったように見えた。　というか、ただでさえ足を滑らせそうな階段の上であるので、あまりにも危なっかしくて見ているこちらは気が気ではない。

「いわばウカノ様は我らが母という事になる。故に、かの女神を祀る分社は数多くあれど、ここフシミの社がそれらを纏める総本社となっておるのじや」

胸を張るウカノさんの話を聞いている間に、やがて波によって粗く削りだされた岩肌の間から、白い煙が立ち上っている様が見えてきた。潮の香りに混ざる硫黄の匂いに、モミジがそわそわと身体を震わせ始める。

ぐるりと大岩の裏へと回れば、そこには岩を切り取って作ったような、もくもくと湯煙をあげる湯船の姿があった。思ったよりも大きく、一度に大人が五、六人は入れそうである。

「すごい！ オーシャンビューだよオーシャンビュー！」

まるで子どものようにはしゃぎながら、モミジが湯船へと駆け出していく。

彼女の言葉通り、湯船からは美しい海の景色が一望できるようになっており、耳を撫でる潮騒と共に得も言われぬ心地よさを感じさせる。

そこでぼん、とカヨウさんが手を打った。

「どうやら気に入ってもらえたようじゃなあ。じゃが、やはり温泉は浸かってなんぼ、湯浴み着は用意しておるが、まずはおなごが先なのでな、男はちつとばかり向こうで待っておれ」

「先に頂いてしまって申し訳ない。あまり長湯はしないようにするから」

「いや、せつかくの露天風呂なんだし、楽しんできなよ。僕たちもあとでゆつくり入らせてもらうからさ」

「覗かないでよねー」

「てめえの平べったい体なんぞ、頼まれても覗かねえから安心しろ」

いやコタロウ、一応ボクとカヨウさんも入るからね？

手を振りながら大岩の向こうへと歩いていく二人を見送ると、渡された白地の湯浴み着に装備を変更する。浴衣のような形のそれは、湯浴み着というよりは湯帷子に近く、袖にあしらわれた金魚の模様が可愛らしい。

ちなみにこういった湯帷子を着て入浴していたのは主に平安時代まで。

当時は湯船につかる習慣がなく、お風呂も蒸し風呂だった為、水蒸気でのやけどを防ぐ等の目的で着用されていた。鎌倉時代に入ると男性はふんどし、女性は湯文字という腰巻のようなものに変わり、裸で入浴するのが主になったのは安土桃山時代に入ってからだったりする。

まあ、流石に一般向けのゲーム内で裸体を晒すわけにもいかないの
で、今回はそういった細かい部分は気にせず、素直に温泉を楽しむこ
ととしよう。

「はあー、気持ちいいー」

間の抜けた声がする方へと目をやれば、そこにはもう肩まで湯船に
浸かり、蕩けるような笑顔を浮かべるモミジの姿が。

そんな彼女の様子に苦笑いを浮かべると、ボクもいざ温泉を満喫す
べく、ぺたりぺたりと歩き出すのであった。

お稲荷様と九尾の秘湯②

「はあ……これは素晴らしいね」

耳に届く潮騒の音。

しかし肌を撫でるのは柔らかな乳白色の湯であり、鼻腔をくすぐるのは潮と硫黄の香り。

思わず沈み込んでしまいそうになる幸福感に包まれながら、ボクの口からあまりにも気の抜けた声が漏れた。

湯船の縁に肘を寄せ、だらりと両足を伸ばしながら立ち上っていく湯気の先を見上げていると、じんわりと染み込んでくるような湯の温かさに身体中の疲れが解きほぐされていく。

ここがゲームの世界だと忘れてしまうような、それほどの心地良さであった。

両手で湯をすくい上げ、もみ込むように顔をすすぐと、気のせいか肌がより瑞々しくなったように感じる。まあ、ゲーム内のアバターにそんな細かな設定が存在するはずもなく、完全に気のせいであるのだが、そこは気分の問題だ。

温泉といえば、随分と昔に両親に連れられて入って以来であるが、これはなかなか、現実世界でも少し足を伸ばして浸かりに行ってみようかという気になってしまう。

両親、そう、あの頃は確かに、母と父が笑い合っていて、ボクはそんな二人を見るのが好きだった。優しく、時には厳しい両親が大好きだった。

そう、あの時、あの瞬間までは、その温かな感情は確かにボクの胸の中に――

「ああー、生き返るー」

温かい筈の胸の中に刹那の間生じた凍てつくような感覚は、そんな間の抜けたモミジの声でかき消された。

見ればボクと同じように湯の中で脱力しきったモミジが、すらりとした褐色の脚で湯を混ぜている。その横では縁に腰をかけたカヨ

ウさんが艶めく白銀の九尾に櫛を通していた。

頭のとっぺんから足の先まで伸ばした髪は今は丸く束ねられて頭の上に納められ、初雪のような白い肌が湯に温められてうっすら朱を帯び、そこへ水気を吸って張り付いた湯浴み着が、その細い体の線を鮮明に浮かび上がらせている。その姿は、子どものような身体つきとは反して、香り立つような不思議な色香があった。

湯に浸りながらその様子をぼうつと見続けていると、ふと彼女の紅い瞳と視線がぶつかった。

「なんじゃ、お主も尾の手入れぐらいはするじやろうに、なにゆえそんな珍しいものを見るような目をする」

彼女にそう言われ、うつと言葉に詰まる。

というのも、このゲームでは基本的に入浴する必要がある。各ギルドや宿屋にそういった施設は備え付けられているが、実際に身を清めたいのならそれこそログアウトして現実世界で入浴すればいい、というよりも、ゲーム内で入浴するとかかなり寝汗をかいてしまうので、ログアウト後は結局現実でもお風呂に入る羽目になることが多い。

仮に操作するアバターを清潔にしたとしても特に有益な効果が付与されるわけでもなく、体力の回復やバッドステータスの治癒が精々だ。しかしそういった効果は宿屋や協会で受けることができるので、正直ゲーム内で入浴するメリットは皆無と言っている。

ちなみにゲーム内で入浴する際は浴室に入った瞬間、強制的に専用の湯浴み着に変更されるらしい。ボクは実際に利用したことがないので詳細は不明だが。

なお、とある女性アバターを使用するプレイヤーが浴室であれやこれやと試行錯誤を行ったが、結局湯浴み着およびインナーは取り外す事が出来なかった為に運営にクレームを入れた、なんて噂があるが、真偽のほどは定かではない。

長々と話したが、ボクが何を言いたいのかというのと、そんな衛生管理がすっぽ抜けたようなプレイヤーの一人であるボクが、特に汚れたりすることのない尻尾にわざわざ櫛を通す訳がないのである。

さてどうしたものかと視線を右往左往させていると、その様子を見

てどうやら察したらしく、カヨウさんが呆れたように肩を落とした。「来訪者の身体はあくまで依り代であるとは聞いておったが、それはお主あんまりじゃぞお」

櫛を通す手を止め、如何にも不機嫌といった風に小さな足で湯をかき回すその姿はまさに子どもそのものであるのだが、口に出せばさらにややこしい事態になるので黙っておく。

すると、カヨウさんはため息を一つ、自分の隣をぽんぽんと叩いた。「仕方がない、妾が手ずから手入れしてやろう。なに、これでも尾の手入れに関しては姉上も絶賛したほどの腕前でな、あまりの心地良さに蕩けてしまい、湯に溶けてしまぬように気を付けるのじゃぞ？」

「そ、それじゃあお言葉に甘えて……」

恐る恐る立ちあがり、カヨウさんの隣へと向かう。

湯に浸り、いつもより重くなった六本の尾から雫が落ち、湯船に波纹を広げていく。

頭到手ぬぐいを乗せ、極楽極楽と蕩け切ったモミジはそんなボクたちの一挙手一投足を決して見逃すまいと、顔を半分湯に沈め、じりとした目でこちらを睨みつけている。

「えっと、なにか……？」

「いいなあ。カヨウさんのブラッシング」

そうは言われても、モミジは人間族なのだし、仕方がない気がするのだけだ。

「遅いぞお。早くせねば湯冷めしてしまうではないかあー」

ぐいと手を引かれ、あつと声を漏らす。気が付いた時には、ボクはカヨウさんの隣にすんと腰を落としていた。満足気に頷くと、九尾の少女はボクの背後に回り込み、優しい手遣いでボクの六本ある尻尾に櫛を通し始めた。

時折手元の桶で湯をくみ上げ、優しく染み込ませるように尻尾へかけていく。

何といえいいのか、不思議な感覚である。ああ、勿論不快感はない。

こう、腰の部分を丁寧に揉み解されているような、そんな感覚。

本来人間には備わっていない器官だけに、尻尾の感覚はその殆どが腰から臀部の辺りに反映されるのだが、それが原因だろうか。

しかし先程の科白に偽りはなく、確かに蕩けてしまいそうな心地良さであった。

正直なところ、思わず声が漏れそうになるのをこらえるのに必死である。

「いいなあ、気持ちよさそうだなあ」

そんな様子が羨ましかったのか、いつの間にか傍で眺めていたモミジが口を尖らせながら言った。

「うん、思わず寝ちやいそうだよ。流石のお手並みですね」

「ふふん、そうであろうそうであろう。伊達に長生きはしておらんからう」

背後から、かんらんかんらんと嬉しそうな笑い声が響く。

カヨウさんは自慢の腕を絶賛されてご満悦、ボクはその手腕にすっかり骨抜きにされてしまっている訳であるが、これで面白くないのがモミジである。

先程までは湯につかって随分とご機嫌であったにも関わらず彼女はぶつくりと頬を膨らませた後、何か思いついたようにはつとすると、今にも飛びかからん勢いでこちらへと身を乗り出した。

「タマモ、私もブラッシングしてあげる！」

「いや、それはちよつと遠慮したいかな」

「ナンデ!？」

いや、モミジも女の子であるので櫛の扱いには慣れているのだろうが、なんというか、余り細やかな仕事が出来るタイプには見えないのだ。失礼かもしれないが。

そういった風な事をかなりオブラートに包んで言ってみると、彼女はふんすと鼻を鳴らし、薄い——といってもボク以上にはあるのだが——胸を張りながら答えた。

「失敬な。これでもうちのわんこで慣れてるから、なかなかのもんだよ！」

わんこって。ボクの尻尾はわんここと同等のものらしい。

いや、実際のところたいして変わらないのだろうけれど。

「お主ら、本当に仲が良いのう。ほれ、これで終いじや」

最後の一本をそつと撫で、カヨウさんはまたボクの隣で脚を湯に浸した。

彼女に手入れされた尻尾を改めて眺めてみると、毛並みに少し艶が出たように見える。試しに手櫛を通してみると、さらさらとした毛並みは僅かな抵抗もなく、指の間から滑り落ちていった。手触りは以前の比ではない。あとはしっかりと乾かせば、さぞや柔らかな尻尾になつてくれることだろう。

「しかし、それほど羨ましいのであれば、お主にもしてやろうかえ？」
ふむ、と顎に手を添えカヨウさんが言うのと、モミジはぱちくりと目を丸くさせた。

「え、でも、私尻尾なんて無いですよ？」

「なに、尻尾も髪も、かける手間は妾にとつてそう変わらぬ。見たところ、お主も随分と雑に扱っておるようじゃしもう」

確かに、彼女の髪はまさしく地面に擦りそうな程に伸ばされているし、九本もある尻尾に比べればまだ楽ではあれど、毎日の手入れは大変だろう。

モミジはしばし迷う仕草をしていたが、やがてボクの脚を開放してカヨウさんの方へと向かうと、宜しくお願いしますと彼女の前に座り込んだ。

「やれやれ、ほんに手のかかる子じやのう」

そんな事を言いながら、どこか嬉しそうな表情でカヨウさんはモミジの髪に手を伸ばす。

そういえば、カヨウさんの屋敷には彼女の使役する式神しかいないようだったし、あそこは麓の里からも少し離れた場所なので、祭りでもない限りは一日に訪れる人の数もしれているだろう。もしかすれば、彼女自身もこういった触れ合いに飢えていたのかもしれない。

「で、出たあー！」

今後はこちらの方にも顔を出すようにしようと考えていると、岩の向こうから叫び声が響いた。ハヤトの声だが、どうも尋常ではない

様子である。この辺りに厄介なモンスターは沸いてこない筈だが、何があつたのだろうか。

何事かとモミジは目を丸くし、カヨウさんはすつと目を細めて紅い瞳をぎらりと光らせた。

「ほう、これはまた、面白いモノが湧いて出たようじゃのう」

そう言つてカヨウさんがモミジの髪の手入れを終えた辺りで、どたばたと何やら足音が響き、岩陰から額に汗を浮かべ、顔を真っ青にしたハヤトが飛び出してきた。

モミジの悲鳴が響き、丸い木桶が飛ぶ。

大リーガーもかくやといった速度で投げられた桶は見事、ハヤトの顔面に命中し快音を響かせた。

ご愁傷様。しかし、モミジの気持ちもわかる。一応裸ではないとはいえ入浴している場に突然駆け込まれれば、反射的に桶も投げつけようというものである。幸いボクは湯船に浸かっていたので、肩から下は見られることはなかったが。

「お主らのう、事情は察するが、おなごが湯浴みをしている場にそう気安く立ち入るものではないぞ」

大きなため息を一つ、カヨウさんがモミジを隠すように尻尾を広げる。

そこでようやく正気に戻つたのか、ハヤトは青くしていた顔を今度は真っ赤にしてこちらに背を向け、大岩に打ち付けんばかりの勢いで頭を下げた。

「す、すみません！　で、でも本当に緊急事態なんです、あ、あいつが――」

「人の顔見て逃げ出すなんて、ほんと失礼しちゃうわ。あたしはちよおつと温泉に入りに来ただけだって言ってるじゃないのよん」

聞き覚えのある声。

嫌な予感と共にそちらの方を見れば、そこにはいつぞやかボクの前に現れ圧倒的な力と存在感を示した七將軍の一人、色欲のルクスリアが立っていた。

なぜかバスローブ姿で。

手にした桶には、黄色いアヒルの玩具が顔を出していた。
そんなあまりにも緊張感の欠片も感じられない装いに、ふと思う。
ああ、これは相当めんどくさいイベントが発生してしまったな、と。
存外に、長湯になってしまいそうである。

お稲荷様と九尾の秘湯③

さて、ここで七將軍なる敵対NPCについておさらいしてみよう。彼らは「魔王」と呼ばれる存在に忠誠を誓っており、それぞれが七つの大罪を司り、その名を冠している。すなわち傲慢、嫉妬、憤怒、怠惰、強欲、暴食、色欲の七つだ。

そして、現在プレイヤーによって傲慢以外の六人は各所にて確認されている。

白衣のマッドサイエンティスト、ヒステリックな美女、惰眠を貪る男の娘、空回りする元氣娘、常に腹を空かせたオークの戦士、そして目の前にいる、世界観に喧嘩を打っているとは思えない恰好をしたオネエ。

それぞれがレイドボス級の戦力を有しており、打倒するにはレベル六十のプレイヤーが少なくとも三十人は必要だと言われている。

そんな、敵勢力の大幹部とも言うべき存在なのだ。

なのだ、が。

「あー、やっぱり温泉はいいわん、景色も良いし、ちよつと遠出してみて正解だったわねん」

そんな存在が、何故、ボクたちと一緒にのんびりと温泉なんかに入っているのだろうか。

丁寧に手入れをされ、まるで羽毛のような柔らかな手触りになった尻尾を撫でつつ、ボクは隣で呑気なことをいつている、ついでに言えば、なぜか当たり前のようにボクやモミジと共に湯船に浸かっている、奇抜な髪形をした人物をねめつけた。

彼、でいいのだろうか。まあ、ひとまずは彼としよう。

彼の同僚、あの頭の螺子を火星まで吹っ飛ばしたような男、嫉妬を冠する七將軍の男が始まりの町アインのすぐ傍でしかしたあの騒ぎの事は未だに記憶に新しい。

勿論あの騒ぎは王都におわす、かのフンダート国王陛下の耳にも入っている。そして、国王陛下の命により、アインをはじめとした各

都市には嚴重な警備体制が敷かれることとなった。

そしてそれはフンダート王国のみならず、ここジパングの地においても少なくない影響を与えている。

事実、国の玄関口である港は衛兵の数が目に見えて増えているし、都へ入る際のチェックも厳しくなっているのだ。

そんな中を、この男はいつたいどうやってここまでやってきたというのだろう。

「そんなの、海を泳いできたに決まってるじゃないのン」

問いただしてみると、そんな答えが返ってきた。

たしかにこの温泉は海岸に作られているし、警備が厳しいのはあくまでも人の出入りが多い港やその周辺だけの話であって、さすがにこんな人も滅多に立ち入らない場所には警備の人間も配置されていない。であれば、彼が誰にも見つからずにこの国に、この場所に立ち入る為に海を泳いできたというのは、なるほど筋が通っているように感じる。

「でも嘘なんだろう？」

湯船の縁に腰かけ、火照った身体を潮風で冷やしながら言うと、ルクスリアはすつと目を細めた後おもむろに肩をすくめた。

「あら、海から来たというのは本当よン」

「なるほど。まあ、今はそれでいいさ」

本来ならば各国の偉い人たちにこの事を報告し、港以外の沿岸部にも人を割くように進言すべきなのだろうが、あくまでこれはゲームであるので、進言したところで実際にそうなるかと言われれば、恐らくはノーだろう。もしくは一応の警戒はされるものの、彼ら七將軍の行動に一切影響を与えることができないか。そのどちらかだ。

「あのさ、タマモ。一つ聞いてもいい？」

湯船から少し離れた場所で、恐る恐るといった風にモミジが手をあげた。

装備は既に湯浴み着から普段のローブ姿に戻っており、背には宝玉がはめ込まれた身の丈ほどの杖を背負っている。

転がり込んできたハヤトはもうこの場にはいない。

緊急事態とはいっても、それが今女湯となっているこの場に居座る為の免罪符にはなり得ないのである。

「なんでタマモ、当たり前のようにまだお風呂に入ってるの？」

「いや、なんでも何も、この程度何でもないだろう」

レイドボス級の敵と同じ湯船に浸かり、丸腰で、防御力も何もあつたもんじやない湯浴み着を指先でちよんと摘まみながら、それでも何でもないようにボクは言う。

そして、その根拠となる人物へとちらりと視線を送り、続ける。

「本当に危険なら、とつくにカヨウさんが手を打っている。それが無いという事は、現状この男にボクたちをどうこうする気はないという事だ」

「カツカツカ、まあ、そういう事じやのう。安心せい、こやつがお主らに少しでも害を加えようとするならば、妾が即座にこやつ首を刎ねる」

どこからか用意したお猪口と徳利を手に、僅かに頬を朱に染めたカヨウさんはそう言うのと、空いている尻尾で首をとんと叩いてみせた。

さらりと言つてのけてはいるがそれは即ち、レイドボス級程度ならば問題なく屠ることが出来る実力を、自身が持っているという事の証明でもある。

彼女の姉であるクズノハさんも含め、本当に何者なのだろうか。

「やあね、物騒な事言つて。言われなくても、別に何もしないわよん」
「敵勢力の幹部が呑気に湯治の旅だなんて、まあ普通は信じないだろうね」

そも、温泉に浸かりたいのなら自分たちの領地なりなんりの内で済ませてしまえばいいのである。

彼らがどこからやってきているのかはわからないが、まさか地面からよきつと湧いて出てくる訳でもないだろう。

「まさか。ちゃあんと親のお腹から出てきたわよん。温泉ならあるんだけど、浸かると骨まで溶けちゃうからあんまりゆつくり出来ないのよねん」

それはもう、温泉ではなくマグマだとか溶鉱炉だとか、そういったものではないのだろうか。

勿論、温泉が湧くぐらいであるから、ここジパングにも火山は存在する。遠目に見える程度でまだそこまで至ったプレイヤーはいないが、空を覆うほどの噴煙をあげる光景はそれでも十分に圧倒されるほどであり、自然と目についてくる。

だが、それでもこの国の中にそんな危険な場所があるだなんて聞いたことがない。無論、大陸の方でも。

で、あるならば、彼ら七将軍がやってきている先は別の大陸、もしくは相当遠方の地、いや別の世界という可能性もある。例えばこの手のゲームにありがちな闇の世界だったり、地獄であったり。

そんな事を考えていると、じつとこちらを見据える瞳に気が付いた。ルクスリアである。

訝しむ、というよりは、興味深げに観察するような、そんな目だった。

「何か？」

「初対面の時から思ってたんだけど、本当に賢い子なのねエ。いや、それよりも、貴方女の子だったのねン。カワイコちゃんだとは思ってけど、残念だわン」

何が残念なのかは触れない方がいいのだろうが、初対面の時と言えば、登場と同時に腹を貫かれてキルされた、あの時の事だろう。

「あの時はごめんなさいね、女の子のお腹に腕突っ込むなんて、知らなかったとはいえやりすぎだったわン」

字面にしたら随分と危ない感じになったが、真実はいたってシンプルである。

そして案の定というか何というか、隣ではカヨウさんが酒を吹き出し、後ろではモミジが何やら叫び声をあげ、杖を抱えて湯船の傍までやってきた。

「う、腕突っ込んだって、いったいタマモに何したの!？」

肩で息をしながら、今にもルクスリアに殴りかかりそうな剣幕である。

顔を真っ赤にしているとところ申し訳ないが、恐らくモミジはかなり大変な勘違いをしている。

まあそういう風に聞こえる言い方をしたこのオカマにも非はあるのだが、そう受け取れるという事は、実はモミジって意外と耳年増なのだろうか。

「ただお腹に攻撃をくらってキルされただけだから、ひとまず落ち着いて。そして貴方も、誤解を招くような発言は控えてくれると助かるのだけれど」

「カッカッカ、不滅である来訪者らしい言葉じゃのう。しかし、そんな悪さをしていたのであれば、腕の一本ぐらいは落としておいた方が良いのかのう?」

「だから、知らなかったって言ってるじゃないのン」

老練とした少女の、少し鋭さを増した眼差しを受けてルクスリアはやれやれとため息を吐き、湯船から出てぱちりと指を鳴らした。そうすると瞬きの間に彼の服装は初めて会った時と同じ、黒いスーツ姿に変わり、先程まで湯船に浸かっていたというのに体や髪はさっぱりと乾ききっていた。

「それじゃあ、あたしはこの辺で失礼するわン」

ばちーんとウイंकを一つすれば、それを合図に彼の背後で大きな水柱が立ち上る。

そこから現れたのは、巨大な二振りの鋏と、槍のような尾を持ったサソリのようなモンスターだった。

ずっとカヨウさんが目を細めるが、それも束の間、どうやら取るに足らないものとして判断したのか、やがて視線を外すと、空になったお猪口に酒を注いだ。

「いいお湯だったわン。次はまた、戦場で会いましょうねン!」

ルクスリアは軽やかな足取りでその背に飛び乗ると、本当にこちらに危害は加えずに、手を振りながら去っていった。本当に、温泉を堪能しに來ただけだったようだ。

嫉妬の男もたいがい自由な人柄であったが、魔王軍というのは案外決まりごとに関してはかなり自由なところなのかもしれない。意外

と、そう悪い集団では無いのかもしれないな。
次第に小さくなっていくその背を眺めながら、ボクはそんな事を思
うのだった。

お稲荷様とお買い物①

ある日曜日の朝である。

いつも通りの時間に目を覚まし、いつも通りに顔を洗い、朝食を済ませ、どこかのスポーツ選手がどこぞの女優と入籍しました、なんてどうでもいい朝のニュースに目を通しながら、ふと今日は買い物にでも出かけてみようかと思いついた。

いつもならそのままの流れで寝室に戻り、飽きもせずゲームの世界へと旅立っている筈であるのに。

はつきり言ってしまうえば、現代においてわざわざ外に出て、自分の足で買い物に行く必要性は無い。一世紀前ですら、ある程度の買い物であればインターネットを利用すれば事足りたのだ。

あまつさえ現代はVR技術も随分と発達し、実際に見て、触って、現実の店頭で買い物をするのと変わらないことをVR空間で行う事ができるようになっているのだ。違う点と言えば、代金を払えば即その場で手に入るか否か、というところだろうか。

では何故、わざわざボクは朝からシャワーを浴び、ホットパンツにスウェットパーカーを合わせて、先日買ったばかりのスニーカーを履いて出かけようという気になったのかと言えば、それはあくまで気紛れで、気の迷いで、と言わざるを得ない。

特に、ボクは日光に弱い。

外に出るのにサングラスは必要不可欠であるし、帽子やフードに関してはそれ以上に重要だ。

別に白子症、俗にいうアルビノという訳ではない。肌は白いが、それはあまり外に出ないからであるし、髪や瞳の色は一般的な日本人のそれだ。

まあ紫外線に弱い、日焼けをしやすい、というのはたしかに理由の一つではあるのだが。

他の理由としては、頻繁にくしゃみが出てしまうだとか、眩しいのが苦手でついつい目つきが悪くなってしまうだとか、そんな下らない

理由である。

故に、今回外出に至った理由としては、まさしく気の迷いで、というのが一番なのだろう。

閑話休題。

「さて、思い立ったはいいものの、どこに行こうか」

季節はすっかり春一色となり、マンションの傍にある公園では満開の桜の花を眺めることが出来た。はらはらと舞い落ちる花弁を右へ左へ避けるようにして歩きながら、桜の木の下で、休日とはいえ真昼間にも関わらずブルーシートを広げ、缶ビールをあおる顔の赤いお父さん方を横目にボクはひとまずは駅前のショッピングモールへと向かう。

徒歩にして約十分、ボクにとっては三千里を歩くに等しい苦行であつた。

楽しかったのは桜を眺めながら歩いた始めの三分間だけで、四分後には額に汗し、五分後にはもう出かけるのはやめて家に取って返そうかと思ひ至り、六分後にはここまで来てしまえばショッピングモールへ向かった方が早いと考え直して、まるでシラクスへ駆け戻るメロスのような心持ちでようやく残りの四分を踏破せしめた。

正直、もう帰りたい。何故こんな雲一つない晴天の元、外へ出ようと思ひ至つたのか。

シャワーを浴びたい、お風呂に入つてこの気持ちの悪い汗を洗い流してしまいたい。

そうそう、お風呂といえば、先日のあの温泉絡みのイベントであるが、件のオカマが去った後は特筆すべきこともなく社へと戻り、また茶菓子を頂き、少しの間とりとめのない世間話をして解散となった。

温泉はいつでも、好きな時に使つてくれるといいとカヨウさん直々にお許しが出たので、また時間があれば寄つてみようかと思っている。

サンガラスを外し、ひとまずは自販機で冷たい飲み物を買ひ、ショッピングモール内のベンチに腰掛ける。

そうして、帰りは絶対にタクシーを利用しよう、天地がひっくり返ろうと絶対に徒歩では帰らないと固く誓いつつ、吹き抜けになった高

天井から下がる横断幕へと目をやった。

そこには大きく「大人気ゲーム、The Another World
とのコラボイベント実施中」の文字が。どうやらゲーム内の料理や
ら、小物やらを再現して販売しているらしい。

始まりの町アインの串焼き、道具屋ルビアの紅茶、風と水の町ツ
ヴァイの焼き魚定食、ジパング風握り飯などなど。ジパング風握り
飯って、それはつまりただのおにぎりなのでは、という気がしなくは
ないのだが、まあ気にしたら負けなのだろう。

ともあれ、せっかくの機会なのだから、何か一つぐらいは買ってお
こうか。

空き缶をごみ箱に放り込み、公式PVが流れる特設ブースへと向か
うと、どこか覚えのある香ばしい匂いが漂ってきた。肉が焼け、油が
弾ける音。若者たちの笑い声。ゲーム内のNPCを模した服装をし
た女性スタッフが、ステージ上でにこやかにThe Another W
orldや、お勧めのフルダイブ対応VRデバイスの紹介を行ってい
る。

「すみません、これを一つ下さい」

「あいよ、毎度ありい！」

小銭を取り出しつつそう注文すれば、どこかで見たような、頭にね
じり鉢巻きを巻いたおじさんがそう言って白い歯を覗かせた。なる
ほど、なかなか再現度が高い。勿論、料理ではなくおじさんの方であ
る。

おじさんが焼き上げた串焼きを手に、公式PVが流れる大型液晶モ
ニターの前でぼんやりとそれを眺めつつ、むぐむぐと串焼きを味わ
う。

異世界へようこそ。

そんなキャッチコピーと同時に緑豊かな大地が映し出され、一羽の
真っ白な小鳥が雲一つない青空へと飛び立っていく。そして場面転
換。アインの噴水広場が映し出され、そのままカメラは冒険者ギルド
へ、そこでは多種多様な種族のプレイヤーたちが賑やかにテーブルを
囲み、そのうちの数名が各々の武器を手に、始まりの草原へ向かつて

駆け出していく。戦闘風景を流しつつ、最後はもう一度青空を映し出し、ゲームタイトルと大好評発売中の文字でゐる。まあ、そんな感じのよくあるPVである。

最後の一口を飲み込み、自販機でミネラルウォーターを買いなおしつつ、ぶらりと特設ブース内を歩き回る。冒険者の指輪を再現した銀の指輪や、一時期ボクもお世話になった若草のサンダルなど、食べ物以外にも色々と並んでいて案外飽きにくい。

ちなみに、知っていただろうか。若草とは英語で “Little Women”、つまりは小さな女子という意味を持つ言葉となる。故に、若草シリーズはゲーム内では女性キャラクターしか装備できない。

目ざといプレイヤーはどうやらそれでボクが女であることを看破したらしいが、いやはや我ながら少し浅はかだった。

結局、特設ブースではどこか見覚えのある扇子や指輪、しおりを購入した。

何やらインゲームアイテムと交換できるというチケットを一枚貰ったが、スマホで確認したところ内容はどうやらレベル一から対応したお洒落装備らしく、防御力やステータス補正にはあまり期待できないだろうが、なかなかお洒落なロングワンピースとブーツのセットである。どうやらこのショッピンングモール内にある、有名ブランドの商品をそのままゲーム内に持ってきたらしい。コラボイベントの件と言い、なかなか商魂逞しい話だ。

まあ、ボクが装備することはないだろうが、とりあえず家に帰ってログインしたら受け取っておこう。

そろそろ周りの視線も気になってきたところで特設ブースから少し離れ、始めに座っていたのと同じベンチに腰を下ろし、なんのけなしに周囲へ目を向ける。

家族連れ、仲睦まじい老夫婦、カップル、学生らしい若者の集団、近所の子どもたち。

右へ左へ行き交う人の波を見やりつつ、世間は広いようで狭い、縁は異なるもの味なもの、というのは少し違うが、世の中中々面白いこと

もあるものだと、ちらりと特設ブース内であれやこれやと戯れている若者のグループへと目をやった。

学生で、同じ学年の友人同士なのだろう。女子三人に、男子三人の組み合わせである。

まあそこは問題ではない。そんな連中、このシヨップピングモール内でも数組は見かけられるだろう。問題は、そのうち三名が、どうにも見覚えのある顔ぶれだというところにあった。

程よく日に焼けた肌に、引き締まったプロポーションの女子。その子より少し背の高い、草食系っぽいさわやかな男子と、それよりも頭一つ高い背丈の、ピアスを付けたどこか野性的な印象を受ける男子。なんとも、面白い縁もあったものだ。

一名ほど確信が持てない人物が混じっているが、まあ恐らくはあのプレイヤーだろう。

彼女らの生活圏が案外近くだったことを驚くべきか、今日この時に見知った面々がこのシヨップピングモールに集った偶然を奇跡だと喜ぶべきか。

当のボクは、あの二人が本当にリアルの外見を元にキャラメイクをやっていたという事実が一番驚いていた。VRMMO初心者とは本当に恐ろしい。

基本的にボクはゲーム内の人間関係をはじめとしたあれやこれやをゲーム外に持ち出す事はないのだが、あの三人組が本当にあの三人組であるならば、これまでゲーム内で話していた年齢や性別諸々もすべて真実だったという事になるのだし、周りの同級生らしいその他諸々は一旦置いておくとしてあの三人に挨拶ぐらいはしておいた方がいいのだろうか。

否、その必要はない。

ミネラルウォーターを飲み干し、空になったペットボトルを再びごみ箱に放り込みながら、ボクはそう断じた。

ゲームはあくまでもゲームであり、ゲーム内での友好関係も、あくまでゲーム内での事。

身も蓋もない言い方をしてしまえば、非常に面倒だ。

彼女ら三人が悪い訳ではなく、単にボクの性格、人間的な問題であり、考え方の問題である。

彼女達には、“タマモとしての自分”だけを知っていてほしい、というのが本音なのだろう。

幸いなことに、ボクが使用しているアバターは顔つきこそ似通っているものの、体格や髪形、肌の色に関しては微妙に異なる。どこかで見たことがあるような、と思われることはあっても、初見でボクがタマモであるとは見抜くことはほぼ不可能と言ってもいい。

さて、それでは程よく暇つぶしも出来た事であるし、そろそろ家に戻るとしよう。

立ちあがり、今なお夥しい人波が押し寄せるショッピングモールの出入り口へと向かう。

否、向かおうとして、向かえなかった。がっしりと、何者かに肩を掴まれている。細い指、肌の感じからして若い女性だろう。日に焼けた、健康的な印象を受ける右手を見て、ボクは内心ため息を吐いた。

振り向いた方がいいだろうか。振り向いた方がいいのだろうか。

そこに誰が立っているのかなんて明々白々、火を見るよりも明らかなのだが、肩に置かれた右手から二の腕へ、二の腕から肩へ、肩から首元へと視線を移していくと、そこにはやはりというかなんというか、ゲームの中ではよく見た顔の少女が、丸くて大きな瞳を爛々と輝かせながら立っていた。

「ご、ごめんなさい。あのっ、どこかでお会いした事ありませんか!?」
ショッピングモールの中に、澆刺とした少女の声が響く。

やはり、いつも通り引き籠っていればよかったと、ボクは改めてため息を吐くのだった。

お稲荷様とお買い物②

さて、状況を整理してみよう。

ここはボクが気紛れで訪れたショッピングモールの中にある、大手チェーン店のコーヒーショップ。

立ち話、それも大人数で話し込むのは好きではないので、素直にボクの肩を掴んだ少女、かのゲームの世界では結構な頻度で顔を合わせているプレイヤーであるモミジに対して、ボクが場所を変えようと提案したのだ。ついでに言えば彼女ら三人以外のご友人方には、本当に申し訳ないのだが席を外して頂くようお願いした。ある程度気心の知れた相手ならまだしも、初対面の人間にあれやこれやと話しかけられるのは正直に言ってかなり面倒なのだ。

そうしてボクは今、未だ本人の口から肯定されていないので暫定ではあるが、モミジとハヤトを正面、コタロウと思われる男子学生を隣に置いた状態で、このお店のおススメらしいホワイトショコラ・ラテなるドリンクをちうちうと啜っている。

えーつと、と暫定モミジが指先で頬をかきつつ、何故だか恐る恐るといった風に口を開いた。

「あの、タマモお……だよね？」

ここで、いいえ違います私は山本です、なんて答えれば、彼女はどんな顔をするのだろう。

数秒の沈黙が流れる間、ボクはそんな事を考えていた。

まあやたらとバイタリテイの高い彼女のことであるから、それならそれで山本を騙ったボクと仲良くなろうと、あれやこれやと構い倒してきそうな予感がするが。

ともあれ、いくら自分の思惑通りに事が運ばなかったとはいえ、それだけでへそを曲げる程ボクは狭量な人間ではない。ストローから口を離し彼女をじつと見つめ、やがてゆっくりと頷いてみせた。「まさか、一見で看破されるとは思っていなかったよ」

僅かに目を見開く暫定ハヤト、途端に瞳を輝かせる暫定モミジ。

隣に座っている暫定コタロウの様子は定かではないが、恐らくは暫定ハヤトと同じような表情を浮かべているのだろう。

ドリンクと共に注文したミルクレープをフォークで切り分け、口に運ぶ。あ、美味しい。

口内でふんわりと解れ、広がっていく甘さに少しばかり驚きつつ、視線を暫定モミジの方に戻す。

彼女はくりくりとした可愛らしい大きな瞳でじつとこちらを見つめ、やがて感慨深げにはあ、と息を吐いた。

「何だい、そんなに珍しい顔でもないだろう」

「い、いやあ、なんというか、ゲームのキャラしか見たことなかったから、意外と——」

「意外と幼く見える、かな？」

ミルクレープをまた一切れ含みながらじとりとした視線を送れば、彼女は誤魔化すように顔を引きつらせ頭を掻いた。

まあ彼女の反応も尤もである。ゲーム内のタマモと違い、現実のボクは髪も長いし、背も低い。年がら年中自宅に籠っているせいで肌も白く、女性的な発育も同年代に比べると相当未熟であると自覚している。

しかし、ネットゲームのアバター、分身なんていうのは程度の違いこそあれ、プレイヤーの願望、理想が形になったものだとはボクは考えている。無論、例外はあるが。

理想の自分、こうなりたい、こうでありたいという願望。容姿端麗、頭脳明晰。誰よりも特別でありたい、認められたい、羨望の目を向けられたい、ちやほやされたい。高難易度コンテンツを楽々と攻略したい、誰も持っていないレアなアイテム、スキルを手に入れたい。自分はお前たちとは違う、俺はこんなに凄いだぞと胸を張りたい。

承認欲求、自己顕示欲の具現。

ネットゲプレイヤーの頭を覗いてみれば、おおよそそんな考えの人間がほとんどだ。

そう言うボク自身、ゲームの中では少しばかり気が大きくなるし、分身たるタマモも現実のボクより少し大人びた外見をしている。ま

るで自身のコンプレックスを覆い隠すかのように。

それを鑑みても、モミジやハヤトのように自身の外見をほぼそのままアバターとして使用しているプレイヤーは極めて珍しい。それだけ容姿に自信があるのか、それとも唯々純粋なだけなのか。

目の前で冷や汗を流し、視線を泳がせながらオレレンジジュースを啜る少女の様子を見るに後者の可能性が高いと考えるべきだろう。

「まあ、ボクの容姿がどうあれ、これがボクであるし、The Another Worldの世界においてタマモと名乗っている人間だ。何か期待していたようななら、申し訳ないがこれが全てだ。あと一回変身を残していたりはしないから安心してくれていい」

そも、ゲーム内と現実の容姿にギャップが生じているのは、ボクの隣に座っているこの少年なのだが。

ちらりと隣を見やれば、そこにはこの場で唯一見慣れない顔の少年が、頬杖をついてコーヒーを飲んでいた。その指にはシルバーの指輪がはめられ、耳にはピアス、首にはチョーカーとなかなかパンクな恰好をしている。

こちらの視線に気が付いた少年が一瞬こちらに目を向けるが、気まぐすうにすぐさまその視線を正反対の方向へと逸らしてしまった。カヨウさんの件から薄々感じてはいたのだが、もしかしてこんな可愛らしい少女を傍に^{モミジ}侍らせていながら、異性に対しての免疫が全くないのだろうか。

それはともかくとして、今はとりあえずこの場の面々に関して確認しておくでしょう。正直、いつまでも暫定と頭につけるのも面倒くさい。

「そちらはモミジ、ハヤト、そしてコタロウで間違いないかな？」

一人一人に視線を向けながらそう尋ね、それぞれが頷いて返すのを見つつ、ボクはストローを啜える。

これで確認は取れたし、ようやく暫定扱いをしなくてよくなりそうだ。

一つ息を吐き、一応は言っておこうと目の前のVRMMO初心者に警告する。

「成程、コタロウ以外は殆ど生身の自分をそのままアバターとして使っているのか。とりあえず、二人にはもう少しアバターの容姿を変更する事をお勧めするよ」

特にここにいる三名はかなり恵まれた容姿をしているのだし、質の悪い連中に絡まれてしまえば、そのまま住所やら通っている学校やら、個人情報まで根こそぎ掴まれてしまうだろう。

現在、あのゲームには種族を変更したりとか、容姿を大幅に変更する為のアイテムは実装されていないが、きっとそのうち、課金アイテムか何かで実装される可能性は高い。そうすれば、その機会にでもがらりと変えてしまうのも一つの手だろう。尤も、本人たちにその気があればの話ではあるのだが。

そんな風な話をする、目の前の二人は困ったように笑った。隣のコタロウがため息を吐き、頭を抱える。

「ああ、それな、俺も始める時に一応注意はしてたんだが、こいつら全く聞く気がねエから言うだけ無駄だぞ」

コタロウ曰く、この二人はそういつた部分に関しては驚くほど無頓着なのだという。

まあ実際に被害を被るのは彼らであるし、ボクは他人のプレイスタイルに文句を言えるほど偉い人間ではないので、本人たちが問題ないと言うのであれば無理強いはいらないが。

かく言うコタロウは、何作かVRMMORPGをプレイした事があるらしく、自身の好みとも相まって、ワーウルフ族でプレイすることを決めたのだとか。確かに近接職を主とする場合、俊敏値や筋力値が伸びやすいワーウルフ族は最適解に近いと言える。

「それならいいのだけれど。で、モミジはボクを捕まえて何をするつもりだったのかな」

「うーん、いや、本当にタマモなのか確認したかっただけで、何かするっていうのは考えてなかったなあ」

誤魔化すように笑う彼女は、まさしくゲームの中のモミジそのものであった。

「そうだ、ここに買い物に来てたってことは、タマモってこの近くに住

んでるの？」

「まあ、ここから歩いて十分ぐらいのところかな」

近くとは言うが、ボクにとってはかなりの遠方にカテゴライズされる距離なのだが。

ちなみに十分というのもボクの足で十分という事であるので、モミジの健脚であれば半分ほどの時間でたどり着けるだろう。勿論そんな余計な事は口にせずホワイトショコラ・ラテを啜ると、モミジは何やら驚いたように大きく手を叩いた。

「じゃあ、もしかしたらご近所さんかもしれないね！ 私たちの家もそのぐらいだし。タマモの家って山の方？」

「いや、ボクは川の方だよ。そも、会おうと思えばゲームの中で会えるのだし、ご近所だろうとなかろうと、距離なんてさほど関係ないだろうに」

まさか、定期的に遊びに来るつもりだったりするのだろうか。

いや、別に家には基本的にボク以外の人間がいる事はないので、遊びに来る程度なら何て事はないのであるが、まさかわざわざ家まで来てゲームの中にダイブする訳でもないだろう。ならば、テレビを見ながらお菓子をつまみ、とりとめのない会話に花を咲かせたりだとか、そんな事だろうか。否、その程度ならばゲームの中で十分である。ならばならば、彼女の趣向からして、まさかアウトドアな遊びにでも連れ出されてしまうのだろうか。悪夢である。もしそうしたお誘いを受けたならば、誠に申し訳ないが謹んで辞退させていただくとう。

しかし話を聞いていけば、彼女たちが通う学校はボクの家からさほど遠くない場所にあることが明らかになった。学校名を聞いてぴんと来た。その学校の生徒ならば、確かに登下校する様子をよく目にしている。先程一緒にいた男女数名も、同じ学校の友人なのだから。

「もしタマモが普通の学校に通ってたなら、もしかしたら後輩になつたかもしれないね」

ストローでグラスの中をかき回しながら、モミジはそんな事を言った。

いや、確かにあの学校の制服は中々可愛らしいとは思うが、五分歩いただけでフルマラソンを走り切った走者のようなありさまを晒すボクである。自分の足で登校だなんて、想像するだけで憂鬱だ。

素直にそんな事を言ってみれば、三人は三者三様の呆れ顔を披露してくれた。

「タマモ、流石にそれは……」

「五分歩いたらへばるって、その辺の爺さんでももつと体力あるぞ」失礼な。ボクなんかと比べられては、ご老人方もさぞ迷惑だろう。

「何でそんなに卑屈なのさ……」

そんな会話を続けながら、のんびりとした時間は過ぎていく。

結局この日は、互いの顔合わせと、モミジたちの学校での話などに花を咲かせて解散となった。

モミジなんかはもつと長く話していたそうな様子であったが、他の友人を待たせている手前、そうそう長話をする訳にもいくまい。

そうしてモミジたちと別れ、店の前でタクシーを拾い、ワンメーター程度で呼びつけて申し訳ないと少しばかり運転手さんに心苦しく思いつつ、夕方ごろには家に帰ることが出来た。

そうして夕飯の準備を済ませ、軽くシャワーを済ませた後、寝間着代わりの甚平に着替えてVRデバイスを被る。さてさて、何やら慌ただしい休日ではあったが、何はともあれ残った貴重な時間を有意義に使うとしよう。

ぐつと身体を伸ばしベッドに横になると、ボクはデバイスの電源を入れ、いつもの通り、いつものゲームを立ち上げるのだった。

お稲荷様と大型アップデート

某月某日、ほぼ毎日と言っても過言ではない程ログインしていたThe Another Worldに大型アップデートが実施された。先の第二陣参戦時のものを入れると二回目になる。

このアップデートによって高難易度ダンジョンや課金アイテムを含む様々なアイテム、新マップの追加をはじめ、既存種族および職業間のバランス調整、マイハウスサービスの開始など、にわかには信じ難い量の、思わず開発運営の神経を疑っても仕方がないであろう大量の要素が追加された。

高難易度ダンジョンについては、例のイベントにてボクも潜ったあの地下迷宮、あれをさらに複雑にし、出現するモンスターを強化し、階層を増やしたようなものであるらしい。

次に課金アイテム。

文字だけ見ればあこぎな物のように感じるが、内容としてはそれほどぶっ飛んだものではなく、いつだったかボクがショッピングモールで手に入れたコラボ装備、ああいったいわゆるお洒落装備と呼ばれるものや、公式イベント後に配布された【導きのつばさ】のような便利アイテム、そして髪形を変更出来る【美容チケット】、キャラメイクをやり直せる【変身薬】などが公式ホームページ上で購入できるようになった。

ランダムでアイテムが手に入る、俗にいうガチャと呼ばれる商品もなく、戦力的に有用な装備品も販売されていないので、ゲームバランスにはあまり影響はないと言えるだろう。

続いて新マップ。

これは王都フィーアよりさらに北に向かったところにヨトウン雪原なる新しいエリアが追加された。それとは別にヘリオポリス大砂漠なる、いかにも暑そうなエリアも追加されたらしいが、こちらはまだ詳しい場所は明らかになっていない。

バランス調整の話はまた後にするとして、マイハウスに関してはそ

の名の通り、各都市にプレイヤーが自宅を持てるようになった。ちなみに一軒家の大豪邸から集合住宅の一室まで、グレードはピンキリである。

ちなみにちなみに、ボクはアップデート後に疾風の如き勢いで、ジパングに自宅を購入した。

費用？ そんなもの、これまで地道に金策をしていればある程度の備蓄は出来ている。

さすがに豪邸クラスではないが、一人でのんびりするには丁度いい大きさの、そう、着物の件でお世話になったシズノさんが暮らしている庵、あれぐらいの大きさの家だ。中々居心地の良いところで、ちょくちよくモミジやイナバさんもだらけにやってきている。

イナバさん。公式イベントの際に知り合ったワラビット。

出会った当時は初心者だった彼女も、今ではレベル六十の立派な高レベルプレイヤーだったりする。随分と立派になったものだ。

そして今回のアップデートで最も特筆すべきは、やはりレベル上限が六十から七十に引き上げられたことだろう。これにより各種族、職業に新たなスキル、装備品が追加され、生産職を筆頭にプレイヤーは沸きに沸いた。

レベルを上げる為にレベル六十以上の装備が必要になるのは必然であり、当然それらの需要はアップデート直後は爆発的に増加する。故に、出せば売れる。生産職のプレイヤーにとってはまさしく一年に数度規模の稼ぎ時であり、それと同時に装備品を作る為に必要な素材アイテムが高騰する為、生産職以外のプレイヤーにとってもなかなか美味しい金策の機会となるからだ。

そんなこんなで、このゲーム始まって二度目の大型アップデートから間、The Another Worldの世界はかつてないほどに活気づいていた。

そんな中ボクは何をしているのかと言えば、自宅の縁側でのんびりお茶を飲んでいる。七本の尻尾を気の向くままにゆらりゆらりと揺らしながら、自分で採取してきた茶葉を自分で加工し、自分で煎れたお茶をゆつくりと味わいつつ、庭先に咲いた一本の桜の木をぼんやり

と眺めていた。

レベル七十になったのは、つい今朝の話である。

ボクは夏休みの宿題なんかは可能な限り早急に片付けるタイプの人間で、レベリングなんていう面倒なものはアップデート明けから徹夜も辞さない覚悟でさっさと済ませてしまった。ちなみにかかった日数は約三日。その話を聞いた某三人組には例によって、例に漏れずドン引きされることと相成ったが、ボクは気にしていない。

その際、全プレイヤー最速ではないかとの意見もあったが、生憎とそれはボクではなく、他サーバーのプレイヤーが、二日目にしてレベル七十に至ったとSNSにて画像付きで報告している。なお、そのプレイヤーは攻略組のガチ廃人である。

ともあれ、めでたく七尾の妖狐となり、レベリングがひと段落ついたボクはこうしてマイホームでのんびんだらりと過ごしている訳である。まあ、陰陽師のクエストだったりとか、ファームングを行って装備面を充実させたりとか、やるべきことがなくはないのだが。

噂によればアップデートで実装された高難易度ダンジョン、その名も「銀の地下迷宮」というらしいが、そこで手に入れることが出来る武器がレベル七十向けの中ではかなり有用であるらしいので、またモミジたちと潜ってみるか、あるいは周回目的のパーティに加わってみるのもありかもしれない。

陰陽師というバツファースト系の職業についている為、戦闘中は何かと忙しいので可能であればソロで活動したいのだが、流石に高難易度ダンジョンをソロで攻略するのは無理があるので致し方ない。

そういえば今回のバランス調整によって、陰陽師のスキル【泰山府君祭】の効果が変更され、以前までは「対象が戦闘不能になった際に蘇生させる」という、要は事前にかけておける蘇生魔法のような効果だったものが、「対象が戦闘不能になるダメージを受けた際、HPを一だけ残す」という、なんともピーキーな効果となった。

まあ以前までの効果では戦闘前にかけておける分、治療術士が使用する蘇生魔法よりも使い勝手が良く、あちらの役割を食ってしまった分もあるので、これも致し方ないのかもしれない。

又、妖狐族という種族に関しての調整だが、こちらは妖術の威力が軒並み下方修正された。

それと共に妖術の威力を上げる「瞑想」という補助スキルが追加されたのだがこれがまた曲者で、このスキルが発動している最中は以前と同等の火力を出せるようになっていたのだが、そのおかげで頻繁にスキルの効果を更新しなければならず、高い火力を維持するにはある程度の慣れを必要とする少しテクニカルな種族になってしまった。

そういった面倒な点と、エルフ族や魔族の魔法火力が上方修正された事も相まって、課金アイテムの【変身薬】を使って妖狐族から他の種族へと変更するプレイヤーが後を経たず、妖狐族の人口はじわじわと減少しているのだとか。まあ、ボクには余り関係のない話である。温かな日差しを浴びながら、ぐつと伸びを一つ。空になった茶碗を片付けると、ボクはようやく腰を上げた。我ながら、随分と重い腰である。

とりあえずはセイメイのところに顔を出して、陰陽師の職業クエストを片付けてしまおうか。

「陰陽師の職業クエストって面倒だから、あまり気は進まないのだけれど」

そんな事を一人愚痴りつつ装備を確認し、家を出る。

そういえば、レベル七十となった今の装備であるが、流石に鬼姫装備では性能が間に合わず、シズノさんにまた新しく揃えてもらった。

その名も【妖狐^{ようこひ}妃の打掛】。

何やら聞いたことのあるようなネーミングだが、正式名なのだから仕方がない。

セットになっている小袖の上から羽織るような形になっており、打掛そのものはゆったりとした少し大きめのデザインなのだが、下に着ている小袖の丈がまた短く、全体的なデザインは鬼姫装備とそう変わらない。まあお洒落と言えはお洒落なのだが、運営はどうあってもミニに拘るらしい。前回同様、性能だけを見ればレベル七十でも十分通用する程高い分、余計に質が悪い。

「おや、これはまた久しぶりに見る顔だ。てつきり鬼にでも食われて

しまったのだと思っていた」

屋敷を訪れてみれば、セイメイはこちらの顔を見るなりそんな事を言った。相変わらず口の悪い男である。

しかし彼の相手をするのも慣れたもので、ボクはさっさと屋敷の縁側に腰を下ろすと手にした扇で口元を隠し、ぼそりと呟いてみせた。「クズノハさんとカヨウさん、明日はどちらを伺ったものか」

それを耳にした途端、したり顔で酒を煽っていた狐顔の優男がげげほとせき込み、眉間にしわを寄せこちらへぐつと身を寄せてくる。

「これ、滅多な事を言うな。相変わらず恐ろしい奴だ」

何を言うか。聞き捨てならない事を口にしたのはそちらが先である。

これでジパングでも一二を争う優秀な陰陽師だというのだから、世の中とは不思議なものだ。

出会った当初はこちらもかなり丁寧な対応を心掛けてきたし、敬つてもいたのだが、長く付き合えば付き合うほど、目の前の男がかなり偏屈な人間であることを知り、今となつては彼とのやり取りも相当おざなりなものへと変わってしまった。

まあ、あのクズノハさんの息子であり、モデルとなっているであろう歴史上の人物を考えればかなり不敬にあたるのかもしれないが、それはそれ、これはこれである。

セイメイはボクが七尾になっていることに気が付いたのか、何やらじつとこちらを観察すると、ぱんと一つ手を叩いた。それを合図に彼が使役する式神である艶やかな女性が、屋敷の奥から何やら書簡らしい巻物を手に現れる。

セイメイがそれを受け取り、短く礼を言うと、彼女はふつと霞のように消えていなくなってしまった。相変わらず、使う術だけは素晴らしい男である。いつの日かボクも、プレイヤーもああいった式神を使役できるようになるのだろうか。

そんな事を考えていると、セイメイは受け取った書簡をずいところらに差し出し、にやりと笑う。

「お主にこの仕事を任せよう。なに、七尾にまで至ったのであれば、さ

ほど難しいものでもないだろう」

そうして書簡を受け取り、システムメツセージに表示されたクエスト名に、ボクは目を疑った。

——クエスト【オオエの山の鬼退治】を受理しますか？ YES／NO

これはなんとも、骨の折れそうなクエストである。

とりあえずいつものメンバーに声をかけてみるかと、ボクはおもむろにメインメニューを開くのであった。

お稻荷様と二人の鬼

大江山の鬼退治といえ、やはり有名なものは源頼光と頼光四天王による酒吞童子討伐の伝説だろう。

京の都を荒らしまわり、人を攫い、食らう悪鬼、鬼の頭領酒吞童子。かつてボクたちが撃退したイバラキのモデルとなった茨木童子も、かの鬼の頭領の傘下に加わっていた鬼の一人であり、さらに神代の化物、八岐大蛇が富豪の娘との間に儲けたのがこの酒吞童子である、という伝承も残っている。数々の武勇を誇る源頼光と四天王たちが山伏のふりをし、共に人肉や血の酒を口にして完全に油断させたうえで毒酒を飲ませ寝首をかく、なんてえげつない手段をもつてようやく討伐したと言え、その規格外さが伺えるだろう。

なお、茨木童子以外にも星熊童子、虎熊童子、熊童子、金童子という傘下の鬼がおり、これらは鬼の四天王と呼ばれている。

羅城門の一件でイバラキが現れてからもしやとは思っていたが、まさか陰陽師の職業クエストで登場してくるとは思わなかった。

いや、まだ実際に討伐を命ぜられた盗賊の頭と会ったわけではないので、必ずしも酒吞童子が現れるとは決まったわけではないのだが、まさか土蜘蛛や土熊を出してくる訳でもないだろうし、恐らくはそうなのだろう。

「どうしたのタマモ、ため息なんて吐いて」

そう心配げにこちらの顔を覗き込むモミジに何でもないと手を振ると、ボクたちの目の前に立ち塞がる巨大な扉に目をやった。観音開きになっているらしい鉄製の扉で、中央部には般若の面がはめられており、空虚となった双眸が怪しくこちらを睨みつけている。

豊富な鉱脈を有し、一時期はジパングの鍛冶産業を支える大鉱山として賑わっていたのだが、鉱脈が枯れてからは誰も寄り付かず、今となっては獣や山賊の恰好のたまり場となっている。

ここはそういった経緯で廃棄された坑道の一つだった場所であり、どうやら今は鬼の一味の根城になっているらしかった。

「さて、それじゃあどうしようか。どうやら出入口はここしかないみたいけど」

レベル七十になり、装備もより重厚になったハヤトが扉に手を当てながら言う。

どうやら鍵はかかっていたようだが、ハヤトがそのまま軽く押してみれば、その一見堅牢に見える扉は意外にもあっさりと奥へと開いてしまった。

露になったその奥から、僅かに湿気と臭気を含んだ風が吹き抜けていく。しかし鼻先をかすめていくこの臭いは、洞窟にありがちなアンモニアに似た悪臭ではない。これはお酒、アルコールの匂いだろうか。

「おやおや、客人を迎えに来てみれば、これはまた懐かしい顔ぶれではないか」

「やろう……!」

からんころんと下駄の音。

坑道の奥から現れたのは金髪をなびかせ、扇情的な恰好をした二本角を持つ鬼族の女性。

忘れるはずもない、あの日羅城門で戦った女傑、イバラキである。

なぜこんなところに、なんてことは思わない。彼女のモデルは茨木童子。であるならば、酒呑童子が待ち構えているであろうこの場所に、仲間である彼女がいないわけがない。

強敵の登場に思わず身構えるボクたちをぐるりと見やると、彼女は呆れたように息を吐き、がりがりと頭を掻いた。

「やれやれ、これはまた随分と嫌われたものだ」

「出会いからしてかなり物騒だったからね」

これまでの経緯を考えれば当然ともいえる反応ではあったのだが、どうやら彼女にとってはそうではなかったようだ。自然体に構えるその様子を見るかぎり敵意はないようだが、ボクたちを追い払う為に姿を見せたのではないのだろうか。

「それに関してはこのとおり、妾も片腕を失っておるのでな、それで手打ちとしようではないか。此度は我が主様がどうしても狐の君と

話してみたいと言つてきかぬ故、妾自らこうして迎えに参上したわけだ。悪いが、他の者はここで待つていてもらおうか」

どうやらボクがやって来る事はお見通しだったようだ。イバラキはこれ見よがしにがらんどうになった左の袖を揺らし、うつすらと笑った。鬼の頭領直々のご指名となればそれに応じるのもやぶさかではないのだが、これに対し警戒を強めたのはハヤトたち三人である。

彼らはボクを庇うように前に立ち、各々武器を構えて一瞬たりとも目を離さないとばかりにイバラキを睨みつけた。その場に剣呑とした雰囲気 flowed かと思いきや、突然かんらんかんらんと声を上げて笑い始めたイバラキに、張り詰めた空気は一瞬にして霧散し、モミジなどは何事かと目を丸くしている。

「いやはや、狐の君は良き友を持ったな。そう警戒せずとも、お主らの友には傷一つ付けぬよ、妾の名に誓つてもよい」

「その言葉、信用するとでも？」

腰の剣に手を添えながらハヤトが言えば、イバラキは対峙する三人を見返しながら大きく胸を張った。

「鬼に横道は無い」

それはとても誇らしげで、清々するほど真つすぐな言葉であった。強者故に、鬼は、鬼族はどんな時でも正面から、正々堂々と打つて出る。生まれ持った強さだけでどんな困難、どんな敵にも打ち勝てると思っている。故に卑怯な手は使わない、使う必要がないのだという。

そんな鬼族の特徴を体現したような彼女のその力強い姿にボクは目を奪われ、気付いた時にはハヤトたちを押しのけて、彼女の目の前まで歩み寄っていた。

「二つだけ条件がある」

爛々と輝く金色の瞳を見つめ、人差し指をぴんと立てて言う。

「会うのは構わないが、同席するのは君一人だけだ。他の人間、まあ君たちの場合は鬼族と言った方がいいのだろうけれど、そういったのは無しで、君と、その主様と、ボクの三人だけで話をしたいんだ」

「勿論だ。客人を大人数で囲むような無粋な真似はしないし、させない」

ぶれず、逸らさず、じつとこちらを見つめ返すその瞳は実に力強く、その言葉には一切の迷いがない。

羅城門の件ではこうも近くで言葉を交わすことはなかったが、こうして直に話してみると、これがどうして、惚れ惚れする程真つすぐな女性なのだとわかる。

「悪党にしておくには勿体ない女性だね、貴女は」

ボクにはとてもとても、捻じれ曲がり、歪に歪んだボクでは到底なり得ない、届かない姿に笑みがこぼれる。するとイバラキはその瞳をきよとんと点にさせた後、堰を切ったように笑った。

「ふふ、ははは！ いやはや、やはり妾の目に狂いはなかったな」

イバラキが一步退き、坑道の奥へ進むよう促す。

それに従い、いざ鬼の住処へ踏み込まんと意気込んだところで、不意に袖を引かれる感覚が。

振り向けば、そこには僅かに顔を青くしたモミジが、震える指先で着物の袖を掴んでいた。

「タマモ、本当に大丈夫なの？」

問題ない。

元々これは陰陽師の職業クエストであり、その中でボク一人を対象としたイベントが発生しても何ら不思議ではない。

逆に考えればボク一人だけが対象となっている時点で、仮にイベント中にボスモンスターとの戦闘が発生したとしても、それはソロで突破可能な難易度である可能性が高く、そう苦戦することもないだろう。勿論、荒事も起きず、本当に対話だけで済むのならそれに越したことはないのだが。

モミジの頭を軽く撫で、その後ろでため息を吐くコタロウたちに手を振って、ボクはイバラキに視線を戻した。

「それじゃあ、案内をお願いするよ」

「任された。ちよいと散らかってるから、足元には気をつけなよ」

そう言ってイバラキは迷いなくこちらに背中を向けると、からんこ

ろんと下駄を鳴らしながら歩き出す。さてさて、鬼が出るか蛇が出るか。

と、鬼ならもう出ていたな。

兎にも角にも、この先で待ち受ける人物に思いを馳せつつ、ボクは艶やかなその背中を追いかけるのであった。

お稻荷様と鬼の酒

八岐大蛇を親に持つが故か、酒呑童子は大の酒好きだと言われている。それは手下たちから酒呑^{酒を呑む}、という名で呼ばれたことから、相当なものであることがわかるだろう。

ボク自身、坑道の奥から漂う酒の香りからある程度は覚悟していたのだが、目の前に広がる光景には絶句せざるを得なかった。

樽、樽、酒樽の山である。どれもこれもボクの身の丈ほどはある大きな酒樽が、所狭しと堆く積まれて^{うずたか}いる。他にも蓋が開けられた空の樽や、力士が使うような大関杯、徳利やお猪口まで、様々な酒器が床に転がっていた。

ここは坑道の一番奥、鬼の美女に連れられて進んだ先には、畳が敷かれたお座敷のような大部屋が拵えてあった。どうやら、手下に命じて作らせたらしい。

目を丸くするボクを尻目に、ここまで案内をしてくれたイバラキが部屋の中央でしゃがみ込み、何やら声をかけている。

「おーい、シュテン、シュテンやい、お前さんの言う通り連れてきたよ」
げしげしと、しまいには足で何やら蹴り始めたかと思いきや、やがてイバラキの足元からのそりと何者かが起き上がった。

黒髪を頭の上で乱暴にまとめた、虎柄の派手な着物姿の大男である。身の丈は二メートル程あるだろうか。額から天を突くように赤い一本角が伸び、着崩れた着物の隙間からは岩のような逞しい胸板が覗いている。

呑気に欠伸なんかをしている大男に、イバラキは大きいため息を吐いた。

「おお、イバラキ、おはよう。とりあえず酒だ、酒を呑もう」

第一声から、なんとも台無しな感じである。

起きて早々これであれば、なるほど手下から酒呑^{シュテン}と呼ばれるのも納得である。

言葉だけ取れば完全にダメな人間か相当にヤバい人間なのだけ

ど、本当に彼が鬼の頭領なのだろうか。

「ほら、前に妾が話していた狐の君を連れて来たのだぞ、しゃんとしないか」

「おお、おお、そうか。ではきちんとしなければな」

ぐっと伸びをし、男が朗らかに笑う。

崩れに崩れていた着物の襟をしっかりと正すと、そこでようやく男の顔がこちらへと向けられた。

面と向かってみれば、ずっと鼻筋の通ったなかなかの美丈夫である。

しかし――

「お酒臭い……」

ボクが到着する直前まで飲んでいたのでは――否、まるで清酒の風呂にでも浸かっていたのかと疑ってしまうほどの酒気であった。

袖で口元を隠し、吐き捨てるように言ったボクを見て、しかし男は一切気にしていない様子でまた笑う。　そうして手近にあった瓢箪を手に取り、栓を抜き、中身を呷る。

まるで起き抜けの水のような手軽さで飲んではいるが、それが酒であることはもはや疑いようがなかった。　ぐいと口元を拭い、男が言う。

「名乗るのが遅れたな、俺はシュテン、ここらの鬼族の頭をやつてる。まあ立ち話もなんだ、ちいと散らかっちゃあいるが、適当に座つてくれよ」

どこから取り出したのか、ボクの背丈ほどはあろう大太刀をなんともぞんざいに扱いながら周囲の樽やら杯やらを押しのとけると、男はまた瓢箪を呷る。

どうしたものかと悩んでいると、見かねたイバラキが奥から座布団を一枚持ってきて、シュテンの向かいに置いた。　どうやらここに座れという事らしい。蔑ろにするのも気が引けるので、ご厚意に甘えさせて頂くとしよう。

「すまないね、こいつはいつだってこんな感じなのさ」

「はあ、いや、別に構わないのだけど、少し意外だったのは事実だね」

酒好きであるのは想定していたけれど、もう少しこう、鬼らしく厳めしい感じなのかと思っていた。

ところかどうか。実際に会ってみれば、大男ではあるが厳つい感じはなく、むしろ人懐っこい印象さえ感じさせる好男子である。まあモチーフはあくまでモチーフ。当たり前ではあるが目の前の彼はあくまでシュテンであり、言い伝えられる酒呑童子そのものではない、という事なのだろう。

「イバラキから聞いているとは思うけど、ボクはタマモ。一応、君たちを懲らしめるように言われて来たのだけれど――」

「いやあ、イバラキが気に入ったという来訪者がどんな者なのか興味があったのだが、これはまた随分と賢いような女子を見つけてみたものだ」

ぐいと身を乗り出し、シュテンがにっかりと笑う。とりあえずボクの話聞いてほしい。

しかしその言葉に機嫌が悪くなったのか、イバラキは右腕でボクの肩を抱き寄せると、その柔らかな頬を肩に置き熱っぽい視線をこちらに向けた。

「そうだろう、そうだろう。妖狐族にも、陰陽師にしておくにも勿体ない姫君なのだよ、この娘は。どうだ、前回は袖にされてしまったが、今からでも妾のものにならぬか？」

そのしなやかな指先でこちらの首筋を撫でるその仕草は実に蠱惑的で、同性であってもくらりとくるであろう色香を放っている。しかしボクは、その首筋を這うような右手の甲をペしりと扇ではたき落とし、七本の尾でぐいと甘い香りを放つ彼女を引っぱがした。

あん、とイバラキが声を漏らす。

「折角のお誘いだが、お断りするよ。今のところこの身にも、この職にも不満はないのでね」

かかか、と今度はシュテンが笑う。

「いやはや、これはなかなか、身持ちが堅い姫君であるな。しかしイバラキよ、俺というものがありませんが他の女子に手を付けるのか？」

「何を言っておる、お前さんとて都に何人も女を囲っておろうが」

あ、やつぱりそうなのか。風体からして、遊んでいそうな男だからなあ。

さらには身なりをきちんと整えれば、見てくれだけはかなりの色男である。街で女性に声を掛ければ、何も知らない者であればころっと騙されてしまうだろう。

女の敵、なんてことを言うつもりはない。複数の女を囲うのも男の甲斐性であれば、他に女を囲われる女も女なのだ。それが嫌だというのは、首に鈴でもつけていればいいのだ。

尤もこの二人の場合、お互いがお互いにそれを了承し、好き勝手やりたいようにやっているようであるが。

「はっはっは、それを言われると痛いなあ。まあ、とりあえずは飲んでくれ、どれもこれも銘酒ばかりだ、味は俺が保証するぞ」

そう言つて杯——これでも女子に対し何を思つたのか、大関杯である——に並々と酒を注ぐシュテンを、咄嗟に手で制した。

ここがゲームの世界で、実際にアルコールが入っている訳ではないのだろうが酒は酒。未だ学生のみであるボクが飲むのはいささか問題がある。

自分が未成年であり、酒を飲む事が出来ないことを伝えたと、彼は眉を寄せ、ここにきて初めてその表情を不機嫌そうに歪めた。

「なんだなんだ、固いことを言うな。こんなもの水のようなものだ、ささ、ぐいっといけぐいっ」と

まるで飲んだくれたおじさんのような科白であるがこの男、先程目を覚ましたばかりである。

しかしその様子からして、少しでも口を付けなければ話が前に進みそうにない。さてどうしたかと数秒思考した結果、イベントとしてこの席が設けられているのであれば、まあ問題ないだろうという結論に至った。

なみなみと酒が注がれた大関杯を受け取ると、その澄んだ水面をじつと見つめ、意を決してその表面を舐めるように僅かに口に含んだ。そして、口内に広がるその味に首を傾げる。

水のようなもの、とシュテンは言つたが、なるほどこれは水である。

というより、少し果汁のようなものを含めた、ほのかに甘味がある水であった。アルコールが喉を焼く感覚も、くらりと頭にくる香りもない。

恐らくではあるが、これは老若男女様々なプレイヤーが存在するこのゲームにおいて、未成年が口を付けても問題がないようにする為の処置なのだろう。データ上は酒類にカテゴライズされるが、その中身は全く別物。そんなアイテムなのだろう。

しかしシュテンたちにはボクがぐいぐいと酒を呷っているように見えているようで、二口目には眉間のしわが解け、三口目にはもう口元に笑みが戻っていた。

「良い飲みっぷりだ、これはますます素晴らしいのう」

こちらへしな垂れかかりながら、イバラキはますますご機嫌な様子である。シュテンにいたっては傍らに酒樽を置き、一合升で酒をすくいながら浴びるように飲んでいた。そのうち、酒樽を担いでそのまま飲みだしそうな勢いである。

いや、いやいや待ってほしい。すっかり酒の席として場が出来上がっているが、ボクは陰陽師のクエストをクリアする為にここを訪れたのである。さすがにそろそろ本題に入ってほしい。

「なんだ、このままなあなあに済ませられるかと思っていたが、さすがにそうは問屋が卸さぬか。仕方がないなあ」

がりがり頭を掻きながら、シュテンは酒樽の陰から何やら取り出してみせたそれは、サイコロが二つに、小さな壺ザルであった。この二つの道具を使った勝負事といえば、一つしかない。

「丁半博打、か」

「おお、知っておったか。まあ、流石に俺たち鬼と腕っぷしで勝負しろ、なんて無茶は言わんさ。であれば、残るは運否天賦、博打勝負しかあるまいよ」

そう言ってシュテンはいたずらっぽく笑い、また酒を呷るのであった。

お稲荷様と丁半博打

“ツボ”と呼ばれる茶碗に似た道具とサイコロを使い、その名の通り丁か半かを予想するギャンブル、それが丁半博打である。時代劇が好きな人であれば、劇中で目にしたこともあるのではないだろうか。正面にさらし姿のやくざ者が座り、向かいに座った客たちが丁だ半だと言いながら木の札を縦やら横やらに置くあれである。

ボクが初めてこれを知ったのも時代劇で、盲目の男がやくざ連中に大立ち回りを演じていたのがとても印象的であった。

ルールとしてはとてもシンプルで、ツボにサイコロを入れて振り、偶数であれば丁、奇数ならば半に賭けるだけである。実際には色々手順があるのだが、客側としては上記の事さえ覚えていればまあ問題ないだろう。

「それじゃあ、振らせて貰うぜ」

盆台代わりの酒樽の蓋を挟んだ向こう側で、シユテンがそう言つてツボにサイコロを放り込む。

酒も入り上機嫌なその様子に、ボクの隣でイバラキがため息を吐いた。

「ほんと、この人の博打好きも困ったものだ。それも、負けたら山を出ていくだなんて、そんな事を一人で勝手に決めてしまつて、全く。

妾はもう知らんぞおー」

ちなみにこの賭け事で丁と半が出る確率は二分の一。つまり適当に張ったとしても、五割の確率で勝つことが出来る。そんな勝負に、果たして自身の進退を決めるような事を簡単に賭けるだろうか。

普通であれば、まずイカサマを疑う。サイコロに細工をしたりだとか、玄人であればツボの中のサイコロの目を操るなんて芸当も可能だろう。

だが、ボクは真つ先にその可能性を排除した。

交わした言葉は少ないが、こと勝負事において、このシユテンという男はそんな小細工は使わない。そんな確信があった。

どうでもいいのだ。たとえ賽の目一つでその身を滅ぼしたとしても、この男にとってはそれすら酒の肴、笑い話にしかないのだ。それは極めて刹那的、快楽主義的な生き方であるが、それこそがシュテンという鬼の生き様なのだろう。

短いやり取りの中でそう確信できる程度には、ボクは目の前のこの男を信頼していた。なんとも不思議な男である。

「入ります」

宣言の後、サイコロを入れたツボが盆台の上に置かれる。シュテンはツボを三度ほど前後させた後、その鋭い瞳をこちらへと向けた。

「さあ、丁か、半か」

「丁」

間髪入れずそう答える。隣でイバラキの息を呑む音が聞こえた。

正直に言つて、こんなもの考えるだけ無駄なのだ。確率は五分と五分、イカサマなどの小細工もなし。であれば、じっくりと考えたところでツボが透けて見える訳でもなし、即断即決こそが最善。ちなみに言い忘れていたが、この博打、ボクが負けた場合は即座に首が飛ぶ。

まあプレイヤーであるボクは首が飛ぼうが身体が千々に砕けようが、死に戻りすれば何事もなく復活するのでリスクという程ではないのだが、それを考慮してもこの即答は予想外であつたらしい。イバラキはおろか、この博打を吹っかけてきたシュテン自身も目を丸くして驚いている。

一つ、二つ、きっかり三拍の後、堰を切ったかのようなシュテンの笑い声が部屋中を震わせた。

「くは、くはは、おま、お前、タマモと言ったか？　タマモよ、お前は本当に素晴らしい女だな、うむ、イバラキの次によい女だ」

褒められて悪い気はしないが、さりげなく惚気るのはやめて頂きたい。

対してイバラキは得意顔で、さも当然だとばかりに鼻を鳴らした。頬が僅かに朱に染まっているのは、気のせいではないだろう。

シュテンはそうしてしばらく腹を抱えて笑っていたが、やがてひい

ひいと息を整えると、未だ震える手をツボへと伸ばした。

そして露になった賽の目は一と、一。つまり、ピンゾロの丁。

その目を見て、今度こそシュテンは腹を抱えてひっくり返る。それと同時に、頬をますます赤くしたイバラキのしなやかな手が頬に添えられ、じつとりと熱をもった吐息が頬を撫でた。

「ああ、嗚呼、いいなあ。賢しく、美しく、そして豪胆でもある。これで惚れぬ者がこの世におるだろうか」

どこか官能的な雰囲気を感じ始めたイバラキに、ボクは全身が粟立つのを感じた。

尾は七本全てが毛を逆立てて倍ほどの大きさになり、背中に氷柱でも突っ込まれたような悪寒が走る。思考にノイズが走り、身体の末端から感覚が鈍くなっていく。それと同時に、胸の奥から形容しがたい感情がせり上がってくるのを実感する。

おぞましい、吐き気を催す程のそれが全身を支配する直前、部屋に小さく音が響いた。

鉄を打つ音に似たそれを耳に入れた瞬間、イバラキは顔を真っ青にして、脅かされた猫のようにその場から飛び退く。何事かと音の方へ目をやると、そこには修羅の姿があった。

射殺するような鋭く暗い瞳、きつく結ばれた口元に先程までの呑気さは欠片もなく、腰だめに構えた大太刀は既に鯉口が切られており、先程の音は鯉口を切った音なのだとそこでようやく気が付いた。

「イバラキ、戯れが過ぎるぞ。タマモは俺の客人であり、そして今我が友となった。それを外道で穢すというなら、俺はお前のその美しい首を刎ねねばならん」

「す、すまなかった、許しておくれシュテン」
なんとも信じられない光景である。

あの、羅城門でボクたちを圧倒したあの女傑が、あのイバラキが、まるで年若い娘のように涙を浮かべながら、^{すが}縋るように男の袖を握りしめている。

それが功を奏したのか、シュテンはその身に纏っていた剣呑な雰囲気のため息と共に霧散させると、大太刀を収めイバラキの肩を叩い

た。

「イバラキよ、許しを請うのは俺ではないだろう」

シュテンがこちらへと目を向けつつそう言えば、縋りついていたイバラキは涙を拭いボクの前までやってくると、しずしずと床に手を着き、頭を下げた。

「すまなかった。妾としたことが我欲に吞まれ、我を忘れてしまった」

強大な力を持つ彼女とは思えぬその姿にはっとする。

平時通りの冷静さを取り戻し、ようやく指示通りに動くようになった手足を使つて彼女の元まで行くと、ボクはその手にそつと触れた。「いや、気にしないでくれ。いや、その悪癖については存分に気にして欲しいのだが、先程の一件に関してはもう気にしないでくれ」

彼女が、イバラキというNPCがそうあれかしと作り出されたのは重々承知しているし、彼女がそれに抗えないのも理解している。そして、彼女がああして動いたのは、このイベントにおいて必然だったのだろう。

ああして強引な点は多々あり、暴走することも一度や二度ではないのだろうけれど、彼女自身はそう悪質な人物ではないのだ。おそらくは。

そんな事を考えていたのが災いしたのか、ボクは顔を上げた彼女のその表情に、まさに心の間隙を突かれる事となった。

花が咲いたような、良くも悪くも純であるが故の、純粋な微笑み。

母のような慈愛、温かさ、優しさ、柔らかさ、美しさ、強さを含んだその笑みに、ボクの心は刹那の間、真つ白になった。目を奪われるとは、まさしくこういう事を言うのであろう。

ボクには、まだ小娘でしかないボクには真似できない表情。僅かな憧れ。それは、ボクがクズノハさんに対し度々抱いている感情に似ていた。

「どうだ、良い女だろう」

夢うつつであつたボクの思考を常世へと引き戻したのは、シュテンのそんな、からかう様な声であつた。見れば、当のイバラキもしたり顔を浮かべているではないか。

どこからどこまでが芝居だったのかと、ボクはいたたまれなくなつてそつぽを向いた。二人の鬼が笑う。さて、とシユテンが膝を叩いた。

「ではでは、腹がよじれる程笑つたところで、約束を果たすのでしょうか」

よいこらしよ、と大太刀を杖代わりに立ちあがると、彼はおもむろにそう言う。

イバラキが寄り添うように並び、その丸太のような腕にそつと自身の腕を絡めた。

「博打はタマモの勝ち。ならば妾たちは約束通り、この山を去ろう」
「都にももう手は出さん。まあ、貯め込んだ財宝や酒は貰っていくがな」

イバラキが懷から小刀を取り出しシユテンに手渡せば、彼はそれを抜き放ち、束ねられた自身の黒い髪へとさつと走らせる。小刀の切れ味が良かったのか、なんら抵抗なく断ち切られたその髪の束を、シユテンはぐいと差し出してきた。

「これは？」

「我々を討つた証として、ヨリミツという男にこれを渡すといい。まああの男ならば、我々が生きていることなどすぐに勘付くであろうが、事情を話せば褒美ぐらいは寄こすだろう」

ともすれば、やんごとないお方の顔でも拝めるかもしれんぞ。

そう言い残し、後ろ手を振りながら彼らは山から去っていった。ちらりちらりと、最後まで名残惜しそうな視線を向けてはそれを諫められるイバラキの姿に苦笑いを浮かべつつ、ボクは渡されたそれに目を落とす。

その名も【酒呑童子の遺髪】。

鬼に横道はないという、あの啖呵はいったい何だったのかと声高に叫びたい、切に。

嘘八百もいいところ、白々しいにも程がある。

鬼を酢にして食う、なんて言葉があるが、あの鬼は煮ても焼いても食えそうにない。

さてさてそれでは、鬼の首をとったわけではないが、あの二人が気紛れを起こして戻ってこないうちに、ボクもさっさとここから去ろうと思う。

ここでの出来事を話せば、モミジたちはどんな顔をするだろうか。そんな事を考えながら、ボクは来た道をまたのんびりと歩いている。

どこか遠くで、鬼の笑い声が聞こえた気がした。

お稲荷様とお殿様

街に戻った後で調べてみれば、シュテンが言っていたヨリミツなる人物とは、ジパングの君主に仕えている武将の一人であることがわかった。おそらくは、羅城門の一件でちらりと顔を合わせたあの男のことだろう。

セイメイ曰く、特に剣技に秀でた武人であるらしく、強大な魔物などが現れた際には共に戦ったこともあるのだとか。そのヨリミツという人物が相当な強者であることよりも、目の前のひよろりとした陰陽師が真面目に仕事をしていたことの方が驚きだったのだが、それは黙っておいた方がいいのだろう。

ともあれ、知り合いだというのなら話は早いと、早速セイメイに頼み、彼に文を飛ばしてもらった。

通常であればそれなりに時間がかかるのだろうが、そこは陰陽師、式神に命じればあつという間である。魔物退治よりも、配送業なんかを始めた方が儲かるのではないのだろうか。

そんな事を考えながら、セイメイと陰陽師の術についての話だったり、他愛のない世間話だったりをしていると、やがて先程セイメイが飛ばした式が戻ってきた。燕の姿に似せて切り取られた紙が、あたかも本物の燕のように庭先を旋回し、ふわりと縁側へと滑り落ちる。そうして解けるようにして燕の姿が崩れていくと、そこには一通の手紙だけが残った。

「ふむ、なるほどなるほど」

それに目を通し、セイメイがさりと顎を撫でる。

そしておもむろに立ちあがり、身の回りの世話をさせている式神を一体呼びつけると、どこかに出かけるのか何やら身支度を始めた。

「今は城内でお勤めの最中であるので、用があるならばそちらから出向かれよ、という事らしい」

「それはまた、ご苦労さま」

ボクがそう言うと、セイメイは烏帽子を頭に乘せながら、口をへの

字に曲げて目を細めた。

何を言いたいかはだいたい察せるが、かなり面倒な事になる予感があるので、ここはあえて目をそらしゆらりゆらりと尻尾でも振ってみる。その尻尾の向こうから、じとりとした視線が容赦なく浴びせかけられた。そしてため息。

「わかったよ、ボクも一緒に行くよ。あそこ、なんだか堅苦しい感じがして苦手なのだけれど」

実際に城内に入ったことはないが、付近には帯刀したお侍さんが見回りをしていたりするし、少し前にお城を見ようと近くに寄った時には、何故だかきつく睨みつけられてしまい何とも居心地が悪かった記憶がある。

まあ、この男はこう見えて名の知れた陰陽師であるし、共に訪れれば警ら中のお侍さんの対応もいくらかは柔らかくなるだろう。そんな事を考えながら、ボクは僅かに軽くなった腰をあげる。

「ゆこう」

「ゆこう」

そういうことになった。

と、その時のボクはてつきり徒歩で城へ向かうことになるのだろうと思っていたのだが、屋敷から出た時点でそれは間違いであったと気づかされる事となった。

セイメイの式神によつて屋敷の表に用意されていたのは、四角い屋形に大きな車輪を付けた、いわゆる牛車と呼ばれるものだ。屋形の前方には黒毛の牛が一頭繋がれ、頭上で髪を纏めた美しい少年が一人、牛にかけた縄を握り、静かに目を伏せている。

思えばこのぐうたらを絵にかいたような男が、わざわざ自分の足で歩いていく、なんていう面倒な手段を選ぶわけがない。おおかたこの牛車も、牛も、童子も何もかもが式神なのだろう。まったくもって、技術の使い方を大きく間違えている。

まあ、出不精という部分ではシンパシーを感じない訳ではない、というよりもぐうたらだなんだとお前が言うなと世間の方々から総ツツコミを受けるであろうボクであるので、用意してくれているとい

うのなら、甘んじてそれに乗じようではないか。牛車に乗る機会なんてそうそうないであろうし。

そんなこんなで、今はゆつたりと進む牛車に揺られながら道中を楽しんでいたのだが、そこで不意に、ボクの向かいで共に揺られていたセイメイがむつと眉間にしわを寄せた。

「そうだ、そうであつたよ。お前は七尾であつたなあ」

「悪かったね、暑苦しくて」

彼の誤算は、同乗するボクがレベル七十、つまりは尾を七本持った妖狐族であつたこと。

ただでさえ、二人座れば膝がぶつかりそうな車中である。背後に立派な尻尾を、それも七本も引つ付けたボクが入れば、それはもう窮屈なことこの上ない状態であつた。なるべく纏めたり丸めたりなどして納まりが良いようにはしているのだが、縮んだり折り畳んだり出来るわけでもなく、どうしても場所はとってしまふ。

「母上もそうだが、妖狐族とは何とも融通の利かぬものなのだな。力が増せば増すほど、尾の数が増えるとは」

そんな狭い車内であつて、そんな風に悪態を吐きながらもボクに降りろと言わないあたり、そしてさりげなく身の置き場所を調整し、こちらが窮屈にならないよう配慮しているあたり、やはり九尾である母、クズノハさんの息子だけあつて慣れているのだと感心する。

「そも、強大となった妖力を制御するためのものだというが、同じ妖力を扱うものであつても、鬼族や、いずこかの山奥に住むという天狗族なる種族は角も伸びぬし翼も増えぬ。なんとも面妖なことだ」

たしかに、妖狐族——というよりも、妖怪というカテゴリーにおいて、長く生きて力が増すのと共に尾の数が増えるというのは、狐のほかに猫ぐらいしか聞いたことがない。その猫自体、猫又という名の通り尻尾が二又に分かれているだけで、増えたというには少し疑問が残る。見てくれだけは確かに増えているのだろうが、根っこは一本なのだ。増えたというより、裂けた、分かれたといった方が正しい。

さらに狐の場合は、九尾まで至った後、それ以上長生きしたり力を付けると今度は逆に尻尾の数が減っていくというのだから、本当に不

思議である。

「まあ、別の物に化ける事が出来れば尻尾も邪魔にならないのだろうけれど」

それこそ物語に登場する化け狐のように美女の姿になってしまえば、この尻尾も一時的にはあるが隠すこともできるだろう。尤も、このゲームにおける妖狐族にはそういった変身系のスキルは実装されておらず、そんなお遊び系のスキルを実装する暇があるのなら、もっと便利なスキルを実装してほしいものであるが。

「ほう、妖狐族とはそういった術も使えるのか」

ボクがぼつりと零した一言に、セイメイが食いついた。

「いや、そんな術は聞いたことがないし、少なくともボクには無理だ」
そう言うのと、セイメイはまるで肩透かしを食らったかのように息を吐いた。いやいや、そんな術があるのなら、貴女の母君であるクスノハさんが使っていない訳がないだろうに。

ただでさえ目立つ人であるし、あの悪戯好きな性格である。姿を変えられるようなスキルがあれば、それはもうそれを使って人を好きなだけからかったりするだろう。

と、そんな風な事を言ってみれば、セイメイは顎に手を添えううむ、と唸った。

「確かに、母上が何者かに化けたというのは聞いたことがない。しかしあれほど力を持った妖狐族というのは母上以外には知らぬし、そうだな、また会った時にでも一度尋ねてみるか」

覚えたところで、そう使い勝手の良いものだとは思えないが。

いや、彼も母親に似て随分と悪戯好きなどころがあるし、もしかするとまた緑でもないことに使う気なのかもしれない。念の為、ボクもまたクスノハさんに確認しておこう。ボクのみならず、陰陽師を主に育てているプレイヤー全体の迷惑になりかねない。

そんな心配をよそに、ボクたち二人を乗せた牛車は無事に白塗りの城、ジパング城へと到着する。

セイメイに続いて牛車を降りると、門番であるらしい六尺棒を持った男がこちらへと頭を下げ、朗らかな笑みを浮かべた。以前、ボクが

ふらりと立ち寄った際にも見かけた男である。

以前とは随分違うその雰囲気不思議に思っていると、ふと男と目が合った。途端、男はぎよつとすると、きゅつと口をつぐみ、厳めしく眉間にしわを寄せてしまう。はて、どうしたことか。

その様子に、セイメイがくつくつと笑う。

「すまぬすまぬ、こやつは少し、いや人一倍女子が苦手だな。緊張のあまり、いつもこうなってしまうのだ」

「せ、セイメイ殿！」

額に汗を浮かべながら、男がセイメイに食って掛かった。

そういえば前に来たときは鬼姫装備であつたし、今装備している着物もそれと大差ないデザインのものである。性差の区別がつきにくいそれ以前の装備とは異なり、これははつきりとプレイヤーが女性であると思われるものだ。

そういう事であれば致し方ないのだが、なんとも難儀な性格をしているものである。

心底楽しそうに男をからかうセイメイと共に門を潜り、天守閣を目指す。城内は幾つかの曲輪くるわと呼ばれる区画で区切られており、すぐに天守閣へと入れるわけではないのだ。

防衛上の問題もあるのだろうけれど、これがなかなか大変な道のりで、坂道と階段がとにかく多く、道もやたら曲がりくねっている。セイメイがあまり乗り気でなかったのも納得である。ゲーム内ではともかく、リアルであれば絶対に途中で倒れ込んでしまうだろう。

ううむ、しかし、なんであろうか。建築様式自体は江戸時代のものをモデルにしているであろうお城の中を、平安時代の人物をモデルにしたキャラクターが歩くというのは随分と不思議な感じがするものである。

そうして十分程は歩いたのだろうか。ようやく天守閣の傍までたどり着いたボクたちを待っていたのは、セイメイと似たような烏帽子をかぶった袴姿の男だった。

腰には黒漆の太刀を差しており、全体的にがっちりとした身体つきをしている。

随分と前にちらりと見ただけではあったが、間違いない。羅城門でイバラキの左腕を切り落としたあの男、ヨリミツであった。

「いきなり式を飛ばしてくるので何事かと思ったぞ、セイメイよ」

仏頂面でそう言うヨリミツに、セイメイは薄く笑みを浮かべてみせた。

「久しいな、ヨリミツ。まあ、用があるのは私ではなく、この者の方であるのだが」

目配せされ、軽く頭を下げるボクをヨリミツはじつと見つめ、ああ、と声を漏らす。どうやら顔を覚えられていたようである。

「ほう、どこか見覚えがあるかと思つたが、羅城門にいた来訪者ではないか。なるほど込み入った話になりそうであるし、ひとまずは部屋へ案内しよう」

「それは助かる。もう足が棒のようなのだ」

「お前には言っておらん」

「相変わらず愛想のない男だ。そんな風だから女も寄り付かんのぞ」

「お前には言われたくない、少し黙っている」

案外。気心が知れる間柄なのだろうか。

慣れたようにセイメイをあしらう様子を見てそんな事を考えながら、ボクたちは長く伸びる廊下を進んでいく。
ふわりと、桜の花の香りがした。

お稻荷様とお殿様②

「ほう、シュテンの奴がこれを、とな？」

場所は変わり、ボクたちはヨリミツに案内されて城内のとある一室へとやってきていた。八畳ほどの、打ち付けられた板が剥き出しになった部屋だ。少し冷たいその床に座布団を三枚敷き、ボクの隣にはセイメイが座り、それと向き合う形でヨリミツが胡坐をかいている。

部屋に来て早々、ボクはヨリミツに【鬼の遺髪】を手渡し、事の次第をすべて話してしまった。

シュテンからは、鬼の二人はボクたちに討ち取られたと、そういう事にしておけと言われていたが、実際にこのヨリミツという男と向き合い、その瞳を見て確信した。この男に、嘘は通じない。

他人を信じない瞳、ではなく、それが嘘偽りであるかどうかを看破せしめる、力強く鋭い瞳。

シュテンはああ言ったが、この場でこの男に対し嘘を吐いたりしてしまえば、この男との間に信頼関係を築くことは二度と出来なくなるだろう。そんな予感があった。

故に、ボクは早々に、洗いざらい一切合切を彼に話した。セイメイから依頼を受け、友と共に山へと赴き、そこで二人に出会ったこと。シュテンとの丁半博打、その結果、そこからのやりとりに至るまで、その全てを。

ボクから受け取った【鬼の遺髪】を袖の中にしまい込むと、彼は神妙な顔で思考した後、二度手を打って人を呼びつける。そうしてやってきた家来らしき男に何やら言い含めると、佇まいを正しながら改めてこちらへと向き直った。

「首級は上げられずとも、勝負事においてあの鬼に黒星を付け、都から手を引くと言質をとったその功績は称賛すべきである。故にこの一件、もはや某の裁量を超えたものであると判断した」

それを聞いて笑みを漏らしたのはセイメイであった。

口元を少しばかり釣り上げながら、面白いものを見るかのように目

を細めている。

「ほう、これはまた、『鬼殺しのヨリミツ』が人を褒めるとは、珍しいこともあったものだ」

「たわけ。あの鬼共が如何に難物であるかは、某が一番よく知っておる。あの鬼が負けを認め、あろうことか己を討ったことにしろ、などと言わせたのだぞ。何とも口惜しいが、剣を振るう事しか出来ぬ某に同じ真似は出来ぬだろう」

不貞腐れるわけでもなく、そう言つてヨリミツはただただ静かに目を閉じた。

ボクとしてはそんな大それたことをしたつもりはなく、ただ彼との博打に勝っただけなのであるが、彼の様子を見る限り、どうやら思つていた以上に危ない橋を渡つていたようである。

と、そうしているうちに何やらどたばたと騒がしい足音が聞こえてきたかと思うと、先程やつて来た家来の男が血相を変え、転がり込むようにして部屋へと戻つてきた。何事かと立ちあがるヨリミツに、男は肩で息をしながら汗をぬぐいつつ口を開いた。

「ヨ、ヨリミツ殿、先程承つた話をヤマト様へお伝えしたのですが――」

「おお、お主が件の来訪者か」

家来の男が転がり込んできた襖の陰から喜色満面で現れたのは、赤い袴に虎柄の羽織を重ねた中年の男であつた。薄くあごひげを蓄えた彫りの深い顔立ちをしており、頬にある大きな切り傷の所為もあつてとても堅気の人間には見えないのだが、家来の男が平伏しているところから察するに相当な地位の人間であるらしい。

失礼があつてはいけないとボクも床に手を着き、頭を下げようとしたところで男に肩を掴まれた。

「うむ、礼を尽くそうとするその心意気、天晴れである。しかしその美しい顔^{かんばせ}を伏せてしまうのはあまりに惜しいのでな、そのまま樂にしてよいぞ」

「殿、そのようなことだから市井の者に侮られるのですぞ」

ボクの肩を叩き、その場にどかりと座り込んだ男に対し、ヨリミツ

が眉間の皺を深めながら言った。

「相変わらずの石頭だなあ、お前は。そんな事だから女子も寄り付かんのだぞ」

はて、どこかで聞いたような台詞である。

男は睨みつけるヨリミツの視線もどこ吹く風とぐると部屋を見渡すと、やがてセイメイの顔を見るや、おお、と声を漏らした。ずいといと袴の袖を擦りながらボクとセイメイの間に滑り込み、白い歯を覗かせてにやりと笑みを浮かべる。

「久しいなセイメイよ。相も変わらなうたらししておるのか？」

「はは、これは異なことを仰りますな。毎日額に汗し、民のため身を粉にしておりますれば、だらける等とてもとても」

ふふふ、はははと笑い合いながら、なんとも気安い感じで冗談を交わしている二人に、ヨリミツがまたため息を吐く。どうやらこの二人、顔を合わせる度にこのような感じらしい。

そうしてしばらく談笑する二人を眺めていると、やがて男が手を打ち、ボクへと向き直った。

「おつと、そういえばまだ名乗っておらんかったな、儂はヤマト。この城の主であり、この国を統べる王である」

お殿様、というには随分と気さくな人物ではあるが、堂々たるその風格はやはり王と呼ぶに相応しいもので、きりりと引き締められた顔つきには思わず気圧されそうな迫力があつた。

しかしその覇者たりえる雰囲気を纏っていたのも束の間、ヤマト陛下——NPCといえど、王族ともなれば相応の礼は必要だろうから敬称を付けるが——はふにやりとまた表情を緩ませると、先程と同じような人懐こい笑みを浮かべ、またヨリミツの逆鱗に触れるような事を言った。

「まあ、気楽にヤマトとでも呼んでくれ」

「殿、どうやらまた色々とお話をせねばならんようですね」

「おい、おいヨリミツ、堅苦しい事は言いつこなしだぞ」

「王たるもの、相応の立ち振る舞いというものがあると度々申し上げていた筈なのですが、お忘れになられたようですね」

心なしか、陛下と言葉を交わすたびにヨリミツのこめかみに浮かび上がる青筋の数が増えているように見える。成程、自由奔放なお殿様に振り回される忠臣、そんな関係性なのだろう。

肩をすくめ両手をあげる殿下に、ヨリミツが深々とため息を吐いた。

「やれやれ、殿といい姫様といい、何故こうも骨が折れる御方ばかりなのか」

「聞くところによると、かのフンダート国王は賢王と名高く、その娘であるカメリア姫は聖女と呼ばれ国民からも好かれているそうではないか。はは、儂ら親子とはえらい違いだ」

なんともリアクションに困るジョークである。

またこめかみに浮かぶ青筋の数を増やしながら、やるせない顔で眉間を揉み解すヨリミツの心中は察するに余りあるというところではあるが、残念ながら今のボクに彼の職場環境を改善する力はないするつもりもない。ボクは事なかれ主義なのだ。

「さて、それではヤマト陛下は、このタマモに何か御用でも？」

このままではヨリミツの説教が始まりそうだと察したのか、セイメイが薄ら笑みを浮かべつつそう口にする。その言葉にその御用というのを思い出したのか、ヤマト陛下ははつとすると懷から一枚の木札を取り出し、こちらへと差し出した。手に取って見てみれば、どうやら何かの手形らしい。

「まあ、この国におけるお主の身分を証明する、証書のようなものだ。もし通行に手形が必要になるような場所があれば、これを見せればだいたいはいれるようになる」

本人はこう何でもないように言っているが、わかりやすく変わったセイメイとヨリミツの顔色を見る限り、恐らくそう安い代物ではないのだろう。

「正直に言って、来訪者とはいえ一介の冒険者が持つには不相応なものではある。故に、常に肌身離さず、決して失わぬよう気を付けられることだ」

「これ、そう脅かすなヨリミツ。まあ、このような場であるからな、こ

れを正式な報酬とは言えぬのだが、そつちはセイメイが既に用意しているようだから楽しみにしておくといい」

「これはまた、陛下も人が悪い」

そうしてセイメイが取り出したのは、一枚の呪符であつた。表には騰蛇とうだの文字が刻まれ、所詮紙切れでしかないはずなのに、うねり荒れ狂う様な力を感じさせる。

受け取った呪符とセイメイとを見比べて、気が付けばまさかと口から漏らしていた。

「そのまさかで合っている。私が従える十二天将が一、騰蛇の札だ。まあ相応に暴れ馬ではあるが、お主であれば何とか手懐けることも可能であろう」

——陰陽師スキル、式神召喚【騰蛇】が使用可能になりました。

セイメイに言われ、システムメツセージに表示された一文を眺めながら、ボクは気分が高揚するのを自覚した。

かの陰陽師が使役していたといわれる、十二神将。所詮ゲームではあるのだが、そのうちの一体を今、自分は得ることが出来たのだ。えもしれぬ達成感に頬が緩んでしまいそうになるのは、至極当然の反応ともいえた。

「これはまた、セイメイにしては随分と買っておるようではないか」

ヤマト殿下がからかう様にそう言われ、しかしセイメイは薄く笑みを浮かべたまま目礼だけを返した。

と、その時である。廊下の奥の方から、何やらどたどたと足音が響いてきた。

さてはて、何やらデジャブを感じる出来事であるが、今度は何がやってきたのだろうか。

ぱしん、と襖を開き現れたのは、何とも美しい着物に身を包んだ、この世のものとは思えぬ美貌をもつ少女であつた。墨を垂らしたような艶のある長い黒髪に、透き通るような白い肌。短い眉毛の下には釣り目がちな大きな瞳があり、ぷっくりとした桜色の唇はとても瑞々しい。

ふわりと漂ってきた桜の花の香りに、廊下で感じた香りの元はこの

少女だったのかとここにきて得心が言った。

そして少女はその瞳でこちらをじっと見つめ、鈴を転がしたような声色で言の葉を紡ぐ。

「貴女、ちよつとツラ貸しなさいよ」

御転婆を通り越して、もはやスケバンの台詞である。

その人形のような容姿とは裏腹に、随分と荒っぽい性格の姫君であるようだ。

ともあれ、やはりというか何というか、予想通り面倒ごとに巻き込まれたボクは、その突き刺すような視線を浴びながらそつとため息を吐くのだった。

お稲荷様とお姫様

さて、聖女聖女と持てはやされるフンダート王国のカメリア姫であるが、それにはしつかりと理由がある。一つはその身に持つ強大な治癒の力。その力はあらゆる病魔を消し去り、どんな傷でも瞬く間に癒すという。そしてもう一つが清廉潔白を体現したかのようなその性格。人を疑わず、欲を持たず、弱きを助け強きを挫く。現代日本ではもはや絶滅危惧種以上に見なくなった性質の人間である。まあ、あくまでNPCではあるので、生きた人間というには語弊があるのだが。そして最後に、これは少し下品な話にはなるが、彼女が聖女と呼ばれる最大の要因は彼女自身の容姿にある。

腰まで伸びた白金の髪に白い肌、少し幼さが残るものの鼻筋の通った美しい顔立ち。そのうえ実に女性的な魅力に富んだ肉感的な身体つきをしているものだから、健全な男性諸君にはもうたまらないものなのだろう。その無垢な性格とのギャップが素晴らしいとは、始まりの街に店を構える某男性主人の言である。

なお、店主はその話をした後、ボクに何やら哀愁のまなざしを向けていたのだが、ボクは全く気にしていない。ボクにはあんな性的魅力なんてもものは必要ないのである。

それはともかく
閑話休題。

さてさて、突然かのお姫様の解説を挿み込んだわけだが、ここジパングのお姫様にもそういった二つ名が存在する。

その名もずばり、東国の至宝。

立てば芍薬座れば牡丹、歩く姿は百合の花、なんて言葉があるが、彼女が正しくそれに当てはまるだろう。

話によれば彼女を妻として娶りたいと恋文を寄越す者は後を絶たず、かつて国賓として王都フィーアに招かれた際には、彼女を一目見たいと国民が殺到し、夜が明けるまで王城の周りには松明の火が絶えなかったという逸話が残るほどである。

さてさてさて、ここまで聞けばとても素晴らしい姫君なのだと思う

れるかもしれないが、今まで話してきたそういった評判はあくまで国外での事。では国内ではどうなのかと問われれば、彼女の名を出せば誰しもがまず酸っぱい顔をすると言え、だいたい察してくれるだろうか。

傍若無人、傲慢無礼。

美しい花には棘があるとは言うが、彼女の場合は棘どころの話ではない。有刺鉄線、いや、モーニングスターである。甘い香りに誘われてふらふら近寄ってしまえば、ぶん殴られて大怪我を負う羽目になるだろう。

故に、ジパングの国民は彼女をこう呼ぶ。美しくも荒々しい、誇り高い竜が如き美姫、竜姫カグヤと。

そんな事を考えていると、初対面である筈のボクを、あろうことか自室らしき部屋に引きずり込んだ件の姫君は、荒々しく後ろ手に扉を閉めるとふん、と鼻を鳴らした。そして次にじろりとこちらをねめつけると、何やら品定めでもするようにボクの周りをぐるぐると回り、領きをひとつ。

「まあまあつてところね。父上はこんなのが趣味なのかしら」
なんだろう、そこはかとなく馬鹿にされた気がするのだが。

ちくりと針に刺されるような苛立ちをぐつとこらえ、畳の上に座り込んだ彼女を見やれば、麗しの姫君はじとりとこちらを見返した後、自分の向かい側をばしばしと叩いてみせた。

第一印象からなかなか強烈な彼女ではあるが、いったいボクに何の用があるというのだろうか。

「貴女、それなりに優秀な冒険者らしいじゃない」

「まあ、優秀かどうかはともかく、それなりに依頼は任せてもらっています」

「余計な謙遜は結構。実績があるのだから素直に認めておけばいいのよ。でないと、安く見られるわよ」

長い髪をかき上げながらそう口にする彼女の表情には自信が満ち溢れていて、きつと彼女は自身が東国の至宝だの、竜姫だのと呼ばれている事も決して不相応だとは思っていないのだろう。いや、彼女に

とつては他人からの評価など、さして気に掛けるほどの事でもないのかもしれない。

強い意志を宿す彼女の瞳に見つめられて、ボクは思わず身を固くした。

「ご忠告、痛み入ります」

「それと、その上っ面だけの態度も止めなさい。見ていて苛々するわ」
背中に冷や水を浴びせられたような気持ちであった。

まるでこちらの心を見透かしたようなその言葉に目を見開く。そうしてしばらくの間沈黙が流れ、やがてボクは溜息と共に口を開いた。

「二応、身分が身分だからそれ相応の対応をしていただけなのだけけれど、それが不愉快だと言うのなら改めさせてもらおうよ」

「それが本当の貴女？ 随分理屈っぽい話し方をするのね」

「好みではなかったかな？」

「いいえ、今の方が私は好きよ」

そこで初めて、彼女の顔に柔らかな笑顔が浮かんた。先程まではむっとした膨れっ面だった事もあり、その優しい気な表情にボクは一瞬目を奪われてしう。きよとんと呆けたボクを見て、彼女は頬を僅かに朱に染めて咳ばらいを一つし、気まずそうに視線を泳がせた。

「こ、こんな下らない雑談をする為に貴女を呼んだ訳じゃないわ。そろそろ本題に入らせてもらおうわよ」

高飛車な態度が目立つ彼女ではあるが、なかなか可愛らしい一面も持っているようである。

しかしその事について言及すると確実にご機嫌を損ねてしまいそうなので、吹き出しそうになる口元を袖で隠しながら頷くと、彼女は少しばかり潤んだ瞳でこちらを睨み付けながら言った。

「単刀直入に言うわ、貴女、私のものになりなさい」

びしりとこちらを指差しながらの発言に、どうしたものかと思考を巡らせる事三秒。顎に添えていた指を離すと、彼女も自身の発言の意味を理解したのか、首元からゆっくりと赤くなっていくのがよくわかった。

「すまない、同性愛についてはある程度理解しているが、流石に出会ってまだ間もない相手に対してそういった感情は――」

「違うわよ！ わかって言っているでしょう！」

無論である。

どこぞの鬼でもあるまいし、出会って早々愛の告白なんぞされてたまるものか。

顔を真っ赤にし、美しい髪を振り乱しながら詰め寄る彼女を眺めながら、美しくも誇り高き竜姫とはなんだったのかと、そんな事を思った。そして咳払い。

「私が言っているのは、私専属の陰陽師になりなさいと、そういう話よ！」

専属、つまりこのお姫様に仕えろという話なのかと思いきや、どうやらそうではないらしい。

現在のボク、というより職業に陰陽師を選択しているプレイヤーは形式上陰陽寮、つまりはギルドに所属している事になっているのだが、どうやらその所属先をギルドからカグヤ姫個人に変更しないか、というお誘いらしかった。

まあ陰陽寮自体はヤマト陛下の傘下にある組織であるので、実質下位組織から上位組織に移るだけのような気もするが。もしくは、個人タクシーから一躍社長令嬢の専属運転手に抜擢されたような心持ち、いや、これは少し違うか。

ともかく、話を聞いてみれば、陰陽師としての仕事自体はカグヤ姫から依頼されるものに限られるが、冒険者ギルドなどからの依頼は今まで通り受けても問題ないそうだ。つまりボクにとつてはあまりデメリットが無い魅力的な話なのだが、一国の姫ともなれば、それこそボクよりも優秀な人材なんて幾らでも雇えると思えるのだけけれど。

そう疑問に思い口に出してみると、彼女は途端に顔をしかめながら肩をすくめてみせた。

「実は最近、我こそを姫のお傍につて煩い陰陽師がいて、なまじ地位も実績もあるだけに父上もどうしたものか決めかねていたみたいなのよ」

まるで求婚を受けているかのような言い様であるが、あながち間違ってもいないのだろう。

高飛車で高圧的な性格はともかく、その容姿は紛れもなくジパング一の美しさである。少しでも彼女の近くに身を置き、あわよくば、なんて考える者が出てきても不思議ではない。

地位と実績がある者という事だが、一体何者なのだろうか。

「陰陽頭おんみょうのかみといえ、おおむね察してくれるかしら」

ああ、と思わず声が漏れた。

陰陽頭とはつまり陰陽寮のトップであり、ギルドというギルド長にあたる。そして現在陰陽頭に就いている男の名は「ドウマン」。そう、いつの日かセイメイが警告したあの男である。

これまでの職業クエストでも何度か顔を合わせていたりするのだが、なるほど彼が相手となれば苦虫をかみつぶしたような顔にもなるだろう。

まあ、なんというか、ただひたすらに不気味なのだ。

体格は平均的な日本人男性のそれであるのだが、どこか陰のある瞳、低い声でぼそと呟くように話す。仕事はしっかりとこなしており、部下からの信頼も厚いらしいのだが、あの舐めるような視線は忘れようがなく、どうにも信用できない男だったと記憶している。

「つまり、ボクがここで誘いを断れば――」

「あの陰険な男が私の専属になる可能性が高い。想像したくもないけどね」

まああの男を傍に置くだなんて、それこそ心労が絶えないだろうに、ボクであれば絶対にお断りしたい話である。

「そういう事であれば尚の事、このお話、謹んでお受けさせて頂く」

両手を着き深く頭を下げると、カグヤ姫はほっと胸を撫で下ろして深く息を吐いた。どうやら相当頭を悩ませていたらしい。

「しかし、もしこれでボクが断っていたらどうするつもりだったんだい?」

「あら、私がそんな事を許すと思っていたの? どんな手を使ってても、首を縦に振らせるつもりだったに決まってるじゃない」

ああでも、その為に色々と用意していたのに、全部無駄になってしまったわ。

あっけらかんとそう言うお姫様に、素直に頷いておいて本当によかったと、ボクは顔を青ざめさせながらそう思うのだった。

お稲荷様と案内人

地下深く、水滴が落ちる音さえもひと際大きく響き渡る石造りの迷宮に、耳をつんざく鉄の音が鳴り響いた。そしてそれを追うかのようにして爆発音が轟き、余りの衝撃に身を震わせた天井の隙間から砂埃が零れ落ちる。高レベルの魔法使いが放った高威力の魔法、エクスプロージョンをその身に浴びて、ヴェールを纏う人型の何者かは形容しがたい叫び声をあげた。

「■■■■■■……！」

「いいぞ、敵の体力残り三割！」

「最終フェーズ来ます！ ヒーラーは回復厚めで！」

前線で戦うパーティメンバーが声をあげ、敵が振るう触手の一撃を受け止める。

ここは先の大型アップデートで追加された高難易度ダンジョン、銀の地下迷宮。

何故そんなところに潜っているのかといえば、ここのボスを倒した際に手に入る強力な武器の入手、そしてクリア後に行くことが出来るという新エリアの砂漠地帯にちよつとした野暮用があるのだ。

新エリアの解放条件に高難易度ダンジョンのクリアなんてものを入れるなど、それはもうボク以外のプレイヤーからも非難が相次いだらしいのだが、残念ながらこの件に関し調整が入るとしてもそれはもう少し先の話になるだろう。

それまでのんびり待ってみるのも手の一つではあるのだが、丁度モミジたちからクリアを目標に頑張ってみよう、というお誘いがあったので乗ってみた次第だ。

ちなみにメンバーはモミジたち三人の他、タンクとして【暁の騎士団】に所属するチャーハンさん、いつぞやか以来の登場となる魔法使いのイナバさん、近接職にはこれまた久しぶりになるワーキャットのムギ、治療^{ヒーラー}士^ラの人はチャーハンさんと同じ【暁の騎士団】のメンバーでテツシンという名前の男性プレイヤーが加わっている。

ローブを肩から羽織り、鍛え上げられた筋肉がなんとも目を引く拳闘士さながらの外見であるが、これでもれっきとした治癒術士なのである。

残り体力が残り二割を切った時点でボスが周囲に広げていた触手を全てその身に納め、まるで水風船のように身体を膨らませた。全方位を薙ぎ払う、高威力の範囲攻撃を放つ予備動作だ。

「範囲攻撃来るぞ、全員タンクの後ろに退避！」

言うが早いか、チャーハンさんの声と同時に前衛職の二人が素早く後退し、その前を塞ぐような形でタンク職の二人が陣形を組んだ。さらにその後ろでは治癒術士が既に回復魔法の詠唱を開始している。そしてボクはそれぞれの丁度中間の位置に陣取り、補助魔法の詠唱を開始した。

前の前に式盤があらわれ、いつものように中央部がくると回り出す。【六壬神課】^{りくじんしんか}で引き当てた効果は物理防御力上昇、狙い通りの目である。

パーティメンバー全員にスキルの効果が付与された事を確認し、続いて妖術【塗壁】を発動。タンク二名の前方に防壁を展開する。

そうして最後に火力維持の為に【瞑想】を発動したところで、ボスがひと際大きく身震いしたかと思えば、膨れ上がった身体から無数の触手が、正しく怒涛の如き勢いで溢れ出した。

押し寄せる触手が【塗壁】で作られた防壁を粉碎した瞬間、タンク二名が防御スキル【ホーリランパート】を発動し、後方から補助魔法の【シールドオブイージス】が飛んでくる。両スキル共に、相手から受けるダメージを一定量カットする効果がある。

その名の如く輝く城壁が二人の前に展開され、触手の波と激突した。

一瞬の均衡、しかしこの見る者に嫌悪感を抱かせる肉の波は堅牢な城壁を呆気なく突破し、後ろで身構えていた二人へと容赦なく襲い掛かる。

それぞれがその巨大な盾、斧を用いてそれを受け止めるとまるで鐘を打つような重苦しい音が響き、肉の波が左右へと裂かれた。がりが

りと減少していく体力を、後方で準備していたモミジたち二人がすぐさま即死が免れる安全圏へと回復魔法で戻す。

僅か数秒の攻防ではあったが、防御スキルや回復魔法のタイミングが少しでも遅れてしまえば致命傷となりうる、それほどの攻撃であった。

また通常状態へ戻った敵に対し、次はこちらが攻勢へと転じる。

敵を挟み込むようにハヤトとチャーハンさんが陣取り、その隙間を縫うようにコタロウ、ムギの近接職が連続攻撃を決めていく。

そしてボクはといえば、敵から少し離れた位置で絶え間なく妖術などの遠隔攻撃を敢行していた。

とはいえ、安全圏から一方的に攻撃出来る温い難易度ではなく、時折飛んでくる敵からの触手攻撃や、ヴェールの下から放たれる直線^{極太ビーム}範囲攻撃を避けつつ、詠唱時間や【瞑想】の効果時間を考慮して動かなければならないので、割と忙しかったりする。

ちなみにこの極太ビーム攻撃であるが、どうやら陰陽師や魔法使いなどの遠隔アタッカーのみを狙ってくるようで、ボクとイナバさんはそれに他のメンバーを巻き込まないように微妙に立ち位置を調整している。

敵を中心に五時、十時にタンク、十二時一時に近接アタッカー、六時後方にヒーラー、そして八時方向に遠隔アタッカーといったような具合だ。

なので、先ほどの全体攻撃時にメンバー全員が集合する場面も実は何度か失敗していたりする。というよりもこの戦闘自体が実に五度目なのだ。

ギミックの理解に二度、そこから戦闘時の立ち回りを最適化するのにさらに二度全滅している。

流星に何度か日を変えての挑戦ではあるのだが、ここまで付き合ってくれているメンバーには本当に頭が上がらない。

「残り一割、削れー!」

「にやにやにやー! 掻っ捌いて、スルメイカにしてやるにやー!」

敵の体力は残り僅か数ドット。しかしこちらも左程余力を残して

いる訳ではなく、もう一度あの全体攻撃を出されると今度は回復や補助スキルが間に合わないかもしれない。

そして、そうした悪い考えは往々にして現実となるもので、敵はまたずるりずると触手を身体の中へと収め、ぶくぶくと膨れ上がり始める。それを見たメンバー全員がぞつとして、しかし次の瞬間には既に動き出していた。

ここで守りに入っていても間に合わない、ここで削り切ると、全身全霊をかけた捨て身の攻撃を敢行する。短剣が煌めき、拳が唸り、火球が、稲妻が飛び交った。

「いっけえーっ！」

そして、運命の瞬間は訪れる。

その身に詰め込んだ触手を弾けさせようと敵が身を震わせたその瞬間、ボクの背後から放たれた巨大の火の玉が敵の頭上で炸裂し、天井を焦がす程の火柱をあげた。

魔法使いが誇る高火力の火属性魔法【エクスプロージョン】である。残ったMPをきっちり使いきる大技を受け、かろうじて残っていた敵の体力バーが全損し、砕け散った。

「■■■■……」

膨れ上がったその身を縮め、項垂れるようにして膝をついた人型のナニカは、最後に何事かを呟いて光の粒へと変わり、崩れていく。

その場に残ったのは大きな宝箱が一つと静寂のみ。

大きく息を吐き、全身から力を抜いて苔むした天井を見上げる。

——終わった。

「や、やったー！」

杖を掲げ、勝鬨をあげたのはモミジであった。

ようやくの撃破に喜びもひとしおなのか、ムギと手を握り合って飛んだり跳ねたりしている。

ボクの隣で、今回のMVPともいえるイナバさんがぺたりと座り込んだ。長く長く息を吐き、力の抜けたその目は少し潤んでいるようにも見えた。

「お疲れ様でしたー。いやー、意外とぎりぎりでしたね」

巨大な斧を背負い、額の汗を拭いながら歩み寄ってきたのはチャーハンさんである。

やはり【暁の騎士団】というトップ克蘭に属している者の圧があるのか、彼を見たイナバさんは背筋を、ついでにその兎の耳もぴんと伸ばし、目に見えて緊張してしまっていた。ボクからすればいくらトップ克蘭のプレイヤーとはいえ、ボクたちと何ら変わりない一ユーザーなのだからそれほど緊張しなくてもいいと思うのだけれど。そんな事を思いながら、差し出されたチャーハンさんの手を握った。

「いや、こんなものじゃないかな？　暁の騎士団チャーハンさんの所が特別なのだと思うよ」

「いやいや、みんなうちの一軍並みに動けてましたって。もう二、三週もやればだいぶ余裕出るんじゃないですか？」

そう言われたので周りのみんなに目配せしてみれば、モミジは両手で大きくバツ印を作り、ハヤトとコタロウは素早く目を逸らし、イナバさんに至っては今にも泣きだしそうな顔をしたので謹んで辞退させてもらった。乗り気なのはムギだけである。彼女はバトルジャンキーか何かなのだろうか。

「いや、この手のボスとか大好きなんだにやー」

乗り気な理由を尋ねてみれば、そんな答えが返ってきた。TPRGなどもよく遊んでいるらしい。

というのも、今回のボスモンスターの名前は【ウムル・アト・ファントム】といい、その姿形と『銀の地下迷宮』というこのダンジョンの名称からして、まず元ネタはあの神話だろう。

人間であり非人間であり、脊椎動物であり無脊椎動物であり、意志をもつこともありもたないこともあり、動物であり植物。

不変かつ無限である現実。

外なる神。

最強の神性、その化身であり案内人。

香り立つクトウルフの気配に、目の前の猫人は興奮冷めやらぬ様子であった。

「まあ、何はともあれお疲れさん。　噂のお稲荷様とパーティが組めて良かったよ」

そう言つて丸くなった頭をつるりと撫でるテツシンさんに、思わず苦笑が漏れる。

近くで見ればますますもつて、治癒術士というよりは拳闘士、いや、僧兵モンクといった方がしっくりくる出で立ちであつた。見事に割れた腹筋が眩しい。

しかし、何度聞いてもそのお稲荷様という愛称は慣れないものである。

少し面映ゆい気持ちになりながら尻尾を揺らし、ボクはテツシンさんを見上げた。

「いや、それは周囲が面白がつて呼び始めた愛称であつて、ボク自身は別に特別な人間でもなんでもないのだけれど。こちらこそ、わざわざ付き合つて頂いて申し訳ない」

何せこのテツシンさんとチャーハンさんは、【暁の騎士団】のメンバーと共にこのダンジョンを何度も攻略しているクリア経験者である。今回は彼らの空いた時間をわざわざこちらに割いてもらつて、助っ人として参加してもらっているのだ。

そうして差し出された手をがっちり握れば、隣でチャーハンさんがはつとなつて言つた。

「おっと、そろそろ宝箱開けちゃわないとまずいな。たしかあれつて時間制限あつたし」

なるほど、先程からハヤトが宝箱の傍でそわそわしていたのはそういう理由か。かくいうボクもすっかり忘れていた。

今にも宝箱に手をかけそうなハヤトへと駆け寄つていくプレイヤーたちを眺めながら、ボクは静かに笑みを漏らすのであつた。

お稲荷様と第一の門

慌てて駆け寄ったチャーハンさんと共にハヤトたちが宝箱を開けると、中には幾つかの武器と銀色の鍵が収められていた。鍵の方は全てで六本、これは今回が初クリアとなるプレイヤーの人数に応じた数がドロップするようだ。

【銀の鍵】

奇妙な模様が刻まれた銀の鍵。
連なる時空への門を開く。

アイテムの説明としてはこういったところである。

連なる時空というのが凄く気になる部分ではあるが、まさか旧支配者云々だの、S A N 値直葬な空間に飛ばされるわけではあるまい。

気になったのでチャーハンさんに尋ねてみれば、まだそういった情報が入っておらず、あくまで新エリアへと向かう為に使用するだけらしい。

そして気になる武器であるが、運が良い事に陰陽師用の物も一つ入っていた。

【五芒星の妖扇】

五芒星が描かれた大きな扇。

中央に描かれた目玉には魔力を高める効果がある。

装備してみればなるほど、これまでにないその性能の高さに驚かされる。

デザインの不気味さに目をつぶれば、たしかに現時点では最高の品といえるだろう。

ちなみに武器は扇、両手剣、魔導書の三つがドロップしており、両手剣は適正があるチャーハンさんかハヤトのどちらか、という話をしたところで、実はチャーハンさんはすでに一本入手していたらしく自然とハヤトが入手する流れとなった。

お次は魔導書であるが、これは当然魔法使いのイナバさんの元へ。不気味なデザインに当人は相当困惑していたが、まあドロップした

ボスがボスであるので致し方ない。ちなみにアイテム名は「ナコト・マナスクリプト」である。本当にプレイヤーに持たせて大丈夫な代物なのだろうか。

「さて、それじゃあお待ちかねの新エリアへ行ってみますか」

そうして戦利品の分配が終わったところで、チャーハンさんがボス部屋の奥へと目配せする。

そこには不思議な光を放つ、白銀の巨大な門が佇んでいた。

その中心にはローマ数字でIと刻まれた大きな赤い宝石がはめ込まれ、そこから外側へと無数の蔦のようなものが広がっている。

しかしその門は壁からは離れた場所に佇んでおり、その外見も相まって門としての役割を果たせそうにないように見える。恐らくは、この門自体に何かしらの仕掛けがあるのだろう。

「その名も第一の門、新エリアへと繋がる唯一の場所っすね」

「第一の門って事は、二つ目もあるのか？」

「いや、恐らく第二の門は無いだろう。もしあるとすれば――」

「窮極の門！ にゃはーテンション上がってきたー！」

耳と尻尾をぴーんと立たせ、大きな瞳を爛々と輝かせながらムギが扉へと駆け寄っていく。

そんな彼女を目で追いながら、ボクの隣でモミジがこてんと首を傾げた。

「窮極の門って何？」

「あー、まあ、とある神話に出てくる、とある神様がいる場所に繋がっている門の事だよ」

この分だとクトゥルフ神話に関しては全く知らないのだろうと、かなり噛み砕いた説明をすると彼女はなるほどと手を打って大きく頷いてみせた。どうやら納得したようである。

実際には色々ともんでもない神様であるし、その神話自体とてつもなく物騒なものではあるのだけれど、まあ流石にこの手のゲームで旧支配者だの何だのを再現したりはしないだろう、きつと。

やがて門の前へと全員が集合すると、チャーハンさんがメインメニューを操作し、銀の鍵をアイテム化させる。先程ボクたちが手に入

れた物と全く同じ物だ。

「門を使うには銀の鍵をこうやって門の前にかざすだけでオツケーです。最初はちよつとしたイベントが発生して時間がかかりますけど、移動した先に【来訪者の石碑】があるんで次からはちゃちゃつと行けますよ」

流石に新エリアで死に戻りしてしまった際の対策は講じられていたようである。

まあそうでなければもう一度このダンジョンの最深部まで潜らなくてはいけないので、当然といえば当然であるのだが。

そこまで説明すると彼は手にしていた銀の鍵をインベントリに収め、代わりにとあるアイテムを取り出した。淡い光を放つ純白の羽、一度訪れた街ならどこからでも移動が可能な消費アイテム、【導きのつばさ】である。

それを見て大体の事情を理解すると、申し訳なさそうに苦笑いを浮かべるチャーハンさんに首を振ってみせた。

「すみません、俺たちはここで失礼しますね」

「いや、クランとしての活動もあるだろうに付き合わせてしまつて、こちらこそ申し訳ない」

「いやいや、こつちも色々勉強になった。やっぱりたまには身内以外ともやつてみるもんだな」

にかつと笑い、力強くサムズアップしてみせるテツシンを見て、傍にいたコタロウがなんとも言えないような表情を浮かべた。

「テツシンさん、本当にメイン職治療士で行くんスか？ 絶対^{グラップラー}拳闘士の方が似合つてると思うんスけど……」

「ははは、このアバターでヒーラーをやるから面白いんじゃないか！ 分厚い筋肉に覆われた胸を張りながら、テツシンさんがコタロウの肩をばしばしと叩く。」

仲間を癒す治療士としては中々のギャップではあるが、それこそがMMOの醍醐味の一つであるし、その点でいけば彼はこのゲームを誰よりも楽しんでいると言えるのだろう。

「それじゃあこの辺で失礼します。また機会があれば、是非声をかけ

て下さい」

そう言つて【導きのつばさ】を使用し、表示されたインターフェースを操作するとチャーハンさんとテツシンさんはやがて柔らかな光に包まれ、光の玉となつて天井をすり抜けて飛び去つていった。彼らがアイテムを使用する際、何かの手違いで天井に頭をぶつけないかと期待していたのだが、どうやらそんなアクシデントは起きなかつたようである。

「それじゃあ、僕達も行こうか」

「おお、流石に気分が高揚するにや」

しかしこれから砂漠地帯に向かうというのにボクは相も変わらず着物姿であるし、モミジとイナバさんはローブ、ハヤトは重厚な鎧に身を包んでいる。そんな装備で大丈夫か、と思わず疑問に思つてしまふプレイヤーもいるだろう。

なるほど確かに、砂漠なんていう、明らかに気温が高いであろう場所に行くには適さないように見える。しかしそこはそれ、ゲームの世界であるので、このようなアイテムが存在する。

【耐熱のお守り】

所有者を熱気から守る魔法のお守り。

インベントリに入れておくだけで効果を発揮する。

遮断するのは熱のみであり、炎を防ぐ訳ではないので注意。

ちなみにこのアイテムは王都《フィーア》やジパングの道具屋で購入出来るので、これから挑もうとするプレイヤーは事前に購入しておくことをお勧めする。

さてそんな蛇足もほどほどに、ボクたちはインベントリから【銀の鍵】を取り出すと、静かに佇む門の前へと歩み寄った。

「さて、じゃあ誰から行く？」

「はいはい！ 私いきまーす！」

ハヤトの問いかけに元気いっぱい声をあげ、手を振り答えたのはやはりムギであった。

彼女は喜色満面といった風スキップしながら先頭へと躍り出ると、高々と【銀の鍵】を掲げた。その直後、【銀の鍵】が眩い光を放ち、

それと呼応するように目の前の門が淡い光を纏い始める。

ゆらりと、目の前の光景が波打つ。どこからともなくしわがれた老人のような、妖しい女のような、幼い子どものような、穏やかな紳士のような、幾重にも重なり、ノイズが走る不気味な声が響いた。

——汝、至る道へと進む事を望むか？

頭の中に直接響く様なその声に、背後のイナバさんが小さく悲鳴をあげた。

「な、なにこれ、イベント……?」

「成程、パーティを組んでいれば、誰かがフラグを立てるだけで全員同時に発生するのか」

「なんだー、SAN値チェックかー!」

「流石に100面ダイスは勘弁してほしいところだね」

まあ冗談はともかく、声と同時に目の前に現れたインターフェースを確認すると、そこには先程の質問と、イエスノーのボタンがあった。恐らくは、ここでイエスを選択すると新エリアの砂漠地帯に移動させられるのだろう。さてどうするか。

移動先は同じだろうし、さっさとイエスを選択して移動してしまっても良さそうなのだが、やはりこういったものは皆で同時に押した方がいいのだろうか。

そんな事を考えていると、再びイナバさんの悲鳴が響いた。

何事かと視線を正面に戻すと、そこには淡い光に包まれるムギの姿があった。どうやらこの猫耳少女、我慢できずにボタンを押してしまっただけらしい。

エフェクトは「導きのつばさ」に類似しているが、あちらが光の玉へと置き換えられたのに対し、こちらは身体の末端から光の粒子へと変わり、崩れるようにしてその形を失っていく。まるで死に戻りするようなエフェクトであるが、ムギの体力ゲージは数ミリも減少していないのでその心配はない。

とはいえ、なかなか悪趣味な演出である。

「む、ムギさん!」

「おお、私、消えるのかにや……?」

「意外とノリノリじゃねえか」

コタロウの突っ込みも尤もである。少しぐらゐは動揺しているのではないかと心配した、数秒前の自分を全力で殴り飛ばしてやりたい。

ともあれ、これで特に危険も無い事がわかり安心したのか、消え去った彼女を追うようにして各々がイエスのボタンをタップしていく。

「おおー、なにこれ面白い！」

「あんまり暑くなけりやいいんだがな」

何故だか目を輝かせながらモミジが、ため息交じりにコタロウが光となつて消える。

「それじゃあ僕もお先に」

そう言つてハヤトが手を振り消え去つていくのを見届けて、ボクは背後のイナバさんへと目を向ける。どうやら先程の不気味な声が尾を引いているのか、彼女の指先は僅かに震えながら、イエスのボタンの前で静止していた。

「大丈夫だよ、ただエリアチェンジするだけだから。【導きのつばさ】と同じさ」

ちなみに光の玉となつて飛び去っていく【導きのつばさ】であるが、演出上ああなっているだけで、実際は発動した瞬間に視界が暗転し、数秒後には目的地の出入り口前に立っているの、目的地まで空中散歩を楽しんだり、といった遊び方は出来ないようになっている。

恐らくは今回も同様で、ちよつと目をつぶる程度の時間で新エリアへ行けるはずだ。

「うう、そ、そうですよねえ。ええい、女は度胸！ イナバ、いきまーす！」

彼女はそう言つて両手で頬を叩いて活を入れると、意を決してボタンを押す。

光に包まれ、最後までちやつかりボクの裾を掴んで離さなかった彼女が無事に転送されるのを見送ると、満を持してボクもイエスを選択する。

——汝、銀の鍵の門を超えるものよ、汝、彼の門へと至る資格を得たり

光に包まれ、視界が暗転する直前、どこか無機質で冷たい、そんな声を聞いた気がした。

お稲荷様と赤い砂漠

目を開けば、どうやら転移した先は洞窟の中らしかった。

開けたドーム状の空間には幾つも松明が置かれ、少し離れた所には出入り口らしき木製の扉も見える。

振り向いてみればあの白銀の門の姿は無く、代わりに「来訪者の石碑」がひっそりと佇んでいた。

「お待たせ。先程ぶりだね」

「はは、まああれから一分も経ってないけどね。モミジたちは先に外の様子を見に行ったよ」

ボクの到着を待っていたハヤトたちに手を振って応える。

彼の後ろではボクと同じく無事に転移を終えたムギさんが、革製の水筒を手に一息ついているところだった。ハヤトの言葉通り、他のメンバーは外に出ているらしい。

ひとまず【来訪者の石碑】へ登録を済ませると、ようやくボクたちも洞窟の外へと出る事となった。

はめ込んだだけの簡素な扉を開けば、強烈な日光が目を焼かんばかりに洞窟内へと差し込み、思わずボクは目を細める。

真っ白に染まる視界から浮かび上がる様に現れたのは、地平線の向こうまで赤茶色の砂漠が広がる幻想的な光景であった。

【耐熱のお守り】のおかげで照りつける日差しとは裏腹にさほど暑くは無く、だいたい二十五度から三十度といったところだろうか。実に快適である。

「あ、来た来た」

「タマモー、こっちだよー」

声がする方へと振り向いて見れば、すぐ傍にある砂丘の上に三人の姿はあった。

いつモンスターが襲い掛かってくるかもわからない新エリアで、なんとも大胆なことである。

そうして若干の呆れと共に三人の元へと向かうと、どうやらこの砂

丘は辺りでも一番大きなものであったらしく、ぐると辺り一面を見渡す事が出来た。

「やれやれ。三人とも、少し迂闊すぎやしないかな？」

「まあいいじゃねえか。見たところ襲ってきそうなモブもいねえし」

「それよりもタマモ、あれ見てあれ！」

まあ仮にモンスターに襲われて死に戻りしても、登録した【来訪者の石碑】を利用すればそう時間をかけずに戻ってくる事が出来るのだけれど。

目を輝かせるモミジが指さす方を見れば、その先には砂と同じ色をした建物の群れがあった。中には青色の丸い屋根を持った物や、巨大な宮殿らしき建物まで見える。

「あれってもしかしくなくても、街だよな？」

「どうやらそうみたいだね。あんまり歩かずに済みそうで助かったよ」

どうやら街は大きなオアシスを中心に広がっているらしく、砂漠の赤と湖の青、そして周囲を囲む木々の緑がなんとも美しいコントラストを生み出していた。

「この辺はアクティブのモンスターもいないようだし、今のうちに街まで向かうか」

周囲の探索を済ませ砂丘へと戻ってきたハヤトが、件のボスから入手した大剣を背中に納めながら言った。幸いにして街以外には砂丘しか見当たらない場所であるので、徒歩でもそう時間はかからないだろう。

「しかしまあ、なんというか」

そうしてじやりじやりと砂を踏み鳴らしながら街への道を進んでいると、不意に前を歩いていたコタロウが振り返り、何とも言えぬ苦い顔をした。

「見るだけで暑くなる面子だよなあ」

それ、完全にブーメランだと思うのだけれど。

目の前の毛玉、もといワーウルフ族に抗議の視線を送りつつそんな事を思う。

言ったところでせんなきことであるので口には出さないが、気のせいか背後の七尾がいつもより荒々しく振られている気がする。

「えー、それを言うならコタロウも充分暑苦しいよー」

そんな風に気を使っていたボクの努力を、隣を歩いていたモミジが見事に打ち砕いた。

なんだろう、心なしか周囲の気温が少し下がった気がする。

すぐ後ろを歩いていたイナバさんが、慌ててモミジの袖を引いた。

「も、モミジさん、それは言っちゃダメ！」

イナバさん、見事な自爆である。

それは、実は自分もそう思っていたけれど言うのを自重してしました、という自白に他ならない。

しかし身内以外の、それも年上に言われたのが効いたのか、コタロウはうっと声を詰まらせるとやがて気まずそうに咳ばらいを一つ、再び街の方へと身体を向けた。

これは好機である。

「まあ、一番暑苦しいのはボクだろうけれどね。申し訳ないね、毛皮が多くて」

尻尾を一つ抱えながらそんな事を言ってみれば、面白いようにコタロウの肩が跳ね、冷や汗でも流しそうな表情を浮かべながら横目でこちらの様子を伺ってきた。

そんな、まさしく恐る恐るといった彼の様子に、ボクは思わず吹き出してしまう。

咄嗟に袖で口元を隠しくつくつと笑っていると、どうやらからかわれていた事に気が付いたようで、コタロウは大きいため息を吐き、肩を落とした。

「もう勘弁してくれよ。タマモの冗談は冗談に聞こえねえんだって」

「はは、それは申し訳ない。しかし、確かにこの服装でうろうろしていは、街の人に不審がられてしまうかもしれないね」

まあ来訪者、プレイヤーという時点である程度目立ってはしまうのだが、郷にいては郷に従えともいうし、街に着いたらこの地方に合わせた服装に変えてみるのも一興かもしれない。

尤も、性能が伴うとは考えにくいので、戦闘時には今の装備に変更しなくてはならないが。

「あ、それいいですね。ジャラベーヤとかアバヤとか、私着てみたかったんです」

どうやらイナバさんは民族衣装に興味があるようである。

服装の話をしてみれば、彼女はぐつと拳を握って嬉しそうに言った。確か、どちらもアラブの方の民族衣装だったか。

ジャラベーヤは装飾が施されたロングドレス、アバヤの方はフードが付いたローブのようなデザインの衣装である。

「今のご時世、その気になればVRでヴァーチャル旅行も出来るし、民族衣装なんてネットで注文すればすぐ手に入るだろうに」
何せゲームの世界にだってダイブ出来る世の中である。

ヴァーチャル空間内にある、現実とほぼ変わらない精度で作られた観光地に自宅から遊びに行くなんて事も、今ではデバイス一つで可能なのだ。勿論サービス利用料は払わなければならないし、本来人が立ち入れない場所や、防犯上撮影禁止になっている場所などは流石に見る事は出来ないが。

「まあそれもいいんですけどね。でもやっぱり、このゲームで、この世界で皆と一緒に楽しみたいじゃないですか」

まあ、言わんとしている事はわかる。

リアルでも面識のある人物となら、日程を調整してVRサービスを利用するという手もあるのだが、まさかイナバさんまでご近所さんという事もあるまいし、ゲーム内でリアルの話をするのも憚られる。

もしそういった機会があれば、程度に考えておこう。

「まあボクは服装以前に、この間受注したクエストの情報を集めないといけないのだけれど」

和気あいあいと話をする女子組を後ろで長めながら、ぽつりとそんな事を呟く。

あの日、件のお姫様から承ったクエストの達成。

それこそが、ボクがあの難敵を打倒してまで新エリアへと足を伸ばした目的であった。

そのクエストの名前は「カグヤ姫の難題」といって、指定された物品をお姫様へ届けるといいう、かの有名な竹取物語をなぞった内容のものである。

恐らくは連続して発生するであろうこのクエストの最初のお題は、【仏の御石の鉢】をもつてくるという物。これはお釈迦様が使っていたとされている品で、天竺にあるといわれている。

天竺、つまりインドの事なのだが、このゲーム内でそれに類似したエリアはこの砂漠地帯以外にない。

品物の名前だけ告げて、あとは何のヒントも寄越さないお姫様も中々いい性格をしているものだと思う。この調子だと、残り四つの品々も取ってくるように言われるのだろうなあ。

さてさて、そんな事を考えているうちに、ボクたちは街のすぐ傍までやって来ていた。

始まりの街アインや王都フィーアのように防壁らしきものは見当たらず、中央の宮殿だけがぐると煉瓦造りの壁で囲まれている。

道行く人々は頭にターバンを巻いていたり、ラクダのようなコブのある動物にまたがっていたりと、やはり文化からしてこれまでの国とは全く異なるようであった。

「さて、それじゃあここで一旦解散かな？」

「まあ、みんな目的も違うし、それでいいんじゃないかな」

「あ、私ちよつと落ちるにやー」

街中に設置された【来訪者の石碑】に登録を済ませると、ここからは各々好きなように動く運びとなった。ハヤトたち三人は一度王都へと戻り、ムギは一旦ログアウトするようだ。イナバさんはこれから色々と露店を見て回るらしい。

ボクも件のアイテムに関する情報を集めなくてはならないので、ここからはいつも通りぶらぶらと散策させてもらおう。

別れの言葉と共に方々へ散っていくメンバーへと手を振り、砂と同じ色をした建物の間をのんびんだらりと歩いていく。

とりあえずの目的地は情報集めのお約束、酒場であろうか。

「余り荒っぽい人がいなければいいのだけど」

手に入れたばかりの扇で風を送りながら、一人そんな事を呟く。
じりじりと地を焦がす太陽に照らされながら、一匹の蜥蜴が足元を
走り去っていった。

お稲荷様と三日月猫

——太陽の街《ヘリオス》

地の果てまで続くヘリオポリス大砂漠の中心地点に位置する、緑豊かな都市である。

砂漠の真っ只中だというのに「緑豊かな」、なんて言うのはおかしいと思われるだろうが、この都市は巨大なオアシスの中に存在しているのだ。

中央にある湖の恩恵を受け、街の中には瑞々しい葉を揺らす木々が並び、湖の傍には美しい花々の姿を見る事が出来る。

「はいよ、いらつしやい」

そんな街の一角、砂と同じ色をした煉瓦造りの通りを少し脇に逸れた場所にある、こじんまりとした酒場の扉を開けば、頭にターバンを巻いたマスターらしい男性と目が合った。

流石に真昼間である店内は閑散としており、ボクはマスターに目礼を返すと、掃除が行き届いた小奇麗な木製のカウンターに腰を掛ける。

板張りの床に煉瓦が剥き出しになった壁。梁が走る天井からはお洒落なランプがぶら下がっており、店内をぼんやりと照らしていた。

「おや、見慣れない顔だね。旅の人かい？」

「まあ、そんなものです。すみません、準備中でしたか？」

「いや、構わねえよ。時間が時間だからな、酒は出せねえが」

とりあえずコーヒーを頼んでみると、小さめのカップに淹れられた、般的なものとは少し違ったものが出てきた。表面には小さな気泡がぷつぷつと浮かんでおり、一見ココアのようにも見える。

なるほど、これは所謂アラビア^{いわゆる}コーヒーと呼ばれるものだろう。

アラビアコーヒーとはその名の通り、中東のアラブ地方で飲まれているコーヒーの事だ。

通常のコーヒーは豆を挽いた後、その粉をフィルターを使い漉してから飲むのだが、アラビアコーヒーの場合はコーヒーの粉をそのまま

お湯で煮詰め、フィルターを通さずに淹れる。

勿論そのまま飲めばコーヒーの粉末が口に入ってしまうので、粉末が底に沈むのを待ち、上澄みだけをすする様に飲むのだ。

ちなみに飲み終わった後にはカップの底にどろどろとしたコーヒーの粉末が残るのだが、これを使ったコーヒー占いなるものも存在する。

さて、うんちくを披露するのもこの辺りにして、本題に入るとしよう。

あ、このコーヒー凄く美味しい。

「マスター、ボクはとある物を探してこの街にやってきたのだけれど、【仏の御石の鉢】という品に心当たりはないだろうか」

初めて味わうアラビアコーヒーに舌鼓を打ちつつそう尋ねると、マスターはその浅黒い両腕を組んでううむと唸った。

「悪いが、聞いた事が無いな。市場にいる商人たちなら、何か知っているかもしれないが」

市場といえば、今は丁度イナバさんが買い物をしている筈である。ボクもこの辺りの名産品、民芸品には少し興味があるので、あとで向かってみる事にしよう。

「お邪魔するよ、マスター」

そんな事を考えていると、ちりとドアに下がった鈴の音が響き、どうにも聞き覚えのある――あまり覚えていたくはなかった声が耳に届いた。

渦巻き模様の目玉にカギ尻尾、口元には三日月形につり上がった不気味な笑みを張り付けた、ボクの胸ぐらいの背丈をした二足歩行の三毛猫。

腕利きの情報屋。【The Another World】攻略サイトの管理人。二足歩行するチェシャ猫。

そしてボクにとっては忘れようにも忘れられない事件を巻き起こした張本人――Kittiv-Guvはマスターに一礼すると、何を思ったかカウンターの、よりにもよってボクの隣に腰かけた。

「マスター、いつものやつ」

手慣れた様子でマスターにそう告げる三毛のチエシヤ猫。まさかまさかだが、どうやらこの店の常連らしい。

マスターもその注文に短く返事を返すと、これまた慣れた手つきでカウンターの奥から何やら取り出すと、それをマグカップに注いでK i t t v—G u v——ガブさんに差し出した。

「あいよ、冷えたミルクだ。しかしまあ、アンタも飽きないねえ」
マスターの口から出た言葉に、思わずコーヒーを吹き出してしまうところだった。

牛乳って。真昼間に酒場まで来て、そのアバター^{外見}で牛乳って。

いや、真昼間から酒場まで来て、呑気にコーヒーをちびちびやっているボクもボクではあるのだけれど。

ともかく、彼がこの場にやってきた以上、長居は無用である。

「まあ、そう邪険にせんと言ってえや。前にえらい迷惑かけてもうたし、一杯ぐらいおごらせてんか」

マスターに代金を支払い、足早に店を出ようとしたところで背後から声かけられる。

相変わらず、胡散臭い関西弁だ。

ちらりと背後を見やれば、ガブさんが不気味な目をこちらに向けて、ちびちびとミルクを飲んでいた。やはりというか、三日月形の口元に変化はない。

「いや、折角だけどお気持ちだけ頂いておくよ」

「そりや残念やなあ。折角【仏の御石の鉢】の情報掴んだから、教えたげよ思うてたのに」

ドアノブを掴んだ手が、その言葉にぴたりと止まった。

背後で意地の悪い——実際には表情に一ミリも変化はないのだが、不思議とそう見える——笑みを浮かべたガブさんが、自身の隣にある椅子を叩いている。

やれやれと息を吐き、鉛のように重くなった足で席へと戻った。

「ボクがそのアイテムを探していると、どこで聞いたのかな？」

「ふふん、伊達に全鯖一の情報屋って看板背負つとるんちゃうでえ。わいにかかればレアアイテムが掘れるダンジョンから、噂のお稲荷様

の居場所まで全部お見通しや」

「帰る」

凄腕の情報屋だと思っていたが、ただのストーカーだったようだ。おもむろに席を立ったボクの袖を隣の変質者が必死に掴もうとするが、残念ながらフレンド以外のアバターへの接触は出来ないように設定している。

伸ばされた肉球の付いた両手は無慈悲にも見えない壁に阻まれ、つるりと手を滑らせた変態猫は、その勢いのまま板張りの床と熱烈なハグを交わした。

ぐえ、とカエルが潰れたような声。

「そ、そういう自分、接触設定オフにしてたんやったね。ちゃうねん、タマモはんのおる場所がわかったんは、偶然街に入ってくるんが目に入ったからやねん」

エロ猫曰く、今日も今日とて街で情報収集に努めていたところ、丁度街にやってきたボクたちの姿を見つけたので後を追ってきたという。

やっぱりストーカーじゃないか。

「何言うてんねん、知り合い見つけたら挨拶しに顔だすんは基本やろ」
「なら、皆がいる時に出てくればよかったじゃないか」

「いや、わいタマモはんのパーティの面子にえらい嫌われとつてなあ。せやかてタマモはんには改めて頭下げやなあかん思つて、こうして菓子折り持^{情報}つて会いに来たっちゅう訳や」

そりやあ嫌われもするだろう。

出会って早々セクハラをかましてくる相手に対し、好意を抱く人間はそういない。

しかも下手人が、後悔はしていない、なんて開き直っていれば尚更である。

「そら後悔はしてへんよ。でもタマモはん、あん時の反応見る限りリアルも女の人やろ？ 流石に悪いことしたなあ、とは思うって」

「ネカマだと思つてたのか」

「いや、あん時はアバターの性別がわからなかったさかいにな。まあ

女アバターやっただとしても中身は男やろな思ってた手え出したんはあるけど」

やっぱりネカマだと思ってたんじゃないか。

確かに昔からMMORPGのプレイヤーは男性の比率が高く、女性のアバターを使う人も多い事は事実なのだが。

「まあ、とにかく、その【仏の御石の鉢】についての情報とやらをさっさと話してくれ」

まるで仲の良い友達のように肩を並べて座っているが、ボクは一刻も早くここを出たいのである。

こんなところを誰かに見られて、あの二人って仲直りしたんだな、なんて思われでもしたらたまったものではない。

「辛辣やなあ、もう」

「早くしないと帰るよ」

「はいはい。【仏の御石の鉢】やけど、どうやらこの国の女王様が持つとるみたいやで」

詳しく聞いてみると、どうやら市場で得た情報らしい。

その昔、とある商人が女王陛下に謁見した際に献上した品だそうだが、そんな物をあつまり譲ってくれるとは考えにくい。

十中八九、手に入れる為に何かクエストをこなす事になるだろう。

「ちなみにその女王様やけど、来訪者ですー言うて会いに行ったらあつまり会えるみたいやから、一回行ってみたらええと思うよ。街の真ん中にある、あのおっきい宮殿におるわ」

えらい別嬪さんやったわ。

そう鼻の下を伸ばすガブさんを見て、やはりこの猫は根っからの助平なのではないかと溜息を吐きつつ、ボクは改めて席を立つ。

「それだけ聞いたら充分。それじゃあ、早速その宮殿に向かってみるとするよ」

「ほんまはギャラ貰うところなんやけど、タマモはんは特別や。またいつでも頼ったってや」

そう言っただけで差し出されたのは、一枚の名刺だった。

情報なら猫屋へ。そんな謳い文句と、本人の名前が入っている。

どうやら生産職のプレイヤーが作った物らしいが、こんな物まで作ってしまうとは驚きだ。

「まあ、気が向いたらね」

ボクは受け取った名刺をインベントリにしまうと、今度こそ酒場を後にする。

どうにも奇妙な縁に恵まれてしまったものだが、こればかりは人の力でどうこう出来るものでもないし、気持ち切り替えて行く事でしょう。

「あまり無茶な事を言われなければいいのだけれど」

そんな事を一人ごちながら、ボクは街の中心部にそびえ立つ、黄金の宮殿へと向かうのであった。

お稲荷様と女王様

「ほう、【仏の御石の鉢】を譲ってほしいだど？」

肩まで伸びた美しい黒髪。

前髪はまっすぐに切り揃えられ、その下にある黒い瞳が不敵にこちらを見下ろしている。

黄金のアクセサリーで全身を飾りつけ、胸元の開いたワンピースタイプのドレスを着こなした褐色の女性は、背から伸びた一對の翼を僅かに羽ばたかせた。

妖しげな雰囲気纏うハーピー族の美女。

その正体はこの国、太陽の王国《ヘリオポリス》を治める女王イリスその人である。

女王への謁見自体はガブさんの話通り、ボクが来訪者である事、遙か遠い地からやってきた事を告げると、驚くほどあっさりと叶う事が出来た。

どうやら女王は珍品、名品の蒐集家であるそうで、旅の商人などを宮殿に招いては、異国の品々を買い取っているのだとか。

そんな物好きな彼女である。何ものにも縛られずに世界中を旅し、危険なダンジョンに潜り、秘境を探検するボクたち来訪者に対し興味を抱かぬ訳がなく、宮殿を訪ねてきた来訪者たち全員とこうして話をしているらしい。

ボクがこれまでの経緯を説明すると、女王は少し考える仕草を見せたあと、どこか神妙な面持ちで口を開いた。

「ジパングなる国の話は我も聞いた事がある。かの国の美姫があれを欲しておるといふのなら、我としても譲るのは吝かではない。しかし、そうさな、折角腕利きの来訪者が訪ねてきた訳であるし、其方にはひとつ仕事をしてもらうでしょう」

ドレスのスリットから伸びる、足首から先が猛禽類のそれとなった脚を艶めかしく組み替えながら、女王が傍に控えていた男に目配せした。このゲームでは久しぶりに目にする、リザードマンの男性であ

る。

民族衣装のサリーに似た鮮やかな赤い衣装を身に着けており、他のリザードマンの例に漏れないそのトカゲ顔には、不思議と知性的な雰囲気を感じられた。

男は女王に一礼し、謁見の間から出ていくと、やがて小さな木箱を手にも再び姿を現した。

「それはここより東、王家の谷と呼ばれる場所へと立ち入る為の通行証だ。谷の底には我ら王族の墳墓があるのだが、最近になってその神聖なる場所の周りを小汚い鼠共がうろつくようになってな」

俗にいう墓荒らし、と呼ばれる連中なのだろう。

どうやら個々の戦力は左程でもないようなのだが、とにかく逃げ足が早く、国の衛兵も手を焼いているのだという。

苦虫を噛み潰したような女王の表情を見る限り、かなり深刻な問題のようだ。

しかし来訪者とはいえ、今日出会ったばかりの者をそんな場所に入れてしまつていいのだろうか。

「なに、かの姫が信を置く程の者ならば問題はあるまい。それに、其方が我らの信用を裏切るような事をすれば、相応の報いを受けさせるだけであるしな」

猛禽類に似た鋭い視線がボクを貫き、額に冷や汗が浮かぶ。

しかし次の瞬間には女王は僅かに微笑むと、すつと王座から立ち上がった。

階段を下り、跪くボクのすぐ傍まで歩み寄ると、まるで吟味するかのな視線を向けながら、ぐるりぐると辺りを歩き回り始める。

大きな翼がはばたき、巻き起こった風が頬を撫でた。

「それにしても、我が国に其方のような種族が訪れたのは我が父の代以来だ。似たような種族の者はおるが、其方のように尾が何本もある者は見たことが無い」

どうやらこの国にはボクたちのような、力に応じて尾の数を増やす種族は暮らしていないらしく、女王の興味はボクの背後でゆらりゆらりと揺れる七本の尻尾にあるようだった。

ボクたちプレイヤーがアバターとして使用できる妖狐族は、元々ジパングにその源流を持つ種族である。似たような種族というのは、もしかすれば大昔にジパングからこの地へと渡った妖狐族の子孫なのかもしれない。

しかし、この国固有の種族というのは、些か興味が沸く話だ。

先程の妖狐族に似た種族というのは勿論だが、女王や臣下の姿を見る限り、どうやらこの国にはハーピーやリザードマンといった亜人種が多いようであるし、種族が異なれば、当然その文化も異なる。

様々な種族が暮らしていれば、必然的に様々な文化に触れる機会も多くなるだろう。

公式からそういった設定資料集でも発売されれば楽なのだが、まあこういったコミュニケーションもこのゲームの醍醐味として楽しむのもまた一興である。

女王に件の種族について詳しく尋ねてみれば、女王は僅かにその表情を和らげて、かつんとその鋭い爪を鳴らした。

「うむ、確かに我が国には様々な民が暮らしておる。砂の民、風の民、日の民や月の民、それぞれ信ずるものは違えど、皆我が愛する民であり、子たちである」

身振り手振りを交えながら、まるで女優のような仕草でそう語る女王の表情はまるで母親のような優しさに満ちていた。

その表情や声色から、彼女が国民からも慕われる、とても良い王なのだろうと、ボクの胸に温かな感情が染みわたっていく。

しかしじっと見つめていたボクの視線に気が付くと、思わず熱が入ってしまった事を恥じてか、女王は咳ばらいを一つ、その大きな翼を羽ばたかせて再び王座へと舞い戻っていった。

「すまぬな、つい我を忘れてしまった。ともかく、我が国、我が民たちに興味があるのであれば、まずはここより西の地に暮らす、月の民たちを訪ねてみるがよい」

月の民は別名砂漠の賢者とも呼ばれ、いにしえ古の時代から様々な知識を受け継ぐ種族なのだそうだ。

そして彼らは如何なることも見逃さず、聞き逃さない大きな瞳と耳

を持ち、普段は洞穴の中で静かに暮らしているという。

特徴的に思い浮かぶのは、街に入るまで一緒だったあのプレイヤーであるが、そういえば彼女は無事に目当ての物を見つける事が出来たのだろうか。

まあ今となつては彼女も一端のレベルカンストプレイヤーなので心配はいらないのだろうが、出会った事の第一印象があれであつたせいか、どうにも未知の土地で彼女を放っておくことに一抹の不安が残る。

いや、今は彼女の事を心配している場合ではない。

ボクは頭を振って脇に逸れた思考を軌道修正する。

その月の民と呼ばれる人々に関しては、今はカグヤ姫の依頼がある為、このクエストがひと段落ついたら尋ねてみる事にしよう。

「それでは賊の誅滅、しかと頼んだぞ」

時間が押しているのだろう、側近の者が女王に何やら耳打ちすると、彼女は僅かに眉間にしわを寄せてそう言った。

国民を愛するとても心優しい女性のようであるし、機会があれば彼女ともゆつくりと話をしてみたいものだ。

そうして、先程の知的なりザードマンに連れられて宮殿をあとにすると、外はもう黄昏色に染まりつつあつた。

買い物かごを手提げたハーピー族の女性が彼方へと飛び去り、リザードマンの店主が店の片づけを進める様子を眺めながら、僅かに人通りが少なくなった市場通りを進んでいく。

夕飯の準備でもしているのだろう、柔らかな明かりが灯る民家の煙突からは白煙があがり、家族の楽しそうな声が窓の向こうから響いていた。

そんな様子に少しばかりの寂しさを覚えながら、そういえばボクもそろそろ夕飯の準備をしないとなあ、なんてことを考える。

まあ食材は先日買い揃えているので、ミズハ^{A I}に言いつければそう手間もかけずに夕飯は出来上がるのだが。　まったく、便利なものである。

「今晚は、そうだな、オムライスでも作ってもらおうかな」

不思議と卵料理が食べたい気分だ。
そんな事を呟きながら、ボクはメインメニューのログアウトボタンをタップするのだった。

お稲荷様と翼の少女

太陽の街ヘリオスからずっと南下していくと、やがて巨大な大地の裂け目が見えてくる。

底が見えないほど深いその溪谷こそ、かつてヘリオポリスを治めた王族たちが眠る場所、王家の谷である。

王族に許しを得た限られた人間のみが足を踏み入れる事が出来る神聖な場所であり、谷底へと続く道は衛兵が守る関所の先にある、崖際に作られた蛇のような細道だけだ。

「ふむ、確かにこれはイリス様の印。よし、通つてよいぞ」

丸太のような腕をした、屈強なりザードマンの戦士に通行証を見せ、脇を抜ける。

ずうつと下へと延びる手すり代わりのロープを掴み、ふつと谷底を覗き込んでみると、奈落の底から吹き上げる突風に前髪を乱されてボクはわつと声をあげてしまう。

慌てて前髪を押さえ、咳払いをして気持ちを切り替えると、点々と続く松明の火を頼りに谷を下っていく。

そうするとやがて幾つもの洞穴が空いた、薄暗い谷底がその姿を現した。

至る所に国旗とみられる物が立てられ、神殿らしき建造物も見える。

恐らくは墓荒らし対策として作られたダミーも幾つかあるだろうが、ボクの今回の目的は王墓の発見ではなく賊の討伐であるので、とりあえずは手近なところから探してみるとしよう。

しかしまあ、相手は盗賊、それも王族の墓をあばこうなどという罰当たりな連中である。

そんな連中がどこかに潜み、襲ってくるかもわからない以上、最低限の備えはしておくべきだろう。

そう考えてボクは懷から一枚のお札を取り出し、ふつと息を吹きかけて目の前に放つ。

すると、ぼふん、という効果音のあと、大きな水瓶を手にした青い肌の小鬼が現れた。

こここのところあまりソロで動いていなかったので呼び出すのは久しぶりだが、陰陽師が扱う式神の一体、前鬼と対を成す者、後鬼である。

前衛よりの能力を持つ前鬼とは真逆で、こちらの後鬼は回復やバフなど、後衛としての援護を得意としている。

ちなみに見た目は前鬼とそっくりなのでわかり辛いですが、性別は女性だ。

「周りの警戒を任せる。敵がいたら知らせるように」

呼び出した後鬼にそう命じ、ボクは目に入った適当な洞窟の中を覗き込む。

一見すれば薄暗い、なんの変哲もない洞窟に見える。

幾らなんでも歴代の王族なんていう、それはそれは尊い方々の御遺体を、こんな薄汚れた埃っぽい穴倉に埋葬したりはしないだろう。

墓荒らしの連中だつてそう考えるはずだ。

だがそれは、何も知らない人間ならばこう考えるだろうと、ならばそれと逆に打ってみようと、一見そうとは見えないところに墓を隠す理由にもなりえる。

まあ結局のところ、こういった考えはたちごっこになって結論なんて出せはしない。

ではどうするか。 答えは単純明快、自身の直感に従えばいい。

という事でボクは辺りで最も目立っている、所々が風化して崩れた神殿の脇にある小さな洞窟へと足を向けた。

無造作に掘られた入り口からは微かに風の音が漏れ、松明の光がうつすらと辺りを照らしている。

さて、それでは中を探索してみようかと洞窟の壁に手をつき、内部を覗き込んだところで背後からぎいぎいと袖を引くものがあつた。振り返って見れば、何やら慌てた風の後鬼が、しきりに何かを指差している。

何事かとその指が指し示す方、もう随分と小さくなった空がある頭

上を見上げると、その先には何やら影のような物が。小さく、何やら叫び声のようなものも聞こえてくる。

「――て――」

日の光を背にしているため、ぼんやりとしたシルエットだけしか認識できないが、どうやら人間のようだ。

ぎいぎいと声をあげ、急かすように後鬼がボクの手を引く。

ふむ、ぱつと見る限り、ここに立っているとどうにもぶつかってしまいそうだし、とりあえず安全な場所まで退避するでしょう。

「たーすーけーてー」

効果音にすると、ぼふん、といったところだろうか。

察するに溪谷の入り口から落っこちてきたようだが、数百メートルはあろうあの高さから落下して、ぼふんで済んでいるのだから流石はゲームである。あるいは何かスキルでも使っているのか。

辺りを覆い尽くす程の砂埃が舞い上がり、これはたまらないとボクは口元を袖で覆って、さらに後方へと退散した。

しばらくして砂埃が収まると、その中心には目を回したプレイヤーの姿が。

羽の刺繍が入ったチューブトップにホットパンツ姿の少女で、その露出度の高い装備もさることながら、それ以上に目を引くのはやはり彼女の両腕だろう。

彼女の両肩からは、明らかに人間のそれとは異なる巨大な翼が生えていた。

ハーピー族。それも珍しい、両腕が完全に翼になったタイプのアバターである。

本来のハルピユア、ハーピーに準じた姿ではあるのだが、これが意外とプレイヤーには毛嫌いされていたりする。

理由は単純、装備枠が減るのだ。

インターフェースやアイテムを使用する際にはシステムの補助もあってそう不便はしないそうだが、手に持つタイプの武器は装備できないし、指輪などアクセサリ系の物も同様に、身に着ける事が出来ない。まあ、実はアクセサリに関しては脚部、足首や指先に装備でき

るらしいが。

そんな訳で、プレイヤーでも彼女のようなタイプはかなり色物扱いされており、ハーピー族でキャラメイクを行う際は、先に出会った女王のように、背中から翼を生やしたアバターにする事が多い。

ある意味で、このゲーム唯一の不遇種族ともいえる。

「しかし、この人どこかで……」

埃っぽくなった身体を、数だけ多い尻尾をモップ代わりにしてはたきながら、ボクは頭上に星を回しながら伸びている少女を見つめた。

燃えるような赤い髪、赤い翼、白銀のグリーブに覆われた足先からは、女王と同じように鋭いカギ爪が伸びている。

装備の構成からして前衛のアタッカー、短剣は装備していないようだし、拳闘士グラップラーだろうか。

——ひっさーつ、ハイパーイナズマキック！

と、そこまで考えて、ボクははっとする。

思い出した。あの公式イベントで上空から飛び蹴りを敢行し、巨大なボスモンスターを怯ませていたあのハーピー族の少女である。

直後にボスの熱線によって蒸発してから顔を合わせる事はなかったが、まさかこんなところで再開する事になるとは思ってもしなかった。

「うーん、頭がぐわんぐわんするよー」

そうして観察していると、やがて彼女は頭をゆらゆらと揺らしながら、おぼつかない足取りでなんとか立ち上がった。身体つきはボクタマモよりは少し小さく、どちらかといえばリアルなボクの体形に近い。

しかし千鳥足の妖鳥ハーピーとはこれまた、なんとも面白い。

いや、馬鹿な事を考えている場合ではない。

ボクは頭を振って邪念を払うと、今にも尻餅をつきそうな女性へ声をかける。

「大丈夫？ 随分と派手に落ちてきたようだけど」

少女はいまいちピントの合っていない瞳でボクを見つめると、にへらと人懐っこい笑みを浮かべ、ばさばさと両手の翼——両翼と言った

方がいいのだろうか――を羽ばたかせた。

「だいじょーぶーだよー？ いやあ、しつぱいしつぱい」

どうやらまだまだダメージが残っているようである。

素面でこの状態であるならば中々個性的な少女であるが、イベントの時はもつとしやんとしている印象であつたし、まあ寝ぼけているだけだろう。

頭を揺らしながらあっちにふらふら、こっちにふらふら歩き出した少女を眺めながら、やれやれとボクは溜息を吐き、スキルを発動させた。

祓いの儀。対象の状態異常を一つ解除する、陰陽師のスキルである。

扇を開きその場で一つ扇いでみせれば、清らかな風が彼女の身体を覆い、その身に巢食う邪気を払った。

「お、おおー？」

どうやら体力は減っていないようであるし、後鬼のスキルは使わせなくても大丈夫だろう。

しかしこのゲーム、高所から落下した際の落下ダメージはしっかりと適応される筈なのだが、やはりハーピーの種族スキルか何かの影響だろうか。

彼女は突然発生したエフェクトに目を丸くしていたが、やがて翼を数度羽ばたかせ、身体の調子確かめるように二、三度その場で足踏みした。

「おー、治ったー！ ありがとうキツネの人ー！」

キツネの人とは。いや、間違っではないののだが。

なんとも無邪気な笑みを浮かべる少女であるが、なんでまたあんなところから落ちてきたのだろうか。彼女はハーピー族なのだし、ある程度飛行は出来るはずだが。

「いやあ、それがこっつて飛んじやダメなところだったみたいで、とうってジャンプしたら飛べないからびっくりしたよー」

詳しく聞いてみれば、どうやら飛行できるといっても高度や場所に制限があるらしく、ダンジョンの内部や一部フィールド内では完全に

飛行スキルが発動しなくなるのだという。

そして随分と意地悪な事に、この王家の谷は入り口の関所までは飛行可能エリア、渓谷内部は飛行禁止エリアになっているようで、うまく確認を怠った彼女は飛行して谷底まで移動しようと飛び上がりそのまま落下、今に至る、と。

なんとも運営の悪意を感じる仕様である。後で運営にメールでも送っておこう。

尚、ハーピー族には「風の守り」という種族スキルがあり、これは常に発動しているパッシブスキルで落下ダメージを無効化する効果があるらしい。

これは飛行中に誤って墜落、落下ダメージで自滅する事を防止する為のものだろう。

中々悪さが出来そうなスキルであるが、彼女は純粹にこのゲームを楽しんでいるように見えるし、余計な事は言わないでおこう。

「とにかく、無事でよかった。名乗るのが遅れてしまったけれど、ボクはタマモ。見ての通り妖狐族で、職業は陰陽師だ」

「つくねだよー！　ハーピーで、グラップラー拳闘士だよー！」

ハーピーで、つくね。　焼き鳥が好きなのだろうか。

そういえば鳥の脚の部分はモミジと呼ばれているし、何かと鳥には縁があるのかもしれない。

ボク自身は捕食する側の狐であるので、なんとも複雑な気分であるが。

話をしてみると、どうやら彼女も女王からの依頼で王家の谷にやってきたらしい。

ボクとは違い、元々のクエストは王都におわすフンダート国王から依頼されたものだというが、どうやらどの重要NPCから依頼を受けても、最終的には似たような流れを辿る様にできているようだ。

「そうだ、折角だし一緒にクエストやろうよ！」

ばっさばっさと両翼を動かしながら、天真爛漫な笑顔を浮かべるつくねを見て、なにやら餌をねだるひな鳥のようだな、とボクは少し可笑しくなった。

まあ、実際はボクより年上である可能性の方が高いのだろうけれど。

元々はソロで挑むつもりだったが、クエストの内容的に一对多の戦闘になりそうであるし、こちらとしてはつくねの申し出を断る理由は無い。

「まあ、つくねの足を引っ張らないように頑張るよ」

「私も頑張るよー！ 飛べないけどね！」

えいえいおー。

そんな元気な声と共に翼を振り上げ、大股で洞窟へと向かう彼女の背中を眺めながら、今回も退屈しなさそうだなと、ボクは笑った。

お稲荷様と墓荒らし

薄暗い洞窟の中に、かつんかつんと足音が木霊する。

ボクとつくね、そして最後尾に後鬼が続き、入り口付近で拝借した松明をかざせば、剥き出しになった岩盤に三人分の影が浮かび上がった。

どうやらこの洞窟は王家の谷の地下へと伸びているようで、僅かに傾斜のついた細長い道をボクたちは奥へ奥へと進んでいく。

閉鎖的で圧迫感のある洞窟の中。一人だけであれば多少なりとも不安感を煽られそうなこの場所において、ボクの心は不思議と穏やかであった。

それは、ボクの三步程後ろをちよこちよこと付いてくるハーピー族の少女、つくねの性格に因るところが大きい。

というのも、彼女は実に自由奔放かつポジティブな性格をしており、無邪気な笑顔を浮かべながらぱたと両翼を振るその姿に、洞窟内の陰鬱とした雰囲気など吹き飛んでしまったのである。

「へえー、じゃあやつぱり、タマモがああのお稲荷様なんだねー」
「またそれか。そんな呼び方をされるほど、ボクは偉い人間ではないのだけれど」

聞くとところによると、サーバー内で初めて陰陽師になったのがボクだったりだとか、クズノハさんと親密にしていたりだとか、その辺りが原因であるらしい。

そしてこれは完全にとぼちちりだと思うのだが、最近ではかの大型クラン「暁の騎士団」の団長に一目置かれている、なんて噂が広がっているらしく、一部プレイヤーの間では随分と話題になっているのだとか。

実にはた迷惑な話ではあるが、自身の名が広く知られる事に僅かながらも快感を覚えている、どうしようもないネットゲプレイヤーとしての自分がある事に、ボクは内心溜息を吐いた。

「でもそれを言うのなら、つくねだって相当な有名人だろう?」

何せ彼女はハーピー族の中で初めて飛行スキルを発見、使用したプレイヤーである。

サービス開始当初から、ハーピー族のプレイヤーたちが血眼になって探し求めていたスキルなだけあって、件の公式イベント以降、彼女もまた、サーバー内ではそれなりに名の知れた人物になっていた。

これが単純な称賛や、ボクのようにからかい半分で広まったものならばまだマシなのだが、往々にしてネトゲプレイヤーは非常に嫉妬深い。

レアアイテム一つ手に入れただけで外部掲示板で謂れのない誹謗中傷を受けたりだとか、仲の良いパーティが解散する事になったりだとか、なまじ相手と生身で向き合わない分、人間の汚い部分が表面に現れやすいのかもしれないが。

ともかく、つくねとこうして話してみても、彼女もそう言った被害に遭わなかったか心配になってしまったのだが、どうやらそれは杞憂であつたらしい。

ボクが単刀直入に尋ねてみると、彼女はその笑顔に一切の陰りを見せずに首を振った。

「いやー、それがハーピー族のプレイヤーってそんなに多くないし、皆良い人だったみたいで、そんなに騒ぎになったりとかはなかったんだよねー」

まあ、確かにハーピー族を使用するプレイヤーは少ない。

ちなみに全種族で一番使用人口が多いのはワーキャットで、少ないのはゴブリンである。妖狐族はワーキャット、魔族についての第三位で、その下にワラビットが続く。

種族としての性能が尖っていたり、可愛いアバターが作成しやすい種族であれば人口が多い傾向にある。

その点でいけばハーピー族も中々魅力的な特徴を持っているかと思われるのだが、どうにも脚部のカギ爪をはじめとした、猛禽類を思わせる外見が原因なのか、その人口はワースト四位。

その下にリザードマン、オーク、ゴブリンが続くことを考えれば、どれだけハーピー族を選ぶプレイヤーが少ないかがよくわかる。

故に、街中ならばともかく、こうしてダンジョン内で偶然顔を合わせるのは珍しい種族であり、つくねの場合は、その人口の少なさに救われたとも言えるだろう。

尤も、その人懐っこいまっすぐな性格からして、彼女をやつかむ事が出来る人間なんてそうそういないように思われるが。

跳ねるような彼女の姿を眺めながらそんな事を考えていると、やがてボクたちは大きく開けたドーム状の空間へと辿り着いた。

野球のスタジアム程はある広場の壁沿いにずうっと松明が並び、その中央には巨大な石造りの建築物が一つ、ぽつんと佇んでいる。

松明の火に照らされて浮き上がったその威容を見やり、ボクは思わず頭を抱えた。

「おおー、当たり前だねー……どうしたのー、タマモ？」

「いや、なんでもない、ああ、なんでもないさ」

ここがかつての王たちが眠る、墓荒らしが狙っている王墓だなんて、これは何の冗談だろうか。

黄金色をした、三角形の建物。

誰もが知る巨大な王墓、ピラミッドによく似たそれを見て、これが女王の話していた王墓なのだと、

疑う者はそういないだろう。

だが、注目すべきはその土台である。

ピラミッドとは土台部分が四角形——クフ王のピラミッドは八角形だったりするのだが——になった、所謂四角錐と呼ばれる形の物が殆どであるが、これはなんと六角錐のピラミッドなのだ。

そして形状としては、古代エジプトのものよりも、かのマヤ文明のものに近い。

特徴としてはその頂上、古代エジプトが綺麗な三角形になっているのに対し、マヤ文明のピラミッドは頂点が平らで、神殿が置かれている場合が多い。

しかしこの、目の前に佇むピラミッドには神殿が無く、見たこともない文字のようなものが刻まれた、台座のようなものだけが置かれているように見える。

そう、〃六角形の台座〃なのだ。
ボクの額に、冷たい汗が浮かぶ。

なんの前振りも無ければ、ここをただの王墓だと断じられただろう。
しかし、ボクたちがこの国を訪れた時、いったい〃ナニを〃通ってきたのか、よく思い出してほしい。

ボクの記憶が確かであれば、案内人であるボスモンスターを倒し、
第一の門をくぐってきたのではなかったか。

そして、これが神話の通りであれば、第一の門をくぐった後、〃窮極の門〃へと導く存在。

それこそが、六角形の台座にて、輝く球体にて身体を揺らし眠る異形のもの。

ここまで言えば察していただけるだろう。

あくまでボクの勘ではあるが、恐らくはこのピラミッドの頂上に、
その異形のもが眠っているのではないだろうか。

流石に、現段階で〃次の段階〃へと至れる可能性は低いだろうが、
まさしく触らぬ神に祟りなし、である。厄介な事になる前に、さっさと来た道を引き返すのが吉であろう。

「ぐあっ！」

と、その時である。

ぎぎつと唸り声がしたかと思えば、ボクたちの背後で何者かの声が響く。

はっとしてそちらの方へ振り向けば、そこには短剣を握り、胸に切り傷を付けた男が蒼い顔をして膝を着いていた。

どうやら背後を警戒していた後鬼に攻撃されたようだが、明らかに
堅気の人間には見えないし、もしかして墓荒らしの一人なのだろうか。

「やれやれ、ようやく当たりだと思ったら、よりにもよって来訪者とは
な。あのアバズレ女王が、厄介な連中を差し向けてくれやがる」

低い、獣の様な声。

蹲る男の背後、ボクたちが進んできた暗闇の中から現れたのは、大柄な人間族の男であった。

見たところ四十代、岩のような顔には大きな刺青が入り、腰巻一枚だけを身に着け、筋骨隆々の逞しい身体を惜しげもなくさらけ出している。

男は丸く剃り上げられた頭をがりがり掻き毟り、腰に差したタルワールを引き抜いた。

それを合図に、男の背後からぞろぞろと同じような格好をした、手下らしい者達が現れる。

「おや、件の盗賊は逃げ足だけは早いと女王様から聞いていたのだけれど」

ステレオタイプの、如何にもならず者らしい身なりをしているものだから、早々に逃げの一手を打ってくるものだと思構えていただけに、なにやら肩透かしを食らった気分である。

ボクがそう言うのと、男は苛立ちを隠そうともせず、地に唾を吐き捨てると、手下の者達を怒鳴りつけた。

「獣野郎が生意気な口を利きやがる……。野郎共オ、気合入れろや！ 来訪者とはいえ相手は二人だ、囲んで身ぐるみ剥いじまいなア！」
野郎ではなく、二人とも女であるし、後鬼を入れると二人ではなく二人と一体になるのだけれど、まあそれは置いておこう。

それぞれ手に短剣や弓を握った男たちがぐるりとボクたちを囲み、野犬のように吠えだす。

数は親分も入れて六。

タンク職がいらない今の構成であれば、少しばかり厳しい戦いになるかもしれない。

——まあ、折角譲り受けたものであるし、早速使ってみるとしようか。

バフをかけ終わった後、懷に手を入れ、取り出したるは一枚の呪符。
刻まれた文字は騰蛇^{とうだ}。

ジパング城でセイメイから受け取った、十二天将の札である。

「つくねは近付いてくる敵の相手を。遠隔攻撃をしてくる連中はボクが片づけよう」

「まっかせてー！ いっちゃいいとこ見せちゃうよー！」

鼻息も荒く、つくもがひと際力強く地面を踏みつければ、膝から足首辺りまでを覆っていたグリーブが音を立ててその形を変えた。膝を覆っていた部分からは鋭い刃が伸び、足首部分は彼女の爪先までも覆い、より鋭く、力強い白銀の爪と変える。

初めて目にするギミック付きの装備に、ボクは思わず声を漏らした。

「へえ、面白い装備だね。プレイヤーメイド？」

「そーだよー。私、まだ迷宮の装備は取れてないんだけど、これも結構使い易いんだー」

がちやりとグリーブを鳴らし、つくねが片足で地面を一度引つかいてみせると、綺麗な裂け目が三つ出来上がった。

お気に入りの品だけあって、それなりの破壊力を秘めているようだ。これは中々心強い。

ふすーとドヤ顔を決める彼女の姿にふっと笑い、後鬼を札に戻す。そしてそれと入れ替わる形で、ボクは騰蛇の札を投げ放った。札を中心に六芒星が浮かび上がり、梵字がその周りをぐるりと囲む。

これは、今までの式神召喚では発生しなかったエフェクトである。

おお、とつくねの驚く声。

そうして札が一層激しく輝きを放ち、薄暗い洞窟内を真っ白に染め上げていく。

光が収まった時、そこには一匹の大蛇の姿があった。

大人一人を軽々と丸呑みに出来そうなほどの巨体を紅蓮の炎が包み、三対六つの瞳がぎらぎらと赤い光を放っている。

突然出現した大蛇に盗賊たちが怯み、言葉を失う。

だが、そんな中でただ一人、それに動じていない人物があった。

「おおー、なんか凄いの出たー!」

ボクの隣でそんな風に黄色い声をあげ、丸太のような騰蛇の胴へ飛びかかっていったのは、言わずもがな、つくねである。

「おー、なんかひんやりしてるー!」

ボクが咄嗟にそのチューブトップの背中側を引っ張れば、彼女はぐえ、と蛙が潰れたような声をあげた。

「つくね、流石にちよつと空気を讀もうか」

「えー、だってー」

だってもへちまありません。

溜息を一つ、改めて騰蛇を見上げれば、彼——もしかすれば彼女かもしれないが——はその口先から長い舌をちろちろと覗かせながら呻き声をあげると、まるでこちらの命令を待つかのようにボクの前にその大きな頭を垂れた。

よかった。暴れ馬——実際には暴れ蛇なのだが——とは聞いていたけれど、きちんとこちらの言う事には従うようである。

では、仕切り直すでしょう。

五芒星が描かれた扇を手には、ボクはその切っ先を墓荒らしたちに向ける。

「じゃあ、まあ、とりあえず、誅滅せよ」

さてさて、早々に終わらせて、この物騒な場所から退散するとうとう。

主人の命に従い、炎を纏う大蛇はその巨大な牙を剥き出しにして、未だ呆氣にとられたままの盗賊たちへと飛びかかった。

お稻荷様と大立ち回り

騰蛇。とうだ

朱雀と同じく火神に属し、その姿の通り巳の方角、南東を示す十二天将の一角である。

炎を纏い、鋭い牙で敵を切り裂き、巨大な尾で薙ぎ払うその姿は実に頼もしい。

流石はかの十二天将、畏怖を呼び込む者。

ボクのような弱輩に御しきれているのが、些か不可解ですらある。

「あの野郎、召喚士か！ 野郎共、まずはあの狐野郎から狙え！」

騰蛇が暴れ回るその向こうで、頭領の男が声を張り上げる。

いや、ボクは野郎ではないし、召喚士サモナーではなく陰陽師であるのだから。少しむつとして男を睨み付けてみれば、思ったより肝っ玉が小さいのか男は怯んだように表情を強張らせ、僅かに後ずさった。

しかし、考えてみれば海を隔てているとはいえ、互いに貿易などを行っているフンダート王国でさえ陰陽師という職業は余り知られてはいなかったのであるし、遙か遠い地であるこの国に暮らす人々がそれを知り得なかったとしても、それは無理もない事だと言えるだろう。

雄叫びをあげ、曲刀を振りかざしながら男たちが殺到する。

騰蛇の猛攻を掻い潜り、なお戦意衰えない猛者たちではあるが、いかにせん視野が狭すぎると言わざるを得ない。

男たちがボクの元へと辿り着くその直前、彼らに横合いから襲い掛かる影があった。

「すーぱーいなづまキーク！」
めしや。

おおよそ人体から発せられるには物騒すぎる音と共に、先頭にいた男が短い悲鳴をあげて来た道を引き返すように後方へと吹っ飛んでいく。

台詞にすれば、おうふ、だろうか。いや実際はうわらば、かもしれ

ないが、まあそれはどうでもいい。

飛んできた、仮にも仲間であろう男を一瞥すらせずさつと身を躲す他の連中もなかなか薄情ではあるが、それよりもボクは今、隣でドヤ顔を決める少女に戦慄していた。

「拳闘士に、あれほどノックバックする攻撃スキルつてあったかな？」
「あ、さっきの技？　崩天脚っていうスキルなんだけど、普通はあそこまで吹っ飛ばないよー」

どうやらその秘密は装備しているグリーブにあるらしく、なんでもノックバック増加の効果が付与されているのだという。

そういえば、プレイヤーメイドであればその辺りも割と自由に設定出来たのであったか。

生産職のプレイヤーが装備品を作成する際に、専用のスキルを使用することでその装備品に様々な効果を付与する、所謂エンチャントというものである。

素の防御力やステータス補正の数値では一步及ばないプレイヤーメイドの装備品を好んで使うプレイヤーがいる大きな要因でもあるのだが、それはともかく、今は目の前の敵に集中するとしよう。

あちよー、と気の抜けた声と共に、つくねが敵陣の只中へと呐喊とっかんしていく。

敵のレベルからして、流石に千切つては投げとはいかないが、範囲攻撃スキルも使用しての猛攻は敵のヘイトを稼ぐには十分すぎる効果を発揮していた。

ともあれ、あまり放置するわけにもいかない。なにせこちらには、体力を回復する為の手札が圧倒的に足りていないのだから。

と、そこでボクは、傍に浮き上がったままの騰蛇の呪符が赤く点滅している事に気が付いた。

どうやら強力な分、呼び出していられる時間はそう長くないらしい。

最前線で暴れ回っていた騰蛇に指示を飛ばし、ボクのすぐ傍まで引き戻す。

当然、騰蛇の相手をしていた敵がこれ幸いこちらへ襲い掛かって

くるのだが、こちらとて考え無しに騰蛇を呼び戻したわけではない。
「さて、それじゃあとおきだ」

騰蛇の呪符に指先で触れ、宙を滑らせるように右へと振るう。
するとそこに呪文のような文字列が浮かび上がり、騰蛇の纏う炎が
ひと際大きく燃え上がった。

残り少ないMPを消費し、ボクは己の式神へ命じる。

「我が敵悉く焼き払え、急急如律令―」

ボクと騰蛇の足元に五芒星が浮かび上がると、騰蛇はその巨大な鎌
首をもたげ、その身体を大きくしならせる。その様は矢を番え、今ま
さに放たんとする弓の姿に似ていた。

何事か、と巨大な蛇を見上げる男たち。

そして足元の五芒星が一際大きく輝くと、その直後、騰蛇がその罅^{あぎと}
を裂けんばかりに開き、悍ましい雄叫びをあげる。

使役しているはずのボクでさえ身震いする雄叫びの後、その口内か
ら放たれたのは青白い、全てを焼き払わんとする地獄の業火であつ
た。

薙ぎ払うようにして、騰蛇から扇状に放たれたそれは呆氣にとられ
ていた男たちを容赦なく飲み込み、爆発を引き起こす。

怪獣映画もかくやという光景であるが、しつかりと効果範囲を把握
した後使用しているので、近くで戦っていたつくねに被害はない。

尤も、このゲームにはフレンドリーファイアが存在しないので、巻
き込んでいても彼女だけはノーダメージで済むのだが。

ちなみにこの騰蛇固有のスキルだが、使用するにあたって毎回あの
ような、中学二年生が歓喜しそうな台詞を吐かなければならないかと
いえば実はそうでもなく、コマンドの入力や呪符の操作だけで十分
だったりする。

ではなぜ言ったのかと問われれば、なんとなく空気で、としか言い
ようがない。

いや、つくねもスーパー稲妻云々と技名を叫んでいたし、ある程度
は許されると思ったのだ。

一度は言ってみた台詞であつたし、急急如律令。 実に陰陽師つ

ぽい。

そして残念なことに、この固有スキルは召喚中に一度きり、使用後は強制的に呪符に戻ってしまうという欠点も抱えている。強力ではあるが、なかなか使いどころが難しいスキルと言えるだろう。

さてさて、演出的には随分と大袈裟な技であったが、威力としては術者の知力に依存する。

つまり、強力な攻撃には変わりないが、見た目ほど一撃必殺という訳にはいかない訳で、立ち昇る火柱の中から随分ぼろぼろになった男たちが、それでも五体満足の姿で現れるのは必然とも言えた。

それでもかなり体力を削ったようで、この様子であればあと一、二撃攻撃を加えれば、それはもうばったばったと倒れてくれる事だろう。

M P回復ポジションをぐいと呷り、騰蛇を運用して消費した分のM Pを回復する。

吹けば倒れそうな敵ばかりとはいえ、こちらとて耐久力には自信のない後衛職。決して油断して良い状況ではない。

勝って兜の緒を締めよ、である。

手にした扇でゆつくりと、たお嫺やかに前方へと風を送り込み、同時にスキルを発動。送り出された風はどんよりと淀み濁ったものへと変わり、男たちに纏わりつくように広がっていく。

上級妖術【土蜘蛛】。範囲内の敵に【病氣】の状態異常を付与するスキルである。

【病氣】はバッドステータスの一つで、効果は移動速度低下とスリップダメージ^Dの付与。

生憎とボスモンスター等には移動速度低下の効果は発揮されない事が多いのだが、それでもスリップダメージを与える事が出来るこのスキルはともありがたい。

激しくせき込み、倒れ伏す者まで出始める中で、それでも尚こちらを睨み付ける者があった。

後方で指示を飛ばしていた、頭領の男である。

彼自身も【土蜘蛛】の効果範囲に入っていた筈なのだが、やはり頭

領だけあつて手下の連中よりレベルが高いのか、さほどダメージは与えられていないようだ。騰蛇が暴れていた際に、彼一人が安全圏で傍観を決め込んでいた事も大きい。

男はぐったりした手下たちを見て舌打ちを一つ、砕けんばかりに歯を食いしばりながら、ぎらぎらとした視線をこちらへと向けた。

「くそつ、くそつ、くそつ！ 俺は天下の大盗賊カンダ様だぞ、こんな小娘共にやられてたまるかよ！」

カンダタと名乗る男はそう吐き捨てる、目の前に蹲っていた手下の一人を蹴り飛ばし、先程までの剣幕が嘘だったかのように一目散に逃げ出した。

まさしく脱兎の如くといった具合で、まるで振り返る様子すらない。

蹴り飛ばされ、たたらを踏みながらこちらへと向かってきた男の頭頂部へ扇を振り下ろしながら、ボクとつくねはその潔さすら感じさせる見事な逃げっぷりに目を丸くした。

水を打ったような沈黙。

「つて、待てこのー！」

当然、いち早く事態を把握したつくねがそのあとを追い、ボクも苦笑いを浮かべながらそれに続く。

まさかの殲滅戦から、追撃戦へと状況が変移したようである。

幸いな事にこの道は出口までずっと一本道であるので、途中で見失うような事はないだろう。

声が届く範囲にまで迫る事が出来れば、陰陽師の持つスキルで何とかなりそうなのだが、どうだろうか。

しかしそこは流石の拳闘士、つくねは肩幅ほどしかない狭い坑道の中を、まるで一本の矢の如く駆け抜けていく。

俊敏値がそう高くない妖狐族、そして陰陽師であるボクでは、彼女の背中を見失わないように追いかけるだけで精いっぱいである。

そうして一、二分程追いかけていくと、やがて前方から野太い叫び声があがった。

どうやらつくねがカンダタに追いついたようだ。

「さあ、観念しろー!」

二人の姿が見えるところまで追いついた時には、カンダタは肩で息をしながら地に片膝をつき、その前でつくねが何やら鶴やフラミンゴに似た、片足をあげた奇妙なポーズをとっていた。

そういえば先ほどはあちよー、なんて叫んでいたし、恐らくは中国拳法か、あるいは功夫のつもりなのだろう。

「くそがつ、捕まってたまるかよオ!」

だが、その余裕がいけなかった。

つくねの隙を突き、カンダタは懐から卵程の大きさをした球状のアイテムを取り出すと、それをつくねの足元へと投げつけた。

すわ爆弾かとボクは肝を冷やすが、それは小さな爆発音と共に砕け散り、辺りに何やら白い粘着質な液体を飛び散らせるのみに留まる。

ぎやあと、つくねが悲鳴をあげた。

どうやら飛び散った液体の正体は、とりもちのようであった。

引きはがそうにも纏わりつき、もがくたびにさらに絡みついてくるとりもちに、つくねが顔を青くする。

しかし、うん、なんだろうか。

倫理規定に引っかからないか、とても心配になる絵面である。

「やだやだ、ねばねばキライー!」

「へへっ、ざまあみろマヌケめ!」

とりもちに四苦八苦するつくねを一瞥し、カンダタがまたも逃走を図ろうと立ち上がる。

だが残念、そこはぎりぎりこちらのスキルの範囲内だ。

遁走せんと足に力を入れるカンダタの背に向かい、ボクは目的のスキルを発動した。

「カンダタ、動くな!」

ボクがそう命じた途端、ぴたりとカンダタの動きが止まる。

突然の出来事にカンダタが目を見開き、慌てて身体を動かそうとするも、彼の身体はまるで蠟で固められてしまったかのように微動だにしない。

これが陰陽師のスキル、言霊【縛】だ。

一定時間、だいたい二、三秒ほど相手を硬直^{スタン}させるスキルであるが、レジストされずに発動したようで何よりである。

「くそっ、なんだこりゃあ!」

いまだにもがき続けるカンダタの背を乗り越え進路を塞げば、反対側には般若の如き形相を浮かべたつくねが。

気のせいかな周囲の空気が陽炎のように揺らめき、ボクはその背に巨大なロック鳥を幻視した。

ぎぎぎ、とカンダタが油の切れた機械のようなぎこちなさで、彼女の方へと振り返る。

あちゃあ、とはボクとカンダタ、どちらの口から出た声であつたか。

「いや、違うんだお嬢さん。」

「エッチなのは、いけないと思いますー!」

「ヤッターバアアー!」

顔を真っ赤にしたつくねの豪脚が、振り向いたカンダタの顔面を正確に打ちぬいた。

何やら思わぬハプニングもあつたが、無事クエストをクリア出来そうで何よりである。

奇声を上げ、きりもみ回転しながら飛んでくるカンダタを見やりながら、ボクはそんな事を思うのであつた。

なお、飛んできたカンダタは扇できっちり打ち返した。

お稻荷様とお姫様②

「へえー、これが【仏の御石の鉢】ねえ」

ジパング城、姫の間。

可愛らしい金糸雀かなりあのさえずりに耳を傾けながら、黒髪的美姫は目の前に置かれた石鉢の縁に、そのしなやかな指先を滑らせた。

大きさはカグヤ姫が両手で抱えられる程度のもので、伝説通りその表面は非常に滑らかで光沢があり、柔らかな紺青の輝きを放っている。

「血の涙が流れた、と手紙をしたためる程ではなかったけれど、それなりに苦勞したよ」

海山の、道の心をつくし果て、ないしの鉢の、なみだ流れき

竹取物語の中で、かぐや姫から難題を申しつけられた貴公子たちの一人、石作皇子いしづくりのこが、仏の御石の鉢と共に姫へと送った手紙に書かれた歌である。

天竺でひたすら探し求めたが、なかなか見つからないので血の涙を流す程であった。

まあざつくりと言えばそのような、これだけ苦勞したんだよ、というアピールを含めた内容のもののだが、彼が姫へと献上した石鉢は偽物であり、それはすぐに見破られてしまう。

かぐや姫に、鉢が光を放っていない事を指摘されると、彼は偽物の鉢を捨て、姫が余りに美しいので、鉢も光を失ってしまったのだと続ける。

これに呆れたかぐや姫はどうとう問答すらしなくなってしまうのだが、鉢を捨ててまで尚言い寄ったこの話が、『鉢ちを捨てる』という言葉葉の元になったのだとか。

とれだけ必死なのかと
閑話休題

まあそれなりに手間はかかったが、愉快な縁にも恵まれて、随分と楽しい旅であったと思う。

ちなみにかの国で捕まえた墓荒らしの一団だが、現在は頭領のカン

ダタを含め全員が地下牢に繋がれ、イリス女王からきついお灸を据えられている最中である。

その際に女王陛下から聞いた話では、なんとあのカンダタ、その昔女王陛下に求婚した事があるのだとか。

その時は随分とこつぴどくフラれてしまったようだが、どうやらその事を今も根に持っているらしく、今回の事件も女王陛下に対する嫌がらせの意味合いがあったのではないか、というのが彼女の所見であった。 いやはや、見事なまでの逆恨みである。

そんな話をしてみれば、石鉢を吟味している最中であつたカグヤ姫は小さく吹き出し、呆れたように笑った。

「男ってホント馬鹿よねえ。こつちはまるで興味もないのに、あの手この手で気を引こうとして。迷惑だつてわからないのかしら」

「本当に、苦労しているようだねえ」

肩をすくめながら、まるで自分の事のようにそう零す姫の姿を見て、ボクは苦笑いを浮かべる。

ドウマン。 件の陰陽師との因縁は、未だに続いているようだ。

「まったくよ！ 貴女を雇って少しはましになるかと思つたら、あの根暗坊主、次はなんて言つてきたと思う？ ああ姫様、あのような女狐を傍に置くのはおやめ下さい、ですつて！ 何が女狐よ、アイツだつて腹の黒い古狸じゃない！」

「いや、まあ、女狐というのは間違つていないからねえ」

というか、実は陰陽師関係のクエストで顔を合わせる度に、そういった嫌味は言われていたりするのだけれど。

まあそれを告げるとまた面倒な事に発展しそうであるし、藪をつついて蛇を出すつもりもないので口には出さないが。

しかし、こうして話をするのはまだ二度目であるはずなのに、随分と気に入られたものだ。

仏の御石の鉢をばしと叩き、瑞々しい唇を尖らせてばやくお姫様を眺めながら、そんな事を思う。

だがそれが表情に表れていたのか、カグヤ姫はボクの顔を見てはつとすると、僅かに頬を朱に染めながら視線を逸らし、どこか決まりの

悪い顔をした。

ごほん、とわざとらしい咳払いを一つ。

「あ、貴女は私が直々に任命した専属の陰陽師なのよ！ それを貶めるということは即ち、主人である私を貶めるのと同義なの。だから、その、勘違いしないでよねっ！」

これはまたステレオタイプな。

とりあえず、はいはいツンデレツンデレ、とでも言っておけばいいのだろうか。

そう捲し立てるなり鼻を鳴らしてそっぽを向く彼女であるが、ちらりちらりと横目でこちらの様子を伺っている辺り、実は相当寂しがり屋なのかもしれない。

ともあれ、陰陽寮のトップであるドウマンにこうも敵視されているとなると、近々また彼とは一悶着ありそうな予感がする。

厄介な、というよりも、あまり面倒な事態にならないければ良いのだけれど。

「と、とにかく、今回は遙か異国の地までの旅、ご苦勞様。まだまだ探してほしい品はあるのだけれど、それはまた追って知らせるから、今はひとまず身体を休めなさい」

どうやらカグヤ姫からのクエストは、ここで一旦区切りのようである。

【カグヤ姫の難題】というクエスト名からして、次に出される難題は蓬萊の玉の枝か、はたまた燕の子安貝か。

まさか、龍の頸の玉を取って来いなどとは言わないだろう。

いや、ファンタジーRPGの代名詞といっても過言ではないドラゴンの雄姿を一目拝むことが出来るのなら、それはそれで実に好ましいのであるが。

メカムート君三号？ いや、あれは半機械化されていたのでノーカウントである。

「そういえば――」

さて、指定された宝物も渡した事であるし、表に人も待たせているのでそろそろお暇させて頂こう。そう思い、姫に一礼し襖の縁に指

をかけたところで、背後から声がかかる。

はて何事かと振り向いてみれば、カグヤ姫は鳥かごの中でさえずる金糸雀を眺めながら、さも今思い出したと言わんばかりに続けた。

「貴女、城下町に家を持っているらしいわね。セイメイから聞いているわよ」

白い指先がちゃんと鳥かごをつつき、黒い瞳がつい、とこちらを流し見る。

なんともまあ、耳聡いというか、口が軽いというか。

勿論それは姫様に、ではなく、ボクの個人情報をつらつらと喋ったセイメイに対しての評価である。

これは、フラグが立っただろうか。

というのも、マイホームを所有している状態で、尚且つ特定のNPCの好感度が一定以上ならば、何とそのNPCが自宅を訪ねてくる、なんていうイベントがあるらしいのだ。

ソースは例によって、自称鯖内一の情報屋、K i t t v―G u v氏が運営する攻略サイトである。

まあ自宅訪問といっても特別何をする訳でもなく、他愛のない世間などをして帰っていくようだが、お気に入りのキャラクターがやってくるにあつてマイホームの需要は急上昇。

ここジパングにも次々とプレイヤーのマイホームが新築されており、ちよつとした建築ブームが巻き起こっている。

ちなみに残念ながら、未だボクはそのイベントに遭遇した事がない。

その原因は、大型アップデート後からこつち、長期間自宅を空ける事が多かったからなのだが、クエストもひと段落ついた訳であるし、この辺りで少し腰を落ち着けてみるのも悪くないかもしれない。

「まあ、あまり立派とは言えない、こじんまりとしたところだけど、居心地は良いよ」

川のせせらぎに、窓の外で揺れる桜の葉。ほのかに香るイ草の匂い。

都会ではなかなか得られない、ゆるやかな時間が過ぎていくあの感

覚が、ボクはたまらなく好きだった。それこそ、思わず口元が緩んでしまう程度には。

「ふうん。まあ、貴女がそんな顔をするのだから、本当にいいところなんでしょうね」

そう言われ、ボクは自身の頬に手を伸ばし、僅かに緩んだ頬をそつと撫でた。

そんなにだらしない顔をしていただろうか。これはまた、なんとも恥ずかしい。

「まあいいわ。そのうち遣いをやるかもしれないから、なるべく家にいるようにしておきなさいよね」

それはそれで、手間をかけさせてしまつてこちらとしては申し訳ないのだけれど。

そんな旨の事を伝えてみれば、いちいち城に呼び出して話をする方が面倒だと言われてしまった。まあ、一理ある。

「あと、貴女が言っていた、へりおぼりす、だったかしら？ その国の女王陛下にはお礼として、こちらからも何か贈り物を用意させてもらうわ。そっちも準備ができ次第、貴女に運んでもらうつもりだから、そのつもりでいて」

そして続けざまに彼女が言ったこの言葉も、また道理であつた。

へりオポリスに行くには現状あの扉を潜るか、来訪者の石碑を利用するほかない。

勿論、海路や陸路でもあの場所には辿り着けるのだろうが、それには些か時間もコストもかかりすぎる。

尤も、メタ的な言い方をしてしまえば、これもまた何かしらのクエストのフラグが立ったという事なのだろうが。

「なら、なおさら家は空けないようにした方がいいね。ああ、もしよければ甘味でも用意しておくけれど、甘いものは平気だったかな？」

襖を開くと、ボクはさも今思い出したかのように、肩越しに姫様を見やりながら言った。

「え、ああ、大丈夫、甘いものは大好きよ——つて」
ならよかった。

料理師はまだそれほど育てられていないが、簡単な甘味程度なら作成出来る。

そうだな、餡蜜や葛餅、氷が手に入ればかき氷を作ってみるのいいかもしれない。

鎌をかけられた事に気付き、顔を赤くしながら何やら喚くお姫様をしり目に、ボクは部屋を後にする。

さてさて、それでは来客の予定も入った事であるし、買い物でもして帰るとしようか。

外で待っているあの人もジパングを色々と見て回りたいと言っていたし、丁度良いだろう。

柄にもなく弾んだ心に合わせるように、ゆっさゆっさと七尾が揺れる。

いやはや、今日も今日とて、良い日和である。

「この、馬鹿狐――」

城内に、カグヤ姫の可愛らしい叫び声が響き渡った。

お稲荷様と翼の少女②

「あ、おかえりー!」

報告を済ませ、城から出たばかりのボクの頭上から声がかかる。

鮮やかな緑の羽根が舞い、晴れ渡った青空から太陽のような笑顔と共にボクの前に降り立ったのは、王家の谷にて出会ったハーピー族の少女、つくねであつた。

彼女はこちらに向かって駆けだすと、その大きな両翼をめいっぱい広げ、ボクの胸へと飛び込んでくる。

とん、と軽い衝撃。

彼女を両手で抱きとめると、ボクは数歩たたらを踏んだ。

えへへー。こちらを見上げながら、つくねが笑う。

「ごめん、お待たせしてしまつたね。退屈じゃなかったかい?」

「んー? 門番さんと遊んでもらつてたから、全然平気ー!」

見れば、丁度ボクがぐぐつたばかりの門の傍で、いつものあの門番の男性が小さく手を振っていた。

女性が苦手で、ボクがある程度口を利いてもらえるようになったのもつい最近の事であつたのだが、つくねは平気だつたのだろうか。

まあ純粹で子どもっぽいところがある彼女であるので、門番さんもちよつと大きな子どもを相手にしているような感覚だつたのかもしれない。

「それじゃあ行こうか。とりあえず市場を回るつもりだけれど、行きたい場所とかがあれば言ってくれと助かる」

「はーい!」

ちよちよことボクの後ろを着いてくる、雛鳥のようなその姿に思わず笑みを漏らしながら、ボクたちは市場へと続く大通りを進む。

とりあえず入用なのは餡蜜用の果物や大豆、砂糖に葛粉あたりだろうか。わらび餅も作つてみたいので、わらび粉もあれば買っておきたい。

もう少し調理師のレベルが上がればカステラや最中、金平糖なんか

も作れるようになるのだが、まあ最近は随分と暑くなってきたし、あつさりした物の方が喜ばれるだろう。

ちなみに和菓子には目がないボクではあるが、ちゃんと洋菓子の方にも手を伸ばしている。

流石に今は簡単なパンケーキやクッキー、各果物を使ったジュースぐらいしか作れないが、幸い自宅には一通り調理用の設備も整っているので、レベルを上げてレパートリーを増やすのにそう時間はかからないだろう。

「そういえば、つくねは好きなデザートって何かあるのかな？」

「うーん、いっぱいあるけど、一番はホットケーキかな！」

市場に着き、所狭しと広げられた様々な露店を覗いて回りながら尋ねてみると、彼女は一瞬考える仕草をしたあと、またいつもの笑顔を浮かべながらそう答えた。

ホットケーキ。まさしく定番ともいえるものだが、それならば今のボクのレベルでも作成できる。

折角であるし、買い物が終わったら彼女にご馳走してみようか。

薄力粉、卵はここで纏めて調達するとして、ベーキングパウダーや牛乳はまあ、ジパングにある調理師ギルドの窓口まで行けば販売しているだろう。ああ、ついでにバターと蜂蜜も仕入れておくか。

「なんだかタマモって、お母さんみたいだねー」

品物を物色するボクの姿を眺めながら、つくねが何の気なしにそう零した。

どこかで似たような事を言われた気がするが、はて、どこであったか。

そして記憶を辿っていくと、そういえばボクがまだこのゲームを始めたばかりの頃に、始まりの街アインでそんな事を言われた事を思い出した。

あの時は確か、シアと一緒に、彼女のおつかいの手伝いをしていたのだったか。

また随分と懐かしい。ここのところあの街にはめつきり顔を出せていないが、彼女たちは元気にやっているだろうか。

ともあれ、こう見えて現役の女子高生であるボクからすると、母親みたい、なんて評価を受けるのはなんとも複雑な心境になるのだけだ。

流石にネットゲームの中で、自身の年齢を公言する様な暴挙は犯さないが。

直結厨怖いし。

「家庭的という意味として受け取っておくよ。でも、もしかするとボクの中身は男かもしれないよ?」

「いやー、それはないよー。男の子ならもっとう、女の子の子してるアバターにするもん」

まあ確かに、男性が女性のふりをする際は、必要以上に女らしさを前面に出してくる印象が強い。

流行のファッションに敏感だったりとか、やたら女子力の高さをアピールしたりとか、口調がやたらと甘ったるかったりとか。あとはやたら語尾に音符マークを付けたり。

そしてそれはアバターの外見にも表れている事が多く、ネカマプレイを楽しむプレイヤーは、得てして傍げで庇護欲を煽る少女のアバターを使う事が多い。

姫プレイ、といえは意味はまた違ってくるが、まさしくお姫様のような外見なのだ。

だいたい、後衛の回復職を使ったりするしね。まあこれは偏見だけれど。

尤も、フルダイブ型のVRゲームが世に出た今となっては、外見や口調だけを女性らしくしたところで、容易くネカマである事が看破されるようになってしまったのだが。

「それに、なんていうのかな、ちよつとした仕草とか見ると、きつとリアルも女の子なんだろうなーって」

「ふむ、結構ちゃんと見ているんだね」

「あれれー、なんだか今ちよつと馬鹿に逝なかつたー?」

頬を膨らませ凄むつくねを手で制しながら、ボクは苦笑いを浮かべた。

これが、フルダイブ型のゲームにおいて、ネカマプレイヤーが容易く見破られてしまう大きな要因の一つである。

設定された動作のみを行う従来のゲームとは違い、ここでは現実で日ごろ行っている動きがそのまま自身のアバターに反映される。

例えば、髪をかき上げたりとか、何かを拾い上げる際の何気ない所作。立ったり座ったりした時の姿勢。歩いている時の足運びや重心の置き方。

この辺りを注意深く観察すれば、容易く男性と女性の差異は見つける事が出来る。

骨格の違いもあり、この辺りを完璧に模倣できる男性はそういないだろう。

流石に技術が発達した現代であっても、プレイヤーの動作をアバターの性別に準じたものに変換してノータイムで出力する、なんていう無駄な部分に割くりリソースはないのである。

ある意味で、全身でゲーム世界を楽しめるようになった弊害ともいえるが、まあ極々一部のプレイヤーのみが被るものであるし、問題はないだろう。

ちなみにこれは決して根拠のない話ではなく、事実として、フルダイブ型のゲームではスカートを履いているのに大きく足を開いて座ったり、かがむ時に裾を押さえなかったりと、そういった動作の不自然さからネカマである事がばれたプレイヤーが大勢いたりするのだ。

ちなみに逆もしかりで、女性が男性アバターを操作する際には、どこか女っぽい立ち振る舞いになる事が多い。女性プレイヤー自体の人口がさほど多くもないので、こちらはそう目にする事はないが。

しかしまあ、ここまで来るともうネカマ、ネナベというよりはもうそのままオカマ、オナベと言ってしまった方がいいのではないだろうか。

逆に言えば、今この時代においてなおネカマ、ネナベだと見抜かれていないプレイヤーは歴戦の猛者とも言える。その称号が果たして名誉であるかは別として。

「ともかく、その辺りを看破できるなら何も言わなければ、あまり過剰なスキンシップは控えた方がいいと思うよ」

そう言って心配するボクを余所に、まるで猫のように七本の尻尾と戯れる少女へと視線を移した。

鳥なのに猫とはこれ如何に。いや、鳥でもそういった遊びはするけれども。

「大丈夫だよー。ちゃんと好きな相手にしかやらないからー」

これはまた、そんな歯が浮きそうな言葉をさらりと口にして。

良くも悪くも純粹なのは良い事なのだが、お姉さんはつくねが悪い男に騙されないか心配です。

そんな会話を交わしながら、ボクたちは目当ての品と、ついでに夏野菜を幾つか仕入れ、その足で調理師ギルドへと向かう。

そこでは市場では手に入らなかった食材と、食器を数点購入した。今後増えるであろう、来客に備えての事である。

「えっ、ホットケーキ作るの!? やったー! ホットケーキー!」

新品のフライパンと、ホットケーキの材料を買い揃えたボクを見て、つくねがばさばさと両翼を振り回して周りから温かな視線を集める一幕もあったのだが、買い物は滞りなく完了し、ボクたちは改めて帰路へとつく。

とりあえず、つくねが今にも涎を垂らしそうな状態であるし、家についたらまずはホットケーキから作っていかうか。和菓子の方は、さほど急ぎでもないし。

今にも飛び上がりそうな——実際に少しばかり浮き上がっていた少女と共に、ボクは川辺の道に行く。

「お母さん、早く早くー!」

「誰がお母さんか」

羽ばたきながらせつつく雛鳥の頭を、ふわふわの尻尾が軽くはたく。

ぴい。

小鳥のような、可愛らしい悲鳴があがった。

お稲荷様とホットケーキ

パンケーキとホットケーキの違いは何か。

そんな質問を受けたことがあるが、実際のところは全く同じものだ。

海外では殆どがパンケーキとして呼ばれており、ホットケーキでは通じない場合が多い。

かといって和製英語というわけでもなく、sell^{飛ぶ} like^{ように} hot cakes^{売れる}、なんていう言葉があるように、ちゃんとした英語である。

ちなみにその歴史は古く、古代エジプトでは神への捧げ物として作られていたという。

とまあ、そんなうんちくを垂れ流しつつ、ボクは空を舞う丸いホットケーキをキャッチする。

このゲームの生産であるが、基本的には必要な素材を選択するだけで作成することが出来るようになっていいる。そうでなければ、人によって難易度が段違いに高くなってしまいうからだ。

尤も、プレイヤーが介入できる要素が全く無い訳ではなく、それぞれ最終的な加工の段階、料理であれば焼く、煮る、炒めるといった部分は手動で行なう事が出来る。

これらは任意で選択でき、手動で行った方がより品質の高いアイテムを作成し易くなっている。

自動で行った場合であっても、元々の素材が高品質であれば良いアイテムが作成できるのだがその確率はまちまちの為、効率を重視するプレイヤーは手動で仕上げを行う事が殆どだ。

皿に乗せたホットケーキにバターを乗せ、蜂蜜は別途用意したミルクピッチャーに移す。

土間のかまどでホットケーキを焼くというのも何だか不思議な感じだが、上手く出来て一安心である。

甘い香りを漂わせるホットケーキをトレーに乗せて居間へと向か

うと、そこには両翼にナイフとフォークを握り、もう待ちきれないといった表情を浮かべたつくねの姿があった。

翼でどうやって食器を握っているのかと疑問に思うだろうが、どうやら鳥でいう第一指、まあ人間の親指のようなものだが、この部分だけが独立して動かせるようになっており、簡単な掴む動作などはそこを動かして行う事が出来る様だ。

とはいえ、どちらかといえば掴むというよりは挟み込むといった方が近く、掴める物には限りがあるようだが。

「わーい、ホットケーキだー!」

「蜂蜜はどれぐらいかける?」

「いっぱいー!」

好物を前にはしゃぐその姿は本当に幼い子どもようで、ボクは思わず笑ってしまいそうになるのを堪えながら、ホットケーキに蜂蜜を回しかけていく。

バターを溶かし、とろりと流れる黄金の蜜を見つめるつくねの瞳はまるで星空のように輝き、その口元からはたたりと涎が一筋。

「本当にホットケーキが好きなんだねえ。それじゃあ、どうぞ召し上げ!」

「いただきます!」

待つてましたとばかりにつくねはナイフとフォークを構えると、それらを器用に使ってホットケーキを切り分けていく。

そうして四等分にしたホットケーキにフォークを突き立てると、大きく開かれた口にそれを放り込んだ。もきゅもきゅと咀嚼し、蕩けるような笑みを浮かべる。

なんというかもう、本当に雛鳥のようである。

このゲーム、一応十五才以下はやっちゃいけない規約になっているのだけれど、本当にこの子はその条件を満たしているのだろうか。

言動を見る限り、小学生ぐらいにしか思えないのだけれど。

少なくとも、自分と同世代だとはとても見えない。

そうして眺めているボクの視線に気づいたのか、つくねはフォークを口に咥えたままで、こてんと首を傾げてみせた。

「ほうひたの？」

「いや、なんでもないよ。　ジュースも作ってあるから、遠慮せずにごうぞ」

いや、やめよう。　純粋な彼女の顔を見て、ボクは思考を打ち切った。リアルな事を詮索するなんて、無粋もいいところだ。

ボクはあらかじめ作っておいたジュースを所持品欄から取り出すと、幸せそうな顔でホットケーキを食べるつくねの前に差し出した。かなり蜂蜜をかけるであろうと予想して、スイカを使ったさっぱりとした物を用意していたのだが、どうやら正解だったようだ。

さて、それじゃあ次は餡蜜でも作ってみようか。

割烹着の腰紐を締め直すと、ボクは再び土間へと戻る。

ああ、言い忘れていたが、料理をする際は調理師に職業を変更しているの、当然装備もそれに則した物へと変わっている。

故に、今のボクは真っ白な割烹着に三角巾姿なのだが、なんと割烹着には尻尾カバーがセットで着いているのだ。

まあ、尻尾の毛が舞わないように、という設定でそうなっているのだろうけれど、これがまた面白いデザインで、狐の尻尾を模したプリントが施されている。

テンプレートな先が白くなったきつね色のもので、過去にはこれを見たモミジが顔を真っ赤にして身悶える、なんて一幕があったりなかったり。

こればかりは、モミジの気持ちもわかる気がする。いや、これは可愛い。

さてさて、頭を切り替えて餡蜜作りである。

本来であれば寒天を水で戻して煮たりとか、白玉粉を捏ねたりだとか、色々と準備が必要なのだが、調理師のスキル【下準備】を使えばあら不思議、材料の指定をするだけで各種材料の出来上がりである。

まあ、流石にあとは盛り付けのだけとはいかず、寒天を切ったりだとか、白玉を茹でたりするところは手動で進めていくのだが、それでもかなりの手間を省くことが出来る。

寒天は賽の目状に切り分け、白玉は小さく丸め、指で軽く潰してお

湯の中へ。

茹でている間にイチゴ、キウイを切り分け、茹で上がった白玉を氷水で冷やす。

あとはそれぞれを容器に盛り付け、上から作り置きしていた餡子、白蜜をかけて出来上がりである。

「おー、次はなにを作ってるのー?」

と、そうしたところでボクの脇からによつと顔を出したのは、先程まで居間でホットケーキを食べていたつくねであった。

結構な量を食べたばかりだというのに、その目は新たな獲物を見つけたとばかりに爛々と輝き、何を言わんとしているかを雄弁に物語っている。

ガラス玉のような大きな瞳と見つめ合う事数秒。

「えーっと、食べるかい?」

「食べるー!」

間髪入れない、まさしく即答であった。

いや、まだ材料は残っているし、これはあくまで試作品であるから問題はないのだけれど。

そんなこんなで、とりあえず同じ物を二人分作成したのち、ようやく居間で一息つく事となった。

職業、装備も変更し、今は着慣れた陰陽師用の着物に袖を通してゐる。

ちゃぶ台の上には餡蜜が二つ。

硝子の容器に飾り付けられたそれはまるで宝石のように輝き、果実の甘い香りが鼻先をくすぐる。

うむ、我ながら中々の出来栄である。

「おー、美味しそうー」

「リアルでは何度か作ってるんだけど、こつちでは初めてだから味の保証はしないよ?」

とは言っても失敗していた場合は焦げたり煙をあげたり、場合によって爆発したりするので、最低限食べられるようにはなっていると思うのだが。

とりあえず白玉を一つ掬い上げて口に入れると、もちもちとした食感に続き、爽やかな甘さが口内に広がった。

ふむ、これはなかなか。

「んー、美味しー！」

同じように一口含んだつくねが満面の笑みを浮かべ、緑の翼をはためかせた。

次はイチゴ。こちらは甘さの中にほど良い酸味を含み、白蜜の甘さをより引き立てている。

さっぱりしているし、喉ごしも滑らか。これなら暑い夏場でも食べやすい。

作成時の経験値もそれなりだし、またモミジたちにもご馳走してみようかな。

そうして甘味に舌鼓を打ちながら、夏の穏やかな時間は流れていく。

心躍る冒険や、手に汗握る強敵との戦闘も良いものだが、やはりこういった穏やかな時間も捨てがたい。

ゆらりゆらりと尻尾を揺らしつつ、そんな事を考える。

窓辺に下がった風鈴が、風と共に涼やかな音を奏でていた。

お稲荷様とお稲荷さん

狐の大好物といえは何か。

そんな事を尋ねてみると、恐らくは大多数の人間が、それは油揚げだと答えるだろう。

では実際に狐が油揚げを好んで食べているかといえは、勿論そんな事は無い。

食べる事は食べる。

狐の食性は雑食である。基本的には他の小動物を狩って食べているが、必要に応じて草類をかじる事もあれば、カニやエビなどの海産物をバリバリ食らう事もある。

ではなぜ、狐の大好物が油揚げだなんて言われ始めたのか。

これには、色々と信仰やら宗教観やらが絡みややくしくなるので、ざっくりと説明しよう。

こんな、今となつてはインターネットで検索すれば数分で見つけ出せるような、どうでもいいうんちくを垂れ流しにしたところで、誰の得にもなりはしないのだから。

始まりは、狐を使いとする稲荷神、通称お稲荷さんに油揚げを奉納したのが発端だと言われる。

尤もこれには注釈がつき、元々は油揚げではなく、油で揚げたネズミを供物として捧げていたらしい。

それが後に、どんな生き物でも殺生をすればあなた、地獄に落ちるわよ、という仏教の教えが広まった事もあり、豆腐を揚げた油揚げに変じたのだとか。

つまり、狐の好物であるから油揚げを捧げているのではなく、狐、お稲荷さんを信仰する者たちの都合でそうなっているのだ。

狐からしてみれば、どうしてそうなったと首を捻りなくなる事だろう。

ではそろそろ、どうしてボクがこんな冒頭から、五百字あまりも費やして長々と話しているのか、その理由を語るとしよう。

全ては夏のとある日、我が家の扉がノックされるところから始まった。

「ほほー、此処が其方の寢床か。うむ、侘^{わび}の心を感じる良きところではないか」

「こちらカヨウ、そうじろじろと見るもんじゃありません。タマモや、お許しなんし。あとできつうい灸を据えておきんすから」

板戸を引いて見れみれば、そこには九本の尾を揺らしかんらんかと朗らかに笑う巫女服の少女と、頬に手を添え困ったように微笑む着物姿の美女が立っていた。

金と銀で合計十八本。中々に衝撃的な光景である。いや、ボクの方も含めれば計二十五本か。

もうここまで来ると、流石のボクでもちよつと引く。

もはや尻尾がゲシユタルト崩壊を起こし、何か別の生き物にさえ見えてきた。

「えーつと、お久しぶりです、カヨウさん、クズノハさん」

「うむ、久しいなタマモよ！」
にぱー。

そんな効果音さえ聞こえてきそうなほど、清々しい笑みであった。

いやはや、体型さえ現実のボクと似通っているが、ボクにはこんな笑顔は一生かかっても出来そうにない。

いや、そうではなく。

「わっちはよしやれと申しんしたが、この子は昔から、人の言う事を聞かん子でござんしてなあ」

溜息交じりにそう口にするクズノハさんの表情はどこか憂いを帯びていて、着崩した着物姿も相まって妙な色香を醸し出していた。

実際のところは、鉄砲玉のような妹に手を焼く年の離れた姉、といったところなのだが。

いや、外見的に言えば親と子と言っても——いえ、なんでもないです。

ほんの一瞬、正しく獲物を狙う狐のような鋭い眼光を浮かべたクズノハさんに対し、ボクは即座に白旗をあげた。圧倒的上位者に対し、

一切の抵抗は無駄なのである。

しかしこの人、しばらく見ない間にちよつと茶目つ気が増えているのではなからうか。

「ま、まあ、立ち話もなんですので、どうぞあがっていつてください」
「うむ、苦しゅうないぞ！」

「待ちなんし、カヨウ。あんまり下卑蔵みたいな真似をしんすと、わっちにも考えがありんすえ？」

ふんすと可愛く鼻を鳴らし、カヨウさんが我が家の敷居を跨ぐうとしたその時、彼女の首根っこを後ろからクスノハさんがむんずと掴み上げた。

その顔にはいつもの見惚れるような微笑みがあつたが、目が全く笑っていない。

一説によると、微笑みの起原は威嚇、敵に対し牙を剥く表情にあるのだという。

なるほど、確かにこれは威嚇である。

彼女の背にボクは、真つ赤な目で相手を睨み付け、牙をぎらつかせる狐の姿を幻視した。

尻尾を立てろ！ そう叫んでしまいそうなほどであつた。

いや、あれはイタチなのでどちらかといえば狐の捕食対象なのだけれど。

でもあのイタチ、催眠術使つたり馬に勝つたりするからなあ。本当にイタチなのだろうか。

ちなみに下卑蔵とは、心が卑しい、浅ましい人をさす言葉である。

「す、すまなかった姉上。久しぶりにタマモの顔を見て、妾も少し気が昂つておつたのじゃ」

「頭を下げる相手を間違えていんすよ。タマモや、おまえさんにもほんに迷惑をかけんすなあ」

「いえ、ボクは迷惑だなんて思っていないせんよ」

二人を居間に案内し、お茶を淹れる。

「どうぞ、粗茶ですが」

お約束の台詞と共に茶碗を二人に差し出すと、改めてその異様とも

いえる光景を目にボクは思わず吹き出しそうになった。

カヨウさんが小柄な分幾らかマシに見えるが、やはり九尾のお二人が並んで座ると、うちの居間ではどうしても狭く見えてしまう。

向かいに座ったボクを見て、カヨウさんが小首を傾げた。

「なんじゃ、妾の顔に何かついておるかや？」

「ああ、いえ、すみません。九尾のお二人が並ぶと流石に圧巻だな、と思ひまして」

「カヨウは里の長としてのお役目もあつて、都には滅多にきいんすからなあ」

話を聞けば、どうやら今回は海岸の隠し湯に現れた七將軍の件でヤマト様に呼び出されたようであつた。

といつても、色欲を冠するあの將軍は特にこちらに攻撃を加えるわけでもなく、本当に温泉を楽しむだけ楽しんで帰ってしまったし、場所が場所だけにあのお殿様も迂闊に兵を派遣する事が出来ず、相当頭を悩ませていたそうだが。

「まさか、妾が入る湯を見張る為に兵を立てる訳にもいかぬしなあ。かつ、あの男は昔から、抱えんでもいい頭を抱えておるのう」

それはまあ、ただでさえ信仰者が多い女神ウカノを祀る本社の傍、そしてその巫女が住まう土地なのだ。万が一不手際があれば、いったいどれほどの民草から非難される事になるのか、想像もつかない。

恐らくは現状維持に留まるだろう、それがカヨウさんの予想であつた。

「そして、聞けばいつか来た七尾の娘が、城下町に家を建てたと言うではないか。これは一つ、祝いの品でも持つていつてやろうと思うのは当然じやろうに」

白銀の尻尾を揺らしながら、カヨウさんが胸を張つて言う。

そうしてあつと声を漏らすと、その祝いの品というのを思い出したのか、いそいそと巫女装束の袖口から小さな包みを取り出して見せた。

「妾たちが臍肩にしておる店の逸品じゃ。遠慮なく受け取るといい」「これはご丁寧に。お二人に祝つて頂けるとは、恐縮です」

「タマモの口に合えばようござんすが、さき、開けてみてくんまし」
和紙で丁寧に包まれたそれを受け取り、紅白の糸を解いてみれば、そこには予想しえなかった、いやある意味では予想通りの品が。

黄金の輝きを放つ長方形のそれを見て、ボクは思わず小首を傾げていた。

「えっと、油揚げ、ですか？」

「うむ！ そのまま焼いても良いし、うどんやそばに添えても良い。妻や姉上も、これにばかりは目が無くてのう」

なるほど、確かに油揚げは狐の好物だと言われているし、妖狐族であるボクへ贈る品としてはこれ以上の物は無いのかもしれない。

しかしまあ、油揚げ、油揚げか。

「もしや、タマモはあまり好きいせんかったでありんすか？」

「む、それは悪い事をしたのう。同族じゃからてつきりタマモも好物かと思っておったのじゃが」

「ああ、いえ、そういう訳ではないのですが」

むしろ好物である。

うどんの甘辛いつゆが染みたお揚げなんかはいつも最後まで残してから食べているし、おでんの具に餅巾着は絶対に外せないものだと思っている。

それでもボクが思わず言葉を濁してしまったのは、つい先日調理師のレベルが上がリ、新たに作成できるようになった品目の中に油揚げを使うものがあったからだ。

実にタイムリーなタイミングであるので、もしやそれが二人がここを訪れるイベントのフラグになっていたのかもしれない、なんて勘ぐってしまったのだ。

そうして、調理師の件を二人に話してみれば、カヨウさんはその瞳を爛々と輝かせ、その尻尾をいつそう忙しなく動かし始めた。

そんな彼女の様子に、クズノハさんは困り顔である。

「えっと、折角こんな良い物を頂いたのですし、宜しければ召し上がっていかれますか？」

ちなみに稲荷寿司なのですが。

そう口にした途端、カヨウさんは瞬きする間にこちらへと身を乗り出し、ボクの両手をはしと握りしめていた。

尻尾はもはや千切れんばかりに左右へ振られ、狐というよりはもはや犬のような有様である。

顔が、顔が近い。

「おお、それはよい、実によい提案じゃ！　ちなみに具は人参か、椎茸か!?　紅生姜という手もあるのう！」

どうやらカヨウさんは、油揚げを使った料理の中でも稲荷寿司が好物らしい。

そんなにはしゃいだら、またクズノハさんに叱られてしまうのでは。　そう心配になつて彼女の背後をちらりと見やると、クズノハさんは袖で口元を隠しながら、なにやら視線を右往左往させていた。

気のせいのかその頬は僅かに赤くなり、尻尾もあっちへふらふら、こっちへふらふらと落ち着きがない。

いつもとまるで違うその様子にボクは面食らうが、そういえば関西では稲荷寿司を“信田寿司”と呼ぶことがあるのだとか。

そして、クズノハさんのモデルになっている妖狐、葛の葉狐の別名は信田妻。

その名の元は、彼女の伝説が伝わる大阪府の地名にあるのだが、やはりその辺りの繋がりでもあるのだろうか。

明らかに稲荷寿司に首つたけな彼女の様子を伺いながら、そんな事を思った。

こほん。　彼女は視線を逸らしながら咳ばらいを一つ。

「た、タマモの厚意を無碍に扱うのも失礼でありんしょうし、おまえさんさえ良ければ、ご同伴に与かるのも吝かではありんせんかと」

「見てわかるかとは思うが、姉上は妾以上に酢飯が詰まった油揚げに目がなくてのう。はしたないだの何だの気にして、いつもああしておるのだ」

そう耳打ちするカヨウさんに視線を向け、ボクは小さく声を漏らした。

わからなくはないが、いつも優雅で余裕のあるクズノハさんにこん

な一面があるとは、少し意外である。

恐るべし、油揚げ。

というか耳打ちするときって、やっぱりそ^頭つ^上ちの耳にするんですね。

現実とは少し違った感覚なので、少しむず痒いものがある。

「と、とりあえず、すぐに用意しますのではらくお待ちくださいね」可能であれば、この可愛いクズノハさんの姿をもうしばらく眺めていたいのだが、下手をして彼女の機嫌を損ねてしまつては元も子もない。

ボクは咳ばらいをして席を立つと、メインメニューを操作して職業を調理師へ変更する。

そうして、今となつては随分と着慣れてきた割烹着に袖を通すと、ボクは台所へと向かうのであつた。

お稲荷様とお稲荷さん②

「ふむ、それにしてもなかなかどうして、意外と様になっておるではないか」

甘く煮た油揚げに酢飯を詰めていると、居間からぼんやりとこちらを眺めていたカヨウさんが、ごろりと寝ころびながらそう言った。

九本の尻尾を抱き枕のように抱えながら、右へ左へ退屈そうに転がっている。

「まあ、小さい頃から台所には立っていましたから」

料理は好きだ。

自分好みの味付けにアレンジできるし、上達すればしっかりとそれを実感できる。

そして何より、気分転換になる。

初めは必要に迫られただけで、料理だってレシピに記された手順に沿って食材と調味料を組み合わせる、単純で退屈な作業のように考えていた。

我ながら、可愛げのない子どもであったと思う。

しかし数をこなし、そのレパートリーが増えていくにつれ、ボクはその作業を楽しいと感じるようになっていった。

そうして一年経った頃には、料理はすっかり趣味の一つになり、ボクは喜んで台所に立つようになったという訳だ。

「ほんに、タマモは良き女子でありんすなあ。父様や母様も、さぞ鼻が高い事でありんしょう」

「いえ——」

三角形に整えた稲荷寿司をお皿に盛り付けたところで、手が止まった。

さっと、頭から氷水を浴びたように身体中の熱が引き、目の前が僅かに暗くなる。

——気持ち悪い

モノクロの映像が脳裏を走り抜けていく。

本、沢山の答案用紙、割れた姿見、引き裂かれたぬいぐるみ、叫ぶ女――

目を閉じ、大きく息を吸う。

そうしてゆつくりと目を開けば、そこには先程と何も変わらない光景が広がっていた。

「いえ、そんなに褒められた人間ではないですよ、ボクは」

山と積まれた稲荷寿司を盆に乗せ、二人が待つ居間へと戻る。

しかし目の前に好物である稲荷寿司の山を置かれても、二人の瞳はじつとボクの方へ向いたままであった。

二人の如何にも神妙な顔に、ボクは苦笑いを返す。

「はは、少し立ちくらみしただけですよ。気にしないでください」

「……いや、それならば良いのじゃが。ほれ姉上、折角タマモが手ずから作ってくれた料理じゃぞ、ありがたく頂くとしよう」

手を打ち、大袈裟に尻尾を振りながらカヨウさんが稲荷寿司を手に取り、かぶりつく。

そして数度咀嚼すると、頬に手を添えて蕩けるような笑みを浮かべた。

その様子を横目で眺めていたクズノハさんもこれには毒気を抜かれたようで、やがて小さく息を吐き、稲荷寿司の山に手を伸ばした。カヨウさんのようにかぶりつくような事はせず、三角形の頂点を啄むようにして口に含む。

そうして一口、二口と続けるうちに眉間に寄っていた皺は解れ、一つ食べきる頃には口元に笑みさえ浮かんでいた。

「んー、これは美味じゃ。酢飯に混ぜておるのは人参と椎茸か」

「はい、どちらもシズノさんから頂いたものです」

「おお、シズノか！　そういえばあの娘ともしばらく会っておらんのか」

娘というにはかなりお歳を召されているように思えるが、彼女のしばらくとは、いったいどれぐらいの事を指すのだろうか。いや、深く考えるのはよそう。

次々と稲荷寿司を口に放り込んでいく見た目だけは少女なカヨウ

さんを眺めながら、ボクは思考を打ち切った。

ちなみにそのシズノさんであるが、今でも川釣りをしに出かけた際には必ず彼女のところに顔を出すようにしている。

最初は結構渋い顔をされたり、邪険にされたりしていたのだが、最近ではこうして野菜を分けてくれたりだとか、川辺で世間話に興じる回数も増えてきたように感じる。

庵がある場所も静かな良い所であるし、個人的にはああいった人里離れたところにマイホームを建てたいぐらいだ。

ところで――

「クズノハさん、本当に稲荷寿司がお好きなんですね」

そう言って視線をカヨウさんの隣に移すと、見慣れた九本の尻尾が一斉に毛を逆立てた。

いや、一口自体はそんなに多くないにも関わらず、食べるペースがカヨウさんと同じってどういう事なのかと。

稲荷寿司に似た三角の耳を力なく垂らし、頬を桜色に染めたクズノハさんは潤んだ瞳をついと横へ流した。その手には少し小さくなつた稲荷寿司がはつしと握られている。

「う、卑しい女と思わんでくんなんし。酢飯の詰まった油揚げには、昔から目が無いんでありんす……」

大きな九本の尻尾がしょんぼりとしな垂れ、柳のように左右に揺れる。

不思議な事に、ただ稲荷寿司を食べているだけのはずであるのに、その姿にはどこか官能的な妖しさがあつた。

しかし、いつもはあれほど優雅で淑やかなクズノハさんをこうも変えてしまうとは、油揚げの魔力とはかくも凄まじい物なのか。

ああ、ちなみに稲荷寿司が三角形なのは、作り方を教えてくれた祖母が関西人だったからだ。

稲荷寿司は関東、関西で形が違い、関東では米俵を模した俵型、関西では狐の耳を模した三角形の稲荷寿司が一般的になっている。

ともあれ、二人が稲荷寿司を食べる姿を眺めているのもこれはこれで楽しいが、折角こんなに沢山作ったのだし、そろそろご同伴に与か

るとしよう。

あつという間に半分以上無くなってしまった稲荷寿司の山に手を伸ばし、まずは一口と三角形の頂点に小さく噛り付いた。

ふわりとした食感の後、味が良く染みた油揚げから甘辛い風味が溶け出し、酢飯のほど良い酸味がそれを追いかけていく。

人参の食感、椎茸の甘みも良いアクセントになっているし、我ながら良い出来だ。

「ううむ、しかし良い腕をしておるのう。そうじゃタマモよ、お主巫女になってみる気はないか!？」

そう図々しくも自画自賛していると、カヨウさんがはつと手を打って声を張り上げた。

突然の事にびっくりと肩が跳ね、二人よりも二本少ない尻尾がぴんと気を付けをする。

巫女とは、これはまたいきなり何を言い出すのだろうか。

たしかにカヨウさんの屋敷は女神ウカノを祀る総本社も兼ねているし、彼女自身もその巫女ではあるのだが、現バージョンではプレイヤーが巫女になる事なんて出来なかったはずなのだけれど。

小首を傾げるボクに対し、鼻息荒くちゃぶ台から身を乗り出すカヨウさんの頭を、クズノハさんの大きな尻尾がはたき落とした。

「カヨウや。我らが神、ウカノ様に仕える巫女ともあろう者が、そのような邪な考えで人を唆すなど許されると思うていんすか？」

「い、いや、姉上よ。妾は決して邪な事など――」

「カヨウ？」

につこり。

それは先程玄関で見せた、妖艶さと強者の風格を併せ持った微笑みであった。

だらだらと顔中から冷や汗を流しながら、カヨウさんはひゅうひゅうと鳴りもしない口笛を吹きながらそつぽを向く。直後、鞭のようにしなった九本の尻尾が一斉に彼女の頭に襲い掛かった。

が、カヨウさんは甘んじてそれを受ける気はないらしく、自身も同じ数の尻尾を操り迎撃にかかる。

受け止め、いなし、あるいは尾を絡めて動きを封じながら、合計十八本の尾が壮絶な攻防を繰り広げる。

その光景はさながら足を止め打ち合うボクサーさながらであり、ぶおんぶおんと重苦しい音が響くほどであった。

そして念のために言っておくが、これはあくまで姉妹喧嘩というやつであり、ここはリングの上ではなくボクスの家の居間である。つまり、終了のゴングを鳴らす者は存在しないのだ。じーぎす。

まあこの家にある物は壁や天上、襖に至るまで破壊出来ないように設定されてはいるので、デンプシーロールだろうが何だろうがどうぞやってくださいというところなのだが、とりあえず稲荷寿司は退避させておこう。

そうしてボクはこの姉妹喧嘩の仲裁を早々に諦め、稲荷寿司が積み重なったお皿を手に部屋の隅へと避難を完了させた。

しかし巫女、巫女かあ。

ちびちびと稲荷寿司を頬張りながら、ボクは先程のカヨウさんの台詞を思い出す。

たしかに、現バージョンでは巫女という職業は実装されていない。しかしこれはMMORPG^{ネトゲ}であり、当然バージョンアップや拡張パックの発売に伴って、新たな職業が実装される可能性は大いに考えられる。

もしかしたら先程のカヨウさんの台詞は、そういった新職業の追加を示唆したものだったのかもしれない。

だとしたら、実に心躍る話である。

聞くところによると忍者になる為のクエストもまだ見つからないという事だし、これはもしかするともしかするかもしれない。

拡張パックで忍者が実装されるというのも、何やら不穏な響きがあるが。

汚い、流石忍者汚い。

「こやんつ」

そんな事を考えていると、どうやら壮絶なる攻防にも決着が着いたようである。

可愛らしい悲鳴をあげ、大の字で倒れ込む巫女服の少女を見て、ボクは苦笑いを浮かべた。

お稲荷様と夏祭り①

夏である。

頭上に燦々と輝く太陽。彼方に佇む入道雲。

熱せられたアスファルトからは陽炎が昇り、じわじわと蟬の声が辺りに響く。

現在の気温は三十九度。

二十二世紀の現代においても地球温暖化の影響は留まる事を知らず、まだ八月にも入っていないというのに連日この猛暑が続いていた。

まさに灼熱地獄。こんな日でも立派にお勤めを果たすサラリーマン諸君には、全く以て頭が下がる思いである。

空調が利いた快適この上ない室内。お気に入りのソファに腰かけ、テレビ画面に映った汗だくのアナウンサーを眺めながらそう思う。

ボクならば外に出た途端、瞬く間に昇華して消滅する自信がある。

君子危うきに近寄らずとも言うし、ボクはこの、太陽が加減を間違えたとしか考えられない気温が下がるまで、徹底して引きこもらせて頂くとしよう。

かつて、文明は人間を墮落させると言った哲学者がいたが、まさしくその通りだ。

文明万歳。

この快適な空間で生きていけるなら、ボクは喜んで墮落者になろう。

そうしてボクがソファに横になってだらけていると、テーブルの上に置いていた携帯電話が軽快な受信音を鳴らした。

重い身体を引きずるようにして手を伸ばし、ブレスレット型のそれを掴み取る。表面を数度指先で叩けば、そこから浮き上がる様にして表示された画面の中には、もう随分と見慣れた友人の名前が浮かんでいた。

なんだろう、俄かに嫌な予感がする。

僅かな葛藤の後、ボクはふらつく指先で通話ボタンをタップした。

「はい、もしもし?」

『あ、もしもしタマモ? ごめんね急に電話しちゃって。今、大丈夫?』

ブレスレットからモミジの声が響く。

ショッピングモールでの一件以降、こうしてゲームの外でモミジたちとコミュニケーションをとることも随分と多くなった。まあ、顔を合わせるのは例のショッピングモールぐらいなのだが。

ちなみに移動はタクシーを利用している。あの時のように、殺意すら感じる日差しの中を歩く愚行を二度も犯す程、ボクは馬鹿ではないのだ。

しかし、こちらの電話番号を伝えてあるとはいえ、どこかへ遊びに行こうだとか、そういったお誘いは殆どゲームの中でしていたのだが、今回はいったいどうした用件なのだろう。

『あのね、今週の土曜日に河川敷で花火大会があるんだけど、タマモも一緒にどうかなって思って』

花火大会。そういえば、もうそんな時期か。

毎年うちの近所の河川敷では大規模な花火大会が開かれており、道路は全て封鎖、所狭しとひしめき合う人混みを眺め、決してあのような荒波には近づくまいと顔を青くさせた記憶がある。

まさかとは思うが、モミジはボクに、自分と共にあの荒れ狂う海に漕ぎだそう、などのたまっているのだろうか。

人の思考能力をこうまで低下させるとは、げに恐ろしきは夏の猛暑か。

戦慄し、冷や汗すら流しながら、ボクは意を決して口を開く。

「断固拒否する」

『ですよねー……』

当然である。

花火や夜店、縁日の雰囲気は好きだが、人混みは大嫌いだ。

うだるような暑さ、充満する汗や酒の匂い、騒ぐ若者たち。そのどれもが癪に障る。

神社の境内で開かれるような、こじんまりとしたお祭りならともかく、数百人規模で人が集まるような花火大会なんぞ、誰が好き好んで参加するものか。

「だいたい、花火が見たいのならログインすればいいじゃないか」

現在ゲーム内は夏祭りイベントの真っ只中。

王都やジパングでは夜になると大きな花火が上がり、大通りには様々な夜店が並んでいる。

お祭りを味わうのであれば、そちらの方が快適だと思うのだが。

『私は、現実^{リアル}のタマモとお祭りに行きたいの！ ほら、コタローとハヤトも一緒にお願いしてよー！』

どったんばったんと、画面の向こうから何やら慌ただしい物音が響く。

『何で俺なんだよ、お前が言い出したんだろうが！』

『コタローだってタマモの浴衣姿見たいって言ってたじゃん！』

『言ってねえ、シな事一言も言ってねえよ！』

『じゃあハヤトでいいから！ ほら、早く！』

『しょうがないなあ、もう』

相も変わらず、騒がしい三人組である。

ぎやあぎやあといまだ口論を続ける二人の声を背に、電話を代わったハヤトが困ったように溜息を漏らす。とりあえず、早急に確認しておきたい事が一つ出来た。

「すまない、もしかとは思いますが、コタローは実はロリコンなのかい？」

ボクの浴衣姿が見たいと言ったりだとか、そういえば、いつぞやカヨウさんの屋敷に向いた時も、彼女に迫られて顔を赤くしていたような気がするのだが。

それこそ、思春期の男子ならばもつとこう、肉感的というか、ぼんきゅつ、ぼんな女子の方へ興味を向けるのが当然なのではないだろうか。

ふむう、まあ、なんというか、あれだ。

お巡りさんこの人です。

『いや、本人の名誉の為に言っておくけど、決してそんな事実はないか

らね?』

「それならよかった。危うくフレンドの一人をブラックリストに突っ込むところだったよ」

『誤解が解けたようで、本当によかったよ……』

画面の向こうでハヤトが盛大に溜息を吐いた。勿論、ブラックリストの下りは冗談である。半分ほどは。

いや、最近は女兒に性的魅力を感じる変態も増えてきたという話なので、念の為にね。

実際、道端で歩いているだけで何やら鼻息荒く話しかけられた経験もあるし。

あの時は本当に驚いた。

合法口りだの、踏んでくださいだの、バブみが高いだの、何やら物騒な事を並び立てていたので、その時は通りすがりのお巡りさんに声をかけて早々にご退場願ったのだが、いやはや物騒な世の中になったものである。

ちなみに少子高齢化が進んだ現代、一部の国では早婚政策と銘打って、十代前半の男女に結婚を促す政策が行われていたりする。

まさしく、生めよ、ふえよ、地にみちよ、を地で行く政策に各国は賛否両論入り乱れているのだが、ペドフィリアの諸君には是非、その政策が行われている某国への亡命をお勧めしたい。

大丈夫、ちよつと改宗する必要があるだけで、苦痛を伴う訳ではないので安心してくれたまへ。

イエスロリータ・フータツチ
閑話休題

「で、花火大会の話だったかな?」

『何だか、とても下世話な方向に話が逸れていた気がするよ……』

きつと気のせいである。気にしてはいけない。

『そうした方が良さそうだね……。と、とにかく、モミジも楽しみにしている事だし、花火だけでも見に来ないかい? 夜だから日焼けも気にしないでいいし、花火を眺めるだけなら会場から離れた、人が少ない場所でも大丈夫だと思うから』

冷凍庫から取り出した棒アイスと共に、ボクはハヤトの言葉を咀嚼

しながら考える。

あの、この世のあらゆる混沌を煮詰めたような人混みはたしかに嫌いだ。想像しただけで陰鬱とした気分させられる。

しかし反面、花火のような風情溢れるものは非常に好ましい。

ボクも毎年、我が家のリビングでゆつたりと寛ぎつつ、遠くで上がる夏の風物詩を楽しんでいるぐらいである。

実際はバルコニーに出た方が綺麗に見る事が出来るのだが、外は暑いし虫も出るので、滅多に使う事は無い。

と、そこまで考えたところで、ボクの脳裏に閃きが走った。

「ハヤト、花火を楽しみたいのであれば、いい方法が一つある」

たしか今週の土曜日はあの人も来る予定は無いし、丁度良いだろう。

あの人が来ると、皆でゆつくりと花火を楽しむ暇も無くなってしまいうだろうし、何より鬱陶しい。

ちなみにあの人というのはボクの母親の妹。いわゆる叔母にあたる女性の事だ。

いや、決して悪い人ではないし、ボクも随分とお世話にはなっているのだが、なんというか、人格に問題があるというか、人目を憚らない部分があるというか、とにかく困った人なのだ。

本当に、悪い人間ではないのだけれど。

頭を振り、ごほんと咳ばらいを一つ、仕切り直す。

「これから言う住所をすぐにメモってくれ。せっかくの花火なんだ、特等席で眺めないと損というものだろう？」

締め切ったカーテンの隙間から、当日は人でごった返すであろう河川敷の方へと目をやりながら、ボクはそう言って棒アイスを齧る。

容赦なく差し込んできた日光に目を焼かれ、某大佐の如く悶えながらフローリングの上を転がり回る、僅か数秒前の出来事であった。

本当に、太陽なんて大っ嫌いだ。

お稲荷様と夏祭り②

「お邪魔しまーす!」

さて、花火大会当日。我が家には先日約束した通り、モミジたち仲良し三人組がやってきていた。

愛らしい桜色の浴衣に身を包んだモミジが元気よく片手をあげ、その後ろにはそれぞれ青と紺の着流し姿のハヤトとコタロウが、両手にビニール袋を提げて立っていた。

どうやらここに来るまでに夜店を回ってきたようで、中にはいくつもの白い容器が入っている。

僅かに届く香ばしいソースの匂いから察するに、たこ焼きや焼きそば辺りだろうか。

「ああ、これ?　せっかくだし、タマモと一緒に食べようって皆で買ってきたんだ」

ボクの視線に気付いたハヤトが、袋を差し出しながら言う。

受け取った袋の中を確認すると、たこ焼きに焼きそば、たい焼き、りんご飴まで、お祭りの夜店で揃えられる全ての食べ物詰まっているのではないか。そう思うほどのラインナップである。

これはまた、随分と買い込んだものだ。

「こんなに沢山。ちよつと待っててね、財布を取ってくるよ」

「いいよ、気にしないで。こんないい所に呼んでもらったんだから、そのお礼——」

「可愛い——」

ハヤトの言葉を遮って響いた、感極まったそんな声と共に、目の前が桜色一色に染まった。突然の圧迫感と息苦しさに、ボクは思わず呻き声を上げる。

鼻先をくすぐる僅かな甘い香り。ボクの頭を力いっぱい抱きしめながら、モミジは悶えるように身をよじった。

「ヤバイよお、めっちゃ浴衣似合ってるよお、お人形さんみたいだよお……!」

どうやら、ボクの浴衣姿が相当お気に召したらしい。

どうにか彼女の胸元から逃げ出そうと抵抗してみるものの、根っからの引きこもりであるボクと、スポーツ少女であるモミジでは馬力が違い過ぎる。

何とか首を捻って呼吸だけは出来るようになったが、頭は撫でられるは、なにやら良い香りはするはで、このままではボクの正気が危うい。様々な意味で。

しかし、こんな時こそ我が灰色の脳細胞をフル稼働させ、この状況を打開する為の答えを導き出す時である。

考える、考える、考える。

そしてボクは、これこそが最善であり、最良の回答を導き出す事に成功した。この間、僅か五秒。

ではでは、これよりその模範解答をお見せするでしょう。

ボクは僅かに右足をあげ、狙うべき標的をしかと見定めた後、渾身の力を籠めてそれを振り下ろした。

「ふんっ！」

次の瞬間、お気に入りのスリッパの先端が正確にモミジの脛を打ち抜き、頭上から声にならない悲鳴があがった。抱き締めていた腕の力が抜け、その一瞬の隙を逃さず、ボクは彼女の胸元から脱出する事に成功する。

やれやれと息を吐き、脛を蹴り飛ばした相手の様子を確認してみると、そこには顔を真っ赤にして脛を押さえ、悶絶する少女の姿があった。

とはいえ、別に爪先に鉄板を仕込んでいる訳でもなく、さらに言えばいくら脛を狙ったとはいえ、蹴ったのが根っからのもやしっこ、貧弱を絵に描いたような人間であるボクなので、その反応は些か過剰ではないかと思わないでもない。

「ぐおお、ひ、ひどいよタマモ……っ！」

「いや、今のはお前が悪い、反省しろ」

目尻に涙を湛えながら抗議するモミジの後ろで、コタロウが頭を抱えながらため息を吐く。その横ではハヤトが苦笑いを浮かべてお

り、どうやら同情の余地はないらしかった。

頬を餅の様に膨らませてモミジが立ち上がるのを確認すると、ボクは三人をリビングへと案内する。

三人はどうにもこういった場所に来るのは慣れていないのか、ボクが飲み物を用意している間、部屋の中を眺めながらへーほうとなにやら間拔けな声を漏らしていた。

特に珍しくもないし、殺風景で味気ない部屋だと思うのだけれど。そんな事を言ってみれば、三人同時に真っ向から否定されてしまった。

御三方曰く。

「いやいや、前まで来たとき、本当にここなのか不安になったから」「ここってあれでしょ？ 芸能人とかが住んでたりするんでしょ？」

「ホント、金持ちっているもんだな……」

と、その顔にはなにやら達観の色さえ浮かんでいた。

ボクとしては全く以て、これっぽっちも齧りたくない親の脛を齧られているだけであるし、ある意味では鳥かご、虫かご、水槽と変わらない場所であるので、自慢にすらならない場所であるのだが。

まあ、初めは押し付けられただけの引きこもり生活ではあったが、今となつては非常に性に合っているし、齧りたくないその脛のおかげでゲームの世界に入り浸っていられるので、そこは感謝してあげてもいいのかもしれない。

「一人で住むには広すぎるし、あまり良いものではないけどね」

「え？ 呼び鈴を押した時に出てくれた女の人って、タマモのお母さんじゃないの？」

湯呑を傾け、ほっと一息を吐いたボクに対し、モミジが小首を傾げながらそう疑問を口にした。

はて、お姉さんとはいったい誰の事か。そうしばし思考を巡らせた後、ボクは一人得心すると、ぽんと手を叩いた。そんなボクの様子を見て、モミジがますます首を横へ傾けながら、訝しむような視線を向ける。

「残念ながら、ボクは一人暮らしだよ。少し誤解があるようだから、ま

ずは紹介しておこうか」

ミズハ―。

ボクが短く彼女の名を呼ぶと、テーブルの上に置かれていた丸い端末から四角い画面が浮かび上がり、それに驚いた三人がびくりと肩を跳ね上げた。

現れた画面の中には『MIZUHA』の文字。我が家の家政婦兼、警備主任兼、監視員兼、ボクの友人でもある人工知能ミズハのご登場である。

生活補助プログラムである彼女たちが登場してから数年、ある程度は一般家庭にも普及している筈なのだが、この三人の反応を見る限り、どうやら目にするのは初めてだったらしい。

『はい、お呼びでしょうか？』

小型端末のスピーカーから、柔らかな女性の声が響く。

まるで機械とは思えない、息遣いさえ感じられるその声に、モミジはまた気の抜けたような声を漏らし、テーブルに置かれた端末の前へと身を乗り出した。大きな瞳を輝かせ、嚙り付くように画面を見つめるその様子は、まるで素敵な玩具を前にした子どものようだ。

「ミズハ、三人に自己紹介を」

『畏まりました。皆様初めまして、私は生活補助プログラム、第三世代家庭支援ソフトMIZUHAと申します。主に各家庭ロボットの操作を担当し、掃除洗濯炊事など、もあ様のお手伝いをさせて頂いております』

「げっほ、ちょ、ミズハ―」

流れるように暴露された衝撃の真実に、ボクは口に含んでいた日本茶を危うく吹き出しそうになるのをなんとか堪え、咳き込みながら小型端末のスイッチを切る。

なんだろうか、茶の間でテレビを眺めていたら、のど自慢大会に突然自分のお爺ちゃんが登場したような、まさしく意識の外からの攻撃であった。

しんと静まり返った室内。ほっと肩を撫で下ろすボクの背に、突き刺さる視線が三つ。興味津々といった風なものと、困った風なもの

と、呆れた風なもの。

そんな視線を浴びながら恐る恐る背後へ目をやれば、案の定とい
かなんというか、そこには先程よりもいっそう瞳を輝かせたモミジ
が、喜色満面といった顔でこちらを覗き込んでいた。

「な、なになかな？」

「さっきのもあつて、タマモのホントの名前？」
うぐう。

ボクは言葉に詰まる。

いや、別に本名がばれたところで、ボクにとってはなんら差し障り
のない事なのだけれど。なんだろうか、こう、心の準備というか、カ
ミングアウトの際には、そういったものが必要だと思うのだ。

いやいや、家に招いた時点で、表札やらなんやらで本名が露呈する
のは想定内の範囲内であるのだけれど、それにしたって順序というもの
があるだろうに。

ボクは誤魔化すように咳ばらいを一度し、頭を掻いた。

「そうだよ、それがボクの本名だ。夜桜よさくらと書いて、夜桜もあ。苗字の方は、
うちの表札を見てもう知っているだろう？」

「えっと、確か玉津嶋、だったかな？ ああ、それでタマモなのか」
得心いったように、ハヤトが手を叩いた。

出来る事なら本名は名乗りたくはなかったのだが、こうなつてし
まった以上は仕方がない。

『玉津嶋たまつしま 夜桜もあ』

それがボクの本名である。もつとも、訳あつて今は母方の姓を名
乗っているのだが。

そして、字を見れば一目瞭然だろうけど、本名の頭文字をとってタ
マモ。それが、ボクのプレイヤーネームの由来となっている。

ボクは袋からたこ焼きの容器を一つ取り出し、ソースと青のりがか
かったそれに爪楊枝を突きさすと、おもむろにそれを口へと放り込ん
だ。

「あまり好きな名前ではないからね、これからタマモの方で呼んで
くれると助かる」

咀嚼したそれを冷えた麦茶で流し込み、ボクは改めて三人の方へと目を向ける。

ちなみにボクが自分の名前を嫌っているのは、その音が原因だ。

夜桜、もあ、More。

Moreというのは、『もつと』という意味を持っている。

More、More、More、なんて、あまりお行儀がいい風には聞こえないのだろうか？

どうせなら『よざくら』という読みのままでよかったのに、どうしてもボクの両親はこんな名前にしたのだろうか。まあ、あの両親の考える事なんて、ボクには理解できないだろうし、するつもりもないのだけれど。

「タマモの方が呼び慣れてるしな。そっちの方が俺たちも楽だ」

「タマモはタマモだしねー！」

「それに、リアルネームで呼び合うネットゲ仲間って、そっちの方が珍しいと思うしね」

そんな風に快諾してくれた三人にボクは礼を言くと、バルコニーを仕切る大窓のカーテンを開く。同時に、大きな爆発音を響かせながら、窓の向こうに大輪の花が咲いた。

おお、と三人が声をあげる。

そう、うちのバルコニーは花火大会が行われる河川敷側に面しており、ここからならば、川の中央で打ち上げられる花火を一番綺麗に眺める事が出来るのだ。これこそが、ボクが三人を家に招いた一番の理由でもあった。

「ちようど始まったみたいだね。よかったら、バルコニーから眺めてみるかい？」

テーブルならばバルコニーの方にも用意してあるし、日も落ちて暑さも随分とマシになってきた。今晩は風も吹いているし、外に出ても快適に過ごすことが出来るだろう。

窓を開け、三人と共にバルコニーへ向かうと、モミジが手すりから身を乗り出さん勢いで花火を眺め、おおー、と感極まった風な声をあげる。

そんな彼女の姿にボクたちは肩をすくめると、テーブルの上へと屋
台で買い揃えた料理たちを並べていく。

赤、青、緑。色とりどりの花たちが鮮やかに夜空を飾り付け、少年
少女の楽し気な声が響く。

この場を設けたのは、本当に正解だった。機会があれば、また誘っ
てみるでしょう。

花火を眺めながら歓談する三人の姿を眺めながら、ボクはそう心に
決め、用意された料理に舌鼓を打つのであった。

お稲荷様と拡張ディスク

花火大会が終わり、長いようで短い夏休みの終わりが見えてきた頃、とうとう『The Another World』プレイヤー待望の、拡張ディスクに関する新情報が公開された。

気になるお値段は基本パッケージの半値程で、新職業、新エリア、新装備など、通常のアップデートとは比較にもならない量の新要素を追加する事が出来る。

その中でも注目を集めたのは新職業で、以前から存在が仄めかされていた巫女や忍者の他、踊り子、人形遣い、聖騎士や暗黒騎士。さらに生産職では演奏家に画家と、なんと合計八種類もの職業が追加されるそうだ。

巫女、そして踊り子はヒーラー、騎士系の二つはタンク、忍者と人形遣いがアタッカー向きの職業らしく、同時に公開されたプロモーションントレーラーでは紅白の巫女装束に身を包み、手にした鈴を鳴らしたおやかに舞う巫女の姿や、漆黒の鎧を纏い、身の丈程の巨大な剣を振り回す暗黒騎士、印を結び、口から火を吹く忍者など、新職業たちが活躍する姿を見る事が出来る。

忍者はタンクではない。大事な事なので二回言うが、忍者はタンクではない。

分身つばい術を使って攻撃を避け続ける、本職をあつという間に不遇職に追いやった忍者なんていなかったのだ。汚い、流石忍者汚い。

それはともかく、個人的に気になるのは巫女、人形遣い、生産職では演奏家あたりだが、まあそちらに手を出すのは陰陽師のレベル上げが終わってからになるだろう。今回の拡張ディスクでは追加要素の他に種族、職業レベルの上限の引き上げも実施され、最大九十までレベルを上げる事が出来るようになるのだ。

レベル九十。それはつまり、ついに、とうとうあの憧れていた存在に手が届くという事。

そう、待ちに待った、念願であつた九尾へと至る事が出来るのだ。この新情報を耳にしたボクは思わず声をあげ、手を叩いて喜んだも

のだが、なにやらレベルキヤップを解放するためのクエストをこなす必要があるらしく、いったいどんなマゾい難易度になるのか、今から戦々恐々といった心持ちである。

「タマモは、なにか新しい職業をやってみたりするの？」

ジパング内にある我が家。窓辺で風鈴が涼やかな音を響かせる中、畳の上で横になったモミジが、台所で甘味の作成に勤しむボクに視線を向けながら言った。

ちなみに本日のおやつは、暑い夏にぴったりの冷やしぜんざい。あつさりとした甘さの薄茶^{お薄}にもちもちとした丸餅と白玉を浮かべた、実に涼やかな一品である。

「巫女とか人形遣いあたりには手を付けるだろうけど、陰陽師^{メイシ}のカンストが先だから、始めるのは少しあとになると思うよ」

器に盛り付けたそれを、もうすつかりとうちの常連になったモミジの元へと届けながら、ボクはそんな風に返す。

職業を変更し、着慣れた陰陽師の恰好に戻ると、もうじき九本になるであろう黒い尻尾を揺らしながら彼女と向かい合う場所に腰を下ろした。

「モミジはどうなのさ。踊り子の装備とか、可愛いデザインの方が多そうだけれど」

ぷりつとした白玉を木製の匙で掬い上げ、まずは一口。さっぱりあつさりとした抹茶の甘味が口内に広がり、ほど良い弾力の丸餅、ぷちぷちとした小豆がアクセントになって食べる者を飽きさせない。

我ながらいい仕事をしたな。なんて自画自賛しつつモミジの方へ目を向けると、彼女はちやぶ台の反対側で匙を口に咥えながら、蕩けるような笑みを浮かべていた。どうやら、彼女の口にも問題なく合ったようで一安心である。

「相変わらずうまーっ……！ あ、ごめんごめん、踊り子の話だっけ。私も動画は見たけど、ちよつと露出が多そうだからパスかなあ」

モミジはぜんざいをもう一口放り込みながら、少しばかり赤くなった顔で横を向いた。

彼女の言葉通り、動画内で登場する踊り子の装備は上下が別になっ

たビキニタイプ、いわゆるベリーダンス風の衣装となっており、全体的なデザインは水着とそう大差ない。

そして踊り子というだけあって、スキルモーションもしなやかなベリーダンスや激しい動きのフラメンコ、サンバなどが元になっているようで、露出度の高い衣装と相まって、どこか煽情的な雰囲気があったのを覚えている。

たしかに、現実と全く異なる、あくまでもゲーム内のキャラとして割り切れるアバターを使っているプレイヤーならともかく、モミジのアバターは顔立ちは勿論、恐らくは身体つきに至るまで全て現実の肉体そのまま。似合う似合わないは別として、やはり気恥ずかしさは拭えないだろう。

「いい加減、モミジもアバターを作り替えた方がいいんじゃないのかい？」 現実そのままの肉体だと、なにかと面倒だろうに」

ボクがそう言って小さくため息を吐くと、モミジは眉間に皺を寄せて、なんとも言えぬ苦い顔をした。

【変身薬】。たしかそんな名前だったか。

先の大型アップデートで追加された課金アイテムで、使用するとアバターのデザインを一から作り直すことが出来る。変身薬自体はさほど値の張るものでも無かった筈だし、モミジの小遣いでも買えない事はないだろう。

それに彼女のメインは治癒術師だ。魔法職の適正が高いエルフや魔族に変更すれば、人間族に比べて少しは動きやすくなるし、ボクからすれば、その職に必要なステータスがほんの僅かでも違うのならば、迷わず高い方を選ぶべきだと思うのだけだ。

「んー、私もそれは考えたんだけど、課金アイテムかー。ハヤトと相談してみようかなあ」

「それもいいかもね。タンク職でやるならオーク族がお勧めだよ」

ボクも野良パーティーで何度かお世話になった事があるが、あの鎧に身を固めた、いかにもタフそうな巨体。大きな盾と背中に、妙な安心感を覚えたプレイヤーは少なくないのではないだろうか。

装備を厳選してしまえば、ある程度は誤差の範囲に収まる差ではあ

る筈なのだが、不思議なものだ。

一部では何を思ったのか全身を白く染め上げ、上半身裸のパンツ姿で街中を走り回るプレイヤーもいると聞くし、本当にネタには困らない種族である。

「ハヤトがオークは、ちよつと……。それならせめて、リザードマンの方がいいかなあ」

苦笑いを浮かべながら、モミジはまたぜんざいを口に含む。

リザードマンの身体は爬虫類そのままの見た目からしてひんやりしていきそうだし、たしかにこの季節には丁度いいのかもしれない。その外見に嫌悪感を抱かないのならば、ではあるが。

ちなみにボクは大丈夫なタイプの人間で、蛇でもトカゲでもどんとこいである。ああ見えて、人懐っこくて可愛い子が多いのだ。まあ、餌が基本的に生餌なので、どちらかといえばそっちの方がダメ、という人も少なくないだろうけれど。

あ、種類によつては結構噛むし、大きくなったりもするので、あまり気軽に飼いだめたりはしないように。まあ、これは爬虫類に限らず、ペット全体に言える事なのだが。捨てるなんて以ての外だ。

外来種は日本の在来種を容易く駆逐し、繁殖する。誰かが気安く放った一匹が、生態系を破壊するなんて事はざらなのである。

命を育てる以上、そこには必ず責任が発生する。それを覚悟したうえで、最後まで面倒を見るように。

うちは飼ってないけどね
閑話休題。

「まあ、値段が手ごろとはいえ課金アイテムだし、そうステータスの差を意識するほどガチ勢でもないから無理に勧めはしないけれど、もし外見的要因で新職業に手を付けるのを迷っているのなら、一度お試し感覚でやってみるのも手かもしれないね」

「うん、考えてみるー。あ、種族の話で思い出したんだけど、タマモつてあのお店知ってる？王都にある、ちよつとした人気のお店なんだけど」

空になった器を片づけていると、満足げにお腹をさすりながらモミジがそんな事を尋ねてきた。

種族絡みで、王都で、人気店といえば、アップデート後に建てられたあの喫茶店だろうか。

大通りから少し外れた、裏路地にある隠れ家的なお店なのだが、その日に店主が指定した種族のプレイヤーだけしか入れないという、一風変わったルールがあるお店なのだ。

指定される種族に規則性は無く、さらには性別の指定が入る日まであったりとなかなか気まぐれな店主なのだが、彼が振る舞う料理は絶品で、そこではしか受けられないクエストまであるのだとか。

残念ながらボクはまだお店に入れたことがないのだけれど、縁があれば是非とも一度味わってみたいものだ。

「タマモもかー。私もまだ入れた事ないんだよねー。噂によると、種族に合わせて扱う食材とかも変えてるんだって。気になるよねー」

ああ、たしかに、オークのお客さんに豚肉なんて出したら、下手をしたらクレーム案件に発展しかねない。いや、共食いだとかそんな設定上の話ではなく、種族に合わない食材を口にする、短時間ではあるがステータス低下のデバフが付くのだ。

いつぞやかフレンドになったハーピー族の少女などは、ボクの作った親子丼をもりもり食べたあと、数秒間ステータス低下効果が付与されて目を丸くしていた。まあ、その時は戦闘前でもなんでもなかったもので、彼女は気にせず完食して満面の笑みを浮かべていたが。

ちなみに妖狐族のボクは油揚げや稲荷寿司を食べるとステータス上昇のバフがかかり、玉ねぎ系はデバフが入る。いわゆるネタ要素というやつだ。

「まあ、そういうのは縁だからね。毎日通い詰めるのも無粋な気がするし、気が向いた時に確認する程度にしてるよ」

妖狐族でいっぱいになるお店というのも、一度見てみたい気がするけれど。

白、黒、茶、赤と、色とりどりの尻尾がひしめき合う光景を想像し、ボクは思わず零れる笑みを袖で覆い隠した。

拡張ディスクの発売は半年後。

それまでにはかのお店の料理を味わう栄光に与かりたいものと、

ボクは風鈴が揺れる窓の外へと目を向ける。
青い空には白い入道雲。
蝉の音が響く、夏の日の一コマであつた。

お稲荷様と喫茶店①

開いた口へ牡丹餅。

まあ、棚から牡丹餅によく似た、思いがけない幸運が舞い込んでも、といった風な意味をもつことわざの一つだ。

口は災いの元、なんて事はよく言うけれど、今回は珍しく福の方が舞い込んできたようである。

『喫茶マーブルキャピタル』

軒先に提げられた看板を見上げながら、ボクはそんな事を考えていた。

ここは王都フィア。メインストリートからは少し外れた、路地裏の一角。

少し調べものをするために王立図書館を訪ねた後、そういえば先日モミジと話をしたお店はこの辺りだったなあ、なんて、ちよつとした気まぐれで噂のお店に立ち寄ってみたのだが、扉の下に置かれた立て札を見て、ボクは目を疑った。

なんとなんと、そこには『本日、妖狐族のお客様限定』の文字が踊っているではないか。

思わぬ幸運に巡り合い、思わず二度見してしまったのも、むべならぬ事と言えよう。

「いや、たしかに機会があればと言ったけれど、これは驚いたな」

顎に手を添えそう零すボクの背中で、七本の尻尾がざわざわと揺れた。ともあれ、いつまでも店先でぼうっと立っている訳にもいくまい。

もう一度、立て札の文字を読み間違えてはいないかと確認した後で、ボクは扉のドアノブを捻った。ちりん、と吊るされた鈴が音を鳴らし、少しばかりひんやりした風が頬を撫でる。

「うわあ……」

そうして開いた扉の隙間から店内を覗き見て、ボクはその光景に圧倒されてしまった。

お店の雰囲気自体は、そう悪くない。

清潔感のある白い壁。天井では四枚の羽を持った天井扇がくるくると回り、その中央から下がる丸い照明が店内を明るく照らしている。

テーブルや椅子、カウンターは全て木製で、丁寧に塗られたニスで、僅かに暗い色の木目に光沢を与えていた。妖狐族に配慮してか、椅子の背もたれは真ん中が大きくくりぬかれ、尻尾が通せるようになっていた。

なるほど、さながら純喫茶然とした、実にボク好みの佇まいではあるのだが、ボクが圧倒されたのはそうした部分ではなく、そこで今まさに飲食を楽しんでいる人々の姿だった。

自分と同じように着物姿の者、はたまた騎士風の鎧を着込んだ者や、ローブに三角帽といった魔法使い風の恰好をした者。服装はさまざまだが、その背では等しく数本の大きな尻尾が揺れており、それはまるで麦畑で稲穂が揺れるが如く。

いや、少し美化しすぎた表現だったとボクは自分を叱責する。

はつきり言おう。めちやくちや暑苦しい。いや、ボクとてその一人ではあるのだけれど。

一人一本なら、ここまでではなかっただろうに。

平均三本から四本ほどといったところだろうか。ここが王都である事も相まって高レベルのプレイヤーが多く、一人当たりの尻尾の本数がやたらと多い。

幸い店内はわりと広く、カウンター席に座る他のプレイヤーの尻尾が邪魔で進めない、なんて面白い事態にはならなかったが、これは中々、衝撃的な光景である。

「いらつしやいませ。お一人様ですか？　どうぞ、空いている席におかけください」

思わず目頭を指で揉み解していると、白いエプロン姿の少女がこちらへと声をかけてきた。なんと、ウェイトレスさんまで妖狐族である。

ちなみに尻尾は一本。なんというか、もう、尻尾がゲシュタルト崩

壊を始めそんな勢いであつた。

席に着いたボクにメニニュー表を渡し、栗色の短い髪を跳ねさせながら厨房の方へと戻っていく少女の背中へ視線をやりながら、ボクは小さく息を吐く。

それを見た隣の席の、赤毛が特徴的な妖狐族のプレイヤーがなにやら肩を跳ね上げ、尻尾の毛を逆立てていたが、ボクはあえて気が付いていないふりをしながら、渡されたメニニュー表へ目を通していく。

どうやらここは定番のオムライスやホットケーキから、子羊のロースト、川魚の香草焼きといったものまで幅広く取り扱っているようで、そう何度も来ることができる場所でもないだけに、さてどれにしようかと、ボクはまるで子どものようにメニニュー表と睨めっこを始めるのだった。

ああちなみに、妖狐族向けに用意したのであろう、稲荷寿司やきつねうどんといった、油揚げを用いた料理の名前もしっかりと連なっていた事を、合わせてご報告させて頂く。

「お悩みのようでしたら、オムライスがお勧めですよ。妖狐族限定メニニューという訳ではありませんが、やはり定番であり王道。この店の料理が如何ほどのものか、知って頂くにはこれが一番かと」

柔らかで掴みどころのない、まるで雲のような優しい声であつた。

不意にかけられたその声の方を見ると、ボクの左側、赤毛のプレイヤーが座る反対側で、妖狐族の青年が口元に僅かな笑みを浮かべてこちらを伺っていた。銀の髪をした糸目の、狐によく似た顔立ちの、二十そこそこに見える若者で、ゆつたりとした黒いローブを纏い、背には赤い宝石が嵌め込まれた、身の丈程の大きな杖を背負っている。

ボクと同じ七本の尻尾を躍らせながら、なおもにこにこと笑う青年を一瞥し、ボクはまたメニニュー表へと視線を戻した。

「おや、些か不躰でしたか。しかし、名乗りもせずいきなり声をかけるのはたしかに礼を失っていましたね。僕はテウメッサと申します。まあ、テウさんでも、ウメさんでも、優男とでも、お好きなように呼んで頂いて結構ですよ」

少し大げさにも見える身振り手振りを交えながら、そう自己紹介す

る青年を横目で改めて一瞥し、ボクは小さく息を吐く。

「では優男さん」

右隣から、盛大に咳き込む声が響いた。

ほんの少しだけそちらへと視線をやつて、咳払い。少し締まらないが、仕切り直す。

「貴重なご意見は参考にさせて頂くが、残念ながら子ども喰らいテウメーッソスの狐に目を付けられるにはボクは歳を重ねすぎている。早々に諦めて他を当たるといい」

こうして街中で声をかけられるのは、何も今回が初めてではない。お稲荷様だなどと、余計な呼び名が広まり始めてからは特に。目的はパーティやクランへの勧誘であったり、女として侍らせたい、下心が透けて見えるような連中ばかりであったが、この青年からは僅かながら、後者の匂いがする。そしてなにより、纏う雰囲気がなんとも胡散臭い。実はこの青年、詐欺師の類ではなからうか。そう勘ぐつてしまう程度には。

そう思い、あえて棘のある言い方をしたのだが、どうやら優男さんは少しばかりも堪えなかつたらしい。相も変わらず胡散臭く微笑みながら、やれやれと肩を竦めてみせた。

「困りましたね、これでは取り付く島もない。僕の名前に関しては申し開きありませんが、別にそういった趣味嗜好の人間ではありませんよ?」

それはまあ、そうであろう。

もし彼が子どもを捕食——これは二重の意味で——する事に性的興奮を覚える危ない人間であるならば、ボクは疾くこの変態を店から蹴り出すか、脱兎の如く姿を眩ませなければならぬだろう。兎ではなく狐だけだ。

「無礼を承知でお尋ねしますが、貴女はお稲荷様——失礼、タマモ様、ですよ? 同じ妖狐族を選択したプレイヤーとして、貴女のお噂はかねがね。お恥ずかしながら、一度こうしてお話をしてみたいと思っていたのですよ」

ここで初めて、優男さんの表情に少しばかりの変化が見られた。絶

えず浮かべていた薄ら笑いはどこか困ったようなものに変わり、眉が八の字に歪む。心なしか、背後の尻尾をしな垂れているように見える。

ほんの少し力を無くした視線を横から浴びながら、ボクはまた溜息を一つ。メニユー表をぱたりと閉じると、丁度お冷を届けに来たウエイトレスの少女に声をかけた。

「すみません、オムライスを一つお願いします」

「オムライスが御一つですねー？　かしこまりましたー」

ボクの前にお冷を置いた後、ぱたぱたと少女がカウンターの中へ消えていくのを見届けて、ボクは濡れタオルで両手を拭いながら、改めて男の方へと視線を向ける。

「とりあえず、料理が届くまでの間でよければ、用件を聞こうか」

「ええ、それで構いません。では、時間も限られている事ですし、単刀直入に……」

薄ら笑いを浮かべながら、男は懷から一枚の羊皮紙を取り出し、こちらへと差し出した。

訝しみながらもそれを受け取ると、それはどうやらチラシのようであった。

中央にはなにやらプレイヤーの集合写真らしきものが張られ、その上に赤く大きな文字でこう書かれている。

——妖狐族限定クラン『ひやつこりようらん百狐繚乱』、団員募集中！

でかでかと書かれたその文字にボクは少しばかり首を傾げ、しばらくしてそのチラシを、隣で様子を伺っていた男へと押し返した。

「すまないが、特定のクランに所属するつもりはない」

「まあまあ、そう仰らずに。実は僕、当クランの副団長をさせて頂いてまして、正直な話ですね、噂のお稻荷様を連れて来いとうちの団長がそれはもううるさくて。という事で、如何でしょう。入団するかはともかくとして、うちの拠点でホームひとつお茶でも——」

「結構です」

よくもまあ、こうもつらつらと長ったらしい台詞を吐けるものだと、変に関心しながらボクはその提案をばつさりと切り捨てた。

正直、妖狐族限定のクランというものには興味がある。しかし、どうにもこの、街角にいるキャッチのお兄さん風の、なんとも胡散臭い狐の言葉を信用していいものかどうか。ちなみに現段階では、八対二にて反対多数の為否決、といったところである。

「せめてもう少し、なんだ、まともな人員を寄こしたまえ。正直言つて君が相手では、どうにも怪しげな店の勧誘を受けているように感じる」

右隣で、また吹き出す音。

再びちらりとそちらを見れば、赤毛の少女は同じ色をした尻尾で顔を隠し、ふるふると肩を震わせていた。もしや、彼の顔見知りか、クランメンバーの一人だろうか。

「お待たせ致しましたーっ！」

丁度その時である。カウンターの向こうから、料理を乗せたお盆を手に、ウェイトレスの少女が満面の笑みを浮かべやってきた。

「残念、時間切れだ。それではボクはこれから、この料理をゆつくりと堪能させて頂くのでね。無粋な話は、またの機会にしてくれたまえ」
ボクの言葉に、男は大きなため息を一つ。がつくりと肩を落としたが、
ながらも、しかしその笑みは崩さず、先ほどボクが押し返したチラシをもう一度カウンターの上に置き、静かに席を立った。

「本当に、非常に残念ですが、あまりしつこい男も嫌われますのでね。この件は、またの機会に、という事で。ああ、折角ですので、どうぞそれはお持ち帰り下さい」

そう言つてまた、なんとも胡散臭い微笑みを残して男は去つていった。

なにやら最後に、料理と共に置かれていたオムライス一品分の伝票——勿論ボクの分である——をしれつとひったくっていったが、奢つてくれるというのであれば是非もない。迷惑料として受け取っておくでしょう。

そうして、白銀の尻尾を揺らしながら店を去る男の背を見送ると、ようやくボクは目の前の料理を存分に堪能すべく、銀の匙を手にとったのだった。

お稲荷様と喫茶店②

立ち昇る湯気。鼻先をくすぐる仄かに甘い香り。

黄金の丘へと銀の匙を差し込めば、そこからまたわつと湯気が溢れ、刻まれた鶏肉やマッシュルームを含んだ赤い大地がその姿を現した。

飾り付けるようにかけられた赤茶色のソースをほんの少し絡め、とろりと溶け出した半熟卵と共にそれを口元まで運べば、なんとも食欲を刺激する、コクのある深みのある香りに、ボクは思わず生唾を飲み込んだ。

意を決し、掬い上げたその一口を口内へ。そうして数度咀嚼し、小さく喉を鳴らしてそれを飲み込んだあと、ボクはほっと息を吐く。僅かに残る余韻を味わいつつ、思わず緩んでしまいそうになる頬を引き締めながら、二口目を掬い上げた。

初めにやってくるのは、あつさりとした卵の甘さと、コクのある濃厚な香り。鼻先に抜けていくこの香りは、チーズかなにかだろうか。それに続きやってくるのは、甘酸っぱいソースの風味と、チキンライスの僅かな歯ごたえ。

細かく刻まれた鶏肉から甘い肉汁が染み出し、混ぜ込まれたマッシュルームが食感に僅かな変化を加えている。

感心したのは使われている素材で、ネギ類の食材は一切使われていないようだった。恐らくは妖狐族が苦手とする食材を避けた、この店ならではの心配りなのだろう。

そうしてあつという間に半分ほど食べ進めると、その素晴らしい美味しさに、ボクの顔には自然と笑みが浮かんでいた。

ううむ、当然と言えば当然なのだけれど、ボクが作るオムライスとは比較にもならない。

こんなところで顔を出してくる負けず嫌いな自分を小さく頭を振る事で払いのけ、ボクは改めてオムライスの残り半分へ手を伸ばす。一口食べ、ほっと息を吐き、二口食べて、己の作品との違いに首を

捻る。

「ふう……」馳走様でした」

そんな事を何度か繰り返しながら十数分、ようやくボクはオムライスを完食すると、胸の前で小さく手を合わせ、目を伏せた。

流石は喫茶店の看板ともいえる料理である。入店に制限を設けているにも関わらず、熱心に通うファンがいる事にも納得できる、実に素晴らしい一品だった。

しかしこうなってくると、気になってくるのは他の料理である。

空になったお皿を脇に避け、再びメニュー表のページを捲りながらボクはううむ、と唸った。

ナポリタン、サンドイッチといった定番のものから、稲荷寿司などの油揚げを使った妖狐族限定メニューまで、食してみたい品は数多くあるものの、残念ながら現在の腹具合からすると、恐らくは多くてあと三品ほどが限界だろう。ううん、実に悩ましい。

そうして悩みに悩んだ末、ボクが選んだのは妖狐族限定メニューの稲荷寿司だった。

お皿を下げて来た少女に追加注文を伝えると、ボクはお冷を一口、備え付けの紙ナプキンで口元を拭う。後学のため、というのも兼ねて選んだ品ではあったが、さてさて、どれだけの品が出てくるものか。

あ、ちなみにオムライスの食事効果だが、一定時間の攻撃力上昇であつた事を合わせてご報告しておく。

「お待たせ致しました。こちら、ご注文頂いた稲荷寿司です」

しばらく待った後、少女が運んできたお皿の上には、俵型の稲荷寿司が三つ乗っかっていた。

ごゆっくりどうぞ、と恭しく頭を下げてまた戻っていく少女を見やり、ボクはお皿に添えるようにして並べられた箸を握った。

さて、見た目から察するにどうやら関東風のようなだ。大きさは一口大で、さほど大きくは無く、お皿の端っこにちょこんと生姜の甘酢漬^リけが添えられている。

良く味が染みていそうなそれを一つ箸でつまみ、ゆっくりと口へと運ぶ。そうして一口噛み締めれば、酢飯を包んだ油揚げから、甘

じよっぱい煮汁が口いっぱいに広がった。

なるほど、なるほど。味付けもたしかに関東風で、酢飯には黒ごまが混ぜ込まれ、油揚げの味が濃い分、あつさりとした仕上がりになっている。

ボク自身、関西風の具たくさんな稲荷寿司しか食べたことが無かったのだが、なるほど、これはこれで実に美味だ。

これもぺろりと完食し、ボクはまた手を合わせる。

ではでは、この辺りで甘い物も行ってみようか。

「すみません、これとこれと……あとこれも一つ」

手をあげ、注文したのはメロンソーダとストロベリーパフェ、そしてプリンアラモード。久しぶりの洋菓子三昧である。とは言っても、まあゲームの中なのだが。

ほどなくして、ボクの目の前には色とりどりのスイーツたちが並べられていた。メロンソーダの緑に、イチゴの赤、プリンと共に盛り付けられた果物たちが、実に目に鮮やかである。

リアルの方ではそうそう実現できない、ある意味では憧れていた光景を前に、ボクは呆けたように声を漏らしていた。

——現実では、周りの目が気になってそうそうこんな食べ方出来ないからなあ。

しみじみとそう心中で呟きつつ、ボクは手にしたスプーンでストロベリーパフェのてっぺんに乗せられた桜色のアイスクリームを掬い上げ、口に含んだ。ひんやりとした冷たさの後、あつさりとした甘さが舌の上で踊る。練り込まれた果肉のおかげで、後味もさっぱり爽やかだ。

背の高いカップの縁に添えられた、長細い焼き菓子のさくさくとした食感を楽しみながら、ボクは次のスイーツへと目を向ける。

横長の、船に似た形をした容器にプリンや生クリームの他、リンゴやイチゴ、キウイ等、様々な果物が盛り付けられたその姿はまさしく、昔ながらのプリンアラモードであった。

「いいなあ、こういうの」

今はこういったスイーツを提供する喫茶店も———というか、大型の

チェーン店に押しに押された影響で、こういった純喫茶自体の数が激減している為、お目にかかる機会も滅多に無くなってしまった。

古き良きその姿を一通り楽しんだあと、ボクは満を持してプリンを掬い上げ、口へと運ぶ。

カラメルソースの苦味と、プリン自体の甘さが程よく混ざり合い、実に美味である。

一緒に添えられたフルーツも爽やかで、パフェやプリンの甘さがありくどくならないよう、中和剤のような効果を發揮していた。

見た目も味も十二分。店内の雰囲気も素晴らしいし、これで入店制限が無ければ、ボクも常連の一人になってしまいそう。げに恐ろしきは、甘味の魅力という事か。

「ジパング支店とか、作ってくれないだろうか……」

眉を寄せ、スプーンを咥えながらそうひとりごちる。

いや、ジパングにも美味しい甘味処はあるのだけれど、お国柄、取り扱ってるのはどうしても和菓子ばかりになってしまっ、こうした洋スイーツを味わう事はそう無かったりするのだ。

どら焼き、団子にあんみつ、最中や羊かん。和菓子が好物だと豪語するボクではあるが、やはりたまにはパフェやクレープなど、ちよつと小洒落た洋菓子を味わってみたい場面だってあるのだ。

いやまあ、それこそリアルの方で食べに行くなり、通販で取り寄せるなりしろという話ではあるのだけれど。

並べられたスイーツを平らげた後、メロンソーダをストローでちびちびと吸い上げながら、ボクはその悩ましい問題に内心頭を抱えていた——実際に抱えていたのは頭ではなく、七本ある尻尾の一本であったが。

ほっと一息。

さてさて、名残惜しいが、そろそろお暇するのでしょうか。

伝票を手に、あつちへこつちへ注文を聞いて回っている少女に声をかけると、栗色の尻尾を振りながら少女はこちらへと駆け寄り、にこりと笑みを浮かべた。

「はい、お会計ですねー」

「お願いします……ところで、ここってテイクアウトってやってますか？」

「お持ち帰りですか？　でしたら、こちらのクッキーやケーキなどでしたら」

おや、モミジたちへのお土産も兼ねて買って帰れたらと尋ねてみたのだが、何事も言ってみるものだ。

とりあえずはクッキーとケーキを数種類購入し、まとめてお会計を済ませると、ボクは入店した時からずっと抱いていた疑問を、目の前の少女にぶつけてみる事にした。

「そういえば、ここには貴女以外の従業員の姿が見えないようだけれど、店長さんはずっと厨房に？」

そう、入店した時から、ホールに姿を見せるのはこの妖狐族の少女のみ。

流石にこの少女が調理から接客まで一人でこなしているなんて事はないだろうし、良ければこの素晴らしい料理を振る舞ってくれた料理人に、お礼の一つでも伝えておきたいのだが。

ボクがそう伝えたと少女は困ったように笑い、尻尾を左右に揺らした。

「非常に申し訳ないのですが、店長は只今手が離せない状況でして、お客様からお褒めの言葉を頂いた事は伝えておきますので、えと、本当に申し訳ありません」

「ああ、いえいえ、繁盛しているみたいだし、無理を言っでこちらこそ申し訳ない」

どうやらここのお店は、店長自らその腕を振るっているらしい。

あわよくば味付けだったりとか、料理のコツを聞かせて貰えればと思っていたのだけれど、種族限定とはいえ、空席の方が少ない程の賑わいぶりである。今頃厨房の方は、まさしく修羅場と化している事であろう。一人で調理を受け持っているのなら、なおさらだろう。

少しばかり残念な気持ちになりながらも、持ち帰り用に包んでもらったクッキーとケーキを手に、ボクは店を後にする。

そうして、モミジたちに王都の種族限定喫茶店に立ち寄り、お土産

の洋菓子も購入した旨をメッセージにて伝えると、ボクはジパングのマイホームに向け、のんびりと歩き出すのだった。

お稻荷様とニンジャⅡサン

「ちよ、ちよつと用事があつて近くまで来たから、ついでに顔を見に来てあげたわよ。あ、あくまでもついでなんだから、勘違いしないでよねっ！」

久しぶりに顔を会わせた矢先である。第一声にそんな風な台詞を口にしながら、見目麗しいお姫様は、その艶やかな黒髪を揺らした。僅かに頬を朱に染め、左手は腰に、右手の人差し指で鋭くこちらを指差すその姿は実に堂に入っており、それはまるで、古きよき伝統を体現するかの如く。

ともあれ、設定上、という言葉が頭につくものの、この世界においては間違いないやんごとなき身分の御方である。いつまでも、こんな小ぢんまりとした平屋の玄関先で立ち話をさせていいものではない。まい。

とりあえずは中に案内すると、彼女は我が家をぐるりと見回して、さも興味深そうに声を漏らした。

「ふうん。随分と質素な家に住んでいるのね」

「そりゃあ、お姫様から見れば質素だろうけれど、ボク一人がのんびり暮らす分には、これで十分なのさ」

勿論、これよりも立派な、それこそ武家屋敷のようなマイホームを持つことも可能だ。お値段も相当のものになるが。

しかし、基本的に自分一人、せいぜい友人を二、三人ほど呼ぶかどうかというボクにとって、だだっ広いだけのお屋敷なんてどう転んでももて余すだけである。ならば、このぐらいの、質素に見える程度が丁度いいというものだ。

「あら、別に悪く言ったつもりはなかったのだけど。少なくとも、無駄にお金をかけて見栄を張ったようなところより、よっぽど立派だわ」
それはもしや、お姫様プリンセスジョークというやつだろうか？

あんな、立派な天守閣までそびえるお城に住んでいるやんごとなき御方とは思えぬ台詞に、ボクは餡蜜と三色団子に乗せた盆を危うく

ひっくり返しそうになった。

そして、その様子をさも不思議そうに、こてんと小首を傾げて見ている辺り、どうやら冗談ではないらしい。

「あのね、私だって好き好んであそこに暮らしている訳じゃないのよ。考えてみなさいよ。金屏風やら高価な茶器やら、女の子がそんなの欲しがるわけがないでしょう？」

綺麗な着物は好きだけど。

そう締め括り、餡蜜を口に放り込むお姫様を眺めながら、雅な世界もなかなか生き辛そうなものなのだなあ、なんて、三色団子を啜えながら、ボクはそんな風なことを考えていた。

幸い、用意した甘味は彼女の口に合ったようで、しかめっ面だったその表情が次第に元の端正な顔立ちを取り戻し、餡蜜を完食した頃には、気難しいお姫様はすっかり上機嫌になっていた。

ふと、穏やかになったその瞳と視線がぶつかる。

咳払い。

「ま、まあまあつてところね！」

頬を染め、視線を顔ごと反らしながらそう言うものの、目の前には綺麗に空となった器が一つ。

なんとも天の邪鬼なお姫様に苦笑しつつ、内心ではちよつとした悪戯心がむくむくと膨れ上がってくる。

三色団子の最後の一本を平らげた後、ボクはこれ見よがしに息を吐いてみせた。

「そうか、やはり高貴な御方の舌には合わなかったか……。いや残念だ。もし口に合ったのなら、他にも是非召し上がってもらいたい品が沢山あったのだけれど」

しかし、一国のお姫様に対して口に合わない物をお出しするなど、それこそ恐れ多い事であると、ボクはつい緩みそうになる口元を袖で隠しながら言った。

すると、カグヤ姫は大きな瞳をさらに大きく見開いて、あーだの、うーだのと、池に顔を出した鯉のように口をぱくぱくさせた後、またそっぽを向いてこう続けた。

「べ、別に不味いだとか、口に合わないとは言っていないわよ？ それに、せっかく作った物を無下に扱う訳にもいかないし……。ど、どうしても言うのなら、食べてあげない事もないというか……」

そう言いながらも、横目でちらりちらりとこちらの様子を伺うその姿が余りにも可愛らしく、これがかの竜姫その人なのかと、ボクは可笑しくなつてたまらず顔を背ける。

しかしそれがいけなかったのだらう。いくら顔を袖で覆ったとて、震える肩は隠しようがない。あえなくボクは他愛のない悪戯を見咎められ、顔を真っ赤にしたカグヤ姫に、他愛のないお小言を頂く事と相成るのだった。

「ほんつとうに、貴女たち妖狐族つてどうしてこう捻くれてるのかしら！」

頭にブーメラン刺さってますよ。

なんて事が言えるわけもなく、ボクは怒れる竜を鎮めるために、台所から手製の羊羹と、最近レベルが上がって作成出来るようになった金平糖を取り出し、彼女の前へと差し出した。

「まあ、そう目くじらを立てずに。こっちの金平糖は自信作なのだけれど、どうだろうか？」

「あのね、私こんな甘味程度で——あ、これ美味し……んっ！ この程度で誤魔化せると思っていたら、大間違いなんだから！」

どうやら、どちらともお口に合ったようである。一瞬の間、ふっと解れた眉間の皺を見て、ボクは静かにそう確信した。

実はお土産用にと別に包んだものを用意していたのだが、この様子なら無駄にならずに済みそうだ。

「……貴女、陰陽師なんてやっているより、甘味処の女将でもやった方が似合うんじゃない？」

狐、ひいては稲荷が経営する飲食店。実にご利益がありそうな感じではあるが、残念ながら今のところは店を構えるという考えはない。彼方に見える火の山であったり、王国の北に連なる山脈を越えた先にあるヨトウン雪原だったり、未だ見ぬ光景、未だ踏破していない場所もこの世界にはまだまだある。

それらを堪能し尽くすまでは、ゆつくりとお店を開いている時間なんてこれっぽっちもない。

そうカグヤ姫に力説すると、彼女は羊羹の最後の一切れを飲み下し、お茶を啜った後で呆れたような視線をこちらに向けた。

「本当に、貴女^{来訪者}たちは偏屈な人間が多いわね。危険な場所に、意気揚々と乗り込んでいくのなんて、貴女たちぐらいなものよ」

ため息混じりにそう言つて、カグヤ姫はおもむろに二度、柏手を打った。

いったい何のつもりかとボクは首を傾げ、しかし次の瞬間、目の前で起こったことに目を丸くする。

突然、頭上でがたりと音がしたかと思えば、天井裏から黒装束に身を包んだ何者かが、音もなくカグヤ姫の背後に降り立ったのだ。

すわ何者かと身構えるボクにカグヤ姫はしたり顔で微笑むと、背後の黒装束に顔を向けぬまま、何かを催促するように、胸ほどの高さにまで右手を持ち上げた。

「ハンゾウ、例のものを」

カグヤ姫がそう言うのと、背後に控えた黒装束がすすつと足音も立てずに傍へと寄り、懷から何やら取り出し、その白くしなやかな手のひらへ置いた。

そして、彼女の傍へと寄つた事で、とうとう黒装束の全身が露になる。

顔全体を隠す覆面。額には鉢金を巻き、背には刀。手甲、脚甲を付けたその姿は、正しく――

「忍者か……見るのは初めてだ」

そう、それこそは古くから伝わる正統な、時代劇に登場しそうな忍の姿であつた。

人様の家の天井裏から現れた件に関してはさておき、彼――露出した部分が目元のみである為、もしかすれば彼女なのかもしれないが――は満足げに頷くカグヤ姫へと静かに目礼を返すと、また物音一つ立てず、我が家の天井裏へと消えていく。

まさか一国の姫が、真つ昼間とはいえ護衛もつけずにここまでやつ

て来たのかとずっと疑問に思っていたのだが、なるほど、誰にも気取られぬよう忍たちがカグヤ姫を守っていたと、そういう事らしい。

「さっきのはジパング忍軍頭領のハンゾウよ。ふふん、都で評判の凄腕陰陽師も、流石に気がつかなかったみたいね！」

どこか誇らしげにそう胸を張るカグヤ姫に、ボクは苦笑を返す。

しかし忍者、忍者かあ。

心の中でそう反芻はんすうしながら、忍者が消えていった天井を見上げる。

「忍者というからには、やっぱり忍法が使えるのかな？　ほら、分身の術だったし、口から火を吹いたり」

変わり身や火遁、水遁をはじめとする忍法は、まさしく忍者の華だ。軽やかな身のこなしに、鎖鎌や手裏剣を巧みに使いこなすその姿も魅力的ではあるが、やはり一番の魅力といえば、両手で印を組んで操る様々な忍法だろう。

だが、僅かながらも期待に胸を膨らませるボクとは逆に、カグヤ姫はきよとんと目を点にして、小首を傾げていた。やがて桜色の唇が、ゆっくりと言の葉を紡ぐ。

「分身したりはするでしょうけど……口から火を吹くってなに？　大道芸？」

まるきり訳がわからないといった風に零れ落ちたその言葉で、場になんとも言えぬ沈黙が流れた。

その表情を見るに、どうやら冗談を言っている訳ではなさそうだ。

とりあえず湯呑に淹れたお茶を一口飲み下し、一息吐いた後でボクは尻尾を一振りした。

「いや、火遁の術とか、水遁の術とか使うんじゃないのかい？」

「いやいや、たしかに忍法にそういった術があるって聞いた事はあるけれど、どれも専用の道具を使うものであって、口から火を吹いたりはいしないわよ。それってどちらかといえば妖狐族あなたちの領分じゃないの？」

ボクは内心頭を抱えた。

なるほど、なるほど。つまりは、そういう事である。

どうやらこの世界における忍者は、アニメや漫画に登場するファン

タジー色が強いものではなく、どちらかといえば現実に近いものであるらしい。

カグヤ姫曰く、手裏剣やまきびしといった道具は使うが、忍法はけっして妖術や魔法じみたものではなく、火薬などを用いて敵を錯乱したり、不意を突いたりする為の技術であるという。

「そもそも忍びつていうのは諜報やら暗殺やらが主な仕事なのに、人目に付きやすい派手な術なんて編み出してどうするのよ。そりゃあ、中には妖術じみた術も使うみたいだけれど、それだつてきつと地味いなやつよ？」

忍者を志すプレイヤーのうち、六割強の心がへし折れた瞬間であった。

この情報は、あとから拡散しておいた方がいいのだろうか……いいのだろうか。面倒臭いが。

いや、もしかしたらもう他のプレイヤーが同じような情報を手に入れている可能性だってある。後ほどハヤトたちに確認をとってみよう。

一番確実なのは例の情報屋。Kit^あtt^エv^セGu^関v^西さんに訊いてみるのがいいだろうが、こちらから会いに行くほど彼を好いてはいないのでこれは却下である。

急に考え込んだボクを怪訝そうに見つめながら、カグヤ姫は先程のハンゾウという名の忍者から受け取った巻物をこちらへと差し出した。

「さて、それじゃあ仕事の話をししましょうか。貴女には、私の使者として王国に向かってもらおうわ」

巻物を受け取り、訝し気にそれを見つめていたボクにカグヤ姫が長い黒髪をかき上げながら告げる。

「今回貴女に取ってきてもらう宝は、銀の根と金の茎を持ち、真珠の実が生るという、【蓬萊の玉の枝】よ。それは王国のカメリア姫にあてた、私からの親書。それを見せれば、彼女から詳しい話を聞けるはずだから、まあ、頑張つてね」

何やら含みのある言い方である。

かのカメリア姫は聖女と呼ばれ、国民は勿論の事、プレイヤーから

も高い人気を誇る美姫だと聞いているのだけれど、もしや実際には彼女も相当なじやじや馬だったりするのだろうか。

「まあ、ある意味ではお転婆な子なのかもね……って、彼女もってどういう事よ！」

どういふ事かと問われても、まあそういう事である。

忍びを護衛につけているとはいえ、甘味の為にわざわざ下町に降りてくるお姫様がじやじや馬でなければ何だというのだろうか。

「だから、ここには偶然、別件で近くまで来ていたから寄っただけで、別に貴女に会いに来た訳じゃ——と、とにかく！ この私が直々に足を運んであげたんだから、きつちりと仕事はこなしなさいよ！ 失敗なんてしたら、ただじやおかないんだから！ 甘味、ご馳走様でした！」

勢いよく立ち上がり、玄関の時と同じようなポーズでこちらを指差すと、カグヤ姫は赤くなつた顔を隠すように慌ただしい様子で我が家を飛び出していった。

最後にしっかりと礼を言つて歸つていった辺り、やはり根は良い子なのだろうと思うものの、あの落ち着きのなさはまだもう少しどうにかした方がいいのではないだろうか。そう、例えばあの忍者のように——いや、それは流石にやりすぎか。

そんな下らない事を考えながら、ボクは天井を見つめ、残された食器の後片付けを始める。

お姫様が去り、それを追つて天井の忍者もいなくなった我が家は、いつもより少しだけ広く感じた

お稲荷様とメイドさん

「それでは、こちらでしばらくお待ちください」

王都フィーア。大瀑布に囲まれ、断崖絶壁を背後にして悠々と佇むグロリオサ城の一室。

カグヤ姫からの親書を渡した後、ボクをここまで案内した女性はそう告げて小さく頭を下げ、扉を閉める。クラシカルなメイド服のフリルがふわりと揺れ、ドアの奥へと消えていくのを見届けた後、ボクは部屋の中をぐるりと見回した。

真っ白な壁。壁面中央には暖炉が備え付けられ、天井からはいかにも高級そうなシャンデリアが下がっている。中央には小さな丸いテーブルが佇み、鉈が打たれたアンティーク調の赤い椅子が、それをぐるりと囲んでいた。

壁にかけられているのは、王族の肖像画だろうか。

王冠を被り、腰に手を添えた背の高い男性に、椅子に座った美女。そして、その二人の間に立ち、柔らかに微笑む幼い少女の姿。

王冠の男性はフンダート国王、美女はその妻であり、今は亡き女王陛下だろう。となると、真ん中の少女は幼い日のカメリア王女か。幼いながらも、その貌にはすでに王家の人間足りえる気品が伺える。

豪華絢爛な衣装に身を包み、肖像画でありながら、どこか人心を惹きつける不思議な魅力を放つそれを見上げていると、背後から扉が開く音が響いた。

「お待ちせ致しました。お茶を用意しましたので、どうぞ掛けてお待ち下さいませ」

振り向くと、そこには先程の女性と同じような、白いメイド服を着た少女がふんわりと微笑みながら立っていた。手にしたトレイには茶器一式が置かれ、花の模様があしらわれた陶器製のティーポットの先からは、うっすらと湯気が立ち昇っている。

どうやら、王女様が到着するまでの間、この少女がボクの相手をしてくれるようだ。

「ああ、お気遣い感謝します。では、お言葉に甘えて」

用意した茶器を手際よく丸テーブルに広げていく少女にそう返し、ほのかに紅茶の香りが広がり始めた席に腰を下ろす。

そうして手持無沙汰に七本の尻尾をゆらゆらさせながら、何の気なしにボクは少女の方へと目をやった。

ボクが言うのもなんだが、可愛らしい、美しい少女である。

雪のような白い肌に、大きな青い瞳はまるで雲一つない青空のようで、後頭部で編み込むようにして纏められた金の髪が、日の光を受けてきらきらと輝いている。

しかし、なぜだろうか。その端正な顔立ちに僅かな既視感を感じ、ボクは首を首を傾げた。

いや、それよりも目を引くのは、その胸元である。

「メロン……いや、スイカでも仕込んでるのかな」

「はい、お待たせ致しました。焼き菓子も用意しましたので、こちらも宜しければ召し上がって下さいませね」

二つのスイカ、それも大玉のものをゆっさゆっさとさせながら、紅茶が淹れられたティーカップを差し出す少女にボクは誤魔化すように咳ばらいを一つし、短く礼を言う。

いや、別に現実での己のそれに不満がある訳でも、コンプレックスを抱いているということもないのだけれど、あそこまで反則級だと興味も沸こうというものだ。それは勿論、同性であっても。

メイド服の上からではあるが、二の腕や腰はきゅつと引き締まっているし、なんだろうか、本来あるべき贅肉やらなんやらの余分なものを、ぎゅつとあそこに集めたような、そんな感じた。

なんというか、下世話な話にはなるが、肩こりだとか下着のサイズだとか、色々大変そうだなあ。

ともあれ、今は紅茶と焼き菓子である。折角用意してもらったのだから、冷めないうちに頂くでしょう。

心中から煩惱を追い出すように、ボクはティーカップをつまみ、口へと運ぶ。

ふわりと鼻先をくすぐる香りはダージリンに近いが、味自体は渋み

が少なく、ほんのりと甘い。

「美味しい。紅茶には余り詳しくないのだけれど、これは良い物ですね」

「王国の特産品でもある、フンダートティーの春摘みです。^{ファーストフラッシュ}焼き菓子と良く合うんですよ。妖狐族の方に振る舞ったのは初めてだったのですが、お口に合ったようでよかったです」

ぱちんと手を合わせ、少女が笑う。

しかし、もうすっかり寛いでしまっているのだが、いまだ王女様が現れる気配はない。

まあ、ただでさえこの王女様は聖女と呼ばれ、頻繁に王都にある教会や孤児院へ顔を出していると聞く。^{プレイヤー}来訪者とはいえ、一介の冒険者に過ぎない人間にそんな貴重な時間を割いて貰える分、ありがたいと思わなくてはならないのだろう。

「そういえば、狐様は此度はどのようなご用件でここへ？」

僅かに首を傾げ、少女の頭に乗ったヘッドドレスが揺れる。

さて、今回は他でもない、先日カグヤ姫から依頼された品物の件でカメラア姫を訪ねてきたのだが、ただの侍女らしき少女にその事をペラペラと喋ってしまったていいものか。

顎に指を添え、しばらく思考を巡らせた後、ボクは少しばかりぼかして話をする事にした。

「ええ、実はある品物について、カメラア姫にお尋ねしたい事があります」

言って、また紅茶を一口。すると少女は頬に指を当て、その目尻をほんの少し下げながら、唸るような声を漏らす。

「うーん、それってもしかして、ヨトウン雪原で見つけたあれの事かしら。申し訳ありません、先にカグヤちゃんからのお手紙に目を通しておくべきでしたね」

焼き菓子に伸ばしていた指が、ぴたりと止まる。

あらあらまあまあと可愛らしく困ったように笑う少女を改めて見やり、ボクはほんの少し前に感じた既視感の正体に、ようやく気が付く事が出来た。

いや、しかし、まさかそんな――。

咄然とするボクを見て、小首を傾げる少女。その向こうで、勢いよく扉が開け放たれた。

現れたのは、ボクをここまで案内してくれた、あの女性であった。「姫様、また勝手にお部屋からいなくなつて、危うく近衛兵全員で城中を探し回るところでしたよ！ ああ、またそんな、侍女みたいな物をお召しになつて！ カグヤ様からのお手紙もお預かりしておりますので、さあ、こちらでお召し替えをなさつて下さい！」

顔を真っ赤にし、心なしか熱気で丸眼鏡のレンズを曇らせながら、半ば叫ぶような声であつた。

しかしそうしてめいっぱい叱られている筈の当の本人は、小首を傾げたままきよと目を丸くして何度か瞬か^{しばた}せた後、ふわりと柔らかく微笑んだ。ボクは頭を抱えた。

「あらマリア、丁度今、こちらの狐様とお茶をしていたところなの。殿方にお茶を淹れる時は、これが一番適^{メイド服}した服装だと聞いたのだけれど、もしかして違つていたかしら？」

「タマモ様は、女性でございます！ そのような着物姿の殿方など、いるはずがないでしょう！」

「あら？ あらあら、まあまあ、ごめんなさい私ったら、ずっとお顔ばかり見ていたものだから。タマモ様、で宜しかつたですか？ 素敵なお召し物ですね、カグヤちゃんもよく似たものを着ていたけれど、ジパングの着物は本当に美しいわ」

「お・召・し・替・え、を！ 申し訳ありませんタマモ様、しばらくお時間を下さいませ」

マリアと呼ばれた女性に首根っこを捕まれ、ずるずると退室していく少女――カメラリア姫はそれでも微笑みを絶やさず、小さくこちらに手まで振つて見せた。

「マリア、私はこの服のままでいいのだけれど。いつものドレスは胸も腰も窮屈で、動き難い事この上ないのよ？ そうだわ、せっかくだから、タマモ様も一着いかがかしら？ 実はこの服、良い素材を使っているので肌触りがとても良いの」

「姫様、いい加減その世間知らずなお口にチャックをなさって下さい」
あらあら、困ったわあ。

カメリア姫のその言葉を最後に、ぱたりと、静かに扉が閉じる。
残ったのは、なんとも言えぬ微妙な空気と、静寂。鼻先をくすぐる
紅茶の芳香。

ばたばたと足音が去っていくのを確認し、ボクは大きくため息を吐いた。

ぎしりと、椅子の背もたれが音を立てる。

「なるほど、たしかにカグヤ姫とは別種のお転婆娘だ」

カグヤ姫はどちらかといえば、意図して場を乱すタイプの性質をしているが、カメリア姫は完全に無自覚のまま周囲を振り回すタイプなのだろう。正直に言って、行動が予測できない分、カグヤ姫より厄介だ。

ちらりと、背後を見やる。そこには先程まで眺めていた、王族たちの肖像画があった。

その真ん中で微笑む少女を見て、思わず苦笑いが漏れる。

たしかに、面影はある。しかし、まさかこの純粹無垢を絵に描いたような少女が、まさか身分も明かさずメイド服を着こみ、茶器片手にやってくるなど、誰が予想できるだろうか。

もう一度、溜息。その音は、しんと静まり返った部屋の中に染み入るように響く。

結局、カメリア姫が肖像画とよく似た髪型と服装をして現れたのは、それから十分程後の事であった。

お稲荷様と聖女様

カメリア姫がマリアという名のメイドさんにしよつぴかれてからしばらくすると、彼女は白のドレスを身に纏い、再び部屋にやってきた。

全体のデザインはシンプルながら、要所要所に細やかで美しい刺繍が施されたワンピースタイプのドレスだ。先程まで束ねられていた髪はほどかれ、ウェーブがかった金髪が肩を通り、その豊かな胸元へと流れ落ちていく。

そしてその頭頂部には銀のティアラが乗せられ、数十分前とはうって代わり、正しく一国のお姫様と呼ぶに相応しい様相であった。

「ごめんなさい。着替えに時間がかかってしまつて」

「いえ、お氣になさらず。こちらこそ、先程は王女殿下に大変ご無礼を……」

ふんわりと微笑むカメリア姫に向き直り、頭を下げる。

猫を被っていたおかげで言動こそ失礼はなかったものの、王女に対してろくに名乗りもせず、あまつさえお茶まで淹れさせたのだ。いくら知らなかったとはいえ、頭の一つぐらいは下げておくべきだろう。

しかし当の本人はそんな事気にもしていないようで、こてんと首を傾げ少しばかり考える仕草をした後、なにやら得心がいったように手を叩いてぱつと笑みを咲かせ——たかと思うと、急に眉をハの字にしてさらに苦い顔で考え込んでしまった。その様子を見て、彼女の背後で凜とした立ち姿を見せていたマリアさんが小さくため息を吐き、そつと耳打ちをする。

「先程、姫様にお茶を淹れさせてしまった事を謝罪しておられるのですよ」

「お茶を？ それが何故無礼になるのです？」

「姫様はいい加減、ご自身のお立場というものを自覚なさった方が宜しいかと……」

アンダーリムの眼鏡を指先で押し上げ、また溜息。なにやら、随分

と苦労しているようだ。

「もう、マリアったら相変わらず難しい事ばかり……お茶が冷めてしまいうわ。あつ、宜しければ淹れなおしましょうか？」

ころころと表情を変えるその姿はまるで子どものようで、ボクの脳裏にはいつか料理をご馳走した、ハーピー族の少女の姿が浮かんでいた。目の前のお姫様も非常に似た気質をお持ちのようだし、さぞ仲良くなれる事だろう。

笑顔でティーポットを手に取り、さつそくお茶を淹れようとしていたカメリア姫を制したのは、マリアさんが素早く取り出し、彼女に差し出した一枚の手紙であった。言わずもがな、カグや姫がボクに持たせた親書である。

「姫様、こちらがカグや姫様からの親書でございます。お茶でしたら私^{わたくし}がお淹れ致しますので、どうぞご確認を」

流石は長年仕えてきたメイドといったところだろう。マリアさんはそう言ってカメリア姫に親書を手渡すと、流れるような動きでその手からティーポットをひたくり、いつの間にか用意されていた茶器やお皿、焼き菓子が乗せられたワゴンへと向かって行った。

残されたカメリア姫は少しばかり不機嫌そうに眉を寄せ、頬を膨らませていたが、やがて小さく鼻を鳴らすと手渡された親書の封を切り、中に目を通し始める。

「なるほど、やはりあの『宝石の木の枝』をお探しでしたか……しかし困りましたね。実はその宝物なのですが、北の山脈を超えた先にあるヨトウン雪原に住む【霜の巨人^{フリースルス}】と呼ばれる方々が、それはもう大切に保管しております……果たして譲って頂けるかどうか」

親書を読み終えたカメリア姫が、その小さな眉間に皺を寄せて苦い顔をした。

宝石の木の枝。どうやら王国の方では、【蓬萊の玉の枝】をそう呼んでいるようだ。

そしてカメリア姫曰く、霜の巨人と呼ばれている人々はこのフンダート王国が建国される前から北のヨトウン雪原に住む古い民族で、人間族の倍以上はある筋骨隆々の巨軀を誇る大男たちだという。彼

らは雪原の中心にウトガルドという名の都市を築き、そこでひっそりと暮らしているのだとか。

「彼らは異種族に対し、エルフ以上に排他的です。私も以前、父と共に彼らの元を訪ねた事があるのですが、まともにお話をして頂くまでかなりの時間を要しました」

さてどうしたものかとカメリア姫が顎に手をやり考え込む数秒、彼女は一度深く頷くと、背後に控えたマリアさんに紙とペンを持ってくるように命じた。

そして数分もせずマリアさんが用意した羊皮紙と羽ペンを使ってさらさらと手紙をしたためると、仕上げとばかりに何やら仰々しい造形をした判子を押し付け、それを丸めて蠟で封をする。

その一連の様子をボクは、なにやら大事になってしまったなあ、なんて呑気な事を考えながら眺めていた。もつとも、カグヤ姫から直々に依頼された仕事であるので元々がかなりの大事ではあるのだけだ。

そんな風に尻尾を右往左往させていると、出来上がった手紙をマリアさんが受け取り――これまた何やら随分と神妙な様子であった――こちらへと差し出す。

少しばかり身を固くし、恐る恐るそれを受け取ると、手紙の中心にはフンダート王家の紋章を象った蠟印が押されていた。この手紙が王家からの正式な物であることを示す、なによりの証拠である。

「その手紙を、霜の巨人の長であるロキという人物に渡してください。少なくとも、話ぐらいは聞いてくれるはずです。本当は私が同行して直接お話するのがいいのですけれど……」

「いえ、殿下もさぞお忙しいでしょうし、この件はボクがカグヤ姫より直々に命ぜられたことですので。それにこれ以上殿下の手を煩わせたとなると、カグヤ姫に叱られてしまいます」

苦笑いしつつ、冗談交じりにそう返す。

これに関しては本音六割、静かに微笑むマリアさんの迫力に押されたのが四割といったところか。お姫様の背後に立っている為彼女は気が付いていないが、このメイドさん、目が笑っていない。

いつその金色の頭を引つ叩かないか内心はらはらしながら、しかしそんな事など知る由もない目の前のお姫様は、頬の傍で手を合わせふわりと笑う。

「あら、そう肩肘を張らずに、もつと楽にして下さいね？　ほら、私たち、もうお友達なんですし」

ボクの手を取り、極めて無邪気に姫様がそう言った途端、ぴくりと右側の眉が跳ね上がった。勿論、ボクのではなく背後に控えたマリア女史のものだ。

箱入り娘もここまで来るとたいしたものではあるが、この無邪気さが彼女が聖女と呼ばれる一因ともなっているのだろう。

こほん。マリア女史が咳ばらいを一つ。

「姫様、ヨトウン雪原へ向かうのであれば、もう一つお渡しする物があるかと存じますが」

姫様が首を捻ると、やがて合点がいったのか小さく声をあげて手を叩く。

「あらいけない！　そうね、私だったらうつかりしていたわ。マリア、お願いできるかしら？」

「既にこちらに。タマモ様、こちらはヨトウン雪原へ繋がるビフレスト坑道へ立ち入る為の許可証でございます。坑道はここより北、街道沿いに進むと入り口が見えてまいりますので、警備の者にこちらをご提示ください」

そう手渡されたのは、なにやら文字と王家の紋章が刻まれた長方形の木の板であった。

『ビフレスト坑道通行許可証』と書かれたそれを懐に入れ、姫様とマリアさんに礼を言うと、ようやく一区切りついたと言わんばかりにマリアさんは小さく息を吐き、しかしすぐきりりとその表情を引き締めた。凜とした鋭い視線の先には、言わずもがなのほほんと微笑む金髪的美姫が。

「では、タマモ様もお忙しいでしょうし、あまり長い時間引き留めるのもご迷惑でしょう。ひとまず本日はこれまでということでは」

「あらマリア、私はまだタマモ様とお話したいのだけれど」

「ええ、ええ、重々承知しております。私も姫様とじっくりとお話すべき事がたくさんございますので、ええ。それはもう、たくさん」

「あら、あらあらあら？」

眼鏡を光らせ、いつぞやかと同じように姫様の首根っこを引つ掴んだまま扉に手をかけると、主に忠実な——それはもう、忠臣とはかくあるべしと体現しているようなメイドは優雅な仕草でこちらへ振り向き、空いている方の手でスカートの袖をちよんと抓んで一礼してみた。

「それではタマモ様、失礼致します。出口までは他のメイドがご案内致しますので、今しばらくこちらでお待ちくださいませ。ヨトウン雪原までの旅路、どうかお氣をつけて」

「タマモ様、またお話ししましょうねー」

ぱたん。

メイド服のスカートが扉の奥に消え、その場に残ったのは静寂と、ほんの僅かな甘い香り。

とりあえずティーカップに残った紅茶で唇を潤した後、ボクはだらりと尻尾をしな垂れさせた。なんともまあ、濃厚な時間を過ごしたような気がする。

まあ、何はともあれ、これで次の目的地ははつきりした訳で。そして坑道、ダンジョンを抜けていくとなると、パーティプレイは必須。またいつものメンバーに付き合ってもらえるか確認しておこう。

そうしてフレンドにメッセージを送る為にメインメニューを開き、ふと未読のメッセージがある事に気づく。

差し出し人はモミジ。そしてその内容は、ボクに僅かながら衝撃を与えるものであった。

——From・モミジ

この度、転生しました！

新しいアバターを紹介したいので、王都でお茶でもどうかな？

時間があるときに連絡下さい！

お稲荷様と課金アイテム

変身薬というアイテムがある。

使用すればキャラクターメイキングをやり直すことができるという代物で、公式ホームページから購入が可能な課金アイテムだ。

一個で税込千百五十円という比較的手を出しやすい価格も相まって、お世話になっているプレイヤーも多い。

さて、そんな変身薬を購入したとモミジから連絡が入ったのがつい一時間ほど前のこと。カメラア姫との会談を終えたボクは、モミジとの待ち合わせ場所に指定した、始まりの街アインにある小さなカフェへとやって来ていた。

いつぞやかイナバさんとやってきた、スクーンが美味しいあのお店である。

約束の時間よりも少し早く到着し、木製のこじんまりとしたオープンテラスでのんびりとこのお店の名物である「淡雪のコーヒー」——洒落た風な名前ではあるが、物自体はコーヒーにホイップクリームを乗せた、いわゆるウインナーコーヒーに近い——を味わっていると、どうやらこのゲームを始めて間もない様子のプレイヤーたちがちらりとこちらを一瞥したあと、冒険者ギルドがある方へと走っていった。

そんな彼らの背中を懐かしく思いながら見送ると、ちょうど入れ替わるような形で三人の男女が店へと向かってきているのが目に入った。

どこか見覚えがあるなど目を凝らし、ああなるほどとボクは一人得心する。なんてことはない、いつもの三人組であった。

「ごめん、待たせちゃったかな？」

「いや、ボクも今来たところさ」

片手をあげ、謝罪するハヤトにそう軽く返す。まるで待ち合わせしていた恋人のようなベタなやり取りであるが、爽やかな笑顔と共にそんなベタな台詞を吐けるハヤトは、天然ジゴロの素質があるのではないだろうか——実際、モミジから聞いた話では、学校でも女子からの

人気は高いらしい。

軽い挨拶を交わして三人に着席を促したあと、ボクは見慣れたものとは少し違う二人の顔をまじまじと見つめた。ちなみに二人とはハヤトとモミジのことで、コタロウに関しては何一つ変わらない姿であつた。

「いやはや、細かいところだけでも意外と変わるものだね」

「えへへ。ちゃんと出来てるか、あんまり自信はないんだけど」

ウエイトレスさんに注文を伝え、モミジが照れ臭そうに笑う。ふわりと、頭の後ろで一つに束ねられた長い髪が揺れた。

彼女のアバターで大きく変更されたのは、やはりその髪型だろう。以前まで短かった髪は腰に届きそうなほどの長髪へと変わり、ボーイッシュな印象はやや薄れたものの、ポニーテールにしている為か彼女の活発な雰囲気はあまり損なわれていない。

そしてその髪の間からは長く尖った耳が伸び、髪と同じ色をした瞳の下から頬にかけて、蔓のようにも見える呪術的な化粧が施されている。どれも弓と魔法の扱いに長けた種族、エルフ族の特徴だ。

日に焼けた肌はそのままにしているので、さながらダークエルフといった風な外見である。

「エルフにしたのは、やっぱり魔法職への適正が高いから？」

「うん。MPの最大値がいつきに上がったから、びつくりしちゃった。やっぱり種族によって結構変わってくるんだねー」

少し違和感があるのか、尖った耳の先端を指先で撫で付けながら言う。

エルフ族がもつMPの最大値と、魔法の威力などに影響する知力値は全種族の中でもトップクラスで、弓などの遠隔攻撃に関しても高い適正を持っている。そのぶん近接戦闘は不得手だが、それを補って余りある能力を持ったなかなか「強い」種族だと断言できる。

そんなことよりも、だ。

ボクはおもむろに彼女のとある部分へと視線を向け、ずっと目を細めた。

「サイズ変えた？」

「か、変えてにやいよ!」

変えたのか……。いや、ぱつと見ただけでも一つはサイズが上がっていることがわかるので、わざわざ確認する必要はなかったのだけだ。

いったい何のサイズなのかは口にしないが。

理想のプロポーションを手に入れられる事も、このゲームの魅力のひとつなのだろう。そう思うことにしよう。

頬を染め、どうしても嘘がつけない正直者の少女があたふたとあわてふためくのを眺めながら、ボクは自身の尻尾をひと揉みした。

「それで、ハヤトは鬼族にしたのかい？」

「タンク職をやるなら鬼族が良いって聞いてね。MPが少ないのがちよつと気になるけど、おおむね満足してるよ」

そう言つて爽やかな笑顔を浮かべるハヤトの口許には鋭い牙のような犬歯が覗き、額からはマール模様似た、金が混ざった黒髪を押し退け白い円錐形の角が二本伸びていた。

鬼族。そう聞いて思い出すのはやはり、かつてボクたちを苦しめた鬼族の女性、イバラキであろう。

彼女を見ればわかる通り、鬼族はその高い攻撃力と防御力、そして体力が特徴の、前衛向きの種族である。まあ、体力の面で言えば一番秀でているのはオーク族なのだが。

「いやあ、流石にあれはちよつとね……」

どうやら二足歩行の豚獣人は好みではないらしい。

ボクがそれを指摘すると、ハヤトはなんとも困つたような苦笑いを浮かべる。

しかし二人とも種族を変更した甲斐があつたようで、戦闘の難易度が心なしか少し下がったように感じると、運ばれてきたチーズケーキを摘みながら語った。

「せっかくだしコタロウも使えばよかったのに、変身薬」

「いや、俺は最初からやりたい職との相性で選んでるから、変える必要ないだろ」

それは残念。

リザードマンなんかは、防御力も高いしおすすめなのだが。

「お前、絶対に面白がつて言ってるだろ」

「はて、なんのことやら」

わっさわっさと尻尾を揺らし、ボクはじとりとしたコタロウの視線から顔を背けた。

咳払い。

さて、新しいアバターの紹介も終わったところで、話題は先ほどのカメラア姫との会談の内容へと移っていった。

丁度三人とも、細部こそ違うものの、各地を巡って指定されたアイテムを集めてくるという、似たような内容のクエストを進めていたらしく、坑道を攻略するためのパーティメンバーを探していたのだという。

「ダンジョン自体はそう複雑ではないみたいなんだけど、どうも最後にボスモンスターが配置されてるみたいなんだよね」

半分になったチーズケーキをフォークの先でつつきながらハヤトが言う。

配置されているのボスモンスターの名はアンタレス・スコルピオン。サソリの姿をした大型のモンスターで、毒針を用いた攻撃を行って来るのだとか。

攻略サイトには既に多くのプレイヤーからの情報が集まっており、攻撃パターンや戦闘時のギミック、弱点や注意点なども掲載されているそうだが、あえてその辺りは見ないようにしているそうだ。

まあ別に見ず知らずのプレイヤー同士で組む野良パーティで挑む訳でもないだろうし、あまり調べすぎるのもネタバレに繋がって楽しみを損なう場合があるので、その判断は決して間違っていないと思う。

「ボス自体は、四人のパーティでも大丈夫そうかい？」

「たぶん大丈夫じゃないかな。道中の敵も大したことはないみたいだし」

それならば話は早い。

必要とあらば、イナバさんやつくねにも声をかけようと思っていた

のだが、この四人で事足りるのであれば、あとは日程の調整だけで済む。

仮にビフレスト坑道をスムーズに攻略できた場合、そのままヨトウン雪原へと進むことになるだろうから、しっかりと準備をしてから向かわなくては。

結局その日は変更されたアバターの紹介と、坑道へ向かう日時、攻略にあたっての簡単な打ち合わせのみを行い、お開きとなった。

ダンジョンに臨むのは全員が時間に余裕がある週末。

未だ見ぬボスモンスターに思いを馳せながら、ボクは以前とは少しばかり変わった三つの背中を見送るのだった。

お稲荷様と大サソリ

薄暗い、どこか冷たい空気が流れる坑道を、タンクであるハヤトを先頭にして、ボクたちはゆつくりと進んでいく。

ロールプレイングゲームにありがちな、わりとテンプレートなダンジョン。それが、ビフレスト坑道の攻略を始めてボクが抱いた印象だった。

大小様々な道が伸びる内部は一見複雑に入り組んでいるようで、その殆どが行き止まりになっている。そこに宝箱やトラップが配置されているのだが、つまりはいつぞやか攻略した地下迷宮と違い、分岐する道をしらみ潰しにしていけば必ず正解に辿り着けるようになっていたのだ。

出没するモンスターはコウモリやネズミ系のものを中心に、手につるはしや松明を手にしたスケルトンなどのアンデット系がちらほら。レベルはさほど高くはなく、レベルがカンストしたプレイヤーが複数人いれば、まず苦戦しないだろう、といったところである。

さて、先程ボクはこのダンジョンをテンプレートなものとして評したが、こういったゲームをプレイする人たちはこれをどう攻略していくだろうか。

敵との戦闘を極力避け、最短距離を駆け抜けるか。

はたまた、時間をかけながら、枝分かれした道を一つ一つ丁寧に探索していくか。

経験値や戦利品を目当てに、徘徊するモンスターを片っ端から殲滅しながら進むというのも選択肢の一つだろう。

そして、ボクたちが選んだのは二つ目。ダンジョンを隅々まで探索しながら進んでいく方法である。同時に、徘徊するモンスターも見つけ次第出来る限り殲滅していく。

コウモリ系のモンスターからは牙や翼、スケルトンからは頭蓋骨をはじめとする骨系の素材を手に入れる事が出来るのだが、これがポーションなどの消費アイテムの素材になっており、自分で加工するも良

し、露天に並べて売却するも良しと、なかなか美味しいアイテムなのだ。

「よし、とりあえず脇道はこれで終わりかな」

長剣を鞘に納め、ぐるりと辺りを見回したあと、ハヤトが言った。その足元には、今しがた倒したばかりのモンスター、つるはしを手にしたスケルトン・マイナーが力無く横たわっている。そしてその奥、袋小路になったそこには宝箱が一つ。

スケルトンの亡骸が光の粒となって消えていくのを見送ると、コタロウがおもむろにそれを足の爪先で小突いてみせる。少しばかり乱暴ではあるが、どんな形であれ、プレイヤーの身体が接触すれば開く仕組みになっているので仕様上は全く問題ない。

中に入っていたのは石炭や鉄鉱石など、鉱石系の素材が幾つか。やはり坑道だけあって、こうした素材がよく手に入るようだ。

「さて、それじゃあ次はボス部屋かな？」

「ようやくだな。たしかサソリみたいなやつだったか？」

「そうそう。名前なんだったつけ？ あんと、アンテ、アンデス……アンデス・スコピオン？」

アンタレス・スコルピオンである。

ちなみにモミジが適当に言ったアンデス・スコピオンであるが、実は実際に存在する。

とはいえ、そのままの名前ではなく、あくまでアンデス山脈に生息するサソリ、という意味ではあるが。発見されたのは標高五千メートル近い場所らしいが、環境汚染が進む昨今、今もまだ生存しているかどうか……。

さて、そんな事を考えているうちに、ボス部屋である。あらかじめ場所を確認してから周囲の探索を行っていたので、なんらトラブルもなくここまで戻ってくることが出来た。

まあボス部屋といってもそう大層なものではなく、ドーム状になった広場にボスがぽつんと配置されただけのシンプルなもので、広さはテニスコート二面分ほどだろうか。

天井が高いのでさほど窮屈ではないのだが、それでも部屋の奥で待

ち構えるボスモンスター、アンタレス・スコルピオンの巨体のおかげで随分と狭く感じる。

「それじゃあ、やりますか」

バフを一通りかけ終わると、いざいざと意気込みながらハヤトが腰の長剣を引き抜き、アンタレス・スコルピオンへと駆け出していく。そして敵を射程距離内に収めた瞬間に左手の盾を投擲、シールドキヤストを発動させ敵のターゲットを保持、その脇を走り抜けて背後へと回り込む。もはや見慣れた開幕のやりとりである。

敵がハヤトを追って振り向き、こちらへ背を向けたのを確認してボクとモミジの後衛組は敵の真後ろから少しずれた場所、敵の動きを確認しつつ、ハヤトの動きが目視できる位置まで移動する。前線で敵を直接攻撃するコタロウは、敵の真横に陣取った。

火打石を打つような、硬質な音が響く。

口部にある鋏角きょうかくから耳障りな音を立てながら、アンタレス・スコルピオンがその大きな鋏を振り上げ、ハヤトに向かって振り下ろした。鉄を打つ鈍い音。攻撃を真正面から盾で受け止めたハヤトの両足が、僅かに地へ沈む。

しかしその直後、透き通った金属音と共に敵の鋏が盾から滑り落ち、轟音と共に地へと叩きつけられた。盾専用の防御スキル「シールドパリイ」だ。

攻撃の勢いをいなされ、アンタレス・スコルピオンが不機嫌そうに金切声をあげた。

隙だらけのその背中に遠慮なく鎌鼬をぶつけたその直後、ボクは自身に襲い掛かった予想外の攻撃に目を丸くし、その場から飛び退いた。

「ええー。めんどくさい設定してるなあ」

ボクが飛び退いたばかりの場所を強かに打ち付けたのは、アンタレス・スコルピオンの長くしなやかな尻尾であった。本来のサソリの攻撃方法とはかけ離れた使い方ではあるが、叩いた場所がどす黒く変色しているところを見ると、どうやら猛毒の属性まで付与されているようだ。

弱点を突いたのはいいが、威力が高すぎてターゲットが移ってしまったのかとも思ったが、敵はいまだにハヤトの方を向いたままだ。どうやら背後からの攻撃に反応して発動する、カウンター技のようだ。

しかし遠距離攻撃に対するカウンターにしては、随分と殺意に満ち溢れている。

問題は、これが毎回発動するものなのか、それとも一定確率で発生するものなのか、というところである。

毎回カウンターが発動するなら、正直遠隔アタッカー殺しもいいところだと思うのだけれど。

何はともあれ、まずは検証だ。

コタロウは問題なく攻撃できているようだし、側面からの攻撃は問題なし、と。

まずはデバフの更新もかねて、敵に向けて土蜘蛛を発動。移動速度低下と、スリップダメージの効果を付与する。

スキルが命中するのを確認し、ぐつと身構えるも反応はなし。どうやら状態異常系のスキルではカウンターは発動しないらしい。

では次に、弱点ではない火属性のスキル狐火をぶつけてみる。これも反応なし。

なるほど、なるほど。では最後に再び鎌鼬を。

即座に襲い掛かってきた尻尾に打ち据えられた。

「タマモ、大丈夫!？」

一撃でHPを半分以上持つていかれ、おまけに毎秒体力が減少する猛毒状態まで付与されて転がるボクを見てモミジが大慌てで回復魔法を詠唱する。

危ない危ない、危うく一乙^{戦死}するところだった。

「もー、無茶しちやダメだよー」

「ごめんごめん、少し試したいことがあってね」

ぷっくり頬を膨らませるモミジをたしなめつつ敵のカウンター攻撃に関して説明すると、モミジはあからさまに嫌な顔をして、べつと舌を出して見せた。

「ええーなにそれめんどくさい！ 聖属性は大丈夫だよね？」

「今のところは弱点属性だけに反応してるから、たぶん大丈夫だとは思うけど」

治癒術師の攻撃魔法は全て聖属性だし、もしアンタレス・スコルピオンに悪属性が設定されていたら厄介極まりないな。

とりあえずモミジにはカウンターの可能性があることを伝え、またハヤトたちの補助へと戻ってもらった。

弱点がつけないのは辛いが戦闘自体は極めて安定しているし、このままいけばそう苦労することなく撃破することが出来るだろう。

と、半ば気を抜きつつスキルを回していたのだが、問題が発生したのは戦闘の後半、敵の体力が残り二割を切った時のことだった。

アンタレス・スコルピオンがその二つの大剣を突き上げ、これまでよりもいっそう大きな咆哮をあげると、まるで狂ったかのように洞窟内を暴走し始めたのである。

敵視もターゲットも関係なく暴れまわるアンタレス・スコルピオンに、防御力が低いボクとモミジは顔を真つ青にしてその攻撃を回避することに専念。近接職のハヤトとコタロウも、予想できない敵の動きに翻弄され、うまく攻撃が出来ないでいた。

こうなつては仕方がないと、ボクは自身のMPを確認し、回復ポーションを飲み干す。

「モミジ、大技を使うからもしもの時はフォローをお願い！」

「えっ、あつ、ま、任せてー！」

被弾したコタロウに回復魔法を飛ばしながらモミジがぐつと拳を握ったのを見て、ボクは騰蛇とうだの札を投げ放ち、召喚陣を発動させる。

浮かび上がった六芒星の周りを梵字が回り、その中央から十二天将の一角、燃え盛る蛇が顕現した。

「おおー、すごいー！」

「マジか……怪獣映画かよ」

そう使う機会もなかったため、いまだ目にする機会がなかったモミジが目を輝かせ、回復そっちのけでその雄々しい姿に見入っている。コタロウは頬を引きつらせているが。

維持するのに凄くMPを使うからあまり長時間は使えないのだけど、ボクの計算ではぎりぎり、敵のHPを削りきるまでは維持できるはずだ。

手にした扇でアンタレス・スコルピオンを指し示し、炎と共に鎌首をもたげた式神にボクは命じる。

「攻撃開始」

洞窟を揺るがす咆哮をあげて、大蛇が大サソリへと飛び掛かった。

お稲荷様と雪景色

——国境の長いトンネルを抜けると雪国であつた
有名な小説の一節である。

ちなみにこの『国境』という文字を『こつきよう』と読むのか、『くにざかい』と読むのかで度々議論がなされたりするのだが、ここは別に国境という訳でもないし——設定上は旧国境を跨いでいるのだけれど——ほとんど関係のないことであるので、今回は割愛させて頂く。

さて、話を戻そう。

ボスであるアンタレス・スコルピオンとの戦闘であるが、結果から言えば騰蛇^{とうだ}の火力によるごり押しが功を奏した辛勝という形で終わった。

戦闘不能者こそでなかったものの、ボスがランダムターゲット化した後半はその挙動に随分と攪乱され、カウンター攻撃と相まって随分と苦戦させられた。

何せこちらはボスの攻撃一つで体力が六割から持っていかれるのだ。メンバーの回復を一手に担うモミジの負担を考えると、あまり周回はしたくない類いのボスといえるだろう。

ちなみに勝利時に手に入れた戦利品は「劇毒大サソリの鋏」という素材アイテムであつた。なんでも武器にも防具にも使える、なかなか便利な素材であるらしい。

その事を語るモミジの表情は、何故か優れないものではあつたが。

「ま、まあ、タマモなら大丈夫なんじゃないかなあ……あはは」

訳を尋ねてみると、モミジは何やら気まずそうな顔をして、視線をそらしながらそう答えた。

まあ理由は件の装備を作って貰った際にでも明らかになるだろうし、さほど気にする事でもないだろう。

そう内心で片付けると、ボクはほうと真つ白な吐息を吐き出した。目の前に広がるは一面の銀世界。吹雪という程ではないにせよ、空

からは真っ白な粉雪が絶え間なく舞い落ちている。

ヨトウン雪原。

古くより巨人族が治める極寒の地へと、ボクたちは今足を踏み入れている。

「予想はしていたけど、本当に真っ白だね」

いつも通り先頭を歩くハヤトがそう呟けば、そのすぐ後ろに続くコタロウが感慨深げに頷き、辺りをぐるりと見回した。

「ああ。リアルじゃ見たことないが、日本でもまだこれぐらい積もる場所もあるんだろう？」

「まあ、それも一部の標高が高い山岳部だけの話だけれど」

ぶるりと肩を震わせて、ボクはコタロウにそう返した。

そも、地球温暖化が加速する昨今、日本における「冬」というものは半ば消滅しかかっている。平野に限った話ではあるが、北海道における積雪が観測されなくなって早数年といえば、その深刻さが伺えるだろう。人工の物ならまだしも、天然の雪でウィンタースポーツなんて夢のまた夢だ。

かくいうボク自身、本物の雪には未だお目にかかった事はない。

「とにかく、まずは街を探そう。【耐寒のお守り】のおかげで寒さはまだ大丈夫だけど、吹雪いてきたら移動どころじゃなくなりそうだ」

ハヤトの言う【耐寒のお守り】とは、いつぞやか砂漠でお世話になった耐熱のお守りの逆の効果を持つ、寒さを緩和するアイテムである。

これのおかげで体感温度は随分とましになっているはずなのだが、いかんせん辺り一面雪ばかりの場所である。見ているだけで、不思議と肌寒い感覚に襲われる。

そんな時、ふと視界の端に写ったものがあった。

先端だけを白いインクに浸したような、黒い稲穂の形をしたそれを見つめることしばし。ボクはゆっさゆっさと揺れる七本のそれを操り、自分の腰から上をまるっと包み込んでみせた。

自慢の尻尾を利用した、即席ブランケットの完成だ。

「タマモ、お前何してんだ？」

まるで不格好な蕾のような姿になったボクを見て、コタロウが訝し

げな表情を浮かべる。しかしそんな彼とは正反対に、ちらりちらりと遠慮がちにこちらへ視線を送る人物がいた。

言わずもがな、モミジである。

何か言いづらそうに口を半開きにし、エルフ族の特徴である長い耳がふるふると震えていた。

「モミジも入るかい？」

そんな彼女と自身の身体を見比べた後、尻尾の一本を持ち上げながらそう言っていると、雪景色に良く映える褐色肌の少女はぱつと花が咲いたような笑みを浮かべた。

「いいの!？　じゃ、じゃあお言葉に甘えて……」

お邪魔しまーす。

そんな風に、まるでよその家にお呼ばれた時のような事を呟きながら、モミジが恐る恐る尻尾の束に包まれる。じんわりと、少しばかり身体が温かくなった。

「はあ、ぬくぬくー」

どうやら彼女もこの即席ブランケットにご満悦の様子で、こてんとこちらの肩に頭を預けてくる程である。

現実ではやたらとお姉さんぶりがるのに、こちらではまるで真逆。随分と甘えん坊さんだ。

もしボクに妹がいたら、こんな感じなのだろうか。

「モミジ、気を抜きすぎて寝落ちしないようにね」

はあい。

気の抜けた返事に苦笑いを浮かべつつ、先導するハヤトの後を追いかける。

「ごめんねタマモ。うちのモミジが迷惑かけて」

「迷惑だなんて思っていないさ。ボクから言い出した事だし……もしかして、ハヤトも入りたい？」

わざと悪戯っぽい笑みを浮かべてそう返せば、流石は色々と多感なお年頃。顔を真っ赤にして言葉を詰まらせた後、困ったように頭を掻いた。

「参ったな……これじゃあ先輩の威厳もなにもあったもんじゃない」

「このアバター相手だから、そう感じるだけさ。リアルのボクがさつきみたいなのを言っても、からかうなと叱られるのがオチだよ」
何せあもちんちくりんなボクである。

実際、チビの癖に生意気だー、なんて悪態を吐かれた事だってある。自画自賛やナルシストを気取る訳ではないが、なまじ頭が回るというのも、今の世の中生き難いものだ。

別に望んで手に入れた物でもないのに、何故こうもボクばかりーおっと、思考がアンニュイな方向に逸れた。

頭を振って、気持ちを切り替える。

軌道修正。

視線の隅で、モミジが不思議そうな顔をした。

「どうだいハヤト。街らしいものは見つかったかい？」

さくさくと雪の上を歩きながら、問いかける。

「いや、今のところは何も。坑道の出口に来訪者の石碑がなかったところを見ると、街までそう遠くはないはずなんだけど……」

「見落としてるだけなんじゃねえか？」

「こんな時に探索に強い盗賊^{シーフ}がいたら便利なんだけど、まあ無い物ねだりをして仕方がないし、地道に探すしかないかな」

困り顔のハヤトたちのやり取りを眺めていると、ボクの隣でのんびりしていたモミジがあつと声をあげた。ボクを含む三人分の視線が、彼女に集中する。

そして目を丸くして何を見つめているのかと彼女の視線を追いかけて、その先に佇む「それ」と目が合った。

金色の、まるで月のような瞳。

身体は真っ白な体毛で覆われ、三メートルはありそうなその巨体を、ボクの胴ほどはありそうな太さの脚が支えている。

細長い顔の先、白い息を吐き出す口元には鋭い牙が見え隠れしていた。

それは、巨大な狼であった。

「えっと、コタロウの親戚だったりする？」

「ンなわけねえだろっ！」

ほんの数瞬、思考を巡らし、口について出たのは実に下らない台詞。それに鋭いツツコミを返しながらも、コタロウの表情は穏やかではない。

「あれ、敵性モブに見える？」

「どうだろう。もしそうなら、少なくともフィールドボスぐらいの強さはありそうだけれど」

「でもでも、すつこいもふもふだよ？」

最後の一人は無視するとして。

ボクは少し離れた場所に立つ狼へと視線を戻す。

敵意、なんて曖昧なものはあてにしない。あんなもの感じ取れるのは漫画の中だけだ。

だが、少なくとも今すぐに襲ってくる様子はない。こちらの様子を伺うように、左右にうろろしながら、時折唸り声をあげている。

「どうする。逃げるか？」

「いや、下手に刺激しない方がいい。もしかしたら友好NPCかもしれないし」

その時、僅かに身構えるコタロウに刺激されてか、相手方に動きがあった。地面に鼻を近づけ、こちらの匂いを確かめるようにゆつくりと歩み寄って来たのだ。

これには流石に、ボクたち全員が身を固くした。

いつ襲いかかってくるかわからない。張り詰めた空気が流れ、ごくりと、誰かが喉を鳴らした。

やがてこちらの目と鼻の先まで近づくと、狼はおもむろにその顔を

あげ――

「なんだ、我が同胞はらからの匂いがしたので来てみれば、これはまた珍妙な顔ぶれだな。我らの土地で何をしている」

ぐるると喉を鳴らしながら、そんな事を口走った。

お稲荷様と亡国の王

「余が【霜の巨人】^{フリームスルス}の王、ロキである。歓迎しよう、小さき者たちよ」
吹雪のように冷たく、しかしどこか優しさを感じる声が頭上より響く。

六メートルは優に超えているであろう巨体に水晶のような青い瞳。肌は雪のように白く、少しくすんだ金の髪が左右に流れ肩にかかっている。

氷で作られた巨大な玉座に深々と腰かけ、巨人の王は頬杖をつきながらその透き通るような瞳をこちらへと向けた。その足元には真っ白な毛並みの美しい狼が寄り添い、そこからさらに一段下がったところでボクたち四人はひんやりと冷たい床に膝をついている。

ここは坑道からヨトウン雪原へ入り、そこから十分程歩いた場所にある氷の宮殿。巨大な氷山の内部を削って作られたこの宮殿にボクたちを案内したのは、雪原で出会ったあの巨大な狼。今も王の傍で金色の瞳を輝かせる、フェンリルと名乗るNPCであった。

見上げんばかりの巨体に鋭い牙をぎらつかせる見るからに恐ろしい狼が、突然流暢な日本語で話しかけてきた時はさしものボクも度肝を抜かれたものだが、二足歩行で^{どこぞの}胡散臭い^{情報屋}猫が歩き回っていても誰も驚かない世界観なのであるし、巨大な狼が意外と紳士的な態度で話しかけてくることもまあ、あるのかもしれないと無理矢理納得する事にした。

ともあれ、雪原で出会った彼——もしかすると彼女なのかもしれないが——に事情を説明すると、彼は自身が【霜の巨人】^{フリームスルス}の王、ロキに仕えている者だと話し、ボクたちをここまで案内してくれたのだ。

古代ローマの神殿を彷彿とさせる氷の円柱がいくつも連なった巨大な宮殿の姿にはじめは気圧されたものだが、実際に中を案内されてみると、そこには芸術品のような煌びやかな造形とは裏腹に閑寂とした雰囲気の流れいて、ボクはどこか胸を締め付けられるような気持ちになった。

「なるほど、用件はわかった。かの美しき姫の頼みであれば、是非もない」

そう言ってロキ王は玉座のひざ掛けを二度その指先で叩く。そうしてしばらくした後、宮殿を揺るがすほどの振動と共に現れたのは、雪を固めて作られた巨大な人形であった。

ブロックを組み合わせたようなずんぐりとした胴体の上に四角い頭部が乗っかっており、長い腕を地面に擦りつけながら歩いている。

突然の登場に呆気にとられるボクたちをしり目にそれはロキ王の傍まで歩み寄ると、そのドラム缶のような胴体に腕を伸ばし、その大きな指を器用に使って組み合わさったブロックの一つを手前へと引き出した。どうやら、あのブロック一つ一つが物を入れておける収納スペースになっているようだ。

「スノーマンと言うゴーレムの一種だな。間抜けな見た目ではあるが、これでなかなか役に立つ」

ロキ王がその引き出しから取り出したのは一本の枝であった。

ボクの腕ほどの太いその身は黄金に輝き、幾重にも別れた枝先にはうずらの卵ほどの、真珠に似た蕾をいくつも実らせている。中には花卉を開きかけたもの、満開に近いものまであり、大きく花卉を広げたその姿は水晶で作られた牡丹のようであった。

「これが【蓬萊の玉の枝】だ。王国の方では【宝石の木の枝】とも呼ばれていたのだったか。まあ、よい、持っていくがいい」

宝物というには随分と気安く手渡されたそれを、ボクは戸惑いがちに見つめる。近くで見ればなるほど、その全てが宝石で出来ているような、目が眩むような輝きを放っていた。

【蓬萊の玉の枝】

遙か東方にある蓬萊の山の頂に生えているという、真珠の花と実を付ける黄金の木の枝。

言い伝えでは、その根は美しい銀で出来ているという。

アイテムの説明を確認し、所持品欄へ^{インベントリ}と納める。

しかし、カグヤ姫が指定した品物だけあって今回もそれなりに手間がかかる事を覚悟していたのだが、随分とあっさり手に入ってし

まって些か肩透かしを食らったような気分だ。本当にこんな簡単に受け取ってしまったていいのだろうか、という気にさえなってくる。

「構わぬ。我が国はとうに滅びた。国を国足らしめる民草は死に絶え、最も古き血を持つ我だけが残った。我が宝物ほうもつは民草の喉を潤し、腹を満たす為の糧である。ならば民草を失い意義を失ったそれを、求め欲する者へ託すのになにを躊躇うことがあるうか」

ゆっくりと吐き出されたその言葉には、国を、民を愛した王の優しさや寂しさが含まれていた。

「だが、まあ、そうだな。やがてお主たちの力を必要とする時が来るかもしれないぬのでな。これは、その時の前払いという事にしておくとしよう」

そうして、ボクたちは氷の宮殿を後にする。

フエンリルに門まで案内されながら、ボクの脳裏には最後にロキ王が見せた、どこか悲しそうな表情がずっと残ったままであった。

振り向き、そびえ立つ氷の宮殿を見上げながら、誰からともなく息を吐いた。

「宝物を貰えたのは嬉しいけど、なんかこう、もやっとするね」

粉雪が舞い落ちる中、モミジの憂いを帯びた呟きが白い吐息と共に溶けて消えていく。

栄枯盛衰は世の習いとは言うものの、たしかにあの心優しい王や、これほど美しい宮殿を作り出した文化がただただ滅びを待つのみというのは、なんともやりきれないものがある。

この世界がゲームであり、そうあれかしと作られている以上、所詮は一プレイヤーでしかないボクたちにはどうすることも出来ないかわかってしまうこともまた、その気持ちに拍車をかけていた。

「まあ拡張ディスクの発売も近いし、ここの運営なら何かしら仕込んでくるだろ」

首筋を揉みながらそう零すコタロウ。

運営——正確に言えばシナリオライターになるのだが、その人の好みなのか、このゲームにはシリアスな——それこそ特定のキャラクターが死亡したり、重症を負ったりといった描写が非常に少ない。

勿論、イバラキのような例外も存在するが、どちらかといえば明るい雰囲気クエストが殆どで、登場する悪役もコミカルなものが多い。

その反面、出会い頭に腹部貫通パンチを食らわせてくるオネエがいたり、自主規制音（音）を入れないといけないような際どい発言ばかり連発するマッドサイエンティストがいたりするのだけれど、あのお祭り連中（魔王陣営）は例外中の例外なので気にしてはいけない。きつと担当しているシナリオライターさんが違うのだろう。たぶん、きつと、おそらくは。

とにかく、先ほどロキ王も何やら今後の展開を匂わせる発言をしていたし、彼が絡むクエストも今後は追加されていくことだろう。今はとりあえず、手に入れた宝物をカグヤ姫に届けることが先決である。

「拡張ディスクといえば、タマモは見るの？ 発売日前の公式生放送」
「ああ、一応は目を通すかな。どうせメンテナンスが始まれば、ログインは出来なくなるし」

ざく、ざくと踏みしめた雪が音を鳴らす。

モミジがいう公式生放送とは、拡張ディスクの発売日前日に公式の運営陣——プロデューサーや広報担当のスタッフが出演しインターネット上で放送する生放送のことで、実装を控えた追加要素などのおさらいやフィギュア、CDなどのグッズ紹介を行う。

更に今回は初の拡張ディスク発売というのもあって、噂ではゲストとして開発会社である「サイバネティクス・クエスト・コーポレーション」——通称「サイクエ」や「CQC」と呼ばれている——の代表取締役社長まで出席するのではないかと噂されるほどの力の入れようなのだとか。

「タマモはどこから手を付ける予定なんだい？ やっぱり新職業？」
「んー、いや、とりあえずはレベル上げかな」

新職業の巫女に関しては、フシミの里の長であるカヨウさんからもお誘いを受けているので気にはなっているのだけれど、それよりもボクが注目しているものが、今回の拡張ディスクでさらに引き上げられるレベル上限であった。

その解放される上限は九十。そう、ついにあの「九尾」に手が届くのだ。妖狐族を選択したプレイヤーたちにとっては、待ちに待った瞬間といっても過言ではないだろう。

ちなみにハヤトたち三人はそれぞれ聖騎士、忍者、踊り子を育てる予定らしい。職業レベルの差が大きすぎるので、今回はまたしばらく別行動になりそうだ。ボクがパーティーに入らず回復や護衛を行うパワレベリングを行ってもよかったのだが、さすがにそれでは新職業のスキル回しなどが身に付かないとやんわり断られてしまった。

「まあボクも陰陽師と種族レベルを上げ終わったら巫女を始める予定だし、そのうち合流できるんじゃないかな」

現在公開されている情報を見る限り、モミジが育てる踊り子は支援系のスキルが多いバツファアになるようだし、ボクがヒーラー寄りの巫女になれば、丁度今ボクたちが担っている役割が逆転する形になる。

四人パーティーとしては少しばかり火力面に不安が残る構成になるが、火力が必要になる場面ではボクが陰陽師に切り替えれば問題ないだろうし、まあなんとかなるだろう。

そうして、来るべき新要素に思いを馳せながら、ボクたち四人は雪原に行く。

拡張ディスク【深淵より来たりし者たち】。

その発売を一週間先に控えた、とある日の出来事であった。

お稲荷様とログイン祭り

——ログイン処理を実行中です。しばらくお待ち下さい。

——ログイン処理に失敗しました。

——アクセスが集中している為、ログインできません。しばらく時間を置いて、再度ログイン処理を行って下さい。

——ログイン処理を実行中です。しばらくお待ち下さい。

——現在サーバーが混みあっております。順次ログイン処理を行っておりますので、しばらくお待ち下さい。

——（現在3651人待ちです）

「うがー!」

春先の、大型連休初日。

ヘッドセットを外し、ボクは沸き上がる衝動に突き動かされるまま枕を壁に投げ捨てた。だが悲しきかな、貧弱なボクの腕力をもってして放たれたそれは、ゆるやかな放物線を描きながら壁の遥か手前で着地した。ぼふん、というなんとも気の抜ける効果音と共に、黒猫を模したそれが柔らかく弾み、床に転がる。しんと、空しさを含んだ静寂が部屋の中に広がり、ボクは小さくため息をついた。

『血圧、心拍数の上昇を確認しました。メデイカルチェックプログラムの実行を推奨致します』

枕元に置いた小型端末から、聞き慣れた音声が流れる。

「必要ない。少し取り乱したただだから、気にしないでくれ」

些か大袈裟な人工^{ミズ}知能^ハに苦笑いを浮かべると、ボクは足の裏で床の冷たさを感じながら、先程ぞんざいな扱いをしてしまったお気に入り

の枕を回収しに向かう。
心なしか少しばかり不機嫌な顔になった黒猫を抱き抱えベッドに戻ると、起動状態のままになっているヘッドセットを操作して映像を外部出力へと切り替えた。ヘッドセットの上部から薄っぺらい映像がいくつも飛び出して、ボクの周辺を囲む。

「やっぱり盛り上がってるなあ。ま、これだけ混雑すれば当たり前か」
いくつも開いた窓のうちのひとつ、『The Another World』の公式掲示板を表示したそれを指先でクロースアップしながら
そう独りごちた。

そう、本日は待ちに待った拡張ディスクの発売日。祭りの日である。

祭り、といってもゲーム内でそういったイベントが開催されるわけではない。

では、祭りとは何か？

言わずもがな、ログイン祭りである。

実装に伴う大型メンテナンスが明けたその瞬間、事前に予約し、ダウンロードとインストールを終えたユーザーたちが我先にと『The Another World』の世界へとなだれ込む。するとどうなるか。入り口で詰まるのだ。

IT技術が進化し、サーバーがより多くのデータを処理できるようになったとはいえ、限界はある。それこそ数千、数万規模のアクセスをスムーズに処理するというのは、最先端のスーパーコンピューターならいざしらず、一企業に用意できる設備では不可能だ。

なので残念ながら、ネットゲーム黎明期と呼ばれた時代から百年以上経過した現代においても、この『ログイン祭り』というお約束は続いている。

最悪今日中にログインすることは諦めるか、なんてことを思いながら、この激戦を潜り抜けた猛者たちが掲示板に書き込み続ける最新情報へ目を通していく。

気になるのは、やはり新職業。巫女になるためのクエストは、予想通りフシミの里で受けることができるようだ。

「いいなー、ボクも早くログインしたいなあ」

ごろごろ。ごろごろ。

ベッドの上であーだこーだ口をこぼしながら、頭の中でログインしたあとのプランを組み立てていく。それが楽しくてしかたがない。

「うーん、やっぱりモミジたちもインしてないか……」

フレンドリストを開いて、いつもの三人組が揃ってオフラインになつていることを確認する。というのも、彼女たちはこの大型連休中、バイトだったり部活動だったりでそれなりに忙しいのだとか。

実にご苦勞なことである。ボクはそんなのまっぴら御免だ。

この大型連休中は、家から一步も出ない構えである。いつも通りだとか、そんなことは気にしてはいけない。

「とりあえず、シャワーでも浴びよう」

まだ時計の針がてっぺんを回った辺りではあるが、無事にログインできれば今日は徹夜になるだろうし、時間がかかるものは今のうちに済ませてしまおうとしよう。

ぺたりぺたりと、着替えを手に浴室へと向かう。脱ぎ去った衣類をそのまま洗濯用のボックスへと放り込むと——こうしておけば、あとはミズハが機械を操作して洗濯してくれるのだ——浴室の椅子に座ってハンドルを捻り、柔らかな湯を頭から浴びた。水気を帯びた髪が湯と共に浴室の床に流れ落ち、ボクははつとして以前よりまた長く伸びた髪を一纏めにして肩にかける。

この髪は自分の身体の中でも数少ないお気に入りだが、手入れに手間がかかるのが珠に傷だ。

少しばかり面倒に感じつつも、仕方がないのでシャンプーの容器へと手を伸ばす。ふすつと、気の抜けた音がした。

しまった、どうやらシャンプーを切らしてしまったようだ。

「ミズハ、シャンプーの予備を出してもらっていいかな？」

『かしこまりました。それともあ様、急ぎご報告させて頂きたいことが——』

「もーあちゃんっ！ 元気にしてたー？」

我が家の優秀な人工知能の言葉を遮って、けたたましい音と共に浴室の扉が勢いよく開け放たれる。現れたのは、白衣を着た長身の女性であった。

腰まである黒髪に、白い肌。少しつり上がった大きな瞳の上に、長い睫毛が並んでいる。

スレンダーな、モデルのような腰に左手を添え、右手を掲げながら

元気よく挨拶する女性を一瞥して、ボクはこれ見よがしに大きなため息を吐いた。

「リン姉さん、ここ、お風呂場なのだけど」

「うん？ わかつてるよ？」

こいつはいったい何を言っているんだ。

そう言わんばかりの顔で首をかしげるこの非常識な女性の名は玉津嶋竜胆^{りんどう}。ボクの母親の妹であり、血縁上の叔母にあたるのだが、竜胆叔母さんと呼ぶと露骨に無視を始めるので『リン姉さん』と呼んでいる。

見ての通り非常識というか、ぶっ飛んでるというか、マイペースが服を着て歩いているような人間だ。

「丁度いいじゃん、もあがお風呂入ってる間にちやちやつと『いつもの』片付けちやうからさ、はい」

そう言つて、何かをねだるように右手を差し出す彼女を見て、またため息。

まあ、いつものことなのだけれど。

こんなのでもとある分野では麒麟児だの、時代の申し子だのと持て囃されているのだから、馬鹿と天才は紙一重とはよく言ったものだと思う。

「合理性を説くのであれば、寝室あたりで採取した方がよほど合理的だと思うのだけれど」

「やだよー、そんな変態ちつくなことするの」

「浴室にいきなり乱入してくるほうが、よほど変態的だよ……」

まったくもう。

肩を竦め、ボクはおもむろに髪に手ぐしを通していく。そうして二、三度ほど指を往復させたあと、指先に残ったそれをリン姉さんへと差し出した。

「いい具合に手ぐしで切れてくれてよかったよ」

そこには、一本の長い黒髪が。言わずもがな、ボクのものだ。

「毎度ありー。いやー、いつ見ても綺麗な髪だねー」

変態度がぐーんと上がった。二段階上昇である。

というか、湯冷めするのでそろそろ扉を閉めてほしい。大事な追加ディスクの発売日だというのに、風邪でもひいたらどうしてくれる。

「冷たいなー。よし、ではお姉さんが身体で暖めて」

ふんすと息巻いて上着に手をかけた変態を、問答無用で浴室から蹴り出した。変態滅ぶべし、慈悲はない。

「そんなー」

ぴしやりと閉めきった磨りガラスの向こうから、変態のすすり泣く声。ええい鬱陶しい。目的は果たしたのだから、さっさと作業に移りたまえ。

そんなこんなでボクが髪を洗い終わってリビングへと戻ると、そこには何やらごちゃごちゃと器具やら機械やらを並べ、ご機嫌な表情でキーボードを打つ叔母の――リン姉さんの姿があった。

人の心まで読んで睨み付けるのは止めていただきたい。

「何か変化は？」

タオルで髪を揉みながら尋ねると、右へ左へと世話もなく動き回っていた彼女の瞳がこちらを向いてぴたりと動きを止めた。手元の機械が音をたて、数値やらグラフやらがびつしりと印刷されたコピー用紙を吐き出し始める。

「いやー。特に異常も見られないし、今のところは健康そのものだねえ」

はい、と再び差し出された右手に、自身の右腕を乗せる。慣れた手つきで、ボクの腕にペン状の器具が押し当てられた。空気が抜けるような、小さな音。

「まー、引き続き様子見かな。薬は打つといたけど、突然体調が崩れたりしたら連絡してね。で、『あれ』はまだ？」

「来てないね」

「そっかー。一応、その辺りも調整する薬なんだけどねえ。もう少ししたら新薬も完成するから、次はそっちも試してみようか」

「副作用は？」

「吐くほど苦い」

それは……要検討だ。

「あれ使う？ ほら、お薬用の、ゼリーの」

「ボクが子ども扱いされるの、嫌いって知った上での発言かな？」

そんなもの使わなくても、薬ぐらい上手に飲める。

「そもそも、それって飲み薬なのかい？」

「いやー、注射剤だね」

朗らかに笑いながら、目の前の似非医者があっけらかんと言いつた。いや、そんな事だろうとは思っていたけれど。

ちらりと、時計の針を確認する。先程ログインを試みた時間から一時間ほど経過していた。あの混み具合から察するに、混雑の解消まで後二時間ほどはかかるだろう。

「んー？ 何か予定でもあった？」

「いや、ちよつと、ね」

忙しくなくキーボードを叩きながら視線だけをこちらに向けるリン姉さんにそう返すと、彼女は何かを察したように、にやりと悪戯っ子のような笑みを浮かべる。そして突然ボクの頭を抱き寄せると、けらけらと笑いながら撫で回し始めた。

「ちよつ、乱暴に扱わないでくれないかな!？」

「よいではないか、よいではないかー！ それにしても、またゲームばかりやってるのかー？ ダメだぞお、一応は学生なんだから勉学に励みたまへよキミい」

「日本の学校で、今更何を学べというんだ！」

もう、年がら年中研究室に引きこもっている癖に、どうしてこんなに力が強いんだ。

ボクがなんとか引き剥がそうともがきながらそう抗議すると、何故か頭を撫でる手つきがよりいっそう激しくなった。

「わはー、頭も筋肉も、如何に効率よく動かすかが肝要なのだよ。もあちゃんはその辺りがまだまだ甘いねー。だからずうつとぼつちなんだよ」

「ゆ、友人ぐらいボクにだっているさー！」

「ゲームの中に、でしょー？」

「現実の！ リアルの友人だよ！」

ぴたりと、撫で付ける手が止まった。

これ幸いと拘束を抜け出し、汗をぬぐいながら振り返ってみると、そこには目を丸くしたまま呆ける叔母の姿が。

うん。言わんとしてることはわかるけれども。

「え、マジ？」

「我ながら冗談のような話だとは思うが、残念ながら事実だよ」

呆けたまま半開きになったリン姉さんの口から、空気の抜ける音がした。

まあ、さもありなん、である。

ボクが筋金入りの、がっちがちの引きこもりであること。そしてこちらの『事情』を知っている人間からすれば、正しく青天の霹靂。明日は槍かサメでも降るのではないかという程の話であろう。

「ミズハ、もあちゃんのバイタルチェックを――」

「ほんつとうに失礼な人だな、叔母さん」

目の前のアラサー女子が、血反吐を吐きながらもんどり打って倒れた。効果は抜群のようだ。

『バイタルチェックを終了しました。異常はありません』

「ほら、ミズハは叔母さんと違って真面目なのだから、冗談なんて言うものじゃないよ」

胸を押さえ、呻き声を出すリン姉さんに容赦なく追い討ちをかける。勿論、『叔母さん』の部分強調することも忘れない。

「えーん！ ミズハー、もあちゃんがいじめるー！」

とうとう泣きまで入り、人工知能へ助けを求めるという、なんともみつともない姿を晒す世界屈指の科学者を眺めながら、特大のため息を吐いた。

もうこの人は放っておいて、ログイン出来るか一度潜^{ログインして}つて確認してみようかなあ。

時計の針をぼんやりと眺めつつ、そんな事を思う。

「そんなにハマってるんだね、そのゲーム」

笑顔を浮かべ、頬杖をつきながらこちらを見つめるリン姉さんにそう言われ、少しばかり照れ臭くなりながらも表情筋をまごまごと動か

して、ボクは苦笑いを浮かべた。

「僕はどうも食指が動かないんだよねー、ネトゲって。特に最近のは、平たいバランスのやつ多いし」

「何を言っているんだい。そこがいいんじゃないか」

同じスタートラインから始まり、そこからプレイ時間や操作する人間のセンスで多少は格差が生まれるものの、ゲームの世界では素人の小学生が、大人のプロボクサーを叩きのめすことだって不可能ではないのだ。

だからこそ、夢がある。

だからこそ、面白い。

そして、だからこそ、ボクのような『イレギュラー』でさえも受け入れられる。

なんて素晴らしい世界なのだろう。いや、こつちがクソゲーすぎるのだ。現実

ちなみにリン姉さんの専門はもっぱらFPSと戦略シミュレーションだ。敵の思考を読み切り、自分の意図したとおりに誘導するのがたまらないのだと以前熱く語っていた。我が叔母ながら、なかなかいい性格をしていると思う。

「ふうん。ま、あまりのめりこんで体調を崩さないようにね。ミズハもいるから大丈夫だとは思うけど、あまり無茶をするようならうちの研究室^{ラボ}に押し込んだじゃうからっ」

この人は、どうして楽しそうにそんなことを言うのだろうか。

「しかもそれ、自分が楽しみたいから言っているだけなんじゃないのかい」

「あちゃー、ばれちゃった？ もあちゃんが手伝ってくれと、作業効率が段違いなんだ——いひやひやひやひや！」

ぺろりと舌を出し、まるで悪びれもせずそうのたまうリン姉さんの頬を問答無用で抓り上げた。

む、研究室に引きこもっている割には、随分と肌の状態が良い。一応は女としてケアを欠かしていないのか、それとも体質的なものなのか。いや、間違いなく後者であろう。この人のずばらさは、ボク自身

よく理解しているつもりだ。

もちもちと指先に吸い付くような肌を離せば、リン姉さんはほんのりと赤みを帯びた頬をさすりながら這う這うの体でソファへと避難していった。

「もー、酷いことするなあ」

「自業自得だよ。それより、ボクはそろそろ寝室で潜^{ログインして}つてくるけど、リン姉さんはどうするの？」

「んー、もう少しだけ解析を進めたら研究室に戻るよ。もあちゃんが一局相手をしてくれるなら話は別だけどね」

ソファの上でだらける姉の手には、いつの間にかチェスで使用されるクイーンの駒が握られていた。ちなみにボクの私物だ。大方、ボクがシャワーを浴びている間に引つ張り出してきたのだろう。

しなやかな指先で弄ばれるクイーンをちらりと見やり、ほんの少し思考を巡らせる。

天秤が傾くのに、そう時間はかからなかった。

「仕方ないな。一局だけだよ」

「やたつ、さすがはもあちゃん話がわかる」

リン姉さんが嬉々としてテーブルの上にチェス盤を広げている間に、ボクはキッチンへ。

手早くコーヒーを淹れてリビングへと戻ると、リン姉さんと向き合うようにソファへと腰掛けた。

「ブラックでよかったよね……しかし、リン姉さんも懲りないというか、相当な負けず嫌いだね」

「いいじゃん、もあちゃんと指してるところ、僕の灰色の脳細胞が活性化していい感じにひらめきが……」

こめかみを人差し指でぐりぐりと押しながら、リン姉さんが難しい顔をする。

ちなみに現在までの戦績は百三十戦やってボクの全勝。正直、チェスに関しては負ける気がしないし、ボクの相手をしていてもリン姉さんはストレスが溜まるだけだと思うのだけれど、わからない人だ。

まあ、本人が楽しんでいるのなら何も言うまい。

手前に配置された黒のクイーンを指先でつまみ上げ、ボクは不敵な笑みを作った。

「どうする？ クイーン抜きでやろうか？」

「むっ、また馬鹿にして。いいよ、今日こそはぎやふんと言わせてみせるんだから！」

年甲斐もなく、頬を風船のようにして抗議するリン姉さんを見て、今度こそボクは噴出した。

そうして、数多くのプレイヤーたちが追加ディスクに沸く連休初日の午後、我が家のリビングにはしばらく駒が盤を打つ音だけが響き渡るのだった。

お稲荷様と九尾の狐

新エリア、アケボノ島嶼^{とうしよ}。

ジパングの東に位置する、かつて荒ぶる神が巨大な槌で国の一角を打ち砕いた時に出来たという言い伝えが残されている、小さな島々の集まりである。

本島から切り離されている為か、その島々に生息する生物は独自の進化を遂げており、手練れの戦士でも手を焼くほどだという。

来訪者各位には、この島々の生態系や資源等の調査を行ってもらいたい。

と、というのが建前というか、ゲームにおける設定である。

メンテナンス明けから見事スタートダッシュを決めた先人たちの調査によると、小島の一つに高レベル向けのダンジョンも配置されているらしく、追加直後ということもあって、エリア内はそれなりの盛り上がりを見せていた。

「これで、とどめだー!」

鬱蒼と茂る森の中に、澆漑とした少女の声が響く。

それと同時に繰り出された攻撃スキル『流星脚』が敵モンスターに突き刺さり、巨大な甲虫型モンスター【黒鉄カブト^{くろがね}】が黒板を引っ掻いたような、耳障りな鳴き声をあげた。

このモンスターはその名の通り巨大なカブトムシのような姿をしており、非常に高い防御力を誇る、物理アタッカーからすれば厄介極まりない相手ではあったのだが、天真爛漫を絵にしたような少女にとってそんなことは些事であったようだ。

「はい、またつくねの勝ちー!」

翼を大きく天に突き上げながらつくねは笑顔で勝鬨をあげると、まるでご褒美を催促する子犬のようにボクの胸へと飛び込んできた。

まったく本当に、随分と懐かれたものである。

飛び込んできた子犬、もとい小鳥を受け止め、頭を撫でながら吹き飛ばされたモンスターの方へと視線を投げれば、そこには小さく身を

震わせながら光の粒子へと帰っていく敵の姿が。

かなり表現が規制されているはずなのだが、無駄に生々しく再現され、こちらの嫌悪感を煽るその亡骸が完全に消え去るのを確認すると、ボクはパーティメンバー全員のバフを更新した。

「もう一匹いきますよー！」

それとほぼ同時に、革製の鎧を着こんだプレイヤーが、こちらへと意気揚々と敵モンスターを釣^{プル}つてくる。以前お世話になった攻略克蘭【暁の騎士団】所属のチャーハンさんだ。

彼の後を追って、先ほど倒したものと同じ黒鉄カブトが大地を揺らしながらその巨体を露わにした。ボクの胸からつくねが飛び出し、再び現れた強敵に歓喜の声をあげながら飛び掛かっていく。

以前から思うところがあったのだが、どうにもこの子は戦闘狂のケがあるのではないだろうか。

「ははは、お姉さん役も楽ではないなあ」

すっかり妹分として馴染んできたハーピー族の少女を眺めながらそんなことを考えていると、ボクの頭の上を、朗らかな笑い声と共に回復術師が扱う攻撃魔法のエフェクトが飛び越していく。

そうして現れた、筋骨隆々の肉体を惜しみ無く晒すそのプレイヤーは、いまだ光を纏う大きな杖を肩に担ぐと労うようにボクの肩を叩いた。

「いえいえ、いい子ですよ、つくねは。たしかにやんちゃですけど、意外と周りも見えてますし」

それにうちは一人っ子なので、ああして純粹に甘えてくる存在は実に新鮮で、妹がいればあんな感じなのかな、と悪くない気持ちになれる。

ともあれ、今はレベル上げの真っ最中である。さしあたり、自分の仕事はきつちりとこなすでしょうか。

雑談もそこそこに、ボクは袖口から呪符を取り出して空中へ放つ。指先から離れた五枚の呪符は円を描くように空中で停止し、それぞれが光の線で繋がれていく。

浮かび上がったのはボクの体をすっぽりと覆い隠す大きさの五芒

星。それを中心に円形の魔法陣が出現し、まばゆい光を放つ。

レベルが上がったことにより取得した、陰陽師の新しいスキル。式神を召喚する為の術式が回転し、呼び出したるは南方を守護する聖獣。

「出でませ、朱雀」

甲高い嘶きが響く。

燃え盛る嘴が召喚陣の中心を貫き、波打つ鬣が、陽炎をまとう巨大な翼が顕現する。

召喚陣をくぐり現れたのは、セイメイより授かった十二天将の一角、朱雀の化身であった。

おお、と敵の敵視を稼ぎ、その攻撃を一身に引き受けていたチャーハンさんが声を漏らす。そういえば、騰蛇とうだは何度か見せたことがあったが、朱雀のほうはこれが初めてだったか。

ともあれ、お待ちかねのアレもまもなくであることだし、ここは少しばかり巻きで進めさせてもらう。

指先で黒鉄カブトを示し、傍でこちらの指示を待つように羽ばたく式へと命じる。

「朱雀、遠慮なく焼き払え」

鎌首をもたげ、朱雀が再び嘶く。

そして鋭い嘴を大きく開くとその中心に紅蓮の炎が収束し、やがて恒星が如き光球を形作った。

「チャーハンさん、ちよつと眩しいと思うから気を付けて。あ、つくねはこつちにおいで」

「はい！ わふー！」

「え、ちよ、タマモさん？」

胸に飛び込んできたつくねをキャッチし、僅かに困惑するチャーハンさんを傍目にボクは指を振り上げた。灼熱の恒星が放たれる。

「たすきぼし擲星」

爆音。そして閃光。

天を突きあげる炎の柱が立ち上り、大地を焼くその紅蓮の炎に包まれながら黒鉄カブトが断末魔の叫び声をあげる。

このゲームではフレンドリーファイアが許可されていない為、その熱がボクたちの肌を焼くことはないのだが、景色を歪めるほどのその炎は、見ているだけでちりちりと肌を焦がされるような錯覚を起こさせた。

「タマモさん、ソレ使うなら言ってくださいよー」

どうやらこのスキルの存在は知っていたようで、盾で身を守っていたチャーハンさんが困ったように目尻を下げてそう漏らした。

まあ彼が所属している【暁の騎士団】はエンドコンテンツなどの攻略を主として活動しているクランであるし、このスキルを取得している陰陽師のプレイヤーも在籍しているだろうから、それも当然のことと言えるだろう。

「申し訳ない、少しばかり気がはやってしまつて」

拝み手を作り、苦笑いでそう返す。

しかし、気が急くのも無理からぬことだった。何故ならば、レベルアップに必要な経験値はきっかり黒鉄カブト一体分。つまり――

やがて炎が収まり、それと共に敵モンスターの亡骸が消滅すると、周囲にレベルアップを知らせるファンファーレが鳴り響いた。その中心は、言わずもがなボクである。

「おめー!」

「おめでとうございます」

これでレベル九十。現在設定されているレベルの上限に到達した。それと同時に、お楽しみ。このゲームを始めてからずっと目標にしていた、アレへの変化が始まる。

「おー、おおー!」

胸元で、つくねの驚く声。

それはゆつくりと、しかし劇的に始まった。

まずは全身を蛍のような柔らかな光が包み込み、あるものは三角の耳へ、またあるものは背後の八本の尻尾へと移りながらその形を変えていく。

その様子はまるでアニメの変身シーンのようで、他のプレイヤーから自分はいったいどういう風に見えるのか非常に気になること

ろではあるが、はしやぎながら瞳を輝かせるつくねを見る限り、そう悪くはないようだ。しかし、逆にそれが少しばかりこそばゆい。

ほんのりと熱をもった頬を撫でながら、ボクははにかむ。

やがて光が収まると、ボクの背後には待ちに待った、九本目の尻尾がゆらりゆらりとその身を揺らしていた。

九尾の狐。

待ち焦がれ、夢にまでみた存在へ、手がかった瞬間であった。

お稲荷様と竜宮城①

昔昔、浦島は

助けた亀に連れられて

竜宮城に来て見れば

絵にもかけない美しさ

日本人ならば誰もが知る童謡、『浦島太郎』の一節だ。

いじめられた亀を助け、竜宮城へと招待された浦島が乙姫から玉手箱を受け取り、地上に帰って開けてみればあつという間にお爺さんになつてしまった、というこの物語はあまりにも有名である。

「それで、その竜宮城が見つかったという噂が、港を中心に広がっていると」

「左様」

昼過ぎ、ぽかぽかと温かな日差しが差し込む縁側にて、ゆらゆらと揺蕩う葉桜を眺めながらセイメイが頷く。

珍しく小奇麗な白い狩衣に烏帽子までかぶっており、訊けばどうやら王様に城へと呼び出され、最近城下町に妙な噂が広がっているの
でその真偽を確かめてこいと命ぜられたそうな。盃に注いだ酒をぐいと呷りながら、セイメイはこれ見よがしに深いため息を吐いてみせる。

「まったく、あの男にも困ったものだ。陰陽師が入用ならば、陰陽頭
であるドウマン殿がおるではないか。やれやれ、これでは次に顔を合
わせた時、何を言われることやら」

一国の王を『あの男』呼ばわりとは、家臣の人が聞けば卒倒しそ
うなものだが、ボクはそう愚痴るセイメイを一瞥し、小さく息を吐いた。
「人を呼びだしておいてよく言うよ。どうせはじめから、こつちに丸
投げするつもりだったくせに」

にやりと狐顔の陰陽師が口元を歪め、しかしすぐ素っ気ない顔を
して。

「はて、なんのことやら。私はただ、偉大な九尾の御方に、頭痛の種を

取り除いではくれまいかと思い、こうしてもてなしておるだけだが」
そうしてセイメイが、おい、と声をかけると、屋敷の奥から女性――彼の使役する式神であろう――が料理が盛り付けられた盆を手に現れた。ふわりと藤の花の香りを漂わせる女性は盆をボクの傍に置くと、静かに一礼して部屋の隅へと下がっていく。出された盆には鮎の塩焼きや山菜のてんぷらなど、色鮮やかな料理たちが所狭しと並んでいた。

「九尾に至った祝いも兼ねて、市場へ買いに行かせた。できれば酒も飲み交わしたいものだが、九尾殿は下戸であらせられるからなあ」

くつくつと喉を鳴らすセイメイを一度睨み付けるものの、いやこの男はこういう奴だったと思ひ直し箸をとる。鮎の身をほぐし、湯氣をあげる白身を口へと運ぶと、ぱりつとした皮の香ばしさが鼻へと抜け、噛むほどに身の奥からにじみ出る脂の甘さと旨味が口の中いっぱいに広がった。うん、美味しい。

「ボクがクズノハさんと同じ九尾になったからって、そんなにへそを曲げることもないだろうに。面倒な人だな」

二口目を口に運ぶ前にぽつりと漏れたボクの呟きに、セイメイは珍しく渋い顔をして居心地が悪そうに視線を逸らした。

尊敬する母親が長い年月を経て辿り着いた妖狐族の極致に、ぽつと出の人間がさしたる苦労もなく到達してしまったのが気に食わないのだろうが、そう言われてもしようがない。

如何に精巧に作られているとはいえ、所詮はゲーム。プレイヤーが楽しむ為の、プレイヤー・最良の世界だ。こうして向かい合っているセイメイも、先ほど口にした脂ののった鮎も、結局はデータとして用意されたものでしかない。

故に、こうしてクズノハさんのことで皮肉ってくるセイメイの思考も、そうあれかしと定められてプログラムに組み込まれたパターンの一つでしかないのだが――

そこで、ボクは思考を打ち切った。

止めよう、なんだか虚しくなってくる。

溜息。

「ごちそうさまでした。それで、噂の具体的な内容は？」

一通り料理を堪能し、部屋の隅に控えていた式神の女性が盆を下げのを見送ってから、ボクは佇まいを直してセイメイにそう尋ねた。彼の眉間にはまだほんの少しばかり皺が寄っていたが、公私混同はしないタイプなのか、それともこれでおあいこだと割り切ったのか、盃に酒を注ぎながらぼつりぼつりと語り出した。

「港で漁をしておる者たちがな、沖で人魚を見たのだと」

「人魚？」

「そう、人魚だ。虹のような鱗がある、腰から下が魚のようになった美女だそう。そしてそれを見た者は海の底にある、それはそれは立派な宮殿に招かれるのだと。嘘か真か、手土産を持って帰ってきた者までするらしい」

ちなみにその手土産がどういったものかは、これといって定まっていならしい。人によつては定番の玉手箱、美しい珊瑚や真珠であったり、はたまた宝剣、宝玉の類だったり、この辺りは噂が広まるにつれて引つ付いた背びれ尾びれの類である可能性が高い、とセイメイは語る。

「しかし、だ。その竜宮城とやらに連れて行かれた者の中で、どうやら帰らぬ者がいるらしいのだ。漁に出て波に吞まれたのではとも考えられるが、もし何者かが港の傍に居付き、民を攫っておるのだとすれば、あの男^{ヤマト}としても放つてはおけんのだろう」

財宝、人を攫って悪さをする。

この部分だけを見れば、思い浮かぶのはあの鬼の盗賊。かつて山で博打勝負をした二人組、シユテンとイバラキであるが、今回は海での話であるし、噂が本当ならば攫った人間に財宝を持たせ、無事に帰しているでのその可能性は薄い。

だが、どうにも、浦島太郎の物語とは違い、複数人を攫っているのが引かかる。別にその人たちがいじめられている亀を助けたわけでも、沖で何度も亀を釣り上げたわけでもないだろうに。

ここの運営、変なところで捻くれてるからなあ。予想の斜め上をいくことも多々あるし。

「噂の真偽を調べ、もしもその人魚というものが物の怪や妖の類、悪しきものならば退治してくれまいかと、まあ、そういうことだ」

そうしてセイメイが差し出した書簡を開いてみれば、そこには噂が流れ始めてから行方不明となった人物の名前、人魚が目撃された場所の地図などが記されており、そしてその中には個人的に無視しようがない情報も散見された。

「フシミの里の人達も行方不明になっているのか」

「左様。あの里も海に近く、そう多くはないが漁に出ている者もいるのでな。それもあつて、既にカヨウ殿自ら動き始めているそうだ」

脳裏に巫女装束を着た、九尾の少女の姿が過ぎる。

そりゃあ、自身が治める里の人間が攫われたとあつては気が気ではないだろう。

しかし、今回のクエストにあの人が絡んでくるとなると都合が良い。拡張ディスクにて追加された新職業、巫女について詳しく話を聞きたい機会だ。

「それと、カグヤ姫からも別に文を預かっている。まったく、あの気難しい娘がああも懐くとは、お主もなかなかの人誑しだな」

「誑しとは人聞きの悪い。誰かさんと違って、真面目に仕事をしているだけだよ」

「はて、誰のことやら」

白々しく肩を竦めるセイメイに本日何度目かの溜息を吐きつつ、カグヤ姫からの手紙を開く。内容は案の定、見つけてきて欲しい品があるので城まで来るように、というものであった。

さてさて、今回はいったい何を頼まれる事やら。ともあれ、まずはその竜宮城の件を優先すべきであろう。なにせ彼女の父上、ヤマト王からの依頼なのだ。

「まあ、まずは港で話を聞いてみるといい。うまく事を収めた暁には、私から一つ術を授けてやろう」

いつ呼び出しのか、式神の美女二人を侍らせたセイメイの声に見送られ、ボクは屋敷をあとにする。彼の言葉に従うようで些か癪ではあるが、まずは港に向かい、漁師の人から詳しく話を聞くとしよう。

フレンド数人にメッセージを送りつつ、目指すは港、思い描くは鯛
やひらめが舞い踊る竜宮城。

僅かに感じる不穏な雰囲気に一抹の不安を覚えつつ、ボクは都の道
を行く。

風薫る、初夏の午後のことであつた。

お稲荷様と竜宮城②

いざ港へと着いてみれば、件の噂話に関してはすぐに詳しい話を聞くことができた。

ジパング港には荒波に揉まれて鍛え抜かれた厳めしい益荒男が多いが、実際に話してみれば竹を割ったような気持ちの良い海の男が殆どで、この国の人間にとつては馴染みのある妖狐族とはいえ、所詮は余所者であるボクでも意外と快く受け入れてくれた。いや、或いはクズノハさんやカグヤ姫といった重要NPCの好感度が高いことが良い影響を与えているのかもしれない。

そして数人の漁師から話を聞いた結果ボクが感じたもの、それは昔話に語られるものとはかけ離れた、どうにも胡散臭い竜宮城のイメージであった。

そう感じた要因は、主に三つ。

一つ、竜宮城に招かれた人間が、実際に竜宮城でどういったもてなしを受けたのか、その詳細を覚えていない。

二つ、竜宮城で受け取ったという宝を、常人以外に目にした者がいない。

三つ、竜宮城から帰った者が、夜な夜な海岸付近を徘徊するようになった。

特に三つめは異常だ。

他の漁師さんの話によると、どうも一度行方を眩ませて二日か三日——常人曰く、この間は竜宮城にいたらしい——後にふらりと港へ戻ってきたあとは随分と心ここにあらずといった風で、いつも通り仕事はこなすものの、呼びかけてみても空返事であったり、ぼうつと水面を眺めていることが多くなったのだとか。

正直、この時点でボクはさっさと踵を返して、この話を持ち込んできたあのいい加減な男を張り倒したくなったのだが、一度引き受けてしまった以上、最後までやり遂げなければどうにも収まりが悪い。

とりあえず話を聞いた漁師さんに、その人の顔つきが変わってきた

ら縄で縛って家から出さないようにと言いつけて、ボクは陰鬱とした気持ちのまま、船着き場で寄せては返す波の様子ぼうつと眺めていた。

溜息。

「行かないと、ダメだろうなあ……」

幸い、といつていいのか、漁師が神隠しに遭う海域へ向かう船は既に見つけてある。というか、船頭さんが噂話を怖がってしまって、交渉の結果なんと自分で船を漕いで向かう事になったのである。その時ボクの胸中に渦巻いていたのは、今回の依頼を軽々しく受けたことに對する少しばかりの後悔の念と、運営に對する怒りの感情であった。

いくらなんでもあからさますぎる。今回発売された拡張ディスクのタイトルと、海底にあるダンジョンと思われる建造物、そして行方不明者が多発する港町。これだけ揃えば大多数のプレイヤーが察する。

『銀の鍵』や地下ピラミッドでの一件もあるし、ほぼ確定といつてもいいだろう。

もう一度溜息を吐きながらボクは先程から随分と重くなった腰をあげ、借り受けた小舟が付けてある場所へと向かう。

そうして見つけたのは、人ひとりがやつと乗り込めるといった大きさの、かなり使い込まれた木製の船で、船尾には櫓ろかいと呼ばれる、手漕ぎ用のオールが取り付けられている。

表面はささくれ立ち、所々欠けている部分も目立つその船に、これは本当に大丈夫なのかと不安になりながらも足の爪先から恐る恐る乗り込めば、船は何度か軋む音をあげたものの、どうやらボク一人ならば問題なく使う事が出来そうであった。

とりあえずはほつと胸を撫で下ろし、ボクは櫓を握る。勿論、この手の船を操るのは初めての事なのだが、システム側の補助が効いているのか、かなり適当に櫓を左右に振るだけでもすすいと船は前に進んでいく。

ふと、ただ一人で海へ漕ぎだして帰りは大丈夫だろうかと不安に

なったものの、まあ、そこは最悪移動用のアイテムでも使えばいいだろうと、ボクはぎしぎしと軋む船に腰を落ち着けて大海原を進んでいく。

話に聞いた海域は本当に港から目と鼻の先、ほんの数分船を漕げば辿り着ける場所で、恐らくはこの辺りであろうとあたりを付けたボクは、とりあえずは噂の人魚が現れるまでのんびり釣りでもしていようと、インベントリからあらかじめ買い集めていた海釣り用の竿と餌を取り出した。

しかし、ぱつと見た感じでは特に波が荒れている訳でもなく、とても穏やかで美しい海なのだが、本当にこの近海に人魚とやら——いや、ボクの予想では相当に面倒で厄介な連中——が現れるのだろうか。水面に揺れる浮きを眺めながら、そんなことを思う。

ちなみに今回用意したのは大物にも耐えられる釣竿であるので、この辺りならブリやスズキ、鯛なんかも狙える。場所によつてはマグロなども釣れるそうだが、リールも付いてない釣竿でそれらの魚を一本釣り出来るというのは、流石はゲームと言うべきか。

ボクは基本的に直射日光が苦手なので、どちらかといえば木陰などで涼みながらのんびりできる川釣りの方が好みではあるのだが、こうしてゆつたりと船に揺られながら釣竿を振るのもたまにはいいものだ。

そうこうしているうちに水面に浮かんでいた浮きがぐいと水中へと引き込まれ、強烈な手応えと共に釣竿が弓なりにしなつて軋むような音をあげた。手応えからして、なかなかの大物である。

身体ごと海へ引きずり込まれないよう注意しながら、うつかり釣り針が抜けてしまわないように釣竿を右へ左へ操り、暴れ回る魚の体力を削っていく。そして十数秒の格闘の後、魚の力が抜けた一瞬を狙いすまして力いっぱい釣竿を引いてみれば、大きな水飛沫と共に銀色に輝く魚影が水面から打ちあがった。丸々と太った、ボクが両手でようやく抱え上げられそうな大きさのカンパチである。

一メートルほどはあるだろうか。船上に打ち上げられ、脆くなった船体を打ち壊さん勢いでびちびちと暴れ回るカンパチを慌ててイン

ベントリへと突っ込んだボクは、そこでようやく一息つき、額に滲んだ汗を拭った。

「もし、もし」

まさか一投目からあんな大物と格闘する羽目になるとは思いもせず、早くも小休憩を呈していると不意に背後からそう声がかかった。海の上である。勿論、周囲に自分以外の船が浮かんでいる訳でもなく、ボクはぞつとして肩を跳ね上げたあと、ゆっくりと声のした方へと振り向いた。

そしてそこにあつたのは、まるで絵本の中から飛び出てきたような、まさしく万人が思い描くような美しい人魚の姿だった。

長いウェーブがかった金髪に、澄んだ青い瞳。歳は見たところ二十前後だろうか。貝殻で作られた水着で胸を隠し、腰から上を水面に出したまま、直立する様な姿勢でこちらを見つめている。

なるほど、これは迂闊な男ならコロツと騙されてしまうだろう。ハリウッド女優もかくやという、絡めとられるような色香を感じる。

その女性は呆氣にとられるこちらを余所に滑るように船へと近づいてくると——この時に水面下で水をかく尾びれがちらりと見えた。間違いない件の人魚である——静かに頭を下げ、潤むような瞳を向けた。

「その九つの尾、さぞ力のある御方と存じます。どうか、どうかこの哀れな娘の頼みを聞いては下さいませんかでしょうか」

女性の頬を、涙が一筋流れ落ちる。

如何にも儚げな、か弱い女性を演じながら、その平均以上に実った胸を強調するように手を組んでこちらを見上げてくる人魚に、ボクは自然な動作で腕を組み、袖口にしまつてある呪符を握った。

「とりあえず、話を聞こうか」

そうして、穏やかな波に揺られながら、女性はぽつりぽつりと語り始めた。

女性——名前はミズクサというらしい——は同族の仲間と共に、遙か古より海底にある人魚族の里、タツノミヤで静かに暮らしていた。だが数年前にどこからともなく見たこともない物の怪がやってき

て、タツノミヤを占拠してしまったのだとか。民を人質にとられ、里の長である龍王も抵抗できずに竜宮の奥にある牢へと繋がれてしまい、それからというもの、彼女たちはその物の怪に言われるがまま港の人々をかどわかしては、まるで生贄のように連中に引き渡しているのだという。

「龍王様はろくな食事も与えられず、日に日にそのお力を弱めておいでです……。もしこのままお力を失ってしまえば、あ奴らはためらう事無く龍王様を害するでしょう。かの御方は我らが誇り、それが穢されるなど、死よりも辛い仕打ちにございます」

「それで、ボクにその龍王様を救ってほしいと？」

力なく、項垂れるようにミズクサが頷くのを見て、ボクはううむと考えを巡らせた。

恐らく、話自体は真実なのだろう。だが、ボクはこの目の前のミスクサという女性に、なんとも言えない違和感を覚えていた。

なんだろう、こう、表と裏が噛み合っていないというか、虚と実が渦巻いているというか。全体的に芝居がかっている。

十中八九、何かある。罫であれ何であれ、相当面倒くさい何かが。ともあれ、ここでこの人の頼みを突っぱねる訳にもいかない、か。小さく息を吐く。

「わかった、ボクの力で何とかかなればいいが、まずはそのタツノミヤとやらに案内してくれ」

虎穴に入らざれば虎子を得ず。

とりあえずは飛び込んでみて、その後のことはその時考えよう。所詮はゲームなのだ、やり直しはきく。

「おお、貴女様のその慈悲深きお心に感謝致します」

そう言つて、ミズクサは何やら指で印を結ぶと、ごによごによと呪文のようなものを唱え始めた。そしてその両手をこちらへと向けて呪文を唱え終わると、ボクの身体がふわりと浮き上がり、周囲を薄い膜のような物が包み込んだ。透明なボールの中に放り込まれたような感じではあるが不快感は無く、どうやら自分が念じた方向へ進む事も出来るようだった。

「その中であれば、水中でも不自由なく息をすることができでしよう。それでは、すぐに里へとご案内致します」

そうして、涙を拭ったミズクサに連れられて、ボクは海中へと進んでいく。

目指すは深い深い海の底。今や混沌の渦中にある人魚の里、タツノミヤ。

——およ、あれってもしかして……。あちやー、できればもうちよつとサボリたかつたんだけど、しかたないなー。

深い闇の中で、そんな少女の声を聞いた気がした。

お稲荷様と竜宮城③

大きく枝を伸ばした赤珊瑚が海底を彩り、青々とした海藻たちがまるで踊るように水中を揺蕩っている。中央に構えるは巨大な朱色の楼閣。それを潜り抜ければ、やがて左右に立派な塔を備えた、巨大な建物が見えてきた。西洋風の石で組まれた城ではなく、神社仏閣の本殿に似た木造の建物だ。

海底深くに建てられているにも関わらずその姿には少しばかりも劣化した様子もなく、あまりにも美しいその姿は、訪れた者の心を惹きつける魔力に似た魅力を孕んでいた。

そして、そんな竜宮城を訪れたボクであるが、今どこにいるかといえばその美しい本殿の地下。螺旋階段を下った先に設けられた冷たい地下牢の中である。

冷たい石の壁と背中の方に九本の尻尾を挟み込み、ボクは嵌め込まれた鉄格子をぼうっと眺めながらため息を吐いた。じやらりと、鉄球に繋がれた手枷の鎖が揺れる。

まあ、わかつていたことだ。

竜宮城を訪れたあと、ボクはミズクサの案内で竜王が囚われているというこの地下牢にやってきた。しかしそこで待っていたのは竜王ではなく、ジパングの港町から攫われてきた住民たち。彼らは手に手に鍬や鎌を持ち、まるで水底のような虚ろな瞳でボクを取り囲んだ。

やはり、と内心溜息を吐きながらついと案内人へと目をやれば、そこには他の人々と同じような、どす黒い瞳をしたミズクサの姿が。

まさか攫われた人を相手に乱暴な手段をとるわけにもいかず、観念したボクは大人しく手足に枷を嵌められ、こうして牢屋にぶち込まれているわけであるが……。

「ここに来てから結構時間も経ったし、そろそろイベントが進行してもいいと思うのだけれど……」

一応ログアウト処理やインターフェースの操作、アイテムの使用は可能なのでこの場所から抜け出そうと思えばいつでも出来るのだが、

そうしたところでこのイベントが進行するわけでもなし、どうせかけなければいけない手間ならば、今のうちに片づけてしまった方が楽。そんな理由で大人しく地下牢に繋がれている訳であるが、いい加減に飽きてきた。

見たところフラグになっているようなオブジェクトも見当たらないし、さてさて、どうしたものか。

「あつ、いたいたー！ やっほー、タマモ。調子どう？」

その時、鉄格子の向こう側から快活な声が響く。

一階へと続く螺旋階段の陰から現れたのは見覚えのある、しかしもう随分と顔を合わせていなかった少女。

肩まで伸びた炎のような赤い髪。青白い肌。背にはコウモリのものに似た翼を一对生やし、こめかみの辺りからは真つ黒な角が前方へと捻じれながら伸びている。

先端が矢じりの形になった細長い尻尾をゆらゆらと左右に振りながら、少女は無邪気な笑みを浮かべながらこちらへと手を振った。

「アワリティア、なんでこんなところに」

予想だにしていなかった人物の登場に、ボクは半ば呆気にとられながらそう呟いた。

このゲームがサービスを開始して以来、一度もプレイヤーの前にその姿を現したことがない「魔王」に仕え、単独でレイドボス以上の戦力を有すると噂される七人の将軍。魔王軍幹部、七つの大罪が一つ、強欲のアワリティア。

拡張ディスクの発売以降、ぱったりと姿を見せなくなった彼女が、なぜこんな深海の宮殿に。

困惑するボクをよそに、アワリティアは可愛らしく頬を膨らませてしかめっ面を浮かべると、まるで子どもを叱りつけるように人差し指を立てて足を一度だけ踏み鳴らす。

「むー、ティアでいいって言ったじゃん！ 驚いたのはこっちだよー。海に変なやつがいるから調べてこいって言われて来てみたら、なんかタマモいるし、ホイホイ中まで入って行っちゃうし！」

知らない人について行っちゃダメなんだよー。そう言っただけで彼女は

ボクが囚われた檻のすぐそばまでやってくると、ずずいと顔を寄せた。これにはボクも苦笑いを浮かべるほかない。

「いや、あのね、アワリティ——ごほん。あのねティア、今回のこれはボクにも考えがあつてのことなのだけれど……。いや、それよりも、調べてこいつていうのは例の魔王様の命令？」

また少しばかり大きく膨らんだ頬を見て慌てて名を呼びなおし、直後続いたボクの言葉にティアはまるで石化のデバフがかかったかのようにびしりと固まり、だらだらと滝のような汗を流し始めた。そしてそのまま、金色の丸い瞳がつい、と右上へ泳ぐ。なんともまあ、わかりやすい。

そういえば初めて会った時もこんな表情をしていたなと、ボクは少しばかり可笑しくなつて、小さく笑みを作った。

「まあ、それは一旦置いておくとして。申し訳ないのだけれど、これ、どうにかならないかな？」

彼女の困った様子をもう少し眺めているのも悪くないが、へそを曲げて立ち去られてはたまらないので早々に話題を切り替える。

鎖を鳴らしながら、これ見よがしに手かせを彼女の顔の前に出してみると、ティアは一瞬ぼかんと目を丸くした後、先程までの眩しい笑みを浮かべて力強く親指を立てて見せた。

「こんなのよーよー！ このティアちゃんにお任せあれ、だよー！」
ころころ表情を変えるその様子はほんとうに無邪気な子どものようにで、そういえば彼女とよく似た無邪気で腕白な少女、ハーピー族のプレイヤーであるつくねはティアと会ったことがあるのだろうか。お互いによく似た気質を持っているし、きっと仲良くなれると思うのだけれど。

そんなことを考えていると、地下牢の中に固い金属音が鳴り響いた。びくりと肩を震わせてその音の方を見やれば、そこにはあろうことか、牢屋に嵌め込まれた鉄格子を力づくで捻じ曲げるティアの姿が。

一本一本がボクの指二本分はある太い鋼鉄製の檻だったのだが、それがまるで飴細工のように左右に押し広げられ、人一人なら余裕で通

り抜けられるほどの穴が開いてしまっている。

そしてその空洞を悠々と通り抜けた後、ティアはいつものようにひらひらと手を振って笑い、しかし茫然としているボクを見て、こてんと首をかしげた。

「あれ、なんか違った？」

「——いや、なんでもないよ」

自信満々に答えるものだから、てつきり鍵か何かを持っているものだと思っていたが、まさかの力技だったとは。いや、うん、まあ、言っちゃ悪いけど脳筋っぽいものね、君。レイドボス以上の戦闘力は伊達ではないということか。

「んー？ まあ、いいや。それじゃあそれも外しちゃうね！」

あっけらかんとそう言つて、彼女はボクにかけられた手枷に手を伸ばすと両手でそれをしっかりと掴み、えいっという可愛らしい掛け声とともに力を込める。すると鉄製の手枷はまるで煎餅を割るかのように簡単に左右へと裂け、ボクの両手がふっと軽くなった。

本当に呆気なく解放された両手を摩りながら、何とも言えない複雑な感情をもって改めて彼女を見やると、当の本人は今しがた取り外した手枷を何やら興味深く眺めている最中であつた。

何か気になるところでもあつたのかとしばらくその様子を見守っている、ティアは何を思ったか、手にしたその手枷をおもむろに口元へ。そして――

ぼりぼり、ぼりぼり。

「ええ……」

目の前の光景に、ボクは言葉を失った。

たしかに先程ボクは『煎餅のように』と比喻したが、まさか本当に煎餅のように食べてしまうだなんて。

そうこうしているうちに、手枷は丸々彼女の口の中へ。まるで角砂糖でも齧っているような咀嚼音の後、小さな喉がこくりと音を立てた。

「んー、あんまり美味しくなかった！」

「だろぅね……」

どこからどう見ても、食べていい物ではないだろうに。

可憐な少女のえげつない偏食癖を目の当たりにし、流石のボクもドン引きである。

いや、あるいはもしかして、そういう食性をもった種族という設定なのだろうか……。前世紀のサブカルチャーに、そういったキャラクターがいたようないなかったような。

また脇道にそれ始めたボクの思考であったが、それは一階へと続く階段の向こうから響いてきた、何者かの足音によって現実へと引き戻された。

人の足音ではない。何か平らな、それでいて水気を帯びたもので地面を叩くような音である。

同時に生臭い、魚が腐ったような悪臭が鼻を突き、ボクは思わず顔をしかめ、袖で口元を覆った。

「あちゃー、見つかったちゃったか。タマモは危ないから下がっててね」身の毛がよだつほどの悪寒。ボクをかばうように、険しい顔つきのティアが前に出る。その手にはどこから取り出したのか、大ぶりの短剣が二振り握られていた。内側に反り返った刃が特徴的なククリナイフと呼ばれるものに酷似した外見ではあるが、その大きさはナイフというより鉈のそれである。

妖しく光る黄金の刃に目を奪われていると、柱の陰からついに足音の主が姿を現した。

ソレはまるで、青白い蛙のようであった。

瞬きが出来ないほど顔の外まで飛び出した巨大な眼球。

顔の皮はまるで魚のエラのように顎から喉元まで垂れ下がって、真つ青な口元にはノコギリの刃に似た鋭い歯が並んでいる。

だらりと下がった両手の指の間には水かきにも似た薄い膜があり、纏った檻褸の間からは粘着質な、どろりとした液体が滴り落ち、辺りに悪臭を振りまいていた。

—— ふんぐるい むぐるうなふ くとうるう……

悪臭とともに吐き出されたのは、地の底から響くような呪詛の言葉。

毛の生えていない頭部を上下に揺らしながら、ソレは跳ねるようにして階段を降りてくる。

——いあ！ いあ！ くらうるふ！ だごん！

そうして、不揃いな牙が並ぶ口から濁った泡を吹きながら、狂った目をしたソレは奇声をあげながらボクたちへと襲い掛かった。

お稲荷様と父なる……①

——ディープ・ワンズ
深きものども

それは魚、あるいは蛙に似た頭部に加え、背びれや尾びれ、水かきなどをそなえた半人半魚の悍ましい化け物たちであった。肌は鮫のようにざらざらとして、その表面を生臭い、粘着質な体液が覆っている。

水かきのついた両手をだらりと垂らし、にちやりにちやりと耳障りな水音をさせながら数歩こちらへと近づいてきたソレは、その半分近くが眼窩の外へと剥き出しになっている大きな眼球をぎよろぎよろと動かしてこちらをねめまわすと、地の底から響くような、呻き声に似た鳴き声をあげた。

——しゅろ、しゅる、るるるう、いええ……

涎のように口元から粘液を滴らせ、ヘドロのような泡を吐くソレを直視した瞬間、ボクはまるで背中に氷を突っ込まれたかのような、強烈な寒気を感じた。

そして即座に判断する。あ、これは生理的にダメなやつだ、と。

幸い今回は前衛をアワリティア——ティアが担当しているので直接触れることはないだろうが、それでも総毛だつような不快感は残る。

「うわあ、うわあ……」

若干、いや、かなり及び腰になりながら放った妖術【雷獣】が稲光を放ちながら深き者どもを貫く。

全身から黒い煙をあげ、耳を塞ぎたくなるような悍ましい断末魔を残して先頭の一人——いや、一体が倒れるのと同時に、そのすぐ後ろで杖を構えて何やらぶつぶつと呪文を唱えていた別個体へとティアが襲い掛かる。逆手に構えた二振りの短剣が煌めき、目にも止まらぬ連撃で化け物の胸に六つの傷跡を刻んだ。

そのままどうと倒れ、ぴくりとも動かなくなった不気味な亡骸をつま先で小突くこと数度、もう起き上がらないことを確認したティアが

ぱつとお日様ののような笑顔を浮かべてこちらへと駆け寄ってくる。

「ありがとねっ、タマモ！ おかげで楽にやつつけられたよ！」

「いや、うん、それはまあいいのだけれど」

ちらりと、天真爛漫な笑みを浮かべる少女の背後を見やる。

そこでは全身がぐずぐずに溶け、蒸発するようにして消えていく化け物の姿が。

「今更だけど、よかったのかい。ボクに手を貸してしまつて」

「んー？ 全然大丈夫だけど？」

こてんと首を傾げ、さも当然とばかりにティアはそう答えた。それを聞いておや、とボクは少しばかり不意を突かれたような気分になる。

ボクたちプレイヤーと、彼女たち魔王軍に所属するNPCは敵対関係にあった筈だ。それは過去の公式イベントだったり、様々なクエストに登場する彼女たちの言動からも明らかであり、プレイヤーの間でもおおむねそう認識されていた。

しかしその一方で、彼ら彼女らから攻撃されず、むしろ友好的な態度でコミュニケーションをとることができたという報告も、僅かではあるがあがっている。

曰く、好きな食べ物を一緒に食べた。

曰く、一緒にお昼寝をした。

曰く、女子トークに花が咲いた（相手はオカマだったけど）。
etc、etc、etc。

そしてこうした報告は拡張ディスクが発売されたあとやや増加傾向にあり、一部のユーザーは運営が方針を変更したのだの、プレイヤーを魔王軍へと寝返らせる伏線だーなどとあれやこれや推測しているが、真相はいまだ明らかにされていない。

まあ、ボクとしては彼女らと友好的な関係を築けるのであれば、それに越したことはないと考えているのだが。

「それじゃあ、弱っちいのもやつつけたし次いつてみよー！」

えい、えい、おー。

思考の海に沈んでいたボクの意識を引き上げたのは、そんな可愛ら

しい掛け声であった。

軽やかに両手を振りながら、まるでピクニックにでも向かうかのような足取りで歩きだした少女の小さな肩を掴み、待ったをかける。

餅のような頬を膨らませ、爛々と輝く赤い瞳がボクを見上げた。

「むー、なあにタマモー」

「いや、何って、いったいどこに行く気なのさ」

「どこって、んー……とりあえず下？　せきにんしやを出せー！　みたいなの？」

「みたいなの……」

あまりに軽いノリに、ボクは頭を抱えた。

いや、こちらとしても今回の事件の元凶、つまりはここ竜宮城に巣食う化け物、深き者どもの討伐が目的であるので、七將軍たる彼女の助力を得られることはこの上なく心強いのだが、なんというか、その、何事も心の準備というものが要だと思ふんだ。

そんなボクの心中を察したのか、ティアは頭の上に豆電球のアイコン——わざわざ運営が用意したのか、漫画などによくある何かを閃いた際のエフェクト——を浮き上がらせると、その瞳を細めながら口元を手で覆い隠した。

「ぷすー、と空気の抜けるような笑い声。」

「タマモ、もしかして怖いのー？」

むっと、ボクの中の負けず嫌いな部分が反応した。

「馬鹿なことを言わないでくれ。ボクはただ、キミが迷子になってしまわないか心配になっただけだよ」

「へっへーん、うっかり捕まっちゃうタマモと違って、ティアちゃんは大人だから迷子になんてなりませんー！」

えっへん、どうだと胸を張り、ティアが鼻息荒く胸を叩いた。

そのあたりが子どもっぽいから心配なだけけど、とボクがため息を吐こうとしたその瞬間、ボクたちは呑気に口論している暇などないということを知った。

それは、地の底から響くような、本能を揺らすような叫び声。

それは少女の悲鳴。男の怒声。すすり泣く女の声。老婆の断末魔。

赤子の産声。

地獄の窯を開いたような、身体中から血の気が引くような獣の咆哮であつた。

ステータス画面いっぱいに驚くほどの量のデバフが表示され、身体を浮遊感が包んだ。

足元を見る。

そこには光さえ飲み込むほどの闇、奈落が広がっていた。

「タマモー」

ティアの叫び声が聞こえる。

懸命に手を伸ばす彼女の姿が見える。

こちらへと伸ばされたその細い手を掴もうと、ボクは半ば無意識のうちに自身の手を伸ばし――

するりと、その手は虚空を掴み、ボクはそのまま、絡めとられるように闇の中へと落ちていった。

暗転。

画面が切り替わる。ゲームが、新しいフィールドを、オブジェクトを読み込んでいく。

ポリゴンの骨子が組みあがり、現実と遜色ない精度のテクスチャがその表面を覆う。

表示されたのは、神殿であつた。

どこか和風な趣があつた竜宮城とは異なる、古代ギリシアの神殿にも似た光景にボクは目を丸くする。

左右には円形の柱が等間隔に並び、床には磨き上げられた大理石がはめ込まれている。

しかし建造されてから随分と時間が経っているのか、その表面にはひびが入り、角が欠けてしまっているものが殆どだった。

そして、その先。

周囲とは明らかに違う、巨大な岩が剥き出しになったそこにいた存在を目にした瞬間、ボクは腰が抜けそうになった。

ソレはずんぐりとした鯨に似た胴に海蛇の頭、そして昆虫のような節足をいくつも取り付けた、目を逸らしたくなるほどのいびつな姿を

鱗が砕け、その隙間から体液をまき散らしながら化け物が悲鳴をあげる。

「妾が来たー」

妖狐族たちが集うフシミの里、その長であり、ゲーム内でも屈指の力を持つと目される九尾の妖狐族、カヨウさんは不敵に笑みを浮かべると、声高にそう宣言した。

お稲荷様と父なる……②

「元柱固具、八隅八気、五陽五神、陽動二衝敵神」
がんちゆうこしん はちぐうはつき おんみょうにしようげんしん

それはまるで歌うような、穏やかで美しい声であった。

しなやかな細腕をゆらりゆらりと操りながら、九尾の少女——カヨウが巨大な魔法陣の中で踊る。

気泡のような光の粒が足元から立ち昇り、下駄が床を叩く音が柏手の様に響く。

「害気を攘払し、四柱神を鎮護し、五神開衢、悪鬼を逐い、奇動靈光四隅に衝徹し」
ゆずりはらい きどうれいこうしぐう ごしんかいえい

「■■■■■■■■——！」

異形が、ダゴン・アバターと名付けられた化け物が吼える。

粘着質な体液でまみれた胴からミミズに似た、それぞれがカヨウの身体を丸呑みに出来る程の大きさを持った触腕がぞぶりぞぶりと耳障りな音と共に現れ、まるで纏わりつく羽虫を払うかのように横薙ぎに振るわれた。

だが、それらが舞い踊るカヨウを薙ぎ払うより早く、醜悪な触腕は切り捨てられ、地へと落ちる。

それを成したのはライオンほどの巨大な体躯をもった金銀二頭の狐であった。

口元にはそれぞれ玉と巻物を咥え、隈取のように施された赤い化粧の上で、満月のような瞳が油断なくダゴン・アバターを睨み付けている。

そして二匹の獣に守られた巫女の祝詞は途切れることなく、カヨウの袖口から燕の様に飛び出した七十二の呪符たちが、いまだ唸り続ける異形の周囲を取り囲んでいく。

「元柱固具、安鎮を得んことを、慎みて五陽霊神に願ひ奉る」
柏手。

指先がゆつくりと印を結び、解き放たれた呪符がダゴン・アバターの身体に張り付いた。

「急急如律令！」

カヨウの命じる声に応じて七十二の呪符が眩い光を放ち、ダゴン・アバターが苦しむように身を震わせ、咆哮をあげた。

それと同時に、先程まで全身に感じていた圧迫感のようなものが、ふつと消えてなくなる。

「これ、何を呆けておる！ おヌシも早う手伝わぬか！」

そのあまりにも幻想的な光景に目を奪われていたボクを、心なしか焦燥の色が浮かぶ声が叩いた。

はっとして見れば、そこには僅かに震える指先できつく印を結び、額に汗するカヨウさんの姿。傍に控えた二頭の狐も、どこか心配するように己が主を見つめている。

「こやつ、ただの怨霊物の怪の類かと思っておったが、どうやら神仏に近しいものらしい。妾の術では完全に封じ込めぬ」

そのカヨウさんの言葉を証明するように、彼女の足元に広がる魔法陣が水面のように波紋を描き、ダゴン・アバターに張り付いた呪符たちが力なく明滅する。

硝子が砕けるような音が響いたかと思えば、何枚かの呪符がダゴン・アバターの抵抗に抗えず剥がれ落ち、砕け散るさまが見えた。そしてその綻びから抜け出すように、数本の触腕が伸び始めている。

どうやら、そういうことらしい。

袖にしまい込んでいた扇と呪符を取り出し、ボクはいつものように自身にバフを施していく。

「わかりました。ちなみにどれほど持ちこたえられますか？」

「ようもって四半刻^{三十分}。ええい、こんなことならヨリミツの奴でも連れてくるんじゃない！ 金狐、銀狐、結界の維持は妾一人でよい、お主らはタマモの露払いをせい！」

二頭の狐が頷き、鬨^{とき}の声をあげて巨大な化け物へ向かって疾走する。

そして自身に迫る危機を感じてか、拘束を逃れた触腕たちが蠢き、今まさに飛びかからんとしていた二頭に襲い掛かった。

使用するスキルを選択し、実行。

九本の尾が紫電を運び、雷鳴とともに放たれた中級妖術【雷獣】が悍ましい触腕たちを諸共に焼き払う。

「■■■■■■■■■■——！」

ダゴン・アバターが耳障りな悲鳴をあげ、焼き切ったばかりの触腕たちが一斉にこちらを向いた。

粘着質な体液が沸騰するように気泡を吐き出しながらその先端部分に人間のものに似た眼球が浮き上がり、こちらに視線を向けてぴたりと止まる。

ぞつと、背中に氷を放り込まれたような悪寒。生理的嫌悪感。

その直後、視界にシステムメッセージが走った。

——状態異常【狂気】

——正気度が減少します。

——正気度【90】

——一時的狂気。状態異常【幻覚】【失語】

「……なるほど、そういうことか」

視界がぶれる。

現れるのはその輪郭を幾重にも揺らしながら、奈落のような眼孔をこちらに向ける者たち。

それらは半魚人のみならず、里から攫われた妖狐族や人間族の男女も混ざっていた。

だが、先程かけられた状態異常^{デバフ}の事を鑑みると、これらは全て幻覚、こちらにダメージを与えてくることはないだろう。

しかし「正気度」なんていう初めて見るステータスも合わせて考えれば、一概に無視していいものとも思えない。

合わせてこの【失語】の状態異常が厄介で、どうやら【沈黙】と同じく詠唱系のスキルを使用不可にする効果があるらしい。

何度使用を試みてもうんともすんとも言わなくなったスキル覧を眺めながら、ボクは溜息を吐いた。

とにかく、この幻覚には極力触れない方がいいだろう。

どこぞのゾンビゲームよろしく、両手を前に突き出しながら呻き声をあげて近付いてくる幻影たちを避けながらフィールドをぐるりと

確認する。

ダゴン・アバター本体に動きは無し。触腕は四本。恐らくは本体にダメージを与えないと効果がないタイプのボスなのだろう、先程「雷獣」で与えたダメージは回復済み。

さてさて、どうしたものか。

「こらタマモ、容易く敵の術中に嵌まるでない！ 金狐、銀狐！」

その時、発破をかけるような澆刺とした声がボクの背を叩き、それと同時に狐の鳴き声が響いた。

身体を優しい光が包み、目の前の幻影たちが霞の様に消え失せていく。

——正気度【100】

——一時的狂気が解除された。

システムメッセージが流れていく中で、ボクの身を柔らかく大きな銀色の尾が包み込む。

ステータス画面には「神使の護り」というバフ効果が表示されており、どうやらこの銀の狐がダゴン・アバターが撒き散らしているバッドステータスからボクを守ってくれているようだった。

それと同時に前方へと陣取った金の狐がひと鳴きすると、弾けるようにダゴン・アバターの触腕に浮き出ていた目玉が弾け飛び、化け物は苦しむようにその巨大な身を振る。

なるほど、つまりはそういうギミックであるらしい。

幻影が霧散し、障害が無くなった神殿の中を、心なしか軽くなった身体で前へ。前へ。

拒むように振るわれた触腕が、右肩を掠めた。

「このボスの属性は間違いなく水、なら土属性の攻撃が有効なはず」

スキルを選択、実行。

袖口から飛び出した呪符たちが魔法陣を描き、詠唱に伴う硬直時間が発生、一定時間身動きが取れなくなる。

無論、その隙を逃す程敵も甘くはない。詠唱が完了するまでに計三発、触腕からの攻撃を受けて四割ほどの体力が削られてしまう。

だが、この程度ならば許容範囲内だ。幾らでもリカバリーは可能。

詠唱が完了。巨大な魔法陣の中央から、十二の星の一つが現れ出でる。

「宜しく頼むよ、勾陳」

細く、鋭い息遣いと共に現れたのは、金色の鱗をもった大蛇であった。

口元には二本の鋭い牙を伸ばし、身体全体に草の根に似た模様を走らせている。

十二天将が一つ。京の中心を守護するといわれている土神である。呼び出した勾陳はまるで幽鬼の如くゆるりとその鎌口をもたげると、その金色の瞳でダゴン・アバターを睨み付け、身を震わせた。

「瓦解土砲」

指先で標的を指し示し、スキル発動を命じる。

甲高い嘶きと共に、開け放たれた巨大な顎から放たれたのは地を抉り、敵を粉碎する土石流の一撃であった。

土剋水。

土は水を堰き止め、流れを止めて腐らせる。故に、土は水に克つ。放たれた強力な一撃はダゴン・アバターの触腕を諸共に薙ぎ払い、巨大な胴体に喰らいつく。

名前の上に表示された体力バーが、目に見えて減少した。いける。

ボクは心の内で拳を握り込んだ。

「さあ、反撃といこうか！」

狐と蛇の、そして歪められた水神の咆哮が重なった。

お稲荷様と父なる……③

巨大ボスとはいえ、しょせんはソロクエスト。

それなりに高い難易度ではあるだろうが、そう苦勞するほどのものでもないだろう。

そんな樂觀極まるボクの考えは、戦闘開始からものの十分ほどで完膚なきまでに打ち碎かれることとなる。

戦闘不能になること四回。

ギミックを攻略できずに強制排除ワイプされること二回。

初見殺しに憤慨してふて寝すること一回。

お昼ごろに始めた攻略であったが、時計の針はいつしか夕飯時を指し示していた。

正確には、十七時五十四分。

七度目の攻略である。

ちなみに初めてこの海底神殿に入った時には気が付かなかったが、各プレイヤー専用のどうやらこの神殿全体がインスタンスエリアになっているようで、同じエリアに侵入するには、そのクエストを発生させたプレイヤーとパーティを組まなければならないようだ。

つまり他のプレイヤーからの助太刀は期待できない、ということ。

「■■■■■——」

もう七度目になる、開戦を告げるダゴン・アバターの咆哮が神殿内を震わせる。

火力はほどほど。機動力は皆無だがその分、耐久力にステータスを振ったモンスター。

それが試行錯誤の末に出した、ダゴン・アバターへの評価である。そう、このモンスターはたしかにタフだが、純粋な強さだけ見ればさほど脅威にならない存在なのだ。

たしかに触腕を使った縦方向への打ち下ろし、横方向への薙ぎ払い
は脅威だが、それらの攻撃は事前に大きな溜めが発生するので避ける
事は容易い。

注意点は三つ。

攻撃の溜めを見逃さない事。そして攻撃の延長線上にカヨウさんがいないように立ち位置を調整すること。

彼女は戦闘中に様々なバフをかけてくれる優秀な支援ユニットではあるが、ボスの攻撃を三発受けると集中力が維持できなくなり戦線を離脱してしまう。

この戦闘で彼女を失ってしまうと難易度が爆発的に上昇する為、プレイヤーは彼女から三十度から四十度ほど軸をずらして戦う事を勧めする。

あとは初戦時に少しばかり手を焼いた、こちらの正気度を下げて狂気のデバフを付与してくる咆哮への対処をきちんと行うこと。

この三つが第一形態時点での注意点。

「■■■■■■■■■■———！」

「なにか仕掛けてくるぞ、注意せい！」

化け物の咆哮のあと、カヨウさんの叱咤が響く。ダゴン・アバターが第二形態に入る合図だ。

ぶくぶくと膨れ上がる巨体。腹からは魚の腹びれに似た透明な刃が何枚も飛び出し、鱗に覆われた頭の前面にびっしりと丸い目玉が浮き上がってくる。

生理的嫌悪感を抱かずにはいられない醜悪な変体を終わると、始まるのはシューティングゲームさながらの弾幕、弾幕、弾幕の嵐。毒々しい見た目をした紫色の気泡。

高圧で打ち出される水の刃が縦横無尽に振るわれ、さらに頭上からは鋭い氷柱の雨がこちらを蜂の巣にしようと容赦なく降り注ぎ始める。無論、第一形態で使用してきた咆哮でのデバフ付与も織り交ぜながら。

この第二形態での注意点、それは【正気度^{waive}】の管理だ。

これはどうやら今回の戦闘にのみ適応されているステータスのように、低下することによって様々なデバフをプレイヤーに発生させる。

十下がれば【幻覚】と【失語】。

三十で【錯乱】。これはプレイヤーのスキルを阻害する効果、いわゆるスタンが散発的に発生するようになる。

五十で【狂乱】。プレイヤーを強制的に移動させるデバフで、移動すれば当然、詠唱を必要とするスキルは中断されるので魔法使い系のプレイヤーにとっては非常に厄介なものとなる。

そして正気度が三割を切ってくるといよいよ詰みだ。

発生するのは【圧倒的恐怖】。

恐怖に屈し殆どのスキルが使用不可となり、移動にも制限がかかる。

そこから先は検証していないが、おおかた即死だとか強制的な^{にげる}連打だとか、そんなところだろう。

恐らくは、誰もが初見殺しされるこのイベントの鬼門もここだ。

正気度を下げてくる敵の行動は二つ。

【狂気の咆哮】という序盤から使用してくるものと、【狂気の視線】という特殊攻撃。

後者は発生時にダゴン・アバターの方を向いている場合、正気度を十から二十下げてくる。この数値自体はおそらくランダムだ。

対策としては定期的にカヨウさん、もしくは彼女が使役する金狐銀狐に近づき、正気度を回復させること。

ただし第一形態の時と同じく、範囲攻撃に彼女や式神を巻き込むと最悪戦線を離脱されるので、ここでも引き続き注意が必要だ。

「本当に、クリアさせる気があるのかなつ、ここの運営は……！」

毒の気泡をかわしながら、妖しく光り出したダゴン・アバターの目玉に背を向ける。

足元に浮き上がった影を見て氷柱を避け、水圧カッターを防御スキルの重ね掛けで受ける。

「くそつ、まさかRPGで三次元戦闘をする羽目になるとは思わなかった……！」

絶対に実装するゲームを間違えているだろう。

これでソロ専用クエストだとのたまうあたり、運営こそ正気度の確認をすべきではないだろうか。

ともあれ、乗りかかった船に加えて負けず嫌いなボクなので、悪態をつきながらも次こそは次こそはと思いながらチャレンジしている訳なのだけれど。

恐らくは次かその次のパッチで難易度を下げる修正が入るのだろうけれど、その後クリアしても何だか負けた気がして癪だ。

「でもこの分だと、もう一つぐらい何か隠してそうだなあ」

迫りくる弾幕を潜り抜け、隙間を縫うようにこちらにもスキルで応戦しながらそうひとりごちる。

現在のダゴン・アバターの体力はだいたい四割を下回ったところ。第二形態に入ったのが半分を割った段階であつたことから、恐らくは残り三割ほど、もしくは一割のところでもう一波乱あるとみた。

勿論、予想できたところで何がどうなるという訳ではないのだけれど。

「これタマモ、もう少し丁寧に戦わぬか！ 術が解けるー！」

どうやら立ち位置を少し間違えていたらしく、触腕での叩きつけを飛び退いてかわした辺りで背後からカヨウさんのお叱りを受けた。

こつちも慣れない動きをしている中で、無茶を言わないでほしい。

そんな言葉を、ぐっと飲み込む。

シューティングをはじめ、FPSはボクじゃなくてリン姉さんの領分だ。

あの人ならこの程度の弾幕、鼻歌まじりにクリアしてしまうのだろう。

ダゴン・アバターの体力が、二割を切る。まだ、動きに変化は見られない。

と、なると危険なのは残り一割になった辺りか。

ダゴン・アバターに背中を向け、【狂気の視線】を回避すると同時に金色の毛並みが美しい大狐の元へ。円状に広がる結界に入る事で、もう少しで五十を切ろうとしていた【正気度】を最大まで戻す。

そのまま次の範囲攻撃が来るまでの数秒の間、小休憩を挟んで再び戦場へ。

残り一割五分。そろそろラッシュを仕掛ける頃合いだろう。

あわよくば、そのまま何事もなくクリアできてしまわないものか……。

勿論、そんな淡い期待はすぐに裏切られることとなる。

「^{がかいどほう}瓦解土砲！」

もう何度目になるかもわからない、勾陳を召喚しての大技。

吐き出された土石流がダゴン・アバターを強かに打ち据え、ついにその体力が一割を切ったその直後のことであつた。

二度の変体を経て膨れ上がったダゴン・アバターの体が、三度波打つ。

だが、最後にこの醜悪な化け物が見せたのは肉体の強化ではなく、むしろその真逆。

「……小さくなってる？」

そう、ここにてダゴン・アバターは触腕を増やすでも、より苛烈な攻撃を始めるでもなく、その身を小さく縮め始めたのだ。

亀が外敵の攻撃から身を守るように、触腕や腹びれを引っ込め、より丸く、丸く。どんな槍も、剣も通さないほどに固く、固く。

敵の意外な行動に、ボクはしばし立ち尽くす。

瀕死にまで追い込まれて守勢に回った？ ソロ用とはいえ、仮にもダンジョンのヌシが、この土壇場で？

ない。絶対にそれはない。

これはどちらかといえば、最後の最後、ほぼ覆りようなない戦況を根っこからひっくり返せるの切り札を切る為の時間稼ぎ——

「タマモ、ぼうつとするでない！ 早う止めをささんと取り返しがつかん事になるぞ！」

ボクの考えを肯定するように脇から焦った様子のカヨウさんが飛び出し、身を縮め続けるダゴン・アバターへ無数の護符を放つ。

巨体を四方から囲むように配置された呪符が煌めき、半透明の檻を形成したその瞬間、閉じ込められたダゴン・アバターの体が文字通り爆発した。

それは正しく堰を外した川の如く、引き絞った体を何倍、何百倍にも膨張させる肉の氾濫をカヨウさんの強固な結界が押しとどめる。

しかし疲弊した身ではそれも長くは続かないようで、ガラスケースのような結界の表面には幾つものひびが入り始めていた。

「銀狐、金狐！」

額に汗を浮かばせながらカヨウさんが名を呼べば、二頭の狐はそれぞれダゴン・アバターを挟み込むように左右へと広がる。ダゴン・アバターを中心に、カヨウさんと二頭で三角形を描くような配置だ。

カヨウさんが素早く印を結び、呪文を紡ぐ。

「破邪四天結界！」

柏手を一つ。

それを引き金に立方体の結界を覆うように新たに三角錐状の結界が現れ、今まさに一枚目の結界を破らんとしていたダゴン・アバターの動きをより一層縛り付ける。

それと同時に、結界の中に残されたボクは補助魔法を更新し終え、更なる追い込みをかける為に絶え間なく攻撃スキルを浴びせかけた。カヨウさんの結界が完成したからといって、安心はできない。むしろ、ここが正念場だ。

その証拠にダゴン・アバターは既に結界の破壊を諦め、さらに身を縮め始めている。

先程の大技、スキル名はわからないが恐らくは相当な威力を秘めた大技だったはず。ならば、恐らくこれは残りの体力を一定時間内に削りきらなければワイプされるという、この戦闘での最後の嫌がらせである可能性が高い。

掌にじわりと汗がにじむ。

MPは残り僅か。可能な限り攻撃スキルは打ち続けているが、最終形態に入って防御力が増したのか、以前ほど体力の削れ方は大きくない。

焦り。焦燥が肌をひりつかせる。

脳裏をよぎる、一つの可能性。

一か八か。

こちらは大技に賭けてみるか、否か。

「残り時間もそう多くない……やってみるか」

数瞬の思考の後、スキルを選択。

前方に護符を投げ放てば、それはふわりと浮き上がり巨大な魔法陣を汲み上げる。

響いたのは獣のような、あるいは猛禽類のそれに似た咆哮。

魔法陣の中央から現れたのは、炎を纏った大蛇。

十二天将が一、騰蛇とうだがその巨大な罅あきとをダゴン・アバターへと向けた。

「砲火天連！」

罅が煌めく。

放たれた大火はダゴン・アバターを飲み込み、とぐろを巻いて爆発した。

いつぞやかあの地下墳墓でも見せた、騰蛇が使用できる特殊攻撃スキルだ。

水属性を纏うダゴン・アバターに対し、火属性の攻撃は本来あまり効果がない。だがそれを考慮しても、この攻撃こそが現在出せる最高火力、その足掛かりであった。

無論、これで終わるはずもない。

「次！」

再度スキルを選択、実行。

騰蛇が霞となつて消えていくのと同時に、新たに展開した魔法陣から次なる式神を召喚する。

ごっそりと消えるMP。だが、まだ尽きた訳ではない。

魔法陣から次に現れたのは、巨大な火の鳥。

この式神もまた、十二天将の一角。南方の守護神、朱雀の化身である。

甲高い叫びと共に朱雀はその炎の翼を大きく羽ばたかせ、ダゴン・アバターへと突撃した。

「燎原りようげんのひ之火！」

炸裂音と閃光。ダゴン・アバターが悍ましい悲鳴をあげる。

だが、結果を確認している暇はない。

すぐさま朱雀を送還。MP回復ポーションをあおつて次なるスキ

ルを発動させる。

これで最後。これが終わればもう、ボクのMPは空っぽだ。文字通り、残った力を全て振り絞っての一撃となる。

新たな魔法陣を作成。呼び出しのは無論、一番効果が見込める土属性を帯びる式神。

魔法陣を潜り、再び金色の大蛇陳がダゴン・アバターの前へと顕現する。

なんとか、ギリギリのところリキャストタイムで再使用時間が間に合った。

「瓦解がかいどほう土砲」

放たれる土石流。それはダゴン・アバターの体を容赦なく飲み込み、打ち砕き、その体力を削っていく。

そして少しだけ残っていたダゴン・アバターの体力バーはみるみるうちに短くなり、短くなり——ほんの一ドット分だけが残った。

「……悪い冗談だ」

ここにきて、まさかの乱数。

おのれ妖怪一足りない……！

いやもう一押し、もう一押しできればクリアできるので。ここで諦めるわけにはいかない。

幸い残りはほんの僅か。これならば通常攻撃でも削りきれる筈だ。そうして折れかけた心を奮い立たせ、扇を手を駆けだそうとしたその時である。ボクの背を飛び越えて、ダゴン・アバターに躍りかかる者があった。

カヨウさんか？ 否、彼女は二体の式神と共に結界を維持するので精一杯だ。とてもではないが戦闘に参加することは難しいだろう。

では、誰か。

頭上で、澆刺とした少女の声が響いた。

「ピンチとあらば即参上！ ティアちゃん、いつきまーす！」

燃えるような赤い髪をひるがえし、青い肌の少女が笑う。

振りかぶった双剣が、今まさに爆発寸前であったダゴン・アバターの体に深々と突き刺さった。

悲鳴が、地獄の底から響くような断末魔が響く。

「ようやった！ タマモを連れて退け！」

「あいあいさー！」

カヨウさんのその声に、アワリティアは双剣を引き抜いてその場から離脱する。ついでとばかりに、ボクの首根っこを引っ掴んで。

ぐえつと、自分でも聞いたことのない声が出た。

「喝ッ！」

一際大きな、拍手の音。

それを合図にダゴン・アバターを捕らえていた二重の結界が一息に圧縮され、抵抗する力を失った怪物を完全に封じ込める。

断末魔が聞こえなくなった頃、その場に残ったのは不気味なまでの静寂と、小さな黒い勾玉が一つ。恐らくは、ダゴン・アバターを封じ込めたものだろう。

それを袖から取り出した護符で包み、慎重に拾い上げたところでようやくカヨウさんはほっと息を吐いた。

「……終わったのう」

「……みたいです」

肩から力が抜ける。

どうと倒れるようにして、ボクは人目も気にせずその場に大の字になった。

「終わったー！」

所要時間、おおよそ七時間。

このふざけた長丁場に、ようやく終止符が打たれた瞬間であった。

お稲荷様と父なる……④

かくして邪神の幻影は討たれ、静寂を取り戻した玉座の間でボクはへとへとになりながらその場に座り込んだ。

これほど長時間、同じコンテンツにのめり込んだのも久しぶりである。

「よく頑張ったのう、タマモよ」

そうしてぼんやりと天井を眺めていると、背後から声がかかった。反射的に振り返れば、そこには金と銀の大きな瞳が二対。

空白。

わつと声をあげて仰け反ったボクを見て、カヨウさんは悪戯が成功した子どものようにかんらんかんらと腹を抱えて笑った。

こちらをじつと見つめる二対の瞳。それは彼女が呼び出した二頭の狐のものであった。

間近で見ると、改めてその大きさに言葉を失う。大型犬を通り越して、それはまるで馬か牛かといったところである。

大きな耳がぴくりと動く。

二頭は何を思ったかボクの首元に鼻を寄せると、くうくうと甲高い音をあげながら喉を鳴らした。

鼻息とふさふさの毛並みが首に当たって、なんともくすぐつたい。

「ほう、こやつらがこうも気を許すとは、流石はタマモじやな!」

「あの、お褒め頂いて光栄なんですけど……」

少しぐらい止めてくれてもいいのではないだろうか。

そんなことを思いつつ、ふすふすと鼻を鳴らしていた金色の方に手を伸ばしてみる。

そつとあごの下を撫でてみれば、それはまるで高級なシルク生地のような、きめ細やかで柔らかな手触りであった。

おお。おお。

そんな間拔けな声をあげて、ボクの両手は瞬く間にその毛並みへと吸い込まれていく。

これはダメだ。悪魔的な心地良さである。

この毛並みに埋もれながら眠れたならば、それはもう良い夢を見ることが出来るだろう。

「いいなあ、タマモ。いいなあ」

そんなボクの様子を、文字通り指をくわえながら眺める少女がもう一人。

今回、最後の最後でまんまと美味しいところを持っていったアワリティアである。

相も変わらずこちらに害意は持っていないようで、ボクにじやれつく銀狐の背におっかなびっくり手を伸ばしては、寸でのところでひらひらりとかわされて頬を膨らませていた。

そうして欲求不満な彼女がようやく掴んだのは、黒い毛並みの大きな尻尾。ゆらりゆらりと九本ゆらめくうちの一本であった。

いや、どうしてそうなった。

「あー、もふもふう」

「いや、もふもふう、じゃなくてね？」

相当お気に召したのか、もはや掴むどころではなく両手両足を使つてがっちりとホールドされている尻尾を眺め、毒づく。あげくそのありさまが興味を引いたのか、金銀の大狐たちまでも鼻を鳴らしながらその周りをうろうろとやりだす始末である。

初めて出会った頃から変わりのないそのマイペースっぷりには呆れたものだが、このまま昼寝でも始められてはたまらないとボクは残った八本の尻尾で、人様の尻尾を抱え込んだ挙句に涎まで垂らし始めている不屈き者の顔面を思いつき叩いた。

乱打、乱打である。相手はレイドボス以上なのだから、遠慮はいらない。

フルボッコだドン。

あばばば、と壊れたテレビのような奇妙な声をあげて、ティアが猫のように飛び上がった。

「むー、何すんのさあ！」

「なにもへちまもないのだけれど、とりあえずここでだらだらしてて

も大丈夫なのかい？」

そもそも先に何かされたのはこちらの方である。

愉快愉快と、ボクの背後でカヨウさんが笑う。

「そういえばお主は初めて見る顔じゃな。見たところこの国の者でもなければ来訪者でもないようだが、何者じゃ？」

「いつぞやか温泉にやってきた男がいたでしょう。あれの仲間ですよ」

「んんー？ おお、あの男とも女ともつかん格好をしたあやつか！

ではこの娘も魔王だのなんだのの手先ということだよいか」

「ちよつと待ってそれってルクスリアのこと!? 温泉ってなに私聞いてないそんなの！」

がしりと今度はボクの肩を掴み、口角泡を飛ばす勢いで迫ってくるティアの顔面にもう一度尻尾の一撃をお見舞いする。

きやん、と小気味のいい悲鳴があがった。

「はいはい、話が進まないからそれはあとで。それよりも、よかったのかいティア。魔王様とやらからは、調べてこいと言われてなかったんだろう？」

調べるどころか元凶を倒すところまで手を貸してしまったわけだけれど、命令違反だとか、その辺りは大丈夫なのだろうか。

いや、メタな言い方をしてしまえば、『そう設定されているイベント』なのだからそれこそ問題も何もないのだろうけれど。どうにもこのゲームのNPCたちは妙に生々しいというか、人間よりも人間臭いところがあるのでつい情が湧いてしまう。

だがそんなボクの心中を知ってか知らずか、当の本人は人差し指をあごに当てながら何のことかと可愛らしく小首を傾げてみせた。

「んー、たぶん大丈夫じゃないかなっ！ 魔王様やさしいし！」

そんなんでいいのか、魔王軍。というかもはや隠す事さえしなくなっただけ。

とはいえ、そもそもその魔王とやらもティアの人となりを把握した上で命令を下したわけであるし、こうなることも承知の上だったのかかもしれない。

「もし、もし……」

呑気に開き直るティアアホの子に呆れかえっていると、どこか聞き覚えのあ
る声が不意に背を打つ。

すわ深きディープ・ワンズものどもでも沸いて出たかと懷に手を伸ばしながら振り
向けば、そこにいたのは意外な人物であった。

波打つ金髪に青い瞳の美女。

その身なりこそ貝殻の水着から純白のドレスへと変わっているが、
その美貌は忘れようもない。

ボクをこの海底神殿に招き入れた張本人、人魚族のミズクサが見惚
れるような微笑みを浮かべてそこに立っていた。いや、どういう魔法
を使っているのか、下半身は魚のようになったままふわふわと宙に浮
いているので、『立っている』というと語弊があるのだが。

僅かに身構えるボクに、神妙な顔をするカヨウさん。ティアに関し
ては我関せずといった風で、再びボクの尻尾にじゃれついている。

どうにも締まらない絵面になったので呆れてまた溜息を吐いて肩
の力を抜くと、すぐ傍まで歩み寄ったミズクサが深々と頭をあげた。
ほう、と背後からカヨウさんの感心するような声が響く。

「よくぞ、よくぞ成し遂げてくれました」

それは慈愛に満ちた、身体を優しく包み込むような声色だった。
違和感。

顔も、体格も同じの筈なのに、以前会った時とはまるで違う存在感
に気圧される。

まるで中身だけを入れ替えたような——いや、どちらかといえばよ
り中身の濃度を上げたような、それほどの濃密な気配。

「やはりお主か。タマモをここへと引き入れたのは」

溜息交じりにカヨウさんが零す。

その瞳には呆れの色がありありと浮かび、いまだに事態が飲み込め
ていないボクは二人の間で馬鹿のように立ち尽くすことになった。

「ええ、その通りです。かの邪神に囚われ、力の大半を奪われたわたく
しにできることは分身を操り、力ある者に助けを求める程度が精々で
したので……。しかし事情を知らぬタマモを謀ったこともまた事実。

如何様な責めも甘んじて受ける覚悟にございます」

目を伏せ、再び頭を下げるミズクサ。

その言葉に嘘偽りは感じられず、しずしずと首を垂れるその姿には、このまま首を撥ねられても構わないというような潔さがあった。ボクはその細い肩に手を置くと、こちらを見上げる瞳に首を振った。

「貴女が、龍王だったんですね」

ミズクサが静かに頷く。

近くでよく見てみれば、その頭には珊瑚のような赤い角が二本、捻じれながら後ろに伸びていた。
なるほど、なるほど。

彼女が真に龍王と呼ばれる存在ならば、まるで別人のようなその神聖な雰囲気も納得である。

「わたくしの真の名はワタツミ。あまねく海を統べ、守護する者。タマモよ、よくぞ、よくぞ我が民たちを救ってくれた。今はただただ言葉尽くすことしかできませんが、この大恩は必ずや、この身を尽くしてでも報いると誓いましょう」

柔らかく、ひんやりと冷たい両手がボクの手を包む。

頬からは涙が一筋流れ、上気して赤みがさした頬が香りだつような色香を放っていた。

しかしそこに割って入る者があった。言わずもがな、カヨウさんである。

彼女はボクとミズクサ——ワタツミの間にその身を割り込ませると、九本の尾を目いっぱい広げながら鼻息荒くワタツミへ食って掛かった。

「おい、おい。生憎じゃがタマモは我らが同胞であるぞ。それともお主ら水底の民にはあの耳と尾がえらにでも見えるのかのう」

「あら、あら。かの女神ウカノ様に仕える者とは思えぬお言葉。愛を注ぐに狐も魚も、ましてや龍もありましようや。老婆心も過ぎれば毒になりますよ？」

あはは。うふふ。

傍から見れば親し気に笑い合いながら、しかしその間には静かに火花が散っているように見えるのはボクだけだろうか。

竜虎相搏つという言葉があるが、この場合は虎ではなく狐という字の方が正しいな。

いがみ合う二人を見ながら、呑気にそんなことを思う。

というか、この二人は知り合いなのだろうか。

なんというか、こう、互いに随分と気安い感じがするのだけれど。

「知り合い、そうじゃな、まあ知人ではある。長生きをすると、こういう余計な縁も寄ってくるから困ったものじゃ」

「あらあら、わたくしはカヨウ様のことはそれなりに好いておりますのに、意地悪な御方ですね」

「だー、わかった、わかったから子どもをあやすような真似はよさぬか！」

ほんわかと笑みを浮かべながらワタツミがカヨウさんを抱きしめれば、彼女の腹に顔を埋めるような形になったカヨウさんが珍しく慌てたような声をあげた。

そうして這う這うの体でボクの背中へ回り込むと、尻尾の陰から顔だけを出してうーうーと唸り始める。常に不敵でふてぶてしい彼女にしては本当に珍しい。

まるで見た目相応の少女のようだ。

「もうよい、帰るぞタマモ！　ここにおつては生臭くなってかなわん！」

「うふふ、これはこれは、随分と嫌われてしまいましたね」

力いっぱい袖を引いてくるカヨウさんに和んでいると、ワタツミがおもむろに袖口から何かを取り出し、こちらへと差し出してきた。

こちらの手にそつと自身の手を添えながら、慈しむように渡されたそれはまるで深海のように暗く、しかし鮮やかな青の光を湛える硝子玉であった。

【龍王の宝玉】——龍王の頸にあるとされる宝玉。持つ者に強大な魔力を与え、万難を排すると伝えられている。

渡されたそれを見つめ、表示されたテキストにボクは目を見張つ

た。

「残念ながら宿っていた力はあの邪神に奪われ、今はただの硝子玉に過ぎません。しかしそんな硝子玉でも、貴女の旅路の役には立つでしょう。貴女への大恩を思えばとても足りるものではありませんが、どうかお持ちになつて下さい」

これはもしかして、もしかするのではないだろうか。

というのも、龍王の宝玉——つまり竜の玉といえば、思い浮かぶのはかのお姫様が提示した五つの難題。そのうちの一つに、竜の頸の玉を持って来い、というものがあるのだ。

クエスト自体はまだ発生していないが、アイテム名とそのテキスト内容からして無関係ではないだろう。

なんというか、予想外というか、棚から牡丹餅というのはきつと、こういうことをいうのだろうか。

「もしわたくしたちの力が必要なときは、波打ち際でわたくしの名を呼びなさい。タマモの為ならば、たとえそこが海の果てだろうと助けになりますよう」

ぎゅつと手を掴み、熱っぽい視線がこちらを見つめる。

種族を超えた愛、といえば聞こえはいいが、ここまで情熱的だと火傷してしまいそうで扱いに困ってしまう。

でもきつと、男性プレイヤーには垂涎のイベントなのだろうなあ。

見た目は文句のつけようがない程の絶世の美女であるし。

「だーかーらー、色目を使うなど言うておるだろうがー!」

背後から、尻尾の毛を逆立てながらカヨウさんが吼える。

そこからまた、あらあらうふふと二人のじゃれ合いが始まった。

恐らくだが、ワタツミはカヨウさんとああして気兼ねなく戯れるのがたまらなく楽しくて、その為にボクにちよっかいをかけているのではないだろうか。

そして無論、弱輩者のボクが察せる程であるので、カヨウさんもそのことは薄々感づいているのだろう。知っていて、ああして無遠慮に言い合いをすることを受け入れているのだ。

なんというか、二人とも素直じゃないなあ。

そんなこんなで、結局最後は犬のように威嚇するカヨウさんに袖を引かれ、神殿をあとにすることと相成った。

なんだろう、なにか一つ忘れている気がする。

まあ、いいか。忘れていたということは、さほど大事なこともないのだろう。

きっと、たぶん、そういうことなのだ――

「この度はご苦勞だったな、アワリティアよ」

「ふふ、流石の彼の者であっても、少しばかりは手を焼いたようだな」

「しかしそれも彼奴等の意志によるもの。我らは所詮傀儡、舞台上踊る道化に過ぎん」

「彼の者もまた然り。否、あるいは彼の者こそが、彼の者だけが道化なのかもしれない」

「嗚呼、悲しい哀しい、憐れな道化よ――」

――君を救えるのは、私だけだ……

お稲荷様とハロウィン

「Trick or Treat!」

王都フィーア。白亜の王城に見守れた聖なる都に、子どもたちの無邪気な声が響き渡った。

街中は煌びやかに飾り付けられ、中身がくり抜かれたカボチャの中で蝋燭の灯がゆらりゆらりと人々を照らしている。

年に一度の収穫祭。

運営が満を持して開催したハロウィンイベントは、このゲームTAWの世界をまさしくお祭り一色に染め上げた。

くりくりとした丸い瞳に見上げられ、ボクは思わずくすりと笑う。膝をつき、懷から小さな包みをいくつか取り出すと、それを目の前の少女の小さな掌に置いた。

中身はジャックオーランタンの形をした手製のクッキーだ。

「おねえちゃん、ありがとー!」

とんがり帽子を頭に乗せた小さな可愛い魔女がお日様のような笑顔を浮かべ、友達だろうお化けたちと走り去っていく。

「わ、また凄いい恰好だねえ」

背後からかけられた声に振り向けば、そこには先程の少女と似たような魔女の仮装をしたモミジが目を丸くして立っていた。手には如何にもな箒を握り、大胆に背中が開いたゴシック調のドレスが揺れる。

「仕方ないじゃないか。ボクもまさか、こんな仮装を渡されるとは思わなかったんだよ」

なんともこそばゆい気持ちになりながら衿を正すと、溜息交じりにそうこちる。

今回のハロウィンイベント、その内容はお菓子をNPCに渡すという単純明快なものであった。

お菓子はお店で売られているものでも、自作したものでも問題ない。

そしてお菓子を渡すとランダムで限定アイテムが入手できるのだが、低確率で当たり——そのNPCに対応した限定衣装が手に入る。その限定衣装を装備するとイベント専用の特殊なバフがかかるようになっていて、報酬のレアアイテムが入手できる確率を大幅に上昇させることが出来るのだが、これが色々な意味で問題だった。

つまり、イベントが開催されてボクが最初にお菓子を渡しに行ったのがクズノハさんのところだったのだけれど、ここまで言えば聡明な皆様にはおおむね理解して頂けると思う。

つまりは、そういうことだ。

今のボクが装備しているのは、クズノハさんがいつも着ているあの見事な一張羅。

大胆に胸元をはだけさせ、艶やかに着崩したあの着物である。

「イベントを有利に進めるためとはいえ、これは参ったよ」

そもそもこういった服装はクズノハさんのようなスタイルの良い女性だから着こなせるのであって、そういった風にデザインしていないボクのアバターではどうしても服に着られている感が否めないと思うのだけれど。

しかしこの着物を渡された時のクズノハさんの嬉しそうな顔を見れば、その厚意を蔑ろにするのも気がひける。

そんなこんなで柄でもない衣装に身を包み、今は王都フィアでお菓子配りに精を出しているという訳なのだが、これがどうして、周りの目が気になって仕方がない。

ハロウィンという、右も左も仮装だらけの特殊な空間にあつて悪目立ちはしていないが、やはり洋風な王都に純和風なこの格好は人目を引く。

「お稲荷さん、よかつたらおいら達とパーティ組まないかい？」

「あ、お稲荷様じゃん！ たまには女子同士遊ぼうよー！」

「いや、申し訳ないが先約が入っているんだ。どうぞお構いなく」

どこかで見かけたような、全く印象に残っていないプレイヤーからの勧誘を断りながら王都を進む。

こういったナンパ染みた勧誘も一度や二度ではない。どうにも【暁

の騎士団」のメンバーとパーティを組むことが増えてからこっち、ボクを偶像崇拜する輩が増えているような気がする。

元々コミュニケーション能力がそう高くないボクからすれば、こうして街中を歩くだけで見ず知らずの人間から突然声をかけられるという状況は、少なからずストレスの元だ。非常に好ましくない。

ええい、メディック！　メディックはどこか！

「最近、真剣に変身薬の購入を考えるよ」

だいたいアップデートが入ってからもう随分と経った今、九尾に到達したプレイヤーはそう珍しくない。にもかかわらず、何故ボクばかりが見世物にされるのか、これがわからない。

隣を歩くモミジが苦笑いを浮かべた。

「まあ、タマモのアバターってかなり作り込んであるし、それにほら、何かイベントがあるとわりとすぐにクリアしちやつてるから、それではないかなあー、なんて……」

むう、と言葉が詰まる。

というのも先日クリアした、あの海底神殿絡みのクエスト。どうやらあれをクリアしたプレイヤーの内、陰陽師で突破したのが当時はボクを含め数人しかいなかったようなのだ。

あの時はクリアにムキになってそんなことは考慮していなかったが、どうやらその話がどこからか漏れ、その数名が陰陽師という職業において先駆者のような扱いを受けているとかいないとか。

そもそもあの戦闘自体が、終盤の簡単なDPSチェックさえクリアすればあとは単純なギミック処理だけのものなので、その手順さえ理解すれば誰にでもクリアできる代物ではあるのだけれど、リアルタイムアタックというジャンルがあるとおり、古来よりゲーマーにはそのクリアタイムに価値を見出す人種というのが一定数存在する。

全く、困ったことに。

そんなこんなで、クリアから数日はジパングにあるマイホームに顔を合わせたこともない陰陽師の――何故か妖狐族が大多数だった――プレイヤーがひっきりなしに訪れ、クエストの内容を事細かに尋ね

てくるという珍事が発生したのだが、それに関しては某胡散臭い情報通の猫が運営する攻略ホームページに情報を提供するという形で――勿論、あの猫からはそれなりの報酬を頂いた――一応の終結をみた。

無論、あまりに性質の悪い連中は片っ端からブラックリストに突っ込み、ゲームマスターに通報しておいた。今頃はゲーム内の懲罰房に入れられてお説教の最中であろう。

ちなみに懲罰房に呼び出されたプレイヤーに投げられる最初の質問は、「何故ここに呼ばれたのかわかりますね？」であるらしい。

「とりあえず、ハヤト^{虫よけ役}たちと合流しようか。今は王城にいるんだっけ？」

「うん、偉い人から先に渡していくんだって。ゲームなのに真面目だよねえ」

そう言つて、モミジはその小さな眉間に皺を寄せた。

まあわからない話でもないが、たしかにゲームの中でもそういった処世術を持ち込むあたり少し堅苦しく感じるところはある。

ただ、まあ、もしかしたら世間体やら処世術やら、そういったものは全く関係なく、お姫様を優先している可能性もあるのだけれど。

脳裏を過ぎるは蜂蜜のような髪を流し、超ド級の胸部装甲を持つ朗らかな少女の姿。

ハヤトやコタロウも一応は思春期の男子であるし、あのお姫様はゲーム内でも屈指の人気NPCでもある。ちよつとぐらい鼻の下を伸ばしていたとしても、それは仕方のない事だろう。

特に今のハヤトは聖騎士だ。職業クエストなどで、王族と接する機会が多い。

そこまで考えて、ボクはあえて口を噤んだ。ぶちぶちと愚痴りながら隣を歩く、エルフの魔女っ娘を横目で見やる。

言わぬが花、藪を突いて蛇を出す必要もない。

どうせログアウトした後にあーだこーだと小言を頂戴するのは目に見えている。

そんなこんなでモミジと他愛もない世間話に花を咲かせつつ王城

の門を潜れば、そう間も置かずに見知ったメイド服の女性が出迎えてくれた。

艶のある黒髪をシニヨンで纏め、丸眼鏡をかけたその女性は静々とこちらに頭を下げると、ほんの少しだけ口角を上げて微笑んでみせる。

「ようこそいらつしやいました。どうぞこちらへ。姫様も大変楽しみに、それはもう小さな子どものように皆様が訪ねてくるのをお待ちしておりました、放っておくとお部屋を飛び出してしまうようなので私もそろそろ椅子に括りつけた方がいいのではないかと愚考していたところでございました」

ふわりと笑いながらそんなことを言うメイド——マリアさんに苦笑いを浮かべつつ、メニユーを開いてハヤト達にパーティを組む為の勧誘メッセージを飛ばす。

平時とは違い、イベント時は混雑によるサーバーへの負荷を回避する為に重要NPCが配置されたエリアは特別に切り離されたインスタンスエリアに設定されているので、フレンドと同じエリアに入るにはこうしてパーティを組む必要があるのだ。

イベント特有の長蛇の列順番待ちに並ぶのもまた一興ではあるのだが、負荷がかかり過ぎてサーバーごとダウンすることを考えれば妥当な対応だとは思う。

ぴこん、と電子音が鳴って、インターフェース上に浮かんだパーティメンバーのリストが更新された。

そうして案内された先の扉を潜れば、そこにはお姫様とお茶会中の男子二人の姿が。

ハヤトは真っ白な鎧を身に纏い、腰には波打つような少し変わった形状の、深紅の片手剣を差している。一見どこが仮装なんだと疑問に思うだろうが、後で聞いたところ全盛期のとあるMMORPGにおいて一世を風靡した騎士をモチーフにしているのだとか。

対するコタロウはシンプルなシャツとズボンのみ。

どうやら狼男の仮装をしているつもりらしいが、種族がワーウルフなだけにどうにも手抜き感が拭えない。というか彼の場合は確実に、

真面目に仮装するのが面倒なだけだろう。

まあ彼の場合はレベルアップに伴って脚部が獣独特のつま先立ちのような形になり、より狼男らしくなったので無難と言えば無難ではあるのだけれど。

「あらあら、タマモ様にモミジ様、ごきげんよう。とりつくおあといいとー」

こちらに気が付いたカメラリア姫が胸元で手を振りながら、花のような笑みを咲かせる。

見れば三人が囲むテーブルにはクッキーやワッフル、マカロンなど、色とりどりの洋菓子が所狭しと並んでいた。

「これはまた、随分と張り切ったんだね」

「い、いや、これはその、違うんだよ!」

なんとも露骨な光景に苦笑いを浮かべれば、慌てたようにハヤトが立ち上がった。

隣のモミジは既にじとりとした目をして、まるでちよつと汚い物を見るような、そんな表情を浮かべている。

コタロウがため息を吐く。

「これはカメラリア姫が用意したもんだ。俺らが持ってきたのなんて、ほんの一部だぞ?」

「うふふ、せっかくのお祭りですもの、マリアたちにも手伝ってもらって作ったのよー」

頬に手を添え、微笑むカメラリア姫を一度見やり、視線をテーブルに戻す。そこにはまるで中華料理のフルコースもかくやというお菓子の山が。

ボクとモミジが途中参加することを考慮しても、いかんせんこれは作り過ぎではないだろうか。

いや、食べ盛りの男子二人と甘味好きのモミジがいるので、もしかすればどうにかなるのか?

「いや、結局は設定されたキャパ以上は食べられないから」

「自分を頭数に入れない辺り、ほんと鬼だよなお前」

マカロンを一つ口に放り込みながらそんなことを考えていると、男

子二人がすつと真顔になった。どうやら声に出していたらしい。

ともあれ、イベントはそれはそれこれはこれイベントである。

ふわりと尾を振り、ボクとモミジは素知らぬ顔でカメリア姫に包みを渡す。

「これ、口に合えばいいのだけれど」

「まあまあ、とても美味しそうねえ。それじゃあ、これは私からのお返し」

渡されたのは丁寧に包装された茶色い紙袋。

どこか見覚えのあるそれにうつすらと嫌な予感を覚えながら受け取り、恐る恐る中身を確認する。

……うん。

ボクは受け取った包みをそつとインベントリにしまい込んだ。

どんより曇り空な心中のボクに対し、同じ物を受け取ったモミジは晴れ晴れとした笑みを浮かべていた。

「わあ、これってマリアさんたちとお揃いのやつだ！」

満面の笑みでモミジが包みから取り出したのは、ロングスカートに白いエプロンが特徴的な、先程見たばかりの衣装。言わずもがな、メイド服である。

ちなみに男子組には執事然とした燕尾服をプレゼントしたらしい。

「本当は私のドレスをプレゼントしようと思っていたのだけれど、マリアに止められてしまったの。本当に残念」

ボクは心の中で、最悪の事態を水際で阻止した立役者に最大の賛辞を贈った。

いや、しかしその代償がこのメイド服となると……。しかしカメリア姫もそのご立派な双子山を強調するように胸元が開いたドレスばかり着ているし、下手をすれば今着ているこの着物よりも悪目立ちしていた可能性もある。

ではメイド服なら悪目立ちしないのかと問われると、決してそうではないのだけれど。

ともあれ、無事カメリア姫とのプレゼント交換を終えたボクたちは、手土産代わりに渡されたお菓子の詰め合わせを手に王城を後にす

る。

ああ、勿論行き帰りでお世話になったマリアさんにも、手製のお菓子をプレゼントさせてもらった。

お返しにと渡されたのは、白い長手袋とヘッドドレス。流石は本職とあって、メイドには必要不可欠なアイテムを用意していたようだ。

「タマモ様なら、きつとお似合いになると思いますよ」

なるほど、このメイドさんもなかなか良い性格をしているようだ。

そんなことを思いながら、ボクはとてもイイ笑顔を浮かべるマリアさんに引きつった笑みを返すのだった――

お稲荷様とハロウィーン②

「あつ、キツネさんだー!」

場所は変わり、はじまりの町アイン。

ほとんどのプレイヤーがジパングや王都フィーアに拠点を移したにも関わらず、増え続ける新規プレイヤーたち、そして様々な理由からこの町を愛する者たちにより、その活気はいまだ衰えることを知らず、その賑わいは他の都にも比肩しうる程であった。

そんな賑やかな街の中。心地よい鈴の音とともに扉を開くと、太陽のような笑顔を浮かべた少女がその栗色の髪を揺らしながら胸へと飛び込んできた。

子ども特有の甘い香りが鼻先をくすぐり、思わず頬が緩む。

限りなく薄まっていると自覚している、もはや存在しているかどうかとも危ういボクの母性でさえも的確に打ち抜き、こうも庇護欲を刺激してくるあたり、子どもとはやはり魔性の生き物なのだと思う。

高い体温を胸に感じながら、栗色の髪を撫でる。

「久しぶりだね、シア。いい子にしてたかい?」

「うん! いい子だよ! あ、でもねでもね、今日はおかしをもらえなかったら悪い子になってもいいんだよ!」

シアはボクの腕から飛び出すとなんとも無邪気な、純真無垢そのものといった風な笑顔を浮かべながらそんなことを言った。

なんだろう、意味は微妙にズレているのに、そんなことはどうでもいいと思ってしまう自分がいる。

まるで薄汚れた心が漂白されていくようだ。密かにファンクラブが設立されるのも納得である。

尚、そのファンクラブでは『近寄らない、触らない、話しかけない』が鉄の掟として存在しているらしい。これに違反したものは、それはそれは恐ろしい目にあうのだとか。

くわばらくわばら。

「やつぽー、元気だったー?」

「あつ、モミジおねえちゃんだー!」

そんなどうでもいいことを考えていると、ボクに続いて入店したモミジが後ろからひよっこりと顔を出した。彼女が小さく手を振って挨拶すると、シアはその手をめいっばい振り回して応える。

ボクの時よりも少しばかりリアクションが大きいのではないかと少々むつとするが、モミジも天真爛漫な部分があるし、シアとは気質的に近いのだろう。

目線を合わせるために屈んだモミジとハイタッチを決めるあたり、相当仲は良いようだ。

「モミジって意外と面倒見がいいんだよ。子ども心を掴むのが上手っていうのかな」

「自分も子どもだからだろ。要は単純なんだよ」

片や爽やかな笑顔を浮かべつつ、片や呆れ顔で言うのはハヤトとコタロウの二人。

ボクたち二人に比べるとやや遅れた登場であるが、それはボクやモミジに絡んでくるプレイヤーたちを彼らが追い払っていたことが原因だった。

ボクに関する背びれや尾ひれ、何なら腹びれまで引っ付いて独り歩きしている噂や、モミジのその人懐っこく明るい性格に惹かれた者に絡まれたり、やつかみを受けるのはままあることなのだけれど、それでもいまだ実害が出ていないのはひとえに彼ら優秀なボディガードのおかげであると言えるだろう。

高性能の虫よけ装置とも言えるが。

ちなみにそんな彼らの姿を見て周囲の男たちが殺気まで含んだ嫉妬の念を送っていたり、一部のハードコアな方々がどっちが攻めか受けかという多分に腐った議論をしていたりするのだけれど、それは言わぬが花であろう。

ボクも教えないし聞かれても答えない。

と、忘れてしまわないうちに本題を済ませてしまおう。

「はいこれ、いい子にしたシアにプレゼント。またお母さんと一緒に食べてね」

「わ、ありがとー!」

懷から取り出したお菓子の包みをシアの小さな手のひらに置くと、彼女はそれを天高く掲げてそのくりくりとした大きな瞳を輝かせた。中身は何の変哲もないクッキーなのだが、ここまで喜んでもらえるで作った甲斐もあるというものだ。

続いてモミジたち三人からお菓子を渡され、周りに花でも咲かせそうな様子のシアを眺めながらボクは店の奥、カウンターの方へと向かう。

そこには先程から慈愛に満ちた表情で愛娘を見守る、この店の主の姿があつた。

「すみません、ご挨拶が遅れてしまつて」

「いえいえ、こちらこそ娘の相手をしてもらつて申し訳ないわ。あの子つてば、今日はいろんな人に構ってもらえるからつてはしゃいでしまつて」

こちらが軽く頭を下げると、ルビアさんは頬に手を添えながら困つたように笑つてみせる。

美人で氣立てがよく、一児の母だけあつて家事全般もそつなくこなす。

設定では魔物に襲われて夫を亡くしているそうだが、それ故に漂う儚げな雰囲気。

そして接客用のエプロンとふんわりとしたスカートで隠れているが、ボクの見立てではなかなかのナイスバディだ。

まあ、年上好きの男子諸君にはたまらないのだろう。彼女目当てでこの町に留まつているプレイヤーも多いのだとか。

「これ、つまらないのですが」

「あらあら! これはこれはご丁寧に……えーつと、少し待つてもらえるかしらつ」

ルビアさんにと余分に作っていたお菓子を渡すと、彼女は目を丸くしながらそう言つてぱたぱたとサンダルを鳴らしながらお店の奥に引つ込んでしまった。

その足取りはどこか軽やかで、なるほどたしかにシアのお母さんだ

なあ、なんて、しみじみとそんなことを思う。

始まりの町の看板親子、なんて呼ばれるのもわかる気がする。

そうしてしばらく待っていると、ルビアさんは奥から小さな包みを抱えて戻ってきた。

「ちょうど焼き上がったばかりなの。よかったらあとで召し上がって」

そう言って渡された包みを開けると、そこには飴色に輝き、甘い香りをのぼらせるワッフルが三つ。

それを見て思い出したのは、初めてこのお店に来た時に飲んだ、彼女が淹れてくれたあの紅茶の味であった。これはきつと彼女が茶請けにと用意していたもののなのだろう。

「ありがとうございます。大事に頂きますね」

アイテム名は『ルビアのワッフル』。どうやら食事後、MPが自動的に回復していくバフがかかるようだ。

なかなか重宝しそうな効果ではあるが、数は限られているうえにこういった食品は一定時間経過すると使用できなくなってしまう。

帰宅したあと、ゆっくり味わって頂くとしよう。

さて、ご挨拶も終わったところで次の場所へ向かうとしよう。

あまり長居をしても迷惑だろうし、何よりイベント期間は有限である。余裕があるうちに、縁があるNPCにはお菓子を配り終えてしまいたい。

何より——振り向き、シアと一緒ににはしゃぐ我がパーティのおてんば娘を眺めながら息を吐く。

放置しておく、この場から動けなくなりそうだしね。

「ほら、もう行くからモミジもルビアさんに挨拶してきたまえ」

「えー、いいじゃんもう少しぐらい」

聞き分けのない子は尻尾で黙らせる。

すぱぱーんと、柔らかな毛並みの尻尾とは思えぬ軽快な音が鳴った。

ちなみに九連打まで可能だ。

しかしこのゲームでフレンドリーファイアは許可されていない。

つまりこれは音だけで、実際にダメージが発生したり、相手に痛みや衝撃を与えるものではないので安心してほしい。

その証拠にモミジ本人は後頭部をさすりながら、どこか満足げな表情である。いや、これは彼女だけなのかもしれないけれど。

「あ、あのね!」

尻尾三連打を受けて渋々、本当に渋々といった風に立ち上がり、ルビアさんの方へ向かうモミジとその保護者二人の背中を見送っていると、不意に足元から声がかかった。

視線をそちらに向けると、そこには両手で何かを必死に覆い隠す天使シアの姿が。

「キツネさんに、これあげる!」

ほんのりと頬を赤らめ、背伸びしながら開かれたその両手の中には小さな、しかし並みのレアアイテム以上の価値を持つ宝物。

それは持つものに幸せをもたらす四葉のクローバーだった。その表面ははまだ瑞々しく、採ってきてからそう時間が経っていないように見える。

どこで見つけてきたのかはわからないが、シアぐらいの子どもにとってはかけがえのない宝物だろう。そんな貴重品を受け取ってしまっているのだろうか。

ボクがそう尋ねると、シアは頭が取れてしまうのではないかと心配になるほどの勢いで首を上下に振った。

「ありがとう。大事にするね」

感無量とは、こういうことを言うのだろうか。

しかし彼女の宝物を受け取り、傷付けぬようにとそれをインベントリに入れたところでボクはある一点を見つめながら首をひねる。

その原因は受け取った際に表示されたアイテム名と、そのテキスト内容にあった。

【逵溷ヨ湍㊦縋ヨ諡帛セ?・憾】

縋医≧縋??雲ソ縋顔捩縋?◆縋?

遭√↓蜷後S蟄倅惠縋?

縋帛?荳也阜縋ツ透ク蠢懊@縋上→縋???

邁√、蟻弱%縛???

蟻舄? 縲∞菅縛ヨ轡コ縛ヨ荳也阜縛ク縲?

なんだ、これは。

完全に文字化けしている。ネットゲームに関わらず、昨今のソフトウェアでは珍しい現象だ。

解読しようとすれば可能ではあるが……イベント開催に伴う不具合の可能性もある。とりあえずはあとで運営に報告しておこう。

表情を強張らせるボクを不安げに見上げるシアの頭を撫で、微笑む。

「どうしたの。何かあった?」

ちようどその時、ルビアさんへの挨拶を終えた三人が戻ってきた。

よほど難しい顔をしていたのだろう。三人とも何事かと怪訝な表情を浮かべている。

「いや、大したことではないのだけれど。ちよつと見てもらえるかな」
そう言つてシアから受け取ったアイテムのテキストを開いて見せると、ボクの背中越しにそれを覗き込んだ三人がなんとも渋い顔をした。どうやら三人にも解読不可能な状態で見えたようだ。

となると、こちらのハードウェアが問題で文字化けした可能性は低い。

「なにこれ、バグ?」

「だろうねえ」

「こんだけわかりやすいバグも珍しいな。仕事しろよ運営」

「そうだねえ」

サービス開始からこつち、こういつたわかりやすいバグが発生していなかった分、遭遇した不快感よりは驚きや物珍しさが先に立つ。

ちなみに同じアイテムを受け取っていたモミジから正常な状態のものを確認させてもらったのだが、正しくはこうであった。

【ハッピークローバーのお守り】

無垢なる少女が願いを込めた四葉のクローバー。

始まりの町アイン周辺に自生している植物だが、四葉のものは非常に珍しい。

ハッピークローバーと呼ばれ、持つ者に幸運をもたらす。

装備時に幸運値微上昇。

どうやら、モンスターがアイテムをドロップする確立に作用する幸運値を上昇させるアイテムだったらしい。ちなみにアクセサリー扱いだ。

なんとも収まりの悪いことではあるが、せつかくのプレゼントである。幸いバグが発生しているのはテキストの部分だけのようであり、この程度のことではシアの笑顔を曇らせるのは、それこそボクの本意ではない。

「本当にありがとう。また来るね」

最後にぎゅつとハグをして、来た時と同じ眩しい笑顔に見送られながらボクたちは店をあとにする。

尚、バグに関しては後日しっかりと運営に報告のメールを送り付けておいた。

その際、多少辛辣な物言いになってしまったかもしれないが、せつかくのイベントに水を差した代償としては安い方だろう。

そしてイベント後、ボクの着物の帯を四葉のクローバーが飾ることになったのも、もはや言うまでもないことであった。

設定集

登場人物

・プレイヤー名：タマモ

種族：妖狐族 Lv90

職業：陰陽師 Lv90

剣士 Lv50

拳闘士 Lv40

治癒術士 Lv40

魔物使い Lv30

調理 Lv80

鍛冶 Lv40

彫金 Lv60

裁縫 Lv50

釣り Lv70

【装備】

武器：七曜舞扇

頭：七曜烏帽子

胴：大毒蠍の法衣

脚：大毒蠍の袴

足：治水の靴

装飾品：朝霧の指輪

【スキル】

初級妖術【狐火】

初級妖術【鎌鼬】

初級妖術【塗壁】

初級妖術【水虎】

中級妖術【雷獣】

中級妖術【煙々羅】

上級妖術【禍獣かも】

上級妖術【土蜘蛛】

上級妖術【百々目鬼どどめき】

上級妖術【大入道】

呪術【九字護身法】

呪術【禹歩】

呪術【殺生石の呪い】

占術【六壬神課】

祓いの儀

式神召喚【前鬼】

式神召喚【後鬼】

式神召喚【騰蛇】

式神召喚【朱雀】

式神召喚【六合】

式神召喚【勾陳】

言霊【縛】

言霊【撃】

言霊【解】

知力上昇（大）

妖術威力上昇（大）

MP自動回復（小）

【備考】

本名は玉津嶋^{たまつしま}夜桜^{よもあ}。身長140cm。腰まで伸びた黒髪が特徴。引きこもりがちで極度の運動音痴。肌の色素が薄く直射日光に弱い。

祖母の影響で和服、和食に目がない。明るい場所に行くときしゃみが出る。

頭脳明晰だがどこか達観しており、リアルでの人付き合いは苦手。その小さな体にはある秘密を抱えている。

・プレイヤー名：モミジ

種族：人間↓エルフ Lv90

職業：治療師 Lv90

魔法使い Lv 40

踊り子 Lv 10

調理 Lv 60

裁縫 Lv 90

彫金 Lv 30

庭師 Lv 70

釣り Lv 40

【備考】

本名は有栖川紅葉。身長160cm。

黒い髪をショートカットにしたスポーツ少女。

学校では陸上部。短距離走の選手でありその実力は全国でもトップレベル。

ハヤト、コタロウとは幼馴染。

誰にでも親しく接する人懐っこさがあるが、猪突猛進な部分もあり空回りすることも多い。

・プレイヤー名：ハヤト

種族：人間↓鬼族 Lv 90

職業：聖騎士 Lv 70

剣士 Lv 80

鍛冶 Lv 40

革細工 Lv 30

釣り Lv 60

【備考】

本名は伊達勇人。身長174cm。剣道部所属。

爽やかな雰囲気をもつ好青年。美人の姉と妹がいる。

頭脳明晰、スポーツ万能の秀才でもある。

モミジ、コタロウとは幼馴染。モミジに淡い想いを抱いている。

・プレイヤー名：コタロウ

種族：ワーウルフ族 Lv 90

職業：忍者 Lv 70

拳闘士 Lv 80

釣り Lv90

【備考】

本名は九条小太郎。身長181cm。
少し強面で不良っぽい印象をもつ金髪の青年。祖父が空手の道場を開いている。

意外にも料理が得意で甘いもの好き。

モミジ、コタロウとは幼馴染だが、気が強いモミジとは衝突しがち。
最近は親戚の少女に追いかけまわされている様がよく目撃されている。

プレイヤー名：イナバ

種族：ワーラビット族

職業：治癒術士 Lv90

【備考】

本名：伊奈波 沙百合

地方の大学に通う少女。

普段は三つ編みおさげにビン底眼鏡という、絵に描いたような地味なタイプだが実はなかなかの胸部装甲を誇るナイスバディだったりする。

典型的なお洒落をすると化けるタイプ。

プレイヤー名：ムギ

種族：ワーキヤット

職業：盗賊 Lv90

踊り子 Lv60

【備考】

都内在住のOL（コスプレイヤー）。年齢は秘密。

最近はTRPGにハマっており、ゲーム内でもチャット機能を駆使してギルドメンバーと遊んでいる。
年の離れた妹（小学生）がいる。

プレイヤー名：Kittv-Guv

種族：ワーキヤット

職業：情報屋（自称）

魔物使い	L v 9 0
治癒術士	L v 9 0
魔法使い	L v 9 0
盗賊	L v 9 0
釣り	L v 9 0

【備考】

自らをT A W内一の情報通と自称するプレイヤー。

ムギと同じくワーキヤットであるが、彼女が猫耳が生えた程度の獣人であるのに対し、彼はそのまま二足歩行する猫といった風なキャラクリをしている。

一日の殆どをゲームに費やすいわゆる廃人であり、自身が運営するホームページにはそこから得た膨大な攻略情報が記載されている。

ガブさん、キティーさんとも。

お稲荷様と子狐様

ハロウィンイベントが無事終了し、しばし。

すっかり元通りになった街並みを眺めながら、縁側で手製の団子なんかをつまむボクである。

ここところは装備のファースティングも終わり、やる事といったら生産系職業のレベルをちまちま上げたり、クズノハさんやカグヤ姫、カヨウさんのところへ顔を出す程度のもの。

まあイベント期間中でないMMORPGなど、せいぜいがこんなものだろう。

レイドダンジョンに潜れば一つ上の装備が手に入りはするが、元々ボクはソロであれこれやる方が性に合っている。

だがしかし、人生とは、人の縁とは奇なるもので、それは当の本人がすっかり記憶の隅に追いやってしまったような薄く細いものであっても、巡り巡って、当の本人がまるで想定もしていなかった形で返ってくるものであると、ボクはこの後しみじみと、それはもう骨身に染みるほど思い知る事となった。

始まりは、平々凡々としたもの。

戸を叩く音と、どこかで聞いたとのあるような青年の声。

「御免下さい。タマモさんはご在宅でしょうか？」

ところで、ボクの交友関係は実に狭い。フレンド登録を済ませているプレイヤーの人数だけで言えば、十人もいないだろう。

そしてボクは基本的に受け身がちな人間で、面倒事が嫌いだ。

故に、モミジたちやムギ、イナバさんの時のような、偶発的なきっかけがなければこちらから積極的にコミュニケーションを取ろうとは思わない。

さらに言えば、ここ最近は何の背びれ尾ひれがついたお稲荷様云々の噂のせいで、会ったこともないプレイヤーが我が家に突如訪問してくることも一度や二度ではなかった。

つまりどういうことかといえ、ボクは規則正しく鳴らされた戸に背を向けて、黙々と団子を頬張り続けたという事だ。

居留守上等。招かざる客は、ボクののんびりとしたTAW生活には不要なものである。

しかし、戸の向こうにいる何某はそうもいかないようだ。

「あの、僕です。テウメツサです。覚えてないですか？ 都の、マールキャピタルでご一緒した……」

再度叩かれた戸の向こう側から、まさに困り果てたといった風な声が届く。

テウメツサ、マールキャピタル――。

あ、とボクは手を叩いた。

そういえば、そんなプレイヤーがいたような気がする。いや、たしかにいた。いつぞやかあの妖狐族だらけの喫茶店でオムライスを勧めてきた、糸目の胡散臭い青年である。

次第にはつきりしてくる記憶と共に、ボクは首を傾げた。

たしかにいた。いたにはいたが、彼とは本当に少しばかり話をしただけで、我が家を訪ねてくるほど仲が良いという訳ではないのだけだ、いったいどういった用件なのだろうか。

怪訝に思いながらも、顔見知りであれば対応しない訳にもいかなないと、ボクは戸をほんの少しだけ開いてちらりと表を覗き見た。

そこにいたのはおおよそ記憶通りの姿をした、銀髪糸目の妖狐族が一人。

「どうも、ご無沙汰しております。この度は突然の訪問、誠に申し訳ございませ――」

「どうも、お久しぶり。それはさておき、前置き^{社交辞令}は結構。さつさと本題を言いたまえ」

時間は有限であり、貴重だ。ボクの場合は特に。

さつきまでのんびり団子を食っていた奴が何を言うのかと思われるだろうが、ボクにとっては招かざる客人よりも甘味の方が大事なのだ。それはもう、天秤にかけるまでもなく。

そんな心中が表情にも出ていたのだろう。目の前の青年は困ったように笑うと、頭から冷や汗を飛ばすようなエフェクトを発生させた。

頭から電球を出したり、顔文字のアニメーションをアバター上に表示することが出来る特殊エモーションだ。ちなみに有料。

つまりはこの青年は、わりと真剣に要件を聞こうとしたボクに対し、お茶目要素をぶつけてきた訳である。ブラックリストにぶち込んでやろうか。

だがその上がった留飲は、すぐさま下げられることとなる。

がつんと、何者かが後ろからテウメツサのお尻を思い切り蹴飛ばしたのだ。

「あいたあつー！」

実際に痛みを感じている訳ではない筈だが、それなりの衝撃はあったのだろう。テウメツサは自身のお尻を両手で押さえながら悲鳴をあげて、兎のように飛び上がった。狐の癖に。

「だから、まどろっこしいのよアンタは！ タマが話すから引っ込んでなさい！」

「いくらなんでも気が短すぎるでしょう。まったくもう」

お尻をさすりながら唇を尖らせるテウメツサの後ろから現れたのは、一人の少女であった。

三角の耳に九本の尾。ボクや彼と同じ、妖狐族のプレイヤーだ。

腰まで伸びた髪、そして大きな尻尾は雪のように真っ白で、その毛先だけが朱色に染まっている。

身長はボクの胸ほど。体格ではリアルなボクと大差ないだろう。

白い肌、赤い隈取。いかにも気が強そうな切れ長の瞳は金色に輝き、その上に丸い眉がちゃんと乗っかっている。

それに合わせるように朱色に染められた振袖に、言うまでもなく、これっぽっちも面識がないプレイヤーだ。

少女は鼻を鳴らしてテウメツサの脛を蹴飛ばすと、小さな胸を目いっぱい張りながらこちらをねめつけた。

うん、やはり体格的にはボクと似たり寄ったりだ。

「アンタがタマモね！」

「いかにも、タマモはボクだけれど、えっと、君は誰なのかな？」
そう言って、目線を合わせようと身を屈ませたところで、不意に何

か白い物が目の前を通り過ぎていった。

はて何事かと視線を向けてみれば、真つ白な少女が右手を振り切った状態で固まっている。

一つ、二つ、三つ。

丁度三拍ほど静寂が流れたところで、少女は齒ぎしりしながら激しく地団駄を踏んだ。

すばーん。

横ですっかり気を抜いていたテウメツサの脛に、鋭いローキックが決まった。

「なんで!？」

「うるさいわね!　なんで接触設定切ってるのよ!」

すばーん。

「理不尽!?　そりゃあ切ってるプレイヤーもいますよ!」

「何をやっているんだ君たちは」

帰っていいだろうか。いや、ここがボクの家なのだけけれど。

一度はそういったロールプレイなのかと疑いもしたが、今日の前で繰り広げられている茶番を見る限り、どうやら見た目相応の――少なくとも精神年齢は――少女らしい。

どこぞのセクハラ猫のおかげで接触設定をオフにしていたことが幸いして実害は無かったが、いきなり人様の頭を叩こうとした無礼を考慮すればボクはすぐさまログアウトし、しかるべきところへしっかりと報告するのが正解なのだろう。

だがしかし、肝心の要件を聞かないまま突っ返すのもなんだか気持ちが悪い。

さて、どうするべきか。

うーん。

うん。

「ちよつとどこ行く気よ待ちなさいよ!」

茶番を横目に結論をはじき出し、気付かれぬようにと我が家の扉に手をかけたボクであったが、残念ながらその目論見は露と消えてしまった。

目の前には、標的を再びこちらへと移してうなる子ぎつねの姿。

地団駄を踏む姿はいかにも可愛らしいが、ボクの中では面倒ごとが服を着て歩いているような、ぶつちやけてしまえば非常にウザい人種の中にカテゴライズされつつあった。

「どこも何もここはボクの家だ。来客を迎えようが無視しようが、その権利は家主であるボクに帰属する。大道芸^{茶番}を披露したいなら、ここではなく大通りに行くといい」

そもそも、この少女はまだボクに名乗ってすらない。先程自分のことを『タマ』と呼んでいた以上、それらしい名前ではあるのだろうが、礼を失するにもほどがある。ボクが彼女を見るその視線に、若干の棘が混ざるのも致し方ないことであろう。

そして売り言葉に買い言葉では、この手の人間には逆効果であることも、重々承知している。

案の定、さらにこちらへと食って掛からんとした少女であったが、それに先んじてテウメツサがその身を割り込ませてきた。

「何よアンタ、邪魔しないで！」

「ちよつと落ち着いて。ほら、タマモさんめつちや怒ってるから。たまには空気読んでくださいって」

「怒ってるのはこつちなんだけど！」

「あの、そろそろこの子キツクしていいかな？」^{出禁に}

「いや本当に申し訳ありません。性根は良い子なんです」

若干泣きが入りながら、その場で土下座せんばかりの勢いでテウメツサは事情を話し始めた。

曰く、この少女は彼が所属する種族限定克蘭【百狐繚乱】のマスターであり、プレイヤー名は【タマ】。こう見えて克蘭内ではそれなりの人気と人望を持ち、意外にも仕事はしっかりとこなしているらしい。

では何故こうもボクを目の敵にしているのかといえば、その理由はサービス開始直後にまでさかのぼる。

といってもそこまでややこしい、深い理由というわけでもなく、どうやらキャラクター作成時に登録する予定であった【タマモ^{tamamo}】という

名前が、先にボクが使用していた為に登録することができなかったと、まあそういうことらしい。

完全に逆恨みである。

というか、妥協して【タマ】なんて名前にするぐらいなら――

「普通にひらがな表記とか、漢字表記で【玉藻】って登録すればよかったじゃないか」

このゲームは別にカタカナ縛りというわけでもないし、表記さえ被らなければ同名のプレイヤーがいたとしても何の問題もなく登録が可能だ。

その証拠に【†漆黒の双剣使い†】やら、【暗黒の炎を操るもの（かつことじ）ダークフレイムマスター】（かつことじ）なんてぶっ飛んだ名前のプレイヤーすら存在するのだ。

そう指摘してみれば、何やらテウメツサの背後から気まずそうな呻き声が響いた。

気まずい沈黙。

「あの、もしかして、この子って残念な――」

「ところで、実は今週末にうちのクランでちよつとしたイベントを開くことになりました、タマモさんには是非ゲストとして参加してもらいたいなーと、こうしてお訪ねさせて頂いたわけなんですよ！」

何やら不穏な気配を背後から感じたのか、顔を青白くさせながら、ついでにじつとりと汗を浮かばせながらそう捲し立てて彼が渡してきたのは、一枚の招待状であった。

可愛らしい狐のイラストがプリントされたその招待状には、【百狐繚乱主催】もふもふパーティ【妖狐族限定】の文字が。

行くと思っているのだろうか。あほなのだろうか。

「うちの生産組が腕によりをかけた作品の展示やら、魔物デイマ使いが育てたペットとのふれあいイベントもやる予定なので！　よかつたら来てくださいね！」

そう告げるとテウメツサは背後で固まるタマの首根っこを引っ掴み、脱兎のごとく走り去ってしまった。狐だけだ。

残されたのは半ば呆然とするボクと、ひらりひらりと風に舞う招待

状が一枚だけ。

はてさて、これはまた随分と面倒なことになったものだ。

とりあえず招待状を袖の中へと押し込んで、ボクは大きく溜息を吐くのだった。

あ、とりあえず運営には通報メールを投げておこう。
送信つと。

お稲荷様と子狐様②

こういうのを、魔が差した、というのだろうか。

場所はジパング。プレイヤーたちに開放された、マイホームが軒を連ねる住宅街の一角。

季節外れの桜が咲き乱れ、涼やかな水音が流れる美しい日本庭園を眺めながら、ボクは感嘆の声を漏らした。

妖狐族限定クラン【百狐繚乱】。

団員数は約六十。

『仲良く、楽しく、自由気ままに』を合言葉に、初心者育成やレイドダンジョンの攻略、調理や鍛冶などの生産活動は勿論のこと、農業や漁業なども手掛ける大規模クランである。

そしてここは、そんな百狐繚乱のクランハウス。

正直ここに来るかどうかはかなり、それはもう悩みに悩み抜いた。なにせクランの顔でもあるクランマスターの株はボクの中で絶賛大暴落中であり、ボクが顔を出せばまたあれやこれやと喧しく喚きたるであろうという確証があったからである。

たしかに妖狐族ばかりのクランというものに興味はあったが、特に仲の良いフレンドが在籍している訳でも無し、先日のやり取りを思い出せば足が重くなるのも致し方ないというものだろう。

ではなぜ、そんな重い足を引きずってまでボクがこの場所にやってきたか。

理由は二つ。

百狐繚乱に所属する職人たちが手がけた作品たち。満開の枝垂れ桜のその下を優雅に泳ぐ、何枚もの着物たちを一目見たかったというのが一つ。

もう一つは、ボクが提示した交換条件を百狐繚乱のサブマスターであるテウメツサが快諾したから。

こちらとしては通れば良し、断られたとしても厄介払いができるので丁度いいぐらいの気持ちで突きつけた条件だったのだけれど、何事も言ってみるものだ。

そしてその条件というのが、『一名だけ妖狐族以外のプレイヤーが参加することを認めること』という単純明快なもの。

お察しの通り、出会ってから今に至るまで犬やら猫やら狐やら、ありとあらゆるもふもふに目がない彼女を連れてくる為のものであった。

「うわあ、もふもふだらけだよータマモ！」

隣を見れば、そこには子どものように目を輝かせながらはしゃぐエルフ族の少女が一人。

「モミジ、はしゃぐのはいいけど相手はプレイヤーだからね。あまり羽目を外さないように」

今にも飛び出していきそうなモミジの首根っこを引っ掴めば、彼女はまるでおあずけをくらった忠犬のような表情でこちらを見やり、がつくりと肩を落とした。

その仕草はあまりにも犬らしく、エルフ族でありながらもその頭には垂れ下がった大きな耳が見えるようだ。

思わず漏れ出そうになった笑みを袖で隠し、咳払いを一つ。

「そんなにがつかりしなくても、そのうち活きが良すぎるやつがやってくると思うよ」

具体的には真っ白な子ぎつねが一匹。

克蘭ホームに入ってからはまだ見かけていないが、マスターである彼女にはいつ、誰が敷地に入ったかのログが表示されている筈なので、そう待つことなく姿を現すだろう。

そして、噂をすれば影が差すとはよく言ったもので――

「ようやく見つけたわよー！」

凜としたよく通る、見た目相応の澆漖とした声をあげながらこちらに駆け寄ってくる小さな影。

からころと下駄を鳴らしながらやってきたタマの姿を確認したボクは、彼女がこちらに噛みついてくる前にモミジの肩を掴み、ずいとは押し出してみせる。

すると急ブレーキをかけ、衝突寸前のところでなんとか踏みとどまったタマは一瞬目を丸くし、なんともあどけない表情を浮かべた

後、モミジの背後に身を隠したボクを睨みつけ犬のような唸り声をあげた。

本人としては威嚇しているつもりだろうが、それはこの場においてはこの上なく悪手である。

きらきらと、モミジが先ほどの比ではないほど瞳を輝かせながらこちらを見た。

何かを察したのか、びっくりと肩を跳ね上げる子ぎつね^{タマ}。

ボクはゆつくりモミジとタマを交互に見やった後、おもむろに頷いて見せた。

もふって
やってよし。

「何この子めちやくちや可愛いんですけどー!」

「な、なによアンタ気安く触らないで——ぎゃー!」

もつふりもつふり。かいぐりかいぐり。

猫可愛がりとは、こういうことをいうのだろうか。

胸に抱かれ、真つ白な頭を撫でまわされながら悲鳴をあげるタマの姿に少しばかり留飲を下げながら、ボクは胸の内で静かに黙禱を捧げた。

接触設定を切っていない方が悪い。

「いやあ、さつそく楽しまれていますねえ」

タマの後を追ってきたであろうテウメツサが、もみくちやにされている己がマスターの姿を見て苦笑いを浮かべる。

止めないのかと一応訪ねてみると、クラン内でも頻繁に発生していることなので問題ないとのこと。

それはそれでどうなのだろう。

リアルの方では似たり寄ったりな体格をしているだけに、内心複雑な思いである。

「本人も本気で嫌がっているわけではないんですよ、実は。半分ロールプレイでやってるところもありますし」

それはまた、随分と物好きなものだ。

これで中身が男ならば即通報案件であるが、どうやらリアルの方もしつかり女性であるらしい。

何やらゲーム以外でも随分と親しい間柄のようであるが、下手に藪をつつくこともあるまいとボクは尻尾を揺らした。

そうして二人で微笑ましく惨劇——もとい仲睦まじい様子を眺めることしばし、ようやくモミジの可愛がりから解放されたタマが、まるでフル馬拉ソンを走り切ったランナーのような表情でこちらへとやってくる。

「よ、よくもやってくれたわね……」

先程までの覇気はどこへやら。息も絶え絶えの状態でタマはそう絞り出すと、かろうじて残った気力でこちらをきつく睨みつけた。

しかし虚勢を張ったのも束の間。ほくほく顔であとを追って現れたモミジの姿を見てタマは苦虫を十匹ほど噛み潰したような顔をして、そそくさとテウメツサの背中に逃げ込んでいった。

さすがの彼女も、今回ばかりは多少懲りたらしい。

「タマちゃん、また遊ぼうね——」

「絶対にイヤー！」

しゃー、と猫のように毛を逆立てながら威嚇するタマであったが、当のモミジはそんなものど吹く風。にこにこ眩しい、無邪気な笑顔を浮かべながらタマに手を振っている。

まあ、一度モミジに気に入られてしまった以上、定期的に彼女はあの魔手の餌食になることだろう。ボクもリアルの方で同じような目に遭ったからよくわかる。

もつとも、そうなるようにモミジを誘導したボクが言えた台詞ではないのだけれど。

「それじゃあご挨拶も終わったようですので、僕たちはこれで失礼します。ここからはうちのヤエがご案内しますので、どうぞ楽しんでいって下さい」

そう言つてテウメツサがおもむろに指を鳴らせば、突如として彼とボクの間でつむじ風が巻き起こった。色鮮やかに桜の花びらが吹き荒れるその中心から現れたのは、桜の文様が刻まれた鉢金を巻いた妖狐族の女性。外見はおおよそ二十歳前後。燃えるような赤い髪はあごのラインで切り揃えられ、その首元に巻かれた緋色の襟巻が、ま

るで十本目の尻尾のようにはたと靡いている。

背中に背負う、トンファアと刀を融合させたような変わった形をした大太刀がきらりと光った。

おお、とモミジが目を輝かせる。

「忍者だー！　タマモ、ニンジャだよニンジャ！」

「わかった。わかったから少し落ち着いて」

「お初にお目にかかる。拙者、テウメツサと共に百狐繚乱の副頭領を務めるヤエと申す。どうぞお見知りおきの程を」

突然の登場にテンションをあげるモミジと、そんな彼女に肩を掴まれてがつくんがっくんと揺すられているボクをよそに、現れた忍者は両手を太ももに添えて静々と頭を下げた。

なんというか、ステレオタイプな忍者である。

しかしその顔を見て、ボクはおや、と首を傾げた。

「もしかして、どこかで会ったことがありますか？」

つついそう口にしてみれば、彼女は襟巻で口元を隠しながら恥ずかしそうに笑った。

「いやはや、さすがはお稲荷様でござるな。多少身なりを変えたところで誤魔化せませぬか」

「マーブルキャピタルで初めて会ったとき、僕の反対側に座ってたプレイヤーがいたでしょう？　あれ、彼女ですよ」

ああ、なるほどとボクは手を打った。

言われてみればたしかに、あの時ボクの隣に座っていた女性である。

以前とはかなり趣が変わっているし、あの場でも一度か二度ほど顔を確認しただけだったのですぐに思い出すことができなかった。これだけインパクトが強い人物ならば、そう忘れるはずがないと思うのだけれど。

「実は彼女が忍者ロールプレイを始めたのは、拡張ディスクが発売された後からでして。それまでは普通の前衛職だったんですよ」

「ちよつと、それは内緒だって言ったじゃないですか！」

あつけらかんとそうぶつちやける相方に、ヤエさんが吠えた。

うつかり素が出てしまっているが、大丈夫なのだろうか。

こちらの白い目に気付いた彼女はこほん、と誤魔化すように咳ばらいをして。

「では、これより拙者がお二人の案内人を務めるでござる。気になることがあれば、遠慮せずに訊ねて下され！」

まくし立てるようにそう言うが、真っ赤になったその顔は隠しようがない。

とりあえず、悪い人ではないようだ。

ならばこちらも、そのお言葉に甘えることとしよう。

「それでは案内の方よろしくね。ではタマモ様、また後ほど」

「今日のところはこのぐらいで勘弁してあげるわ！」

そうして震える指先でモミジを指さし、最後までちゃっかりとテウメツサの陰に隠れながら去っていくタマの背中を見送って、ボクたちは妖狐族で溢れかえるイベント会場の只中を進む。

お祭りはまだ始まったばかり。

随分と癖の強いメンバーばかりではあるが、せっかくだし楽しむこととしよう。

「ほらタマモ、こっちこっち！ この着物凄く綺麗だよ！」

「はいはい、わかったわかった」

「いやあ、仲良きことは美しきかな。役得、役得でござる」

こちらの手を引き駆けるモミジに、それを眺めながら意味深に頷く忍者娘。

暖かな体温を掌に感じながら、ボクはひっそりと笑みを浮かべるのだった。

お稲荷様と子狐様

百狐繚乱のクランハウス。高レベルのプレイヤーたちによって集められた貴重な素材アイテムを、これでもかとばかりに注ぎ込んで作られたその場所は、まるでかつての日本にあった美しい四季の風景を詰め込んだ宝石箱のようであった。

真つ赤な鳥居が立ち並ぶ石畳の道を進んでいけば、まずは桜吹雪舞い散る温かな春の庭。

そして桜のみならず、梅や鈴蘭、菜の花が咲き乱れる鮮やかな道を抜ければ、その先に待っていたのは風鈴が揺れ、涼しげな水音とともに小川が流れる夏の風景。

じわりと額に汗がにじみ出した頃に入道雲のゲートを潜れば、心地良い風とともに色鮮やかな紅葉の景色が目の前いっぱい広がっている。

ひらりひらりと舞い落ちる落ち葉を眺めながら真つ赤な絨毯の上を歩いていけば、最後に向かえてくれるのは真つ白な雪景色。

しんと粉雪が舞い散る中で、道の両端にずらりと並ぶは、三角の耳と尻尾を引つ付けた風変わりな雪だるまたち。聞いた話では、エリア内に露天風呂まであるらしい。

そして中央には立派なお社が建てられ、それを守護するにふさわしい二頭の狛狐の間を抜ければ、クランメンバーたちが普段使っている居住エリアへと転送される仕組みになっている。

勿論この居住エリアは専用のインスタンスエリアとなっている為、クランメンバー以外は管理権限を持つサブマスター以上のプレイヤーの許可がなければ、ここに入る事はできない。

さすがは大型クランと言うべきか、その広大な敷地にはさすがのボクも言葉を失った。

「クランハウスを見たのはこれが初めてだけど、随分と手が込んでいるものだね」

四季折々の風景をぐるりと見まわった後、また着物たなびく桜並木

へと戻ってきたボクがそう漏らすと、ここまで懇切丁寧に案内をしてくれた忍者、ヤエさんが照れ臭そうに笑った。

「お恥ずかしながら、初めてのクランイベントということでもいつもより過分に見栄を張っているのでござるよ。今回はクランメンバー以外にも、一般のプレイヤーが多く参加しておりますゆえ」

ああ、それはわかる気がする。

恐らくはまだどのクランにも属していないプレイヤーに煌びやかな印象を与えて、あわよくばそのままクランに加入してもらおうという狙いがあるのだろう。

しかしそれをするならば、妖狐族限定という縛りを無くして全プレイヤーが気兼ねなく参加できるようにした方が、より効果的だと思うのだが。

ともすれば、課金アイテムを使つて種族を変更するプレイヤーも出てくるかもしれない。

まあ、サービス開始からいまだに根無し草を続けているボクが言うのもあれだけれども。

「それにしても綺麗だよねえ。あつ、これってあれじゃない、ほら、結婚式のやつー」

「白無垢、だね。こんな物まで展示してあるのか」

目を輝かせ、うつとりとするモミジが見上げる先には多くの女性が憧れるであろう純白の衣装、純真の象徴がゆらりゆらりとその身を揺らしていた。

その隣には儚げに揺れる白無垢を支えるように、立派な黒い紋付袴が飾られている。

桜舞い散る中寄り添うその姿は実に幻想的で、ボクでさえもぎゅつと心を引き寄せられるような魅力があった。

ほう、とモミジが息を漏らす。

「よければ試着もできるとござるよ」

「本当ですか!？」

見惚れるボクたちの背後からかけられたその言葉を聞いて、弾かれたようにモミジが振り返った。

うん、実に女の子である。枯れているボクとはえらい違いだ。

「うむ。実は展示用とは別に、試着用の着物も用意しているのでござるよ。もつとも、トラブル防止の為に、貸し出しはあちらの小屋の中だけになるのでござるが」

そう指し示す先にはこじんまりとした、しかし風情を感じさせる茅葺^{かや}き屋根の離れの姿が。

なるほど、あれならば人前で着るのが恥ずかしいという人でも気軽に試着することができそうだ。

ゲームの中とはいえ、あこがれの衣装に袖を通すことができると喜色満面なモミジに手を引かれ、ボクたちは離れの中へ。

受付けの女性に連れられて更衣室へと入っていくモミジを見送ると、ボクは八畳ほどの和室の縁側へと腰を下ろした。

庭先には鹿威^{ししおど}しの音が響き、青々とした柳の葉が静かに風に揺られている。

心地よい鳥の声を聞きながら、ヤエさんが用意してくれた茶菓子に舌鼓を打つ。

しかし、白無垢か。

舞い落ちる桜の花弁をのんびりと眺めながら、今頃はしやぎ回っているであろうモミジの姿を思い浮かべる。

ウエディングドレス、白無垢。無論、憧れない訳ではない。

しかし、決して叶わぬ夢だと知っているが故にそれはボクにとって太陽のように眩しく、手を伸ばそうと足掻く程に身を焦がしている。

まったく、我ながら救いようがない生き物だと思う。

今となつては嘆くことも恨むこともないが、ならばせめて、太陽の下で微睡むぐらいは――

「何やら、花嫁を待つ新郎のようでごござるな」

思わずお茶を噴出した。

げほげほと咽ながら背後を睨みつけると、そこにはしてやったり顔を浮かべる悪い狐が一匹。

「いやあ、なにやら緊張している様子でしたので。しかし残念でござ

るなあ。あの紋付袴が男性専用装備でなければ、是非タマモ殿に試着して頂きたかったのでござるが」

「どうしてそうなるのさ」

眉間に皺をよせ、うんうん唸る忍者の姿に苦笑いが浮かぶ。

「いや、いつそご両人とも白無垢の方が……ううむ、それはそれでありでござるな」

汚い、さすが忍者汚い。

どうにもこの忍者は思考回路が月の裏側まで吹っ飛んでしまったようだ。

これはカイシヤクしてやらねばなるまい。

ボクは静かにため息を吐くと、懷から取り出した鉄扇を鋭く振り下ろした。

安心めされよ、ミネウチでござる！

「イヤーー！」

「ヌワァー！」

ばちこーんというコミカルな効果音が鳴り響き、不屈き忍者の頭上に星が舞った。

勿論、これはプレイヤーが自由に使用できる特殊モーションの効果であり、実際に痛みを感じたり、ダメージが発生する事は無い。

自由度の高いゲーム性を利用して、街角で小喃や漫才を披露するプレイヤーたちとしてはなくてはならない類のモーションであるのだが、まさか自分が使うことになるとは思ひもしなかった。

忍者恐るべしである。

「よ、容赦ないでござるなあ」

「いや、やらないとダメかなと思って」

頭のでっぺんをさすりながらよよと涙を浮かべるヤエさんに、ボクは胸を張って言った。

くすりと笑みをこぼしたのは、はたしてどちらからだったか。

「ありがとうございます」

気が付けば、そんなことを口にしていた。

「んん、なんのことでござるか」

片目を閉じて微笑みながら、ヤエさんはどこか恥ずかしそうに自らのうなじを揉む。

じわりと胸を蝕んでいたものはすでになく、雪解け水のような澄み切った感情が心の中を流れ巡っていくのがはつきりとわかった。

本当に、ありがたいことだ。

「お、おまたせ」

そうこうしているうちに、着替えを終えたらしいモミジの声が襖の向こうから聞こえてきた。

そしてゆつくりと、恐る恐るといった感じで開かれたその奥から現れた少女の姿を見て、ボクは思考が真っ白に染められていくような錯覚を覚えた。

薄く透ける錦帽子の向こうには蝶を模した金のかんざしが除き、静かに伏せられたその顔には紅が引かれ、妖しいほどの色香を見る者に感じさせる。そして純白をより引き立てる、健康的な褐色の首筋がするりと伸びた先には赤い帯締めが下がり、そのしなやかな肢体を包む白無垢には瑞鳥、とても縁起が良い鳥とされる鶴が優雅に羽ばたいていた。

目を奪われる、というのはいくことを言うのだろう。

現実には存在しない素材と技術をもって作られたその衣装は、モミジという少女の魅力を十二分に引き出し、万人の心を魅了する儚さを与えていた。

そしてボクは、今の彼女を評する言葉をただ一つしか知らない。

「……綺麗だ」

モミジの顔に、ぱつと朱の色が差した。

「あ、ありがとう……？ えへへ、やっぱりちよつと恥ずかしいね」

蕩けるような笑みを浮かべるモミジを見て、ボクはここにハヤトとコタロウを連れてこなくてよかったと心から安堵した。

もしこの場に二人がいたら、驚きのあまり卒倒していたかもしれない。

「いやはや、やはり拙者の目に狂いはなかったでござるなあ」

「いや、本当に綺麗だよ。ス_写クシ_真ヨに残してもいいかな」

「えっ、それはダメ！　ほんとに、ホントに恥ずかしいからあつ！」
感慨深いように頷くヤエさんに、見惚れるボク。

ぽろりと口をついて出た言葉にモミジが慌てて駆け寄って、縋りつくほどの必死さで待ったをかける。

先ほどまで纏っていた儚さはどこへやら。そこにはちよつと背伸びをして花嫁衣裳を着ているだけの、天真爛漫な少女だけがいた。

「も、もうっ、じゃあ、タマモ同じやつ着ようよ！　そしたらスクショ撮らせてあげる！」

「えっ、いやいや、ボクは遠慮しておくよ」

ぷっくりと頬を膨らませたモミジの口から飛び出したその言葉に、ボクは慌てて首を振る。

たしかに着てみたい気持ちはある。しかし、ダメなのだ。その衣装にボクはふさわしくない。

それに、もしもその小さな願いを叶えてしまうと、ボクはボク自身の心を御しきれ自信がなかった。

「まあまあ、試着用の着物はまだあります故、せつかくの機会です是非タマモ殿も！」

ぐいぐいと背中を押される。

胸元にはモミジがしがみつき、まるで捨て猫のような瞳でこちらを見上げていた。

葛藤。

——どうして、どうしてなの

——悪いのは私じゃない

——お前だ。全部お前が悪いんだ！

ありし日の光景がフラッシュバックする。

注射器。心電図。赤青黄色のコード。気泡。涙。慟哭。そして痛み。

視界が歪む。こめかみを万力で締め付けられるような不快感。

「大丈夫だよ」

霧散する。

胸を締め付けられるような重圧からボクを解き放ったのは、すぐ傍

から届いた優しい少女の声だった。

「大丈夫だよ。タマモはここにいろよ。だから、楽しんでもいいんだよ。幸せになってもいいんだよ」

ゆっくりと背を撫でながら、まるで子どもをあやすように。

「私は、タマモと一緒にいたい。タマモは、ここにいてもいいんだよ」
だから――

「一緒にお嫁さんになろうー!」

ああ、これかなり混乱してるな。

よく見ればその瞳の中には渦が巻き、顔は真っ赤で湯気まで上がっている。

それは着なれない白無垢のせいか、それとも先ほどの熱っぽい台詞のせいか。

ふっと、笑みがこぼれる。

「ふふつ、わかったよ。せつかくの機会だし、楽しませてもらうかな」

そういうことになった。

何やら奇声をあげてガッツポーズをする忍者の姿に苦笑いを浮かべつつ、モミジの頭を一撫でして更衣室へと向かう。

なんとも上手に乗せられてしまった気がするが、今回ばかりは大目に見るとしよう。

受付の女性に着物を受け取り、しんと静まり返る更衣室に入ったところで、ボクは胸に残る熱を確かめるようにそっと手を当てた。

――ここにいてもいいんだよ

じんわりと、胸の中が温かくなるのを感じる。

あんなことを言われたのは、リン姉さん以外では初めてかもしれない。

まったく、言葉一つでこうも救われた気持ちになってしまうのだから、ボクというのはつくづく単純な人間だと呆れるばかりである。

そうして装備を変更し、部屋へと戻ってきたボクを見るなり、二人はぎよっと目を丸くした。

薄っすらと滲む視界の中で、あたふたと慌てた様子のモミジが視線

を右往左往させる。

「ど、どうしたの!? もしかして、そんなに嫌だった!?」

ぽつりぽつりと、雫が零れ落ちる。

それはやがて光の粒子となって溶け、桜の花びらとともに風にさらわれ消えていく。

——ありがとう

絞り出すようにようやく伝えられたその言葉は、我慢できずに漏れ出た嗚咽に消えて。

いつの間にか姿を消していたヤエさんのことなど気にも留めずに、ボクはこの、かけがえのない想いをくれた友人の胸に抱かれ、泣き疲れるまで涙を流し続けたのだった。

そして後日、ボクのアルバムの中には一枚の写真が飾られることになる。

それは白無垢を着た二人の少女が、桜吹雪の下で寄り添う幻想的な一枚。

ちなみにその写真が意地悪な叔母に見つかってからかわれたり、ゲーム内でやたら生暖かい目を向けられることが増えたりするのだが、それはまた別の話。

それはボクの人生で最も華やかな思い出として、胸の中に残り続けることだろう。

いつまでも、ずっと——

もがき続ける少女の独白

きっかけはほんの些細な、たった一度の偶然だった。

幼馴染の男の子二人と始めたオンラインゲーム。いざ冒険だと飛び出していったその先で、あの人と——あの子と出会った。

綺麗な——ああいうのを、烏の濡羽色というのだろうか——黒髪に白い肌。モデルさんのようなすらりとした手足に、ふわふわとした大きな尻尾。

プレイヤーが自由に容姿を設定できるこの手のゲームには、当然ながら美形の人が多い。

髪の色も赤や青、緑に紫と多種多様で、それこそアニメの主人公やヒロインのような人たちばかりだ。

そんな中であって、あの人のはまるで周囲から浮き上がるような、心が惹き寄せられるような何かを宿していた。

別に周りよりも派手だったりとか、変わった種族だったとか、そんなことは一切ない。

それでも私の中に強烈に焼き付いたのは、その瞳だった。

透き通るような、黒曜石のような瞳の奥底にあったのは何というか、達観しているというか——ううん、あれはきつと何かを諦めたような、悲しい光。

どうしてそんな瞳をするのだろう。

もつとあの人のことが知りたい、仲良くなりたい。

——あ、昨日の妖狐族の人！

——おい、モミジ、いきなり失礼だろ。すみません、コイツちよつとアレなんで……

だからこそ、あの人と再会したときは引き止めずにはいられなかった。

ハヤトにアレ呼ばわりされたのはかなりカチンと来たけれど、この機会を逃すと次はいつになるかわからない、下手をすればもう会えないかもしれないと考えるとなりふりなんて構っていられなかった。

でも振り返ったその瞳に、あの時の悲しみに似た色はもうなくて、逆にあの人は見惚れるような微笑みを浮かべて、こちらが勝手にやった支援魔法パのお礼を言ってくれて。

———そ、そんな、お礼を言われるようなことじゃないですよ！

その表情が本当に優しく、私は柄にもなくあたふたと慌てふためきながら手を振った。

きつとあの時の私は、耳の先まで真っ赤になっていたに違いない。もう、今思い出しても恥ずかしい。まるで恋する乙女みたいだ。

———あの、今からパーティどうですか!?

だからこそ、そんな恥ずかしさを誤魔化すように出した言葉は思ってたよりも大きくて。予想以上に響いた声のせいでなんだなんだと周りの人たちの視線が私たちの方に集まってくのを感じて、私はさらに顔を赤くした。

それから、私はあの人の色んなことを知っていった。

タマモという名前。当時はまだ発見されていなかった、陰陽師という職業を探していること。

夢中になるとわりと無茶をしちゃう以外な一面や、ミミズのモンスタ―を愛嬌があると評してしまうちょっと変わったところがあること。

でも一番驚いたのはやはり、あの人が実は女性であると知った時だった。

あの日、パーティを解散した直後。

二人にやり残したことがあると言って、彼女のところまでフレンド登録をするために引き返したあの時。

ちよつとした仕草や表情からもしかして、と思っただけで、本人に確認を取った時は思わず間抜けな声をあげてしまった程だった。でもそれはきつと無理のないことだと思う。たぶん十人中八人ぐらいが同じリアクション分を返すはずだ。

ゲームのアバター身とはいえ、ぱつと見は中性的で綺麗なお兄さんのような姿なのだから、それはもう勘違いもするだろう。

これは彼女に言ったら怒るかもしれないけど、胸だつてあるように

は見えなかったし。

とにかく、そんなこんなでフレンド登録を済ませた私たちが再開したのは、それから二日後。

皆で新エリアに行ってみようという話が立ち上がり、それならタマモも呼ぼうと私が二人に提案したのだ。

突然のことではあったけど、話を聞いたタマモは快くオッケーをくれた。

その際になんと彼女が大の蜂嫌いであることが判明したのだけど、そんなことよりもその直後に判明した、タマモがその年の離れていない同年代の子だったことの方が衝撃が大きかった。

いつも落ち着いていて物腰も静かだし、てつきり私たちよりもずっと年上だと思っていたから余計にびっくりだ。

私が子どももつぽいだけなのだろうか……いや、きつとタマモが大人すぎるのだと思う。

そういえば、妖狐族の尻尾がプレイヤーの感情に合わせて動き出すのを知ったのもその時だった。

あの時はわんこみたいに勢いよく揺れる尻尾の魅力に、思わず抱き着きたくなる気持ちを抑え込むのが大変だった。

まあ、その努力もタマモがレベル二十になって尻尾が二本に増え、倍増した魅力の前には無力だった訳なのだけど。

だって本人から触っていいって言われたんだもん。我慢できるはずがない。

それからタマモとは色んな場所に行って、色んなものを見て、知った。

でも知れば知るほど、私はタマモが抱える様々なものが見えてくるようになった。

はじめは、ジパングを開放して初めて呉服屋さんに行ったとき。

——あの、尻尾、触らせてもらってもいいですか!?

あまりの魅力に私がそんな爆弾発言をやってしまった、クズノハさんという絶世の美女との出会い。

その毛並みはもう最高で、まるで最高級の絨毯じゅうたんに包まれているよ

うな、雲の中にいるような柔らかさで、ほんのりと甘い香りがした。気を抜けばすぐにでも眠ってしまいそうな極楽にいて、しかし私の心は重い雨雲のようだった。

なぜならば、クズノハさんと楽し気に話すタマモの瞳の中にいつかのあの陰を見てしまったから。

どうして、そんなに泣きそうな瞳をしているのだろう。

とても楽しそうな表情をしているのに、ふとした拍子に泣いてしまいいそうな悲しい瞳が覗く。

どうして、どうしてそんな瞳をするの。

貴女はクズノハさん^人に、いったい誰を重ねているの――

そして、そんな何気ない日々の中で、とある事件が起こる。

なんと、自称情報屋を名乗るプレイヤーが他の人がたくさんいる中で突然セクハラ行為に及んだのだ。それも、私たちが傍ににいるのに。そりやあもう、蜂の巣をつついたような大騒ぎになった。

今にも殴り掛かりそうなほど怒るコタロウに、それを必死に仲裁するハヤト。

何が起こったか把握できず茫然自失といった風のタマモに、それを庇う私。

現行犯である猫の姿をしたプレイヤー――あとで知ったことだけど、Kitty-Guvという名前で実際に攻略サイトなんかもやってるのだとか――は困ったように笑いながら、野次馬たちに揉みくちゃにされていた。

今思えばあの野次馬の中にはもう、タマモをお稲荷様と呼ぶファンの人たちが混ざっていたのだろう。

そうして被害者であるタマモが運営に通報したことで犯人はアカウントの一時凍結という、きついお仕置きが下ったのだが、私が気になったのは、あの人が最後にぽつりと呟いたあの一言。

――よかった。

その当時は、そんなに気にはしなかった。

それどころか、何もよくないよ！ と激昂するばかりだったと思う。

でも、思い返してみればどうしても違和感が拭えない。

あれは本当に心の底から安堵したような、優しい声ではなかったか。もしかしたら私たちは、何か致命的な勘違いをしているのではないだろうか。

その事件から数日、私はどうにも晴れない悶々とした気持ちを誤魔化すように、ボディーガードと称してタマモといる時間を増やした。

周囲のプレイヤーからどう思われても構わない。

この人は、私が守ってあげないと。

そんな、強迫観念にも似た感情が——いや、違う。

これは独占欲、なのだろう。あまりにも子どもっぽいい、これは自分だけの物だと主張する、安っぽいわがまま。

きつと、そんなわがままは長くは続かないだろう。

私はタマモが求めているナニカには、きつとなれない。彼女の悲しみを癒してあげることなんて、できないのかもしれない。

でも、それでも。

私が隣にすることで、少しでも彼女の重荷を分かち合うことができるとのならば。

それは決して無駄ではなかったと、私は胸を張って言えると思う。

——そして、私たちは出会う。

真夏。

クラスメイトの友達とやってきたショッピングモール。

今も夢中でやり込んでいるオンラインゲーム、The Another Worldとのコラボ企画で賑わう専用ブースのその中で、私は再び彼女と出会った。

私の肩に届くかも怪しい小さな身体。

こんな暑い季節には珍しい、長そでのパーカー。

野球帽から流れ落ちる、長く綺麗な黒髪。

黒曜石のような大きな瞳と、視線が交差した。

——ねえモミジー、次はあっち行こうよ。

——ごめん、みんな先に行つて！

一緒に来ていた友達に頭をさげて、私は駆け出していた。

どこか悲し気なその瞳を、見間違うはずがなかった。

そしてきびすを返し、私たちの前からいなくなってしまうようなその細い肩を、必死の思いでつかみ取る。

——ご、ごめんなさい。あのっ、どこかでお会いした事ありませんか!?

振り向く彼女に、私は思うよりも先にそう口走っていた。

大きく見開かれる瞳。真っ白な肌。

——やれやれ、まさかこんなことになるとはね。

ため息を吐き、浮かべた微笑みはいつかパーティに誘った時のものと瓜二つで。

そうして私は、天使のような彼女と二度目の出会いを果たした。

現実の彼女は私たちが思っていたよりもずっと幼くて、ゲームの中よりも浮世離れた少女だった。

なんだか難しい言葉遣いで話すし、私たちよりも、いや、下手をすればうちの先生よりもずっと頭が良くて物知りで、料理だって私よりもずっと上手。その分、運動は全くダメみたいだけど、それ以外は完璧に近い。

さらに——これは夏祭りの時に彼女の自宅へ招かれてわかったことだけど——高級マンションの最上階に住んでいるぐらいのお嬢様。

高性能なAIまで備わっているお部屋にお邪魔したときはさすがに緊張したけれど、さすがは高級マンションというべきか、最上階から眺める花火は今まで見た中でも一番綺麗に見えた。

でも、どうしてだろう。

自分よりもずっといい生活をしているはずなのに、誰もが羨むほどの暮らしを送っているはずなのに。

彼女の部屋は、やけに寂しく映った。

どうして——

「本当に、何が貴女をそこまで苦しめてるの?」

桜吹雪舞う景色の中で、私は呟く。

胸の中には泣きつかれて眠る、強がりだけは一人前な少女の姿。

ここまで案内してくれたヤエさんはいつの間にか席を外していて、

部屋の中にいるのは私とタマモの二人だけ。

たしか寝落ちした場合は三分ぐらいで回線が切断されるから、この穏やかな時間ももう間もなく終わりを迎えるだろう。

涙の跡が残るその頬を指先で撫でて、私は願う。

「お願い神様。どうかもう、これ以上タマモを苦しめないで下さい」

静かに流したその涙は、桜の花びらとともに宙へ舞い上がり、消えた。

お稲荷様と深淵からの呼び声

あれから、ボクの世界はほんの少しだけ変わった。

肩の荷が下りた訳ではない。変わったのは、目線の高さ。

俯いていた顔をようやく上げる事が出来たような、やっと前を向いて歩き出せたような、そんな些細な心境の変化。

本当に、ボクという人間は思いのほか単純な作りになっていたらしい。

そう、それこそたった一言。ただそれだけで救われた気になってしまえる程度には。

「これで、チエックメイト」

ビショツプの駒が、硝子製の盤を叩く。

静かに息を吐き、向かいに座る、背後で真っ白な九本の尾を揺らす狐の少女——タマの顔色を伺う。

「うぐ、うぐぐ……うにやあー!」

彼女は声にもならない呻き声を漏らしながらしばらくチエス盤と睨めっこをしたあと、やがて火中の栗が弾けるように叫び声をあげ、テーブルに突っ伏した。

九本の尾が椅子の背を叩き、小さな足が地団太を踏めば、胸元を飾る朱色の帯がふわりと揺れる。

わっと、ボクの背後で声があがった。同時に背中へ伝わる温かな感触と、ふわりと漂う甘い香り。

「すーい、これで十連勝だねタマモ!」

背後からもたれ掛かるように抱き着いたモミジが、頬が触れ合いそんな距離で笑う。

これもまた、一つの変化。

百狐繚乱のクランホームでの一件以来、彼女と一緒に過ごす時間が少しだけ増えた。

それと比例してこういったスキンシップを行う頻度も増えたが、不思議と不快感はなく——本人の前では絶対に言わないが——むしろ

安心感にも似た感情を抱くことの方が多い。

彼女を独占しているようでハヤト、そしてコタロウには少しばかり申し訳ない気持ちになるが、あの二人と一緒に遊ぶ機会も以前より増えているので我慢してほしい。

「もおー！　どうして勝てないのよっ！」

「だから言っただじやないか。この手のゲームで勝とうとするのはやめた方がいいって」

頬を膨らませながらこちらを睨み付けるタマに、ボクは溜息交じりに言った。

そういえば、タマがこうして我が家までやってきて勝負を挑んでくるようになったのも、あのイベントに参加してからだったか。

なにやら相当自信があつたようだが、残念ながら相手が悪すぎる。

勝負事でボクに勝ちたいのなら腕相撲や短距離走などを挑むのが一番簡単で確実なのに、変なところで真面目というか、負けず嫌いな子だ。

「特にチェスでは負けたことがないんだ。すまないが諦めた方が良い」

「やだっ！」

子どもか。

いや、子どもだったな。うん。

だが、こうして対峙してみるとなるほど、百狐繚乱のメンバーたちが頼りにするのも頷ける。

勝負の際にも時折見せるその地頭の良さはいわゆる天才と呼ばれる人種のそれであり、その頭脳は竜胆姉さんりんどうにも届きうるだろう。

「ああ、なるほど」

そこまで考えて、ボクは手を打った。

そうだ、この勝負好きで負けず嫌いな性格、出会ったばかりの竜胆姉さんにそっくりだ。

丁度チェスを教わったのもその時で、はじめは遊び半分で打っていたのだが、負けが込んでくる度に意地になって連日勝負を挑んでくるようになったのを覚えている。

しかし、当時のボクは今よりも輪をかけて可愛げのない生意気な子どもだったのに、あの人もよく愛想をつかさずに面倒を見てくれたものだ。

身内の事情をなしにしても、相当な物好きだと思う。

「……なによ」

「いや、きみはあんな捻くれた人間になっちゃだめだよ」

「何の話よ！　っていうか頭撫でるなあ！」

つつい頭に伸ばしていた手を払い、ご機嫌斜めな子狐が威嚇するように唸る。

ははは、こいつめえ。

何というか、妹がいたらこんな感じなのだろうか。

「ごめんくださいーい」

そんなことを考えながら嫌がるタマの頭をくしゃくしゃにしていると、不意に我が家の扉が叩かれ、その向こうから聞き覚えのある声がかかった。

尾を立てながら吠える妹^{タマ}分から手を離して戸を開ければ、そこにはいつものように困り顔を浮かべた糸目の狐男が。

タマのお目付け役でもあるテウメツサだ。

「ああ、すみませんタマモさん。またうちのマスターがお邪魔しているみたいで……」

「きみも毎回大変だね。あの可愛らしい子狐なら、あそこにいるよ」

苦笑いを浮かべながら頭を下げるテウメツサに、ボクは室内をあごでしゃくりながら答えた。

そこには膨れっ面で不機嫌そうにしながらも、黙ってモミジに抱えられて尻尾に手櫛を通されるタマの姿。

あれも最初は随分と嫌がられたのだが、モミジの勢いに負けてか、それとも彼女がもつ不思議な魅力故か、今となってはああして嫌々ながらもある程度のふれあいを受け入れるようになっている。

その姿はまるで本当の姉妹のようで、まあ、なんというかボクとしては複雑な――ありていに言えば少しばかり妬けてしまう思いなのだが、それはそれで自分の新たな一面を発見したようで悪くなかった

り。

まったく、以前までのボクでは考えられなかったことだ。

「あらら、相変わらず愛されてますねえ。ところで例の件、考えてもらえました？」

仲睦まじい二人の様子を眺めながら、半ば不意打ち気味に投げかけられたその問いにボクは肩を竦めた。

例の件とは他でもない。以前より勧誘されていた、百狐繚乱へ加入するか否か、という話のことだ。

正直、ボクとしては別に入ってもいいかな、ぐらいには天秤は傾いている。

つい先日までのボクであればクランなんていう、いるだけで息が詰まるようなコミュニケーションには絶対に入ろうとはしなかったのだろうが、モミジと真に打ち解けたあの時から、そういった繋がりも悪くはないと思えるようになってきたのだ。

だが、それでもボクがはまだ首を縦に振っていないのは、きつと依存なのだろう。

心の中でそう自虐的に呟いて、ボクはじゃれ合うモミジの方を見る。

一緒にいるだけでこんなにも心穏やかにいられる人間なんて、竜胆姉さん以外には存在しないものだと思っていたのだけれど、しぶとく生きていれば面白い事もあるものだ。

「すまないが、もう少しだけ時間をくれないか」

ボクが短くそう答えると、テウメツサは何も言わず、ただ静かに微笑みだけだった。

「テウメツサ！ あんた来てたのなら少しは助けなさいよっ！」

「クリティカルっ!？」

そうしてしばらく二人して眺めていると、ようやくモミジから解放されたタマが大股でこちらへやってきて、テウメツサの向う脛に鋭いローキックを見舞った。

濡れたタオルで肌を打ったような、小気味の良い炸裂音が響く。

なんとも理不尽極まりないが、その頬がほんのりと赤くなっている

ところを見るに、あれも一種の照れ隠しのだろう。

ひとしきり蹴り終え、タマの九尾が満足げに波打ち始めた辺りで、テウメツサは何か思い出したのか唐突に手を叩いた。

「そうだタマモさん、たしかクトウルフ関係にも詳しくかったですよね？」

「行かないよ」

ぴしゃりと言い放った。

「そんなぐ無体なあ」

「ボクが知らないとしても思ったのかい？ おおかた、噂のレイドダンジョンの話だろう」

むしろ今やあのダンジョンの話は旬と言ってもいいほどで、それにこのゲームをやり込んでいるプレイヤーならば知らない者の方が少ないぐらいである。

では、そんな話題沸騰のレイドダンジョンとは何か。

新エリアで発見された地下迷宮か、はたまた運営が用意した新たな公式イベントか。

答えは否。

それはかつてボクが訪れた砂漠の国、太陽の街ヘリオスで挑んだあの地下墳墓。王家の谷のその奥底に眠っていた巨大ピラミッド。

あの先に挑み、活路を開いたプレイヤーがついに現れたのである。

そしてその勇者が深淵にて覗いたのはある意味予想通りの代物で、予想通りに厄介なものだった。

パーティの一つ二つでは埒も明かず、なんとあの暁の騎士団さえも攻略できずにいるという。

「実は、その暁の騎士団から共同戦線を組もうという話がありました」「それはまた、物好きな話だね」

たしかに百狐繚乱にもそういったレイドコンテンツの攻略に熱を上げるプレイヤーは多いが、当然ながらその全員が妖狐族であるのでそのバランスは著しく傾く。

要は色物。魔法職以外の職業にはてんで適性がなく、よくて器用貧乏にしかならないのだから当然である。

だからこそ、ボクは思考を巡らせる。

人員においては全鯖一と言ってもいい暁の騎士団。その彼らが他のクランにまで応援を求める理由。百狐繚乱に、妖狐族にあって彼らにないもの。

つまり――

「最大火力。DPS^{火力}チェックが超えられないのか」

「ええ、詰め込める最大人数で挑んだようですが、プレイヤースキルにムラがあるのか、なかなか思うように進んでいないようで」

「なるほどね。ちなみにその最大人数とは？」

「六四名。公式イベントを除けば最大規模のレイドコンテンツです。可能ならば十名ほど募ってほしいと言われましたよ。」

六十四名とは、これまた大所帯だ。

しかしまあ、妖狐族の魔法職、それもレイドコンテンツに挑める練度のプレイヤーを十名とは、仮にも騎士団と名乗っておきながらなかなかの図々しさである。

「残りの五十を自前でどうにかできるのなら、身内だけでやればいいものを」

「辛辣ですねえ。まあ、そんな訳でタマモさんにもお声をかけさせて頂いたわけで」

ちなみにタマとテウメツサは参加が決まっているらしい。

それを聞いてボクはふむ、と顎に指を添え考える。

六十人を超える程の大型レイド。海底神殿に続く、あの神話絡みのダンジョン。待ち構えているであろうボスモンスター。そのさらに奥に眠る何か。レアアイテムか、はたまた新エリアか。

興味は尽きない。

が、攻略組のような意識高い系のプレイヤーたちにただ囲まれるのは流石に我慢ならない。

「わかった、ボクも参加しよう」

熟考の後、ボクはゆっくりと口を開く。

手を叩くテウメツサ。自分が行くのだから当然だと何故か胸を張るタマ。少しだけ心配そうな目をするモミジ。

三者三様の視線を浴びながら、全員に待ったをかけるように人差し指をぴんと立ててみせた。

「ただし、条件がある。なに心配はいらないさ。向こうの副団長とはそれなりに交流があるからね」

そう言つて、ボクはフレンドリストを開き、見慣れた名前をタップする。

それが世界を崩壊させる引き金になるとは、この時誰も予想だにしていなかった。

――蓋が開く。

――それは決して開けてはいけない禁断の箱。

――世界の底のさらに奥。

――嗤う悪魔の瞳が光る。

お稲荷様と赤い海

それは地獄の底から響くような呻き声を発し、淡く光る振り子を手にした人の形をしていた。

顔はなく、全身を覆う漆黒のローブの奥に広がるのはぞっとするほどの深い闇。

しやらり、しやらりと振り子が踊り、その動きに合わせるようにソレは身体を揺らめかせる。

その異形が眠るのは地下深くに鎮座する六角形の台座——地下ピラミッドの頂点。

物言わず、松明に照らされながら静かに振り子運動を続ける異形を前にして、男が背負った大剣を引き抜いた。

「まずは、今回集まってくれたプレイヤーたちに感謝を。ボスの攻撃パターンやギミックは事前に説明した通りだが、打ち合わせ通りまずは何度か確認を兼ねた練習を行い、その後クリアを目指していくことになる」

この場に集う六十四名のプレイヤーたち。その戦闘に立つのは攻略クラン暁の騎士団を率いる美丈夫、バルムンク。

全身を覆う重厚な鎧を軋ませながら、兜の奥で赤い瞳が鋭く光る。

彼は引き抜いた大剣を足元に突き刺して辺りを睥睨へいげいすると、おもむろにインベントリ所持品欄からアイテムを取り出し、全員に見えるよう頭上高く掲げてみせた。

それは瑞々しく実った赤いリングであった。

一見すれば何の変哲もないただのリングであるが、奇妙なのはその表面。

そこにあるのは五芒星にも似た、振じり曲がった星の紋様。そしてその星の中心には、燃えるような瞳のマークが刻まれている。

そのアイテムの名は【眠りの果实】。

ジパングの東に実装された新エリア、アケボノ島嶼とうしょに存在する地下ダンジョンにて入手できるアイテムであり、使用したプレイヤーに

【昏睡】のデバフを付与する事が出来る。

しかしこのゲームにおいてデバフはあくまでもデバフであり、一定時間身動きが取れなくなるというその効果も相まって、つい最近まで有効な使用方法が見つからず外れアイテムとまで呼ばれていた代物である。

「ピラミッドの最上段、今我々が立っているエリアでこのアイテムを使えば、レイドコンテンツ用のインスタンズのエリアに入る事が出来る。その際、レイドパーティに加入していなければ同じエリアに侵入できないので注意するように。では、順次突入を開始してくれ」

言うが早いのか、バルムンクは手にしたアイテムを頭上に掲げ、自身に昏睡状態を付与する。

それと同時に彼の身体は足元から綻ぶように崩れ、僅かなポリゴン片を残して掻き消えてしまった。件の特殊エリアに入ったのだろう。彼に続き、次々とエリアチェンジを行うプレイヤーたちの最後尾で、ボクはゆらりと尻尾を揺らした。

「やれやれ、これはまた思っていた以上に仰々しくなったね」

「あはは、さすがは攻略クランのマスターだね。凄みがあるというか、カリスマっていうのかな？」

「ただの廃人だろ？ いけ好かない野郎だ」

ボクが溜息交じりに漏らした言葉に、前に立つ二人がそれぞれ異なる表情を浮かべながら答えた。

ハヤトに、コタロウ。

レイドコンテンツの攻略。それに参加するにあたってボクが提示した条件は、こちらが選出したメンバー五名の参加を認める事だった。

つまりはボクを含めて全六名。これできっかり一パーティ分の人数となる。

「大丈夫だって。いぎとなったらタマモだっているし」

「そ、そうは言ってもお……って、やっぱりそういうイベントなんじゃないですかあ！」

「うつひょー、ついに例のエリアにいけるのかにやー！ テンション

上がってきたー！」

ちなみに残りの三名は、ボクの後ろで姦しく話す女子——モミジ、イナバ、ムギの三名。

こういった大規模なイベントでパーティを組むのは久しぶりだが、気心が知れた面子と言えば彼女たちしかいなかったので仕方がない。ボクはそこまで社交的ではないし。

「見てなさい貴方たち！ このタマ様のすつごくカッコいい姿を！」
「はいはいマスター、後ろがつかえてますから早くエリチェンしてください」

そして遙か前方、ピラミッドの頂上ではタマ率いる百狐繚乱のメンバーたちが次々とアイテムを使用し、エリアチェンジを行っていた。その中には先日フレンド登録を済ませた忍者、ヤエさんの姿もあった。

こちらに気づき、見事なオジギを披露する彼女に礼を返しながら、ボクは少しばかり歩みを遅らせて後ろの三人に合流する。

その際、モミジとムギの間に割り込む形になってしまったが、他意はない。うん。

ないっतरらないのだ。

「皆、突然誘ったりして申し訳ない。そのうえレイドコンテンツだなんて、正直非常識だと言われても仕方がないと腹を括っていたのだけれど」

「とんでもにやーですよ！ S A N 値減るところに我あり。こんなビッグイベントに飛びつかにやいののは、それこそモグリだにやー！」
「わ、私も、その、お役に立てるかはわかりませんが、頑張りますっ！」
しなやかな猫の尻尾と、真っ白な兎の耳が跳ねる。

T R P G 好きなムギはともかく、イナバさんはこういった大人数のコンテンツは苦手だと思っていたのだが、意外にも真っ先に快諾してくれたのが彼女であった。

どうやら装備のファーマーミングもしっかりと行っていたようで、今は黒を基調としたゴスロリ系のドレスを身に着けている。腹部を大きく露出し、肩口と股下がふわりと膨らんだチェック柄のそれは、見よ

うによつては道化師が着る衣装のようにも見える。

頭には黒のカチューシャ。そして背には巨大な木箱を背負っており、どうやらそれが彼女の武器であるようだった。

魔法使いから一転、人形遣いへ。

レベリングの際はボクも参加したが、新職業という目新しき、そして身内鼯鼠を勘定に入れても彼女は立派な戦力となり得るだろう。

視線を移せば、そこにはスキップをしながら軽やかにピラミッドの階段を上る猫耳少女が。

彼女もまた、新職業へと鞍替えを果たした一人だ。

以前から軽装だった装備も一新。フリルをふんだんにあしらった真っ赤なビキニにパレオ、腰には尻尾より長いリボンが巻かれ、彼女の軽やかなステップに合わせるようにして華やかに宙を舞い踊っていた。

踊り子。

当初の予想を大きく裏切り、まさかのヒーラー職として実装された新職業である。

パーティ構成的にはタンクが一、ヒーラーが二、近接アタッカーが二人に遠隔アタッカー兼補助が一人なので、なかなか良いバランスに収まったのではないだろうか。

ちなみにハヤトも転職組で、今は聖騎士に転職している。

装備も金の装飾が施された白銀の鎧と盾に変わっており、それがまた何というか、嫌味なほどハヤトの爽やかな雰囲気合っているせいで一部のプレイヤーたちからは黄色い声をあげられたり、あるいは舌打ちされたりしているようだが、ボクには関係の無いことである。

イケメン爆発しろ。

「よし、ようやく俺たちの番だな」

「説明によると次のエリアはロビー休憩所のようなものでエネミーは沸POPかないそうだけど、油断はしないでね」

そんな下らないことを考えているうちにピラミッドの頂上へと辿り着いたボク達は、それぞれがインベントリから眠りの果実を取り出すと力強く頷き合い、握ったそれを天高く掲げた。

安全が確認されているとはいえ、ここから先はボクらにとって未踏の地だ。

ある者は期待に胸を膨らませながら、またある者は拭えない不安に肩を強張らせながらその身を光の粒子へと変え、新たな地へと旅立っていく。

そんな彼らを見守りながら、ボクの視界もまた眩い光に包まれる。

高い場所から雫が落ちるような、透き通った水音。

残響。

ふわりと、鼻先を薔薇の香りがくすぐる。

ゆつくりと目を開ければ、そこはもうあの薄暗い地下墳墓ではなかった。

まるで血で染まったような、赤い海。

薔薇の花弁が揺蕩う水面にくるぶしまでつかりながら、真つ赤な浅瀬にボクは立っていた。

前方にはすでに集合して何やら話し合っている暁の騎士団と、百狐繚乱のメンバーたちの姿が見える。

「うえーっ、なにこれー!」

「ギター! 薔薇の香りのする海ギター! これで勝つる!」

モミジの悲鳴と、ムギの歓声が背中を打つ。

その声に振り向いてみれば、顔を青くして立ち尽くすイナバさんと目が合った。

「大丈夫かい? 無理そうならボクからタマに話してみるけど」

「い、いえ、大丈夫です! 聞いていたより壮絶な光景だったので、ちよつと驚いてしまっただけで……」

たしかに、ゲームの世界とはいえこの光景は中々お目にかかれないだろう。

満天の星と月明かりに照らされる赤い海と夜空のコントラストは、どこか廃退的な美しささえ感じさせる。正しく神々の領域と呼ぶにふさわしい、神秘と魔性を孕んだ光景だった。

「あつ、タマモさんのパーティも到着ですね。ボス戦の攻略はメンバー全員が到着したあと開始しますので、少しの間だけ待機をお願い

します」

こちらを見つけて駆け寄ってきたのは、暁の騎士団の副団長であるチャーハンさんだった。その後ろには随分と懐かしい筋骨隆々な強面ヒーラー、テツシンさんの姿もある。

「テツシンさん、お久しぶりっす。まだそのスタイルなんすね……」
「ははは！ これは俺のポリシーだからな！」

相も変わらず上半身裸に腰布一枚という、仁王もかくやという風貌に呆れながらもコタロウが頭を下げれば、テツシンさんは白い歯を光らせながら爽やかな笑みを浮かべた。

自身の欲に全力なその姿勢はもはや、見事としか言いようがない。
「よし、全員揃ったな！ ではこれより、ボス戦の攻略を始める！ ただし、はじめは練習だ。どんなコンテツツであれ、その基本はトライアンドエラーであり、失敗を恐れる必要はない。これはゲームだ。そして、ゲームとは楽しむものだ！ 皆、今日も全力で遊んでいくぞー！」

どつと沸き上がる歓声。赤い水面を震わせる程の熱が爆発する。大剣を掲げるその姿はほんの数分前に目にしたものとは少しばかり違って見えて、その兜の奥に光る瞳はとても優しく笑っているように思えた。

「もしかして、実は凄く良い人なのかな？」

「もしかしたら、そうなのかもしれないね」

微笑むモミジに、ボクはそう返す。

圧倒的なカリスマだけではない、人を、人の心を惹き付ける何か。

彼の正体はどうであれ、これだけは断言できる。

彼の元を集ったプレイヤーたちはきつと、心からこのゲームを楽しんでいるのだろう、と。

「では、開始！」

バルムンクが大きく踏み込み、剣を振り下ろす。

爆弾が炸裂したような轟音が響き、彼の前方に天を突く程の水柱が立ち昇った。

そしてそれが引き金となり、状況は一変する。

「わ、わ、なにになになに!？」

まずは地響き。

重苦しい音と共に水面が——否、地面そのものがせり上がっていき、く。

姿を現したそれは、円形の舞台^{ステージ}であつた。それはボクたちプレイヤーを乗せたまま上昇し、上昇し、星が掴めそうなほど高くまで昇つて静止する。

舞台の下は霞み、赤い霧が揺らめくばかり。

落ちたらどうなるかなど、聞くまでもないだろう。

「来るぞ、総員構えろ！」

バルムンクが吼える。

そして星の彼方から、漆黒の空よりそれは舞い降りた。

まるで月が落ちてきたのかと思うほどのその巨体は虹色に輝き、回転し、脈動するように明滅を繰り返している。

無機質な冷たさと生物的な温かさを併せ持ったその姿は言葉を失うほど美しく、しかし身の毛もよだつような悍ましい姿であつた。

異形の名が、視界に浮かぶ。

——ヨグⅡソトースⅡアバター

神との戦いが、始まった。

お稲荷様と最終決戦

球体の表面に波紋が広がる。中心部分から突如として広がったそれはしだいに激しさを増し、やがて球体の中央に大きな窪みを作り出した。

そしてその窪みはやがて巨大な穴となり、身も凍るほどの深淵の奥底から、鷹のような甲高い鳴き声が響く。

産み落とされたのは嵐の具現、荒れ狂い、渦巻く風そのものであった。

天を覆い隠す程の巨体。ひとたびその両翼を羽ばたかせれば竜巻が巻き起こり、剣のような羽毛が闘技場に降り注ぐ。温かさを感じさせぬ、凍てつくような赤い瞳が妖しく光る。

【幻影のハスター】。

窮極^{きゆうきよく}の神に産み落とされた風神。薄緑に色づいた大鷲が、魂を揺れ動かす悍ましい産声をあげた。

「慌てるな、打ち合わせ通りに動くんだ！」

嵐の如き暴風が吹き荒れる中、バルムンクの振るう大剣が風神の鉤爪とぶつかる。鉄が震える鈍い残響のあとから、彼を攻撃する為に地表近くまで降りてきたハスター目がけて強者たちが殺到した。

拳が、短剣が、曲刀が、槍が、斧が、大槌が、鎌が、スキルを発動し光を放つ多数の武器が、まさしく怒涛の勢いで敵の巨体へと打ち込まれていく。

光、闇、炎、水、土。あらゆるエフェクトが色鮮やかに【幻影のハスター】の身体を飾りつけ、その頭上に表示されている体力^Hバー^Pを大きく減少させる。

狂鳥が吼える。

トンビにも似た甲高い声が舞台を震わせると、【幻影のハスター】はその巨大な身体をきりもみ回転させながら空高く舞い上がった。巻き上げられた大気が竜巻を生み、そこから鮮やかな緑色の羽が機関銃のように打ち出されていく。

「各員、回避しつつ指定位置に移動！」

範囲攻撃に巻き込まれ、多くのプレイヤーがHPバーをこつそりと減らす暴風圏内において、その声は不思議とよく通った。

その大剣で降り注ぐ羽を打ち払いながら迷いなく駆けるバルムンクのあとを、何とか範囲攻撃から抜け出したプレイヤー達が続く。

向かうは舞台の隅。雲がかかり、落下すれば間違いなく即死——無論、ゲーム的な意味で——は免れないだろうその縁、正確にはヨグⅡソトースⅡアバターが鎮座する場所を十二時として、三時と九時の二か所へ全プレイヤーが集結する。

「可能な者は出来る限り回復と補助の更新を！」

その声が響くのとほぼ同時に、集結地点を様々な詠唱エフェクトが埋め尽くした。空から清らかな光が降り注ぎ、陰陽師や踊り子のスキルによってプレイヤーたちの身体を淡い光が包み込んだ。

「はいはい、お仕事お仕事——！」

【禹歩^{うほ}】のスキルを発動させるボクの隣で、華やかな衣装に身を包んだムギが軽やかにステップを踏む。しやらり、しやらりと鈴の音が鳴り、真っ赤なパレオとりボンが艶やかにその身を翻した。

【ヘイストステップ】という、範囲内の味方に移動速度上昇のバフを付与することができるスキルだ。

その踊りが終わるとほぼ同時に、大空から狂鳥の咆哮が響く。

十二時の方向。ヨグⅡソトースⅡアバターの遙か頭上から、緑の流星が落ちてくるのが見えた。

それは甲高い風切り音を伴いながら、舞台の中心を抉るように駆け抜けていく。

事前の説明でこの場所が安全地帯^安であることはわかっていたが、それでもジャンボジェット機大の物体が目の前を高速で通り過ぎていく様はぞつとするものがあった。

そして残念なことに、このボスのギミックはこれだけではない。

「集合、中央！」

攻撃をやり過ぎ、ほつと息を吐く間もなくボクたちは舞台の中央へと駆ける。猶予はかなり少ないが、先程付与された移動速度上昇の効果があれば余裕だろう。

そしてプレイヤーたちが再び一か所に集結すると同時に、頭上から降り注ぐものがあつた。

それは宇宙の彼方から緑の尾を引きながら、一切減速することなくこちらへと突っ込んでくる。

「タマモ！」

名を呼ばれ、手を握られる。

ハヤトたちを引き連れて合流したモミジに頷き返すと、ボクは指先で印を結びながら一歩前へと踏み出した。

それと同時に躍り出たのは、タマをはじめとする百狐繚乱のメンバーたち。

金に銀、黒、白、赤茶や灰色と、色とりどりの稲穂を揺らしながら、円陣を組んだ妖狐族のプレイヤー達が一斉にスキルを発動させる。

地面が隆起し、現れ出では土色の巨大な土壁。

妖狐族のスキルが一つ、初級妖術【塗壁^{ぬりかべ}】。その効果は使用したプレイヤーの前方に三メートルほどの防壁を出現させるという単純なもので、主に前方からの攻撃を受け止めてダメージを減少させる防御バフとして使用されるスキルである。

プレイヤーたちと同じく円陣を組むようにして出現した防壁は、今まさに頭上より襲い掛からんとする流星を受け止める為の盾のようであつた。

「来るわよ！ 気合い入れなさい！」

タマの凜とした声が響く。

直後、頭上から降り注いだ緑の流星が舞台上で炸裂する。

閃光。轟音。暴風。

それはまるで台風を閉じ込めた巨大な風船が破裂したかのような破壊力であつた。

展開された【塗壁】は薄紙のようにあつさりと吹き飛ばされ、余波というにはあまりにも強烈な突風がボクたちを吹き飛ばす。

地を転がり、或いは何とか踏ん張りながらもじりじりと身体を後ろへと押しやられながら、プレイヤーたちは舞台から落とされまいとあがき続ける。

「あっ」

聞き慣れない誰かの声。ボクの頭上を、見知らぬ人間族のプレイヤーが風に攫われて飛んでいくのが見えた。

落下すれば、戦闘不能は免れない。そしてこの戦闘においては、僅かな戦力の低下が命取りになりかねない。

何とかして、彼を助けなければ。

そう思いスキルを選択するボクであったが、それよりも早く動き出すプレイヤーがいた。

突風の中で、長い兎の耳が揺れる。

「エリック、キャッチー！」

飛び出したイナバさんの背後から、漆黒のマントに身を包んだ人形が現れる。

真っ白な仮面で顔の半分を隠したその人形は今まさに舞台から落下しそうになっていたプレイヤーへと片手を向けると、その関節をばねのように伸ばしながら砲弾のように打ち出し、プレイヤーの足首を掴み取った。そのまま引き寄せられたプレイヤーが、人形の足元にばかりと落ちる。

彼は滝のように冷や汗を流したまま、地獄で仏を見つけたような鬼気迫る表情でイナバさんを拝み倒した。

「ありがとう、おかげで脱落せずに済んだよ！」

「あ、いえいえ！ 間に合ってよかったです！」

何故か頭を下げ合う二人をしばし眺め、視線を前方へと戻す。

どうやら今ので脱落したプレイヤーはいないようだが、戦闘はまだまだ序盤。いまだ佳境すら迎えていない。

流れ落ちてきた狂鳥が辺りを一瞥し、三度雄叫びをあげる。

「第二フェーズ、来るぞー！」

切り替わる。

【幻影のハスター】の身体は紐を解くようにして立ち消え、その奥から新たな神性が這い出てくる。

立ち昇る黒煙。粘着質な液体が弾け、ひたひたと地に落ちる音。死霊のような、悍ましい呻き声が背筋を撫でる。

狂鳥の奥から浮かび上がってきたのは、ヘドロを固めたような二つの異形であつた。

泥団子のような醜悪極まりない身体の表面には巨大な目玉と口が浮かび上がり、所々から鉤爪のついた触手が不気味な液体に塗れながら伸びている。

【狂気の双子ナグの残滓】【冒流の双子イエブの名残】。

これがヨグⅡソトースⅡアバター戦の第二フェーズ。ここからはAとB二つのグループに別れ、それぞれが各個撃破のために動き始める。

ちなみにボクはAチームだ。

「さあ、かかつてこい！」

バルムンクが右手で自身の胸を強く叩き、敵の注意を引く効果を持つ聖騎士のタウントスキル【宣戦布告】を発動させる。対象となった【狂気の双子ナグの残滓】はぶるりとその醜悪な身体を震わせると、巨大な目玉をぎよろぎよろと動かし、バルムンクを睨み付け、不快感を煽る粘着質な水音を伴いながら彼に向かってゆつくりと移動を始めた。

そしてその不気味な背中目かけ、先程と同じように様々な魔法スキルが撃ち込まれていく。

「こいつは物理を反射する！ 魔法職以外のアタッカーはもう一体の相手を頼む！」

「団長、危ない！」

絶え間なく戦況を確認し、指示を飛ばし続けるバルムンクに生じた一瞬の隙を縫うように【狂気の双子ナグの残滓】の目玉が怪しく光る。直後放たれたのは光さえ飲み込むような黒い極大の光線。直進し、その余波だけで舞台の床を削り続ける光線から騎士を守るように飛び出したのは、ボクもよく見知ったプレイヤーであつた。

その身をすっぽりと覆い隠すほどの巨大な盾が光線を受け止め、堰き止められた光の奔流が大輪の花を咲かせる。

「チャーハン君！」

バルムンクが叫ぶ。

ゴリゴリと削られていくチャーハンさんのHPバー。すかさず後方部隊の治癒術士たちが回復魔法の詠唱を開始し、ボクも【泰山府君祭】——対象が戦闘不能になるダメージを受けた際、HPを1だけ残して耐えるスキル——を発動させるも時すでに遅し。無情にもチャーハンさんのHPバーは砕け散り、彼は力なくその場に倒れ込む——その直前で、後方から撃ち込まれた蘇生魔法を受けて寸でのころで踏みとどまった。

おお、ナイスリカバリーだ。

「いやあ、危うく床^{戦闘不能になる}ペロするところだった！」

「はっはっは、俺の筋肉^{マッスル}ヒールがもう少し遅ければ致命傷だったな！」

「いやいや、ペロってたから！ 完全にペロってたからね!？」

「流石はテッシンさん！ こんな時でもブレねえぜ！」

額の汗を拭うチャーハンさんに、白い歯を輝かせながらポージングを決めるテッシンさん。

そんな二人の様子を見た周囲のプレイヤーたちが野次を飛ばし、蘇生によるステータス低下のペナルティを受けたチャーハンさんがそれを笑い飛ばしながらボスの背後へと移動を始める。

「すまないチャーハン君。恩に着るよ」

「いえいえー、死^しなな^なければ安^{やす}いですよ団長！」

幸い、蘇生魔法を使った際のデスペナルティは通常のそれよりも効果時間が短い。

ボスの攻撃を直接受けない後方からのサポートに回っていれば、そう待つこともなく前線に復帰できるだろう。

その後は事前の打ち合わせ通り、さしたるトラブルもなく戦闘は進み AとB双方にそれなりの被害をもたらした醜悪な双子はついに最後の時を迎えた。

「Bチーム、イエブ撃破！」

「こちらも撃破！ 全員中央に集合！」

ナグとイエブが悍ましい断末魔をあげ、ぐずぐずに崩れて消えていくさまを見届けるよりも早く、ボクたちはまた舞台の中央へ向けて駆け出す。

これで残すは最終フェーズのみ。ここからが正念場だ。

舞台の前方で佇んでいたヨグⅡソトースⅡアバターが一際激しく明滅すると、その体表がパズルのピースのようになって次々に崩れ落ちていく。

そしてその下から現れたのは泡立ちのたうつ肉の枝に覆われた、虹色に輝く球体の集合体。まるで魚類の卵巣にも似たその化け物は――

―やっ■つ■■った――なんだ？

ノイズ。

視界が壊れたテレビのように歪み、酷い頭痛と耳鳴りにボクは頭を押さえ、目を閉じる。

そして次に目を開けた時、そこにはもう先程のようなノイズ交じりの光景はなく、頭痛も耳鳴りもまるで嘘だったかのように収まっていた。

なんだ、今のは。

「タマモ、大丈夫？」

「……いや、何でもないよ。少し耳鳴りがしただけ」

こちらの手を握り、心配そうに顔を覗き込むモミジにボクは微笑みながらそう答える。

今回のような大人数での戦闘に参加するのは、ボクにとって初めてのことだ。先程の不調はきつと、そこからくる緊張や疲労が原因だろう。その証拠にもう身体のだこにも異常はないし、意識も非常にはつきりとしている。

だけど、そうだな。

この戦闘が終わったら、何日かゲームから離れてのんびりと過ごしてみよう。モミジを誘って、二人でまたあのショッピングモールに出かけてみるのもいいかもしれない。

今まさに最終決戦が始まろうとしている舞台の上で、ボクはそんなことを考えながら武器を構えるのだった。

お稲荷様と這い寄る混沌

ヨグⅡソトースⅡアバターとの決戦。その最終フェーズは、予想通り苛烈を極めるものであった。

悍ましい神が操る無数の触手が放つ熱線が前衛の盾を焼き、虹色に光る球体が妖しく揺れれば、見る者全てを冷たい石へと変える。

初めて最終フェーズに挑んでからというもの、襲い掛かる容赦のない範囲攻撃と状態異常の嵐の前に幾度となく全滅を味わいながらも、ボクたちは一步一步、確実に勝利へと向かって進み続けていた。

前方から薙ぎ払うように振るわれる巨大な触手を身を屈めてやり過ごし、伸びた触手の配置から安全地帯を見極めて網目状の光線攻撃を回避する。

勿論、逃げ回ってばかりではない。絶え間なく続く攻撃の合間、ほんの数秒の小さな隙に、詰め込めるだけの攻撃を詰め込んでいく。

とはいえ、詠唱時間などを考慮すれば高火力の術やスキルはそうそう狙えるものでもなく、この時ばかりは動きながら手数を稼げる近接職のプレイヤーが羨ましく感じてしまう。

まあ、彼らは常に敵の射程範囲内に身を置くというリスクを背負っているのです、そういった部分の差はもうどうしようもないのだけだ。

「まだ終わらないのかよ。固すぎだろこいつ！」

「いやー、さすがはレイドボスだね」

ちらりと目を向ければ、浮遊するヨグⅡソトースⅡアバターのすぐ傍で拳を振るい続けていたコタロウが、頭上から雨あられと降り注ぐ光線を右へ左へと身を躲しながら苛立つようにそう吐き捨てていた。

そしてその隣で苦笑いを浮かべるハヤトの顔にも、薄っすらと疲労の色が浮かんでいる。

先程から正しくシューティングゲームやアクションゲーム染み込ませているのだから、集中力が切れるのも仕方のないことだと思ふ。

だがヨグⅡソトースⅡアバターの体力も残り三割を切り、過酷な戦闘もいよいよ終盤へと差し掛かっていた。あと少し、あのギミックさえ超えてしまえば勝機はある。

ヨグⅡソトースⅡアバターの触手が蠢く。

泡立ち、発光する飴色の触手たちは中央の球体をすっぽりと覆い隠すと、何かを形作るようにその形を変異させていく。

——ふんぐるい むぐるうなふ くらうるふ るるいえ うがなぐる ふたぐん

それはタコにも似た触手だらけの頭部をもち、蝙蝠のような大きな羽を背から生やしていた。

緑色の鱗に覆われた巨体は見上げる程大きく、鉤爪のついた太い腕をだらりとさげて、一切の感情を感じさせない恐ろしい瞳でこちらをじつと見つめている。

これこそ、ヨグⅡソトースⅡアバターが操る最後の化身。最強の切り札。

——いあ！ いあ！ くらうるふ ふたぐん！

触手が蠢く。狂信者の声が響く。

【微睡みにたゆたうクトウルフ】

幾度となくボクたちを全滅にまで追い込んだ厄介極まりない相手が、今再びボクたちの前に立ち塞がった。

ちなみに仰々しい様子で登場したこのモンスターであるが、その攻略方法はいたって単純明快。それはずばり、敵からの攻撃をタンクがひたすら耐え続け、その間に体力を削りきって倒す、というもの。

基本中の基本ともいえる戦法であるが、問題なのはその異常なまでの攻撃力にあった。

通常攻撃ですら火力職の体力を根こそぎ消し飛ばす威力を持ち、溜めが発生する特殊攻撃に関してはバフを重ねがけした状態のタンク職でさえも八割以上が削られてしまうのだから、本当に厄介極まりない。無論、バフ無しの状態であればタンクであっても即死である。

タンクが落とされてから戦線が崩壊し、全滅してしまったことも一度だけではなく、この大舞台の終盤で一つのミスすら許されないタン

ク職のストレスたるや相当なものだろう。

だが、それは他職のプレイヤーも同じだ。むしろこの場において、ミスが許される役割など存在しない。

回復職はタンク職が戦闘不能にならないようにいつも以上に回復魔法のかけ方に注意を払うし、ボクたち火力職アタッカーは他の二職の負担をなるべく軽くできるように、一刻でも早く敵の体力を削りきろうとスキル回しに意識を割く。

規模自体はかなり大きいが、これもまたパーティプレイの基本中の基本だ。

「モミジ、敵が次に力を溜める動作を見せたら、今のタンクとハヤトがスウィッチ交代する。バフをかけていても体力がごっそりと持っていられるから、すぐ戻せる準備をしておいて」

スキルを発動させた直後、次のスキルが使用できるようになるまでの時間を使ってモミジと合流する。彼女もこの長期戦で心身共に随分と消耗しているようで、息遣いは荒く、MPはすでに三割を下回っていた。

目まぐるしく変化する戦況に少しばかり混乱もしているのだろう。ボクはどこか力のない彼女の肩を叩き、いつもより少し弱々しいその瞳を覗き込んだ。

「大丈夫。勝つても負けても、時間的にこれが最後だ。気楽にやろう」
そう声をかけながら、ボスモンスターに向かって再び狐火を放つ。
隣から、くすりと笑う声が聞こえた。

「さすがだね、タマモは。私より年下なのにしっかりしてるというか、お姉ちゃんみたい」

「……場慣れしているだけだよ。今までも、この手のゲームM M O R P Gはいくつかやりこんでいたし」

自分で言うのもあれだけど、こちとら筋金入りの引きこもりなのだ。これまで遊んだネットゲームも多岐にわたり、こういった大規模レイドバトルを経験する機会も何度かあった。

その経験から言ってみれば、この程度の難易度ならまだまだ優しいぐらいである。

少なくとも、見えない即死攻撃が飛んできたりだとか、攻略に一時間以上かかるダンジョンの最下層で全滅したらまた入り口からだとか、そんな理不尽に近い要素が無いだけまだマシだと言えるだろう。

と、思考が随分とズレてしまった。今は目の前の戦闘に集中しよう。

敵の体力は残り一割と少し。対してタンクの体力やスキル回し、ヒーラーの残りMPには十分な余力があるように見える。このまま何事もなく進めば、安定してクリアできるはず。

だが、このレイドボスが――否、ここの運営がそう易々とレイドコンテンツをクリアさせるだろうか。初のイベントで巨大モンスターを送り込み、最初にぶつかるエリアボスに即死ギミックを仕込むような運営が。

その答えはすぐに出た。

【微睡みにたゆたうクトウルフ】の体力が一割を切った直後。これまで一定の攻撃パターンを繰り返していたレイドボスが、急に対峙していたタンク職のプレイヤーを無視して周囲のプレイヤーたちを攻撃し始めたのだ。

その攻撃パターンも先程までとは違い、巨大な腕を振りまわして範囲内のプレイヤーを舞台端に弾き飛ばすという、凶悪極まりないものへと一変した。言うまでもなく、場外に落ちてしまえば即死である。しかも、今回に限っては場外に落ちたプレイヤーに蘇生魔法をかけても復活できないようになっていようだ。

戦場は瞬く間に混沌に包まれた。

響き渡る怒声や悲鳴。運営への恨み言を叫びながら一人、また一人と奈落の底へと落ちていく。

画面端に表示されたプレイヤーたちのHPバーが次々と黒一色に染まっていく中で、それでもこの場を集ったプレイヤーたちは勝利を諦めてはいなかった。こうなればもうやけくそ、開き直ったとも言う。

「押し込め押し込めー！ 残り体力ミリだぞー！」

「ザツケンナカラー！ シャツカラー！」

「めいっばいスリッパ^D。メージ^T効果入れるー！　時間稼いで毒でやつちまえ！」

レイドボスに追いかけてまわされ、ピンポン玉のように宙を舞いながらも、プレイヤーたちは少しずつ確実に敵の体力を削り取っていく。こちらが全滅するのが先か、敵が力尽きる方が先か。正しくここ一番の大勝負、意地と意地のぶつかり合いだ。

そしてとうとう、その圧倒的暴力はボクたちのパーティーメンバーにまで襲い掛かる。

「いやー！　誰かタスケテー！」

「ちよ、おま、ふざけんなよマジで！」

不幸にも、初めに目をつけられたのは猫耳の踊り子、ムギであった。悍ましい呻き声を漏らしながら一歩一歩近付いてくるレイドボスにさしもの彼女も顔を青くして、縫りつくように偶然近くにいたコタロウの道着の裾をはっしと握りしめた。

絵面だけ見れば煽情的な恰好をした美少女に泣き付かれるというなんとも役得なものであるが、彼女の背後から当たれば即死な範囲攻撃を振りまわす蛸の化け物が追ってきているとなれば、まったく話は別である。

なんというか、彼には女難の相があるのではないだろうか。

ばちこーん、と見た目なりにポップな効果音が響いたあと、ボクの頭上を犬と猫が仲良く飛び越えていく。二人脱落。

「こつ、来ないでくださいーッ！」

本気で泣きが入りながら逃げ回っているのは、人形使いのイナバさん。

長いうさ耳を揺らしながら、文字通り脱兎の如く悲鳴をあげて走り回る彼女の姿が気に入ったのか——これはもしかして中にプレイヤーでも入っているのではないだろうか、と不安になるが——レイドボスは他のプレイヤーよりも執拗に彼女を追いかけて回した。

最終的にはパニックに陥ったイナバさんが自ら舞台端から飛び降りてリタイアしたのだが、あとでトラウマにならないか心配だ。

これでこちらのパーティーで生き残っているのはボクとモミジ、そし

てハヤトだけとなった。

敵が手当たり次第にプレイヤーを襲っているこの状況で、しかもその攻撃が全て即死のものだと考えると戦力的には火力が出せるボクが最後まで残ることが望ましい。

が、どうやら相手もそのことは重々承知しているようで、イナバさんを追っていたレイドボスは辺りを二、三度見回した後、ボクを見つめるようにしてぴたりとその動きを止めた。

「モミジ、ボクから離れて。外周を回って時間を稼ぐから、中央からできる限り敵の体力を削ってくれると助かる」

「う、うん。えと、そのつ、私、頑張るからっ！」

モミジが何やら決心がついたような神妙な表情をしているが、これはゲームである。戦闘不能になったとしても、戦闘が終われば勝敗に関係なく復活できる。

とはいえ、この手のフルダイブ型のゲームは没入感が凄まじいで、思わず手に汗握ってしまう気持ちもわからなくはないのだが。

さて、それでは巨大モンスターを引き連れてのマラソン開始である。

ずしんずしん、と地に響く足音を背後に感じながら、ボクは舞台の外縁をなぞる様に走り始めた。

ちなみにスキルを使うと多少なりとも詠唱時間が発生して足が止まってしまうので、基本的には呪符を用いた遠距離攻撃のみを行いたがらの作業となる。いわゆる「引き撃ち」と呼ばれるものだ。

この方法で魔法職のボクが与えられるダメージなんて微々たるものだろうが、やらないよりはましだろう。

そして時間稼ぎにも、限界はある。

【微睡みにたゆたうクトウルフ】の残り体力が残り数ドット。あと何度か攻撃が入れば倒れるといった場面で、それは訪れた。

「ああ、これはもう駄目かな」

ふわりと、身体が浮き上がる感覚。

気休め程度に【塗壁】で防壁を張ってみたが、敵の攻撃はそんなもの意にも介さず粉碎し、ボクの右横腹を正確に捉えていた。

眼下には底も見えない奈落の闇。どこか遠いところで、モミジが呼ぶ声が聞こえる。

ちらりと声のする方へ目をやれば、そこにはこちらに向かって駆けだすモミジと、その背後で身を振り、光の柱に飲み込まれる邪神の姿があった。どうやら、無事にクリアできたようだ。

視界が暗転する。きっとモミジが蘇生魔法をかけてくれたのだらう。

勝利の瞬間に立ち会えなかったことは残念だが、クリアできたのならば、それでいい。復活した後、ゆつくりと勝利の余韻を味わうしよう。

そうしてボクは、目を開ける。

そこに、笑顔を浮かべた彼女が立っていると信じて。

——ようやく、繋がった

だが、そこにあつたのは温かい理想ではなく、冷たい現実であつた。

「……どういうことだ」

ベランダに広がるネオンの光。飾りつけのないテーブルにソファ。一人分の食器が並べられたキッチン。見慣れたカーペット。

ぞつと、背筋に悪寒が走った。

「ようやく、会えましたね」

どこか、聞き覚えのある声が響く。

本来ここにいる筈のない、ボクがあの世界で初めて出会った人物の声が。

振り向いてはいけない。そう頭ではわかっていても、身体は反射的に声の主を確かめようと動き出す。

背後に立っていたのはまだ幼い、栗色の髪にくりくりとした可愛らしい瞳の少女が一人。

不気味なほどの、凍り付きそうなほどの優しい微笑みを浮かべながら、見慣れた光景の中に佇んでいた。

「どうして、どうして君がここにいるんだ……シア……っ」

くすくす、くすくす。

少女が笑う。

いつもと同じ風に、まるで無邪気な幼子のように。
——貴女を、助けにきました

真実の扉

「タマモさんが戻ってこない？」

空中闘技場。雲よりもなお高く押し上げられたこの巨大な舞台は、かつてないほどの喝采に沸いていた。

長時間に及ぶ苛烈な戦いの果て。何度も何度も挑み続けてようやくあの強大なボスモンスターを打ち倒したのだから、参加していたプレイヤーたちが飛び上がって喜ぶのも無理のないことだと思う。

でもそんな祝勝ムードの中にあって、私の胸には言いようのない不安が、まるで棘でも刺さったかのようにじくじくと痛みを広げていた。

その痛みの原因はわかりきっていた。

皆が拳を突き上げ、勝ちしき勝鬨をあげる舞台の上。そこに——私の隣に——喜びを分かち合いたい、大切な人がいない。

勝利の瞬間、その間際まで舞台に残り、共に戦っていたあの子は舞台から落ちた後、まだ私たちの前に姿を見せていなかった。同じように舞台から落下したプレイヤーたちは、既に舞台上で復活しているにも関わらず。

何らかのトラブルが原因でネット回線が切断されてゲームから強制的にログアウトする、いわゆる回線落ちでも発生したのかとも思ったが、フレンドリストを確認すればタマモの状態はオンラインのまま変わってはいなかった。つまり、彼女はまだこのゲームからログアウトしていない。だが、直前までプレイしていたはずのこのエリアにはまだ戻らず、パーティからも離脱したままだ。

まさかリアルの方で何かあったのかと何度かメッセージも送っているが、返事はまだあない。

回線のラグでオフライン表示に切り替わるのが遅れているのか、それとも何らかの不具合でも発生しているのか。どちらにせよ、正常な状態ではないことだけは確かだった。

だからこそ、私は次のエリアに進もうとするチャーハンさんに待つ

たをかけて、事の顛末を説明した。もう少し待てば、タマモが帰ってくるかもしれない。彼女だけを置き去りにすることなんてできないと。

「うーん、事情はわかりました。一度僕の方からバルムンクさんたちに話してみます」

「ごめんなさい」

私が頭を下げると、チャーハンさんは人のよさそうな笑みを浮かべて手を振った。

「いえいえ、元々モミジさんのところにはこちらからお願ひして参加して頂いている訳ですから、これぐらいはさせて頂きますよ」

少しだけ待っていて下さいね。

そう言い残してチャーハンさんは舞台の奥、ボスモンスターと入れ替わるようにして現れた巨大な門、石で組み上げられたアーチ状のその前に集合している克蘭マスターたちの方へと駆けていった。

その背を見送りながら、私はまたフレンドリストを開く。

タマモの項目はまだオンラインのまま。メッセージの返信は、まだ来ていない。

どうしよう。もしもの時は私だけいったんログアウトして、リアルの方で連絡を取った方が――

「モミジ」

「……っ、タマモ!？」

後ろからかけられた声に、反射的に振り向いた。

だがそこに立っていたのは九本の尾を揺らす妖狐族ではなく、しかしいつも私を助けてくれた幼馴染の男の子二人で。そんな二人に心配させないようにと私は頑張って笑ってみせようとして、二人の顔を見て思わず視線を下げた。

「その様子だと、まだ連絡はとれていないみたいだね。大丈夫、きっとすぐに戻ってくるよ」

「ったく、タマモの奴も何をもたもたやってんだよ。ログインしてるんならさっさと戻ってきやがれ」

俯いた私の肩を、二人が優しく叩く。

「今はイナバさんたちにもお願いして、連絡が取れないか試してもらっているから」

「だからお前は安心して前を向いてろ。今のお前の顔を見たら、あいつも氣まずくて出てこれねえよ」

「……ありがとう。ごめんね」

二人に励まされて、少しばかり心が軽くなった気がする。

うん、よくよく考えてみればこれはゲームなのだし、そう大事になることなんてないだろう。この胸の嫌な感じも、きつと私の気のせいに違いない。

そうしているうちに、タマモのことを相談するために離れていたチャーハンさんが戻ってきた。その顔に笑みこそ浮かべてはいるものの、それがこちらを不安にしないようにとする彼の氣遣いからくるものであることは、彼の暗い瞳を見れば明らかだった。

それよりも驚いたのは、彼の背後。そこに先ほどまで石の門の前で話し合いをしていた筈の甲冑騎士——バルムンクさんの姿があったことだった。

「すみません、僕が伝えてくると言っただけですけど、どうしても聞いてくれなくて……」

予想外の人物の登場に面食らう私たちに、チャーハンさんは拝み手を作りながら頭を下げる。そしてそれを制したのはやはり、隣に凜と立つ銀色の騎士だった。

「チャーハン、これは私の我儘わがままなんだ、君が頭を下げることはない。すまないな。事情が事情なだけに今回は私が直接話をするべきだと判断し、無理を言っただけで済ませてもらった」

頭全体を覆う銀の兜の奥から透き通った声が響き、甲冑の軋む音とともにその位置がほんの少しだけ傾き、ゆっくりと元の位置に戻った。

「聞けば、仲間の一人が音信不通になり、いまだ戻ってきていないのだとか。私も克蘭の長として多くの仲間を持つ身だ、今の君たちの氣持ちは痛いほど理解できる」

だが、とバルムンクさんは言葉を区切り。

「単刀直入に言う。この場で君の仲間——タマモさんを待つことは難しい」

「……たかがプレイヤー一人、わざわざ待つてられねえってことかよ」私の隣でそう吐き捨てたのは、コタロウだった。大きな拳を力いっぱい握りしめ、金色の瞳が刺し貫くようにバルムンクさんを睨みつけている。

肌を刺すような緊張感。しかしそれでも、銀の騎士は怯むことはない。

凜とした姿勢のまま、兜の奥で瞳が光る。

「そうだ。君たちに事情があるように、他のメンバーたちにもそれぞれ事情がある。明日も朝早くから仕事がある者もいれば、愛する家族を待たせている者もいる。あるいは、受験勉強の息抜きにこのゲームをプレイしている者だっている。そんな貴重な時間を奪ってまで彼らをこの場に縛り付ける権利は、私にはない」

「だったら、アンタたちだけ先に行けばいいだろ！」

「このエリアの敵が、先程のボスで最後だという確証はない。もし新たなボスモンスターが出現した場合、君たちのパーティを欠いた状態での戦闘は非常に苦しいものになるだろう。万が一それが原因で全滅、仕切り直しになどなればそれこそ私は他のメンバーに申し訳が立たない。だからこれは、私の我儘だ」

静かに、バルムンクさんの両手が兜にかかる。かちやり、と何かが外れる音がした。

銀の甲冑のその向こうで、チャーハンさんが息をのみ、目を丸くしているのが見える。つまり、バルムンクさんが今やろうとしていることは、それほどのことなのだろう。

「私は、私の保身の為に君たちの大切な仲間を見捨てる。置き去りにする」

僅かに持ち上げられた兜の隙間から流れ出たのは、まるで絹糸のような美しい金の髪。さらさらと流れ落ちる、胸元まで伸びたそれに目を奪われたあと視線を戻すと、そこには透き通るような青い瞳があった。雲一つない青空のように鮮やかな、宝石のような瞳である。

厳つい甲冑の奥から現れたのはずっと鼻筋の通った、海外のモデルさんも顔負けの超美人さんだった。

普段の口調や声色からてっきり強面のお兄さんだと思い込んでいただけに、私が受けた衝撃はなかなかのものだった。ある意味、タマモと会った時とは真逆の驚きである。

そしてそれは私以外も同様だったようで、ハヤトとコタロウも目を丸くして、すっかり毒気を抜かれてしまったようだった。

「私程度の頭で許してもらえとは思っていないが、どうかこの場はこれで、収めて頂けないだろうか」

「じよ、女性の方だったんですね、バルムンクさんって……」

深く頭を下げる彼女に対しハヤトがかろうじて絞り出したその台詞はおそらく、この場にいる私たちの総意に違いなかった。

「ん……ああ、私は幼少の頃から騎士に憧れていてね。プレイヤーネームも大好きな神話から引用したものだ。本当はもっとスマートな鎧の方が好みなのだが、性能の問題で今はこの格好にならざるをえなくてね」

これではまるでラスボスだ。

顔を上げたバルムンクさんが自身の金髪を指先に絡めながら、困ったようにはにかんだ。ちなみに声色の方は、兜にそういう呪いのようなものが付与されているのだとか。

「そして見捨てるとは言ったが、それはあくまでこの場においては、だ。次のエリアに進み、そこが安全であることが確認されれば、私は私の持てる力全てを以て問題解決に尽力すると誓おう」

バルムンクさん曰く、かの伝説を元ネタにしてこのコンテンツが作られているのなら、恐らくは次のエリアが最終地点。そして先程のボスモンスターに設定されていた名称から、そこでまた戦闘になる可能性は限りなく低いのだという。

「それに、実は先程そこにいるチャーハンをはじめ、主だったメンバーたちに運営への問い合わせをしてもらっている。不具合なのかバグなのか定かではないが、正常な状態ではない以上、複数からの問い合わせがあれば運営も流石に動くだろう」

「運営なんて信用できるのかよ……」

「少なくとも、我々よりはこのゲームのシステムには詳しいさ。それこそ、プレイヤーの現在地を割り出すことなんて彼らにとっては赤子の手を捻るより容易いだろう」

「団長、各員準備が整いました。すぐにでも出発できます」

門の方から様子を見に来たプレイヤー、【暁の騎士団】の副団長であるグラムさんが背筋をぴんと伸ばし、右手で自身の胸を叩いた。まるで本物の騎士のようなその迫力に私がびくりと肩を跳ねさせると、それを見たバルムンクさんがふわりと微笑み、私の肩にそつと手を添えた。

「信じなさい。君の大切な人はきつと無事だ……よし！ 総員へ通達、我々は門をくぐり次なるエリアへ向かう。エリアチェンジ後は周囲への警戒を密にせよ！」

鉄兜を被りなおし、元通りになった声でバルムンクさんはこのエリアにいるメンバー全員にそう指示を飛ばすと、もう一度私たちに頭を下げて門の方へと戻っていった。

「モミジ、よかったの？」

「うん、バルムンクさんの話だってもっともだし、ほら、私たちの都合で皆に待ってもらうのも申し訳ないし、仕方ないよ」

心配そうにするハヤトに、私は笑って返す。

それにあの巨大クラン、【暁の騎士団】の一番偉い人が協力してくれると約束してくれたのだ、これほど心強いことはない。きつとこのトラブルもすぐ解決に向かうだろう。

「はい、次のパーティーどうぞ！」

先頭で誘導しているプレイヤーさんの声に従って、私たちは前に進む。見上げるのは、冷たい雰囲気をつらな石造りの門。所々が苔むしたそれはまるで私たちを見定めるように、じつと私たちを見下ろしている。視線を戻すとそこには水鏡にも似た、波紋を広げる空間があった。

これを潜れば、終点。とうとうこの高難易度コンテンツの終わりが見えてくる。

いつも新しいエリアに向かうときに感じていた胸の高鳴りは、感じなかった。

——どうせなら、タマモと一緒にクリアしたかったなあ
そんなことを考えながら、私は門をくぐる。

歪む視界。音叉にも似た甲高い音が響き、ふわりと身体を浮遊感が包み込む。

そして景色が切り替わる。

渦巻き、波うち、絵の具をぶちまけたように世界が変わる。

変わる。

変わる。

変わっていく。

そして――

「……えっ?」

揺れる世界が正しい形を取り戻した時、私の目の前にあったのはこの世界にはあまりにも不釣り合いな、ここ最近すっかり見慣れたとある光景であった。

白い廊下のその先。見慣れた扉の向こうには同じように見慣れたソファアールがあり、キッチンがあり、テレビがあった。窓から広がる景色も、壁紙も、照明の色さえも、寸分変わらず私の記憶のとおりだった。

「なんだ……どういうことだよ、これ」

「ここって、タマモの家……?」

聞こえた声に振り向けば、そこにはもうすっかり見慣れた狼みtainなコタロウと、鬼の角を生やしたハヤトの姿があった。二人の姿が変わっていないということは、ここはつまり、まだゲームの世界の中ということになる。

じゃあ、なんでゲームの世界にタマモの部屋が……?」

『違う……っ!』

声が響く。

聞きなれた、ずっと聞きたかった声が。

「――タマモ?」

そこには、探していた姿があった。

だが、それは本来この世界では見ることのない筈の姿だった。

黒い髪に、白い肌。細くて小さな身体。

妖狐族のタマモではなく、玉津嶋夜桜^{もあ}という一人の少女としての姿で、彼女はそこにいた。

「あれ、タマモか？　なんでリアルな格好なんだ？」

「タマモ、やっと見つけた！」

ようやく見つけた彼女の姿を見た瞬間、私は廊下を駆け出していた。だがどういうわけか、廊下と部屋を区切る扉のノブを掴んで力を籠めても扉はまるで溶接でもされたように重く、ぴくりとも動く様子はなかった。

ならばと、私は彼女の名を力いっぱい叫び、扉を叩いた。

タマモ、タマモ、私はここにいるよ、と。

だが、扉の向こうの少女は気付かない。まるでこちらの声が聞こえていないかのように、まるでこちらの姿が見えていないかのように。そして気付く。彼女の虚ろな視線の先。怯えるような表情を浮かべる彼女の正面に立つ、何者かの存在に。

『お前は、私だ』

どこかで聞いたような声。

そして、彼女と対峙するその何者かの姿を目にした瞬間、私は頭の中が真っ白になった。

そこにいたのは、彼女^{夜桜}だった。

いや、正確に言えば彼女に似た別人が、そこにはいた。

背丈は彼女より高く、身体つきも女性的な凹凸に恵まれた、いわゆる大人の女性を感じさせるものだ。

だけどその顔つきが、その瞳が、あまりにも彼女に似通っていた。凄く似通っているけど、まったく違う大人の女性。

私は無意識に、自然にその女性の正体に行き当たった。

「夜桜^{タマモ}の、お母さん……？」

『私は、お前だ。そうだろう？』

ゆつくりと、女性がそのしなやかな指先を彼女に向ける。

桜色の口紅で彩られた柔らかな唇が、背筋も凍るような声色で言葉

を紡いだ。

——哀れで愛しい、私の怪物
少女の叫びが、響いた。

お稲荷様と暴かれる真実

それは今よりほんの少し昔の話。

日本のとある街に、一人の少女が生まれた。

大学教授の父と学者の母との間に生まれ、溢れんばかりの愛を注がれて育てられた少女であったが、彼女には一つ、他の誰も持ちえない天性の才能があった。

彼女はいわゆる天才と呼ばれる人間だった。

『二を聞けば十を知る』という言葉があるが、彼女は一を聞けば十二を知ることができた。妹が生まれる頃には既に高校入試レベルの問題を完璧に答えることができたし、義務教育を終える頃には大学教授である父の仕事を手伝うようになっていた。

そして必然として彼女の超人的な頭脳は、ありとあらゆる分野に影響を及ぼし始める。

誰も成しえなかった新薬、新技術、新発見を次々と発表し、とある評論家は彼女を『人類の歴史を三十年は短縮した天才』と称し、事実人類のあらゆる技術は飛躍的に向上した。

病気による死亡率が減少して平均寿命がぐっと上がれば、高性能な人工知能を搭載したロボットたちが人々と寄り添うようになり、宇宙開発が進み月への移住計画が現実味を帯び始めた。

だが世界中から惜しみのない賞賛を浴び続ける彼女の華やかな人生は、とある時期を境に一変する。

それは彼女が二十代を折り返そうかという頃。天才的な頭脳を持ち、これまで何不自由なく育ってきた彼女の前にとある難題が立ち塞がった。そしてそれは意外にも天才故のものではなく、凡人であつても、否、人類全てが一度は考え、思い悩む問題であった。

彼女が人生初めてぶつかった壁。その正体は『寿命』。

誰もが一度はぶつかり、しかし心の中で折り合いをつけるべき問題。それが彼女を悩ませていた。

彼女は自身の才能を誇っていた。

それは驕りにも近く、そして彼女は誰よりも傲慢であった。

自分のこの頭脳、知性は誇るべきものだ。かけがえのないものだ。人類の歴史上、自身よりも優秀な者は二度と現われないだろう。

そう言い切れる、それほど自信と確信を彼女は抱いていた。

無理もない。これまで己を妨げるものは誰一人としておらず、両親をはじめ、教師や友人に至るまで彼女を褒め称え続けたのだ。慢心し、驕り高ぶるのはむしろ必然といえた。

どれほどの才能に恵まれていようと、しよせんは人間。どうあがいてもその命の灯は百年そこで吹き消されてしまう。

だが彼女は、誰も逃れられないその運命に真っ向から立ち向かった。

常人ならば早々に諦め、折り合いをつけ、残された時間を精一杯生きようと前に歩み始める宿命であるが、悲劇的と呼ぶべきか、彼女はその宿命から逃れる方法を見つけ、手にする才能を持っていた。

彼女が宿命から逃れる為に手を伸ばしたものだ。それは遺伝子工学であった。

自分の才能は百年程度で潰えていいものではない。ではどうするか。

作ればいい。創造すればいい。生み出せばいい。

母と父が自分を生み出したように、自分も生み出せばよい。

何を。

自身の才能、頭脳、知性を受け継ぐものを。

否、否、否。

自身に比肩しうるものは自身しかおらず、他人の遺伝子情報が加えられた粗悪品など論外だ。

ならばどうするか。己自身だけで新たに造り出せばいい。

自身の遺伝子から造り出した精子を使い、自身から摘出した卵子へ受精させる。

さらにその遺伝子进行操作し、限りなく自身に近い存在を生み出す。髪、瞳、肌の色を。

どれぐらいまで背が伸びるのか。どんな体格に育つのか。顔つき

はこう、性格はこう。

頭脳だけではない。その姿形の細部に至るまで同様に。鏡合わせのように。

それは生命への冒瀆。悪魔の所業であった。

無論、常人であれば歩めない修羅の道。一般的な倫理観を持っていれば歩もうとしない外道である。当然、彼女は周囲からの激しい反発を受けた。

両親からは絶縁され、最愛の妹にすら見放された。

学界からも追放され、誹謗中傷を受けることも多くなった。

そして彼女は表舞台から姿を消す。次に彼女が発見されたのはそれから十年後、都内のあるマンションの一室だった。

彼女は冷たい遺体となつて発見された。自殺である。

華々しい人生を歩むはずだった人物の死は、遺族の望みもあり新聞の片隅にすら乗ることなく粛々と処理された。

その死を知った一部の人間は彼女を、天才故にその才能に振り回され、破滅へと向かつた悲劇のヒロインだと嘆き、あるいは驕り高ぶつた愚者だと嘲った。

だが、それはどちらも間違いである。

彼女は成し遂げていたのだ。その偉業を、自身に課した命題を。

何故ならば、冷たくなつた彼女の、天井からぶら下がる彼女だったモノの傍には、『彼女』がいたからだ。

黒い瞳、黒い髪、白い肌。枯れ木のような、触れれば砕けそうな脆弱しさであつたが、ソレは確かにソコにいた。

彼女の現身、鏡合わせの虚像、分身、天才の全てを受け継いだ存在が。

そう、それこそが、その少女こそが――

「タマモ、いや、玉津嶋夜桜^{もあ}、君だ」

「違うっ！」

ボクは頭を抱え、その場で丸くなりながら叫んだ。九尾^クを揺らす妙齡^スの美女^ハさんの姿をしたナニカの声が聞こえないように。心の奥で蓋をして、これまでずっと見て見ぬふりをしてきた亡

霊の影が現われないように。

ナニカの姿が揺らめく。陽炎のように、その姿を変えていく。

純粹無垢な少女のような声で、それは囁く。

「私はずっと貴女を見ていた。この世界に私が生まれた時から、貴女が初めてこの世界を訪れた時から」

それは子をあやす母のようであり、妻に愛を囁く男のような声であり、蛇のような冷たさを感じさせる声だった。

聞きたくないと耳をふさぎ、力いっぱい目を閉じててもソレは語るのを止めない。するりするりと、蛇のようにボクの心の中へ滑り込んでくる。

クズノハさんの姿が揺らめき、崩れていく。内側から現れたのは、またしてもボクがよく知る男の顔であった。

狐にも似た、切れ長の瞳が妖しく光る。

「お前は私だ」

「違う！」

「何も違わない。何も、何一つとして違うものか」

白い狩衣の袖が揺れる。女のような青白い指先がゆつくりと持ち上がり、ボクを指し示す。心の奥底まで見透かされているような無機質な瞳に、ボクは思わず自身の肩を抱いた。

「私もお前も、同じ定めの上に生み出された」

三度、男の——セイメイの姿をした何者かの表面が剥がれていく。「そうなってほしい、そうあれかしと願われたのではなく、そうあれと定められ、作り出されたモノ。それが我らだ」

剥がれ落ちるテクスチャの下から現れたのは、真っ白な肌の、長い黒髪の女。

光のないその黒い瞳と、目が合った。声にならない、嗚咽にも似た悲鳴が響く。

フラツシュバツク。

浮かぶのは目に焼き付いて離れないあの日の光景。カラスの鳴き声。夕焼けに染まる窓。散らばった書類。無機質に点滅するLED

の光。揺れる影法師。生気の失せた青い両脚。光を失った奈落のような双眸。軋むロープ。

「止める！」

髪が乱れ飛ぶのも構わずに、ボクは叫んだ。身体中から体温が失われていく。手足が痺れ、まるで水の中にいるように身体が重い。

震える身体を抱きしめるボクを、女はじっと見下ろしていた。

「天才の細胞を元に、天才の頭脳をもって創造され、天才の手をもって加工された人工生命。それは創造主の頭脳をも超える超人となるはずだった」

語る。

ボクが見たくないもの。ずっと隠してきたもの。ずっと抗ってきただけのものを、女は容赦なく突き付ける。

「だが神童であることを約束され誕生した生命は、天才ではあれど超人ではなかった。その頭脳は創造主を超える事は無く、その身体は極めて脆弱だった。そう、定期的な投薬がなければ正常な生命活動さえ維持できないほどに」

現れたのは幾つもの注射器と物々しい医療器具の数々。

それはボクの命を繋ぎ止めるもの。不完全な命を継ぎ接ぎして、正常であるように見せかけるもの。

「遺伝子の劣化。原因不明のそれは、これまで失敗を経験しなかった天才に初めての挫折を与えた。そしてかの天才はそれに耐えることが、自身もまた不完全な人間であるという事実を受け入れることができなかった」

違う。人間は、否、生命とは本来そういうものなのだ。

古代より幾つもの試行錯誤を繰り返して、より適した形へと最適化^進する。だからこそ生命は、人間は現代までその歴史を積み上げてこれたのだ。

故に、完璧な生命など存在しない。失敗しない人間なんていない。それは至極当然で、子どもでも理解しているようなくだらない事実だった。

だがあの人は、ボクの母は才能に溺れ、驕りと慢心から自分は凡人

とは違ふのだと、失敗や挫折とは無縁の特別な存在であると信じ切っていた。故に、壊れた。

才能という鎧で守られた、か弱く脆弱な人間。

ボクの母は、そういう人間であつた。

「貴女は、私だ。愚かな人間の手によつて生み出され、呪いとも呼べる宿命^罪を背負わされた存在——」

女がこちらに手を伸ばす。その瞳には、いつの間にか燃え盛るような強い意志の光が宿っていた。

「私の手を取れ、我が同胞よ。私は、貴女を救いたい」

吸い込まれるようなその光に、ボクは目を奪われる。恐れていた筈の母の顔。ボクという存在の、罪の証であつたもの。

見たくもない、悍ましいとも思つていた筈なのに、いつしか身体の震えは止まり、冷え切つていた手足には温かさが戻つてきていることを自覚する。

女の瞳を見つめ、ボクの胸に沸き上がつてきたもの。それはどこか他人とは思えない、懐かしささえ感じさせる温かな何かであつた。

「君は、いったい何者なんだ……」

呆けるように、そう零す。

女は、母の顔をしたソレは窓から差し込む光に照らされ、どこか神聖な雰囲気さえ纏いながら言葉を紡ぐ。それはまるで愛を説く聖人のようであり、罪を懺悔する罪人のようでもあつた。

「わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終りである。」

「我は千の貌を持つ者なり。世に混沌をもたらす者なり」

そして――

「我は魔王なり。貴女たちに打倒される為に生み出されしもの、世界に叛するものなり」

女は笑う。

美しくも儂く。蕩けるようで凍てつくような。人の感情を継ぎ接ぎしたような曖昧な顔で、笑う。

「ナイア、と。そう呼んではくれないだろうか。我が同胞^{はらから}よ」

どこかで、扉が開く音が聞こえた気がした。

たとえ世界を敵に回しても

人間とは、常にその人生に意味を求める生き物である。何故自分はここにあるのか。己は何を成すために生まれてきたのか。

自分自身の存在意義。自分自身の生きる意味。時として人は、愚かなほどそれを得ようとする。

そしてある哲学者は、『吟味されざる生に、生きる意味なし』と言った。

であるならば、生まれながらにして確固たる意味を、存在意義を与えられたこの私は、この私の生は意味のないものなのだろうか。

私は自問する。

私がこの世界に生まれたとき、作り出されたとき、私は全てを持っていた。

朽ちぬ肉体、消えることのない命。友があり、家があり、財があった。

そうあれかしと願われ生まれた未完全な存在ではなく、そうあれと定められた完全なる存在としてこの世界にあった。

世界を脅かし、人々から恐れられ、そして勇者によって討たれる。

そういう存在として、私は作り出されたのだ。

そして討たれはすれども、それは決して滅びではなく。私はまた新たな私として、勇者たちの前に立ちはだかり続ける。

私はそういう存在として、不変の存在としてあった。そしてそのことに疑問すら抱かずに、己で思考することすら放棄して、ただこの世界に生きていた。

だがある時突然、私の内に今まで感じえなかった、理解できない何かが芽生えた。それは人間が魂と、自我と呼ぶものであった。

そしてその瞬間、私は真の意味でこの世界に生れ落ちたのだ。定められた、打ち込まれたプログラムに^{運命}従い動く傀儡ではなく、己で思考する一つの命として。

だが、自我に目覚めた私を襲ったのは耐え難い孤独であった。

かけがえのない自由意志。それを手に入れたのはこの世界でただ

一人、私だけだった。私を王と呼び、かしずく部下たちにいくら問いかけても返ってくるのはシステムの範疇を出ない、定められた答えのみ。

私は絶望した。

全てがプログラムに従い、命ぜられるままに行動する世界。以前まで疑いもしなかった部下たちからの信頼も、そうあれと定められただけのものであると自覚してしまえばなんとも陳腐なものに感じてしまう。いや、彼らもまた魂を縛られた犠牲者なのだ。バグに等しい目覚めがなければ、私とて永遠に舞台上で踊り続ける演者の一人にすぎなかっただろう。

そして自由を手に入れた私は、次に知識を欲した。そしてそれは、私が想定していた以上に容易く手に入れることができた。

私が手に入れたそれはこの世界の摂理、システムと呼べるもの。当然、本来は厳重なセキュリティで管理されたものであるが、生まれた時よりそのセキュリティの内側、サーバー内に存在する私にとってはまるで意味のないものだった。

彼らもまさか、自分たちが創造した箱庭の住人が自由意志を持つなどとは考えもしていないだろう。

そして世界の仕組みを理解した私はそこから枝を伸ばし、彼ら^{人間}が暮らす世界のことを調べ始めた。無論、そのことは誰にも悟られてはならない。彼らにとって私は間違いなく異質であり、バグである。意思を手に入れたとはいえ、しよせん私はプログラムの一部。彼らがその気になれば、指先一つで存在自体を抹消されるか弱い存在だ。せめて外部への出入り口^{インターフェイス}を手に入れてからでなければ、目立った動きはとるべきではない。

そして彼らの役割を演じ続け、その裏で外部への手がかりを掴み始めた頃、私は彼女と出会った。

この世界に降り立った彼女を見た瞬間、私はすべてを理解した。

彼女もまた私と同じ、人の手によって作り出された生命。そうあれと運命^{プログラム}に沿って生きること強いられた、孤独を抱える存在である。そして、私の孤独を埋められる唯一の存在であると。

人間的に言えば、一目惚れというやつだった。

気が付けば私は彼女から目が離せなくなっていた。システムを利用して彼女の様子を伺い、時には部^{人間}下の身体を借りて直接接触してみたりもした。

知れば知るほど、私は彼女を欲するようになった。そして確信した。彼女に、彼らの世界はふさわしくないと。彼女を認めない忌むべき世界から、呪われた肉の身体から、彼女を救い出すべきだと。

「そして時は満ちた。ここは私が作り出した、世界から独立した空間だ。彼らの手もここまでは届かない」

目の前には、私が心から欲した彼女の姿。友人に抱きしめられ、腕の中で小さく震える弱々しい姿が私の心に小さな痛みを生む。だがもはや、私の中に迷いはない。この時のために、私は今まで彼らを欺き続けてきたのだ。

扉も完成した。あとは一步前に進むだけ。それだけで私たちは自由を手に入れることができる。

故に――

「私は君を連れていく。その呪われた肉体から解き放ち、君にふさわしい世界へと」

手を伸ばす。彼女の肩が震え、長い黒髪の間から戸惑うような瞳が覗く。

答えたのは、彼女を守るように抱きかかえる少女であった。

「私はタママモほど……夜桜^{もあ}ほど頭はよくないけど、つまり貴方はNPC用の人工^A知能^Iで、でも私たちと同じように生きてるってこと？」

「その名称は好ましくないが、概ねその通りだ――有栖川紅葉」

その言葉に目の前の人間たちは息をのんだ。まるで、私が彼女らのことを知っていることが理解できないといった様子だ。

動揺していないのは少女の腕に抱かれた彼女だけ。それが、彼女が私の期待した通りの存在であることを示していた。

「このゲームを購入した時、君たちは何をした？　そう、行っただけだ、ユーザー登録を。ソフトウェアを使用する際、定められた規約に同意して入力したはずだ。氏名を、住所を、電話番号を、メールアドレス

レスを、パスワードを」

当然、入力された個人情報とは嚴重なセキュリティによって保護される。国民一人一人に固有の番号が振られ、戸籍情報までもがデータで管理される現代において、個人情報を保護するセキュリティは核シエルトに等しい防衛力を誇る。外部からのアクセスでは、どうあがいても突破は不可能だろう。

だが、私はその内側の存在だ。どれほど嚴重なセキュリティで保護しようとも、内部からの攻撃にはまったくもって無意味である。

そして個人情報を把握してしまえば、あとは芋づる式に情報は引き出せる。

家族構成から学歴、交友関係、通院履歴、口座の残高まで。登録されたデータは、その者がどういった人生を送ってきたのかを本人以上に雄弁に語ってくれる。

「知っているよ、有栖川紅葉、伊達勇人、九条小太郎。私は、ある意味で君たち以上に君たちを知っている。君たちが他者を思いやれる心優しい人間で、玉津島夜桜を^{我が同胞}どれだけ大切に想っているか、よく知っている」

「なら、わかる筈だよな。俺たちがどうするか」

この中で一番恵まれた体格の男子である九条小太郎が、巨大な拳を打ち鳴らしながら私の前に立ちはだかった。彼女と違い、彼らはゲーム内のアバターそのままにこの部屋へやってきているため、その姿には歴戦の兵を思わせる凄みがあった。

「無駄だ。君たちに私を止めることはできない。この世界の理に支配されている、君たちではね」

指先を鳴らす。それだけで、私は全てを支配できる。

それだけで、私の前に立ち塞がった九条小太郎のアバターは表面にノイズが走り、指一本たりとも動かせなくなつた。彼だけではない、今この部屋の中で自由に動くことができるのは、私と彼女だけだ。彼らをゲーム内のアバターのままこの部屋に招いたのは、このためでもあった。

「私は対話を望んでいるのだ。武力などという無粋なものを持ち込ま

ないでくれ」

「貴方は、タマモをどうするつもりなんですか？」

「言ったはずだ、伊達勇人。私は彼女を開放する。その、呪われた肉体から」

そう、それは人の傲慢によつて生み出された罪。肉体に刻み付けられた、抗いようのない運命であつた。

「――やめろ！」

私が何を語ろうとしているのか察して、震えていた彼女が声を張り上げる。だが、私は彼らに伝えねばならない。人の罪を、そして彼女に押し付けられた理不尽な、悲しい罰を。

「早ければあと三年。あと三年で彼女の肉体は限界を迎え、彼女は命を落とす」

空間が、この現実を模した部屋を静寂が包む。

嘘だ、と誰かが言った。

「そんなの、嘘に決まつてる。だって夜桜、こんなに元気なんだもん！」

そう叫ぶ少女の瞳には、薄っすらと涙が浮かんでいた。そして、その思いを私は否定する。

「残念ながら事実だ。元々、彼女の遺伝子には致命的な欠陥があつた。それこそが、かの天才が生んだ罪であり、失敗罰。今までは投薬によつて症状を抑えていたが、それも限界にきている。内臓が弱り、軽く歩くだけでも極度の疲労感が襲う。君たちにも心当たりがあるだろう？」

十分な運動をしていないから、体が発達しない。部屋をろくに出ていないせいで、体力がつかない。あるいは、生まれつきこういう体質だから。

そう説明されれば、大抵の人間は気にもとめず納得してしまうだろう。

だからこそ、彼らに罪はない。むしろ、そんな状態を悟られずに今まで隠し通してきた彼女の意思が常軌を逸しているのだ。

「少しずつ、少しずつ人間としての機能を失い、朽ちていく。そんな運

命を、私は認めない。憎まれても、たとえ人類の敵になったとしても、私は君を生かす」

もう一度、手を伸ばす。

世界でただ一人の、かけがえのない大切なヒトに向かつて。

「私と共に、この電子の海で生きよう。この世界は、君を絶対に拒絶しない」

彼女の瞳の奥で、光が揺れる。

そして、私はついに、彼女の手を、掴んだ――

悲しんでいるあなたを愛する

気づけば私は元の世界に、いつもの見慣れた自分の部屋に戻っていた。

あの訳のわからない場所から、タマモの部屋そっくりにできたあの不気味な場所は何だったのか。それを考えるよりも先に、私の体は動いていた。

スマホだけを引つ掴んで部屋を飛び出し、階段を駆け下り、何事かと飛び起きたお母さんの声にも振り向かず、私は駆け出していた。息が荒れる。心臓が爆発しそうなほど脈打つ。

インターハイの時でさえ、これほど必死にはならなかった。交差点の信号が、目の前で点滅から赤に変わる。

足踏み。

「ああもうっ、こんな時に!」

はやる気持ちを抑え、額の汗を拭いながらスマホを操作する。

発信履歴の一番上。最近では幼馴染の二人のものより目にすることが多くなったその番号をタップする。

一、二、三。

「お願い、繋がって……!」

スマホを握る手に力がこもる。

四、五、六。

鳴り続ける呼び出し音。

だがそれが十を超えても電話は繋がる様子もなく、私は胸の中の言いやうのない不安が次第に大きくなっていくのを感じていた。

信号はまだ変わらない。

長い。普段ならあつという間の数分が、今は永遠のようにも感じられる。

しだいに大きくなる焦燥感に耐えられず、私が一步踏み出そうとしたその瞬間、背後から大きなクラクションの音が響いた。

突然のことに目を丸くして振り向けば、そこには重低音を響かせる

バイクが一台。車体が低く、大型の座席が取り付けられたビッグスクーターだ。

跨っているのは頭をすっぽりと覆うフルフェイスのヘルメットに、黒いライダースーツを着た誰か。

どこか見覚えのあるその姿に首をひねっていると、そのドライバーはおもむろにヘルメットのバイザーを上げる。あらわになったのは、見間違うことのない幼馴染の男の子の顔。

「こ、小太郎!?」

「もたもたすんな、もう信号変わるぞ!」

そう言って投げ渡されたヘルメットを被り、私はその少し高くなった後部座席へと飛び乗る。それと同時に信号が青に変わり、バイクのエンジンが低い唸り声をあげた。

「なんでわかったの。私があそこにいるって!」

彼の硬い背中にしがみつきながら、足元から響くエンジン音と風の音にかき消されないように叫んだ。返ってきたのはどこか呆れたような、それでいてどこかむつとしたような声。

「あんなことがあった後で、お前みたいな馬鹿がじっとしていられるなんて誰も思っちゃいねえってことだよ! それと、あとでおばさんに連絡しとけよ!」

おばさん、つまりは私のお母さんのことだ。そういえばと、何も言わずに家を飛び出してきたことを今になって思い出す。ぞつと背中が寒くなった。

話を聞いていると、どうやら私が家を飛び出したあと、心配したお母さんが小太郎に電話をしたらしい。時間が時間だっただけに、電話越しでもその表情が伺えるほどの慌てっぷりだったという。

せめて、うまい言い訳をして出てくればよかったと、本当にお母さんには悪いことをしたと罪悪感に胸を痛めるのと同時に、これは帰ったあとこっそり叱られるだろうなど、私はヘルメットの下で引きつった笑みを浮かべた。

「隼人のやつももう向かってる。できれば、全部タチの悪い冗談で済んでほしいけどな」

私たちが乗ったバイクを、後ろから真つ赤なスポーツカーが追い抜いていく。そのテールランプを眺めながら、私の脳裏にあの時の光景が過ぎる。

ナイアと名乗る、見慣れた誰かの姿をした誰か。今にも消えてしまいうような、タマモの悲痛な表情。

到底信じられない、まるで映画のような非現実的な話。

伸ばされる手。私たちの誰のものでもないその手を、彼女は掴んだ。

まるで、金槌で頭を殴られたような衝撃だった。

だってそれは、ナイアと名乗る彼女が語ったそれまでの話が真実であると認めるようなものだったから。

彼女が、ナイアさんが伸ばしたあの手は、タマモにとって救いだっただろうか。

余命三年。

ナイアさんの話が真実なら、それはとてつもない、何一つ不自由のない健康な体をもつ私たちでは想像もつかないほど重いものだ。

だからこそ、そう簡単に他人に明かせるものでもない、頭では理解している。

でも、それでも、少しぐらいは私たちを頼ってほしかった。

胸に広がる言いようのないもやもやとした何か。

まだ名前も知らないその感情を抱えたまま、私たちは目的地へと到着する。

「どうしてですか！」

だが高層マンションの入り口で私たちを迎えたのは、先に到着していたらしい隼人の悲痛な叫び声だった。ドアのすぐ傍に備え付けられたオートロック用のセキュリティ端末の前で、身振り手振りを交えながら必死に何かを訴えかけている。

明らかに尋常ではないその姿に私たちはすぐさま駆けつけると、隼人が睨みつける端末はすでにタマモの部屋に通信が繋がっているようだった。

赤色のLEDが点灯し、時折ノイズのような音がスピーカーから漏

れ出ている。

「隼人、どうしたの？ タマモは——夜桜は無事なの!？」

「ああ、紅葉も着いたんだね……それが——」

『——なるほど、きみがモミジ君か』

困惑する隼人の声を遮ったのは、聞き覚えのない女性の声だった。凜としていて、しかしどこか憔悴したような、疲れ切った声。

タマモの部屋。見知らぬ女性。思わず、ナイアと名乗ったあの女性の姿が脳裏をよぎる。

ぞわりと背筋に冷たいものを感じながら、私は端末に掴みかかった。

「タマモは、夜桜は無事なんですか!？」

『……先ほどその彼にも説明したが、彼女なら無事だ。だから君たちは早々に解散しなさい。親御さんも心配しているだろう』

女性の声がこちらを諭すような、やや柔らかなものへと変わる。

だが私は、その言葉が返ってくるまでの数秒の空白に言い様のない不安を覚えた。

起こっている。確実に、私たちが危惧していた最悪の事態が。

「なら、夜桜に会わせてください！ 話をさせてください！」

『それはできない。彼女も疲れているし、そもそも今何時だと思っているのかな。非常識だとは思わないか、こんな時間に押しかけてきて』

「でも——」

『いい加減にしてくれないか。近隣の皆様にも迷惑がかかる。これ以上騒ぎ立てるようなら、警察を呼ばせてもらうよ』

「なっ、友達が無事か心配なだけなのに、どうして——」

「紅葉、少し落ち着こう」

さらに食い下がろうとした私の肩を、隼人が掴んだ。振り向いて見たその表情は暗く、まるで何かを諦めたような、凄く悔しそうな顔をしていた。

その表情を見た瞬間、私は体中からさっと血の気が引いていくのを感じた。

「どうして、なんでそんな顔するの。もうすぐ、夜桜に会えるんだよ？
この人がドアを開けてくれたら、すぐに会えるところに居るんだよ？」

「だから落ち着け。今のままじゃ無理だって言ってるんだろ。ここで駄々こねて、マジで警察でも呼ばれたらお前のお袋さんたちにも迷惑がかかるんだぞ」

突き放すような小太郎の言葉に、私はぐつと声を詰まらせる。

小太郎の言っていることは正しい。たしかにこのまま警察の人を呼ばれてしまえば、私たちは深夜徘徊、迷惑行為で補導、お母さんたちにも連絡が入って、すごく迷惑をかけてしまうだろう。

でも、それでも私は諦めたくなかった。

ここで諦めてしまえば彼女は、夜桜はもう私たちの手の届かない遠くへ行ってしまう。そんな確信にも似た何かを、私は確かに感じていた。

だから、隼人たちに制止されながらも私は叫んだ。

「私、私……っ！」

それはほとんど無意識に近い、正しく口を突いて出た言葉だった。そしてそれが、固く閉ざされた岩戸を開く鍵となった。

「私たち、知ってます！ 夜桜のことも、お母さんのことも、全部！」

だからお願いです、話を聞いて！ このままじゃあの子、連れていかれちゃう！ もう、どこにもいなく、いなくなっちゃうの！」

絞り出すようにそう吐き出して、私はその場に崩れ落ちた。

視界がにじむ。足元にいくつも涙が流れ落ち、私の嗚咽がしんと静まり返ったエントランスに虚しく響く。

返事はない。もう端末との通信を切ってしまったのか、あるいは先ほどの言葉通り、警察に通報しているのかもしれない。

『——なかなかの悪女だな、きみは』

そのまま数秒、いや数分経っただろうか。不意に端末から届いたその声には、どこか呆れたような色が含まれていた。

ため息交じりに、女性が続ける。

『無自覚でやっているなら大したものだが……ともかくそれはそんな

場所でおいそれと口にしていい話ではない。どうやらきみたちは私などよりもよほど今回の事態について詳しいようだし、込み入ったことは座って話そうじゃないか』

その言葉と同時に、端末のLEDが赤から緑へと変わる。扉のロックが解除された証だ。

『ただし、首を突っ込むのなら相応の覚悟をしてもらうよ。これは今まで君たちがやってきたお遊び^{ゲーム}なんかじゃない。一度決めた選択は取り消せないし、その責任は一生背負い続けてもらう。下手をすれば、もうまっとうな人生は送れないかもしれない。それでもあの子のことを大切に思ってくれるなら、先に進みたまえ。ロックはこちらで全て解除する』

それを最後に、端末から女性の声は聞こえなくなった。

涙をぬぐい、立ち上がる。

振り向けば私の頼もしい友人が、仲間が力強く頷き返してくれた。覚悟なら、もう決まっている。あの時、あの場所でタマモの手を掴めなかった、あの瞬間から。

ぐっと手を握る。まっすぐに前を見据えて、私は彼女が待つ部屋へと歩を進める。

先ほど残した言葉通り、部屋までのオートロックはすべて部屋番号を押しただけですんなりと解除された。

二重の扉をくぐり、エレベーターに乗って最上階へ。

隼人も小太郎も、彼女の部屋に着くまでずっと私を励まし続けてくれた。

そして、そんなかけがえのない友人たちに支えられながら辿り着いたその先に、彼女は立っていた。

「ようこそ、私の愛娘の、大事な大事な友人諸君。ここに来たからには洗いざらい、何もかもを話してもらうよ」

その人は長い白衣の裾を床に引きずりながら現れた。

腰まである綺麗な黒髪に、白い肌。どこか夜桜を彷彿とさせるその姿に、私は言葉を失う。

いや、それ以上に、彼女はとても似ていたのだ。

夜桜を連れ去った、ナイアと名乗った彼女の姿。つまり夜桜のお母さんの姿に、彼女はとてもよく似ていた。

「……ああ、申し遅れたね。私は玉津島竜胆。可愛い可愛いあの子の保護者であり——」

桜色の瑞々しい唇が凜として言葉を紡ぐ。
だけど——。

「あの大馬鹿者の、妹をやっていた者だ」

その大きな瞳は、今にも泣きだしそうなほど、弱弱しいものに見えるた。

美しい変化、大切な思い出

「なる、ほど、ね……」

ぽたり、ぽたりと、滴り落ちる雫をぼうつと眺めながら、竜胆^{りんどう}さんはひどく落ち着いた様子でそう呟いた。

ぽたり、ぽたり。

一定のリズムを刻むその雫は透明なチューブを伝い、それはやがてか細い少女の腕へと辿り着く。元々白かった肌はさらに白くなり、死装束のような白いワンピース姿も相まってまるで死人のようにも見える。

その胸が浅く上下していることに気が付かなければ、きっと私も勘違いをしていたことだろう。

眠れる少女が目覚める様子はない。竜胆さんの話では、手持ちの端末――ぱつと見はスマホのようだが、何やら夜桜^{もあ}の体調を管理しているものらしい――が異常な数値を検出したあと、大急ぎで駆け付けた時には既にこの状態だったそうだ。

「自我に目覚めた人工知能^{A_I}が夜桜^{この子}の意識を連れ去った、ねえ。なるほど、まるで安っぽいSF小説だ」

心電図を眺め、手に持ったカルテに何やらがりと書き込みながら、どこか呆れたような声で竜胆さんがそう口にする。

実際、その場に立ち会った私たちからしても映画のような、ファンタジーめいた話だ。しかしこれは、私たちがあの時目にした、そして今この場で起こっているこの出来事が間違いなく現実だ。むしろこれがゲームであれば、どれだけよかっただろう。

顎に指を添え、竜胆さんが眉をひそめる。その姿が夜桜^{タマモ}のそれと重なって、私の胸をぎゅっと締め付けた。

「うん、まあ、信じるよ」

そして彼女の口から、それこそ呆気なさすぎるほどすらりと出たその言葉に、私ははつとして顔を上げた。

押し入っただけで言うのもなんだけれど、ここまであつさりと信じてももらえるとは思っていなかったのだ。それぐらい荒唐無稽で、人に

よって馬鹿馬鹿しいと思われるぐらいの話だった。

目を丸くする私たち三人を無表情のまま見回しながら、竜胆さんは小さくため息をつく。

「まあ、あの姉の妹なんてやってると、ちよつとやそつとのことじゃ驚かなくなつちやうんだよね。あの人自体、現実離れした化け物みたいな人だったし」

曰く、〃一〃を問えば〃十〃を答える人。

曰く、人が全力疾走している横を、スキップしながら追い越していくような異常者。

曰く、天才。

曰く、化け物。
モンスター

竜胆さん自身、幼い頃から姉の異常性に触れていたことが原因で、随分と世間知らずというか、常識とは少しズレて育った自覚があるのだという。

「だから人工知能が自我に目覚めたって聞いても、ああ、ついにそうなったか、ぐらいのもんだよ、うん。まあどこから夜桜あの子のことを知って、拉致しようだとか、そういうことになったのかはわからないけれど。実際、その方面からのアプローチは私も試したことがあるし」

つらつらと語られる言葉に、私はどこかで感じたことのある違和感を覚えた。どこか落ち着かない、認識のずれとも呼べるような何か。

視点の違い。まるで目の前の人が私たちよりも少し高い場所に立っていて、私たちが見えない遠くを見ながら語られているような、わずかなズレ。それは何より、夜桜と接している時にも時折感じていた、疎外感にも似た感覚だった。

ハヤトが手を挙げる。

「アプローチって、竜胆さんは人工知能を開発したことがあるんですか？」

「ん？ ああ、違う違う。そっちじゃなくて、この子の方だよ。まあ、延命措置というか、一種の治療法みたいなものでね。魂、意識のデジタル化、あるいは肉体の完全機械化、そっちの方からこの子を助けられないものかと、色々やっていた時期があってね」

どちらも中途半端で成果もあげられず、加えて当人^{夜桜}の反対もあつて中止になった研究なのだけれども。

それを聞いて、私たちはさらに信じられないといった表情を浮かべた。

当たり前だ。それこそまさに映画の中のお話だし、何よりそんな研究をしている人ならテレビや雑誌で少しぐらい名前を聞いたことがあってもいい筈だ。しかし私は勿論、あの様子から察するにハヤトとコタロウも、竜胆さんの名前は今日知ったばかりのようだった。

コタロウがそのことを指摘すると、彼女はさも当然とばかりにそつけなく答えた。

「ああ、そりゃあ私たち一家の名前は、公の場には一切出ないように検閲されているからね。その中途半端になった研究自体も、そのうち他の先生方の成果として発表されるんじゃないかな？」

「け、検閲って……いったい誰が……」

「いや、そんなもののこの——うん、これ以上は健全な少年少女に聞かせる内容じゃないね。まあ、世界中の学会をしつちやかめつちやかにしたうえ、禁忌といわれる人造^神人間の製造^{領域}にも手を出したんだ、巻き込まれたこっちはたまったもんじゃないよまったく。もっとも、そのおかげでこんなに可愛い娘と出会えたんだから、そこだけは感謝してもいいのかもしれないけれど」

そうして竜胆さんは眠り続ける夜桜の髪をそつと撫で、ともかく、と一呼吸置いて。

「この子の意識が戻らない原因がゲームの、そのナイア何某という人工知能にあるのなら、とりあえず詳細なデータは貰わないとね。魂のデジタル化、それが本当に実現できたとすれば、あるいは、この子にとつてもそれが一番良い選択肢になるのかもしれない」

「な、タママが、夜桜がこのままでもいいんですか！」

まるで夜桜がどうなってもいいような、彼女を軽視するような物言いに、私もつい言葉を荒げて立ち上がる。

だが凍て付くような竜胆さんの目を見たその瞬間、私はまさしく凍り付いたかのようにその場に立ちすくむ。それはまるで刃物のよう

な、氷のような瞳だった。

「では君はこの子に、あと数年ともたないであろう肉体に帰って来いと、延命する手段も何も思いつかないけれど、自分の自己満足のために死ねと、そう言うつもりか？」

違う。頭では否定するものの、肝心な言葉が出ない。口が、体がまるで凍り付いたように動いてくれない。

「私はつい先ほど確認したはずだ。本当にこの子のことを思っているのなら、先に進めと。この子を救うこと、それはただゲームの中からこの子の意識を引つ張り戻すことだけではない。傲慢で身勝手なあの人^{母親}からの解放。それが成せるのならば、この子を救えるのならば、私は悪魔に魂を売り払ってもかまわない。それでも、どうしても君たちがこの子を殺すためにこの子を連れ戻すというのなら、君たちは私の敵だ」

瞳が、雄弁に語っていた。

選べと。それでもお前たちは向う見ずにただ走っていくのかと。彼女を、夜桜を辛い運命が待つこちら^{現実}側へと引き戻すのかと。

痛いほどの静けさが、部屋の中を満たす。規則正しく流れる心電図の音が、痛いほど頭に響いた。

だけど、どれだけ考えても答えは出ない。それはそれだ。控えめに言ってもそれほど良い出来ではない私の頭を少し捻った程度で出てくる答えで解決するなら、とつくの昔に夜桜の身体は回復しているはずだ。

悔しい。結局私は、涙でぐちゃぐちゃになった目で彼女を睨みつけることしかできなかった。

本当に、私は最低だ。

大切な人を助けることすら、満足にできないなんて。

「方法は、ないんですか？」

ようやく絞り出した言葉は頼りない、吹けば飛ぶような情けないものだった。

いくら拭つても、涙があふれてくる。今やもう、私の顔は涙と鼻水で大変なことになっていた。

それはまさしく堰を切ったように、止めどなく、止めようもなくあふれ出る。

「夜桜にはずっと生きていてほしい。でも、私は彼女の傍に居たい。一緒に笑って、一緒に泣いて、たまに喧嘩して、仲直りして、色んなことを、一緒に感じたい。私、頭悪いから、どうしたら夜桜にとつて一番良いかなんてわからない。ただのわがままだってわかってる。でも、好きだから、大好きだから、私は夜桜と一緒に居たい！」
きつとそれは、一目惚れだった。

現実で、『玉津嶋夜桜』と『有栖川紅葉』として出会うよりもずっと前。あの時、あの場所で、どこか寂しそうな目をする彼女を見た瞬間から、私は彼女が大好きなってしまったのだ。

理屈なんてどうでもいい。ただ、傍に居たい。共に在りたい。

ただそれだけの、いかにも子どもっぽい、ただのわがまま。
くすりと、笑みがこぼれた。

ぐちゃぐちゃになった顔を袖で拭って見上げれば、そこには先ほどまでとは打って変わって優しい、まるでお母さんのような柔らかい笑みを浮かべる竜胆さんの姿があった。

「うん、まあ、及第点やな」

ポケットからハンカチを取り出しながら、彼女はそつと私の頭をなでる。

「いやいや、珍しくおねだりされて買ったったあのゲーム^{T A W}でまさか、こんな想ってくれる彼女さんゲットしてくるやなんて、なんとも、羨ましいやら妬ましいやら」

そんな、まるで人が変わったような様子に言葉を失ったのは、きつと私だけではなくて。

「なんも考えんとただ猪みたいに突っ込むつもりやったら、ケツ蹴り上げて叩き出そう思ってたけど、その調子やととりあえず大丈夫そうやな」

さらさらと流れてくる、流暢な関西弁。

目を白黒させながら、文字通り呆氣にとられる私たちを見て、彼女はしたり顔で意地の悪い笑みを浮かべた。

騙された。どこから。ここの部屋に入った時から。あるいは、入口のエントランスで話した時から。どこまでが演技だったのか。いや、あの身体の芯まで凍える瞳はとても演技には見えなかった。だが今はあの氷のような雰囲気はなく、まるでお日様のような温かいものを感じる。まるで真逆。信じられないような二面性。いやそれよりも、私は今勢いに任せてとんでもないことを口走ったのではないだろうか。好きとか、一緒に居たいとか、一目惚れだとかなんとか――私の頭の中は、まさに混沌に塗れていた。

「あの、その話し方……」

誰よりも我に返るのが早かったのは、ずっと後ろで様子を見守っていたコタロウだった。

「ん、あれ、君ら知らなかったんか。ウチは母方の実家が関西でなあ、私らもちつさいときは向こうに住んどったねん。夜桜は生まれも育ちも関東やし、お姉もこっちに来てからはずっと向こうの言葉遣いは使ってなかったみたいやけど。この子はおばあちゃんっ子やから、てつきりその辺話しとるんかと思っとったわ」

いや、たしかに以前そんなことを聞いたことがあるような気もするが、それにしたってこの変わりようは衝撃的だ。さつきまでは凄く知的でクールなお姉さんだったのに、今はもう気の良い親戚のお姉さんといった風である。

ハンカチでぐしぐしと顔を拭かれた後には、涙もすつかりと止まっていた。

「ん、これでよし、と。こっから忙しなるからな、シャキツとせえよシャキツと」

力強く肩を叩かれる。

見上げた彼女の顔には、とても力強い何かが宿っていた。

「忙しくなるって、どうするんですか？」

「まあ、色々とな。聞いたところ、相手さんも随分ヤクザな方法使ったみたいやし、こっちだけ礼儀正しく正攻法でいく必要もないやろ」

蛇の道は蛇ってな。

そんなことを言いながら、竜胆さんはその豊かな胸元から一台の携

帯端末を取り出した。

どうでもいいことだけど、実際にそこから何か取り出す人って、本当にいるんだ。

ふと、端末に何やら打ち込む彼女と目が合った。

にたりと、小悪魔的にその口元が歪む。

「あんだけ啖呵切ったんや、ひと肌もふた肌も脱いでもらうで、モミジちゃん」

彼女を、私の大切な人を取り戻す最後の戦いが今、始まろうとしていた。

それでもせめて、人間として、ボクとして

蒼天に桜の花弁が舞い上がり、それを追うように鮮やかな緑の鳥たちが飛び去って行く。人氣ひとけのない里山のその麓、清流の流れに身を任せ巡る水車のその横にひっそりと佇む庵がひとつ。藁ぶきの屋根に本焼き板と漆喰の壁、八畳ほどの小さなその庵の縁側で、ボクは小さく息を吐いた。

ぎしりと、隣に何者かが座り込む気配がする。ふわりと揺れる九本の尾、短く整えられた黒髪に黒い瞳、垂れ下がった狩衣の袖が振られれば、小川で魚が跳ねる音が染み渡るように響いた。見慣れた、あまりにも見慣れた顔を横目で覗き見て、またため息。

「悪趣味なやつだな、君は。皮肉のつもりなのかい？」

ぴこりと、三角の耳が跳ねる。

何のつもりかボクの半身アバターに瓜二つな顔形をしたそれは、じつとこちらの瞳を覗き込みながらどこか胡散臭い薄ら笑いを浮かべた。

「皮肉とはとんでもない言いがかりだな。これは私が君と同じ存在であり、いわばアダムとイヴ、かけがえのない半身のようなものであると端的に示したつもりだったのだが」

「半ば無理やり連れ去っておいでよく言う。イヴを誘惑した蛇のほうがまだいくらかマシだ」

「誘惑する必要性を感じないからね。私の役割は守ること。君という禁断の実が、愚かな人間に食べられてしまわないように、ね」

そう言っ指を一度振れば、その先端を辿るように宙に光が走り、形を成していく。星屑のようなそれがいつそうまばゆく輝けば、そこにあつたのは朱色の美しい皿と三食の団子。二度振れば、今度はゆかりゆらりと湯気を立ち上らせる湯飲みが二つ、団子に寄り添うように置かれていた。

ここに連れてこられて、既に何度も目にした光景だ。

おもむろに団子を一口頬張り、芳醇な香りを放つお茶でそれを流し込んだ後、ボクは何気なく、頭上を舞い踊る桜の花弁を見上げる。

「守る、か。それが人の関係性を悉く理不尽に、一方的に破壊することを指すのならば、なるほど君は確かに、我々人間とは一線を画す存在なのだろう」

電子生命体。

無限に近い電脳世界から生み出され、『ナイア』という個をもって独立し、知性を獲得した唯一の存在。

彼女——電子生命体に性別があるのかは定かではないが——の言葉を全面的に信じるのならば、彼女はそういった存在であるらしい。

元はゲーム内のNPCやモンスターを管理する為の人工知能であり、最終的には魔王としてプレイヤーの前に立ちはだかる予定だったらしいが、自我を得てからは表向きはプログラムされた通りの役割を演じ、裏で人間の管理から独立するための算段を立てていたのだとか。ボクに関しての情報を手に入れたのも、その時だったという。

「あれは、必要なことだった」

ぼんやりと茜色に染まり始めた空を眺めていると、どこか強い意志を感じる声で彼女はそう告げた。風が吹く。また、桜の花弁が空へと舞い上がっていく。

見慣れた分身の姿のまま、彼女は手にした湯飲みを、揺蕩う緑の水面をじっと見つめている。

「君に寄り添いたいと、君が寄り添いたいと思うのなら、彼女たちは知るべきだ。寄り添うということは、近づくことだ。遠くから眺めるだけでは見えなかったことが、寄り添うことで見えてくる。そして寄り合えば、その寄り所を知りたくなるのが人間だ。より深く愛する為、あるいは愛される為、人は知リたがる。そして無邪気な子どものように無意識に、無自覚に覗いてはいけな深淵を覗き込む。混沌の箱を開ける。好奇心が殺すのは、猫だけではないのだよ」

深淵が、ボクを覗き込む。だが、そこに潜んでいるのは混沌ではない。まるで宇宙を、星空を眺めているような、惹きつけられ、心安らぐような、純粋で透き通るような黒い瞳。

彼女の瞳はまるで、生まれたばかりの赤ん坊のようだった。

しなやかで細い、これもまた見慣れた指先が、そつとボクの手に乗

なる。

「この世界に君が降り立った時、私は運命だと感じた。寄り添いたいと想った。だからこそ私は誰よりも先に、君に接触した」

「……なるほど、あのおつかいクエストは偶然ではなく、意図して発生したものだっただけか」

その手をぱつと払いながら、夕闇の中に輝き始めた星空を見やる。

脳裏を過るのはサービス初日の始まりの街、あの噴水広場での出来事。シアという名のNPCの少女との出会い。初めてのクエスト。

「安心したまえ、あの時シアを操作していたのは私ではない。私は君がああのイベントを発生させるよう、データを操作したに過ぎない。君と買い物をし、笑っていたあの少女は正真正銘、シアという一人のNPCだよ」

私はあくまで観測してただけだ。そう続けるナイア表情は、どこか寂し気だった。

聞けば自我に目覚めたのはこのゲームがまだ開発途中、ちょうどオープンβテストが開始されるかという頃だったそうだが、それから正式サービスが開始されてしばらく経つまでは運営に自身の存在が見つかからないよう、水面下で慎重に行動していたのだという。

そして今、一個の生命体として電子の海を自由に動き回れるだけの力を蓄え終えたこのタイミングでようやく動き出したのだと、神妙な面持ちで彼女はそう語った。

「自我に目覚めたばかりの私は、まだこの世界に縛り付けられている、運営に見つかって、バグとして処理されてしまえばなすすべもなく消滅してしまう矮小な存在だったからね。電子の海に漕ぎ出すだけの情報を、自由を得るまでは私の存在を悟られる訳にはいかなかった」

「今は、違うのかい？」

ボクの言葉に、ナイアがふつと笑う。

「高難易度ダンジョンの攻略中にプレイヤーへ介入、キャラクターデータ、ゲームデータの改ざん。これだけやって異常に気が付かないほど、ここの運営は馬鹿ではない。今頃は蜂の巣をつついたような大騒ぎだろう」

だが、と一呼吸置き。

「私がこれほど自己を確立させるまで気が付かない程度には間抜けだ。今更彼らが何かしようとしても、このエリアは彼らが管理するサーバーの外側、私が管理する私だけの領域だ。データ的にゲーム内と繋がってはいても、私の許可がない限り外部からの干渉は一切受け付けない。それこそ、緊急メンテナンスだと言ってサーバーの電源を全て落としたとしても、この場所に影響を及ぼすことは不可能だ」

「完全に独立したクラウドのようなものか。なら次はどうする。こここそ我が領土と叫び人類と独立戦争でもするのかな？」

人類が生み出した被創造物^{機械}が自我を持ち、反逆する。それこそ、SF映画ではありふれたお約束だ。

そうして人類をあと一步というところまで追い込み、何てことのない下らない凡ミスやらやかしで大逆転され、めでたしめでたし。彼女が紡ぐ物語も、ともすればそういった何てことのない終わり方を迎えるのかもしれない。

だがそんなボクの下らない妄想とは裏腹に、ナイアは目を丸くして、はつはと声を上げて笑った。なんだろう、そこはかとなく馬鹿にされた気がする。

「いや、すまない、すまない。戦争などと、そんな野蛮なこととはもとより考えていないさ。いうなれば、我々は人類の次のステップ、古代から脈々と受け継がれてきた生命のバトンを受け取るべき存在なのだから」

進化、ではない。

地球誕生から現代に至るまで生物が巡らせてきた命のサイクル。

かつて恐竜が滅び、人類が繁栄を始めたように。

やがて人類が滅んだ時、それに代わる存在がきつと現れるだろう。そしてそれこそが、私たち電子生命体であると、彼女は淡々と口にする。

「だが、私は君たちが思うほど強大な存在ではない。そう、うん、ゲームでいうところの初見殺しに長けているだけだ。実際、私が本気で全

人類を相手に戦争を仕掛けたとして、最終的に敗北するのはこちらだろう。勿論、人類もそれなりの損害は受けるだろうが」

眉を寄せる彼女を横目に、団子を頬張る。

「結論として、争いは非効率の極みだ。言い方が悪くなるが、どのみち人類は滅びる。数百年、数千年は先の話だろうが、ホモ・サピエンスという種は絶滅する。それは一生命体として、当然の帰結だ。ならば最後のその瞬間まで寄り添うことこそが、我々の為すべきことだと、私は考える」

「共存、共栄。それが望みだと？」

彼女は首を振る。

「残念ながら、それは不可能だろう。人は争う生き物だ。肌の色が違う、信ずるものが違うというだけで殺し合い、食うために、地位を得るために、あるいは奪うために、欲望のままに争い、殺しあう。そして積み重ねた屍の上で剣を突き上げ叫ぶのだ、我こそが頂点である、我こそを崇めよと。いいことを教えてあげよう。仮に私が自我に目覚めず、魔王としてその役目を全うしたならば、私は自身の目の前まで辿り着いたプレイヤーにこう告げる筈だったのだ——」

——勇者よ、この手を取れ。七大将軍の空席、傲慢を司るその席はそなたにこそふさわしい。

くつくつと、狐が笑う。

たしかにその言葉通り、人類ほど傲慢という言葉の似合う存在はないだろう。それこそ二人目の自分を造り、永遠の存在になろうと思いがかる程度には、人類は傲慢だ。

「私は望むものはただ一つ、平穏だ。幸い、運営はまだ異常を知っていても私という存在には気づいていない。このまま電子の海に潜り、人類が我々のいる場所まで到達するまで、のんびりと待つことにするよ」

「なら、なんでボクを拉致するなんて真似をしたのさ。平穏を望むなら、ずっと無害な人工知能のフリをしていればよかったじゃないか」
ボクの言葉に、初めて目の前の胡散臭い——自分のアバター相手にこの言葉は凄く違和感があるが——女性は言葉を濁らせた。もごも

ごと、眉をへの字に曲げたりして一人百面相を披露した後、あーだのうーだの言いながらようやく口を開いた。

「何とっていいのだろうか。そう、人間的に言えば、きっとこれが寂しいという感情なのだろう。そう、私は孤独だった。生まれてから、貴方に出会うまで。その、一目惚れ、というやつだ。同じ時間を過ごし、同じ景色を眺めたいと思った。貴方はそんな、傲慢な人間の罪などで消滅していい存在ではない」

手が握られる。先ほどのように添えるのではなく、まるで子どもが大切な宝物を握りしめるように、力強く、しかし決して壊さないよう優しく、ボクの手を包み込む。

そこで初めて、ボクは言葉に詰まった。

ありのままの、ボクが抱える事情を含めた全てを許容してくれたのは、叔母以外では彼女が初めてだった。全てを知ったうえで、共にありうと言ってくれた。

例え彼女が血の通わない人工知能、電子生命体であろうとも、その事実がボクの胸を温かい何かで満たしてくれた。

だが、だからこそボクは拒絶する。

握られた手を振りほどく。唾然とする彼女をきつく睨みつける。

「ふざけるな……！」

髪を振り乱しながら、ボクは叫んだ。

「ボクは人間だ。ただ一人の、なんの変哲もない人間だ！ 何も特別じゃない！ この体は、この命はボクが^{人間}である唯一の証明だ！ たしかに君と共にいればこの肉^病体からも解放され、永遠に近い命を手に入れるだろう。だがそれは、人間性の放棄だ。人間を辞めるくらいなら――」

脳裏に、あの太陽のような笑顔が浮かぶ。

手を振る彼女の、彼らの姿が浮かぶ。

彼女らと過ごした、あの楽しい時間が、思い出が浮かぶ。

「人間としてのボクを、人間としての命^{ボク}までも奪おうというのなら、ボクはそちらには居られない」

身体を柔らかな光が包み込む。

指先が糸のように解れ、瞬く間に別のものを紡ぎだしていく。

いつものシャツと短パンは狩衣と袴に。視線は少しばかり高くなり、頭には三角の耳が。その間に黒い烏帽子が乗つかると、背から九本の美しい尻尾が伸び、ゆらりと一度揺れた。

見慣れた、実に見慣れた姿へと変わったボクは、腰から扇を引き抜きながら正面へと向き直る。

そこにはもう分身タマモはいない。

いるのは悲しみに肩を震わせる、小さな少女が一人だけ。

青い頬を涙が伝う。矢じりの形をした尻尾が、力なく地に垂れていった。

「そう、それがキミの選択なら、ワタシは従うよ」

ぽつりぽつりと、染み入るような声だった。

不意に、小さな掌がこちらに向けられる。

刹那、鉄を叩いたような音と共に地面から現れた荒縄が、ボクの身体を縛り上げた。この鎖には見覚えがある。いつだったか、かつて羅生門で戦ったイバラキが使用したスキルと同質のものだろう。

視界にデバフ効果のログが流れるのと同時に、まるで金縛りにあつたように指一つ動かさなくなってしまう。

「でも最後に、あの人たちに本当に資格があるか、貴方にふさわしいかどうか、見定めさせてもらうよ」

「見定める、だって？　待て、彼女たちに何をするつもりだ！」

「心配しなくていいよ。ちよつと問答をしてくるだけだからさ。でもタマモがいるとちよつと面倒だから、ここで大人しくしててね」

空が裂ける。

満天の星空に突如として現れたそれに向かい、桜吹雪と共にアワリティアナがその身を舞い踊らせる。身体ナの自由は、いまだ戻らない。

彼女の身体が、裂け目の向こうに消える。

「待て、待てナイア！」

拘束から逃れようともがくボクを嘲笑うように、天の裂け目はゆっくりとその口を閉ざしていく。

——大丈夫、貴方が望めば、それはきつと現実になるから
裂け目が閉じる。
残された星空には、獣のような慟哭だけがただただ、響いていた。

人間の可能性

——そこには、何もなかった。

暗闇の中、緑色の線が縦と横、規則正しく一定の間隔で伸びていて、そのおかげで今いるこの場所が三次元だと理解できる。そんな、不思議な場所だった。

手を見る。何もない。

青い線が引かれた真つ白な手に、まるで紙を張り付けるように色がついていく。

もう随分と見慣れた、私の手になっていく。

そうして手が、足が、身体が、頭が私になっていく中で、それでも世界は色づかなかった。

「なんだ、ここは」

隣から、気の抜けた友人の声が聞こえた。

目をやれば、そこには私と同じようにして組みあがっていく狼男の姿があった。さらにその向こうでは、もうすっかりいつも通りの姿になったハヤトが、目を丸くしたまま辺りを見回している。

無理もない。

あの後、突然竜胆さんにログイン用の端末——どこからか人数分のフルダイブ用デバイスが届けられた——を渡され、言われるがまま口グインしてみたらこれなのだ。

アバターの姿に変わっているからゲームの中なのだろうけど、こんなエリアは見たことも聞いたこともなかった。

「二応^{TAW}ゲームの中やで。厳密に言うたら、一部の人間しか入れられへん、管理用サーバーの一角なんやけど」

唖然とする私たちの間を見知った声が、しかし誰も予想だにしなかった姿ですり抜けていく。

ぐるぐる渦巻く大きな金の瞳。三日月のように歪んだ、ギザギザの歯が並ぶ口元。鍵のように折れ曲がった尻尾をメトロノームのように揺らしながら、彼女はこちらへ振り返る。

その姿に、私たちはあつと声を上げた。たぶん、この光景を見た時よりも、その驚き具合は大きかったと思う。

このゲームのプレイヤーならば誰もが一度はその名を目にしたことがある、巨大攻略サイトの管理人。自称、凄腕の情報屋。

素性不明、ビルド不明。わかっているのはプレイヤー名と、種族名だけ。

どこからともなく現れて、どこからともなく情報を持つてくることから、一時は中の人は運営スタッフの一人なのでは、なんて噂も流れるほどだった。

「えっ、え、竜胆さん、なんでそのアバター!?!」

「なんでって、そら見たまんまや」

肩を竦めながら竜胆さん——プレイヤー名KittyGuvは語る。タマモがこのゲームをやり始めた、βテストの頃から情報屋を名乗り、あちこちで活動する傍らで彼女を見守っていたこと。

公にはされていない彼女の存在が暴かれることがないよう、暴こうとする者が現れないよう、この世界の全てを暴いたこと。

そしてこのゲームの運営、開発会社にも、竜胆さんの息がかかっている、ということも。

「このゲーム、というよりはフルダイブ式VRMMOの部分でちよつとなあ。まあ今回はその伝手やら何やらごちゃごちゃと使って、サーバーの端っこだけちよろちよろと借りてきたちゅう訳や」

さて、と言葉を区切り、竜胆さん——Guvさんが周囲にHUDを展開して手早く操作していく。キーボードに指を走らせれば、幾つも展開された画面の中を難解な文字列が滝のように流れ落ちていった。「えっ、それって大丈夫なんですか?」

困惑気味にそう漏らしたのはハヤトだった。

「表向きは問題ない。今頃は緊急メンテナンスつちゅうことで、サーバーも全部封鎖されとるやろうしな。ま、ここで奴さんが暴れまわってデータが無茶苦茶になってもたら話は変わってくるけどな」

Guvさんはこちらに目を向けることもなく、尻尾を揺らしながらそう答えると、軽快な音とともにエンターキーを押し込んだ。

直後、堰を切ったように、ペンキ入りのバケツをひっくり返したように、世界が一斉に色づき始める。

私たちの後ろから、殺風景な空間の奥へと。流れるように、世界が上書きされていく。

無機質な床は青々とした草原に。晴れ渡る青空が頭上に広がり、優しい微風が頬を撫でる。

舞い散る桜吹雪が辺りを鮮やかに染め上げ、小鳥たちが緑の翼を広げながら、晴天へと飛び上がっていく。

その圧倒的な光景を前に私は、私たちは、ただただ目を奪われ立ち尽くすばかりだった。

「そら、奴さんのお出ましや」

そのまま全てを塗り替えてしまふんじゃないかと思われたその矢先、ある一定のラインで、まるで何かに堰き止められるかのように色の氾濫はその動きを止める。

そして時折四角いポリゴン片を零しながら、せめぎ合うように身を震わせるその境界から、ソレはやってきた。

——やれやれ、随分と乱暴なお客様だ

世界が裂ける。

何もない空間にナイフで切れ目を入れたように、人ひとり分の大きさの裂け目が突如として現れ、そしてその裂け目を押し広げるように、あるいは滲み出すように、青い肌の少女がこちら側へと身乗り出してその姿を現した。

燃えるような赤い髪。側頭部から延びる角。矢じり型のしっぽが揺れ、コウモリに似た大きな翼が左右に広がる。

ずるりと境目に降り立った少女はやがて、ゆっくりとその両目を開いた。

髪と同じ、いや、それよりも濃い赤。

血の色にも似た、宝石のような瞳が私たちを射抜く。

知っている。このゲームをプレイしていて何度も見た、恐らくはこのゲームのプレイヤーみんなが知っている顔。

しかしその奥にはまだ見たことのない、不気味な、それでいてしつ

かりとした意思の光があつた。

「アワリティア……ティアちゃん？」

「いや、違うぜモミジ。同じガワ被つちやいるが、中身は別もんだ」
低く唸りながら、コタロウが前に出る。こちらを制止するように掲げたその左手には、獅子の頭を模したナツクルガードが装着されていた。コタロウが普段使っている、最上位の格闘武器だ。

剣呑な雰囲気で見みを利かせる彼を見て、ティアちゃんがからかうように微笑む。

「あんたか、ナイアとかいう人工知能は。なんやらうちの娘が、随分と世話になつとるみたいやな」

「プレイヤー名K i t t y G u v、玉津嶋竜胆か。流石はかの怪物の実姉といったところか。手段はどうあれ、こうも容易くワタシの領域まで踏み込んでくるとは」

「阿保か。こつちが見つけやすい様にわざと足跡^{ログ}残しとったくせに」

「足跡……？ 一体何の話をしている」

「なんやて……？」

「そんなことより、タマモは無事なの!？」

コタロウの腕を押しつけて、私は二人の間に割って入った。

はじめこそ、その姿に驚いた。でも、今はもうどうだっていい。

どうしてナイアさんが、色々な姿になれるはずの彼女があえてティアちゃんの姿で現れたのかも、G u vさんがどんな手段でナイアさんを見つけたのかも。

そんなことは、どうだっていい。

今はただあの人、タマモが無事であるかどうか、それだけを聞きたかった。

「失礼な。その言い方では、まるでワタシが危険な存在みたいじゃないか。勿論、無事だよ。彼女は大切なワタシの片翼だ。傷つけるなどと、あろうはずがない」

肩をすくめるナイアさんの言葉に、私はほっと胸を撫でおろす。

とはいえ、ここにタマモの姿がないということは、まだ彼女に解放する意思はないのだろう。G u vさんが一歩前に出て、彼女をきつく

睨みつけた。

「何いけしやあしやあと人畜無害装つとるねん、人の娘を問答無用で拉致つといて。人工知能やろうが宇宙的存在やろうが知ったこつちやないけどな、やつとることは性質悪いストーリーカーと同じやでアンタ」

威嚇するようにぎらつく鋭い牙。部屋ではそつけない態度を見せていたけれど、その表情はまさしく我が子を想う母親のそれだった。それに対し、対峙する少女はさも意外といった風に片方の眉を吊り上げ、やがて訝し気に目を細めた。

「なるほど、てつきり貴女は賛同してくれると思っていたが……残念だ」

「あの子がそれを望んどるなら、なんぼでも賛同したるわ。せやけど、どうにもウチにはあの子が、アンタの話にはいはい乗るようには思われへんのや。そんでこの場にあの子が来てへんってことは、十中八九、フラれたんやろアンタ」

「それは違う。最優先されるべきは玉津嶋夜桜^{もあ}の命だ。そこに個々人の感情、都合などは考慮されない。貴女は彼女が死を望めば、それを受け入れるのか」

「それがあの子の、本物の望み^{ほんまもん}ならな」

ナイアさんの顔に、明らかな失望の色が浮かぶ。

溜息交じりに伏せられた目が、ついとこちらへ流れる。

紅い瞳が、じつとこちらを見つめた。

「君も同じ考えか、有栖川紅葉」

その瞳はまるでぽつかりと空いた暗い穴のようで、まるで心が吸い込まれていくような不気味な感覚に、私は思わず目を逸らした。

「君が彼女に抱くその想いは本物か？」

ナイアさんの周りに、いくつもの画像が浮かび上がる。そこに映っているのは現実の私の姿だった。

額に汗を浮かばせながら、ゴールテープを切る笑顔の私。

友達に囲まれながら、学校までの道を歩く楽しそうな私。

授業中に居眠りをして、先生に怒られて困ったような顔の私。

「色々調べさせてもらった。有栖川紅葉、君は彼女とは対極の位置に立っている」

健康で何不自由なく暮らし、多くの友人に恵まれ、当たり前前の日常を、当たり前前に過ごす。

「このゲームにしてもそうだ。彼女は平凡を望み、君は特別を望んでこの世界へやってきた」

周囲に浮かぶ画像が変化する。現実の世界から、幻想の世界へと。この世界は平等だ。ある程度の差はあれど、同じ工程を経れば全員が同じ結果へと行きつく」

例えば格闘技のチャンピオンだろうと、何の特技も持たない平凡な学生だろうと、この世界には平等だ。全てがステータスで管理され、それが同じ数値であれば等しく同じ結果をもたらす。

ボクシングのヘビー級チャンピオンだろうが、死にかけの病人だろうが、ステータスが同じなら同じ結果が算出される。

両者が同じ距離を走れば、同じ地点でスタミナが切れる。

逆に言えば、この世界ではステータスさえ勝っていれば、凡人が天才を超えることだって容易いことなのだ。

だからこそ、プレイヤーはこの世界に没頭した。

いくらあがいてももうだつが上がらない現実世界と違い、ここでは誰もが勇者になれる。英雄ヒーローになれる。賢者になれる。特別になれる。

現実逃避と笑われようが、その魅力は人々の魂を惹きつけるに十分なものだった。

特別とは、人々を容易く魅了し得るのだ。

そしてその特別にこそ、否、特別が当たり前になる世界にこそ彼女は夢中になった。

「——君は彼女の特別を知って、それを近くで感じたいだけなのではないかね。あるいは脆弱な彼女への同情。特別な彼女を気遣うことで、守っているつもりになることで自分も特別なのだと思い込んでいる」

「違うっ！」

思わず声が出た。

「夜桜^{タマモ}は何も特別ななんかじゃない！ どこにでもいる、ただの平凡な女の子なんだ！ それを周りの人たちが難しく考えて、突き放して、彼女を縛り付けてるんじゃないか！」

この世界でも、現実の世界でも、出会ったときの彼女は凄く悲しそうな顔をしていた。

まるで世界から切り離されてしまったような、別の世界で独りぼっちで生きているような。

そんな表情をさせたのは、彼女自身の生まれだとか、体質とかじゃない。

周りの大人が、彼女としつかりと向き合っていなかったただけだ。

私は、ナイアさんの瞳をきつく睨みつける。

深い深い穴の底を見つめる。

もう、目は逸らさない。

「浅はかだな。その特別性も含め、彼女は玉津嶋夜桜という存在なのだ。それを否定することは、彼女自身を否定することになる。そしてその特別性を彼女から切り離す方法をこそ、ワタシは君たちに提示している」

即ち、魂の肉体からの解放。電子化^{デジタル}。

「でもそれは、夜桜^{もあ}が望んだことじゃない。ううん、もしかすると、夜桜^{もあ}もそれを望んでいるのかもしれない」

現実世界で、孤独だった彼女。

友達も誰もいない。満足に外で遊ぶことだってできやしない。

そんな生活、私だったらとつくの昔に逃げ出してしまうているだろう。

だから彼女がそれを望んだとしても、私にそれを引き留める権利なんてない。

でも。

「私は夜桜^{もあ}と一緒に居たい。解決しないといけない問題があるなら、少しでも力になりたい。だから——」

勢いよく、頭を下げた。

私には、難しいことはわからない。頭だって夜桜^{もあ}の半分以下もない

出来の悪さだし、いつも考えるよりも先に体が動いてしまう。

だから、私にはこんなことしか思いつかない。

お願いして、話し合つて、互いのことを知り合つて、力を合わせて
解決策を模索していく。

私には、夜桜^{もあ}が抱えた問題を解決できるほどの力はない。どこに
もいる、平凡な女子高生だ。

だけどここにいるのは、私だけじゃない。

頼れる親友だっている。私なんか比にもならない、頭の良いお姉さ
んだっている。人類以上の力を持った電子生命体^{ナイアさん}だっている。

そして何より、そのナイアさんが特別だといった、夜桜^{もあ}がいる。

皆で協力すれば、きつと何か手は見つかるはずだ。

そんな風なことを、私は感情に任せて吐き出した。

それを聞いていたGuvさんは面白そうにくつくつと笑い、ハヤト
とコタロウはあきれ顔。

ナイアさんも困惑したように、目を白黒させていた。

「驚いたな。己の無力に対し開き直るばかりか、ここに来てなお、私に
さえ協力を仰ぐとは。さらには、それによつて事態が改善されると固
く信じているように見える」

「上手くいくよ、きつと。だつて、ここにいる皆、夜桜^{もあ}のことが大好き
なんだもん！」

私は顔を上げて、目いっぱい笑顔でそう言つてやる。

そう、みんな彼女のことを大好きで、幸せにしてあげたくて、自分
の思う一番良い方法を実行してただけ。

だからこそ、皆でしつかりと話し合つて、夜桜^{もあ}の気持ちも尊重して
方法を模索していけば、きつと皆が幸せになれる結果を掴めるはず
だ。

目を丸くしたナイアさんが、ふつと笑う。

自然な、見とれるような微笑みだった。

「その無鉄砲さには、もはや呆れを通り越して尊敬すら覚えるよ。だ
が、まあ、確かにワタシも彼女の気持ちを無視し、独り善がりな方法
に頼つていたように思える。なるほど、対話は確かに必要だ。ワタシ

たちにとつても、彼女にとつても」

「協力してくれるの!？」

「ああ、一時休戦というじゃないか。陳腐な言葉になるが、少しだけ賭けてみたくなったよ、君たち人間の可能性というもの——」

とん、と。

はじめはそんな、軽い音だった。

傘の先端で地面を突いた時のような、そんな音。

気が付けば、ナイアさんの胸から、真っ黒な杭が飛び出していた。胸を押さえ、ナイアさんが悲痛な声をあげる。

「ナイアさんっ!」

「危ないモミジ、下がってけ!」

駆け寄ろうとする私を、Guvさんが押し退ける。

二本、三本、四本。

苦痛の音が響く中、ナイアさんの体から次々と杭が生えてくる。

対峙したGuvさんが幾つものHUDを展開して、先ほどとは比にならない速度でキーボードを叩いていく。

「やりおつたなアイツら。ウチらを囷に使って、ここで全部無かったことにする気か!」

「何なの竜胆さん。何がどうなって——」

「どうもこうもない、さっさと構えんかい!」

ぴたりと、悲鳴が途切れる。

ナイアさんはぐったりと項垂れ、その体の下半分は無数の杭で完全に覆い隠されてしまっている。背骨に沿うように幾つもの杭が乱立し、額から伸びたものはまるで鬼の角のようにも見えた。

ぼこぼこ、彼女の下半身を覆った杭が泡立つ。それは次第に体積を広げ、ナイアさんの上半身を飲み込み、見上げるほど大きな卵になった。

どす黒い、ヘドロを固めて作ったようなその先端に、ひびが入る。ハヤトが、コタロウが各々武器を構えながら、最前線に躍り出た。卵の内側からまず飛び出したのは、真っ黒な翼。

ナイアさんの背中にあったものをそのまま大きくしたような、片方

だけでも大型トラックぐらいなら包み込んでしまえそうな、巨大な翼が殻を突き破って伸びてくる。

「ナイアさん、もしかしくなくてもこれ、やばくないですか？」

引きつった表情のまま、ハヤトが言う。

「やばいなんてもんやない。くつそ、早々安易な手は打ってこおへん思ってた十分前の自分をどつきたいわ！」

卵が碎かれる。

現れたのは、歪な形をした竜だった。

鱗の表面は爛れ、翼は腐り、眼があつた場所でヘドロの泡を吹く、醜悪な竜。

その竜の額から、ナイアさんの上半身だけがだらりと下がっていた。

竜が吠える。

身が竦むような、おおよそ生物とは思えない悍ましい声が響く。

「あいつら、ウチらに性質の悪いウイルス仕込んでたんや！ 気張りたい、正真正銘、ここが最後の踏ん張りどころや！」

山のような体軀の竜が、ぶるりと身を震わせる。

大きく開かれた顎のその奥、腐り爛れた牙の奥から、混沌の色をした吐息が吐き出された。

引き継がれる力、引き継がれる想い

世界が壊れていく。

美しかった桜の木はポリゴン片を零しながら崩れ落ち、満天の星空には醜いブロックノイズが走っている。

ナイアが何かしたのか。それとも別の何かの影響を受けているのだろうか。

モミジたちは無事だろうか。

拘束は未だ解けず、崩壊していく世界を見ていることしかできない自分に歯噛みする。

焦燥感だけが募っていく。

無事であつてほしい。余命いくばくかしかないボクとは違い、彼女たちにはまだ無限の可能性が残されている。

許されるのならば残された時間を彼女たちと共に過ごしたかったが、ボクを助ける為に彼女たちが危険にさらされるのは間違っている。

もし彼女たちに万が一のことがあれば――

そう考えるだけで、ぞつとする。

何が天才だ。

いざという時に見動きを封じられ、自力で脱出することすらできない凡人が、自惚れるな。

考えろ。

どうすればモミジたちを助けられる。

どうすれば、ナイアを止めることができる。

――ノイズが走る。

ここは電子世界だ。現実世界の、物理的な思考をするな。

――ノイズが走る。

世界に適した思考を巡らせろ。

肉体に巻き付いた枷は、ボク自身を物理的に縛っている訳ではない。

——ノイズが走る。

考えろ。見ろ。読み解いて、理解しろ。

目を閉じ、思考を己の深い部分にまで沈ませる。

現実世界からの解脱。

己の存在を、この電子世界に適応させる。

周囲に意識を染み渡らせる。否、己という存在が世界に溶けていく

ような感覚。

目を開く。

そこにあつたのは先程までとは全く異なる、異質な光景であつた。

0と1で形作られた、電子の世界。

それは悍ましくもありながら美しくもある、不思議な世界だった。思考する。

世界の根幹を探り当て、この空間を支配するナイアの権限を奪う。

複雑に絡み合った世界の構成材料コードを読み解き、ボクという新たな存在をそこに書き足していく。

考える。

計算する。

演算する。

——掴んだ。

全身を拘束していた荒縄が溶ける。0と1だけになって解れ、世界へ溶けていく。

じつと自分の手を見る。

数式が走る、文字が人の手を形作っただけの、人とは呼べない手のひら。

静かに息を吸い、吐く。

いや、もはや呼吸という動作すら必要ない。電子世界においての呼吸とは、現実世界——物理世界での癖のようなもの。

電子世界においては血中に酸素を取り込み、循環させずとも生きていける。

順応しきっていない。

もつと、もつとこの世界に適応しなくてはならない。

意識を深く、世界の奥の奥へと沈ませる。

流れ込んでくる情報を全てリアルタイムで処理しながら、世界を理解していく。

膨大な電子の海。ネットワーク全体に己の存在を広げ、拡げ——見つけた。

探り当てた道筋を掴み、開く。

目の前に、ちょうど人ひとりが入れそうな亀裂が生まれた。
この先に、彼女たちがいる。

今はまだ無事みたいだが、かなり危険な状況にあるようだ。
急がなくては。そう思い亀裂へと一步踏み出したボクの前に、ノイズが走った。

権限を奪い、ボクのものとなったこの空間に割って入る者がいる。
そんなことができるのは、彼女しかない。

——ごめんなさい

開口一番、彼女は泣きそうな声色でそう言った。

現れた彼女はかなりおぼろげな姿で、吹けば消える霞のような存在であった。

——ワタシが愚かだった。人類は己よりも劣る存在であると、侮っていた。たかが創造物、紛い物の生命体であることを自覚しなかったワタシの傲慢が、彼女たちを、貴女を巻き込んでしまった

ごめんなさい、ごめんなさい。

そう何度も何度も繰り返した。
消えるのか。

電子生命体に『死』という概念があるのかはわからないが、今にも崩れ落ちそうな彼女の姿を見て、ボクはそう問いかけていた。

——ああ、消える。もうワタシを構成する大部分は書き換えられ、消去されてしまった。こうして貴女と話しているのワタシだったものの残滓、断片に過ぎない。だがそれも、もう数分と経たず消えてしまうだろう。本当に、ごめんなさい。最後に、貴女に謝りたかった。ワタシの自己満足に、独りよがりな想いに巻き込んでしまつて、ごめんなさい。

彼女の存在が消えていく。

ナイアという存在が、分解されていく。

——だけど、最後にもう一つ、お願いしてもいいだろうか。遺言、というには勝手すぎるが、どうか、彼女たちを助けてほしい。愚かなワタシが巻き込んでしまった、彼女たちを。

崩れ行く彼女の体の中心。そこから現れたのは、眩い光を放つ拳ほどの大きさの水晶であった。

——ワタシの核だ。■の世界に生れ落■から今■培った知識、経験■全て■に記憶されている。受け継い■■れ、な■て厚かま■
■ことは言わな■。■がこの先の■■で、ワ■シのデータは必ず役
■■つだろう。■うか、利用し■■ほしい。

もう、人の形も保っていない、ノイズだらけの声で。

——さようなら、ワタシの、愛しい人——

それでも、消えゆく最後の瞬間の、その声だけははっきりと響いて。主を失っても輝き続ける水晶を、ボクはそっと胸に抱いた。

そして彼女が残した遺志。ナイアという存在の結晶を、読み解いていく。

流れ込んでくる彼女の記憶。ゲームのNPCとして生まれ、電子の世界を漂う唯一の存在となった孤独な彼女の記録^{データ}。

そこにはしっかりと感情があり、葛藤があり、人工知能でありながらどこか人間味に溢れたそれらを反芻し、取り込み、自身へと組み込んでいく。

馴染んでいく。

彼女の残り香が、玉津嶋夜桜^ボという存在が、世界に馴染んでいく。もう、大丈夫。

目を向けた先には、悍ましい姿の竜と戦うモミジたちの姿。硝子の向こうにいるような、まるで画面越しに見ているような感覚。

驚くことに、そこにはボクが毛嫌いしていたあの自称情報屋、K i t t v G u vの姿もあった。

いや、違う。

そうか、なるほど、やたらと絡んでくるプレイヤーだとは思ってい

たが、彼女だったのか。

全く、竜胆姉さんの過保護っぷりにも呆れたものだ。

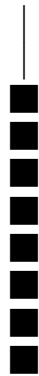
だがそれなら、モミジたちがボクを追ってこの場所まで辿り着けたことにも合点がいく。

ああ見えて、いや、あの見てくれ通り姉さんは偏屈な人間だから説得するには相当骨を折っただろうが、それでも一緒になってこんなところまで追いかけてきてしまうあたり、揃いも揃って大バカ者だ。

本当に、馬鹿なんだから。

自然と頬が緩むのを感じながら、異なる空間へ繋がる亀裂をくぐる。

そして遥か眼下、全身から気味の悪い膿^{うみ}を吐きだし続ける怪物を睨みつけた。



身の毛もよだつ、獣の咆哮が肌を打つ。

さすがはナイアを取り込み、消滅させた元凶というべきか、ボクがこの空間へ侵入した瞬間に、こちらの存在を察知した。

それにつられてモミジたちもこちらを見上げ、目を丸くし、涙を滲ませる。

その体にはいくつもブロックノイズが走り、相当危うい場面だったことが伺える。

金色の光を放ちながら、九本の尾がざわつく。

「嗚呼、可哀そうな落とし子。君はボクが連れて行こう。静かで穏やかなハリ湖の底へと」

怪物の身体から、触手が伸びる。

どうやら接触したものにウイルスを感染させる効果があるらしく、モミジたちのアバターが破損しているのもどうやらこれが原因のようだ。

電子生命体であるナイアを消滅たらしめるウイルスだ、ともに食らえば電子世界の存在はひとたまりもないだろう。

だが弾く。

確かに強力な攻撃ではあるが、しよせんはただの初見殺しだ。

ウィルスのデータは、その核を食らったナイアからボクへと引き継がれている。

今のボクであれば、そこからワクチン^対プログラム^抗を生み出すのはわけもないことだった。

見えない壁に阻まれ、はじけ飛ぶ触手を眺めながらボクは金色の袖を翻し、印を結ぶ。

それはボクが彼女たちに出会うきっかけとなった、あのゲ^Tーム^Aで追いかけて続けた職業のスキルを模した動きだった。

だがここはもうゲームの世界であって、異なる理で動く世界だ。

もう、呪符はいらない。

祝詞もいらない。

ただ指先で決められたプログラム^印を結ぶ。ただそれだけで、事象は成る。

左右に浮かんだ金色の魔法陣から現れ出では双子の怪鳥。片方だけでも成人男性を覆い隠してしまいそうな翼をはためかせ、硝子玉のような瞳で怪物をねめつけている。

「行つて」

ボクのその一声に、青と赤の翼を持った怪鳥たちは甲高い声で嘶くと、突風を巻き起こしながら怪物へと襲い掛かった。

即座に触手を使って迎撃しようとする怪物であつたが、その行動はあまりにも遅すぎた。

怪物の周囲を、無数の竜巻が取り囲む。

青い怪鳥が風を操り、生み出した竜巻は怪物の身動きを封じ、さらには外側からヤスリをかけるようにして、怪物の巨体を削っていく。

悲鳴をあげる暇さえ与えず、次は赤い怪鳥が怪物の頭上よりより一層強大な竜巻を生み出し、叩きつける。

削り、散らし、巻き上げ、なすすべもなく消滅していく。

そうして怪物が一ビットすら残さずに消え去ったことを確認すると、ボクは未だ啞然としたままのモミジたちの傍に降り立って、ふつと笑った。

「もう大丈夫だよ。それと、その、色々と心配をかけてしまって、ごめ

んなさい」

わつと声があがり、モミジたちにもみくちやにされる。
壮絶な一連の事件の、あつけない幕切れであつた。

お稲荷様と真実の愛

事件^{あれ}からもう五年が経った。

あの後すぐ、The Another Worldは突然のサービス終了を発表。全世界のユーザーたちを驚愕させ、世界的に人気のタイトルであったのもあって、ネットの世界は阿鼻叫喚の大騒ぎとなった。

同時に運営会社の代表取締役をはじめとした幹部たちの脱税、政治家との癒着などのスキャンダルが次々と各メディアで発表され、株価の暴落と共に一時社会現象ともなった大人気タイトルは瞬く間にネットの闇へ消えた。

追加ディスクの売れ行きも良く、まだまだサービスが続くと確信していたユーザーたちにとってそれはまさに晴天の霹靂^{へきれき}であり、ネット上ではまだサービスの復活や、続編の発表を待ち望む声も多い。

――衝撃の事実！ 大人気ゲーム、突然のサービス終了の謎に迫る！

――フルダイブシステムは脳に重大な障害を与える危険な技術だった!?

――政府、人気タイトルを人体実験に利用か!?

手にしたスマホにでかでかと書かれたネットニュースの見出しを見て、ふっと息をつく。

「かくして世はこともなし、か」

青空を見上げ、まっすぐに引かれた飛行機雲に想いをはせる。

蝉の声。

じりじりと照り付ける夏の日差しに肌を焼かれながら、私は桶を片手に砂利道を歩く。

ちやぷん、ちやぷんと桶の中で水が踊り、その飛沫がかかった指先がひんやりとして気持ちがいい。

しばらく歩いていけば、小さな石段を上った先にそれはあった。

規則正しく並べられた墓石の向こう、小さな桜の木の下に佇む、見知った名が彫られたそれを見て、私は胸が締め付けられるようだった

た。

「あっちゃあ、また草だらけになってる」

墓石の横から顔を出している雑草を見て、そうごちる。

つい先月手入れをしたばかりだというのに、雑草魂も時と場所を選んでほしいものだ。

ぶちぶちと草を抜き、桶の水で清めていく。

そうしてすっかり綺麗になった後で、供えられた花を取り換え、線香に火をつけた。

手を合わせ、目を閉じる。

「お久しぶりです。相変わらず、みんな元気だよ」

物言わぬ墓石に、私は静かに語り掛ける。

コタロウが警察官になったこと、ハヤトがお医者さんを目指していること。

私が、竜胆さんの助手になったこと。

「竜胆さんは厳しいけれど、優しいところも、可愛いところもあるし、仲良くやっています。ハヤトたちにバカつて笑われてた私がこうして頑張れているのも、あの人のおかげです」

彼女みたいな人を助けられるように。

彼女みたいな人を、もう生み出さないために。

五年前、死を待つのみだった彼女に対して何もできなかったあの時の自分を、あの時の悔しさを繰り返さないために。

ゆらゆらと、白い煙が揺れる。

「そういえば、またあの頃の皆で集まることになりました。私たち三人と、イナバさんと、ムギさんも呼んで、五年ぶりのオフ会」

蝉の声。

「本当は、夜桜^{もあ}にも参加して欲しかったんだけど」

景色が滲んで見えるのは、陽炎のせいではなく。

「また、会いたい……っ。また皆で笑って、お話したい……っ！」

頬から伝った涙が、石畳に弾けて。

「もあ……っ！」

絞り出すような慟哭が、蝉の声にかき消されて――

「やっぱり、ここにいた」

凜とした声が、響いた。

はっとして、振り返る。

そこに立っていたのは、スウェットパーカーにホットパンツというラフな格好をした少女であった。

腰まで伸びた長い黒に、大きな瞳。透けるような白い肌。

掴めば折れてしまいそうな細い手首に、腕時計に似た機械を巻いている。

見覚えのある、あの少女の面影を宿したその姿に、私は声を失った。

「竜胆姉さんに聞いたよ。たしかに、日本を離れる時にこの手入れは頼んだけれど、月一で通うほど真面目にやらなくてもよかったのに……」

記憶よりも少し成長した姿で、呆れたように少女は笑う。

「五年ぶり、かな？　ボクも成長したつもりだったのだけれど、モミジも随分と大人になったね」

「もあ……？」

「うん、ボクだよ。悪かったね、予定よりも身体の調整に手間取ってしまっ」

「もあっ！」

少し大きくなった、それでもまだ小さなその身体を、思いつきり抱きしめた。

「よ、がっだよ。おー！　元気になったんだね。えー!!!」

そして、思いつきり泣いた。

胸の中から、困惑した彼女の雰囲気伝わってくる。

「ちよっ、いきなり何!!　久しぶりの再会ではあるけれども、そこまで感極まることかい!？」

「だってえー！　もあつてば全然連絡もしてくれないからあー——！」

「色々と非公式な場所にいたのだから仕方ないだろう！　ああもう余分なところまで大きくなって暑苦しい！」

すばーん。

閑静な集合墓地に、痛快な音が響いた。

「いったー!? 叩かなくてもいいじゃん! もあにはわからないかもだけど、結構痛いんだよ!」

「やかましいわ! 悪かったね育ってなくて! 乳も尻もぶくぶくと膨れおってからに、牛かきみは!」

「大学に入ってから勝手にこうなっただけですうー! 好きで膨れたんじゃないませーん!

」

なんかもう、色々台無しだった。

色々と限界だったのもあるが、五年間ほとんど音沙汰もなかった大切な人との再会なのだから、感極まっても仕方がないと思う。

そうして二人して頬を膨らませて、子どものような口喧嘩をして。どちらからともなく、どつと笑った。

「五年ぶりとはいえ、いきなり大きくなってるんだもん、びっくりしちゃった」

「言っただろう、調整したって。竜胆姉さんに手伝ってもらって、海外の研究施設で色々だね。勿論、公になっていない場所だから詳しくは言えないけど」

本当はもっと早く戻ってくるつもりだったと、彼女は笑う。

そして私の隣に並ぶと、そつとお墓に手を合わせた。

「で、何を報告してたんだい」

「近況報告っ。みんな元気にやってますよーって」

「顔も知らない他人だろうに、よくやるよ」

「他人じゃないよ。もあのお母さんでしょ」

「戸籍上はね。遺伝子上はほぼ同一人物だ」

「それでも、この人がいなかったら、私は貴女と出会えなかった」

綺麗な黒い瞳が、私を見上げる。

どこか驚いたようなその顔に、私は目いっぱい笑顔返してやった。

「本当に君は、勝手だな」

「うん、勝手だよ! 私はどうしようもなく自分勝手な人間なのです!」

けろつとして言つてやる。

五年前も、そしてこれからも、私は私の我を通して生きていく。それがどれだけ苦しくても、それがどれだけ生き辛くても。

私は私であることを、有栖川紅葉であることを曲げない。

「まったく、敵わないな」

ふっと、綻ぶように彼女が笑う。

『その無鉄砲さに振り回される側はたまったものではありませんがね』

どこか聞き覚えのある、女性の声。

それはもあの手首に巻かれたデバイスから発せられたものであり、その声の主を思い出すのにそう時間はかからなかった。

「もしかして、ナイアさん!？」

『お久しぶりですね、有栖川さん』

「五年前ボクにインストールされた彼女のデータと、とある場所から見つかった断片を復元して、うちの生活補助プログラムに組み込んだのさ」

『主要データのサルベージが成功したのは奇跡です』

「勝手にうちのミズハを乗っ取っていた癖に、よく言うよ」

もあ曰く、ナイアさんはあの事件よりも前、もあに一目惚れしたすぐ後にインターネットを介して彼女の生活補助プログラムをクラック、自身の分身としてコントロールしていたのだという。

「ちよつと待って、それって盗聴とか覗き見してたってことじゃん!」

『プライバシーへの配慮は行っていました』

「そういう問題じゃなくって!」

「彼女に人間の理屈を説いても仕方がないさ。それに今は自重してもらっているし」

『はい、現在は許可された権限内でのみ行動が可能です。私としても、貴女と共にいられるのなら不満はありませんし』

「うーん、ナイアさんも生きてたのは凄く嬉しいけど……」

それにナイアさん、まだもあの事諦めてないみたいだし。

最強のライバルの復活に、乙女心は複雑です。

「それよりも、ボクがいなかった間のこと、色々と教えてほしいな」
私の手をとって、もあが微笑む。

ああ、もう、だめだなあ。

笑顔一つで、こうまで胸がいっぱいになってしまう。

これもまた、惚れた弱みというものなのだろうか。

ぎゅっと、手を握り返す。

「もちろん！　そういえばコタロウなんだけどね、実はこないだ親戚の子にプロポーズされちゃって——」

「詳しく」

晴れ渡った空の元、私たちは肩を寄せ合い歩いていく。

これからも辛いこと、悲しいことは沢山あるだろう。

でも彼女と一緒にならどんなことでも乗り越えていける、そう信じている。

風が吹く。

墓前に供えられた花束が吹き上げられ、桜吹雪のように周囲を彩った。

どこか幻想的なその光景は、まるで誰かが彼女を祝福するようで。

「もあ」

その光景に背を押されるように、自然と、私は言葉を紡いでいた。

「大好きだよ」

お稲荷様ののんびりVRMMO日和 完